

謹
呈

熊本藩年表稿

先生

細川藩政史研究会編

本
稿

1974年3月

山

熊本大学附属図書館内

ま え が き

1964・65年の両年に亘り細川家のご好意による膨大な永青文庫（細川家文書）が本学に寄託された。その中の覚帳・日帳・その他の古記録・刊本などを中心にして、文部省科学研究費の交附2回、別途出版費1回の補助を受けて「細川家旧記・古文書分類目録」正篇を作製し、その一応の内容を学界に発表したのが1969年のことであった。しかしなお、書状類を中心にする古文書はまだ整理の途上にあるのが現状である。周知のように書状の年月日・差出・受取人の判定には多くの時日を要するのであるから、この際これらに取組む研究者の手がかりとなるような出典を示した総合年表を一先ず作製したらという意嚮が我々の中に生れた。茲に1972・73年度の文部省科学研究補助金（総合研究A）を受けて一応取纏めたのが本書である。その共同研究者・協力者の氏名は次の通り。

森田誠一（熊本大学法文学部） 鎌田浩（同左） 森山恒雄（同教育学部）
川口恭子（同附属図書館） 池上尊義（九州東海大学） 西山禎一（都城工高専）
松本寿三郎（熊本高校） 城後尚年（大牟田南高校） 高木瑞穂（南関高校）
吉永公祐（玉名高校） 蓑田勝彦（水俣高校）

以上の者は近世史専攻の熊本大学の同僚及び卒業生で、すべて熊本大学内藩政史研究会のメンバーである。全員が各々分担をきめて初年度は基礎的史料の採録に尽力した。採録した史料はコピーにして全員に頒布、月一回会合して検討を重ね、夏休みは長期集会をもって討議を深めた。第2年目には永青文庫を中心に附属図書館内で作業が進められ、蒐めた史料のコピーによる度重なる検討により最終的に数千枚のカードを作製、それを基に各人分担の時代区分に従い年表形式の原案を作った。これのコピーを全員で更に検討、最終的には夏休み中合宿して項目・内容・表現・用語等の統一を期した。しかし実際にやってみると大変な作業で、本年度末迄に原稿化し出版することは到底困難であり、今年延期すべきという意見が圧倒的に出された。（森田は国際学会出席のため海外出張中でこの合宿には欠席）帰国後、森田はこれについて、本年度の科研費の大部分を占める出版費の年度繰延べは不可能である上に、一年延ばしても必ずしも満足な成果は期し難く、膨大な史料の前に多岐亡羊を嘆くことになりかねない、この際一応の成果を発表し、学界からの批判を受けよう。従って本書は飽くまでも「稿本」として発表する。という考えを述べて一同の同意を得て公刊に踏切った。これが題名を『熊本藩年表稿』とした所以である。

扱て、各人の提出した原稿原案を基に森田、鎌田、森山の三人が編集に当たり、下原稿の作製と校正を行った。その分担は、森山、天正15年～寛文3年。

森田、寛文4年～安永7年。鎌田、安永8年～明治4年である。しかし実際にはその間、項目の精粗、用語・表現の不統一など種々の問題に苦しみ、かつ三人の分担部門を最後に森田一人が統一的に目を通すということは、時間的に全く不可能で、僅かに三人の気付いた点の意見交換を行い得たのみである。このように多くの問題点を残しながら敢えてこれを公刊するのは内心忸怩たるもの少なからずであるが、広く研究者に公開して不備の指摘を受けると同時に、好学の士の研究の手がかりに幾分なりと役立たせて頂くことが、一層意味あることと信じている次第である。この間の事情を諒とされたい。

以上縷々述べたのは、本書の不備、不体裁に対する責任の所在を明らかにするため、その責任は代表者である森田が負うべき事を示したかったからである。

本書の附録の加藤、小西両家の系図は森山氏が多くの史料から苦心作製し、細川家系図は永青文庫中、明治迄の記載がなされている『本藩世系略』を写真印刷して採録した。この上梓に際して快く許可して下さった永青文庫理事会の方々、特に細川護貞氏の御好意に感謝したい。次に家老、中老、家老脇大奉行、奉行、奉行列等の在任期間の表を附した。本藩研究家のお役に立つものと思う。これは永青文庫『本藩年表』のほかに、花岡興輝氏の『肥後藩主要家系』の附録を利用させて頂いた。また本藩の免率、米価一覧表は近世史研究家には利用価値があろう。これらの附録作製は後述の村田氏の苦心による。当然附すべき、事項・人名別索引や細川家支流、本藩主要家の系譜は今回はどうしても間に合わず割愛せざるを得なかったが、今後を期したい。

最後に、一度は延期を決意した本書の出版が曲りなりにも日の目をみたのは共同研究者、協力者諸氏の弛まぬ努力によることは勿論であるが、特に鎌田、森山両氏の強力な推進力なかったなら、とても期日に間に合わなかった事であろう。原稿の浄書に協力した法学科、文学科の大学院生、国史学科学生諸君の力も大きい。更に雑務や附録の作製にあたった山本峯子、村田秀明両氏の功も忘れることはできない。また文部省学術局研究助成課の池之上忠教事務官からは種々御助言を受けた。なお昨年11月以来の物価高騰の中で、年表という面倒なものに積極的に協力して下さった熊本県印刷センターの緒方祐一氏を始め同所の技術員の方々には、随分無理をお願いしてご迷惑のかけ通しであった。併せてここに謝意を表したい。

1974年3月

熊本大学附属図書館内

細川藩政史研究会

代表者 森 田 誠 一 識

凡 例

1. 本書は天正15年(1588)から明治4年(1871)までを取扱ったものであるから佐々、加藤、小西らも含めているが、その重点は寛永9年(1632)細川忠利の肥後入国以後にある。従って肥後国内であっても天草(天領)球磨郡(人吉相良領)の分は多くは取扱っていない。
2. 年変りの見出しの項は年号、西暦、干支、(将軍)藩主の順で記載してある。
3. 是年、是月とは月又は日付が不明の場合を示す。但し或る月で日付不明の項目だけの場合は、例えば、5.一(5月某日の意)のように表現した。
4. 各年の末尾に、著書目録、とあるのは本藩関係者による著書がその年に公刊されたことを示す。
5. 本文中「𠄎」は本藩の通用字で「締」の意である。本書の前半部では「締」の字に置替えてあるが、後半部では「𠄎」はそのまゝ記載してある。
6. 出典を示す標記は史料が2つ以上の場合、例えば(本・玄察・奉日)というように・を以って示すが、本書の前半部の一部には(実紀)(本)(肥)のように()を附して示している場合もある。(5、6のような記載法の不統一に付ては「まえがき」を読まれたし。)
7. 出典史料の略号中、(県中・小代)は熊本県中世史料の小代文書、(部分・勘定)は部分旧記の勘定の部、(肥国誌下 427)は肥後国誌下巻 427頁、但し(熊史10)は「熊本史学」第10号、(熊法14・95)は「熊本法学」14号の史料番号95を示す。
8. 「略号表」中、永青文庫とあるのは細川家文書で財団法人永青文庫の所有にかかわるもの(熊本大学へ寄託)「熊本大学架蔵」とあるものは本藩関係の文書で、永青文庫本ではなく、熊本大学にあることを示す。
9. 本年表が従来の年表の如く、項目の羅列ではなく、長文の引用文を含んでいるのは、飽くまでも史料紹介の意味でこの形式を採用した。多少読み憎い点があるが、研究者には利用度が高いと思う。
10. 本文中藩主その他の敬称はすべて略し、また「御」も可能な限り省略した。
11. 「まえがき」にあるように事項別・人名別の索引、細川家主要家系は早急に編さんする予定であるから出来上り次第実費頒布の予定。(これは科研費以外の出版)

以上

(刊本)

略 号 表

略 号	正 式 書 名	編著書、刊行者、叢書名	略 号	正 式 書 名	編著書、刊行者、叢書名
(ア行)			小早川	小早川家文書	大日本古文書家わけ第11
浅野	浅野家文書	大日本古文書家わけ第2	高麗	高麗日記	歴史評論 279号所収
阿蘇	阿蘇家文書	大日本古文書家わけ第13	高麗	清正高麗陣覚書	続々群書類従第4輯
安養寺	安養寺朝鮮日々記	朝鮮学報第35輯所収	皇私	皇年代私記	続史籍集覧19
天草譜	天草近代年譜	松田唯雄著	国事資	肥後藩国事資料	
家康	徳川家康文書の研究	中村孝也編著 学術振興会刊	(サ行)		
宇土史	宇土市史	宇土市	相良	相良家文書	大日本古文書家わけ第5
梅津	梅津正景日記	大日本古記録 岩波書店刊	茶古典	茶道古典全集	淡交新社刊
御湯殿	御湯殿の上の日記	続群書類従完成会	舜旧	舜旧記(牋舜日記)	第1巻は続群書類従完成会より史料纂集として出版以下続刊
大県史	大分県史料	大分県史料刊行会			熊本県城南町史編纂会
小川夢	小川夢物語	熊本史学36,37,39号			吉川弘文館刊国史大系
御動座	九州御動座記	九州史料叢書41	城南史	城南町史	東京大学史料編纂所
(カ行)			実紀	徳川実紀	大日本古文書家わけ第16
官制	官職制度考	肥後文献叢書第1巻所収	史綜	史料綜覧	
		川尻町役場刊	島津	島津家文書	
川尻史	川尻町史	肥後文献叢書第2巻所収	島鏡	天草島鏡	上田宜珍著
柏原	柏原家旧記	続群書類従完成会			肥後国誌所収
寛政	寛政重修諸家譜	本田彰編	事蹟	新撰事蹟通考	肥後文献叢書第3巻
氣	肥後近世明治前期氣 象災害記録		拾集	渡辺玄察拾集昔語	肥後文献叢書第4巻
菊池	菊池風土記	肥後文献叢書第3巻所収	史籍	改定史籍集覧	近藤活版所刊
		池辺義象著	史籍・忠広	加藤肥後守忠広之事	改定史籍集覧第15輯所収
銀公	銀台公	肥後文献叢書第1巻所収	宗門史	日本切支丹宗門史	岩波文庫・パピエス著
銀遺	銀台遺事	熊本地歴研究会	重賢伝	細川越中守重賢公伝	中野嘉太郎編
郷史演	郷土史講演集第2巻	肥後文献叢書第2巻所収	駿府	駿府記	史籍雑篇第2所収
清正記	清正記	大日本古文書家わけ第9	西征	西征日記	続々群書類従第3輯
吉川	吉川家文書	中野嘉太郎著	宣祖	宣祖実録	学習院大学刊・李朝実録
清正伝	加藤清正伝	上妻博之著、夕葉文庫	戦史	大日本戦史	参謀本部編大日本戦史
切支丹	細川藩の切支丹	益軒全集 第5	井田	井田符義	藩法集7、熊本藩所収
黒田	黒田家譜	熊本市学会刊	先哲	肥後先哲偉蹟正統	武藤敏男編
熊史	熊本史学	青潮社刊	損	細川藩災害損毛誌	上妻博之編
求麻	求麻外史	肥後国誌下所収	続清正	続撰清正記	肥後文献叢書第2巻
		肥後文献叢書第4巻	宗湛	宗湛日記	茶道古典全集第8巻
玄察	渡辺玄察日記	熊本県刊(全5巻)	続善隣	続善隣国宝記	改定史籍集覧21輯所収
県中	熊本県史料中世編	熊本県刊(全3巻)	(タ行)		
県近	熊本県史料近世編	熊本女子大学郷土文化研究所編 日本談義社刊	大史料	大日本史料	東京大学史料編纂所
県史・年表	熊本県史別巻第1・年表		大宰府	大宰府・大宰府天満宮・博多史料	九州文化史研究所刊
県史料	熊本県史料集成		立花	立花家文書	大正3年刊本立花家
			忠広	加藤忠広伝記資料	平野流香編著
			沢庵	沢庵和尚書簡集	岩波文庫
			潮害	熊本県潮害誌	熊本県
			中経伝	中外経緯伝	改定史籍集覧第11輯

惣誌	惣誌録	朝鮮史編修会 朝鮮史料叢刊 改定史籍集覧 第13輯所収	連長坊 鹿苑 写本	面高連長坊高麗日記 鹿苑日録	改定史籍集覧第25輯 統群書類従完成会
陣古文	朝鮮陣古文		略号	正式史料名	所蔵者(写本を含む)
当代	当代記	史籍雜纂2所収	(ア行)		
土木史	大日本土木史	岩波書店 土木学会編	御勝手向	同左	永青文庫
蠹簡	土佐国蠹簡集	横川末吉編	しらへ		
藤遺	藤公遺業記	肥後文献叢書第2巻	御達	御達扣頭書	永青文庫
読史	読史備要	東京帝国大学史料 編纂所編	(力行)		
(ナ行)			会旧	会所旧記	永青文庫 (井田衍義に収録)
鍋島	鍋島家文書	佐賀県史料集成 第3巻所収	会譜	会所年譜	永青文庫 (井田衍義に収録)
南福寺	菊池風土記所収 南福寺文書	肥後文献叢書第3巻	家記	細川家記	永青文庫
日件	慶長日件録	舟橋秀賢、日本古典 全集 第6期	家譜	細川家譜	〃
(ハ行)			家譜続	御家譜続編	〃
閨関	萩藩閨関録	熊本県立図書館	加藤伝	加藤家伝	東大史料編纂所(一 部は加藤清正伝所収)
藩法	藩法集7 熊本藩	山口県立図書館編	覚	覚帳頭書	永青文庫
肥陽明	肥後藩の陽明学	藩法研究会刊	覚日	御奉行所覚帳并同 日記頭書草稿	〃
肥人	肥後人名辞典	角田政治著 青潮社刊	覚合	覚帳合類頭書	熊本大学架蔵
肥	肥後近世史年表	生田宏著主室諦成校訂	勝手覚	御勝手方覚帳	〃
肥検帳	肥後豊後検地諸帳 目録	熊本県立図書館蔵	勝手万	御勝手方万帳拔書	〃
肥国誌	肥後国誌	後藤は山編、青潮社刊	壁書	壁書扣	〃
肥後藩後 期法令集	同 左	松本寿三郎	花日	御花畑日記頭書草稿	〃
肥文	肥後文献叢書	武藤敏男、宇野東風編	花奉	御花畑御奉行所 日記抄出	〃
肥後	肥後藩の政治	熊本県史料集成 熊本女子大学郷土 文化研究所編	清正手簡	加藤清正手簡	東大史料編纂所
秀吉下向	豊臣秀吉下向記	九州史料叢書41 近 世初頭九州紀行記集	義演	義演准后日記	京都醍醐寺三寶院 (東大史料編纂所蔵写本)
文慶役	文禄・慶長の役	池内宏著、東洋文庫刊	記抜頭	記録書抜頭書	松本寿三郎
武家	武家事紀	人物往来社刊	旧章	旧章略記	永青文庫, 熊法21
武州	武州古文書	武州史研究会 8	郡文	御郡方文書	永青文庫
丙午雜記	向山誠斎丙午雜記	大日本史料所収	言経	言経卿記	東大史料編纂所蔵写本
豊遺	豊公遺文	日下寛編	小西	小西一行記	平戸松浦史料館
市太閤	市庵太閤記	岩波文庫	郷歴	郷党歴代拾穂記	男成神社
(マ行)			合	合類頭書	熊本大学架蔵
毛利	毛利家文書	大日本古文書家わけ第8	合覚	合類覚書頭書	〃
(ヤ行)			御書案	御国御書案文	永青文庫
吉野覚	吉野甚五左衛門覚書	統群書類従 第20輯	(サ行)		
(ラ行)			細譜	細川家譜	永青文庫
林制	日本林制史資料	農林省編	細分正	細川家旧記・古文書 分類目録正篇	熊本大学内細川藩政 史研究会
龍造寺	龍造寺家文書	佐賀県史料集成第3巻	斎藤家文書	同左	大津町斎藤喜興

薩旧雜 雜記	後編薩藩旧日記雜録 同左	東大史料編纂所 永青文庫	肥録 楓軒 古庄	肥州録 楓軒文書纂韓陣文書 古庄文書写	松本寿三郎 内閣文庫 熊本大学教育学部 日本史研究室 永青文庫 〃 永青文庫 〃 〃 〃
式稿 市雜乾 市雜坤 諸拔 諸文 松雲問答	市井式稿 市井雜式草書乾 市井雜式草書坤 諸帳書拔頭書 諸願文式寺社町方 清正松雲問答	永青文庫 熊法11 熊本大学架蔵熊法13 熊本大学架蔵熊法14 永青文庫 熊本大学架蔵 熊本県立図書館 上妻文庫 県立図書館、上妻文庫 永青文庫 〃 内閣文庫写本 永青文庫 熊本大学架蔵	触 部 分職帳 奉覚 奉書 宝曆以来 御勝手向	触状扣頭書 部分御旧記 同左 御奉行所覚帳 御奉行奉書抄出 宝曆以来御勝手向 模様大略調帳	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
宗捕書 神雜 新撰 時慶 寺社方諸 帳目錄 寺雜草	宗門召捕預書 同左 新撰御家譜原本 時慶卿記 同左 寺社雜式草書付録	内閣文庫写本 永青文庫 熊本大学架蔵	本 (マ行) 松井 萬見合 蔓綿 綿考 (ヤ行) 矢惣 吉見	本藩年表 松井家記 萬見合帳 南藤蔓綿録 綿考輯録 矢部御惣庄屋次第記 吉見元頼朝鮮日記	〃 熊本大学 永青文庫 人吉市立第一中学 永青文庫 矢部町井手家 東大史料編纂所
拾圓 寺格 寺雜附 寺例 寺例続 陣旧記 (タ行) 竹会記 竹中雜留 度彙 度譜 湛水触 大覚 筑歴古 朝鮮 町日目 徳富 土管 (ナ行) 難稜 年覚 年合 (ハ行) 藩採	拾芥圓義(記) 寺社方格式 寺社雜式草書附録 寺社例帳 寺社例帳続編 朝鮮陣閥係旧記 竹迫会所旧記 竹中氏雜留書 度支彙函 度支年譜 『寛永11年より同15 年4月まで御触状』 大覚帳頭書 筑後歴世古文書 是琢朝鮮日記 町方日帳目錄 徳富家文書 土貢管見録附録 覚帳難稜分類頭書 年々覚頭書 年々覚合類頭書 藩譜採要	花岡興輝 永青文庫 〃 〃 〃 宗家文書 (慶応大学図書館) 永青文庫 東大史料編纂所 永青文庫 〃 徳富敬太郎 熊本大学架蔵 東大史料編纂所 佐賀鍋島家文庫 (佐賀県立図書館) 永青文庫 徳富敬太郎 松本寿三郎 永青文庫 熊本大学架蔵 熊本大学架蔵 永青文庫	〃 〃 〃 〃 〃 宗家文書 (慶応大学図書館) 永青文庫 東大史料編纂所 永青文庫 〃 徳富敬太郎 松本寿三郎 永青文庫 熊本大学架蔵 熊本大学架蔵 永青文庫	〃 〃 〃 〃 〃 宗家文書 (慶応大学図書館) 永青文庫 東大史料編纂所 永青文庫 〃 徳富敬太郎 松本寿三郎 永青文庫 熊本大学架蔵 熊本大学架蔵 永青文庫	〃 〃 〃 〃 〃 宗家文書 (慶応大学図書館) 永青文庫 東大史料編纂所 永青文庫 〃 徳富敬太郎 松本寿三郎 永青文庫 熊本大学架蔵 熊本大学架蔵 永青文庫

書 名	編 者 ・ 叢 書	発 行 所
(ア行)		
阿波国徴古雑抄	小杉楳邨編	徳島県
異国往復書簡	異国叢書	雄松堂
異国御朱印帳	異国叢書	雄松堂
板坂卜斎覚書	改定史籍集覧第26輯	
小川夢	小川夢物語 熊本史学36、37、39号	
(カ行)		
加藤家御侍帳	加藤清正伝、続群書類従第25輯上	
甲子夜話	図書刊行会叢書	
旧柳川藩志	柳川山門三池教育会編	
黒田家譜	益軒全集第5巻	
慶長見聞集	改定史籍集覧第10輯	
近藤正斎	近藤正斎全集	図書刊行会刊
古城考	肥後文献叢書第1巻所収	
黄薇古簡集	岡山県地方資料史料叢書	岡山地方史研究連絡協議会刊
コックス日記	皆川三郎著	学精社。法政史学、大日本史料に一部訳
(サ行)		
細分正	細川家古文書・古記録分類目録正篇	熊本大学内細川藩政史研究会
西殿殿寺	大日本古文書、阿蘇家文書	
再造藩邦志	大東野乗所収	
島津国史		鹿児島県地方史学会
宗国史		三重県上野町教育会刊
(タ行)		
太閤書信	桑田忠親著	地人書館刊
泰長院	泰長院文書 佐賀県史料集成第5巻	
敦賀郡古文書	山本元編	
(ナ行)		
南蛮寺興廃記	東洋文庫14輯	
南紀徳川史	堀内信編	
(ハ行)		
福岡県史資料		福岡県
藤原有馬世譜	一部は林銑吉編島原半島史所収	
武家	武家事紀	山鹿素行先生全集刊行会
(マ行)		
松浦	松浦家文書、平戸松浦家資料	
明実録	国立北平図書館	中央研究院歴史語言研究所刊
本山豊前覚書	続群書類従第20輯下	
(ヤ行)		
右文故事	近藤正斎全集第2巻	

文書・写本

文書・写本名	所蔵者住所氏名(但し探訪期の住所)	写本所蔵者
(ア行)		
熱田神宮	熱田神宮 愛知県熱田市	東大史料編纂所影写本
稲田	稲田海素 東京都芝区二本榎木町2	東大史料編纂所影写本
今井	今井善次郎 前橋市新明町	東大史料編纂所影写本
家忠日記増補		内閣文庫
越中	越中虎次郎 前橋市天川町	東大史料編纂所影写本
大石	大石隼人 佐世保市八幡町	東大史料編纂所影写本
岡部	矢野盛経著「新編芦北沿革史」所収	
小川年代記	斎藤宗績 熊本市米屋町	熊本県立図書館上妻文庫又は 藻塩草
小田原	高知県土佐郡潮江村	東大史料編纂所影写本
小野	伝習館高等学校 福岡県柳川市	
小山	「加藤清正伝」所収 玉名市高瀬	
御手伝覚		「大日本史料」所収
(カ行)		
覚林寺	覚林寺 東京都港区芝白金	武州文書第6冊所収
片山	群馬県新田郡溜池村	東大史料編纂所影写本
加藤内蔵助	矢野盛経著「新編芦北沿革史」所収	
紀伊国	紀伊国古文書纂	国会図書館(一部「日本戦史」 「武家事紀」にあり)
紀伊徳川		東大史料編纂所影写本
仰古秘笈		福岡県立図書館写本
黒田	黒田長成 東京都赤坂区福吉町	東大史料編纂所写本、一部は 益軒全集所収
古今消息集	内閣文庫 東京都	東大史料編纂所写本
古蹟文徴	前田利為 東京都目黒区駒場	東大史料編纂所写本
(サ行)		
酒泉	酒泉春久 東京都	
榊原家譜	新潟県高田市	東大史料編纂所写本
勝国治水遺	河島又生 熊本市上通	熊本県立図書館上妻文庫
渋沢	渋沢栄一 東京都	東大史料編纂所影写本
浄信寺	(浄信寺興記録)	熊本女子大学郷土文化研究所
鈴木	鈴木利三郎 東京都	東大史料編纂所影写本
関ヶ原軍記	(関原記)	内閣文庫写本
宗	宗家旧蔵 長崎県対島巖原	一部は慶応大学「史学」に所収
蘇山巖滴	沢田延音編「清正公資料」所収	
(タ行)		
高林	高林兵衛 静岡県浜名郡積志村	東大史料編纂所影写本
等持院	等持院 京都市	一部は「大日本史料」所収
東大史料	東京大学史料編纂所	
藤堂	「宗国史」所収	東大史料編纂所影写本
富岡	富国鎌三 京都市上京区室町	東大史料編纂所影写本
豊国大明神祭日 記	豊国神社 京都市	

書 名	編 者 ・ 叢 書	発 行 所
(ナ行)		
中川家譜		東大史料編纂所写本
中沢	中沢広勝 群馬県佐波郡境町	東大史料編纂所影写本
鍋島周防	佐賀県立図書館鍋島文庫 佐賀市	九州大学文化史研究所写本
(ハ行)		
花岡	花岡興輝 熊本市	「城南町史」所収
原	原富太郎 横浜市	東大史料編纂所影写本
原田	原田斎治郎 東京都牛込区山吹町	東大史料編纂所影写本
楓軒	楓軒文書纂	内閣文庫
深沢	深沢金一郎 埼玉県比企郡松山町	東大史料編纂所影写本
福田		東大史料編纂所影写本
武家補任	徳川昭武 東京都本所区新小梅町	東大史料編纂所写本
武徳編年集成	木村高敦編	内閣文庫
保坂	保坂潤治 新潟県頸城郡津有村	東大史料編纂所影写本
本圀寺(本国寺)	本国寺 京都市	東大史料編纂所影写本
(マ行)		
松浦家世伝	松浦清編	東大史料編纂所写本
松浦史料館	松浦史料博物館 長崎県平戸市	
村上	東京都本郷区馬込吉祥寺町	東大史料編纂所影写本
室	室彦七 福島県白河町	東大史料編纂所影写本
本山	本山安義 岩手県宇多郡中村町	東大史料編纂所影写本
(ヤ行)		
山移		東大史料編纂所影写本
横田	埼玉県	東大史料編纂所影写本
吉村	大坂城天守閣 大阪市	平戸市 坂嘉一郎氏蔵の影写本
(ワ行)		
渡辺	渡辺翠峰 埼玉県北埼玉郡忍町	
渡辺金蔵		

天正15 (1587) 丁亥 佐々成政 (6月より)

1. 1 秀吉、九州征伐の部署を定む。加藤清正、後備 170騎で出兵す (薩旧雑) (太閤記)。 22 安国寺恵瓊、鹿子木親直に路次妨害と非礼の防止を要請す (県中・鹿子木)。
2. 22 秀吉、黒田孝高宛に小国下城右近大夫の功を賞す (黒田)。
3. 1 秀吉、九州征伐のため大阪を発す (黒田) (御動座)。 12 島津征久、町田久倍・新納忠元らに豊後を経て帰国を命ず (薩旧雑) (島津)。 15 島津義弘、島津歳久・新納忠元らに肥後からの帰国を命ず (薩旧雑)。 25 秀吉、筑前より肥後路を経て薩摩に赴くため諸将の部署を定む (御動座) (小早川)。 26 島津征久・忠元・久倍ら、筑後より肥後に帰り形勢をみる。大野久高ら阿蘇城梨城に籠る。志賀親次これを攻む。忠元ら、この日宮地に戦い親次を攻め破る。ついで久倍ら合志城に入る。また征久、御船城に拠城す (薩旧雑) (島津)。
4. 11 秀吉、南関に進む (御動座)。 12 秀吉、高瀬攻略を指示し翌日攻略す (豊遺) (御動座)。 13 隈本城主城久基降る (御動座)。 15 秀吉、三池・小代・南関・山鹿・合志・高瀬・隈本・宇土の落城を黒田孝高に報ず (黒田)。 16 秀吉、隈本城に入る。浅野長政を守らしむ。同先鋒、木山に至る。城久基、人質を出す (御動座)。 17 秀吉の先鋒宇土に入る。名和顯孝降る (事蹟)。新納忠元・町田久倍ら、秀吉に内応した肥後谷山城主松浦筑前守を攻め陥す。また肥前有馬晴信、八代を攻む。征久は関(興善寺)城、久倍は八代城に入る (薩旧雑) (事蹟)。 18 秀吉、隈庄に進む (御動座)。 島津忠永、高田城をすてて退く。忠元ら関城を出て、征久・久倍ともに八代に会し求麻に走る (御動座)。 19 秀吉、八代に入る (御動座)。 ま 福島正則を城番とす(事蹟)。 20 秀吉、毛利輝元に熊本・宇土らの攻略の様子、八代の様子、および肥後の生産力、大國性について報告す (高木) (御動座)。 征久・久倍ら人吉に逃る (島津国史)。石田三成、高瀬願行寺に寺廻りの鹿垣を許可し、竹木の伐採を禁止す (県中・願行寺)。 21 義久、伊集院忠棟を遣し、秀吉に降るを請う。人吉城主相良長每 (頼房)。兵を率いて帰国す。忠元らも人吉より大隈大口に退く (薩旧雑) (島津)。 清正、宇土城を守備す (清正記10) (事蹟)。 24 秀吉の先鋒出水に至る。翌日田浦を経て佐敷に進む。相良頼房来謁す (小早川)。 26 秀吉、水俣に入る。翌日水俣を發し出水に進む。島津忠永降る (御動座)。 是月 秀吉、肥後國に三ヶ条の禁制を出す (相良)。 また八代妙見社に三ヶ条の禁制 (肥國誌下 328)、阿蘇満願寺に三ヶ条の掟書を出す (県中・満願寺)。
5. 25 秀吉、佐藤才次郎に、水俣・津奈木両城を深水三河守に預く旨を報ず (肥國誌下 427)。 27 秀吉、薩摩より帰り水俣に着す (豊遺)。 28 秀吉、佐敷にて北政所宛に自筆の書状を出し、大明征伐の意図を報ず (妙満寺) (太閤書信)。 29 秀吉、八代に着す。矢部城主阿蘇惟賢来降す (薩旧雑) (事蹟)。 30 秀吉、相良長每 (頼房) に求麻郡を宛行い、佐々成政に与力さす。また相良重臣深水三河守に本知・新知 (水俣・津奈木) 97町を宛行う (相良)。 秀吉、大矢野民部に天草郡内90町を宛行い、成政に与力さす (県中・大矢野)。
6. 1 秀吉、隈本城に着く。小代下総守に 200町を宛行う (県中・小代)。 2 秀吉、佐々成政に肥後一円の所領宛行状を与う (楓軒)。 秀吉、隈部親永に 800町、同子親泰に 900町を宛行う (事蹟)。 6 秀吉、国侍52人に所領安堵の朱印

- 状下附す（吟味の余地あり）（甫太閤）（事蹟）。 12 小西行長・長束正家ら、博多町割りを行う（宗湛）。 20 島津義久、上洛のために三角迫門に宿泊す（薩旧雜）（島津）。 22 義久、高瀬着。ついで大津山の常願寺に宿泊す（薩旧雜）（島津）。 25 秀吉、毛利輝元に中国と筑前・筑後・肥後国との交換を求む（毛利）（大宰府）。
7. 5 佐々成政、島津義弘に隣交を求む（薩旧雜）。 19 太宰府神社、安楽寺領合志郡富納村田方7町6反畠方4反の指出を頭百姓に報告す（大宰府）。
8. 6 これより先に成政、肥後領内に検地指出を徴す。菊池城隈部親永これを拒否す。この日成政、親永を討つ。これより国侍にて一揆起る（事蹟）（黒田）。 7 成政、隈部親永の子親安を山鹿城村城に攻む（事蹟）（黒田）。 13 成政、山鹿城を攻めるも敗退す（古城考）（肥国誌上 511）。雲竜和尚、勅許にて川尻大慈持住持職を与えらる（県中・大慈寺）。 15 阿蘇大宮司惟種歿す（郷歴）。 17 秀吉、加藤清正を讃岐国代官に任じ、尾藤知宣の改易後を検索さす（県中・安部）（下川）。 18 国侍ら（甲斐宗立ら）、隈部父子に応じ隈本城を包囲す。成政、山鹿路より帰りこれを敗る（事蹟）（肥国誌上33）。
9. 6 成政の重臣伊口意心、山北西安寺に対し、役所に無沙汰ならざるよう命ず（県中・西安寺）。 7 秀吉、小早川隆景・黒田孝高に成政の救援を命ず。ついで小早川秀包を将とし筑後肥前の諸将を率い、肥後に進攻さす（小早川）。 8 秀吉、鍋島直茂に国侍一揆の鎮定を命ず（鍋島）。 秀吉、肥後国侍志岐・上津浦・栖本・城・赤星・伯耆・内空閑・小代・関・隈部・八代十三人衆・同三十人衆・阿蘇神主に、安堵の朱印状を下附す（黒田）。 17 成政の重臣伊口意心、内田織部に75町7反余を宛行う（県中・内田）。 19 秀吉、小早川秀包に書を送り、国侍の申し分を聞き、対処することを命ず。同じく立花宗茂にも命ず（小早川）（立花）。秀包、この日南関に到着す（小早川）。 21 秀吉、鍋島直茂に一揆の要因を記し、秀包・安国寺惠瓊と相談して行動するよう命ず（鍋島）。 26 秀吉、深水三河守に一揆の様子を報じ、相良に忠儀を専にすることを命ず（相良）。 30 秀吉、来春に一揆征伐に出兵することを惠瓊に報ず（豊遺）。
10. 1 成政、山の上三名字に24町1反余を加増す（県中・内田）。 2 秀吉、清正に丹波国多喜郡里村・油井村 620石を加増す（県中・加藤）。 9 立花統虎（宗茂）、成政を援助するため山鹿城附城に兵糧を送る（立花）。 10 秀吉、国侍和仁・迎春を干殺すこと、また来春2,3万人の動員および残党を悉く刎首するよう小早川隆景に命ず（小早川）。 14 増田長盛・石田三成・浅野長吉、成政の失政、大和大納言らの出兵、および小西行長の一揆の檢察派遣を惠瓊に報ず（豊遺）（小早川）。 18 成政、国侍の一揆の様子を島津に報ず（薩旧雜）。 21 秀吉、国侍・百姓の申し分をきき、言上することを惠瓊に命ず（豊遺）。また島津義弘に出兵を命ず（県中・新納）。 22 秀吉、立花宗茂に国侍有動らへの攻撃の功を賞す（立花）。 28 成政、和仁親実・迎春親行を田中城に攻む（事蹟）。是月 成政、小代親泰に加増70町を宛行う（県中・小代）。
11. 15 成政、伊津野某に河尻薬師・銭友（銭塘）の5町を宛行う（県中・伊豆）。 16 戸田勝隆、来春10万人の動員で一揆を鎮圧する旨を龍造寺民部に報ず（龍造寺）。 18 成政、島津義弘の来援と慰問を謝す（薩旧雜）。 20 成政、石塚藤三郎に託麻郡内1,300石を宛行う（敦賀郡古文書）。 21 伊口意心、城請取りと慮外者の成敗を山北西安寺に命ず（県中・西安寺）。 24 神屋宗湛、南関に小早川隆

景を見舞う(宗湛)。 26 安国寺恵瓊、新納忠元に肥後出兵を促す(県中・新納)。

12. 5 和仁城落つ(小早川)。 6 小早川隆景ら田中城を陥れ、和仁信実・迎春親行らを斬る。秀吉、これを賞す(小早川)。 10 秀吉、小早川隆景・安国寺恵瓊に一揆参加者を残らず刎首することを命ず。また一揆後の肥後の置目を油断なきように命ず(豊遺)(鍋島)。 15 安国寺恵瓊、隈部親安・有動兼元らを誘降し、柳河に禁錮す(小早川)。 20 島津義弘、大隈大口に陣し肥後の乱に備う(薩旧雜)。 24 佐々成政、玉名郡清源寺領を安堵す(県中・清源寺)。 27 秀吉、肥後国侍一揆参加者の処分を小早川隆景に命ず。和仁・迎春・有動は一類共に刎首、阿蘇の処分は上使と相談すること、及び国侍衆の科の輕重、知行地糾明のために来春2万人余の派遣を報ず(小早川)。 28 北里三河守、薩摩に逃る。島津家臣本田三成ら、北里に小国下之城を新恩として宛行わることの証文を是日奉書す(県中・北里)。

是年 阿蘇山、煙を高く吹きあげ、砂山を池中に作る。(肥国誌下 529)。

天正16 (1588) 戊子 佐々成政・加藤清正・小西行長

1. 5 秀吉、隈部式部大輔・有動大隅守の妻子一類の処分、及び阿蘇は友義統の詫びにて免除すること、また先勢として蜂須賀・生駒・浅野・福島・戸田・加藤・小西ら2万人の派遣を、小早川隆景に報ず(小早川)。 20 小西行長・加藤清正ら、一揆討滅のための上使として出発す(小早川)(鍋島)。 22 秀吉、肥後の検地を命ず。但し相良領は本知・新知共に除外す(相良)。
2. 11 秀吉、肥後よりの帰陣を島津義弘に命ず(薩旧雜)。 20 佐々成政、謝罪のため上京するに尼崎に止められ、幽居さる。秀吉、浅野長政らの報告にて成政を処分する旨を、小早川隆景に報ず(小早川)。
3. 1 神屋宗湛、加藤清正を自邸にて振舞う(宗湛)。 3 神屋宗湛、小西行長を自邸にて振舞う(宗湛)。 20 浅野長政、山上衆居屋敷を検地から除外するよう飽田郡検地衆に命ず(県中・田尻)。 是月 秀吉、毛利勝信を内牧に、生駒親正を山鹿に、蜂須賀家政を菊池に、黒田孝高を御船に、浅野長政を隈本に、福島正則を八代に、加藤清正を宇土に派遣し、残党の検索や城番と領民統治に当らしむ。ついで検地を行う(事蹟)。
4. 3 検地の結果、太宰府天満宮領の合志郡富納村60石となる(大宰府)。 7 加藤清正・福島正則ら、吉川広家に肥後の検地状況を報告す。また小代城の普請の労をねぎらう(吉川)。 14 秀吉、清正を上使として禁固中の佐々成政に派遣し、肥後の一揆の失政、南蛮宗門ころびの拒否らの罪科三ヶ条を伝う。(清正伝23)。 16 宇土顯輝(顯孝の弟)、出水にて自殺す(事蹟)。豊臣秀次、吉川藏人頭(広家)に肥後検地が半ばで所労であろうと、ねぎらう書状を出す(吉川)。この頃、広家南関に達す(吉川) 23 石田三成、新納武藏(忠棟)に島津の肥後出兵に対する相良氏の非協力、及び八代・芦北の様子についての返書を出す(県中・新納)(薩旧雜)。 是月 内空閑鎮照、家臣にて殺害さるという(事蹟)。
5. 4 深水宗方・田浦両氏、島津義弘とともに秀吉に謁見す(島津)。 15 浅野長政・加藤清正ら、薩摩逃亡の一揆の残党追捕を島津義弘に求む。義弘、島津義虎に命じ、名和顯広を出水で殺す(薩旧雜)。 21 小出播磨守家臣小出甚助、

菊池郡出田村南福寺に出田村分の耕作を許可す(南福寺)。 25 肥後検使戸田勝隆、北里三河守に対し下城氏への肝煎を託す(県中・北里)。 26 蜂須賀家政の家臣森勘右衛門、検地にて菊池郡出田村南福寺薬師領6反を安堵す(阿波国徴古雜抄)(南福寺)(事蹟)。 27 隈部親永ら17人、柳川の黒門前にて刎首さる(県中・小野)(事蹟)。

- 関 5. 6 加藤清正、国侍一揆後の農民還住・麦年貢・隈本詰夫などについて、七ヶ条を北里三河守・同左馬に命ず(県中・北里)。 13 一揆鎮定につき毛利輝元・小早川隆景・吉川広家ら撤兵す(武州)。 14 秀吉、佐々成政の失政原因(検地)と一揆者の処分(国人1000余人刎首)と大将分の首の差出し、及び成政の切腹、成政の家臣の処遇について、小早川隆景に報告命令す(小早川)。加藤清正、下城右近の成敗を北里三河守に求む(県中・北里)。 15 秀吉、肥後を二分し、加藤清正及び小西行長に与え、清正を隈本に、行長を宇土におく。清正に領知高8郡194,916石を宛行(県中・尊経閣)。また佐々成政の家臣を抱えることを命ず(県中・加藤)。秀吉、大矢野民部に検地のうえ天草郡内1750石を宛行い、小西行長に合宿を命ず(県中・大矢野)。秀吉、松浦鎮信の肥後普請監督の労をねぎらう(松浦)。
6. 7 加藤清正、北里左馬助に下城伊賀の成敗の功を賞す(県中世・北里)。 13 秀吉、肥後の不用の城の破却を清正・行長に命ず(県中・安部)。清正・行長大坂を発し、23日に豊後鶴崎に着す。清正、27日隈本に入城す(清正記11)(清正伝51)。行長、28日宇土城に入城す。領内隈庄・木山・矢部・古麓の四城に城代を置く(事蹟)。
8. 10 秀吉、筑前国侍原田又五郎に肥後替地4,000石を宛行(原田)。秀吉、肥後諸城番手を10月の所務期までに在番するよう、小早川隆景に命ず。筑紫左馬頭にも同様に命ず(小早川)(県中・筑紫)。 12 秀吉、肥後国侍城十郎太郎・伯耆(名和)左兵衛尉を筑前に替地し800町と500町を宛行い(小早川)、筑前国侍長野鎮展には肥後5,000石を替地す(黄薇古簡集)。 27 秀吉、肥前国侍草野鎮永の子を肥後に移すことを鍋島直茂に命ず(鍋島)。
9. 1 清正、藤崎八幡宮に100石寄進す(県中・藤崎)。 4 秀吉、肥後八代十三人衆の国侍、三十人衆の国侍に知行を宛行。知行高計1,605石(県中・尊経閣)。また清正、臼間右衛門佐に300石、大野左馬助に300石を宛行い、隈本に合宿するように命ず(県中・安部)。 25 小西行長、安部文蔵に益城郡内400石を宛行(黄薇古簡集)。 27 秀吉、加藤清正に河内国讃良郡かいと村300石を宛行(県中・加藤)。
12. 19 清正上洛す。秀吉に謁し、是日帰国す(加藤家伝)。 26 名和顕孝、加悦宗右衛門に5町20歩を宛行。坪付状はなお大半の制なり(県中・加悦)。
- 是年 肥後14郡の検地、浅野・加藤・小西ら9人の城番検使衆にて行わる。飽田550町、託摩1100町など各郡検地行わる(大県史・成恒)。小西行長、肥後半国を領し、領内に城代をおく。隈庄城に弟小西主殿亮、矢部愛藤寺・岩尾城に結城彌平次・太田市兵衛、八代麦島城に木戸(小西)作右衛門行重、河尻城代に加悦飛驒をおく(肥文・古城考)。また愛藤寺城に警固与力13人をおく(郷歴)。なお、行長の領地高は不明(天正大名帳は146,300石)。

天正17 (1589) 己丑 清正・行長

1. 16 清正、飽田郡河内村鍛冶石見に正国の名を遣わす(筑歴古)。 27 清正、神屋宗湛邸にて茶会を催す(宗湛)。 28 清正、高瀬川沿岸や玉名郡横島村の新地工事の鍬初めをす(勝国治水遺)(藤遺)。
3. 8 益城郡熊庄(隈庄)甲斐右京、伊勢参宮をす(大県史・参宮帳)。 10 小西行長、天草郡代官に天草殿を任命した由を本砥(本渡)百姓中に報ず(県中・天草)。 28 秀吉、宗村馬守に朝鮮国王の入貢を求む。もし入貢しないときには加藤清正・小西行長・筑紫衆で高麗攻撃することを告ぐ(宗)。
4. 9 相良宮内大夫の代参として兵部左衛門尉、伊勢参宮す(大県史・参宮帳)。
5. 25 浅野弾正、小代親泰に知行地及び大野上・下村を預け、人足・麦年貢の使用許可を加藤清正に要請す(県中・小代)。
8. 26 加藤清正、加藤右馬允に阿蘇郡内1万石を宛行う(楓軒)。右馬允、内牧城代を任務す(事蹟)。 28 清正、加藤平八に玉名郡内7,713石を宛行う(本山)。同じく山口与三左衛門に山鹿郡内7,116石を(県中・庄林)、小代に阿蘇・合志郡4,396石(県中・小代)、九鬼四郎兵衛に2,037石(県中・九鬼)、窪田藤兵衛に450石(県中・男成)、安井猪介に120石(県中・原岡)、下村勝介に810石を宛行う(県中・下村)。是月 長尾善政、芦北郡田浦城代となる。まもなく廃城す(事蹟)。
9. 是月 小西行長、松浦道可らと神屋宗湛の茶席に同道す(宗湛)。
10. 21 清正、陣立を定む(史綜)。また陣中法度六ヶ条を定む(本妙寺)。 29 行長、宇土に新城の築城を計画し、その普請役に天草志岐麟専・天草伊豆守を要請するも、夫役提供を拒否す。行長、彼らを討つために出兵するも敗退す。清正、行長の救援のため兵1万余人を率い、この日に川尻を出発し、志岐を討つ(県中・志岐)(事蹟)(清正記13)。
11. 5 清正、天草伊豆守の家臣木山弾正を討つ。ついで志岐麟専を降す(清正記15)(県中・志岐)(事蹟)。 8 行長、志岐・天草氏を攻略す。ついで浅野長政に、天草志岐城攻略、加藤清正の渡海、島井宗室の朝鮮派遣の件、ばはん行為の取締りらについて報告す(中経伝)。 21 秀吉、清正の天草志岐鎮圧を賞す(県中・加藤)。 25 本渡城陥ち、天草伊豆守自殺す(事蹟)(県中・加藤・庄林)。 30 清正、志岐麟泉に以後の処置について書状す(県中・志岐)。
12. 2 清正、大坂に出発す。秀吉、朝鮮出兵の準備を命ず(甲子夜話)(清正伝81)。 5 小西行長、秀吉の命にて志岐の妻子を預る(県中・志岐)。秀吉、清正の志岐城攻撃を賞し、以後の処理を行長と共に行うよう命ず(県中・加藤)。 8 清正、庄林伊右衛門に志岐合戦の功を賞し1,000石を宛行う(県中・庄林)。 19 秀吉、清正の天草本渡城攻略を賞す(県中・加藤)。 清正、森本儀太夫に天草攻略の功を賞し500石を加増す(県中・森本)。 29 清正、加藤与左衛門に天草攻略の功を賞するとともに、小田原出兵か、または普請の用意をすることを命ず(県中・庄林)。
- 是年 山鹿郡10村、菊池郡58村、阿蘇郡3村の検地帳作成さる(肥検帳)。玉名郡鯨(腹赤)村の田畑・屋敷・年貢らの根帳改めにつき、根帳を作成す(古庄)。長尾安右衛門善政、佐敷城代となるも、すぐ加藤重次(大和)と交替す(事蹟)。菊池郡瀬田の井手改修工事に着手すという(土木史)。小西行長、神社佛閣を焼き破毀すという(拾集)(肥国誌下17)。

天正18 (1590) 庚寅 清正・行長

1. 18 清正、芥川長門に天草の木山一類討滅の功を賞し、黄金2枚を与う(花岡)。
- 24 旧隈本城主城一要の女中の代官、伊勢参宮をす。この頃、城久基(一要)らは家中共々に筑後国杷木郷石垣山に居住す(大県史・参宮帳)。
4. 是月 宇治(阿蘇)惟賢、阿蘇惟光に十ヶ条の起請文を出す(事蹟)。
5. 2 竹崎長秀ら4名の阿蘇旧臣、阿蘇惟光への忠節起請文を仁田水長門守に提出す(事蹟)。 23 八代三日市衆もろおか助左衛門ら、伊勢参宮す(大県史・参宮帳)。
6. 7 秀吉、清正に小田原陣の戦況を報ず(県中・鳥居)。 是月 榊原式部、清正に小田原陣攻略の様子を詳細に報ず(古今消息集)。
7. 8 清正、庄林伊右衛門に玉名郡上山田村ら2,458石を宛行(県中・庄林)。
- 25 清正、保之中書に合志郡陣内村1,000石を宛行(閩閩)。 27 清正、小代下総に阿蘇南郷の替地として山鹿郡小坂村1,000石を宛行(県中・小代)。
8. 21 相良家重臣深水宗方長智歿す(事蹟)(求麻)。
9. 3 伯耆長良(旧宇土殿)・加悦入道ら10名、伊勢参宮す(大県中・参宮帳)。
- 8 秀吉、毛利輝元邸に臨む。清正随行す(豊遺)(毛利)。 23 清正、毛利輝元とともに聚楽邸にて茶会の接待をうく(茶道・宗及)(宗凡茶湯日記は翌24日に記す)

是年 加藤大和、佐敷城々代に派遣さる(事蹟)。

天正19 (1591) 辛卯 清正・行長

1. 是月 清正、陣中法度十一ヶ条を令す(県中・生駒)。
4. 17 島津義久(龍伯)求麻路の通行不能のため、阿蘇路通行の許可を清正に求む(薩旧雜)。
- 21 くま本の町衆笠善十郎ら3人、伊勢参宮す(大県中・参宮帳)。 24 清正聚楽より御蔵米(秀吉直轄領)2万石の処理、材木の調達、城普請らについて下川又左衛門に指示す(県中・下川)。
5. 11 隈本細工町割り行われ、旧細工町住人は末町にさげらる(県中・下川)。
7. 5 肥後国侍で領内にいる者は、相良・城十郎太郎・赤星備中守・小代伊勢守・大野・臼間野であるという(大県中・参宮帳)。
8. 6 清正、材木を肥前波多領草野境にて求めること、城内に米蔵設置のこと、造船のことについて指示命令す(県中・下川)。 13 清正、大唐出兵を報じ、大唐20国拝領の件、出陣への軍需品の用意、名護屋御座所普請ら三十五ヶ条にわたり指示命ず(渋沢)。 清正、来春大唐出兵を命ぜられた由を宝蔵院(胤栄覚禅坊)に報ず(保坂)。 23 相良頼房(長毎)、来春3月大唐出陣の準備の命をうく。また小西・加藤・黒田が名護屋城普請に当たっている由が報ぜらる(相良)。
9. 16 秀吉、明国出兵の時期を定め、諸将にその準備を命ず(毛利)(楓軒)(閩閩)。 是月 清正、大坂に上り秀吉に謁す(加藤家伝)(清正伝89)。
10. 4 清正、谷田十内に託摩郡本村130石を宛行(事蹟)。 10 清正、名護屋城普請を監督す(清正手簡)。 14 清正、領内に秀吉の唐物蔵の瓦を焼かせ、高瀬廻りの舟で運送することを命ず(室)。 16 清正、人足1,000人に4人の徴発と、高瀬廻りへの縄の賦課を領内に命ず(鈴木)。 24 小西・加藤・黒田

・毛利四大名、唐入りにつき百姓などについて三ヶ条の厳守を申合わす(楓軒)。

11. 20 小西行長、八代郡50石を某氏に宛行う(県中・小早川)。

12. 19 清正、秀吉蔵入米を名護屋に輸送するために、鍋島・立花・大友に舟・加子の動員を要請す(立花)。 27 秀吉、筑前多々良川の橋普請を加藤清正らに命ず(小早川)。

是年 山鹿郡御宇田村の検地帳作成さる(肥後帳)。

(是年力) 清正、御前上りの検地帳の作成につき指示を与え、また秀吉蔵入米の上方市場売却を指示す(県中・下川)。

文禄元 (12 . 8 改元) (1592) 壬辰 清正・行長

1. 5 秀吉、諸將に出陣を命ずるとともに、唐入りについて三ヶ条を令す(県中・尊経閣)。 6 清正、大坂を發し帰国に向う(加藤伝)(清正伝93)。 15 城久基(一要)、筑後石垣観音寺にて病死す(事蹟)。 18 行長・宗義智、朝鮮に帰服をすすめるために渡海す。秀吉、諸將は壱岐・対馬にて待機するように命ず(黒田)。

2. 1 清正、藤崎宮に戦勝祈願を行う(清正記93)(加藤伝)。 7 横嶋船衆、伊倉南八幡宮に起請文を捧ぐ(県中・南八幡)。 16 人畜改めにつき調査行なわる。玉名郡鯨(腹赤)村人付の帳面を作成す(古庄)。 21 清正、一番から五番迄の人数押えの次第を定む(小田原)。 27 清正、朝鮮近島に待機し、小西・宗の左右の報にて行動するように指示を受く(鍋島)(県中・尊経閣)。

3. 4 清正、名護屋より壱岐に渡る。相良も行動を共にす(県中・加藤)(毛利)。 7 清正、森壱岐・黒田甲斐らと対馬に渡海す(高麗)。 8 秀吉、清正に高麗近島に待機を命じ、小西・宗の左右を待たしむ(県中・尊経閣)。 12 行長、壱岐・平戸・有馬・大村衆をひきい対馬に渡海す(西征)。 13 秀吉、諸將の部署を定めるとともに、名護屋に陣の諸將及び水軍を定む(毛利)。 16 秀吉、相良留守居と下川又左衛門に帆柱伐り出し、川下しを命ず(相良)。 23 行長、宗義智を対馬府中に訪問し、ともに同国豊崎に陸行す(西征)。

4. 12 行長・松浦宗信ら、兵船 700艘にて釜山に上陸す(西征)。 13 行長、釜山城を陥す。翌日、東萊城を陥す(西征)。 16 行長、慶尚道梁山城を陥す(西征)。 17 行長、慶尚道密陽府を陥す。ついで清道、大邱、仁同らの諸城を戦わずして陥す(西征)。 清正、鍋島直茂らと釜山に上陸、東萊・梁山を陥し、ついで彦陽を陥す(楓軒)(県中・下川)(今井)。 20 清正・直茂ら、慶州城を陥す(楓軒)(高陣覚)。 21 秀吉、小西行長・宗義智らの勝利を全軍に報ず(鍋島)。 24 行長、尚州城を陥す。ついで同道咸昌・聞慶を陥す(西征)。 25 行長、長東正家・木下半介宛に朝鮮侵攻の様子を報告するとともに、17日に清正も西海道を越した旨を報告する(豊遣)。 秀吉、名護屋に到着す。秀吉、小西行長の働きを天下第一と賞し、朝鮮の三分一、大明国50ヶ国を与え、小西に存分申者は成敗を加えよとの朱印状を出す(秀吉下向記)。 26 この日頃に、行長は中路より、清正は東路より、京城に進撃す(黒田)。 秀吉、清正に高麗国掟八ヶ条を命ず(県中・尊経閣)。 27 行長、忠清道忠州に進む(西征)。 28 清正、慶尚道慶州より永川・新寧を経て豊津を渡り、行長らと忠清道忠州に会す(西征)。 28 秀吉、渡海のために舟の帰国と調達を清正に至急求む(県中・加藤)。秀吉、清正のけくしう・ゑんてん城攻略の功を賞す。また

城の兵糧、塩噌らを改め置くことを指示す (県中・加藤) (楓軒)。

5. 2 清正、古都 (慶州) に城番す (高麗)。ついで京畿道竹立を経て漢江を渡る (黒田)。清正、高麗城を落城させ、ついで国王を追跡することを長束・木下に報ず (豊遺) (楓軒)。 3 秀吉、行長の釜山浦攻略の功に太刀・馬を送る (中経伝)。清正・行長ら京城に入る (西征)。 4 清正、行長・宗義智と合議し、陣を京城外に移し、禁制を下す (西征)。 9 秀吉、清正の高麗侵攻報告書を諸大名に配符したことを報ず (県中・下川)。 11 清正・行長、京城を出発す (豊遺)。 14 清正、秀吉渡海のため普請道具を加藤清兵衛・九鬼四郎兵衛に催促す (県中・九鬼)。 15 臨津江辺の清正軍、陣をととき退却す (西征)。 16 秀吉、国王の追跡、朝鮮国の仕置、兵糧の調達、都内御座所、秀吉渡海用の舟、大明国への通路などについて清正に指示す (県中・加藤)。清正、梶原助兵衛に鋤鋏を申付ること、人数を召使うこと、城番衆引揚後の体制らについて加藤清兵衛に指示す (県中・九鬼)。 16 清正、都を出発し、糸あん道に向う (清正記24)。 18 行長、金命元と和を約す。また清正、病と称し天荊と面会せず (西征)。 21 小西軍京城にて陣替す (高麗)。 27 清正は咸鏡道を、行長は平安道の攻略と決定す。両者臨津江を渡り、京畿道開城を陥す (西征) (楓軒)。 28 清正・行長軍、京城の大河をこえて出兵す (高麗)。
6. 1 行長・義智、朝鮮三公に日本にくみし、明国を進攻することを勧む (宣祖) 清正、行長ら京畿道開城を出発し、黄海道宝山駅に至り、進撃の路次らを定む。清正これを秀吉に報ず (楓軒)。また清正、咸鏡道に出発す (楓軒) (清正伝 101)。清正、高麗国の国割りを請取る (楓軒)。 2 秀吉、清正に渡海中止の旨を報ずるとともに、高麗国での代官の仕置きを指示す (大石)。 3 秀吉、朝鮮渡海陣立書を諸大名に宛つ。清正は先手1万人、行長は7,000人を出兵さす (毛利) (県中・尊経閣)。秀吉、清正に高麗国代官地の置目や政道を日本のように行うこと、大明への道筋御座所普請を命ず (県中・尊経閣) (鍋島)。 7 行長・義智ら大同江に達す。李徳馨と和平を協議す (宣祖) (懋愨)。 14 清正、かがん道 (江原道) に出陣す (高麗) (文慶役)。 15 薩摩島津義久の臣梅北国兼、佐敷城を襲い敗北す (小早川) (毛利) (島津) (県中・井上)。行長ら大同江を渡り、戦わずして平安道平壤城を陥す (吉野覚) (西征)。 17 佐敷城番衆坂井善左衛門ら梅北勢を佐敷城にて斬る (毛利) (県中・井上)。 18 秀吉、梅北一揆者は刎首することを佐敷留守番に伝えるよう清正に指示す (県中・島津)。また秀吉、一揆征伐に浅野父子を派遣することを、留守居下川又左衛門に書状す (県中・下川)。 19 秀吉、梅北一揆衆を清正留守衆にて17日討滅した旨を小川隆景に報ず (小早川)。 22 秀吉、佐敷城番3人に賞を与えるので、名護屋につれてくるように下川又左衛門に指示す (県中・下川)。 24 清正、咸鏡道永興より、咸鏡道安辺に到着し、おらんかい迄14.5日の所を攻略中であること、及び王子を追跡することを秀吉に報ず (楓軒) (県中・加藤)。直茂、清正を頼り明国に所領が宛行われんことを秀吉に請う (楓軒)。 26 清正、咸鏡道13城のうち5ヶ所を在番す (高麗)。 29 清正、おくの城へ陣を進め、咸鏡道の奥のおらんかい堺まで出兵することに決定す (高麗)。是月 清正咸鏡道の百姓に対し早急に還住し、農耕することを命ず (泰長院)。
7. 2 秀吉、大唐への進発令を清正に命ず (県中・加藤)。 17 清正、鮮軍を海

- 汀倉に破る(戦史) 18 清正、端川(タンテン)郡在陣の家臣九鬼・粟生に唐人を全て退却させたこと、および端川郡の金山・田畠の指出をすることを命ず(県中・九鬼)。
- 23 清正、この日会寧(ホイレク)にて国王・大官を捕虜にしたこと、及び元良哈(オランカイ)攻撃について、九鬼・粟生に報ず(県中・九鬼)(高陣覚)。
- 清正、朝鮮二王子を捕虜にしたこと、およびおらんかい国より唐境いの地を欲することを浅野長政に報ず(浅野)。
- 27 清正、めてん・れいはく(禮伯)銀山、田地積りや兵糧について九鬼四郎兵衛に指示し、また自らも王孫官人捜しにおらんかい攻略を行うことを報ず(県中・九鬼)。
8. 1 行長、平壤を守備す。李元翼ら来襲して敗退す(懲慙)。
- 16 行長、平安道順安を攻撃するも敗る(史綜)。
- 18 阿蘇大宮司惟光、祇園山にて秀吉の命にて自刃す(事蹟)(拾集)。
- 20 清正、年貢の収納について留守居加藤喜左衛門に命令す(村上)。
- 21 佐敷城番酒井宗寛・井上勤兵衛、旧国侍南対馬の梅北一揆討伐の功を賞す(県中・鳥居)。
- 29 行長、沈惟敬と平壤に会見す(戦史)。
9. 2 清正、朝鮮陣中の様子を木下半介に詳細に報告す(宗)(楓軒)。
- 5 清正、北青(ホクセン)に帰る(県中・九鬼)。
- また吉州安辺に清正軍3,000余人らと決める(戦史)。
- 6 清正、王子を同道して都に上ること、朝鮮梃目について端川在陣の九鬼四郎兵衛(広隆)に報ず(県中・九鬼)。
- 11 清正、李應福親子を糺明したこと、農民の動向について九鬼広隆に報ず(県中・九鬼)。
- 11 清正、王子を安辺城に幽閉す(高麗)。
- 秀吉、九州中の鶴・白鳥・雁・鴨らの諸鳥を打ち、進上することを清正留守衆に命ず(県中・下川)。
- 16 秀吉、清正留守衆に鶴らを狩猟し進上を求む(中沢)。
- 20 清正、井上弥一郎・坂井善左衛門の梅北国兼誅伐を賞す(県中・井上)。
- 清正、吾郎吟の百姓、おらんかいの状況、咸鏡道の状況、王子を安辺郡まで送附したこと、および平安道の一揆などの様子について木下半介に報告す(県中・尊経閣)。
- 21 清正、無足人の扶持、注文道具の調達、造船、堺への鉄砲の発注、熊本城普請など三十五ヶ条の覚書を国元家老に命令指示す(県中・西村)。
- 22 秀吉、清正の王子捕虜を賞し、また当年物成の処分、銀山開発による銀の進上を賞す(県中・加藤)(楓軒)。
- 30 清正、織田有楽に咸鏡道・おらんかいの活躍、吾郎吟の一揆討滅、王子の処理、大明国への出動計画について報ず(鈴木)。
- 清正、以後安辺に翌年2月まで滞陣す(高陣覚)(朝鮮)。
10. 13 高麗八州の代官石納高の覚書なる。行長は平安道1794,186石、清正は咸鏡道2071,028石の収納である(叢簡)。
- 27 清正、朝鮮農民の様子、年貢の納入、北青の相良軍への援兵について、加藤与左衛門・に報告す(県中・九鬼)。
11. 10 秀吉、来春3月渡海につき路次の城々の防備・普請を命じ、また船舶全てを日本に廻送さす(県中・加藤)。
- 14 秀吉、清正の王子兄弟・官人・女官ら200余人の捕虜を賞し、脇差黄金を遣わす(中経伝)。
- 15 北評事鄭文ら一揆を起し、咸鏡道城を奪い、この日吉州の長坪を攻む。加藤清正の兵ら敗退す。ついで端川の銀山の守兵らを攻め、清正の兵士ら戦死す(県中・九鬼)(楓軒)(高陣覚)。
- 20 勅使沈惟敬、和議のため平壤に来て、小西行長と会う。協議ならずに去る。(吉覚)。
- 21 清正、吉州郡の相良軍の敗北、雑兵で役に立たな

いこと、兵糧の使途、端川郡の防備などについて、九鬼四郎兵衛らに報告指示す(県中・九鬼)。

12. 4 清正、猿松のこと、嶋津小七郎の件、旧国侍有動妻子の件について国元家老に指示す(県中・下川)。

是年 井上弥一郎、梅北一揆始末覚書を提出す(県中・井上)。阿蘇山黒煙高くのぼり砂山出来る(肥国誌下 529)。

文禄2 (1593) 癸巳 清正・行長

1. 3 小西行長、家臣竹内吉兵衛を咸鏡道に派遣し、沈惟敬を迎へさす。吉兵衛拉致さる(吉野覚)。 7 明将李如松、行長を平壤に囲む。行長、平壤から京城に撤退す(楓軒)(吉野覚)。 11 清正、都三奉行(石田・増田・大谷)よりの撤兵通知にて、慶尚道らの攻撃に引返すように吉州の加藤与左衛門らに指示す(県中・九鬼)。 12 増田長盛、清正の先手越度の件、行長の奮戦の様子を鍋島加賀守に報ず(鍋島周防)。 14 大谷吉継、清正の行動が和平交渉に障害であること、およびその由を名護屋に報告する旨を鍋島直茂に報ず(鍋島周防)。 16 秀吉、清正に開城府と都の間に居陣すること、行長は開城府に居陣することを命ず(毛利)(黒田)。 27 清正・行長ら在陣諸将、以後の朝鮮侵攻について三ヶ条の取り決めをす(豊遺)。 28 吉州・端川・利城の清正軍、安辺を引揚ぐ(高陣覚)。 29 清正・龍造寺軍、安辺より京城に向う準備をす。その兵数2万5,000人なり(吉見)。
2. 4 清正、安辺城幽閉中の二王子を鍋島直茂に託す(朝鮮)。 5 明将馮仲纓、安辺にて清正と会し講和を勧め、二王子の返還を求む。清正これを拒否す(高陣覚)(清正記32)(池内宏 著の文慶役は2月15日と考証す)。 8 秀吉、清正の進物を謝し、三月に渡海する旨を報ず(県中・尊経閣)。 9 行長、釜山に帰着す(古蹟文徴)。 11 清正・直茂、安辺を出発し京に向う(朝鮮)。 16 清正、李如松を開城に破る(戦史)。 また秀吉、京城と開城の間に配陣することを清正に命ず(黒田)。 29 清正・直茂・相良頼房ら、この日咸鏡道から京城に入る(求麻)(楓軒)。 是月 清正、鎮宅靈符神の鈴を作る(本妙寺)。
3. 3 清正・行長らの諸将、以後の出陣、番城体制について協議し、全羅道・慶尚道の攻撃と番城に主力を注ぐことに決す(戦史)。 4 清正、京城赴援、造船、鉄砲軍需品の至急輸送を国元家老に命令す(県中・下川)。 15 行長、沈惟敬と京畿道龍山にて講和を協議す。また清正も惟敬に会す(宣祖)(懲愆)。 20 高麗都での人数改めで、清正軍5,492人、行長軍6,626人と判明す(豊遺)。 23 清正、蔵米・大豆の上方売却、船道具の調達、造船らについて国元家老に指示命令す(県中・下川)。 30 清正、開城川にて金命元を敗る(清正伝 142)。
4. 10 清正、けくしゃく道(慶尚道)・りゃくさん(梁山)に到着し、城を攻撃す(楓軒)。 12 秀吉、京城撤退後の処理、もくそ(牧使) 城取巻きにつき清正・行長ら在陣諸将に指示を与う(毛利)。 行長、惟敬と龍山に会し和を定む(戦史)。 14 清正、両王子を名護屋に送ること、鉄砲の民間よりの調達、高瀬・河尻の舟の回送、新船古船の領内調査、虎熊の渡海などを国元家老に命令す(原)。 16 秀吉、京城の加藤清正軍の軍労をねぎらう。また自身の来春の渡海と城普請を通達命令す(県中・尊経閣)。 17 秀吉、王子兄弟はもくそ城

赤国・白国成敗のうえ返還の予定であること、またもくそ(牧使)城攻略、朝鮮人民の一揆への対策などを清正に指示す(県中・加藤)。18 行長ら、沈惟敬の和議をいれ京城を撤退す(求麻)(懲慙)。清正、二王子返還を拒否す。また清正、古都慶州に在陣していること、王子を召連れて日本に向かわせたこと、軍事らの行動については浅野氏に相談することを、長谷川左兵衛に書状す(福田)。19 清正、王子二人を同道して都(慶州)を出発す(陣旧記)。28

清正、二王子を梁山の伊達政宗に托す(伊達)。また尚州に至る(戦史)。清正、兵糧の運送、鑄型の送付、京都の屋敷作事、二王子到着後の待遇などについて留守居下川又左衛門・加藤喜左衛門に指示す(県中・本妙寺)。

5. 1 秀吉、大友吉統を除封。子義乗を清正に預く。また薩摩出水の島津忠辰も除封され、子又太郎を小西行長に預く(大友)(島津)(相良)。7 清正、熊川(こもかい)に陣す(清正記37)(高陣覚)。8 行長、明使を伴いて釜山を出発す。15日名護屋着(戦史)。10 宗義智の家臣、清正より二王子を請取る(陣旧記)。11 明将宋応昌、行長の要請にて京畿道龍山倉の傷病者を救済す(宣祖)。15 石田三成・小西行長ら、明使謝用梓・徐一貫とともに名護屋に着く(時慶)(毛利)。この頃清正、晋州牧使(もくそ)城に到着す(清正記37)。19 秀吉、清正の軍労をねぎらい、また城番の兵糧米の入れ置きを命ず(県中・尊經閣)。29 清正、鍛冶・大鋸・黒鉄・堂田貫の至急調達、兵糧輸送、塩噌・畳・芋の調達、阿蘇へ大友の牢人を抱え開発させることなど、二十三条を国元留守家老に指示命令す(覚林寺)。

6. 1 清正、持鎗、堂田貫、造船、直轄領伊倉の問題、小給人知行の代官納付などについて留守居家老に指示す(県中・下川)。2 秀吉、石田三成・行長を釜山に派遣し、二王子返還と晋州城攻略の命を宇喜多秀家に伝達さす(小早川)(戦史)。二王子順和君・臨海君、清正の好遇に感謝する書状を清正に送る(県中・本妙寺)。4 王子臨海君、九鬼四郎兵衛に帰京の感謝状を送る(県中・九鬼)。6 清正、召抱えの侍の選択、桧物・刀・鉾の調達を留守居家老に指示す(県中・下川)。7 大谷刑部・増田長盛・石田三成、晋州牧使城(もくそ)攻めの一番乗りに森本儀太夫、二番乗りに飯田覚兵衛をあげ、浅野弾正に報告す(中経傳)。11 清正、晋州城攻撃など陣中の軍法十ヶ条を定む(県中・九鬼)。20 小西行長の家臣内藤如安、沈惟敬とともに講和交渉のため明に赴く(宣祖)(懲慙)。22 清正、牧使城を陥す(県中・下川) 28 秀吉、和議七ヶ条を明使徐一貫に示す(戦史)(続善隣)。内藤如安、明使に同行す(戦史)。29 清正、慶尚道晋州城の攻撃に亀甲車を使用し陥す(楓軒)(高陣覚)。

7. 1 清正、国元に晋州城攻略を報ず。(県中・下川)(横田)。11 清正、西生浦城を守備す(戦史)。16 清正、晋州城攻略に亀甲車で石垣を崩して進入したことを、曾我又六に報告す(県中・反町)。22 小西行長の家臣内藤如安、京城にあり。如安の通報にて、行長は諸将と協議し、二王子を釜山より送還す(宣祖)。

8. 2 秀吉、豊後の百姓で肥後領内に逃亡売買されたものの還住を命ず(県中・下川)。5 相良頼房、もくそ判官城への人吉教王院の参陣を謝す(県中・願成寺)。6 清正、軍需品の調達、年貢算用状、無足侍・下人の取締りらについて、天罰起請文を国元留守衆に提出さす(県中・下川)。8 清正、領国よ

り取寄せる物について、国紙、同田貫、さや師、塩硝、大鋸引、舟の綱の調達など、五十一ヶ条について指示命令す(県中・下川)。 8 清正、梅北一揆討滅の功として井上彦左衛門に 500石を宛行う(井上)。 18 清正、森本儀太夫の亀甲楯(車)による一番乗りの功に対し、秀吉より義の字を与えられたことを賞す(県中・森本)。

9. 4 清正、吉村勝太に山本郡平嶋村 326石を宛行う(吉村)。 5 清正、京都にて碇を購入すること、藍玉の鑄形、京大坂誂えの鉄砲などを調達し、至急送ることを命ず(深沢)。 23 秀吉、在鮮居城の普請と、警戒の嚴重を清正にさす(県中・尊経閣)。
9. 23 清正、奉公人の徴発、蔵入地、空知の調査、木綿1,200貫、鉄砲の調達、榎並屋子供の抱えらについて、国元留守衆に指示命令す(稲田)。
10. 3 清正、和議を喜ばず、自兵にて慶尚道安康を攻む(史綜)(戦史は9月とす)。 16 清正、人足1,000石につき4人の人足徴収と、高瀬廻りに縄を賦課し調達することを領内に命ず(県中・鈴木)。
11. 3 清正、安骨城を攻め明将劉綎を破る(読史)。 4 秀吉、清正の軍労をねぎらい、小袖を与う(県中・尊経閣)。 13 嶋津小七郎、清正の家臣になるように相良頼房(長每)に依頼す(相良)。
12. 是月 内藤如安、北京に到り明王に会う(求麻)。

是年 山鹿郡南島村、阿蘇郡小地野村の検地帳作成さる(肥検帳)。玉名郡筒獄の城番を廃し、玉名郡藁嶽城に城代をおく。城代加藤直政(桑原清八)を任命するも、朝鮮にて清正の命に従わず、寺沢志摩守のもとに走る(事蹟)。菊池郡正教寺、僧明誓開基す(肥文・菊池)。

文禄3 (1594) 甲午 清正・行長

1. 11 清正、日本軍の京城敗退を憤り、自ら出陣することに決するも、鍋島直茂に止められて中止す。その由を九鬼四郎兵衛に書状す(県中・九鬼)。 16 秀吉、来年の関白秀次渡海にそなえて、置兵糧米らの管理を指示す(紀伊国)。 20 沈惟敬、行長と協議し、秀吉の降表を仮作し、遼東に向う(史綜)(戦史は22日とす)。
2. 2 清正、塩硝・玉薬・ふのり・大豆などの軍需品と、紺屋の派遣を留守居に命ず(県中・下川)。
3. 12 清正、目医師の渡海、豊後の医師、諸職人、白銀彫物師の徴発、阿蘇南郷半人の居付き方、未進年貢に小麦の強制徴集、熊本城の普請などを留守居に命ず(県中・速見)。 春 この頃清正は釜山浦、相良頼房は西生浦に陣す(求麻)。
4. 2 清正、行長らの劉綎に遣わした書状を国王に送達す(宣祖)。 12 秀吉、清正の虎を送れるを謝す(県中・加藤)。 13 朝鮮僧惟政、西生浦に清正を訪れ講和について談ず。清正、五ヶ条の条件を示す(戦史)。 清正、和議不成立のときは再び明を討つことを告ぐ(宣祖)(戦史)。 15 松雲(惟政)、本妙寺開山日真に辞を送る(県中・本妙寺)。 29 清正、給人万役付帳、去年の算用状の送附、阿蘇南・小国郷の立毛検地、給人百姓の夫役物成、舟方配当、侍下人の抱え、その他軍需品の送附ら、領内体制強化と朝鮮への輸送を留守居に厳命す(県中・徳富)。
5. 6 西生浦に陣の清正、竹田作蔵らの軍役を定む(県中世・下川)。また軍役数

文禄4 (1595)

100人につき昇5本・鉄砲10挺・鎗10本などの軍役数を定む(吉村)。

7. 11 清正、鉄砲500丁の製造、大豆の輸送、薬種の調達を命ず(越中)。12 僧惟政、再び清正に会し、講和を議し、清正を日本関白に推挙する意図であることを告ぐ。清正、これを拒否す(宣祖)(戦史)。
- 14 明将福養謙ら、小西行長の臣内藤如安の従兵を伴い京城に入り、ついで釜山に行き、日本軍の撤兵を諭す(宣祖)。
8. 20 清正、造船・軍需品の製造調達、給人の軍役徴集の厳守など十七ヶ条を留守衆に命令す(村上)。
- 21 肥後若宮社に正一位を授く(続史愚抄)。
- 28 朝鮮国王、清正・行長の離間を策す(戦史)(宣祖)。
10. 3 朝鮮両王子、清正の求めによりさきの救難を謝す(宣祖)。
- 5 朝鮮王、宗氏家臣柳川調信を諭し、行長を対馬に退去させ和を議す(宣祖)。
11. 1 行長、清正提示の和議は秀吉の意にあらざる旨を金応瑞に告ぐ(宣祖)。
- 3 清正、塩硝・硫黄の至急輸送を国元に求む(県中・下川)。
12. 14 行長の臣内藤如安、明王に謁す。和議ならず(明実録)。
- 20 内藤如安、再度明王に謁し、秀吉出兵の意図を問わる(宣祖)。
- 23 僧惟政、また清正を訪問す。清正、面会を拒否す(戦史)。

是年 この頃諸国の知行高帳作らる。肥後は14郡341,220石とす(当代)。

文禄4 (1595) 乙未 清正・行長

1. 9 黒川右近、相良領検地のために人吉に下向す(相良)。
- 13 明将陳雲鴻ら、小西行長と講和を協議するも成立せず(宣祖)。
- 20 清正、行長と金応瑞の会談を憤り、僧惟政との会見を拒否す(宣祖)。
- 30 明の冊封使、北京を出発す(明実録)。
2. 10 清正、国本の扶持方出分人数を決める。総計2,065人、日数178日分の扶持方を渡す(渡辺)。
- 11 明兵部差官妻国安ら、熊川の日本軍陣営にて行長らと会う。行長、撤兵しがたきことを主張す(再造藩邦志)。
- 30 朝鮮王李昫、清正を除かんと策謀す(宣祖)。
- 是月 行長、朝鮮禮曹に書を贈り修好を求む(再造藩邦志)。
3. 3 明の經略孫鑣差・官都司章應龍ら、西生浦にて清正と会す。清正、行長と惟敬の議定の非なるを説き、講和五条件を示す(宣祖)。
- 27 行長、釜山にて沈惟敬らに会す(宣祖)。
5. 22 秀吉、明との和議七ヶ条を行長らに示す(史綜)。
6. 2 領内大水出る。洪水で守富村と熊本は一つとなる程の稀代の大水となる(郷歴)。
- 24 朝鮮国禮曹司、清正の忠誠を賞揚する書簡を秀吉に呈す(県中・本妙寺)。
7. 19 清正、前田与介に合志村を宛行う(熱田神宮)。
9. 2 清正、梶原七大夫の知行1,000石を四宮左馬に宛行うよう国元に命令す(渡辺)。
10. 10 明の冊封使楊方亨、釜山の行長の陣に入る(宣祖)。
- 16 沈惟敬、行長に冊封使の渡海のこと、清正の撤兵のことを諭告す(続善隣)。
11. 3 朝鮮司贍寺正黃慎、行長の家臣小西末郷に清正の撤去の時期などを問う(宣祖)。
- 21 明冊封使李宗城、内藤如安とともに行長の陣にはいる(宣祖)。
- 28 清正、年貢徴集、造船、鉄炮者・侍の徴集、天草瓦の発注らを留守家老に

指示命令す (高林)。

是年 山鹿郡1村、菊池郡1村、阿蘇郡22村の検地帳作成さる (肥検帳)。愛藤寺城番結城弥平次、矢部郷中の神社仏閣を破却す。男成家治、郷内農民をひきい七里川辺にて戦い抵抗す (郷歴)。

慶長元 (11. 27改元) (1596) 丙申 清正・行長

1. 3 行長、沈惟敬を同道し釜山を出発。名護屋に向かう (宣祖)。15日着 (戦史)。
4. 2 冊封使李宗城、釜山の行長の陣より国書を捨てて出奔す (宣祖)。30 加藤与左衛門、日奈久・二見・久多良木の百姓中に対し、年貢米、渡海水夫、留守中の耕作らに三ヶ条を命令す (岡部)。是月 行長、沈惟敬とともに釜山に帰る (戦史)。清正召還の使者到来す (清正伝 156)。
5. 10 清正、西生浦を攻略す (戦史)。11 この頃清正召還の風耳あり (相良)。
- 14 清正、加藤与左衛門らに法度を下す。町人・百姓の夫役年貢無沙汰の取締り、未進年貢、法度違反者らの取扱い、田畠検見の取扱いなど九ヶ条の法度を下し、各郡に制札を立てるよう命ず (吉村)。是月 清正・相良頼房ともに歸国し、伏見に入る (求麻) (清正伝 156は6月9日とするも検討を要す)。
6. 14 明使、従者をつれ釜山出発。この頃行長も釜山を出発し、歸国の途に向う (戦史)。27 明冊封使沈惟敬、伏見にて秀吉に会う。ついで大坂に歸る (義演)。
7. 13 伏見大地震あり。屏居中の清正、伏見城に馳せ登り秀吉に謁す。秀吉、清正の罪をゆるす (清正記41) (県中・九鬼・長崎)。また相良頼房も清正に同道す (求麻)。15 清正、小麦を売却し南蛮鉛を購入すること、原田喜右衛門に長崎商売を依頼すること、来春呂宋に航海する予定であることなどを、新美藤蔵に書状す (県中・長崎)。24 山岡景友、清正と相良氏の間を斡旋し、相良氏の肥後路通行の許可をうる (相良)。26 清正、呂宋渡海の朱印状をうるか (等持院) (太史料)。
8. 28 清正、年貢、免相、上方詰夫、高麗よりの走り人足、舟子の調査ら十七ヶ条にわたり、新美藤蔵に指示命令す (東大史料)。
9. 1 秀吉、明使を大坂城に引見し、表文に怒り再征を決す (薩旧雜) (吉川)。5 清正、吉村勝太に山本郡平嶋村 326石、加悦宗右衛門に南郷白川村 200石を宛行う (県中・吉村・加悦)。20 清正、加藤清六に阿蘇郡北坂梨村 650石を宛行う (楓軒)。
10. 5 清正、再征を命ぜられ大坂より帰国す (相良)。7 行長、再征のため名護屋に到着す (相良)。13 深水頼蔵、出奔し清正に仕う (求麻)。15 清正、家臣を交易のために派遣する旨の書状を呂宋長官に送る (異国往復書簡)。
11. 11 増田長盛・石田三成ら豊臣奉行、清正の代官分 (秀吉蔵入地) の算用状の至急提出を求む (今井)。15 清正、朝鮮再征の先陣として隈本を発す (加藤伝) (清正伝 173) (高陣覚は10月10日とす)。22 相良頼房、朝鮮出陣祈願のため人吉阿蘇大明神 (青井神社) に水田2町を寄進す (県中・願成寺)。

是年 菊池郡豊水村の検地帳作成さる (肥検帳) この頃清正、古府中の商家・寺院を隈本城下に移すという (肥国誌上19)。

慶長2 (1597) 丁酉 清正・行長

1. 13 清正、慶尚道多太浦に到着。ついで西生浦に移る (鍋島) (宣祖) (高陣覚は1月3日着とす)。行長、慶尚道熊川浦に到着 (戦史)。21 清正、西生浦に

陣し禁制を下す。また朝鮮国王に僧惟政(松雲)の来見を求む。惟政、明国王の許可を要すと答う(宣祖)。

2. 3 清正、後藤又兵衛の釜山浦の戦功を賞し、感状を送る(武州) 21 慶長の役の軍陣立定められる。清正1万人、小西7,000人で2日交替で先手動をつとむ(島津)(浅野)。 27 清正、船子切米について留守役中川重臨に指示す(県中・下川)。 是月 清正、僧惟政と会見し王子の入朝と貢献を求むも、惟政これを拒否す。以後この交渉数回に及ぶ。(松雲問答)
3. 20 清正、朝鮮国王に領地分割と人質を求む。また僧惟政と会談し、王子の渡海せざる理由を問う(宣祖)(松雲問答)。 21 惟政(松雲)、清正と問答し、朝鮮出兵の疑義十一ヶ条について、日本に伝え回答するように書状す(県中・神田)(松雲問答)。 23 清正、城の処理、舟所持者の調査、硫黄の送附、米の売却など、領内全般の取締りについて国元に厳重に命令す(片山)。
4. 24 相良(犬童)頼兄、深水織部一族を誅す(求麻)。
5. 12 朝鮮国王、清正の兵の降る者を留置せしむ(宣祖)。 30 清正、沈惟敬に会見を求むも、惟敬これを拒否す(史綜)。
6. 13 秀吉、朝鮮国王の態度を怒り、行長・清正を先鋒として全羅道より北上さす(宣祖)(高陣覚)。 27 沈惟敬、惟政をして清正と和議せんとするも、清正拒否す。惟敬、行長を頼って出奔す(宣祖)(懲愆)。
7. 15 行長・相良頼房ら、朝鮮水軍を唐島(巨济島)に破る(島津)(求麻)。 19 早川主馬ら、加藤嘉明の朝鮮行動の非法を行長に報告す(藤堂)。 25 清正、浅野幸長に慶尚道西生浦を守らしめ全羅道を攻撃す(浅野)。
8. 14 行長、使を南原に派遣し開城を諭す。翌日攻略す(戦史)。 16 清正・黒田長政ら、全羅道黄石山城を陥す(豊遺)(黒田) 是月 清正ら、明将楊元を南原に破る(清正記44)。
9. 7 行長は順天、清正は蔚山、頼房は釜山浦を守備す(求麻)。 10 清正、忠清道鎮川に進む(安養寺)。 16 行長・島津義弘ら、忠清道より全羅道井邑に帰陣す(島津)。 19 清正、尚州に退き黒田長政らと会す(戦史)。 30 清正の家臣ら多く討死す(安養寺)。
10. 8 清正、慶尚道蔚山に入り(安養寺)、28日に築城す(浅野)。
11. 15 清正、慶尚道西生浦に禁制を下す(宣祖)。 21 清正、河尻の黒船を改造すること、米の至急輸送、硫黄・玉薬の調達などについて留守居衆に命令す(県中・下川)。 24 清正の長子虎之助歿す(清正伝 497)(当代)。
12. 1 秀吉、清正の蔚山城攻略、西生浦の城番、清州附近での国王の妹姫らの捕虜の功を賞す(県中・下川)。 2 行長、全羅道順天・倭橋に番城を築く(浅野)。 22 明軍蔚山城を攻撃す。清正、西生浦から救援のため蔚山城にはいる(浅野)。 23 清正、普請した蔚山城を請取り、明軍に対す(浅野)。 24 清正、明將軍の総攻撃を撃退す(戦史)。 27 明軍大挙して蔚山城を攻撃し、包囲を堅む。清正ら苦戦す(連長坊)。 29 明軍、城中の清正を誘降せんとす。清正、敵将との会談を約束す(武家)。

是年 山鹿郡1村、阿蘇郡13村、芦北郡29村の検地帳作成さる(肥検帳)。玉名郡行末塘を築き新田104町を開く(土本史)(県史・年表)。

慶長3 (1598) 戊戌 清正・行長

1. 1 清正・浅野幸長、蔚山城の防戦に苦戦していることを諸将に報ず(浅野)。
 2 平清正、朝鮮武官と会談することを希望す(竹中雜留)。 4 明軍、蔚山城の囲をとき退く。清正ら追撃して破る(浅野)。 15 島津義弘、行長の敗北について清正に報告す(島津)。 17 秀吉、蔚山城の軍勞で清正・幸長を賞す(浅野)。 22 秀吉、清正の戦功を賞し、また兵糧1万石を寺沢志摩守より請取ることを指示す(武家)。また清正の西生浦の警固を免ず(戦史)。また諸将に帰朝を命ず(豊遣)。 26 清正は西生浦、行長は慶尚道泗川の在番を命ずも、行長これを拒否す(島津)(楓軒)。
2. 23 清正、蔚山城の修築を巡視す(吉川)。
3. 18 秀吉、朝鮮置兵糧米として清正・行長に米5,000石宛を割当つ(富岡)。 29 行長、重ねて和好を明将呉宗道に求む(宣祖)。
5. 是月 宇喜多秀家ら諸将帰国す(閏閏)(吉川)。清正、蔚山城を守備す(戦史)。
6. 27 京都相国寺承兌、清正の朝鮮との和睦の事など上杉景勝に報ず(史綜)。
8. 18 秀吉薨ず。63才。
9. 7 清正、下川右衛門に菊池郡薦入村 366石、吉村勝太に玉名郡迫村 370石を宛行う(吉村)(県中・下川)。 9 清正の伯父加藤喜左衛門清重歿す。瑞泉院蓮政、55才(肥)。清正、留守を後藤勘兵衛に申付け、大木織部に内検させること、良質な鉄砲の製造、隈府にての鎗の製造などを指示命令す(渡辺)。
 17 豊臣奉行家、去年の代官地の田麦改帳を至急提出するよう清正に求む(県中・下川)。 19 行長、順天城外にて明軍に襲われる(楓軒)。 21 明提督麻貴ら、清正を蔚山城に囲む(楓軒)。 24 明提督劉綎ら、全羅道今順天城に小西行長を攻む(宣祖)。
10. 3 明提督劉綎・陳璘、水陸兵を合せ、順天城に行長を攻む(紀伊徳川)。 13 島津義弘、明軍の和の申出に対し、行長と議しこれを許す(薩旧雜)。 15 豊臣五大老、朝鮮在城を引揚げ、順天に在陣することを行長に指示す(家康)。
 16 清正、以後2,3ヶ年の領内の人夫諸役免除について、高札で掲示するよう命ず(県中・下川)。 19 家康、清正に帰朝を促す(家康)(黒田)。 23 清正、小森田大膳に吉州攻撃を賞し、託麻郡今村 350石を宛行う(県中・小森田)。 25 行長、明将劉綎と和す。劉綎人質を行長に送る(戦史)(宣祖)。 27 家康、黒田長政に、清正と議し釜山に退かしむ(黒田)。 30 行長ら、帰国のことを議す(征韓録)(戦史)。
11. 2 明将劉綎、行長に日本都督僉事を授職し、捕虜の返還と釜山への撤退を求む(県中・加藤)。 3 欽差統領茅、倭軍を撤兵させ朝鮮との和好を求む(県中・加藤)。 10 行長ら釜山に集結せんとするに、明軍その海路を阻む(島津)。
 15 水師都督陳璘、行長に人質を出す(戦史)。 17 蔚山在番の清正、撤兵す(清正記)(清正伝22)。 18 島津義弘ら、小西行長を迎えて南海島に着く。明軍島津軍を攻撃す。島津軍敗れて唐島(巨濟島)に入る(島津)。 19 行長・寺澤正成、包囲をうけた島津義弘の将を救済し、唐島に帰る(島津)。 23 清正・長政ら釜山を發し、帰国に向う(清正記52)(戦史)。 25 行長・島津義弘ら、釜山を出發(戦史)。 26 欽差倭官劉綎、島津義弘らを諭し、行長に授職す(県中・加藤)。行長・大村喜前ら、釜山を發し帰国に向う(本山豊前覚書)。 27 清正ら老岐勝本に到着す。ついで牢人衆の宿の手配を加藤喜左衛門に命ず(県中・下川)。

慶長5 (1600)

28 家康、清正に戦功を賞す (家康)。

12. 2 清正、博多にいたり神屋宗湛に書状す (神屋)。是月 阿蘇山活動す。翌年に及ぶ (肥国誌下 529)。

是年 清正の臣加藤喜太郎 (喜左衛門清重)の菩提のため、蓮政寺を建立。開山日性 (肥国誌上87)。

慶長4 (1599) 己亥 清正・行長

1. 11 相良頼房、従五位下左兵衛佐に叙任さる (求麻)。

3. 22 清正・毛利老岐守・黒田甲斐守ら連判し、小西行長らの陣中における非法行動を訴う (清正記56)(史籍・陣古文)。23 清正ら、行長と戦功を争い敗れたことの糺明を豊臣五大老に訴う (史籍・陣古文)。25 清正、重臣や各郡奉行に、帰朝の刻に禁止した人足使用について、なおも城普請に徴発使用している理由を糺明す (県中・下川)。26 清正、高麗帰朝後の召抱え人の改め、鉄砲薬の調合を重臣に命ず (県中・下川)。

閏3. 4 清正・黒田長政ら、石田三成を誅することを計画す。そのためこの日三成、徳川家康のもとにのがれる。家康、清正らを説得す。また三成を佐和山に退去さす (浅野)(家康)。13 清正、暇をこい帰国す (実紀)。19 豊臣年寄衆、清正・長政らによる朝鮮陣奉行福原長堯らの非法訴えを裁決し、長堯らの領地を収む (毛利)。

4. 25 八代の一少年に聖なる十字架の奇蹟あらわる (宗門史)。

8. 6 島津義弘、伊集院幸侃の逆心に清正が応援していることを、伊集院源次郎に書状す (薩旧雜)。20 家康、相良頼房 (長每)らに島津義弘を救援さす (相良)。22 清正、加悦助六に菊池郡賀恵村 200石、安部五兵衛に合志郡井坂村ら 230石を宛行 (県中・加悦・安部)。

9. この頃 (2月～9月まで) 肥後では約8万人が洗礼をうく (宗門史)。

11. 9 清正、藤崎八幡宮に社領を寄進す (県中・藤崎)。29 清正、領内に豊国大明神を勧請せんとする (西厳殿寺)。またこの頃阿蘇惟善を大宮司に復さす (阿蘇)。

是年 山鹿郡3村、菊池郡3村の検地帳作成さる (肥検帳)。相良氏家臣に内紛起る。上村長陸を斬る (相良)(求麻)。菊池郡西光寺、了海開基す (肥文・菊池)。清正息子熊之助誕生 (のち主計頭忠正と号す、早世す)(加藤伝)(清正伝 234)。

慶長5 (1600) 庚子 清正・行長

2. 13 清正、秀吉御伽衆織田常真らと鹿苑院にて会す (鹿苑)。

是春 清正、熱田神宮西門鎮皇門を造営寄進す (県中・熱田神宮)。

5. 18 清正母伊都歿す。68才、聖林院天室日光 (本妙寺)。

6. 是月 清正伏見より帰国す (事蹟)(清正伝 238)。

是夏 清正、舟橋秀賢に託し慶長版六韜・三略に朱点をいれさす (近藤正斎・右文故事)(肥は4月23日とするも詳らかならず)。

7. 15 毛利輝元、秀頼への忠節のため大坂に上洛することを、清正に勧む (事蹟)(松井)。17 清正の室、大坂を逃れ帰る (松井)(黒田)。27 清正、秀頼の諸将らが細川幽斎を攻撃するをきき、豊後杵築の松井康之に応援に赴くことを勧む。康之(佐渡)、清正に答う (清正伝 249)(松井)。清正、秀頼への奉公を勧められたこと、および熊本城普請の様子を黒田如水に報ず (黒田)。30 松井佐渡、

清正は妻を大坂に人質にしているが、徳川の味方で細川と協力して行動する人物であると書状す(家記)。

8. 5 行長、松浦鎮信らを説得するも、鎮信ら東軍に応ずることを議す(松浦家世伝)。 12 清正、三池式部に玉名郡下長田村 518石余、庄林隼人に玉名郡井手村1,039石を加増す(県中・三池・庄林)。家康、細川忠興に但馬一国を加増す(細川)。 15 家康、清正に肥後・筑後両国を遣す(県中・加藤)。 23 小西行長・石田三成、美濃呂久川の下流の佐渡にて島津義弘と軍議す(関ヶ原軍記)。 28 清正、松井康之に大友吉統の府内入りを報告す(松井)。
9. 1 清正の室、大坂をのがれ帰着す(続清正94)(清正伝 240)。 5 黒田如水、岐阜城攻略を清正に報ず(黒田家譜)。清正、宇土郡松山村に三ヶ条の禁制を下す(県中・本郷)。 7 清正、黒田如水と相談して行動し、また家康に二心なき旨を本多佐渡守(正信)らに書状す(清正伝 283)(黒田)。 9 松井康之、大友吉統の攻撃急なるを清正に告ぐ(松井)。 11 清正、家康に二心なき証書を本多佐渡守(正信)に提出す(黒田)(清正伝 285)。 13 清正、番方の三番組吉村橘左衛門以下の軍役数 862人定む(吉村)。清正、益城郡鯉村に三ヶ条の禁制を下す(肥国誌下 145)。 14 石田三成、相良頼房らを大垣城に留め、行長らと関ヶ原に陣す(関ヶ原合戦記)(吉川)。 15 関ヶ原の戦始る。松井康之、大友吉統に攻められ清正に救援を求む。清正出兵す(松井)(家記)。 16 黒田如水、清正とともに豊前・豊後の地を与えられんことを求む(宗国史)。清正、毛利民部・大友吉統への攻撃を吉村橘左衛門に命ず(吉村)。 17 清正、松井康之の勝利をきき、途中より引歸し宇土に向う(松井)(中沢)。 18 清正、豊後引地より兵を歸す。先鋒宇土城攻撃を開始す(事蹟)(肥国誌下19)。島津義久、佐敷加藤重次を攻む(薩旧雜)。 19 清正、細川軍に鉄砲らを援助す(家記)。行長、関ヶ原山中にて捕えられ、家康のもとに送らる(板坂ト斎覚書)。 20 清正、益城郡木山辺を攻撃し、明21日に宇土城攻撃開始の由を重臣に報告す(中沢)。 21 清正、益城郡腰尾町に禁制三ヶ条を出す(県中・馬場)。また宇土城を攻む(黒田)(松井)(事蹟)。 23 清正、宇土城を攻め町人百姓を人質にしていることを黒田如水に報告し、柳川城の攻略を謀る(黒田)。 24 清正、鍋島加賀守に協力の行動の如何を問う(鍋島)。 26 清正、益城郡杉嶋村他2村宛に三ヶ条の禁制を出す(城南史 303)。 28 清正、近日に八代攻撃を行う由を松井佐渡に書状す(清正伝 274)(松井)。黒田如水、関ヶ原戦勝利を報じ、ともに毛利氏を攻めることを清正・松井康之に勧む。清正これを辞す。また柳川立花氏の大坂よりの帰国について答う(松井)。豊後竹田中川秀成、清正に誓書を出し、寺井小七郎を人質とす(中川家譜)(吉村)。 30 清正、益城郡高野村に三ヶ条の禁制を下す(県中・藤野)。 是月 清正、如水と共に九州西軍を破る(実紀)。
10. 1 三成・行長、京都六条河原にて処刑され梟首さる(舜旧)(言経)。 2 清正、六殿大明神に三ヶ条の禁制を下す(県中・六殿宮)。 11 清正、相良頼房攻撃の所存であったが、佐敷に働いたので中止した旨を黒田如水に書状す(県中・阿蘇品)。 15 清正、大坂本妙寺を菩提所として熊本に移す(肥国誌上 147)(本妙寺は天正19年とす)。 16 清正、金田吉左衛門に益城郡まか村150石、内田九左衛門に堅志田村 150石を宛行う(県中・金田・内田)。 17 清正、南

慶長6 (1601)

関に到着したこと、今朝八代を請取らせた由を吉村橘左衛門に報告す(吉村)。清正、立花宗茂の謝罪を徳川家康に報ず(浅川聞書)。20 清正、黒田如水らと立花宗茂に開城を行わす(吉村)。清正、三宅喜蔵に宇土表の功に対し1,000石を加増す(仰古秘笈)。また佐久間角介に500石を加増す(県中・佐久間)。また井村彦右衛門に500石加増す(県中・市立博物)。21 清正、舟出入、浦の防備、佐敷口の防備、求麻口の封鎖、町人百姓の人質改め、立花氏攻撃を吉村左近に指示命令す(県中・吉村)。23 小西長元(隼人)、部下将兵の助命を請い開城す(肥国誌下19)(事蹟)。重臣南条元宅も降る。のち清正の家臣となる(肥国誌下19)。25 清正、如水・鍋島直茂と筑後瀬高に会し、立花城を開城させ、立花宗茂を玉名郡高瀬に居らしむ(清正伝282)(戦史)。26 清正、佐敷町らに小屋指しを申付ること、相良氏の人質の提供などを指示す(加藤内蔵)。清正、薩摩攻撃を行うため、舟手道具を河尻・小嶋で改め、また領内舟の改め調達を加藤喜左衛門尉に命ず(中沢)。28 清正、筑後三沼(三瀨)郡に三ヶ条の禁制を下す(県中・歴世)。

11. 1 吉村橘左衛門以下を後備えにし、守備の置目、法度、人数出入を厳禁さす(吉村)。また同様に加藤美作、筑紫主水正、筑紫上野介にも命ず(県中・庄林)。3 清正、田辺又介に下矢部の内300石を宛行う(田辺)。清正、天草喜右衛門に八代郡海道村200石、天草新介に同村500石を宛行う(県中・天草)。
- 8 清正、芦北郡河内村に三ヶ条の禁制を下す(県中・桑原)。12 清正、家康の命にて出水より兵を返す(黒田)。15 清正、薩摩出水の攻略を島津の詫びで中止したこと、また浦舟の調達、在々の年貢を米蔵に入れること、奉公人の配当割符などについて、下川又左衛門に指示命令す(県中・下川)。18 家康、清正・如水らに柳川城を請取らせる(黒田家譜)。22 清正・如水、島津の詫びにて水俣より兵を返す(吉村)。25 清正、薩摩攻撃と八代城・水俣城陥落の様子を榊原式部に報告す(黒田)。是月 清正、肥後全領(天草・球麻を除く)を宛行わるといふ。吟味の余地あり(事蹟)。

是年 清正の重臣並河志摩守・相田内匠、鳥井次良右衛門尉の宇土城攻撃を賞す(県中・鳥井)。菊池郡新古閑村他4ヶ村の検地帳作成さる(肥後検帳)。吉村橘左衛門・提権右衛門、八代妻島城代となる(事蹟)(肥国誌下283)。

慶長6 (1601) 辛丑 清正

1. 是月 清正、江戸に出発す(清正伝343)(藤遺)。長尾善政(豊前) 矢部愛藤寺城々代となる(事蹟)。
2. 是月 清正、豊後三郡(海部・大分・直入2万石)を宛行わす。天草郡は寺沢広高に与えられるという(断家譜)(天草島鏡は翌7年とす)。
3. 是月 清正帰国す(清正伝343)(藤遺)。清正、佐藤清左衛門に知行を宛行う(山移)。
5. 3 豊後大野郡にほ村・海部郡佐井村・横田村に、年貢・百姓統制などの掟書を下す(大県史・門脇・安達)。是月 玉名郡鯨(腹赤)村古庄家、自分の名子12人に田畑1枚宛を遣わす(古庄)。
8. 7 隈本新城造築の鉄初めという(清正伝359)(熊本城今昔記)(下川は慶長3年末の準備、同4年の開始とす。詳細不明。検討の要あり)。
10. 2 清正、加賀山弥兵衛に所領の替地を給す(山移)。14 清正、深水織部に

阿蘇郡小国郷赤馬場村 709石余を宛行う (相良)。 30 清正、志岐藤右衛門尉に宇土郡古保里内岡村 420石を宛行う (県中・志岐)。また中川太郎平に益城郡鯉村1,738石余を宛行う (県中・庄林)。

11. 3 清正、関ヶ原乱後の農民政策七ヶ条を出す。百姓還住、材木の売買、鍛冶炭の取扱い、百姓への麦種貸しなどを規定す (県中・熊本市立博物館)。 11 玉名郡腹赤村、はやり病につき仏寺供養をなす (古庄)。 17 清正、伊藤四郎兵衛に守富村内 100石を宛行う (伊藤)(肥国誌下 155)。 23 立花左近、牢人中につき生活扶助を清正年寄衆に依頼す (県中・小野)(蒲池)。

11. 11 清正、下川右衛門作に益城郡小坂村 450石を宛行う (県中・下川)。

12. 17 清正、原田弥右衛門に益城郡沼山津 400石を宛行う (原田)。

是年 益城郡御船町の検地帳作成さる(肥検帳)。八代(麦島)城修覆す。豊後鶴崎に法心寺を建立す (肥国誌下 618)。加藤内匠、津奈木城代となる (事蹟)(肥国誌下 414)。

慶長7 (1602) 壬寅 清正

2. 29 往生院、古町に再興す (肥国誌上81)(事蹟)。
5. 11 清正の勘定奉行新美権左衛門、上方普請用銀子を安部五兵衛より請取る(県中・阿部)。 18 清正、母堂聖林院の追福を祈るため常光寺(妙永寺)を建立す(肥国誌上73)(清正伝 234)。 23 清正、島津図書頭に入質の提供と境目決定の有無を催促す (島津)。 吉日 清正、関権現社を建立し棟札をあぐ (大県史・速吸社)。
8. 1 清正、伯父加藤喜左衛門夫妻のため蓮政寺を建立す。この日鍛初め、翌8年7月29日竣工す (肥)(肥国誌上87は慶長3年とするも詳細不明)。
10. 是月 隈本城出丸の大黒矢倉竣工す (肥)。
11. 7 勘定奉行新美権左衛門、借米10石の銀子 141両1分余(利28両2分余)を安部五兵衛より請取る (県中・安部)。

是年 清正、領内のキリスト教を厳禁し、八代にて殉教行わる (宗門史)(西教史)。立花宗茂の家臣小野和泉ら、清正の扶持をえて隈本京町に居住す。柳川小路の町名のおこりという (肥国誌上69)。

慶長8 (1603) 癸卯 (家康) 清正

2. 是月 清正、江戸市街の修理を命ぜられる (実紀)。
3. 25 清正、従四位下肥後守に任ぜらる (県中・本妙寺)(実紀)。 26 清正、拝賀のため参内す (実紀)(時慶)。 是月 清正、幕府の普請役千石詰夫で浅野幸長の掛り組として江戸町作りにあたる (大史料)(慶長見聞集)。
4. 20 米良・椎葉の山境争論す。是日米良は相良、椎葉は高橋領支配となる (求麻)。
7. 18 清正、豊国社に参詣す (舜旧)。 26 清正、しんきやらを宮中に奉獻す(御湯殿)。
9. 27 清正の伏見邸全焼す (義演)。
10. 9 清正、農繁期につき百姓を普請役に使用しないよう命ず (県中・島田)。
是月 清正、領内を巡視す (宗門史)(拾集)。
11. 7 清正、小西家臣南五郎左衛門らを捕え、キリシタンを弾圧す(宗門)(一説は26日とす)。 18 家康、柳川城・筑後諸城の番を清正・如水らに依頼す (家康)。
12. 8 キリシタンの小西家臣南五郎左衛門を処刑す (宗門)。 9 清正、長尾安

慶長10 (1605)

右衛門に矢部庄内1,022石5斗余を宛行う (県中・弥富)。

是年 託麻郡31村、芦北郡13村、益城郡1村の検地帳作成さる (肥検帳)。寺沢高広、天草郡富岡に新城を築く (天草譜)。清正、江戸に宅地を賜わり工事に着手す。同12年に邸宅なる (県中・大木)。

慶長9 (1604) 甲辰 (家康) 清正

3. 2 准如、蓮如上人の真影に賛をし、隈庄雲晴寺に送る (県中・雲晴寺)。
4. 10 清正、伏見城にて家康に歳首を賀す (大史料)(慶長)。 14 清正、秀吉の政所高台院を訪問す (大史料)。 16 清正、大船を建造す。船長20間、横5間、船中座敷、三重風呂の設備あり。舟橋秀賢、大坂にて是日見参す (義演)(慶長)。 18 清正、豊国社に参詣す (舜旧)。舟橋秀賢、清正を訪問す (慶長)。
5. 23 清正、曼殊院怒法親王を招き、山城伏見にて能楽を興行す (時慶)。
6. 22 家康の参内に同行す (当代)(義演)。 24 家康、高台院 (秀吉政所) を招き能楽を興行す。清正も同席す (言経)。
7. 1 幕府、西国大名に課して山城の伏見城を修築さす (当代)。 3 玉名郡扇村・原賀 (腹赤) 村の間に行末塘の工事行わる。清正、古庄家に立寄り、先祖以来の事柄を問う (古庄)。
8. 14 秀吉の七回忌の豊国臨時大祭あり。清正、奉納馬15頭を出す (豊国大明神祭日記)。 18 豊国社に詣づ (舜旧)。 20 蔵米の内1,000石炭鉄料として上野介に宛行う (小山)(清正伝 366)。 **是月** 江戸城修築、石材運送を諸大名に課す。清正・細川忠興も命をうく (大史料)(御手伝覚)。

閏8. 18 伏見を發し帰国す (時慶)。

9. 28 内牧の城代加藤可重歿す。ついで菩提のために浄信寺を建立す。子清左衛門正方、内牧城代となる (事蹟)(肥国誌下 511)。

是年 肥後領内検地帳作成さる。郡高帳・鄉村帳作成さる (肥検帳)。幕府、諸国に一里塚を築かしむ (当代)。

慶長10 (1605) 乙巳 (家康・秀忠) 清正

2. 18 加藤左平太、豊後速吸 (関) 社に社領を寄進し、三ヶ条の條規を定む (速吸社)。
3. 19 清正、伏見に着す。下津棒庵も同道す (時慶)。
4. 5 清正、熱田社建立について、家康に許可を求めたが許可されなかった由を熱田惣検校に報ず (熱田神宮)。 16 秀忠將軍職に就任す。清正も侍從に任ぜらる (武家補任)。 18 豊国社に参詣す (舜旧) (注、以下清正の名をはぶく)。
5. 3 池田利隆、江戸にて秀忠の養女 (榊原氏) と結婚す。清正、榊原氏との関係で列席す (実紀)。 8 秀頼、家康の上洛要請を拒否す。清正・福島正則の制止によるという噂たつ (大史料)(武徳編年集成)。
6. 24 後陽成天皇、本妙寺に対し勅願寺の綸旨を与う (本妙寺)。
8. 17 二条城にて家康に伺候す (時慶)。 18 豊国社に参詣す (舜旧)。 20 伏見を出發し帰国す (時慶)。
11. 25 菊池川沿岸の新地工事を完成す (清正伝 395)(藤遺)。
12. 20 加藤左平太、関権現社役五ヶ条を定む。また50石を寄進す (速吸社)。

是年 家康、清正の許から夏目吉次を召還す (寛政)。天正17年以来の普請工事玉名郡小田牟田新地 939町歩竣工すという (土本史)。また菊池郡築地井手を作ると

いう (土木史)。

慶長11 (1606) 丙午 (秀忠) 清正

1. 7 隈本を發ち江戸に向う (当代)。 19 幕府、清正ら諸大名に江戸城普請役を課す (清正伝 488) (大史料)。 26 大坂に参着す (当代)。 是月 玉名郡古塘・名切 (菜切) 2ヶ所の塘の築造工事行わる (古庄)。
 2. 27 江戸城築城を命ぜられた西国大名参府す。伊豆より石材を運搬す (実紀) (当代)。 是月 江戸に参着す (当代)。
 3. 1 江戸城工事着工す。清正、日比谷を受持つ。奉行は森本儀太夫なり (大史料) (御手伝覚)。 20 清正、岡本弥一郎に石舟下積のわり木の調達を依頼す (岡本) (清正伝 488)。 是月 清正の息女こや (古屋)、上州館林城主榊原康政の息子康勝に嫁す。 9才 (清正伝 493) (当代記は1月7日熊本發、3月9日岐阜着と記す)。
 5. 13 伏見の清正邸に怪異あり (実紀)。 是月 託麻郡木部村、洪水にて村中難儀す。清正、郡中視察をす (先哲)。
 6. 10 清正就封を許され江戸を發つ (実紀)。 是月 伏見にて家康に謁す。諸大名に勤めて巨石を献ず (実紀)。
 7. 18 翌日の2日間、豊国社に参詣す (舜旧)。
 8. 18 聖林院 (清正母) 七回忌を京都本圀寺で営み、万部読經を行わしめ、是日結願す (鹿苑) (舜旧)。 21 熊本に觀世を呼び、能楽を興行す (実紀) (当代)。 是秋 神事一式再興の命による放生会演能につき、藤崎宮の本座・新座争う。本座を罰す (清正伝 408) (新座能方旧記)。
 11. 8 立花宗茂家臣小野和泉守に、山鹿郡下内田村ら 4,079石余を宛行う (県中・小野)。
 12. 8 秀吉政所、高台寺を京都に建立す。清正助力す (当代)。
- 是年 本妙寺住職日眞上人、清正室本覚院殿月心日圓大姉のため妙永寺内に本覚寺を建立す (肥国誌上73) (本妙寺靈簿)。また日眞、この年近衛信尹の執奏により紫衣を賜わり、権大僧都法印となる (本妙寺)。

慶長12 (1607) 丁未 (秀忠) 清正

1. 20 清正第二子忠正、江戸にて歿す。九才。理性院宗覚日等 (当代) (実紀)。
- 27 忠正菩提のため八代麦島に本成寺を建立す (本妙寺) (肥国誌下 274)。
3. 15 旧天草志岐城主志岐親重、八代城下にて死去す (天草譜) 著書目録 3.4 下野狩日記 記録 村山丹波守惟尚
4. 是月 川尻庄内の検地行わる (川尻史92) (肥検帳) (現存の検地帳では4,5,6,7月施行さる。町および町周辺と錢塘地域は4月施行)
5. 11 幕府、願成寺住職勢辰に勅して天下泰平を祈らしむ (願成寺)。
8. 4 清正、西洋渡海の朱印状をうく (異国御朱印帳) (清正伝 499)。
9. 13 横手五郎歿すという (清正伝 348) 23 人畜改めをなす (小川年代記)。
10. 18 甲佐を巡検し、緑川の改修を計画す (清正伝 427) (拾集)。また益城郡田上監物宅を訪問し、井手筋の普請をす (藤遺) (拾集)。
12. 10 緑川改修に着工す。翌年3月16日竣工す (清正記 427) (拾集)。 16 清正、榊原式部所持の出雲片衝の購入、邸宅華美の注意などを大木土佐に書状す (県中・大木)。 是月 將軍に鶴および八代密柑を献ず (県中・大木)。益城郡甲佐町鶴の瀬堰の工事に着手、翌13年3月竣工 (土木史)。

慶長15 (1610)

是年 隈本新城に移り、隈本を熊本と改称すか、未詳(清正伝 502)(肥国誌上36)。また江戸邸宅竣工す(大木)。玉名郡古塘・名切塘・塩屋塘を築き、新地を造成す(藤遺)(土木史)。また玉名郡浦川井手を改修す(土木史)。玉名郡片諏訪村、益城郡舟津村の地撫帳作成さる(肥検帳)。また領内の総検地施行され、検地帳作成さる(肥検帳)。上益城郡麻生原の堰着工す(土木史)。本妙寺開山日真上人、二世日繞に譲り隠居す(本妙寺)。

慶長13 (1608) 戊申 (秀忠) 清正

2. 2 妙恩院に5人扶持と50石の増扶持を与う(県中・宗覚寺)。
3. 15 清正、秀頼の瘡瘡快愈を祝し、見舞の欠札を詫び、また茶の所望を織田有楽に書状す(酒泉)。16 緑川改修完工す(藤遺)(清正伝 427)。**是月** 伏見代官所役人芹沢新平、肥後で捕わる(実紀)。
5. 3 將軍家に時服を献ず(実紀)。
6. 28 夏成算用で上麦1反に1石と見積る(県中・抽留木)。
8. 26 北里左馬、矢部七郎左衛門、山田小藤藏、三池源十郎、小野弥太郎、十時平介、問註所三右衛門に知行を宛行(県中)(福岡県史資料)(松浦史料館)。
9. 6 小袖を献ず(実紀)。23 小川両新田村造成さる。67町2反余、835石余、家数101軒、人数198人なり(小川夢)。
11. 24 緑川の改修をみるため木山より甲佐に到る。ついで川尻に赴く(藤遺)(清正伝 427)。25 旧宇土城主宇土顯孝歿す(事蹟)。清正、山鹿の日輪寺に制札を立つ(肥国誌上 507)。
12. 16 小袖を將軍に献ず(実紀)。

是年 領内総検地行わる(肥検帳)。またこの頃、領内の郷庄を分け、郷・組の行政区劃とすという(肥国誌上18)(事蹟)。

慶長14 (1609) 己酉 (秀忠) 清正

1. 11 清正、暹羅国と交趾国への海外渡航の朱印状をうく(異国御朱印帳)。また八代の家臣蟹江与兵衛・野入九蔵、キリシタンの科により処刑さる(宗門史)。
2. 19 家康、関西の諸大名の質人を江戸に集む(当代)。
3. 6 伏見を発ち江戸に参勤す(実紀)(当代)。18 人吉青井神社を修造す(求麻)。
5. 2 清正の重臣長尾豊前善政(岩尾城代)歿す(事蹟)。5 秀吉政所高台寺を訪問し、本圀寺に宿す。数日滞在後、伏見に帰る(時慶)。14 安南国瑞公、清正に交易についての書翰を寄す(県中・本妙寺)。17 安南国大都統官瑞公、再び書翰を寄す(県中・本妙寺)。
9. 29 窪田兵十に玉名郡平野村192石余を宛行(県中・窪田)。井上九右衛門に合志郡久米村430石余を宛行(黄薇古簡集)。
10. 12 山鹿湯之町談議所坊主に米2石を寄進す(県中・金剛乗寺)。

是秋 熊本に帰る(肥)。

是年 八代郡西川田村の検地帳作成さる(肥検帳)。川尻町に法宣寺を建立す。開山は本妙寺日真上人なり(肥国誌上19)。加藤万兵衛正直、岩尾城代となる(事蹟)(古城考)。益城郡本村播摩(慶山と号す)、清正の影像の2軀を彫刻するという(本妙寺)。

慶長15 (1610) 庚戌 (秀忠) 清正

2. 8 名古屋城築城の普請役を命ぜられ、熊本出発す (実紀)(当代)。 30 息子虎藤を伴い豊国社参詣す。虎藤、江戸の人質となる (大史料)。
 3. 3 清正、普請惣大将役を命ぜられる (清正伝 509)(蓬左遷府記稿)。 6 大炊御門家雑掌行賢、藤崎八幡宮社家に対し、吉田左兵衛の冠・装束についての吟味を命ず (県中・藤崎宮)。 26 家康、能楽に清正を招く (義演)。
 4. 15 この頃熊本城大広間及び花島を造営す (大木)(清正伝 620)。
 6. 3 名古屋の天守・二の丸、及び外郭の工事に着手す。清正請うて天守の普請を負担す。52万石の軍役なり (実紀)(当代)。 20 家康、清正に名古屋城本丸普請の成就を賞す (家康)。 23 相良長誠歿す (求麻)。
 7. 7 名古屋城普請の扶持方米 761石余を請取る (県中・蓬左)。
 8. 28 名古屋城の普請を終り帰国に向う。9月3日熊本に到着するという (蓬左遷府記稿)。
 9. 2 豊国社に参詣す (舜旧)。 是月 家康、清正の女あま姫を徳川頼宣に嫁させるため使者三浦為春を送る。この日幣を納む(前橋旧蔵聞書)(清正伝 522)。
- 著書目録 9.19 幽斎翁御葬礼記 記録 末松崇賢
11. 24 清正の母聖林院供養のため、加藤伝左衛門88石を本妙寺に寄進す (県中・本妙寺)。
- 是年 安南国大都統官、清正に信書と音物を呈す (県中・本妙寺)。清正、八幡のお国という歌舞伎女を召し下し、熊本塩屋町3丁目武者溜にて興行す (続清正 108)。託麻郡高江村、山鹿郡久原村の検地帳作成さる (肥後帳)。

慶長16 (1611) 辛亥 (秀忠) 清正・忠広

3. 27 秀頼、大坂より上洛す。清正警固す (実紀)(当代)。 28 秀頼、二条城にて家康と会見す。清正ら扈從す (実紀)(当代)。 是月 幕府、禁裏修造の役を諸大名に課す。清正、築地南側の修築をなす (当代)(駿府)。
4. 12 細川忠興・加藤清正らの諸大名、將軍へ起請條々三ヶ条を提出す (前田)。 29 佛蓮社信譽、授手印を買得して往生院に奉納す (県中・往生院)。
5. 21 人吉願成寺勢辰、権僧正に任命さる (願成寺)。 26 清正、帰国途中の船中にて発病す。京都より名医友竹法印らを招く。また祈祷を大蔵卿局を通じ吉田義演に依頼す (義演)。
6. 24 清正歿す。50才。浄池院永運日乗 (本妙寺御霊簿)。 25 大木土佐殉死す。ついで帰化人金官も殉死す (本妙寺) (肥国誌上 148) (七回忌とする説、また元和3年6月24日とする説あり)。
7. 3 虎藤、父清正快愈の報 (11日の書) を2日に受け、清正重臣に書状す (吉村)。 11 織田常真、吉村橘左衛門に清正の死去をいたみ書状す (吉村)。 30 清正の遺物の配付、家臣付け、備大將名らを幕府に書上ぐ (続清正記 130)(清正伝 554)。
8. 4 家康、虎藤(忠広)に遺領相続を許可す (駿府)(清正伝 557)(清正記は8月24日とす。また慶長日件は虎藤を虎之助、事蹟は藤松とす) 24 虎藤、襲封を謝すため駿府に上り家康に謁し、金銀を献ず (清正伝 559)(忠広)(駿府)。
- 28 虎藤(忠広)、熊本に着し、家老役に並河金右衛門(志摩)・下川又左衛門・加藤与左衛門・加藤清左衛門・加藤美作の五人を任ず。この日5人連署して誓書を呈す (続清正記 132)(事蹟)。

慶長18 (1613)

10. 1 藤堂高虎、肥後監国として目付牟礼勝成・小沢忠重を随行して出向す(徳実)(駿府)。 10 京都本圀寺日恒、本妙寺を九州惣本寺と認可す(本妙寺)。
- 13 清正の葬儀、京都本圀寺日恒僧正を大導師として営まれ、中尾山に葬る。(続清正記 132)(本妙寺伝は 100カ日に行うとあり、10月5日になる)。
11. 7 加藤平左衛門、本妙寺日真上人に清正の祈祷日を指示す(県中・本妙寺)。
是月 熊本城下総人口は 12,841人(家中共に)と記す(蘇山叢滴)。
12. 26 藤堂高虎、清正の遺物の深山の葉茶壺を本圀寺に寄進す(本圀寺)。
- 是年 宇土郡のキリスト教徒、清正の死を契機に教法を弘め、同郡船井村実興寺を破壊す。幕府これを鎮圧す(南蛮寺興廢記)。阿蘇山活動し、黒煙砂礫をあげる(肥国誌下 529)。玉名郡西安寺村の地撫帳作成さる(肥検帳)。清正の時の城代は、南関に加藤美作、内牧に加藤清左衛門(右馬允)、矢部に加藤萬兵衛、佐敷に加藤与左衛門、水俣に中村将監、宇土に中川太郎兵衛(豊後)、八代に田寺久太夫、熊本留守居に中川寿林・下川又左衛門、知行方萬奉行に中川周防・加藤平左衛門、一番備並川金右衛門、二番備吉村橘左衛門、三番備和田勝兵衛・成田弥兵衛・森本左近・庄林隼人・森本義太夫・飯田角兵衛・三宅角左衛門という(続清正記 130)(清正伝 554)。

慶長17 (1612) 壬子 (秀忠) 忠広 (注、以下の本文で忠広の名前を省くことあり)

1. 14 藤堂高虎、肥後の地図を携え、幕府報告のため上洛す。この日、駿府につく。翌日江戸に赴く(駿府)。
4. 2 忠広、襲封後始めて駿府に参勤す(駿府)(当代は4月1日とす)。
6. 6 忠広、秀忠に謁し、就封の暇を賜る。8日江戸出発(当代)(駿府)。 14 忠広、途中駿府にて家康に謁す(駿府)。忠広、肥後12郡519,600余石、豊後国内2万石、計54万石を宛行わる(県中・下川)。 27 幕府、忠広の五家老に下知状を下し、水俣・宇土・矢部 城を破却し、加藤正方を内牧より八代城代に、加藤万兵衛を内牧城代らと交替さす(徳実)(家忠日記増補)。
9. 20 藤崎宮神主能治以下3人、神主・神樂人9人の社人の冠・袍着用品について、兵藤右衛門大夫に申上ぐ(県中・藤崎宮)。 27 忠広、加藤右馬允の替地として八代郡10,650石余を宛行う(楓軒)。また深水太左衛門尉に八代郡松江村 300石を宛行う(県中・松島)。
- 閏10. 13 八代密柑を秀頼に送る(県中・下川)。 24 本妙寺日遙上人、清正の木像内に頓写の経巻を納む(本妙寺)。
11. 21 准如、親鸞聖人御影に贊をし、隈庄雲晴寺に送る(県中・雲晴寺)。 24 加藤平左衛門、本妙寺に 435石5斗を寄進す(県中・本妙寺)。
12. 12 禁裏・仙洞御所の普請を命ぜらる(実紀)。
- 是年 加藤重次、清正の追福のため佐敷に実照寺を建立す。開山は蓮光院日也(肥国誌下 408)。切支丹宗門制禁につき、村毎の人畜の吟味命ぜらる(古庄)。阿蘇郡二子石村の検地帳作成さる(肥検帳)。隈府西照寺、教善開基す(菊池)。新美八左衛門・小川監物、奉行にて矢部愛藤寺城を崩す(郷歴)。井手玄蕃允豊治、愛藤寺より矢部宮原に移住し、町立をす。宮原町、又は庄の町と称す。現矢部町なり(郷歴)。宇土・川尻・小川にて切支丹を穿鑿をし、迫害を行う(宗門史)。

慶長18 (1613) 癸丑 (秀忠) 忠広

2. 是月 將軍秀忠、蒲生秀行の女(家康外孫)を養女にし、忠広に配せんとす

(忠広)(御九族記)(野史)(浅野)。

3. 30 清正の遺領のことについて、家臣ら訴状を幕府に提出す(当代)(実紀)。
6. 22 阿蘇山噴火し、苦水沸騰し黒煙天を覆う(肥国誌下 529)。
12. 1 早速伊予守吉宗、肥後豊国大明神の祠官に任命さる(舜旧)。

是年 託麻郡竹宮下村、菊池郡高島村、益城郡広崎村、八代郡新牟田村ら検地帳作成さる(肥検帳)。

慶長19 (1614) 甲寅 (秀忠) 忠広

4. 4 忠広、重臣5人を伴い駿府にて家康に謁し、音信を呈す(実紀)。 8 幕府、江戸城石垣普請を西国大名に課す。この日、根石をすえる(当代)。 **是月** 忠広、江戸にて秀忠の養女(宗法院、振姫の女)と婚姻す(駿府)(忠広)。
5. 8 加藤正方、名代として婚姻を家康に謝す(駿府)。
7. 16 暴風洪水、仁田子村にて2軒流れ、下早川村小塚にて流溜る(氣)。
8. 20 幕府、阿部四郎五郎正之・朝比奈正重を肥後監国に任命す(実紀)。
10. 14 忠広、帰国の途次、浜松にて家康に謁す。家康、帰国のうえ戦備を調べ、後命を待つことを命ず(実紀)(駿府)。 19 西国大名に大坂出陣を命令す。細川忠興・加藤忠広、島津の出兵について出発する特命うく(実紀)(駿府)。 23 旧小西家臣宇土留守居南条元宅、清正に仕え(6,000石)、是日歿す。禅定寺に葬る(肥国誌上71)。 24 忠広、後事を下津樺安に託し、伏見を出発して帰国に向う(肥)(忠広所収幸田文書では是日なお江戸に滞在中。後考をまつ)。 27 細川忠興、徳川軍の動向を留守居下川又左衛門に報ず(忠広)。
11. 1 忠広、参陣せざるも部署を定めらる(実紀)。
12. 10 忠広、いまだ参陣せず(実紀)。 17 八代密柑5箱を献ず(実紀)。 20 東西の和議成立し、九州諸大名に帰国を命ぜらる(実紀)。

是年 阿蘇郡高森村の検地帳作成さる(肥検帳)。法華坂の本妙寺を中尾山の清正御廟所のもとに移す。現本妙寺なり(本妙寺)。

元和元 7.13改元 (1615) 乙卯 (秀忠) 忠広

1. 2 和平成立し、帰国命令が薩摩の島津に伝えられ、ついで細川・加藤らに報ぜらる(薩旧雑)。
2. 4 肥後監察使阿部正之・朝比奈正重、肥後に向う(実紀)。
3. 26 幕府、去年の江戸城普請の残工事の完成を忠広に命ず。忠広、浅野氏に援助を乞う(浅野)(忠広)。忠広夫人西下す(浅野)。
4. 4 幕府、戦斗準備を加藤・細川らに命じ、ついで加藤は島津に先行し、細川はその後方につき出陣することを命ず(実紀)。 19 幕府、小倉城主細川忠興に出陣を命ず(家記)。 28 忠興は水路東上し、子忠利は1万余人で陸路を東上す(家記)。
5. 8 大坂城落城し、豊臣氏滅ぶ(駿府)。 12 幕府、諸大名・代官に命じて大坂方の残党を追捕さす(家記)(駿府)。 21 西国・九州の諸大名、落城をきき、兵をかえし自ら来賀す(実紀)。 27 館林城主榊原康勝歿す。夫人古屋は清正の息女なり。後に阿部正澄に嫁す(清正伝 495)(駿府)(榊原系譜)。
6. 13 幕府、一国一城制をしく。南関・内牧・佐敷城を壊す。八代城は特例にて存置を許可さる(実紀)(事蹟は11月29日とす)。
7. 18 忠広、二条城にて将軍に謁す(駿府)(実紀)。 26 幕府、忠広に帰国を許

元和4 (1618)

可す(実紀)。

是年 大坂城落城につき、落人吟味仰出さる(古庄)。忠広家臣の内紛生ず。領内意見対立し、後年に及ぶことになる(忠広)。

元和2 (1616) 丙辰 (秀忠) 忠広

2. 2 阿部正之・朝比奈正重、肥後より駿府に帰着し、肥後の国情を報告す(実紀)。

3. 20 清正の儒僧清韓(方広寺鐘銘者)、投獄さる(実紀)。

4. 11 肥後の船員、大村領雪の浦で英国商館員と材木購入にて衝突し、ともに負傷す。のちに船員死亡す(忠広)(コックス日記)。

5. 26 忠広、英国船館員と争った者を処刑す(コックス日記)。 28 立花宗茂養母(立花鑑連後室)、熊本柳川小路にて歿す(旧柳川藩志上)(肥は是年におく)。

是月 本妙寺、中尾山に移建工事竣工し、遷佛会挙行さる(忠広)(本妙寺)。

是年 田方虫入、食糧不足す(氣)。釈誓甫、矢部浜村に真宗高福寺を開基す(郷歴)。

元和3 (1617) 丁巳 (秀忠) 忠広

1. 22 駿府城主徳川頼宣、清正の女あま姫を娶る。あま姫、秀吉朱印状や大身槍・片鎌槍らを徳川家に持参す(清正伝 523)(南紀徳川史)。

5. **是月** 清正の尊像出来る。日恒上人、像の背面に清正の諡号と遷化日を金泥にて書記し、廟所に安置す(忠広)(本妙寺)。

6. 24 加藤右馬允正方、内牧から浄信寺を八代郡麦島に移建し、是日入佛供養す(浄信寺)(肥国誌下 275)。

8. 29 忠広夫人の実母正清院、和歌山浅野長晟に再嫁し、この日歿す(浅野)(実紀)。

是年 藤原惺窩の弟子、のち忠広の侍読儒者那波道圓(活所)、和名類聚鈔を印刻す(忠広)。八代にてキリシタン迫害3回目行わる(宗門史)。

元和4 (1618) 戊午 (秀忠) 忠広

4. 19 この頃、忠広江戸参勤中(時慶)。 21 西洞院時慶、加藤忠広を訪問するも会えず、下津棒庵に会う(時慶)。

5. 7 椎葉山の旧地侍層の騒擾起る(求麻)。 11 忠広家臣内部の紛争激化す。馬方(加藤右馬允)、牛方(加藤美作)に二分す。下津棒庵、藤堂高虎を頼り訴状を提出し、美作父子・玉目丹波らの非違を訴う(史籍・忠広)(丙午雜記)。

6. 4 幕府、棒庵の訴状を受理す。是日忠広関係者の重臣に出府を命ず(県中・下川)。

7. 27 加藤美作父子、棒庵の訴状の内容と相違すること、棒庵退去の事情、下川又左衛門の私曲を幕府に答う(忠広)(丙午雜記)。 29 准如、上宮太子(聖徳太子)仏影に賛をし雲晴寺に送る(県中・雲晴寺)。 30 棒庵、自己の行動について訴う(丙午雜記)(忠広)。

8. 7 酒井雅楽頭邸にて、肥後目付阿部正之・朝比奈正重列席のうえ、双方を対決さす(丙午雜記)(忠広)(実紀)。 8 幕府、再び対決さすも是非を決しえず、將軍の裁可を求む(忠広)(丙午雜記)(実紀)。 11 將軍の裁決で、美作派の横江清四郎らを斬罪に、美作を越後村上に、その子丹後を信州川中島に、中川周防を信州諏訪に、玉目丹波を会津に配流す。忠広は幼少につき特赦す。国政は加藤右馬允らに執政さす(丙午雜記)(実紀)。

9. 6 忠広、伏見に着し、同 8 日帰国す (時慶)。

是年 渡辺図書宗綱・山田十太夫重利、幕命によって肥後に赴き、罪科を糾明す (事蹟)。5 月～8 月九州諸国旱魃、田方虫入、食糧不足す (気)。

元和 5 (1619) 己未 (秀忠) 忠広

3. 17 肥後大地震、麦島城崩壊す。幕府に請い、城地を徳洲に移す (肥国誌下 283)(忠広)。

7. 28 阿部正之ら、椎葉山一揆を討伐す。忠広助役を命ぜらる (実紀)(忠広)。

9. 30 幕府検使渡辺孫三郎歿す (実紀)。

12. 18 藤崎宮神楽役左衛門、虚言の行為につき追放さる (県中・藤崎宮)。

元和 6 (1620) 庚申 (秀忠) 忠広

1. 18 大坂城修築のため西国諸大名に軍役を課す。忠広・細川忠興ともに命をうく。忠広は大手門寄り総石垣・内曲輪を受持つ (実紀)。

3. 是月 阿蘇山苦水沸騰す (肥国誌下 529)。

5. 7 日遙上人の父余寿禧、日遙に本国帰還を熱望し朝鮮河東から書翰す (県中・本妙寺)。26 相良頼尚、従五位下壹岐守に叙任さる (求麻)。

10. 3 本妙寺日遙上人、本国朝鮮慶尚道の父母に返翰を認む (県中・本妙寺)。

11. 12 忠広、葡萄酒 2 壺を幕府に献ず (実紀)。

閏12. 是月 細川忠興、江戸邸にて病に伏す。隠居し三斎宗立と称す。忠利襲封す (実紀)。

是年 忠広、並川志摩・下川又左衛門ら重臣に加増す(清正伝 742)(加藤家御侍帳)。八代城代加藤右馬允、八代新城普請の材木を相良に求む。その後、返礼に芦北郡田浦を船場として提供す (忠広)。僧儒智院日収、肥後に来りて常光寺(妙永寺)に入る (先哲)。

元和 7 (1621) 辛酉 (秀忠) 忠広

1. 7 小倉城主細川忠興隠居につき、忠利が家督を相続す。399,000 石余なり(実紀)(家記)。この日忠利、江戸にのぼり秀忠に謝す (実紀)。

5. 是月 玉名郡行末塘洪水にて破損す。7 月迄普請す (古庄)。

6. 23 加藤右馬允の知行地、八代城取替えにつき、徳洲村から北村の内 671 石替地となる(楓軒)。加藤右馬允に 9,358 石を宛行(楓軒)。下川又左衛門に 2,914 石加増す (県中・下川)。

8. 3 蒲池弥平太に益城郡馬水村 262 石 4 斗を宛行(県中・蒲池)。大矢野嘉兵衛尉に玉名郡下長田村 258 石 7 斗余を宛行(県中・大矢野)。

8. 6 蒲池兵庫に益城郡中小路村 305 石、蒲池弥兵衛に馬水村 262 石 4 斗を宛行(県中・蒲池)。是月 上津浦六左衛門 (245 石)、栖本又七郎鎮弘 (250 石) に知行を宛行い、下川又左衛門の与力とす(天草譜)。

是年 飯田覚兵衛、天野民部少輔らの重臣に加増を行う。大洪水、民家流出す (気)。井手玄蕃允・同弟善大夫兄弟、大願主として小一領社を再興す。柳本より浜町に遷宮す。また男成一太夫家房、男成村より宮原(浜)町に移住す (郷歴)。

元和 8 (1622) 壬戌 (秀忠) 忠広

2. 7 江戸に参勤す (梅津)。是月 八代城新築竣工す。松江城又は徳洲城と称す。細工町・本町を移す。城代加藤正方なり。知行 20,016 石余、与力分 22,907 石余なり (事蹟)(忠広)。

寛永3 (1626)

4. 21 江戸城天守閣造営の普請役を命ぜらる(実紀)。 23 旧加藤重臣中川寿林、
鮑託郡河内村尾跡にて浪居中歿するという(肥国誌上 135)。

8. 18 山形城主最上源五郎改易につき、家臣野沢遠江、肥後に預けらる(実紀)。

元和9 (1623) 癸亥 (秀忠・家光) 忠広

6. 24 この頃、小倉領にての新銭売買は銭1貫に付き銀5両の定めであるが、領内
にては3両5分、7分で売買する(県近2-192)。

10. 18 嘉悦平馬に玉名郡川尻村・宇土郡井手田村 500石を加増宛行(県中・加
悦)。

是年 儒者那波道圓(活所)、忠広に仕ゆ。29才(郷演集)。

寛永元 (2. 30改元)(1624) 甲子 (家光) 忠広

1. 一 忠広、領内のキリシタンを厳しく穿鑿す(切支丹)。

7. 一 小倉細川忠利、大坂普請完了につき人数を帰国さす(県近3-567)。

9. 一 領内痘瘡流行す(史綜)。

10. 7 鏡生ルイス六右衛門とその家族、殉教をうく(宗門史)。

是年 唐船長崎入港につき、切支丹宗門厳禁の触れあり(古庄)。

寛永2 (1625) 乙丑 (家光) 忠広

1. 一 日遥上人、再び故国(朝鮮河東)の父に返翰を送る(県中・本妙寺)。

2. 10 小倉領にて侍共1,000石より下は在郷となる(県近2-194)。

3. 15 小倉領にて新銭を国中にて流通させるよう触る(県近2-149)。

6. 11 阿蘇西厳殿寺の紛擾起る(西厳殿寺)。 17 是夜 熊本地方大地震。熊本
城内も被害甚だしく煙硝倉もえる(忠広)。 22 清正の側室菊池氏(竹之丸)歿
す。浄光院妙選日栄(忠広)(本妙寺靈簿)。

12. 5 梶原助兵衛の忠節を追賞し、宇土郡栗崎村、益城郡釈迦堂村 600石を息子
三左衛門に加増す(加藤神社)。29 阿蘇神社々中の紛議あり。この日極楽坊を死
罪に処した旨を西厳殿寺に報ず(県中・西厳殿寺)。吉日 阿蘇衆徒20坊連署
し、行者中を糺明し、10ヶ寺を追放したこと、及び宝泉坊の悪行について申立つ
(県中・西厳殿寺)。

是年 宇土郡新開村の検地帳作成さる(肥検帳)。 常光寺落成す(先哲)。 宗善、

菊池郡西寺村正厳寺を開基す(菊池)。 日収上人、常光寺を修営す(忠広)。

著書目録 4 横田吉左衛門氏連覚書 諸家 横田吉左衛門氏連。是年 加来
家伝 史伝 加来三郎四郎維時

寛永3 (1626) 丙寅 (家光) 忠広

4. 9 清正の後室川尻殿(忠広生母)歿す。本覚院殿月心日圓大姉。本覚寺に
葬る(忠広)(本妙寺靈簿)。 22 本妙寺開山日真死去す。69歳(本妙寺)(忠広)
(一説62歳)。

6. 5 忠広、国の仕置きを下川又左衛門・加藤平左衛門の両者に託す(県中・下
川)。 6 下津捧庵、肥後炎天につき米高値であることを下川又左衛門に報
ず(県中・下川)。 20 忠広、秀忠に謁す(県中・下川)。 是月 前年より工
事中の菊池郡今村の井手竣工す(土木史)。

8. 4 小倉領8万石ほど日やけする(県近2-202)。 6 御水尾天皇の二条城
行幸に忠広供奉す(実紀)。 19 忠広、従四位下侍従に叙任さる(実紀)。 23
忠広、官位昇進を領内家中に伝達す(県中・下川)。

11. 28 忠広、密柑を献上す(実紀)。 著書目録 11 志水草加覚書 記録 志水草加

是年 阿蘇郡10ヶ村の検地帳、阿蘇郡12ヶ村の地撫帳、阿蘇郡乙宮村の名寄帳作成さる(肥検帳)。 5月～8月 旱魃飢饉(氣)。

寛永4 (1627) 丁卯 (家光) 忠広

5. 一 日取上人(妙永寺住職)、益城郡飯田山常楽寺の観音堂再興の翰縁文をつくる(忠広)(本妙寺)。

8. 2 大洪水、民家流出。是年の田方虫入・穂枯損は前例なし(氣)。 19 阿部正澄の室古屋(清正息女)死去す。本浄院殿妙智日昌大師。池上本門寺に葬る(忠広)(断家譜)(榊原系譜)。

9. 14 忠広、秀忠の茶会に招かる(実紀)。

11. 一 領内の布木綿1反を2丈6尺5寸に定む(県史・年表)。

12. 一 八代密柑を将軍に献ず(実紀)。

是年 阿蘇郡3ヶ村の検地帳作成さる(肥検帳)。九州に痘瘡流行す(肥)。日取上人、那波道圓を介して林羅山に布袋の賛を乞う(羅山文集)(忠広)。

寛永5 (1628) 戊辰 (家光) 忠広

3. 11 幕府、忠広の就封謝礼の贈物に謝す(実紀)。 15 忠広、鶴を献ず(実紀)。

是月 熊本坪井竹屋町から出火し、1,200余軒を焼く(県史・年表)。

8. 15 井村彦左衛門、益城郡耆町村の亡父跡 700石余を宛行わる(県中・市立博物館)。

9. 13 天草吉兵衛、八代郡3ヶ村の亡父跡 300石を宛行わる(県中・天草)。

10. 22 江戸に参勤し、秀忠より茶会の接待をうく(梅津)。

11. 9 山城伏見の屋敷焼亡す(時慶)。 18 幕府、江戸城石垣普請を諸大名に課す。忠広は浅野長晟と共に和田倉・櫻田門の間に普請す(実紀)(忠広)。

是年 益城郡中牟田村新田開帳、下益城郡糸石村の地撫帳作成さる(肥検帳)。

著書目録 4. 8 御供日記 歌文 久野正頼

寛永6 (1629) 己巳 (家光) 忠広

2. 9 人吉の武芸者、神陰流達人丸目鉄斎歿す(求麻)。

10. 22 秀忠の茶会に招かる(実紀)。

11. 15 加藤正方(八代城代)、片岡兵左衛門に八代郡大野村出目分と吉本村 130石を宛行う(忠広)(片岡)。

是年 忠広の江戸普請出人数、家中2,895人鉄砲者1,124人加子518人ら計5,266人、その他に侍頭分125人ら、総計6,575人なり(神雑 178)(県近 2 - 639)。 著書目録 諫言の覚 法制 田中左兵衛

寛永7 (1630) 庚午 (家光) 忠広

1. 25 この頃八代城代加藤右馬允(家老)、沢庵に茶壺を送る(沢庵)。

3. 12 鶴を献上す。幕府これを謝す(実紀)。

6. 1 江戸参勤、登城す(梅津)。

8. 28 加藤正方、浄真寺に供養料50石の墾田を寄進す(県中・浄真寺)。

10. 4 秀忠の西丸の茶会に招かる(実紀)。

12. 一 八代密柑を献ず(実紀)。 忠広の長子虎松(又は虎之助)、元服して将軍に初見す。将軍、松平の称号・偏諱を与う。豊後守光広(又は光正)と称す。従五

寛永 9 (1623)

位下に叙せらる (忠広)(実紀)(県中・藤崎宮)。

是年 宇土郡鶴見塚村の地撫帳作成さる (肥検帳)。

寛永 8 (1631) 辛未 (家光) 忠広

1. 21 秀忠の茶会に招かる (実紀)。 是月 忠広、広福寺に十六羅漢の唐画を寄進す (忠広)(広福寺)。
2. 3 秀忠の茶会に招かる (実紀)。 9 清浄院 (清正の正室)、時服を献ず (実紀)。 14 藤崎八幡宮神主三郎丸能治、忠広の長子虎松の元服を祝す (県中・藤崎)。 是月 八代城竣工し、加藤正方城代となる (事蹟)。
3. 23 秀忠より雁を賜う (実紀)。
4. 11 秀忠より雁を賜う (実紀)。
5. 19 下津捧庵歿す (肥)。
6. 29 鮎酢一箱賜る (実紀)。
8. 14 肥後・筑前・筑後大風 (氣)。 是月 加藤正方、八代浄真寺に梵鐘を寄進す。鐘銘は京都寿福寺乾門和尚 (忠広)(浄真寺興起録)。

関 8. 23 板倉周防守、肥後守忠広内儀の江戸上洛のお供をねぎらう書状を小代下総守に認む (県中・小代)。

11. — 阿蘇山噴火の苦水溢れ出で、その下流熱湯の如し (肥国誌下 529)。
12. 6 將軍より八代蜜柑を紀州家に遣す (実紀)。 9 西の丸より八代蜜柑を紀州邸に遣す (実紀)。 12 八代蜜柑を献ず (実紀)。

是年 柏原太郎左衛門、末次弥兵衛とともに高砂に渡海し、商品を購入す。のちオランダ商館員と衝突する原因となる (柏原旧記)。隈府妙蓮寺、元立院日圓開基す。本妙寺の末となる (菊池)。求麻市房社を改造す (求麻)。(是年力) 那波道圓活所、仕官を辞す (肥)(郷史演は寛永7年とす)。

寛永 9 (1632) 壬申 (家光) 忠広 細川忠利

1. 7 森本右近太夫一房、アンコールワットに参詣し、仏像4体を造立す (アンコールワット寺院)(忠広)(甲子夜話)(一説は20日とす)。 14 鶴を賜う (実紀)。 27 秀忠薨去につき登城す。帰国を許さる (実紀)。
2. 6 秀忠の遺物を忠広の室に賜う。また翌日忠広に銀5,000枚を賜う (実紀)。
4. 10 忠広の子光正の家臣、土井利勝謀叛の由を触る廻る。光正嫌疑をうく (実紀)(忠広)(藩翰譜)。 15 光正の家臣前田五郎八を獄につなぐ (実紀)。
5. 22 幕府、忠広の参勤入府を途中にて留め、江戸池上本門寺に待たしむ (実紀)。 26 家光、徳川頼宣を召し、忠広処分を協議す (実紀)。 是月 男成家房・矢部平兵衛、雨乞祈願す (郷歴)。
6. 1 忠広、改易処分となる (実紀)(忠広)(家記)(史綜は5月29日とす)。忠広父子の罪状、諸大名に通達さる。忠広は出羽庄内に、光正は飛騨高山に、息子正良は上州沼田に流さる。忠広の生母正応院、正良の生母法乗院は、ともにその子に従うことになる (実紀)。 2 將軍、紀州徳川頼宣らを召し密議す (実紀)。幕府、秋山正重・石川勝政を肥後目付に任命し赴任さす (実紀)。 3 稻葉正勝、肥後の上使に命ぜられる (実紀)。幕府、内藤政長・石川忠総・稻葉丹後・伊丹康勝らを肥後に派遣し、城の請取り、その他の仕置を行わす (実紀)。加藤家改易につき陣屋用意との奉書、細川家に到着す (本)。 4 幕府、九州の諸大名に肥後国への出向を命ず。有馬直純、熊本城在番のため暇を賜う (実紀)。

- 6 幕府、肥後に使番朝倉在重・目付曾我古祐を派遣するように命ず(実紀)。
- 12 肥後派遣の上使衆、暇を賜る(実紀)。
- 13 肥後の兵糧米銀 100匁につき 4 石の高値になる。加藤家の侍と妻子がなお知行所にある由、細川家に報告さる(県近 1 - 108)。
- 14 細川家の陣触れ出さる(本)。
- 15 男成社の祭礼、笹踊始る(郷歴)。
- 水野勝俊、肥後国御使に命ぜられ暇を賜う(実紀)。
- この頃加藤家臣、武具・馬を売却し、頭をそり、立退くの躰であること、兵糧・玉薬など 5 つの蔵に納入されていること、肥後国帳を仕替えている様子であることら、細川家に報告さる(県近 1 - 111)。
- 16 幕府、肥後出向の上使衆に令状を授く(実紀)。
- 細川忠利、幕府老中酒井雅楽頭・土井大炊頭に、加藤忠広の改易の原因が子息豊後守の不屈の行為、江戸生れの子と母の勝手帰国によるものであることを了承した返書を送る(県近 1 - 109)。
- 18 忠広、是日に生母正応院らとともに出羽庄内に着く(忠広)。
- 19 光正、飛驒高山にて浄池院殿清正の霊牌を新造して供養す(忠広)。
- 是月 幕府、加藤忠広に改易の理由について十一ヶ条を示す。廻文のこと、次男を隠し置いた、参勤しなかったこと、忌日に鷹狩をしたこと、立田豊国社への参詣のこと、山伏の追放、片鎌鍬の振舞い、家臣の追放らを原因とす(田口)(忠広改易覚)。
7. 12 江戸の忠広旧邸、井伊直孝に与えらる(実紀)。
- 細川忠利、加藤左馬丞に熊本城請取りの上使衆 12,300 人が小倉に到着した由を報告す(県中・下川)(本)。
- 引原加賀守、肥後表は高百石まで馬乗り上洛ある由の噂があることを青村隼人佐宛に書状す(県中・新納)。
- 加藤右馬允、本成寺へ畠 5 反 8 畝余寄進す(県中・宗覚寺)。
- 22 上使、熊本・八代両城を請取る(実紀)(本)。
- 23 細川忠利、上使衆入国にそなへ、肥後国内の兵糧・馬飼い・沓わらじ・薪・糠が不足しないように調達することを命令す(県中・下川)。
- 25 石原二郎左衛門、細川家大坂蔵本商人木屋理右衛門の非法を訴う(神雑 69)。
- 是月 幕府老中より肥後の仕置九ヶ条を令す。領民の移住禁止、人売買の禁止、竹木伐採の禁止、押買狼籍の禁止、欠落百姓の取締り、未進による男女の棄破らを規定す(部・国郡)。
- 志岐小左衛門、八代城を去り志岐村に転住す(天草譜)。
8. 3 熊本城請取りの注進、幕府に届く(実紀)。
- 石川忠総、忠広内衆の道休を益城郡隈庄におくことを許可す(県中・雲晴寺)。
- 10 上使衆隣国へ下向す(県近 1 - 50)。
- 12 上使衆、熊本に制札を出す(県近 3 - 461)。
- 夏 細川藩の人積数、武具役付けを決定す(神雑 64)。
9. 1 稲葉正勝・伊丹康勝、肥後より帰府す(実紀)。
- 4 内藤政長・同忠興・同政長、肥後より帰府す(実紀)。
- 6 細川忠利、城請取りのための覚書九ヶ条を出す。松井佐渡・長岡監物・有吉頼母を派遣することに決定す(部・国郡)。
- 9 浜町小一領社、笹踊始る(郷歴)。
- 是月 常光寺焼亡す(先哲)。
10. 3 細川忠利、参勤のため江戸に着く(本)。
- 4 細川忠利、肥後転封を命ぜらる。肥後 12 郡 519,000 余石、豊後 3 郡 2 万余石(官職には 8 月 4 日の將軍判物を掲載す)(本)。
- 三斎(忠興)、登城し謝礼す(実紀)。
- 8 忠利、謝礼のために登城す(実紀)。
- 11 忠利、就封の暇を賜る(寛政)(実紀)。
- 12 忠利江戸を発し、肥後に向う(実紀)(本は 10 月 15 日とす)。
- 14 三斎、帰国の暇を仰出さる(実紀)(本)。
- 16 三斎、江戸を出発す(本)。
- 幕府老中、上使衆にあて国替についての法度書五ヶ条を令す(部・国郡)。

11. 9 山内忠義の用船と忠利の用船、大坂で衝突す(史綜)。 11 忠利、小倉着(本)。 14 三斎、中津着(本)。 16 大坂商人あかねや次郎兵衛、寛永3年大坂普請時の引負い分の処理について藩に申上ぐ(神雑67)。 18 能勢頼安・諸星盛政、肥後より帰着し幕府に参上す(実紀)。 23 江戸普請のため船の廻船方を令す(県近3-609)。 25 新小倉藩主小笠原右近大夫、忠利に豊前町人らの居残りを懇願す(部・国郡)。 27 小笠原備前ら10名、郡奉行に任命さる(郡文)。 是月 在々に居住する小身成る浦番衆について、年貢の不提出を許可す(花奉)。

12. 6 忠利、小倉を出発す(本)。 8 忠利、小倉城の引渡しを完了す(本)。 9 忠利、熊本城に入る(本)(部・国郡)。 忠利、領内の国中庄屋に年貢免、人身売買、国の仕置の三ヶ条を令す(県中・馬場)(郡文)。 16 三斎鶴崎を出発す(本)。 18 本丸にて家中・寺社・農商の礼をうく(本)。 20 三斎熊本入城、川尻御茶屋に宿泊す(綿考)。 21 三斎、川尻より城内の桧垣塔を蓮台寺に返却するよう命ず(県中・鳥井)(拾集)。 22 三斎、八代に着く(本)。 25 高瀬町・高橋町の治安や商売・女出入ら、九ヶ条の條々を下す(郡文)。 三斎、立允(立孝)とともに八代入城(本)。 肥後国郡高目録及び郡奉行名、惣郡奉行に提出さる(郡文)。 27 幕府、入国について天主米の請取りと口米の不徴収を指示す(部・国郡)。 29 江戸上屋敷焼亡(寛政)。 是月 忠利、明年正月まで諸事先代通りと命じ、城下屋敷割りを定め、家中へ屋敷渡しを行う(部・屋敷)。 鉄砲衆召抱えについて、来春より行うことに決定す(花奉)。 八代高田御留山の木を切取し者の処罰を行う(林制1)。 豊前国修験袈裟頭養盛法印来住し、熊本仙勝院を開基す。細川家代々の祈禱所となる。(肥国誌上67)。

是年 八代密柑を献ず。これより毎年常例となる(本)。 陶工上野喜蔵に八代郡高田郷豊原村の地を与え、陶器を製せしむ(肥国誌下248)。 長兵衛、藩政について、免帳の一郡切、惣庄屋給、麦年貢の返却らについて、覚書十二ヶ条を記す(部・国郡)。 男女売買について、譜代の規定、曲事人の成敗者の妻子・下人の規定ら八ヶ条を下す(部・国郡)。 忠利、私の御用の覚書として、惣庄の移動、武具の移動、金山の処理らについて記す(部・国郡)。 男成家房、阿蘇家没落以後退転の郷中祭礼を復活す(郷歴)。 国内道筋改帳らの一切の改め行わる(古庄)。 宇土郡郡浦村・菊池郡高島村・阿蘇郡村山村ら、6ヶ村の検地帳作成さる(肥検帳)。 加藤家臣山川兵藤太郎、天草大島子村に帰住し、僧となり、教徳と改名し、一向宗西派専念寺を開基す(天草譜)。 老中は長岡興長・有吉英貴・長岡是秀、奉行は浅山修理・田中兵庫・横山助進・佐藤右衛門・西郡刑部(本)。 入国当初に田中兵庫・宗像清兵衛・牧丞太夫3名を国惣奉行に任命し、郡方を担当し、各郡奉行を指揮す(本)(藩法・井田365)。

寛永10 (1633) 癸酉(家光) 忠利 (注、以下本文中で忠利の名を略すことあり)

1. 1 本丸にて年頭の賀を受く(本)。 3 旧加藤忠広の給人知の調査、八代郡・益城郡間の堤の調査、切米の割渡しを命ず(部・国郡)。 7 川尻若宮社家衆の手作400石分の郡役を赦免す(川尻史401)。 また300石を寄進し(天明村誌249)、風流田免地を与う(川尻史539)。 藤崎宮に社参し(本)、宮田村100石を寄進す(県中・藤崎宮)。 阿蘇郡に神領989石を寄進す(阿蘇)。
- 8 御城御札の節の心得、並びに仲間・小者の抱方を定む(本)。 10 日乾、本

の加子人別改めを命ず(郡文)。 23 田中兵庫、宗像清兵衛に人畜改帳の作成を命ず(郡文)(奉書)。 川口出物の米・豆・大麦・小麦・小豆・粟・そば・ひえ・きびの切手制、柴・薪・材木らの出切手制、相良領の米雑穀の川口留めの禁止令を出す(郡文)。 高物成、田地の上中下の位盛、小物成の書付に判をし、庄屋までの提示を百姓に命ず(郡文)。 是月 藤崎宮神主行藤宗俊、由緒書を藩に提出す(県中・藤崎宮)。 長岡監物へ3,500石加増す。都合2万石なり(本)。

2. 5 公儀法度守り方並びに出会の節の心得方ら定まる。また家督跡目相続決まる(本)。 郡中にキリシタン宗門改め、知行所の人夫使用、百姓走込みの処理、先代の非道についての目安箱への投書ら、六ヶ条を申達す(藩法・井田 173)。郡中に六ヶ条を令す。切支丹嚴禁、公儀・父子様上洛への人馬出達、給人知の夫役使用期間、百姓走込みの給知蔵納地別の規定、先代の非道政策の目安訴えらを規定す(藩法・井田 173)。 10 忠利、道服・泥障を將軍に献ず(実紀)。奉公人抱えの給分を定む(本)。 八代郡・芦北郡より奉公人を調達すること、また奉公人帳を作成することを命ず(部・国郡)。 11 荒起しについて、八代郡より百石に1人の夫役を川せき普請に徴発す(部・国郡)。 酒・糶・馬・塩らの札(8札)及びかき・みかん・くねんぼ・栗らの運上徴収を赦免す(郡文)。相良領より出す米について、出切手を申し付ることにす(県近2—342)。 15 三斎、巻物を將軍に献ず(実紀)。 18 忠利、六丸宛に現在迄処分者1人もないことを報告す(部・国郡)。 19 忠利、本丸修覆のため花畑館に移る(本)。
- 22 伊藤祐慶ら、肥後在番を終え帰謁す(実紀)。 23 隠田・新地物成、たね米の妙寺に加藤忠広の改易は信心の退転によると書状す(県中・本妙寺)。 11 去年の火災により、幕府より造作の費用銀300貫匁を受く(実紀)。 13 忠利、入国始めて八代に赴く(本)。 15 沢村大学、丹後より参る職人の覚書を提出し、八代への同道の有無を問う(県中・徳本)。 19 藤崎八幡宮・祭次第を藩に提出す(県中・藤崎宮)。 22 先代の時の舟の数、加子数の届出をさせ、後日利、夫米、口米の一部らの4,000石は、物成に入れないことに決る(郡文)。
- 24 波多中庵に、本丸数寄屋か横目衆屋敷のうち、いずれかの希望地を附与す(部・国郡)。
- 25 郡奉行26名を任命す(郡文)。 27 郡々の奉公人の調査書の提出を求む(郡文)。 29 駿河大納言忠長の重臣伊藤権兵衛を預かる(本)(寛政は2月18日とす)。 5月より検地を始めること、舟の運賃9分と地舟賃1割3分の規定を令す(郡分)。 是月 郡政について種々仰出さる(諸拔)。 酒・糶・馬・塩・小間物ら13品目の商売は、商札をもって許可す(郡文)。
3. 1 駄賃・宿賃について川尻町へ、触と制札を出す(部・雑事)(神雑 123)。 3 忠利、八代に赴く。公私の普請や軍役らの協議をす。それより芦北地方を巡視す(本)。 4 火事の時の駆付けの式定まる(本)。 6 田畑売買の取締りを命ず(藩法・井田 173)。 8 忠利、芦北を巡視し熊本に帰城す(本)。 12 井樋の板材木の仕置きを命ず。毎日人足2,450人の提出を命ず(部・国郡)。 19 忠利領内を巡視す(藩探)。 榊原飛驒守、領内仕置についての施策、検地の処理、新参者の抱え方、旧国侍庄林隼人・出田宮内の抱えについて指示を与う(部・国郡)。 23 道中心得、中間・小者心得について仰出さる(本)。 田浦村の牢

人の合力米50石の請取り方法を自身の切手請取りにす(神雑 229)。 24 榊原飛驒守より、仕置き、物成、麦作について指示をうく(部・国郡)。 忠利、有馬左衛門宛に成敗者が1人もないこと、隠田摘発を百姓許可で行なっていること、知行割を9月に行うことらを報告す(部・国郡)。 28 領内の加子・船数の調査をし、覚書を提出す。船頭・加子総数 4,687人、船数 350艘なり(神雑67)。 是月 旧国侍城武房(宮内少輔)、先知の如く宛行わる(事蹟)。 加藤忠広の伏見邸を宇治に移す(実紀)。

4. 6 有馬左衛門、益城郡鯉村藤右衛門の火罪、志々水村稻盗人の処分らの指示を与う(部・国郡)。 7 海手・河手・綿・漆・茶・楮、その他の上納を先代の半額とし、鉄炮札を従来の三分の二とし、庄屋の筆紙墨料を定め、その他目安の事、還住者の取り扱いらの規定を定む(藩法・井田 174)(本)。 先代の蔵納分の高付け、給人知高の書付の提出を命ず(郡文)。 8 家中の子供の御目見えは五節句以外は無用とす(本)。 地撫しの内検を領内に通達す。一村切に上中下5段位とす(郡文)。 14 慶長5年より寛永9年迄、芦北郡田浦村百姓で薩摩への逃亡者、百姓人数男女合 234人、牛馬42疋の取調帳を藩に提出す(神雑61)。 八代・芦北郡の小物成を改め、半分を赦免す(郡文)。 芦北の代官を2人とす(郡文)。 22 芦北郡水俣村鉄炮持ちの書上げをなす。水俣 114丁、津奈木 22丁、久木野 17丁、計 153丁なり(神雑61)。 27 南関立神惣右衛門、国境の状況について申上覚を提出す(神雑51)。 29 かな釘町(鹿子木)の地子、3間口に15間分まで赦免す。新町を立てた者も同様の間口にて3年間地子免除とす(郡文)。 是月 家中侍の衣類は紬・木綿と定めらる(本)。 在々牢人に起誓文を書かす。また不作の牢人は在郷に入るを禁じ、慥なるものは町におくことを命ず(県史料・肥後)。
5. 1 肥後守代の先納の米目録を提出す。米 33,625石、小物成綿17貫 825匁余、漆31貫 428匁 1分らなり(部・国郡)。 7 検地の規定を出す(郡文)。 10 切支丹宗門改めを命ず(本)。 27 切支丹改めにつき屋さがしをし、町人は10人宛に書物をし影踏せて行(切支丹)。 17 芦北郡の人畜改帳作成さる(芦北人畜帳)。 是月 惣庄屋任命され、知行・扶持米をうく(家譜)(郡文)。
6. 30 広福寺領山林に竿入れ行なわれ、寺領の証文の提出を求む(県中・広福寺)。 是月 豊前より泰勝院を仮に千葉城に、泰厳寺を八代平瓦町に移す(本)(藩探)。
7. 1 5月1日より大庄屋・小庄屋に脇差の帯刀を許可す(藩法・井田 180)(本)。 2 忠利、弟立允(立孝)に3万石、同天千代(興孝)に25,000石を内分す(本)。 16 加藤光正、飛驒高山にて歿す(実紀)(忠広)。 21 小川の町立、堅志田町の市立、川尻町のつづき町立を許可す(郡文)。 是月 長岡頼母助に3,500石加増、都合8,500石となる(本)。 加藤右馬允の旧臣西山宗因、肥後を離れ上洛す。10月14日京都着(忠広)(飛鳥川)。
8. 3 人足1,000人を抱え、あれ池井手の普請を命ず(郡文)。 7 開き牢人の有りつきを命ず(県近 2 - 292)。 14 国中の五千石夫を八代に17,8人割当つ(部・国郡)。 16 給人の永荒開は3年間役免除、畠の田地替は免除とす(郡文)。 浦手の田畑役儀として井手普請・道普請を命ず(藩法・井田 175)(郡文)。 18 奉行所役浅山修理や国惣奉行ら、奉行役の知行高・姓名の名簿出来る(県近 2 - 292)。 先代の種借米、借付大麦、借付銀の目録を提出さす(郡文)。

- 21 召使人足への兵糧・墨・紙・筆・油代の郡割当、山札の目録提出を郡奉行に命ず(藩法・井田 175)。各郡の代官決る(郡文)。22 玉名郡蔵納高36,000石、物成24,948石の目録提出さる(郡文)。是月 郡中の役儀・兵糧について規定す(本)(竹会記)。飽田・託麻郡を除き、代官41名を任命す。また国中所々の町奉行8名を任命す(郡文)。
9. 1 家臣に知行安堵をす。蒲池清右衛門に益城郡 300石(県中・蒲池)、本妙寺に 300石(県中・本妙寺)、庄林隼人に飽田・益城郡に6,300石(県中・庄林)、筑紫左近に下益城郡 700石(県中・筑紫)を宛行う。2 仲間・小者の給分について重ねて令す(本)。6 六丸(光尚)と婚約の彌々姫、八代を出発す(本)。9 益城郡百姓 146人、検地、土免、夫役ら五ヶ条にわたり、先代加藤政治を批判する書上げを目安箱に入れ、藩に訴う(県史料・肥後)。長岡頼母に本姓有吉を以後称せしむ(肥)。10 子供なき者の家中の跡目について規定す(県近2-404)。12 忠利熊本発、途中阿蘇社参、江戸証人として米田新十郎を召連る(本)。16 走り者の節、御番の面々定めらる(本)。是月 九州巡検使小出対馬守ら藩内を巡視す(実紀)(綿考)(本)。
10. 13 忠利参勤す(実紀)。19 忠利に鷹を賜う(実紀)。30 芦北郡の舟20艘余を河尻に廻送さす(徳富)。
11. 15 八代に鉄炮 200丁、馬乗り30騎を添えて派遣す(部・国郡)。
12. 24 国中に目安上げを許可す(妙解君遺事)。肥後米の値段を 100匁に付き 4石と定め、商人に購入さす(部・国郡)。
- 是年 蔵納 332,112石余、土物成 154,697石余、免4ツ 699、給知高 408,528石(肥)(東臯雜記と度支彙函は蔵納 332,112石、給知 419,718石7斗とす)。検地始る(肥検帳)。旧加藤家臣松下市之進これに当る(肥)。阿蘇郡片俣村、玉名郡大浜村の検地帳、山鹿郡古閑村名寄帳、玉名郡2村、山鹿郡3村、菊池郡1村、阿蘇郡2村、八代郡上松求麻村の地撫帳、益城郡上島組他1村の田畑撫竿帳、阿蘇郡芹口村他1村の屋敷間数帳作成さる(肥検帳)。領内人畜帳作成さる。宇土郡4冊、玉名郡12冊、山鹿郡4冊、菊池郡2冊、合志郡 142冊、阿蘇郡65冊、益城郡12冊、八代郡5冊、芦北郡1冊、大分郡24冊、海部郡10冊、直入郡2冊が明治期まで保存さる(肥検帳)(大日本近世史料・肥後藩人畜帳5冊)。人口は 203,678人とす(藩法・井田 364)。八代の住居替え、蔵の造築、小屋作りの普請行わる(部・国郡)。鯉村惣庄屋、吉例により新米献上す(肥)。出町構外に町家出来る(肥)。有吉頼母佐、豊前高田以来の所持手船差上ぐ(本)。

寛永11 (1634) 甲戌(家光) 忠利

1. 8 芦北郡に竹束 300束、翌9日明倭2,300倭の提出を命ず(徳富)。15 旧国侍城武房(宮内少輔)歿す(事蹟)。是月 原賀村(腹赤)百姓ら、切支丹宗門、かり出奉公人、男女奉公人の禁止、年貢納入、諸出銀の納付、廻状の伝達の十一ヶ条の覚書に連判を押す(古庄)。
2. 18 忠利登城し、將軍に謁す(実紀)。23 將軍上洛に付き鳥羽固めを命ぜられ、国元より長柄 200本の伏見輸送を命ず(奉書)。28 忠利再謁す(実紀)。
3. 5 殿中番衆に法度書仰出さる(県近3-451)。駿河大納言忠長の家臣稲葉内記を預る(寛政)。8 六丸(光尚)、彌々姫と婚姻す(本)。9 忠利、將軍の茶会に招かる(実紀)。27 輕輩への衣服法度出さる(県近3-457)。

是月 稻葉内匠預けらる (本)。

4. 11 幕府より熊本城櫓塀の破損修理に付き許可さる (神雜46)。 12 公方上洛につき、長刀と平戸渡りの猩々皮を献上す (県近 1 - 126)。 14 熊本城の塀・矢倉修理、並びに二の丸、三の丸の修理許可さる (本)(部・城郭)。
 5. 9 忠利、江戸出発す。途中有馬にて湯治す(本)。 21 芦北郡大庄屋の屋敷高について帳作成を命ず (徳富)。 27 芦北郡の牧より 3~4 才の駒 4 匹を徴発す (県近 2 - 176)。 29 三斎、八代を發し京都に向う (本)。
 6. 9 芦北郡の領民統制として、代官・郡代見舞いの禁止らについて規定す (徳富)。 12 忠利京都に到着す (本)。 20 三斎京都に到着す (本)。 23 堺にて10匁玉鉄炮 100丁の買入れ、国元より玉薬・火縄らの上方輸送を命ず(奉書)。 28 伴天連いるまん訴人に始めて褒美銀制をしく (部・類族)。
 7. 19 家光参内につき、諸大名二条城に会す (実紀)。 20 忠利、三斎と共に將軍に謁す (実紀)。
- 閏7. 5 切支丹の訴人 100人余も出る(切支丹)。 7 郡中の法令制定さる。小物成は半分となる (藩法・井田 176)。 18 家光、在京の九州・西国大名に帰国の暇を給う (実紀)。 29 三斎・忠利ともに帰国の暇あり (本)。 是月 忠利、領内に減税す (実紀)。
8. 1 忠利京都を發す (本)。 3 三斎京都を發す (本)。 4 肥後・豊後54万石の判物を拝領す(本)。 13 忠利熊本に到着す (本)。 14 三斎八代に到着す (本)。 15 忠利、花畑館より熊本城にかえる (本)(藩採)。 20 泰勝院25回忌行わる (本)。 牢者の赦免あり (本)。 是月 芦北郡小庄屋百姓ら、年貢納入前の木綿雜穀の売買禁止、走人の届出、浦舟売買の勝手禁止、他国商人の出入の禁止ら、十五ヶ条について請書を提出す (徳富)。
 9. 5 浦手の扶持米規定さる (藩法・井田 176)(本)。 浦高37,616石余、水夫 3,000人と規定す (拾芥)。 河尻水夫、1日に2人扶持下さる(藩法・井田 176)。 11 惣庄屋横手又右衛門、藩よりの借銀400匁の返済について、百姓迷惑の由を申上る。同嶋崎二郎介も申出る。(郡文)。 12 鶴崎に金銀の予備金をおく (神雜82)。 16 長崎奉行の上使2名、切支丹容疑の検索のために 玉名郡湯倉 (伊倉力) に来る (切支丹)。 17 將軍日光社参について、道服・泥障 献上す (県近 1 - 130)。 18 芦北惣庄屋9人に、芋の払い、郡筒 390丁の他に、300人の仕立方、物成の10月納入を命ず (徳富)。 23 この頃から切支丹の穿鑿に影踏みを一般的に使用す (切支丹)。 25 八代密柑を院御所並びに国母様に献上す (藩採)。 是月 忠利領内を巡視す (本)。 またこの頃切支丹の穿鑿を自ら行う (切支丹)。
 10. 2 郡奉行に開田地、土免の方法、地侍の抱え方について、直印をもって命令す。一領一正の名称始まる (藩法・井田 177)(郡文)。 12 芦北・八代地方にて切支丹囚人4人を引廻す (徳富)。 18 家中奉公人百姓らの人構いの儀仰出さる (本)。 24 軍役の無役高について覚書を差出す。御供衆72,885石、無役 71,361石余ら合計 272,896石余となる (神雜 202)。 長岡佐渡守以下の軍役総高 184,602石なり (神雜 104)。 是月 種山久右衛門殿御手永と、手永の名称始めてみられる (徳富)。 熊本町商人は町奉行より札を渡し、在郷商人には郡奉行より札を出すことを規定す (奉書)。

11. 1 来々年の江戸普請仰付けらる(県近 3— 566)。普請に出ざる者 125人を提出す(神雑 229)。 2 切支丹の大蔵・新蔵・雲斎・道作の4人を長六橋河原にて処刑す(奉書)。 4 矢部南田・長田両村争論の首謀百姓を処刑す(城南史 323)。江戸普請役人数 3,848人 3分余となる(神雑 211)。 9 江戸普請の役高283,739石8斗、3,848人余と決定す(神雑44)(県近 3— 689)。 10 所領の郷村高を先代の書付をもとに幕府に提出す。肥後国 519,893石415・945ヶ村、豊後国20,108石 585・63ヶ村、合計 541,169石 524なり(県史料・郷村帳・藩法・井田衍義 380)(本)(県史料・郷村帳は8日付)(御郡方一卷は8月15日付届書の控あり)。 18 幕府、天下の政治につき忠利に問う。是日これに答う(家譜)。 28 普請道具綱罫 5,000貫、人数 6,000人分の道具らを書上ぐ(神雑46)。 30 金山の採掘者を集むことを命ず(奉書)。是月 江戸城修築の助役の命あり。伊豆国石場へ石切出のため役人を派遣す(家譜続)。切支丹の理由で、益城郡永田村善兵衛ら5人を長六橋河原にて処刑す(奉書)。
12. 1 江戸普請についての法度定め、石切場の法度について、家中に令す(県近 3— 603)。 3 八代郡百姓にさらに種子米 479石余(元利共)を貸付く(郡文)。 4 芦北郡の牢人衆・無高者から郡中3,40人位を地侍に仕立て書上げのことを命ず(徳富)。 6 来々年の江戸普請の役儀について、留守居衆は百石に7分半役、本役は百石に5分役に決定す(神雑 195)。 8 牢人衆の開発は開取りにすること、鷹の餌犬渡しを郡中より1人抱えるように各郡に命ず(徳富)。牢人衆の在村定住、及び惣庄屋・小庄屋の奉公帳の提出を命ず(徳富)。 10 細川立允(立孝)、八代で五条中納言息女と婚礼行わる(本)。町奉行は吉田1人とし、河喜多は牧の代りに国惣奉行となる(奉書)。国惣奉行牧壺太夫・宗像清兵衛罷免さる(奉書)。 11 関所の召抱1,000人の鉄砲衆に奉行をつけおくこと。古作の所にも50, 30人と一緒に配置しておくよう命ず(奉書)。 12 死牛馬とその皮について規定す(藩法・井田 177)。道幅・畦幅の制を定め、村毎に掟札を建てる(拾芥)。六丸(光尚)痘瘡にかかる(本)。幕府に八代蜜柑を献上す(実紀)。京町に外郭を空堀とし、大土居を築き、並木に松を植えるために縄張りす(肥)。年頭の登城行列を改正す(度譜)。大坂屋敷を求む(度譜)。泰寿院娘を三斎の猶子とす(度譜)。阿蘇5,000石、竹の宮2,000石、計7,000石を郡侍に宛つ(奉書)。 18 郡奉行は馬廻組に加えることを規定す(奉書)。 20 芦北郡地侍210人のうち、正月目見の地侍、佐敷の蔵本藤左衛門以下30人を書上ぐ(徳富)。 24 長岡河内よりの上知の阿蘇5,000石を中小姓22人に150石宛支給し、馬廻組に入れることにす(奉書)。 27 切米取の子弟に臨時に扶持支給し当分の番申付く(奉書)。加賀山主馬・長岡修理ら抱えの長柄300人に開の鉄砲衆同様に開を与え、召抱えることに規定す(奉書)。是月 家中の甥・従弟・切米取の子・扶持方職人の子は、目見を不要とす(奉書)。蔵納村々の本高新地高帳を一村切りに作成させ提出さす。先代検地の上中下の記載は不要とす(徳富)。出陣の時は庄屋・百姓・百姓・田地にかかわりのない者は召連れて出るよう命ず(奉書)。切支丹穿鑿と統制を更に厳重化し、訴人褒賞金を増額して訴え出さす(御書案)。光利(光尚)、痘瘡にかかる。將軍、半井駒庵を遣わす(寛政)。
- 是 年 領内の人口 223,578人、牛馬52,206疋(藩法・井田)(県史・資料)。川尻

町に町奉行をおき八木田丹右衛門を任ず (川尻史 110)。 藤姫誕生す (本)。
山鹿郡坂田村の地撫帳作成さる (肥後帳)。 祇園社の祢宜、見知らない者に宿借
した理由で追放す (諸拔)。 五ヶ町 (熊本・八代・高瀬・川尻・高橋)、准町
・宿町・在町制度と町奉行支配体制設ける (官職)。 小物成の野開・受藪・杵
実・夫米・種子米・茶代で 14,794石 2 斗、運上銀野開茶代・真綿・諸札・竹
木・密柑・荷・楮・葺板で銀54貫 166匁の収入をうる (藩法・井田 370)。 札
筒・地侍の制始まる (郡文)。 著書目録 竹田吉兵衛覚書 史伝 竹田吉兵衛

寛永12 (1635) 乙亥 (家光) 忠利

1. 5 藩主在府中、年寄衆相談に加る者は西部刑部・主馬・龜丞とす (奉書)。
開の長柄衆・鉄砲衆各 100人程を、百姓からでも抱えることを命ず (奉書)。
放火の者は磔刑の処罪と規定す (奉書)。 9 藤崎八幡宮に普請費用の一部、
銀 300枚を寄進す (奉書)。 15 江戸普請につき 452貫 905匁の天守米の銀を
出す (神雑72)。 16 忠利参府す。2月14日着、2月18日登城す (本)。 19 芦
北郡惣庄屋に地撫の7月中完了と、用水普請、佐敷御茶屋・籠屋普請の縄・かや
の調達、木挽賦課ら五ヶ条を命ず (徳富)。 地侍・札筒の玉薬員数の書上げ、
質物・売買男女の申出らについて命ず (藩法・井田 178)(竹会記)。 23 鶴崎
の市、毎月10・20・28日に決まる (部・寺社)。
2. 11 手永中の永荒地の目録提出、銀子上納は 100匁につき 3石 5斗決め上納、
及び年貢材木以外の米納制を命ず (徳富)。 13 公事裁判の格定まる (藩法・
井田 178)(本)。 29 阿蘇開きの鉄砲衆 100人、大津に移住さす (県近 2 - 2
52)。 是月 普請道具に南蛮ろくろを使用するという (城南史 454)。
3. 9 家光、忠利に菓子を賜う (実紀)。 12 三斎八代発、28日京都着、眼病の
ため保養す。5月5日江戸着 (本)。 地撫しの方法について六ヶ条を令す (徳
富)。 20 川尻召置の船頭・加子・船数の覚書提出す。船頭30人、加子 250人、
船数 133艘、他に浦水夫3,476人、浦舟 174艘なり (神雑67)。 また鶴崎召置の
船頭・加子・船数の覚書も提出す。船頭72人、加子 442人、舟数94艘、豊後水
夫 570人なり (神雑67)。
4. 10 竹木は山奉行山之口の係りとす (林制 4)。 14 江戸御成橋普請手伝の内
命あり (本)。 20 蔵納掛物の割賦、惣庄屋・小庄屋の役高、竹木の山の
儀の取扱について規定す (藩法・井田 179)(竹会記)。 23 鶴崎の市、10・
20・28日と定め制札を出す (神雑99)。
5. 12 国中の地侍郡筒帳作成さる。惣鉄砲数1,603挺、他に地侍 8人、惣庄屋 21
人、小庄屋13人、牢人 9人の計1,654人なり (藻塩草)。 18 蔵納は四ツ撫しに
することを命ず (県近 2 - 195)。 この頃に代官頭新設さる (藩譜便覧)。 忠
興 (三斎) 登城す (実紀)。
6. 21 武家諸法度十九ヶ条仰出さる (度譜)。 23 1升枧・1斗枧を作り判をつ
き判賃をとることを命ず (県近 1 - 255)。
7. 6 尾藤金左衛門、江戸で3,000石にて召抱えられ下向さる (部・奉公)。 9 鶴
千代誕生す (本)。 12 藩の長崎屋敷に蔵を造築す (県近 2 - 254)。 また錦
沙の購入を天野屋藤左衛門新九郎に依頼す (県近 2 - 254)(本)。 20 六丸元
服す (度譜)。 23 六丸 (光尚) 任官し、従四位下侍従、肥後守光利と称す
(実紀)。 25 長崎買物銀不足のときには、末次平蔵の銀子を借ることを命ず

(県近2 - 164)。阿蘇宮の普請、過半出来あがる(県近2 - 165)。九州地方大風、肥後も損害多く、城塀・櫓・民家破損多し。倒潰家屋35,921軒、田畑損害也多し。家中に米1,300石貸出す(本)(藩採)(氣)。

8. 6 御手伝普請の買物入目銀、小判1,557両余を書上ぐ(神雑51)。15 内検をする村は郡奉行・代官立会いにて決定することを命ず(徳富)。21 三斎の知行所益城郡内、大風にて1,590軒倒潰し、2人死亡す(県近1 - 661)。家光、宗立に帰国の暇を与える(家記)。29 来年の江戸普請役人数4,064人1分余と決る(神雑208)。是月 塩・農具以外の振売りしが在郷に入り込むことを禁ず(県近3 - 466)。
9. 7 切支丹改めにつき達しあり(部・類族)。三斎江戸発、9月13日京都発。10月4日八代着(本)。11 是日頃、豊後で切支丹の慶庵を捕え、長崎に送る(切支丹)。24 忠利、御前に伺い聴聞す(実紀)。26 浅山修理、家来にうさん成者なき旨を書上ぐ(神雑118)。是月 豊後大分郡上徳丸村にて旧イルマン三浦の道具調べをなす(切支丹)。
10. 2 組頭真下七兵衛、切支丹改めにつき組中に切支丹者なき旨を書上ぐ(神雑118)。4 忠利、小笠原一族の改宗につとむ(切支丹)。7 將軍鷹狩りに忠利従う(実紀)(寛政)。8 五人組十人組をもって、さらに旦那寺の裏書をとって絵踏みをさせ、切支丹の穿鑿を行う(切支丹)(御書案)。阿蘇・矢部・菊池らにキリシタン改め奉行を派遣す(日帳)。9 軍役人数高4,048人1445、鉄砲衆1,000人、計5,048人1445を書上ぐ(神雑211)。16 妙安、瀬戸五兵衛宛にきりしたん宗門改めの起請文を出す。18日旦那寺浄土宗西岸寺裏書をなす(神雑99)(神雑63)。24 歩小姓石川忠衛門謀叛につき絞首す(部・刑法)。是月 光利(光尚)熱海に湯治す(新撰)。
11. 1 切支丹の検挙始まる(御書案)(切支丹)。7 領内惣庄屋の吟味命ぜらる(日帳)。9 本丸天守の修理、花畑の作事成就す(県近2 - 259)。23 忠利、所勞により鷹を給う(実紀)。25 米双場、銀100匁に3石2斗と決る(日帳)。
12. 2 忠利、領内の切支丹を捕う(家記)。9 益城郡矢部津留村に銀山試掘し、山に成り難いこと判明す(県近2 - 204)。12 屋作は分限に應ずることを命ず(県近3 - 777)。輕輩の衣服について規定す(県近3 - 457)。21 將軍の談判に松平光長らと列す(実紀)。23 切支丹者につき小笠原玄也夫妻と子供ら11人、禪定院にて誅伐さる(本)(切支丹)。27 芦北郡に六ヶ条を令す。来年の千石夫の赦免、用水普請帳の提出、地撫帳の奥印連判らについて厳守を命ず(徳富)。
- 是年 阿部弥一右衛門によって保田窪に地筒仕立始まる(官職)。惣庄屋鮑田郡坪井源右衛門他3名、玉名郡上村与次兵衛他2名ら罷免さる(熊史38号)。玉名郡大野市兵衛手永原加村の御藏納新牟田地撫帳作成さる(古庄)。肥後・豊後領内の地撫し行わる。地撫帳、小前帳、見図帳、検地帳、名寄帳、藏納帳ら作成さる。また阿蘇郡小谷村他1村、海部郡久住町村、芦北郡1村の人畜帳作成さる。(肥検帳)。手永の名称多くみられ、領内では一般的となる(県立図書館蔵 地撫帳)(県史・資料)。有吉頼母佐娘、江戸証人となる(本)。老中は長岡佐渡守興長・有吉頼母佐英貴・長岡監物は季、奉行は西郡刑部・乃美主水・河喜

多五郎右衛門・堀江勘兵衛・沖津作太夫(本)。

寛永13 (1636) 丙子(家光) 忠利

1. 8 江戸城総郭の造営始る。本藩受持の丁場は銭亀橋・御成橋見付枅形 164間余で、長岡佐渡を惣奉行として行(実紀)(家譜続)。役人数4,376人816(高312,499石8斗)鉄砲衆1,000人なり(神雑 211)。 10 鷹銀使用者は、本人は磔刑、妻子は全て成敗、科の様子では妻子共に磔刑に決る(部・刑法)。 11 郡中法令として、免定を土免にすること、借物への利子(米3割、銀2割)、惣庄屋・小庄屋の筆紙墨代、及び惣・小庄屋の非法の嚴禁を令す(藩法・井田 179)(竹会記)(本)。 16 旧加藤家臣下津将監(50石)を抱置き、熊本に下す(部・奉公)。 21 大雨にて忠利が預る石畳崩る(実紀)。 22 惣庄屋・小庄屋の筆紙墨料を定む(竹会記)(本)(本)。 是月下旬 忠利日光に社参す(度譜)。
2. 21 阿蘇谷赤水村にて辻斬りあり。犯人彦右衛門を籠に入れる(奉日)。 26 江戸城石畳新築の慰労として、忠利らに樽肴を賜う(実紀)。
3. 9 普請入目銀高積り、銀1,740貫717匁114を書上ぐ(神雑57)(神雑 100)。 21 熊本城周辺の藪の請藪を禁止す(部・国郡)。 29 將軍、長岡佐渡に普請惣奉行の功勞として御召の羽織を賜う(肥)。
4. 3 百姓の家作・疊らについて規定を定む(竹会記)。 8 長岡佐渡、幕府より山城国のうち 173石余を従来通り宛行わる(松井)(寛政)。 11 長岡佐渡、山城領拝領につき御礼登城す。帰国の暇与えらる(松井)。 是月 肥後守、前髪を執る(本)。 28 忠利日光に社参す(本)(新撰)。
5. 12 忠利、江戸普請の功として感状賞詞・時服・白銀・馬を拝領す。帰国の暇あり(実紀)(本)。 13日江戸発、6月9日熊本着(新撰)。この頃堀田加賀守より上意の趣にて政道につき諮問あり(寛政)。 是月 三斎、病氣静養のため京都行きの願済む(本)。
6. 15 国境の侍や郡奉行に、隣国の大名衆の下国様子を報告するよう命ず(奉書)。 16 6月9日に着城、今日花畑に移徙(奉書)(本)。 27 大津の開鉄砲者 300人程抱え、郡の用水普請等に従事させるよう命ず(奉書)。 28 諸役職の整理検討を命ず(奉書)。 29 芦北郡惣庄屋、同郡津奈木村飢死百姓改帳を作成す(徳富)。 是月 新鑄錢の取遣いは6月1日よりであるが、今に実施されていないので、早急に行うように命ず(部・寺社)。
7. 6 郡奉行の配置決まる。飽田郡の阿部弥一右衛門・田中勘丞以下である(奉書)。また郡奉行の職務について規定す(奉書)。 8 玉名郡上小田村小庄屋長右衛門、不届につき籠を申し付ける。以後小庄屋の穿鑿は郡奉行とす(奉書)。 2 阿部弥一右衛門、人返しについて覚書を藩に提出す(郡文)。 10 先代加藤時代に相良領よりの走人が南郷矢部に現住しているが、還住させないので、念を入れ預り置くことを命ず(奉書)。 開畠の年貢、1反につき 5升と定む(新撰)。 13 領内の武士・陪臣・浪人ら、多数転宗す(切支丹)。 分田村に御茶屋造る(新撰)。 15 本丸並びに花畑邸に落雷す(部・災異)(本)。 藩主御用日は3・8・13・19・25日と定る(奉書)。 19 奉行の心得三ヶ条出さる(奉書)。 24 惣庄屋・小庄屋よりの非分の儀、または年貢の儀については、鷹狩の時でもかまわず書付け指上げるよう触れを出す(諸拔)(竹会記)。 25 奉行4人の執務を3人宛か2人宛の交替制とす(奉書)。 侍屋敷を借りての商売の者、無札ならば、去年

同様1人に付き夫役50人宛の過息を申付ける(奉書)。五ヶ庄の者、飢につき米拝領を願出る。非常時の境目番役として米10俵を支給す。(奉書)。質に置く者、10年以内は元物2倍の請戻し、10年以上は元物通りの請戻しと規定す(奉書)。27 俵と石の呼称を、俵は肥後俵に、石は上方俵の場合に使用することとす(奉書)。29 忠利の妻に雲雀を賜う(実紀)。是夏 肥後近国炎旱甚し(家記)。是月 八代領で、さきの人畜改めが3才〜60才であったので、人畜改めの再調査を命ず。本調査では当才迄とす(奉書)(新撰家譜には7月24日の書状あり)。

8. 2 難船衆の取扱いについて三ヶ条の法度出さる(県近3-449)。6 小国の鮎を献上するため、築を作って漁獵さす(奉書)。7 江戸城本丸普請につき金箔20万枚を献上す(本)。9 銭一貫文に銀16匁の定めとす(奉書)。10 鶴崎、大風大雨にて死者多数、船・牛馬その他被害多し(奉書)。13 江戸普請、並びに伊豆石出しの役人の過上数5,410人0353を書上ぐ(神雑84)。14 郡奉行、南郷の内岩坂村の隠田について穿鑿す(郡文)。19 野開島開の開取りを改正し、今後は所の地味をみて決定することにす(奉書)。領内新銭交換率1貫文=銀16匁を芦北郡に触れる(徳富)。20 立田山の入山を厳禁す。そのため制札を立つ(奉書)。21 寛永10年の土免決定以後の新開分帳の提出、及び野開1反につき2升(釣懸升)の賦課と決る(徳富)。23 天野屋藤左衛門、長崎御用聞仰付らる。以後寛文8年迄相勤む。歿後は寛文8年1月より神理兵衛となり、以後は家中に命ぜらる(奉書)。
9. 1 忠利、内牧にてひねり作りの毛蓑をみる(奉書)。6 大津開の鉄砲者・長柄者を更に増員すること、当座100人抱えること命ぜらる(奉書)。11 南関の新市5・9・15・19・25・29の六斉市立に決まる(神雑123)。12 豊前より供の1,000石未満の馬廻衆の二男以下は、歩使番並の扶持方切米を支給し使番に編入し、召仕うことに規定す(奉書)。13 郡方支配は沖津作太夫の一人の請込みの裁配となる(奉書)。21 飽田郡川尻庄権藤手永の家人畜村帳作成さる(小山)。23 江戸普請の扶持方米請払目録提出さる。請高5,928石90459、払方5,981石98459なり(神雑97)。また諸入目差引目録提出さる。請銀高2,103貫297匁8015、払方2,093貫145匁2229なり(神雑97)。
10. 2 光利(光尚)嫡男誕生、12月12日夭死す(本)(本藩世系略)。8 三斎に鶴を賜う(実紀)。13 阿蘇郡湯浦村・玉名郡安楽寺村百姓、山鹿郡吉田村惣庄屋株伐さる(奉書)。14 忠利、將軍に獵衣・雉毛の雨衣を進上す(家記)。光利(光尚)の室ねね歿す。正受院殿(新撰)。19 沖津作太夫、知行方に任命さる(奉書)。29 御ねねの弔を南禅寺天授庵にて行うことに決定す(部・凶札)。
11. 3 加藤清正の殉死者金官の息子、飢につき本妙寺路次にて目安を差上ぐ。二人扶持を支給す(奉書)。6 地侍衆の知行高帳の提出を命ず(徳富)。7 侍共の町人よりの米銀借用は、組頭加判に改正す(奉書)。家中より出米15石を徴す(新撰)。22 江戸の米の値段は、1両につき1石1斗の相場(奉書)。
12. 5 水俣御馬屋の普請を水俣惣庄屋に命ず(徳富)。来春の用水・塩塘普請の夫積帳の提出を芦北郡惣庄屋に命ず(徳富)。田浦御茶屋修繕を惣庄屋田浦助左衛門に命ず(徳富)。8 忠利、腹赤の贅を仙洞御所に献ず(新撰)(妙解君

寛永14 (1637)

遺事)。12 光尚の嫡男早世す(本)。16 来年の江戸夫・国夫役の割当として、芦北郡物成高 5,831石余に対し、江戸夫9人国夫5人の割当が命ぜらる(徳富)。18 忠利、紅葉山社参に供奉す(新撰)。24 領内に走番や惣庄屋の筆墨紙代米の割符帳の提出を命ず(徳富)。25 忍の者を各30人宛抱え置くこと、また抱えや暇は、奉行共の判形をもつて行くと規定す(奉書)。28 キリシタンの疑で矢部宮原村の者2名を捕える(城南史 323)。

是年 宇土郡惣庄屋吉兵衛一族、親又右衛門を中心とする年貢免の作為で誅伐さる(奉書)。菊池往還より東、立田杉馬場を限り、地筒 120人を仕立つ(官職)。飽田郡島手永島村・新村ら23ヶ村権藤手永に、惟重手永南走潟村9ヶ村錢塘手永に区劃換え行わる(小山)。菊池郡袈裟尾村他2ヶ村、阿蘇郡狩尾村ら2ヶ村、下益城郡中山村の地撫帳、山鹿郡椎持村名寄帳作成さる(肥後帳)。領内の米値段、銀 100匁に米8斗、大麦3石、粟2石8斗なり(玄祭)。江戸城石垣普請手伝(旧章)。江戸普請に指上す侍衆家中馬乗数は、八代侍衆46人共に計 144人とす(神雑 229)。切支丹転びの町人をそれぞれに預置くことを命ず(切支丹)。奉行、河喜多五郎右衛門・椋梨半兵衛・堀江勘兵衛・沖津作太夫(本)。加藤清正が計画した菊池郡瀬田の上井手の工事を始む(土木史)。

寛永14 (1637) 丁丑(家光) 忠利

1. 4 新銭1貫文=銀16匁とし、金小判一両の代りに1歩判4粒遣いは停止さる(奉書)。5 吉文字屋妙僖、前年よりの借銀元利共42貫772匁を請取る(神雑69)。いもてや久徳、50貫匁の利足4貫800匁を請取る。三宗屋、元利共44貫29匁4182を請取る。野村屋宗勺、元利共22貫160匁、長辻藤右衛門、元利共143貫260匁請取る(神雑69・95)。7 領内に新銭1貫文=銀16匁、小判1両=1歩判1~3ツの比率の触出さる(徳富)。25 永煩の侍共の知行返上は申出により裁量し、届出不沙汰の時は処置する旨を規定す(奉書)。長谷部文左衛門倅と松井四郎兵衛娘、縁組願不許可になる(奉書)。是月 先に捕えられたキリシタン容疑者左兵衛処刑さる(城南史 323)。著書目録 1. 11 沢村大学覚書 諸家 沢村大学助吉重
2. 1 川尻新市3・13・23の三斎市日に決る(部・寺社)(神雑 123)。19 紙を漉く草(楮)の栽培を奨励す(奉書)。開の長柄を数多く抱えること、開奉行は郡奉行・代官取扱いから、馬廻り者2人の専任奉行とする(奉書)。21 豊前より奉公の者で、年寄や役儀困難なものは大津の原へ遣わし、木を植えさせることを命ず(奉書)。
3. 1 芦北銅山を試掘す(奉書)。10 絵師矢野三郎兵衛、知行150石とする。但し7月迄は7人扶持(県近2-522)。12 銅山奉行2人を任命す(奉書)。岩神銀山の入用米、その他手配す(奉書)。18 芦北銅の試吹きを差上ぐ。また開発を継続と決定す(奉書)。

閏3. 5 五ヶ荘銀山に清兵衛・加嶋久右衛門・同組者3人を派遣す。清兵衛に30日分の扶持を遣わす(奉日)。13 熊本城普請を中止す(県近3-776)。17 町中牢人改帳の提出、家中侍共にいる牢人の取調べを命ず(県近2-279)。是月留守中奉行所目附、窪田与左衛門・国友茂兵衛・熊谷忠左衛門・余田三郎四郎に仰付けられる(奉覚)。

4. 14 國中兵糧のため、麦を他国へ出すことを禁止す(県近2-342)。16 家

- 中侍共にいる牢人について調査を命ず(県近2-270)。 30 舟の道の標木(みを木)立て方を命ず(県近2-344)。 是月 七兵衛、五ヶ銅山よりひと申ものを持参す(奉日)。
5. 18 土免四ツ撫しについて、再度領内に触れる(県近2-261)。 是月 忠利、酒井忠勝に時事を論陳し、将軍家光の内旨に答えて時事を陳ぶ(家記)。
6. 18 絵師矢野三郎兵衛、江戸より下る(県近2-263)。 28 馬見原口での豊後入来の米の運上徴収を以後禁ず(県近2-169)。
7. 7 将軍の西丸御移徒につき、けんどん・御樽肴を献上し、さらにがんぎ500本を進上す(県近1-149)。 29 小林半三郎・瀬戸五兵衛、京都借銀の返済銀のうち164貫830匁の差紙を藩に返却す(神雑69)。 是月 下立田に泰勝寺を建立す(肥国誌上111)(藩採)(新撰は7月13日に建立の議を記す)。
8. 3 山鹿郡上永野村人畜帳、組毎に作製す(県中・光厳寺)。 8 江戸において、城踊を台覧に供す(本)。 11 沖にての舟売買の吟味を命ず(徳富)。
- 12 藤崎八幡宮造営なる(新撰)。 17 阿蘇山噴火、破石・硫黄を降らす(肥国誌下529)。 忠利に菓子を賜う(実紀)。 18 熊本にて松之助出生す(本)。 28 忠利、家光の命により舞踊を興行す(新撰)(家記)。
9. 7 長崎唐人五官・高官の替銀を長崎にて相渡し、手形を取返す(県近2-272)。 是月 忠利病氣す(寛政)。 連日天焼け、狂花開く(天草譜)。
10. 8 上使阿部豊後守忠秋、忠利の病を問う(実紀)。 10 幕府、忠利の請により熱海・鎌倉の養生を認む(寛政)(家記)。 13 古袖判銀(借用銀)7口分、銀532貫匁皆済す(神雑69)。 16 忠利、湯治のため熱海に赴く(本)(部・雑事)。 19 天草一揆につき、地侍・札筒に浦・海岸の警備番を命ず(徳富)。
- 21 長辻藤右衛門・八文字屋久徳らに、本年の京都借銀元利共に309貫195匁を支払う(神雑95)。 26 長岡監物宅西南に大筒の響に付き、外聞者を出す(度譜)。 27 島原より一揆蜂起の報を受け、志水伯耆らを川尻に派遣す(家記)(度譜)。 島原松倉重政老臣ら、忠利に救援を要請す(家記)。 28 忠利、江戸にあつて切支丹一揆の蜂起を幕府に報ず(家記)。 29 忠利の老臣ら、天草富岡に一揆蜂起の状況を問う(家記)。 嶋又左衛門組を三角に派遣す(肥)。 益田四郎の母・姉、宇土郡浦で捕わる(家記)。 30 郡浦彦左衛門倅太郎吉、一揆の二人を捕う(有馬一件)。 その功により、翌年3月25日、太郎吉には知行80石を給し、同所定番となる。彦左衛門には30石を給し、惣庄屋とす(有馬記)。 また夜に河喜多丸左衛門が守備する郡浦に、大矢野勢来たりて偵察す(家記)。
11. 1 三洲内匠、宇土郡江部村にて天草四郎母・兄弟、及び渡辺小左衛門ら70余人を捕え熊本に送る(有馬一件)(家記)。 2 益城郡木原谷村百姓、キリシタン禁制、札筒の常備体制、追立馬、諸郡役、及び天下の物語の禁止について連署し差上ぐ。また五人組の制・掟が明確化する(県中・川口)。 3 切支丹ころび者の穿鑿を各村に命ず(徳富)。 4 天草欠落人の取締りに佐敷・津奈木に番所頭派遣さる。札筒を番所1ヶ所に5, 6人おくことを命ず(徳富)。 五ヶ庄の者共一揆蜂起を伝聞し、鉄砲持参にて加勢を申出る(肥)。 6 使番をもって光利(光尚)に鷹一羽を賜う(実紀)。 7 豊後府内の目付牧野成純、一揆逃亡者の捕えを命ず(家記)。 9 天草の乱江戸に聞え、幕府一揆討滅を命ず。板倉重政派遣さる(実紀)。 天草の乱の出陣の功について老中連署の奉

書をうく(寛政)。12 忠利、島原一揆の状況を伊達正宗に報じ、切支丹に対する処置を説く。また転び切支丹の五人組制度があることを告ぐ(伊達)。往還通行者は惣庄屋手形所持者のみに制限す(徳富)。13 益田四郎、切支丹150名を率い、上津浦に上陸す(家記)。14 幕府、忠利ら西国大名に命じ、子弟らを下向させ守備さす(実紀)。唐津の援軍天草にて一揆と戦う。忠利の老臣ら逃亡者に備う(度譜)。三宅藤兵衛広瀬村にて討死す(天草譜)。15 世子光利、天草一揆のため江戸出発す。12月6日熊本着(寛政)(本)。16 目付役牧野成純ら高瀬に着く。近国大名と会し、島原城救援を議す(家記)。芦北郡手永の札筒の配置を決定す。山つきにも2, 3人の配置を決む(徳富)。17 他国の家老衆入国につき、宿奉行を設け、諸用を促進さす(県中・森下)。18 天草一揆衆ら、富岡城を攻撃するも落城せず(天草譜)(耶蘇記)。芦北郡各手永より、天草絵地図書きを2名宛、出すことを命ず(徳富)。21 芦北郡浦々張番として、熊本派遣の地侍・鉄砲衆・百姓帳の差出を命ずるとともに、彼らへの兵糧米の支給を規定す(徳富)。23 目付役牧野成純ら、忠利の老臣らに島原への兵糧米を送附さす(徳富)。天草欠落人帳の提出を領内に命ず。芦北郡津奈木村より欠落百姓1家族を提出す(徳富)。天草一揆ら、富岡城落城せず島原に向う(天草譜)。26 板倉重政、忠利の老臣らに天草一揆の討滅を命ず(家記)。沢庵、忠利に初めて逢うからと御供を断わるとともに、鎌倉の退廃を報ず(沢庵)。27 幕府、松平信綱らを島原に派遣す(実紀)。是月八代城石垣の破損につき普請す(部・城郭)。

12. 1 板倉重政、高瀬に到着し、府内目付・幕吏・諸大名と会す(家記)(天草譜)。3 細川立允、三斎の陣代りに八代を出船し、波多村に出兵す(有馬記)。本藩の兵も着す(有馬陣始末)。益田四郎ら原城に籠城す(天草譜)。4 島原の松倉勝家、忠利に米の輸送を要請す(家記)。6 板倉重政、原城に向う。12月10日原城を包囲す(天草譜)(耶蘇天誅記)。7 目付役牧野成純ら、肥後の軍を監して天草一揆の残党を捕う(家記)。光利(光尚)宇土に出陣し、9日郡浦に至る(家記)(寛政は8日大矢野着、上津浦攻撃とす)。鑄玉を作り、地筒へ渡すよう命ず(徳富)。8 天草渡海につき、芦北地筒5人に1人と、地侍衆の差出を命ず(徳富)。天草派遣者の兵糧米を1日に1升、加子は1日2升5合と規定す(徳富)。9 天草渡海用の舟について、玉名郡浦々の猟船の調査指上げを命ず(県中・米田)。10 光利(光尚)天草を攻撃し、14日に川尻に帰陣す(本)(家記)。13 光利(光尚)の従臣、目付役牧野成純に若干従う。板倉重政、光利に有馬海上警備を命ず(家記)。14 細川勢、川尻に帰陣す。出陣兵数16,000余人(家記)(本)。15 領内の2枚帆以上の舟を、全て川尻に廻送することを命ず(徳富)。16 唐津寺沢堅高の老臣、細川領内への避難領民の返還を求む(家記)。23 細川家軍監法度十ヶ条出る(県中・高田)。
- 是年 肥後大飢饉で住民困窮す(相良年代記)。痘瘡流行す(玄察)。肥後領内の地撫帳作成さる。また玉名郡関下村名寄帳、飽田郡上村他13ヶ村の野開帳作成さる(肥後帳)。山鹿郡麻生村人畜帳作成さる(肥後帳)。川尻河村家・田中作兵衛、島原の乱に船賦役として出仕す(川尻史 211)。

寛永15 (1638) 戊寅(家光) 忠利

1. 1 原城総攻撃開始す。板倉重政戦死す(実紀)(天草譜)(家記)。目付石谷貞

清、薩摩・肥後・筑前に兵を徴す(家記)。 2 有馬への出兵、川尻川口にて勢揃い(有馬陣始末記録)。 3 忠利、島原出兵の許可を受く(家記)。 4 松平信綱ら島原に着す(実紀)。 光利(光尚)、忠興代理の立允(立孝)とともに川尻発、島原に渡海す。兵数8,000人翌5日に有馬に着陣す(家記)。 忠利らを召し、大目付派遣の旨を伝う(実紀)。 8 松平信綱、長崎奉行に光尚の軍を監督せしむ(家記)。 9 有馬陣用に竹束・土俵・柵木5,000本・石火矢・薬の調達を領内に命ず(県中・長岡)。 12 忠利登城す。出陣の命を受け即日に出陣す(本)(度譜)(家記)。 忠利、島原陣の下向にあたり沢庵に書状す(沢庵)。 20 益田四郎母姉ら有馬へ召寄せらる(家記)。 23 光利(光尚)、天草住民で領内に寄寓するものを唐津寺沢氏のもとに返す(家記)。 嶋原陣祈禱の入目銀子を芦北郡中の惣庄屋以外に割り当てる(徳富)。 嶋原の上使、益田四郎母を糾問し、四郎の書物のつづら1個あるので、その探索を米田監物に命ず(県中・長岡)。 26 忠利有馬に着陣す(家記)(寛政)。 27 有馬陣への軍需品、兵糧の補給を求む(奉書)。 原城を攻撃し落城さす(寛政)。 是月 忠利、大慈寺に寺領50石を寄進す(川尻史57)。

2. 1 松平信綱、熊本にて捕えたる益田甚兵衛家族の書をもって原城籠城衆を諭す(家記)。 3 芦北郡の手永内牟人で嶋原陣参加希望者の氏名の提出を命ず(徳富)。 6 忠利、有馬陣の状況を府内へ報ず(家記)。 7 領内惣庄屋で精勤したものを書付け置くこと、また嶋原出兵の札箇の札銀の赦免を郡奉行に命ず(郡文)。 10 嶋原陣参加の百姓の帰陣後、困窮ならざることを領内に触る(諸拔)。 12 陣参加の郡箇・人足・加子の田畑耕作を村中に命ず(徳富)。 14 忠利、有馬陣の状況を年寄に報ず(家記)。 16 忠利、原城攻撃にあたり軍令を定む(新撰)(家記)。 陣参加による病者・死者名帳の提出を命ず(徳富)。 24 島原陣法度五ヶ条、惣組頭中に令す(県中・高田)。 27 島原城の総攻撃、落城す。家臣陣佐左衛門、益田四郎を討取る(寛政)。 本藩戦死者 285人、負傷者 1,826人、その他12月20日から1月1日までの死傷者 207人、出征総人数 28,600人、一揆衆の首 3,600余人なり(本)(家記)。 郡鉄砲の者は残らず在所に指戻すこと、及び宇土・益城・八代の惣庄屋・小庄屋よりの人質も、全て指戻すことを命ず(奉書)。 京都滞在中の三斎、吉田を出発す。3月10日江戸着(肥)。 29 阿蘇郡老領老正犬塚七郎左衛門、嶋原の乱の戦功を藩に提出す(県中・佐田)。 長岡佐渡組付き森本藤太、有馬陣働の証状を加藤縫殿介に提出す(県中・森本)。

3. 1 光利(光尚)、熊本に帰着す。同15日熊本発す。4月9日江戸着(家譜続)。 島原の乱の功について老中連署の奉書をうく(寛政)。 2 有馬城乗取りの鉄砲衆15名の功労覚書を藩に提出す(県中・高田)。 3 忠利、島原を脱し熊本帰着(新撰)。 6 忠利ら原城陥落を注進す(実紀)。 佐田長三郎、嶋原陣働の様子を提出す(県中・佐田)。 8 飛脚を40人抱え、切米6~8石を支給することを命ず(奉書)。 9 領内の百姓で子供を多く持つものは、以後1人でも2人でも陣に徴発することを通達す(奉書)。 開鉄砲2,000人は地侍と異り、1月の内10日間の在郷用水普請、20日間のひまに開発に従事させ、他国への役儀は行わない。鉄砲の者、御用のとき出勤すべき任務であることを規定する(奉書)。 11 高田永能組鉄砲衆の有馬働の様子について、24名分提出す(県中・高田)。

- 13 松平信綱、宇土郡三角に進み、16日長崎に出る(天草譜)。 14 嶋原陣参加の詰夫、地侍、地筒の調査を領内に命ず(徳富)。 17 家中の差物改め行わる(新撰)。 熊本侍屋敷廻にて3月17日より4月中の鳥打を命ず(奉書)。 18 小国鉄山試堀す。島原乱のための一時中止を再開す(奉書)。 26 忠利、熊本発す。同29日小倉着、同地にて4月4日賞詞をうけ、4月10日帰着す(寛政)。
4. 5 5内至7人宛組合せて壇家名簿を作成し、起請文を出さす(城南 471)。
8 有馬陣参加の加子に、兵糧1日1升、妻子に1升、都合2升の扶持を給す。また百姓夫使いは高百石に付き2人と定め、その他は1人年中5石と積り日割りで切米遣すこと、舟の損害賠償をすることを命ず(奉書)。 同29日芦北郡にその触れ出る(徳富)。 12 幕府、寺沢堅高の所領の内、天草を没収す(実紀)(天草譜)。 14 山崎家治に天草を領せしむ(実紀)(天草譜)。 国中の古城や石垣の破却を嚴重に命ず(奉書)。 15 浦水夫の扶持について日数・算用書きの提出を命ず(徳富)。 島原出陣の郡筒400丁のうち、奉公を望むものは鉄砲衆に召し抱えることを令す(郡文)。 19 光利(光尚)、忠利と共に登城す。有馬陣の功を賞せらる(実紀)(藩採)。 29 日奈久・田浦・佐敷・水俣の宿地子を赦免す(徳富)。
5. 3 鉄砲衆討死跡は子供があれば跡立、なければ後家に200日間の扶持支給と規定す(奉書)。 5 島原出陣者に恩賞与えらる。細川立允・長岡佐渡・有吉頼母・長岡式部に刀とその他、益田彌一右衛門に加増1,000石、陣佐左衛門に新知1,000石らが与えられ、その後追々賞賜の者多し。また戦死者追善のため安国寺にて法要あり(本)(部・軍事)。 23 高田永能組衆の有馬働を提出す(県中・高田)。 忠利、薩摩内情の偵察報告がないのを責む(奉書)。 24 有馬打死の加子・札筒・人足の妻子に、2石宛扶持米の支給を規定す(諸拔)。
25 忠利、幕府から松浦肥前守に商船・荷船は500石以上は構わない旨が伝えられた由を、光尚に報告す(県近2-3)。 28 幕府、山崎家治に富岡在城を命ず(実紀)(天草譜)。 是月 松井康之の追福のため、立田口に春光院を建立肥国誌は寛永11年とす。 ついで正保3年八代に移す(本)(肥国誌上 314)。
6. 15 島原の乱の残党内海理左衛門の養子金弥、処刑され立田口に梟首さる(切支丹)。 19 花畑の水道支障あるにつき井手により別途仕付く。7月16日開通(奉書)。 23 肥後守下国につき、五ヶ庄五人の内、椎原村大内蔵、呉子村将監、雑座村権丞、もみの木村長介、萩村儀大夫、にくの皮5枚と鹿皮1枚を献ず(奉日)。 24 領内行政機構を系統化す。年貢事務は郡奉行・代官頭・代官系統で担当す。また領内を三分し、家老3人で分担し、給人、郡奉行、代官の監督を行う。毎年担当の郡を交替することらを決定す(奉書)。 是月 酒井備後守、阿蘇大明神へ書物を奉納す(部・寺社)。
7. 2 伝馬手形の発行規定を定む(竹会記)。 4 惣庄屋のうち特に由緒ある者61名に、150石~20石の地方知行を与える(郡文)。 6 芦北郡惣庄屋田浦助兵衛・水俣吉左衛門、五町手永惣庄屋五町甚右衛門知行150石宛行わる(郡文)。 7 芦北郡二見村弥五右衛門尉、惣庄屋給として二見村30石を宛行わる(県中・鳥井)。 同じく大津村斎藤喜兵衛も30石宛行われる(県中・斎藤)。
8 將軍忠利に雲雀を賜う(実紀)。 高田永能組鉄砲衆、連名で有馬陣働の様子を提出す(県中・高田)。 13 忠利、有馬討死者の追善冥福のため安国寺

に参詣す(本)。 21 大津(斎藤)喜兵衛、抱高の内知行39石 34426宛行わる(県中・斎藤)。

8. 1 銅の生産1ヶ月に1,500~1,600斤と報告さる(奉書)。領内に地侍多くなりすぎであるので、沖津作太夫に改革案の作成を命ず(奉書)。有馬陣働の者に褒美加増す(奉書)。 25 惣庄屋田浦・井手・北里・水俣の子弟に、3人扶持切米10石を与えて熊本へ召出す予定であったが、中止す(郡文)。 30 開の鉄砲者について、現状では成立たないので、今後の対策や廃止の有無の検討を阿部弥一右衛門に命ず(奉書)。

9. 7 三斎、帰国の暇を給い、白銀・小袖を賜る(実紀)(本)。 13 稲葉内記よりの借銀50貫匁(寛永11年借用)の元利(23貫 734匁 467)を返済す(神雑68)。 14 三斎江戸を発す。11月5日八代に着く(実紀)(本)。 20 幕府、キリスト教を厳禁す(実紀)。是月 水俣町の新市、6・16・26日の市立に決まる(神雑123)(部・寺社)。

10. 28 江戸芝の下屋敷の近所大嶋久吉屋敷を、幕府から拝領す(部・屋敷)。南郷川口村免割帳を作成す(県中・川口)。

11. 3 村々に切支丹横目を一人置くことを命ず(竹会記)(本)。 8 切支丹の高札、藩内の12ヶ所(熊本・河尻・宇土・御船・八代・日奈久・水俣ら)に建つ(切支丹)。 12 三斎の蔵納地、益城郡熊庄の清蔵の穿鑿を本藩から行う(県中・島田)。 17 米田是季、嶋原一揆の様子、志岐城攻撃の様子を書状す(県中・島田)。

12. 27 飽田郡・託麻郡ら6郡の鉄砲・鷹・細網を禁ず(本)。

是年 芦北郡に郡筭430人を仕立つ(官職)。この頃転び切支丹南蛮絵師山田右衛門佐、各国帝王の像を油絵にて描く(肥)。陣奉行堀江勘兵衛、留守河喜多五郎右衛門(本)。

寛永16 (1639) 己卯(家光) 忠利

2. 1 勘定方、金銀請払の御印帳を藩に提出す。請方は金大判686枚、小判20,848両、銀子1,133貫360匁、1歩判1,918粒 金吹抜143匁94なり。払方も同様なり(部・勘定)。 3 家中御供の扶持方分限を定む(本)。 5 三斎、家督を第四子立允に譲る。立允(立孝)知行7万石(本)。 6 三斎八代を発す。4月4日江戸着す(本)。 15 南郷木原谷村、荒地開発について請書を提出す(県中・川口)。 17 林隠岐守、鉄砲袋、口薬入500、番刀脇差1,000腰、番具足174領らと、塩硝1万斤・鉛の調達についての覚書を提出す(神雑200)。 26 忠利熊本を出発す。3月23日江戸に到着す(本)。

3. 13 寺本八左衛門、河村猪右衛門に打果さる(本)。是月 諸奉行・代官頭・郡奉行・代官・蔵・町奉行らの各役職帳、作成さる(諸御奉行并御番衆之帳)。

4. 5 宗門改めのために、各寺院に壇家名簿を作り誓紙を出さしむ。切支丹ある在所は五人組の中に一人宛を加え、組合せることを命ず(竹会記)。 7 光利(光尚)、帰国の暇を賜る。4月16日江戸発、5月7日熊本到着す(本)。 9 宇土牧場の馬目録を差出す。馬数55疋なり(奉日)。 15 將軍、三斎の所労を問う(実紀)。 20 立允、八代を出発す。8月2日まで吉田滞在、8月13日江戸に到着す(本)。是月 花畑の畑(1反2畝)を与左衛門に下賜す(奉日)。

5. 6 三斎に菓子を賜う(肥)。 11 忠利、加藤肥後守よりの預舟数32艘の目録

を幕府に提出す (部・公用)。 21 立允、宇土を出発す (新撰)。 26 他国に且那寺ある者の宗旨改めも、国並みに行うことを命ず。また日本の誓紙と、きりしたんの誓紙の2通にて行わせる (県近2 - 277)。

6. 是月 人吉城郭の石垣竣工す (南藤蔓錦)。

7. 3 光利、本妙寺にて能を興行す (新撰)。 13 將軍、三斎に菓子を賜う (実紀)。

8. 9 幕府、九州諸大名を召し、蜜船の法令発布を伝う (実紀)。 13 立允、元服し、中務大輔と称す (宇土史98)。 20 大雨降る。蓮台寺の堤破れる。玉名郡も洪水 (県近2 - 5)。 22 キリシタン宗門の禁止を毎月申付くこと、宇土郡三角に鉄砲番を置くことを命ず (部・類族)。

9. 11 御夜着毛氈を献上す (本)(度譜)。 15 立允に3万石、刑部に25,000石を宛行う (県近2 - 8)。 18 三斎に菓子を賜う (実紀)。 20 立允元服して中務大輔と称し、是日將軍に初目見す (実紀)(本)。 26 江戸下屋敷成就に付き引移らる (本)。 28 牢人早水助兵衛を江戸にて召抱え (600石)、熊本に下す (奉覚)。

10. 是月 銅山奉行鳥巢羽右衛門、芦北銅山の8月の1ヶ月間の銅吹き2,500斤を報告す (奉日)。 9 花畑館火事につき早飛脚を派遣す (奉日)。 10 花畑館火事につき、阿蘇在住財津一門残らず見舞に来る (奉日)。 また阿蘇山神主も見舞にくる (奉日)。 23 光利、芦北地方を巡視、11月3日帰城 (新撰)。

11. 12 忠利らに茶を賜う (実紀)。 14 三斎らに茶を賜う (実紀)。 16 三斎帰国の暇を賜る。將軍、茶にて慰勞する。俊成・定家の一紙両筆の軸を与えらる (実紀)(寛政は19日とす)。 28 南郷川口村・木原谷村百姓、キリシタン改めについて連判請状を提出す (県中・川口)。

閏11. 5 三斎、江戸を出発す。17日京都着 (本)。 10 南郷川口村百姓、キリシタン改めについて連判請状を提出す (県中・川口)。

12. 21 將軍、柳生但馬守宅にて茶事あり。ついで忠利、ともに柳生十兵衛の剣術を覽る (寛政)(実紀)。 24 宇土の牧の馬、今夏多く死馬につき、母馬の調達に薩摩に馬口労を派遣す (県近2 - 181)。花畑館の前の橋、百間馬屋の上角の矢倉、大方出来る。古城両所の橋の作事に取懸る (県近2 - 181)。

是 年 玉名郡惣高一紙目録作成さる (県中・南八幡宮)。 領内地撫帳作成さる (玉名郡 142冊、山鹿郡 1冊、阿蘇郡 1冊)。 また玉名郡下原村検地帳、玉名郡久米村名寄帳、同郡下千田村他2村の見図帳作成さる (肥後帳)。 領内の牛多く死す (玄察)。 佐渡・頼母・監物、益城・託麻の内に鷹場を与えらる (本)。 浜町の名前、文書にみゆ。この年宮原町に改名すか (郷歴)。 著書目録 沢村大学殿上書 法制 沢村大学

寛永17 (1649) 庚辰 (家光) 忠利

2. 11 忠利に菓子を賜う (実紀)。 25 忠利に菓子を賜う (実紀)。 26 光利 (光尚)、熊本出発す。3月27日江戸着 (本)。 28 家光、柳生宗矩の別業に赴く。忠利陪従して鷹を賜う (実紀)(寛政)。

是 春 宮本武蔵肥後に来り、千葉城内に居住す (二天記)。

3. 1 証人として在府中の細川興孝 (三斎5男)、是日熊本帰着す。高麗門外安国寺に住す。後に菊池郡隈府に移住す (肥)。

4. 12 林隠岐守、今年中に 800目玉石火矢 1 挺、500目玉石火矢 2 挺の製作許可を家老に提出す (神雑 200)。28 忠利日光社参のため江戸発。5月4日帰府 (本)。
5. 1 人吉藩主相良頼寛、相良清兵衛父子の専横を訴う (相良)。18 忠利江戸発、6月12日熊本着 (本)。25 長崎番船勤務方改めらる。半年は肥後受持ちとなる (本)。
6. 14 熊本川尻間の高瀬船通行について、川筋拡張を幕府に願出る。是日に認可をうく (神雑 223)(旦夕覚書)。16 花畑にて能興行さる。見物のため休日とす (奉日)。21 山鹿湯屋隣りの御茶屋建築の成就を督促す (奉書)。
- 22 大坂天満の細川家所持の家 (名代は蔵元淀屋善右衛門)、曾我丹波守より入札売却するように注意をうく (奉書)。24 家老を大年寄・若年寄に分け分掌さす。長岡佐渡・有吉頼母・長岡監物に公儀・他国関係を、長岡寄之・米田与七郎・沢村友好に国内常務をさせ、若年寄と称す (本)(藩採)。南蛮船来航のときの長崎防衛の出兵用意を命ず (奉書)。一年に二作の稻 (豊前輸入) を試植す。是日米差上げにつき、在中に播種させることを奨む (奉書)。24 宇土惣庄屋馬瀬与兵衛と小国惣庄屋下城郷左衛門の跡目を許可す (郡文)。26 黒船・白船の遠見のため、佐敷山と佐賀関山に番人 2 人宛の配置を命ず (奉書)。是月 黒船ルソン島より長崎に漂着す。邪宗門誅せらる (実紀)(本)
7. 4 京都滞在中の三斎、吉田を出発す。7月17日八代着 (本)。6 蓮台寺の修理を申付く (奉書)。17 細川刑部少輔 (興孝・刑部家祖)、病氣養生のため限府御茶屋へ転地す (奉書)。19 白川より川尻へ船通水道、開通工事予告あり (奉書)。21 衣類、振廻、家作の分限を定め、家中・在中の奢侈を禁ず (本)。29 大豆 200俵、薪1,000束、麻地生酒 2 樽を大坂城番浅野内匠へ進上す (奉書)。
8. 4 女御口屋出切手の式を定む (本)。5 浦廻り上使の通行時の手配を申付く (奉書)。7 長六橋の渡り舟、はしかけを命ず (奉書)。13 宮本武蔵、7人扶持合力米18石を宛行わる (奉書)。藤崎八幡宮への参銭に新銭50貫文を遣す (奉書)。14 他国入来の走百姓の子供、暇遣わし者、奉公人の取扱いらについて規定す (県近 3 - 458)。28 領内浪人改めを命ず (竹会記)(本)。使番44人を河喜多・棕梨・堀江 3 人に分掌さす (奉書)。是月 百姓の伊勢参り、六条参りに請人を立て、郡奉行切手にて出すことを規定す (県近 3 - 449)。
9. 6 江戸供衆雇の下々の者逃亡多し。賃銀を増し、また厳しく使用しないこと、及びたしかな請人を立てることを命ず (奉書)。11 刑部少輔は 3 年間在郷とし、知行11,050石差上げ、扶持支給とす (奉書)。28 有馬陣の時、松倉長門より米調達のため熊本町判屋伊右衛門へ預置る銀子10貫匁、公銀差引となり、銀子請方に入置く (神雑 122)。是月 八代城石垣普請す (奉日)。
10. 16 些細な問題は奉行裁量にて行い、家老相談は不要の定となる (奉書)。21 光利 (光尚) に鷹を賜う (実紀)。24 浦廻り上使衆の買物の安値分は、藩より補充することを命ず (奉書)。
11. 17 熊本・八代城石垣修復について、幕府老中よりの奉書を受く (県近 2 - 96)。
12. 5 宮本武蔵に米 300石を遣わす。以後18年 9月26日、19年11月 8 日も同様で

ある(奉書)。 13 光利の母(秀忠養女)に綿・銀を賜る(実紀)。 23 寛永16年分の小物成銀65貫匁上納す(神雑 122)。 是月 出京町より入りの惣構えの掃除を近所の町人に命ず(奉日)。

是年 牛の病死するもの多し(妙解君遺事)。 領内に虫追い踊命ぜらる(玄察)。 玉名郡庄村他2村、阿蘇郡湯浦村、下益城郡下杉島村、大分郡中村他1村の地撫帳、芦北郡河内村他1村の見図帳作成さる(肥後帳)。 老中は長岡佐渡守興長・有吉頼母佐英貴・長岡監物丞是季・長岡式部少輔寄之・米田与七郎是長・沢村宇右衛門友好(本)。 奉行は前年同様(本)。 著書目録 鷲絵源三郎久重覚書 諸家 鷲絵源三郎久重。 葛西総右衛門指上候覚書 史伝 葛西総右衛門

寛永18 (1641) 辛巳(家光) 忠利・光尚

1. 4 長崎(2枚)京都(7枚)分の袖判を渡し、銀子の借用をする(神雑78)。 18 忠利、八代より帰途中、右足しびれを感じず。遂に言語不自由となる(藩探)。
- 22 三斎、忠利に鶴を賜う(実紀)。 24 沢庵、忠利の侍医波多中庵に忠利の参府を心待ちしていること、および大徳寺住職への復旧の希望を報ず(沢庵)。
- 26 光尚に鷹を賜う(実紀)。 28 江戸大火(本)。
2. 是月 宮本武蔵、三十五ヶ条の兵法論を呈上す(先哲)(二天記)。幕府、武家の系図を編纂す(寛永諸家系図伝)(本)。
3. 3 大目的弓砲稽古命ぜらる(奉日)。 14 忠利、氣色悪きにつき花畑に移る(奉日)。この頃、將軍、忠利の病状治療に半井以策を派遣す(寛政)。 17 忠利、七ツ時分に歿す。56才、妙解院臺雲宗伍。家臣19名殉死す(度譜)(奉日)(本)。 23 光利(光尚)に就封の暇を賜う(実紀)。光尚、見舞のため江戸発駕。25日父忠利逝去の報を聞き、浜松より引返す(寛政)(本)。 28 忠利逝去により、使者斎藤利次を熊本に派遣し、三斎を弔問す(実紀)。 是月 忠利逝去につき、殉死の面々に跡式仰出さる(奉覚)。 是春 光利、光貞と改名す(家譜)(寛政)。
4. 5 幕府、光尚に忠利の死を弔し、香銀を与う(実紀)。 30 忠利の遺骨、泰勝院に奉納す(本)。
5. 5 光貞(光尚)、遺領相続の命あり。翌日登城御礼(実紀)(寛政)。 11 沢庵、忠利の逝去を惜しみ、九州の目代といわれるほどの政治的重要な地位にあったこと、及び遺領相続がすぐ決定したことに驚く書状を、小出大和守に認む(沢庵)。 19 光貞(光尚)江戸発、6月14日熊本着、花畑内に小書院を建つ(本)。
6. 12 沢庵、光貞(光尚)に肥後の施政方針について教示す。養生第一にし、忠利の家臣の処遇を配慮すること、古老に心を附けるよう家老に申渡すこと、大赦をすること、親類にも心をゆるさないことらを忠告す(沢庵)。 是月 公儀より人売買禁止令出る。口入の人も同罪と規定す(部・刑法)。 15 新藩主光貞より、万事忠利代のごとく政治する旨を奉行共に仰付く(奉書)。長岡佐渡、近日江戸上府につき銀35貫匁を当分取遣わし、江戸にての方々への進物は納戸より支給することにす(奉書)。
7. 8 早船・召船・上使乗船・客人用船の絹幕の新調取替を命ず(奉書)。 19 三斎、新藩主光貞相続の御礼のために八代発(本)(度譜)。
8. 2 徳川竹千代誕生につき、刀脇差・産衣を献上す(本)。 3 金川惣左衛門、キリシタン穿鑿について覚書を提出す(神雑 116)(神雑63)。三斎、徳川竹千代

(のちの将軍家綱)の誕生に、父玄旨伝来の武田家古実の式をもって産衣を贈る(寛政)。9 諸大名、竹千代誕生につき祝儀進上す。光尚・立孝ら、大刀進上す(実紀)。久保田平左衛門、キリシタン穿鑿につき覚書を提出す(神雑116)(神雑63)。代官頭、当年の免定困難につき、相役か横目を付け下さるよう願出るも従前のままとす(奉書)。15 嶋原・天草へ百姓派遣につき、百姓・名子・下人当才子に至るまで人畜改めを行う。玉名郡腹加村(腹赤)村庄屋喜兵衛、原加村人畜帳を作成す(古庄)。20 八右衛門女房、キリシタン穿鑿につき申上ぐ(神雑51)。24 江戸滞在につき銀 1,000貫匁(灰吹 216貫 500匁、丁銀 783貫 500匁)を御蔵より請取る(神雑 122)。

9. 2 家綱始めて本丸に登る。光尚、大刀を献上す(実紀)。9 継目の書出、花畑にて侍中に残らず下さる(新撰)。10 天草領主転じ、天草は代官地となる。本藩より在番を命ぜらる(実紀)(寛政)(天草譜)。13 久保田平左衛門、キリシタン穿鑿について申上ぐ(神雑 116)。14 河内山七十郎、キリシタン穿鑿について書上ぐ(神雑 116)。坪井立町 1 丁目ぬしや少右衛門、金川惣左衛門と知人につき穿鑿を受く(神雑63)(神雑51)。15 キリシタン容疑者金川惣左衛門、同母、久保田平左衛門、八右衛門女房は火あぶり。惣左衛門弟喜助、同人妹はつは首かけ、平左衛門子 2 人斬捨てにす(神雑67)。21 死人跡目申付けは、先代の様に規定す(奉書)(郡文)。26 勘定方、寛永10年 9 月27日より18年 8 月24日までの金銀米銭請払帳を藩に提出す。請取は 3,243貫 648匁332、払 1,936貫 503匁22、金大判33枚、一步 500粒、小判 8,324両請取、支払は一步 500粒、小判 4,900両となる(部・勘定)。御蔵残り、銀子 373貫 144匁余、大判33枚、小判 4,900両、一步判 622粒らを報告す(神雑 206)。27 熊本町奉行下使を10人増加し20人とする。1 人につき 2 人扶持 7 石を給す(奉書)。28 参勤につき、留守中の奉行の職務心得仰出さる(奉書)。29 光尚熊本発、10月26日江戸着(寛政)(本)。是月 公儀御用等のほか、夫使いは賃銀給となる(肥)。竹原金左衛門、八代奉行に仰付けらる(奉覧)。
10. 3 虫害によって、家臣救済のための扶持下附規定を設く。物成 1 ツ 9 分より 1 ツ 7 分までは 6 ヶ月間百石に 4 人扶持、1 ツより下は百石に 4 人扶持と銀子 100匁宛らと規定さる(奉書)。江戸供衆の借銀・30石手取に 7 石米と定む(奉書)。11 田畑虫害多く、被害の多い家臣に扶持方を給す(新撰)(藩採)。領内の鷹場榜示を規定す(新撰)(一説は11月11日とす)。吉日 江戸逗留中の金銀請払御印帳を提出す。請は大判 309枚、小判14,851両、一步判1,039粒、丁銀 596貫 959匁なり(部・勘定)。是月 天草城番衆の扶持方、百人に4人扶持に規定す(奉日)。町奉行衆10人にて不足故に10人増加に決る(奉日)。
11. 1 光尚登城し、将軍に謁す。家老有吉英貴・長岡是季・長岡重政、これに従って謁す(実紀)。8 光尚に菓子を賜う(実紀)。15 天草代官鈴木重成、熊本に立寄り天草に赴く(実紀)(藩採)。19 三斎参勤す。若君へ太刀献上す(実紀)。是月 財津一類及び代官衆へ、虫入分の損亡知行について扶持支給方を規定す。代官衆は知行人と同様にし、財津一類には渡さないことになる(奉日)。
12. 20 妙解院(忠利)の御位牌、御下りとなる(新撰)。30 知行地虫入につき、百石に30石手取りなき者に足し米遣わす。給人の役儀は来年免除し、根付けの監

寛永19 (1642)

督をさせること、及び沖津作太夫・蒲田次左衛門に廻郡を命ず(新撰)(奉書)。

是年 益城郡南田尻村検地帳、宇土郡石瀬村、菊池郡川原村の地撫帳作成さる(肥
検帳)。この頃から川尻にて盆踊り始まる(川尻史 583)。老中・奉行、前年
同様(本)(以下、前年同様のときは記さない)。

寛永19 (1642) 壬午(家光) 光尚

1. 是月 光尚江戸にて越年す(新撰)。

2. 21 玉名郡原倉山の薪を家臣に下附す(新撰)。 23 召仕者を放さないように
命ず(新撰)。 是月 三斎、將軍より賞賜をうく(寛政)。是月より5月にか
けて全国飢饉、疫病流行す(実紀)。

3. 13 藩主入用分として1,000両を甲賀道賢より借用す。金利は1割5分とす(神
雑 159)。 15 妙解院一回忌法要、17日迄立田にて行わる。大徳寺天祐和尚、下
向す。また殉死者の子孫へ夫々賜物あり(新撰)(本)。 23 江戸にて家督御礼
のために、老中及び入懇衆を招き能興行す(新撰)(本)。

是春 肥後入国の旅人についての改めを命ず(新撰)(本)。

4. 11 沢庵和尚、光尚家臣某に得道のことについて諭す(沢庵)。 25 三斎帰国
の暇を賜る。4月26日江戸出発、6月17日八代着(実紀)(藩採)。 30 百姓困
窮の風聞にて、帰藩の上政務に専要する旨が、幕府から松平伊豆守を上使とし
て伝達さる(新撰)(寛政)(一説は5月1日とす)。 是月 妙解院菩提寺建立の
ため、家中に百石に3歩役、その他は1歩半役も賦課す(本)(新撰は4月29日
とす)。

5. 1 光尚、入国の暇を賜る(寛政)。 2 光尚、日光に社参す。5月7日帰府
(本)。 13 光尚、江戸を出発(一説は14日とす)。6月12日熊本着(本)。

7. 12 島原・天草の荒廃につき、農民移住の幕府老中奉書をうく(部・国郡)(寛
政は16日とす)。 18 沢庵、光尚に柳生但馬の病気を報ずるとともに、家中
に誠をもって慈しむべきことを諭す(沢庵)。 是月 天草へ百姓 170人馬 2疋、
島原へ百姓 180人牛馬 9疋の移住を計画す(新撰)(本)。 21 6月29日の幕府
の夫遣い禁止、煙草作禁止の令をうく。是日領内に酒造禁止、振舞・衣類の制
限、夫役使用の制限、煙草作の禁止令を出す(新撰)。

8. 1 宇土郡戸口浦の百姓30人、逃亡の企てある訴えにより、事情調査を行う(奉
書)。 5 光尚、幕府老中に対し、預人最上五郎家来楯岡甲斐守についての覚
書を提出す(神雑 105)(神雑50)。 13 内藤宗印に長崎にてオランダ外科を習
わせる。オランダ外科医に贈物小袖 5ツ、通辞へ帷子 2ツと道服 1ツを遣わす
(奉書)。 27 年期奉公の期限は10年間と規定す(本)。 28 沢庵、光尚に痔
病の見舞をするとともに、幕府の近況を報ず。また侍医波多中庵の死去により、
中庵よりの贈物の書物の始末を報ず(沢庵)。

9. 是月 家中の聲・孫らの目見を不許可とする(奉書)。

閏9. 13 奉行の勤務を輪番制とす(奉書)。 25 小姓衆の御仕着の数を定む(部・
奉公)。 27 郡奉行27人代官頭計31人(内6人 300石以上、25人 300石以下
とし、300石未満の郡奉行には、知行高50石程の造作料をその郡にて支給す
(奉書)。

是秋 光貞、名を光尚と改名す(新撰)(家譜)。

10. 1 島原へ男女 184人、天草へ男女 174人と牛馬を移住させるとともに、幕府

老中に移住民の内容について報告す(新撰)。詰衆の勤方について六ヶ条規定す(新撰)。是月 理覚院、老年につき寺奉行の辞任願提出す(奉書)。

11. 2 沢庵、光尚の痔疾の平愈を賀し、またその養生法を説くとともに、父忠利の位碑所建立について、住持の候補者を慎重に吟味するよう忠告す(沢庵)。下々あごひげを立て、上ひげを立てることを制限す(本)。16 大坂商人木屋理右衛門、綱亭代銀の引負いについて申上ぐ(神雑75)。17 猥りに家屋を貸与することを禁ず(本)。21 領内の舟数・加子数の書上げをする。舟数(八代鶴崎共) 388艘、他に浦小舟 600艘、加子は浦加子共に6,132人なり(神雑67)。22 幕府、肥後国の3ヶ年の物成書出を要請す。光尚、延引の詫び書を提出す(新撰)。23 勘定方、袖判紙51枚の下附を藩に要請す(神雑36)。24 袖判下附の覚書として計62枚分を書上ぐ(神雑33)。27 他人への宿貸しについて触る(新撰)。
12. 2 沢庵、父忠利3年忌に当り、妙解院住持に啓室座元を光尚に推挙す。また山号、鐘名についても目下考慮中であることを報ず(沢庵)。7 鷹の鶴拝領の奉書、熊本に達す(新撰)。17 京都商人甲良左吉、江戸小判 210両(元金1,500両の利足)を請取る。21 波奈之丸、川尻へ廻置につき当分預りの船頭を定む(奉書)。25 上方奉公人抱えについて規定す(新撰)。29 嶋原天草への移住百姓、100人につき銀20貫匁の造作銀を支給す(奉書)。是月 沢庵、妙解寺の額2ツと棟札・鐘名を江戸より下したと、住持啓室が下向したこと、妙解寺留守居僧の推挙のことを書状す(沢庵)。

是年 益城郡山崎村の名寄帳作成さる(肥検帳)。痘瘡流行す。大飢饉につき100匁につき米8斗5升、粟2石の値段となる(玄察)。奉行河喜多五郎右衛門退任し、道家七郎右衛門を任用す。奉行は堀江・明石・町・浅山・西郡・道家となる。また郡方に沖津作大夫・蒲田次左衛門を任用す(本)。

寛永20 (1643) 癸未(家光) 光尚

1. 1 光尚、金8千両の借用をなす。利子は1ヶ月に1,000両につき8両なり(神雑102)。光尚、年賀の礼をうく。3日花畑館に帰る(新撰)。8 第2子綱利生まる。幼名六丸(家譜)(本)。9 沢庵、妙解院(忠利)のため東海寺内に一院を建立する地所を相談す。また家中の者が熊本妙解院に、石灯籠を多く寄進してあるいは、奢りとみられるおそれがあると、光尚に忠告す(沢庵)。24 御使番寺本久太郎組坂田兵太夫、江戸より妙解寺の額と棟札を熊本に今日持参す(奉日)。27 家中養子願二例あるも、養子名を挙げず、見計い養子下されるよう出願し、追て見計い申付くる旨仰せ出さる(奉書)。是月 柿本左内、イギリス流砲術石火矢修得の故をもって、身分取立を願出る(奉覚)。鍋屋三郎右衛門・住吉屋助太夫、肥後守袖判にて銀200貫匁借用(利子1割5分)して長崎に廻送り、12月に返弁する由を、商人森口屋庄左衛門・有馬屋喜兵衛宛に書き上ぐ(神雑83)。
2. 5 沢庵、江戸の様子と飢饉・乞食の様子を伝えるとともに、妙解寺の石灯籠の配置について、本妙寺の灯籠配置をよくみて配置かえをすることを、光尚に忠告す(沢庵)。9 大徳寺天祐和尚、妙解院法要のため熊本着(新撰)。13 妙解寺建立成就す。是日より17日迄、取越法要行わる(本)。16 屋敷借しを入念にすることの触出る(本)。21 殉死者阿部彌一右衛門遺子権兵衛、20日妙

- 解院3回忌法要の時、不信の所為あり。第4人権兵衛の屋敷に籠り、命に従わざるをもって誅伐せらる。ついで権兵衛も井手の口にて仕置あり(阿部茶事談)(本)。
- 22 長六橋・千場の土橋を板橋にす(奉書)。
- 23 妙解寺へ毎年米100石下賜さる(奉書)。
- 25 上方御蔵米取扱い商人たちより、8年以前の米売却にて大分の損をして、借銀となり、その返済を10年賦返済の予定であったが、なお4年分の返済が不可能である。それにも拘らず、なお京・大坂・堺3所の取替銀として3,000石渡され、忝なく思っている由を言上す(神雑68)。
- 28 西山左京に筒口200坪の屋敷遣わさる。以下家中20名分として筒口・立田口・こかい・京町口・段山・内坪井町・山崎に遣わさる(部・屋敷)。
- 屋敷角場矢先をえらぶこと、および鉄砲頭角場を拵え打たせることを命ず(本)。
- 是月 長岡佐渡、参勤御供について往来入目銀59貫300匁の拝借願をす(奉書)。
- 続十丞方竹内二郎太夫、替横目仰付けらる(奉覚)。
3. 5 参勤留守中、奉行・横目各1人の宿直制とす(奉書)。
- 長六橋・塩屋町両所の橋、来年より両所共にかけることに決定す(奉書)。
- 菊池郡の鞍打傳七、3人扶持で召抱えらる(新撰)。
- 14 阿部権兵衛召仕下々の者、の豊前の者4人、国の者8人計13人のうち、豊前以来の3人誅伐、他は放免、また従弟なども従来通りの召仕を命ぜらる(奉書)。
- 17 石火矢鑄師の前崎仁兵衛、25石10人扶持にて召抱える(奉書)。
- 19 光尚熊本発。4月17日江戸着、4月25日登城(寛政)(本)(奉日)。
- 隣国領との防備警備について九ヶ条を出す。佐敷には同様に長岡勘解由をそのまま一手としておくこととす(神雑210)。
- 28 夜、地震4回あり(肥)。
- 是月 求麻一件(相良清兵衛事件)についての注進に功があったとして、芦北郡惣庄屋湯浦九郎右衛門を表彰す(奉覚)。
- 妙解寺に寺領200石を寄進す(度譜)。
4. 25 光尚参勤し、將軍に拝謁す(新撰)(実紀は3月26日とす)。
- 27 1月1度宛人を派遣し、隣国の様子を見ることを林外記に命ず(部・雑事)。
- 18 町奉行5人を交替さす(県近2-217)。
- 26 八代・久住・小国・山鹿・宇土の郡奉行を交替さす(県近2-217)。
- 是月 山伏長金の息子文学、他国に切支丹者を知る由で長崎奉行に送くらる(切支丹)。
6. 3 上益城郡鯉村惣庄屋、吉例の新米を献上す(肥)。
- 7 父三斎看病のために、立孝に就封の暇を与う(実紀)。
- この頃三斎・家老長岡河内を使とし、予め遺物として中峯の墨跡(達摩の賛)、芝栗の真壺、雪舟重山の屏風を献ず(実紀)。
- 17 八代郡に高潮あり。田島15,6町損失す(県近2-224)。
- 浦々の舟の改めの儀について申渡す(県近2-224)。
- 是月 朝鮮使節の来朝につき、沿道吉田より三島まで人馬を出す(度譜)(新撰は奉書の到着を5月29日とす)。
7. 15 將軍家光、江戸下屋敷が安国寺に近い故に屋敷替を命ず(実紀)。
- 10月12日下屋敷を返上す(新撰)(寛政)。
9. 3 嫡子、六様と命名され、家中より祝言申述べ(新撰)。
- 17 武家系図なる(本)。
- 23 年貢未進米3,800石余あり(県近2-225)。
- 27 上野寛永寺・芝増上寺警備のため、大名火事番を置く(肥)。
10. 3 後光明天皇踐祚慶賀のため、長岡勘解由を派遣す(新撰)。
- 20 奥向の締り方について令す(県近3-456)。
- 是月 宮本武蔵、「兵法五輪之書」を著す(二天記)(先哲)。

12. 3 阿蘇内牧、火事にて60軒焼失す(県近2—214)。 19 伏見屋四郎兵衛、借金(1,500両)の利足(225両)請取る(神雑78)。 21 横井弥兵衛、2,000両の利子225両を請取る(神雑78)。 24 湊六兵衛、1,500両の利子125両を請取る(神雑81)。 同様に甲良左京も利足210両を請取る(神雑81)。 27 鶴崎の舟作事奉行を別に1人設置し、川尻兼帯をとく(県近2—213)。

是年 地撫しほぼ完了す(肥検帳)。江戸東海寺内に妙解院建立す(本)(藩採)。宇土郡本町村、山鹿郡高橋村、菊池郡隈府町、阿蘇郡神田村1村の地撫帳、阿蘇郡神田村の名寄帳作成さる(肥検帳)。三宅藤右衛門重元、藩主光尚の招きにて高瀬に来る(天草譜)。踊狂言行われ、村々の神楽・あやつり舞踊盛んに行わる(玄察)。15代吉田氏実、細川忠利の要請により相撲町に屋敷を定む(県史・年表)。三斎、雪舟の屏風や達磨の一軸、柴栗の茶壺を将軍に献ず(寛政)。

正保元 12. 16改元(1644) 甲申(家光) 光尚

1. 25 沢庵、増上寺の法要のこと、その他近況を報じ、併せて光尚の発句に答う(沢庵)。
2. 10 光尚に鷹を賜う(実紀)。 21 江戸三田村に肥後守下屋敷を設く(16,725坪)。(部・屋敷)(本は27日とす)。 29 細川立孝、八代発江戸に向う(肥)。 30 光尚、幽斎の詠歌を公卿烏丸氏に献呈す(新撰)。
4. 11 芝の舟着に適当な町屋敷を買上げ、蔵屋敷とすべき旨仰付けられる(奉書)。
5. 3 光尚江戸発、5月30日熊本着(本)。 10 大奥女子荒木の子、左馬助村常を光尚に預ける(新撰)(実紀)。 17 天野屋藤左衛門より、筑前大島にて捕えた伴天連の白状の覚書届く(新撰)。
6. 10 宗旨替の節の規式を定む(新撰)(本)。 25 熊本町・農村ともに大雨洪水。熊本城石垣・堀・櫓破損す(玄察)(沢庵)。
8. 9 沢庵、光尚に大雨洪水を見舞うとともに、忠利10周忌に下向した天祐紹皐が来宅した由を報ず(沢庵)。 15 幕府、加藤風庵(もと右馬允)を広島浅野家に託す(実紀)。 23 待中の目見の式を定む(本)。幕府、熊本城石垣・土手・櫓堀の破損の修理、三の丸虎口櫓脇の川岸崩についての新規土留、水枝1ヶ所の修理を許可す(神雑224)。目見の日次と規定を設く(新撰)。
9. 1 他国者の取扱い、用のふれながしの滞り、町にての曲事人の取扱い、女出入り、米の出入りらについて、十二ヶ条の掟を水俣番所に出す(新撰)(県近3—459)。 光尚、筑紫権十郎に飽田郡高平村ら300石を宛行う(県中・筑紫)。 9 年頭五節句の礼の座配式を定む(新撰)(本)。 26 芦北浦番坂崎清左衛門の知行を佐敷村ら周辺に505石替地す(郡文)。
11. 19 沢庵、妙解寺の知行の加増と毎月の月忌が奢侈であることを光尚に忠告す(沢庵)。 23 刀差物の覚書七ヶ条を規定す(新撰)。
12. 25 幕府、諸国に命じ、郷村高帳及び国郡諸城の図を作成す(実紀)。 29 年頭御札の節、太刀目録と御流れ頂戴の武士メンバーを定む(本)。

是年 豊前より六所宮(光尚誕生地)を勧請し、しばらく沢村大学の古屋敷におく。翌2月藤崎に祭る(肥国誌上—65. 66)(新撰)。宇土郡本町、玉名郡1村、阿蘇郡大竹原村、下益城郡大町村の地撫帳作成さる(肥検帳)。僧日収(図南)、常光寺(妙永寺)を再興す。仏堂鐘樓の額は自筆す。なお日収は肥後程朱の学の祖として藩主にも教授す(先哲)。

正保 2 (1645) 乙酉 (家光) 光尚

1. 11 扶持方・切米の目録作成さる。切米高 66,693 石 67、人数 5,447 人、銀子 17貫 586 匁、大判 4 枚、小判 194 両 2 分、大豆 7 斗 2 升なり (神雑 134)。 15 國中絵図作成について覚書を出す (新撰)。
1. 21 芦北佐敷詰番侍の地鉄砲者への丸太・大竹らの供与を規定す (郡文)。異国船着岸らの節の処置につき、条々の定めを領内に達す (部・異国)。 22 國中絵図高について、御前帳高か検地の上の延高か、よく問合せて吟味することを命ず (県近 2-285)。 28 本丸にて小的の稽古行わる (奉日)。
2. 2 寛永 19, 20 年の御袖判紙 161 枚を奉行に渡した旨の目録を提出す (神雑 78)。寛永 16, 18 年の御袖判紙 61 枚の受払相済む (神雑 78)。 5 有吉英貴死去す、46 才 (本)。 8 奉行の勤務時間、その他の勤務規定を定む (奉書)。惣郡奉行職心得が出され、郡奉行・代官・惣庄屋の監督、領内の巡回、公事の処置らに当ることになる (郡文)。 13 御六様付き山本三左衛門 (400 石) に 100 石加増す (奉書)。 14 藤崎宮遷宮の様子を吉田菊道に書伏す (県中・藤崎)。 15 光尚、参勤のため熊本を発す。3 月 16 日江戸に着。総数 2,720 人 (本) (新撰は 12 日着とす)。奉行所横目に、乃美一郎兵衛・和田主膳・藤本伊左衛門・金森刑右衛門を任用す (中川善左衛門・神西長右衛門罷免) (奉覚) (奉日)。是月 飯田才兵衛・藤掛蔵人を寺社奉行に任用す (奉覚)。長崎番詰め的人数と船数を規定す (本) (新撰は 2 月 14 日的人数定めあり。人数 200 人)。
3. 4 町方について、札銀、悪銭、他国よりの商人振売りへの札遣いについて規定す (藩法・井田 200)。是月 長崎より南蛮はがねを取寄せ、刀 2 腰の製造を高田鍛治に命ず (奉覚)。 3 月 15 日天草城番に派遣された侍衆が全て 300 石以下であるので、500 石取りを 1 人加えるように命ず (奉日)。
5. 4 光尚らに合力米 1,000 俵を与う (実紀)。 12 宮本武蔵、独行道を著す (二天記)。將軍の厄拂いの祈祷を阿蘇に仰付く (新撰)。 13 太鼓矢蔵の門の普請に付き、門をあけ普請者を通す (奉日)。 19 宮本武蔵歿す、62 才 (二天記)。飽託郡弓削村に葬る (先哲)。 28 矢野吉丞、御用船積みの道具の覚書を提出す。船数 154 艘、まさかり 459 丁、くまで 454 本、す丸 231、はしご 281 丁なり (神雑 21)。是月 小林伝三郎・林弥五左衛門を屋敷奉行に任用す (奉覚)。三好半右衛門を、唐船着の時の大筒打として長崎に派遣す (奉覚)。著書目録是月 五輪書 諸家 宮本武蔵。
- 閏 5. 5 佐藤徳右衛門の竿打ちにより、主要往還を測量する。熊本より山鹿通にて南関筑後境迄 2,060 間、11 里 8 町 4 反である (新野尾)。 11 宇土細川立孝、江戸にて歿す、31 才、泰雲院立允宗功。8 月 18 日遺物を幕府に献ず (実紀) (本)。殉死者 4 人 (新撰)。 28 天野屋左太郎、長崎絵図を写し公儀へ差出す。藩主のもとにも届く (県近 2-227)。
- 是夏 大旱続き、諸手永にて雨乞あり (玄察)。
7. 8 家中ら、困窮にて知行のうち若干返上を申出る (本) (藩採)。 25 長岡休無斎へ 100 人扶持を支給す (新撰) (部・雑事)。 27 九州・中国、大風にて城郭多く破損す (実紀)。
8. 5 五分一米取立てについて八ヶ条の覚書を出す。知行米、大豆、小豆らの蔵納方法、米・惣銀奉行への算用方、免帳の件、雑穀納入の件、根帳の件、免相

の件、五分一米取立方についての施策を示す(神雑37)。 7 旧加藤家臣庄林準人の知行地、益城郡上六喜・木山町ら上知し、13人に配知さる(郡文)。船頭・加子衆、切米の一部を差上ぐ(新撰)。 21 新町かな屋又左衛門、筑前小六より申出の男女4人の売所について覚書を提出す(新雑51)。 22 惣郡奉行、免率の決定に当る(新撰)(県近2-228)。

9. 是月 長岡勘解由延之、家老に任用さる(本)。

10. 3 京都借銀につき、老中判紙22枚を出す(神雑78)。 5 光尚に鷹の鶴を賜う。また三斎の病重きにより医師盛方院浄元を派遣す(実紀)。 28 野津原五ヶ瀬村と松平将監領分田村と境目出入あり(県近2-289)。

11. 9 沢庵、光尚の子六丸の將軍父子謁見を賀す(沢庵)。 11 六丸(綱利)、將軍並びに家綱に初めて目見す。3才(実紀)(本)(新撰)。 15 家老相談のうえ、上方よりの10年切抱下し女の縁付き、及び新町二丁目商人惣兵衛らの処理について決定す(藩法・井田200)。 23 払方に1,030貫匁の不足の財政となる(県近2-215)。

12. 2 三斎八代にて歿す。83才、松向寺三斎宗立。殉死者5人(本)(実紀)。 6 物成五分一指上について、大坂蔵本天野屋理兵衛ら、口銭五分一指上げを大坂蔵本奉行に願出る(県史近2-219)。 20 三斎卒去について幕府に注進す(実紀)。

是年 奉行所郡間・勘定所切米方を併局し、堀江勘兵衛・沖津作太夫を奉行役、阿部主殿・瀬戸五兵衛を勘定方切米方とす(本)(藩探)。また惣郡奉行設置され、知行方奉行の一部を所管し、郡奉行の監督、巡回義務、公事の処理に当る(郡文)。

正保3(1646)丙戌(家光)光尚

1. 1 光尚、江戸越年(新撰)。 11 三斎の御遺骨八代を發す。1月24日京都大徳寺内高桐院に葬る(本)。 21 幕府、光尚に使を派し、三斎のために香銀300枚を下賜す(実紀)。 26 光尚に菓子下さる(実紀)。

2. 2 家中手詰り者に貸米の調査を命ず(新撰)。

3. 19 光尚に菓子下さる(実紀)。 20 長煩い者の跡式取立てについて、以後考慮するよう命ず(新撰)。

4. 17 幕府、三斎の養女について身柄を問い糺す(新撰)。 20 薩摩国出水村へ異国船漂着につき、バテレン・イルマンの隠置きを禁ずる旨を達す(部・類族)。 28 光尚入用につき、金11,500両、銀500匁を借用す(神雑107)。
是月 八代に松井佐渡(興長)の派遣の命令を出す(度譜)(松井)。

5. 9 松井佐渡を八代城代とし、立孝の息子宮松(帯刀・丹後守)に宇土3万石(宇土・益城郡内)を分知させたき旨を幕府に願出る(本)(実紀)。 26 松井佐渡を八代城代3万石に任命し、世襲させる(松井)(本)。

6. 11 細川宮松(10才)に宇土・益城3郡の内3万石を内分す(細譜)(本は6月12日とす)。 12 光尚江戸発(新撰は13日とす)。途中伊勢参宮。7月11日熊本着(本)。 是月 肥後国郷帳なる(肥後国郷帳)。

7. 6 熊本町の諸事について、町人の他国探索、奉公人、振売り、三丁目御門・高麗門番奉行人らについて規定す(藩法・井田201)。 13 磯田十左衛門、知行所悪く百姓草臥につき知行差上げを申出る(神雑65)。 28 宇土の知行割を

- 4ツ2分と定め、また小物成、水夫数(182人)、材木らについて覚書を出す(新撰)(家譜)。竹田の者、領内の小川近所に金山見立試掘願。領内の者に先づ試掘を命ず(奉書)。26 大工町屋敷として、本庄村畠方の内1反9畝4歩が空地であるので、希望者に渡すことに決す(部・寺社)(奉書)。28 八代城付衆に、阿蘇3,000石宛行われた中小姓22人の与力馬廻衆を任命す(奉書)。
8. 1 長岡与一郎忠隆入道休無(牧崎の始祖)、京都にて歿す。泰仰院。子息ら光尚に仕う。のち長岡内膳家となる(細譜)(本)。4 宇土支藩主細川宮松、帯刀(行孝)と改名。是日登城し、將軍に初見す(本)。5 此後は2,000石以上の者の縁組願は、前もって何才になる娘ある旨を届出ること、そのうえで縁辺を行なうこと、小身成るものは従来を通りとし(奉書)。6 光尚、宇土細川帯刀の家中に対し十二ヶ条を令し、家老佐方与佐衛門の指図に万事従うべきことを命ず(新撰)(部・雜事)。13 長岡(松井)佐渡、八代に移る。城付衆もまた移る(本)(一説に12日とあり)。14 回目の御上下の時、鶴崎まで鉄砲50挺、弓30張を持参することを命ず(奉書)。23 長岡支部少輔に米5,000俵宛毎年支給す(奉書)。26 光尚宇土に至り、支藩の仕置、帯刀屋敷地形らを定む(本)(新撰)。27 毎月朔日・15日・28日に、物頭衆迄目見することを規定す(本)。是月 鶴崎に神護寺を建立す(肥)(肥国誌下619は7月とす)。
9. 3 水善寺御茶屋を以後寺造りにして、妙解院を祀る予定のところ、資力がないので一時返上し、勧進のうえ行なう予定を申出る(奉書)。8 細川興孝(刑部)に25,000石を給し、菊池郡高野瀬村から古京町に転居さす(本)。11 光尚竹刀を献上す(実紀)。16 帯刀領の益城郡南小川村・江頭村105石余を、宇土町石瀬村と替地す(部・国郡)。19 祇園社は山の上にて不用心であるので、神主くじ取にて、春日の近所北岡山に新地造営と決まる。一昨年造営費米500俵寄進(奉書)。奉行共へ、家老共に逆らわず協調すべきを命ず(奉書)。小姓定員100人に定められたため、今迄の様にこの内30人を目付の小姓に申付けては支障あり。今後は組々より召上げられた者、及び忍の者の中から目付任用と規定す(奉書)。23 9月10日より將軍不快につき、名代長岡監物参上(新撰)。
10. 15 光尚八代に赴く(肥)。21 明の鄭子龍、援兵を日本に乞う旨、長崎より注進あり(本)。24 光尚に菓子を下さる(実紀)。28 八代城附衆、誓詞を提上す(県近3-454)。是月 歩小姓衆定員100人の内、御六様付き江戸定詰20人、国使用20人、定御供60人、また定使番50人の内、国御用7人と定御供43人と決まる(奉書)。
11. 9 長岡寄之の二男の左膳、江戸証人として交替す(本)。
12. 1 日根野織部正、上使として長崎下向の途中で川尻着。光尚川尻に赴く(新撰)(藩探)。2 八代城に置く鉄砲鑄形・鑄鍋について、沢村宇右衛門書上ぐ(神雜178)。6 長岡休無の知行3,000石、休無の遺言通りに分け、各々その一代遣すことに決定す(奉書)。11 お竹様へ上り女1人遣わさる。給分3石とする(奉書)。15 細川利重(鉄砲州の始祖)、江戸にて誕生す。幼名七之助。(本)。16 松井佐渡、求麻川渡口の植柳蔵納地1,000石に加子を居住させるため、替地として玉名郡を差上げたき旨を願出で許可さる(奉書)。是月 光尚天草島を巡見す(本)(天草譜)。帰路高瀬につき、29日帰城す(藩探)。

是年 肥後海蔵寺宗淳、天草上村の禪宗遍照院の住持となる(天草譜)。宇土知行割りの奉行、浅山修理・田中兵庫・沖津作太夫(本)。

正保4 (1647) 丁亥(家光) 光尚

1. 28 藩の収支について、目安を勘定方から提出す。借銀利足分 850 貫匁(元金 6,900 貫匁)、万遣方不足分 420 貫匁、計 1,270 貫(高換算 142,240 石分)、内家中十分一差上分 35,000 石、水夫・夫米 20,000 石、諸事減らし分 41,370 石ら計 106,370 石分、差引 135,870 石の不足となる。当時の蔵納高 125,000 石なり(神雑 213)。
2. 10 家中数を書上ぐ。昵近衆 950 人、知行取家中馬乗共 495 騎、中小姓 480 人、合力米遣者 26 人、切米取合 4,835 人、地侍 153 人、家中足輕 1,449 人、長柄 1,430、旗 296 本なり(神雑 141)。
3. 10 他国酒の取扱い、客屋夫役、町人で他国奉公人らの取扱いについて規定す(藩法・井田 202)。13 光尚、巳の刻に熊本出発。4 月 4 日江戸着(本)(奉日)。留守中についての仕置覚書十五ヶ条(城持ちらのこと)を、長岡監物・沢村大学他 4 名宛に出す(神雑 210)。

是春 沢村権七の家中に切支丹信者あり、捕えて長崎に送附す(光尚公年譜)(新撰は 5 月 3 日の書状を載す)。

4. 7 光尚、参勤登城す(新撰)(実紀)。
5. 3 国中仕置き(中小姓切米取の扶持放ちら)七ヶ条を小姓頭大目付に令す(新撰)。28 祇園社移築完了につき、社僧ら礼に来る(奉日)(本)。是月軍役高の覚書きを作成し、幕府に提出す(本)。軍役人数は馬上 918 騎、鉄砲 1,890 挺、弓 324 張、鎗 810 本、旗 108 本なり(新撰)(神雑 213)。
6. 14 祇園社神事興行す(新撰)。20 京都借銀の内より丁銀 308 貫 972 匁を国御用として差下す(神雑 127)。22 上益城郡鯉村惣庄屋市左衛門、嘉例の如く新米を献上す(奉日)。24 ポルトガル商船長崎入港の報告あり(本)。加藤忠広遣臣和田備中、配所にて死去す(実紀)。27 長岡勘解由、長崎に出兵。28 日河尻出船(新撰)。
7. 3 光尚にリングを賜う(実紀)。7 長岡監物、本隊を率い長崎に出船す。出兵惣人数 11,301 人(内加子 4,896 人)、船数 447 隻なり(新撰)。長岡中務少輔(休斎崇也、幽斎 5 男)歿す(本)。12 幕府、光尚の家臣に奉書を下して長崎警護を命ず(実紀)。13 長崎出兵の迅速なるにより、光尚に褒詞あり(実紀)。23 長崎出兵、長岡勘解由組を残し引揚ぐ(新撰)。24 芦北大水にて佐敷町も浸水す(県近 2-228)。是月 商札なしの商売を厳禁する旨、再度触れらる(奉日)。八代新牟田に堤 200 間の造堤による新田造築を願出、許可さる(奉日)。
9. 6 松井佐渡登城し、八代城領の恩命を謝す(実紀)。26 松井佐渡、江戸出発す。10 月 13 日熊本着(藩採)。
10. 3 天野屋藤左衛門と相談のうえ長崎蔵屋敷の作事を行なう(県近 2-298)。
11. 1 商人貞方利右衛門・有馬屋久兵衛・吉村庄次郎より借銀す(神雑 66)。14 松井佐渡見知りの熊本本町の馬口労少右衛門・少三郎に、薩摩の様子を探索さす(部・雑事)。18 山崎甲斐守より下津将監宛、金子 400 両の借用状を出す(神雑 21)。
12. 2 商人正田甚右衛門・高木作右衛門より銀子借用す(神雑 66)。米田左馬允に

慶安元 (1648)

合力米2,000俵を宛行なう。(本)。

是年 宇土牧場の馬 (78疋) 目録を提出す (奉日)。光尚、江戸より政策、とくに家中手取を減じ、1,000 石以下にて用務なき者の在宅の許可、家中末子の他家奉公の許可らを指示す (光尚公年譜)。加藤忠広遺臣森本儀太夫、京都浪人中歿す。その子四郎兵衛、島原の乱の功にて寛永18年2月歩御使番となる (先哲)。繪師田中一閑の子作丞 (監左衛門)、堺の玄斎より切支丹容疑で訴えられ、対決し容疑はれる (切支丹)。著書目録 正保2~4 丹羽亀之允言上之覚 記録 丹羽亀之允

慶安元 2. 15改元 (1648) 戊子 (家光) 光尚

1. 3 加藤忠広の儒臣那波活所 (道圓) 歿す、50才 (肥)。 11 堀清心・足田甚右衛門・御つばね・与庵法印より借銀す (神雑66)。 24 光尚、台徳院十七回忌法事につき増上寺参詣す (度譜)。また軽罪の者を赦免す (部・刑法)。 28 八代郡五ヶ庄衆、年頭の礼に出席す (奉日)。
- 閏1. 9 銀子462貫200匁 (丁銀) を奉行所に相渡す (神雑127)。
2. 14 光尚、江戸を出発す。3月6日熊本着 (本)。
3. 8 家老米田与七郎、左馬助と改名す (本)。 18 上使井上筑後・馬場三郎左衛門、川尻着 (新撰)。 21 上使通行に付き、川尻御茶屋の飾り弓は花畑広間の飾り弓であるので、すぐ交換することを命ず (奉日)。
4. 5 袖判136枚分の借銀 (7,331貫500匁、小判1,404両) を返済した旨を、勘定方より奉行宛届く (神雑1)。 26 長岡与一郎・同与左衛門へ1,000 石づつ宛行う (部・雑事)。 是月 東照宮三十三回忌行わる。米田左馬允を派遣す (本)。異国船の儀に付き、天草城番及び領内に厳重取締り方を命ず (部・異国)。小姓衆に鉄砲稽古命ぜらる (奉日)。
5. 11 長崎御用聞商人天野屋太郎左衛門、地下中惣代として、地下商売、水夫役、白糸割符らについて長崎奉行に申上ぐ (肥文・柏原)。
6. 2 二天流棒捕名手塩田松斎歿す (先哲)。 18 洪水、人多く死亡す。延福寺仏具童子まで流る (気)。 23 南蛮字の印形の使用を停止する (新撰) (本)。
7. 8 鶴崎と肥後領内海岸防備の武器数を書上ぐ (新撰) (神雑186)。芦北・八代の海岸防備の武器数を書上ぐ。芦北は50匁玉筒2挺、10匁玉筒5挺、玉大小1,400ら、八代は10匁玉筒5挺、20匁玉筒3挺、45匁玉筒2挺、150匁玉筒1挺、玉大小272,200などである (神雑39)。また川尻・計石・鶴崎・佐賀関・大坂備の道具も書上ぐ (新撰)。 15 7月15日の礼は以後中止さる (本)。 18 家中の子供15才以上の五節句・八朔の目見をゆるす (本)。
9. 2 今朝六ツ時分に地震あり (奉日) (本)。 21 光尚の下国時の鶴崎警備 (鉄砲衆) 不手際について穿鑿を行なう (奉日)。 23 加藤風庵 (正方)、広島にて歿す (忠広) (事蹟)。
10. 8 五節句・亥の子には、在郷の士の出仕命ぜられる (本)。
11. 10 奉行役は堀江勘兵衛・沖津作太夫両人で1ヶ月交替詰、所帯方は阿部主殿・瀬戸五兵衛両人で1ヶ月交替詰とす。浅山修理は罷免となる (奉日) (奉覚)。
- 13 貴田角右衛門・堀江勘兵衛・山鹿惣庄屋・京町又兵衛・はふや忠兵衛・安藤角右衛門の6名を、キリシタン容疑で穿鑿す (神雑76)。 19 熊本町加左衛門、前記6名のキリシタン容疑者の覚書を提出す (神雑187)。 26 キリシ

タン容疑者堀江勘兵衛・貴田角右衛門・安藤角右衛門の閉門中を解除し用務を行わす。山鹿惣庄屋は郡奉行より前々のように用務仰付ける。京町又兵衛・はふや忠兵衛両人は閉門赦免となる(神雑無番13)。29 寺詰衆は泰勝院の施餓鬼のときと、妙解寺には1月・9月・3月17日・7月15日に詰めることを規定す(本)。是月 將軍へ黄鷹ならびに密柑献上す。13日に奉書あり(実紀)(新撰)。

12. 2 米田左馬允に合力米2,000俵宛行わる(本)。11 幕府、光尚に天草島巡視を許可す(一説は2日とす)。26 初めて城代職を設け、田中佐兵衛を任命す(本)(新撰)。

是年 細川行孝、宇土三宮大明神宮の流鏑馬を再興す(宇土史101)。萱野考澗、藩の茶道方仰付けらる(先哲)。(是年力) 昵近馬乗970人(知行100石以上)、内165人物頭并知行取、他に馬乗分中小姓合408人、家中馬乗合557人、昵近足軽1,500人、家中足軽1,450人の家臣団なり(神雑213)。小物成は野開・受藪・杵実ら8品物で16,488石1斗、運上銀は野開・茶代・真棉ら13品物で銀193貫330匁なり(藩法・井田370)。

慶安 2 (1649) 己丑 (家光) 光尚

2. 7 郡奉行の職務について、免相・公事などの任務らを規定す(藩法・井田190)。
- 12 瀬戸玉兵衛抱えの妙安、きりしたん宗門改めにつき起請文を差出す。同17日旦那寺西岸寺裏書をなす(神雑20)。24 町中の支配について、貴田角右衛門と米田左馬允、月替えに調べに当ることに定めらる(本)。25 町奉行貴田角右衛門、住江甚兵衛より町政について諮問をうけ、七ヶ条(奉行人の請人、家中よりの構い者の町滞在、町人の在郷商売の運上、大夫の長崎勧進など)の覚書を命ず(神雑187)。町人の在々酒販売について、奉行と談合のうえで決めることを命ず(藩法・井田203)。
3. 3 光尚、参勤のため熊本発。25日江戸着(本)。是月 芦北郡惣庄屋の子供を歩小姓に召仕わるにつき、田浦甚左衛門・水俣仁左衛門・津奈木少大夫・二見九左衛門・大野儀左衛門の五人出府す(奉日)(奉覚)。
4. 2 奥田権左衛門、後藤又兵衛の息子又市郎について、覚書を提出す(神雑105)。
6. 15 幕命により寛永11年以来の軍役奉公書を呈出す(新撰)。是月 是月より7月まで阿蘇山鳴動す。黒煙火石昇り硫黄降らす(肥国誌下529, 530)。
7. 2 光尚、6月20日の江戸大地震の普請役を自ら申出る。また領内の家中へ出立の準備を命ず。なお8月13日に幕府より中止の命をうく(新撰)。10 家中役高297,316石(内92,230石上知并無役諸奉行、京都・江戸詰共)の目録を提出す(神雑104)(部・勘定)。19 益城郡赤見組村々奉公人改帳作成され、郡奉行に提出さる(城南史・小林)。23 下屋敷にて能興行す(新撰)。
8. 5 光尚、日光社参。11日帰府す(本)。10 幕府、在江戸の諸大名に合力米を与う。本藩には1,000俵賜う(実紀)。14 本丸の石垣修覆許可さる(新撰)。22 奉行田中兵庫病死す(本)。
9. 23 筑前国より肥後への走り者、安武又四郎について穿鑿す(神雑72・78)。
11. 1 光尚の母病氣により慰問の使者あり(実紀)。21 領内延寿寺老僧清流、不儀の理由により、一宗の仕置きを申付けたき由を本願寺より通達さる(部・寺社)。24 故忠利の室(光尚母)保寿院、江戸白銀の屋敷にて歿す。53才、保寿

慶安 3 (1650)

院殿三英紹春大師。12月22日妙解寺に葬る (新撰)。

12. 5 光尚病状悪化す (新撰)。 26 光尚、江戸上屋敷にて歿す。31才、真源院殿回岩宗夢大居士 (新撰) (本)。なお嫡子六丸は7才なり (家譜続)。 28 將軍、光尚死去につき、長子六丸のもとに松平信綱を遣わし、香銀500枚を遣わす (実紀)。 29 芝泉岳寺にて火葬す (新撰)。真源院 (光尚) 追腹の者8人、泉岳寺にて殉死す (部・凶札)。他に肥後にて3人殉死す。殉死者11人 (新撰) (実紀)。

慶安 3 (1650) 庚寅 (家光) 綱利

1. 2 在府の家老長岡勘解由、肥後に密使を派し、藩主死去の通知、並に幕府の意向らを報ず (本)。 7 跡目について、老中酒井讃岐守より長岡勘解由延之への6日の通達の趣を、是日国元家老らに書状す (新撰)。 9 江戸よりの密使、熊本着。即刻老臣密議の結果、出府予定の松井佐渡らの出発を中止し、内々にて長岡式部・都甲太兵衛・梅原九兵衛を派遣することに決定す。夜に長岡式部寄之ら江戸に出発、2月7日江戸着 (新撰) (本)。熊本の夜廻衆10人増加し、20人にて夜廻りをす (奉日)。 17 山中又兵衛切腹す。追腹かどうか不明である (奉日)。 28 光尚の御遺骨妙解寺に葬る (新撰)。是月 東叡山より肥後天台宗に掟を触る。本紙は阿蘇山・宮門両所に預置く (部・寺社)。
2. 3 稲葉能登守、跡目相続について幕府の動向の趣を林外記に伝う。是日、林外記、細川家の家老に伝言す (家譜続)。 21 堀平左衛門、跡目以後の肥後の仕置十九ヶ条の覚書を長岡勘解由に呈す (家譜続)。是月 長岡勘解由、沢村大学による三斎の功勞書を持参し、幕府老中らに呈す (家譜続)。
3. 5 諸大名より江戸城西丸の用材を進上す (実紀)。
- 是春 僧鉄眼入京す (先哲)。
4. 18 幕府、遺領相続を命ず。長岡式部・同勘解由これをうく。光尚、遺言により封地返上を願うも特に許可さる。また政治は家老にて行なわせ、幕府目付及び六丸 (綱利) の親戚小倉城主小笠原忠真をして監督させる旨を命ず (実紀) (家譜続) (寛政)。この旨が28日に熊本に伝達さる (家譜続)。
5. 7 佐敷番代坂崎清左衛門、支配方の儀 (行政、浦番、町奉行2人、惣庄屋、鉄砲衆) について伺う (部・雑事) (神雑204)。 29 幕府、朽木民部少輔植綱・大目付兼松彌五左衛門正直を上使として肥後国出向を命じ、領知安堵の黒印状を授く。また使番能勢小十郎頼隆・藤田数馬之助長広を肥後国目付に任ず (実紀) (本) (家譜続)。六丸登城し、黒印の書状を拝領す (家譜続)。
6. 1 肥後国上使・目付、江戸を出発す (家譜続)。 12 上使下向につき国中に触を出す (家譜続)。 27 六丸 (綱利) の守立役徳島藩主松平忠英、六丸への遺領相続を將軍に謝す (実紀) (家譜続)。光尚の御遺物を幕府に献呈す (新撰)。 28 幕府目付並びに小笠原忠真、熊本に着す。翌日上使熊本着 (本)。長岡興長、小笠原右近に国中仕置七ヶ条を提出 (家譜続)。 30 上使目付、並に小笠原忠真、熊本城に入り物頭以上を登城させ、黒印状を頂戴せしむ (家譜続) (本)。家老・中老、誓紙起請文を提出す (家譜続)。
7. 1 上使熊本発、小川1泊。2日八代泊り。薩摩境らを巡視し、7日天草志岐に上陸、富岡を経て8日長崎着 (実紀) (家譜続)。佐藤伝三郎、意趣ありて林外記を討果す (家譜続は8月1日とす) (本)。是月 細川六丸の相続を賀し、益城郡杉島手永より石灯籠を寄進す (城南史349)。

貫匁を来る午年迄に返済する由の証文を提出す(神雜197)。

12. 8 目付衆熊本着、同10日、旧目付衆出立(家譜続)(本)。

慶安 4 (1651) 辛卯(家光・家綱) 綱利

1. 9 新任の目付登城す(家譜続)。
2. 23 小笠原忠真熊本着、新任目付に面接し花畑館に立寄る。翌日八代に赴き1泊、25日八代発。船にて高瀬にわたり、27日高瀬発(家譜続)。 24 細川藤孝(幽斉)妹伊也(浄勝院)、京都にて歿す。84才、法名椎誉英光(本)(家譜続)。
3. 2 目付衆、此日より領内を巡視す。20日帰熊(家譜続)。 20 前より留置中の切支丹信者5人、長崎に送る(家譜続)。 27 家老の江戸出府中は、1万石以上でも6,000石の振舞造作料に定められる(家譜続)(本)。
4. 21 將軍家光死去により六丸、徳島藩主松平阿波守と同道し登城す(家譜続)。 26 小姓組柘植平右衛門、肥後国目付となる(実紀)。
5. 6 將軍の遺骸日光に納めらるにつき、長岡勘解由派遣さる(本)。
6. 11 下立田村泰勝院、雷火にて焼失す(藩探)。 17 加藤忠広の生母玉目氏、庄内にて歿す。正応院祐真日倚(実紀)(忠広)。 20 江戸大地震、本藩の上下屋敷被害なし(家譜続)。 25 諸大名、新將軍家綱に拝賀のため登城す。六丸(綱利)も登城す(家譜続)。 27 六丸登城し、將軍に謁し襲封を謝し、太刀・銀を献上す。また亡父光尚の遺物、左文字の刀、骨不知の差添、月澗の掛軸を献ず(実紀)(家譜続)(本)。
7. 12 幕府、長岡勘解由を特に登城させ、帰国の暇を賜う(家譜続)。 23 国中の仕置き十三ヶ条を定む。奉行座分け、その他諸職を定む。奉行座、郡座の他に諸事勘定奉行、惣銀場奉行をおき、蔵納の免定は従来の代官決定を改め、免奉行をおき、郡奉行との協議決定にする(家譜続)(奉書)。(肥は21日とす) 25 長岡佐渡守ら家老衆5名連署し、六丸の名代として幕府に起請文を提出す(家譜続)。 29 家老米田左馬助、熊本出發。8月26日江戸着(家譜続)(本)(一説27日)。
8. 4 前年2月に行った郷村改めにより、郷帳を幕府に提出す。肥後国729,856石余、豊後国23,833石余、計753,739石余なり。この時より阿蘇谷の内2,928石余を直入郡久住に加う(県史・年表)(郡方一卷)。 8 目付川勝丹波守・杉原四郎兵衛、熊本發。9月17日帰謁報告す(実紀)(家譜続)(本)。 20 在
8. 12 大風雨、長崎天草の海岸潮害あり。民家流出す(実紀)(天草譜)。 16 大風雨のための損毛高59,200石(損)。上使朽木植綱ら肥後より帰参す(実紀)。 29 霖雨降り続く(本)。溺死360人、牛馬600匹、人家4,242軒流出す(氣)。
9. 2 熊本地震あり(本)。 17 家老沢村大学吉重歿す、97才(異本は91才)。養子宇右衛門家督相続す(先哲)。 18 諸大名、綱の西丸移徙を賀して進物す(実紀)。 19 目付兩人、領内巡視す。翌日帰着す(家譜続)。
10. 10 常光寺(妙永寺)住職儒僧日収(一鳴、図南)歿す、72才(先哲)(肥国誌上73)。 27 故保寿院の知行所、玖珠郡小田村を返上す(寛政)(家譜続)。
- 閏10. 15 使番川勝丹波守・大番杉原四郎兵衛、肥後目付を命ぜらる(実紀)。12月8日熊本着。前任者は12月10日出發(家譜続)。
11. 13 昨日それた御狩の鷹、細川六丸の邸に据あぐ(実紀)。 20 有馬右衛門、越中守より先年借用した銀子100貫匁(保寿院用)の返済について、残金60

承応元 (1652)

郷への商人禁止による運上の取扱い、胡麻荏子の購入、在郷宿町の市への商人の入込など五ヶ条について規定す(藩法・井田204)。

9. 1 使番津田正重・小姓組柘植正直、肥後国の目付命ぜらる(家譜続)。29 六丸、下屋敷に移る(家譜続)。是月 長岡式部寄之帰国につき、特に登城を許され時服を賜う(家譜続)(本)。
11. 3 將軍宣下の御祝に付き、藩邸に家老ら招待をうく(家譜続)。(松井は12月3日とす。なお史料からは12月3日が正しいと思われる) 13 米田是長の小屋に入る(本)。26 真源院三回忌取越の法事、妙解寺で行わる(本)。是月 此頃御奉行座分け、諸奉行職仰付けらる(本)。
12. 是月 馬廻衆の子供で、歩小姓の望みのものについて、道服拝領を規定す(本)。
- 是年 飽託郡鹿子木村往還筋に、御使者などの宿のための御茶屋を作り、酒屋御免の願出をす。しかし不許可となる(諸抜)。(是年力) 芦北浦舟、水夫数の書上げをす。舟182艘、水夫448人なり(神雑200)。長崎奉行、江戸にて訴人あったとして、加賀山休悦・岡喜庵ら5人を召出し穿鑿す(切支丹)。

承応元 9. 18 改元 (1652) 壬辰 (家綱) 綱利

1. 28 六丸、米田是長の小屋に入る(家譜続)(本)。
2. 9 軍学者小幡勘兵衛、忠利・光尚相伝の甲州流軍書を米田左馬允に提供す(家譜続)(本)。是月 目付衆廻国す。23日熊本に帰る(家譜続)(本)。
3. 27 家老の上府中の造作料を6,000石と細規を定む(家譜続)(神雑13)。
4. 11 家老長岡監物江戸に上る(家譜続)。28 使番松田善右衛門勝正・書院番水野庄右衛門元重、肥後国目付を命ぜらる(実紀)。6月6日熊本着(家譜続)(本)。
5. 16 合志郡竹迫村牢人青木十左衛門、切支丹容疑で幕府の取調べをうく(切支丹)。
6. 18 前任の目付津田・柘植両氏、帰諱し報告す(実紀)。
7. 7 阿蘇山衆、天台宗をすて真言宗に改宗す。この日最教院の使僧圓明坊より違反者は追放処分を達す(家譜続)。
8. 25 鶴崎の木引左兵衛、寛永19年より10年期奉公の年期上りについて申上ぐ(神雑無番2)。
9. 8 いぬの下刻に西より東の方へ火飛ぶ。瞬間昼間のようにであると報ず(玄察)。
- 12 家老米田左馬助是長、江戸発帰国す(家譜続)(本)。
11. 6 使番多賀常長・小姓組朝倉重成、肥後国目付命ぜらる(実紀)。是月 宇土郡の作荒しの鴻鳥の鉄砲打を中西伝兵衛に命ず(本)。
12. 25 石川甚右衛門内左衛門、切支丹容疑にて捕えられ穿鑿をうく(切支丹)。是月 一時中絶の竹刀献上、従前通りとなる(本)(家譜続は12月2日とす)。三名字衆一族の建立する10余ヶ所の寺社について書上ぐ(県中・田尻)。

是年 佐敷本村七郎右衛門ら15人申合せ、庄屋与右衛門の私曲を目安をもって訴え出るも、私曲なき故に、七郎右衛門与頭源右衛門を佐敷において誅伐す。残り13人は過怠仰せ付けらる(諸抜)。村横目には百姓並の役を申付けるよう命ぜらる(諸抜)。阿蘇山衆徒行者出入の儀につき、行者非分につき6坊は追放、9坊は衆徒の望のように誓紙を申付く(諸抜)(諸帳)。

是頃 奉行は堀江勘兵衛・佐藤安太夫・続平右衛門・竹原金佐衛門、勘定方は阿部

主殿・原田彌三兵衛、郡間は小林十右衛門・上村理右衛門・佐分利吉左衛門(本)。矢部男成村真宗真乗寺開基す(郷歴)。

承応2 (1653) 癸巳(家綱) 綱利

1. 1 船頭石川甚右衛門内左衛門、きりしたんについて穿鑿をうけ、覚書を提出す(神雑45)。 15 前記の石川甚右衛門に閉門を命ず(神雑15)。 26 目付松田・水野両氏、帰謁報告す(実紀)。
 2. 16 家老長岡佐渡、前月に上府し是日登城。將軍に謁す(家譜続)。是月 幕府、諸大名の従者を制限す(実紀)。
 3. 29 新目付多賀左近・朝倉仁右衛門、熊本に着任す(本)(奉日)(家譜続)。 30 六丸、竹刀13組を献上す(実紀)。
 4. 5 阿蘇山衆徒取扱いについて、東叡山より申出あり(家譜続)。 15 妙解院様13回忌の法事行わる(本)。是月 大猷院3回忌、六丸、日光社参を申出る(家譜続)(本)。
 5. 19 阿蘇山鏡観坊・円達坊・幸密坊・那羅延坊・鏡一坊・長教坊ら6人、領分内より追放さる(神雑72)。 23 宇土支藩主行孝、参勤登城す(実紀)。預り人について幕府に報告す(家譜続)。 25 坂崎金右衛門・早水助兵衛 阿蘇山衆徒者追放の4人を南関まで同道し、今日追放す(奉日)。 26 東叡山と本藩、阿蘇山寺院は東叡山末寺たる由の證書を与う。行者のうち6坊は流罪となる(家譜続)(玄察)(阿蘇)。
- 閏6. 6 絵師矢野三郎兵衛歿す、52才。遺作に城内大広間上段の雉・雁の画、杉戸の梅花・白菊・鶴の作品あり。以後矢野家は代々御用絵師となる(先哲)。 8 配流中の加藤忠広歿す。盛徳院殿最乗日源大居士(忠広)(忠広謫居事蹟)。 18 六丸(綱利)、日光社参のため江戸出発、23日参拝す(家譜続)。 26 預人楯岡浅之助赦免の奉書到来す(本)。 27 西国33ヶ国は神谷四郎秤となる(実紀)。書院番多賀外記加藤忠広の遺骸を検死す(実紀)。
7. 17 参向公卿の館伴命ぜらる(実紀)。 27 勘定方、正保4年6月20日より慶安2年7月29日までの御蔵金銀の請払目録を提出す。請取分は銀1,600貫、金小判600両なり(神雑95)。是月 上州沼田に配流の加藤忠広の息子正良(藤松)この頃歿す(忠広は7月17日とす)。長岡勘解由下国す。沢村宇右衛門東上す(家譜続)。
 8. 5 肥後大風、田畑損毛甚しく、潮害のため収入皆無の所も出る。倒家64,547軒、損毛知行高84,160石余、死人男女41人、破船142隻(実紀)(家譜続)。 11 耕作損亡につき年貢納入の厳守、町方への売米の厳禁らを触れる(郡文)。 13 肥後の洪水について幕府に注進す(実紀)。
 10. 12 損毛により財政強化策を打出す。特に家中より知行・切米の一部徴収による上知策をとる。江戸渡しの百石米五分一指上げ、御供衆の足米を3ツ成にし銀子拝領を停止する。家中の知行高五分一指上げらを規定す(神雑175)(家譜続)。この頃知行取1,678人、切米取以下5,137人なり(家譜続)(県近2-301)。 15 天草代官鈴木三郎兵衛 重成歿す(天草譜)。 29 米田左馬助、助右衛門と改名す。その使者15日江戸発、是日到着(家譜続)(本)。
 11. 12 目付多賀左近・朝倉仁左衛門、帰謁報告す(実紀)。 22 領内の免率、承応元年は3ツ58余、2年は2ツ3余(家譜続)。

明暦元 (1655)

12. 11 六丸登城。元服して従四位下叙任、越中守綱利と称す(実紀)(寛政)(家譜続)。27 口宣を頂戴す。使者野々口又之允なり(本は23日とす)。28 宇土支藩主細川行孝、従五位下に叙任、丹後守と称す(実紀)(家譜続)。

是年 有吉頼母英安、家老に任用す。計7名となる(本)。奉行は堀江勘兵衛・佐藤安太夫・続平右衛門・竹原金佐衛門(本)。高田・関水夫への跡扶持、1人減らされ2人扶持となる(藩法・井田385)。

承応3 (1654) 甲午(家綱)綱利

1. 26 新三丁目空右衛門・油屋吉十郎・古町久右衛門・古町藤兵衛・新三丁目仁右衛門ら、運上銀賦課、特に肥後領への入国商品に対する運上賦課、人別家別賦課銀らについて献策す(神雑78・203)(部・勘定)。27 古町治部・新二丁目徳左衛門・住吉屋助太夫・古町又右衛門・細工町理兵衛・細工町徳永・米屋権兵衛ら、他国商人に対する運上銀、たばこ、材木、薪、塩あい物、苧、樽酒らへの運上銀賦課について献策す(神雑45・69・78・144)(部・勘定)。28 古町長左衛門・古町市左衛門・新二丁目米屋伝左衛門、馬口労、たばこ、樽の油、俵物への運上賦課らを献策す(神雑78・101)(部・勘定)。30 二丁目いつの屋次右衛門・某・新3丁目市左衛門、木綿問屋、たばこ問屋、酒樽運上銀賦課について献策す(神雑78・101)。
2. 5 郡奉行中へ蔵納取立方などの条目を規定す。また惣庄屋58人連判して奉公を誓う(部・国郡)(郡文)。
3. 12 在々への売物は塩農具以外は厳禁、立山について蔵納は百姓許可、郡仕置は郡方にて厳重に行うことなど、四ヶ条を規定す(県近3—465)。
4. 2 江戸証人交代す(実紀)。17 昨年内裏炎上につき、築地造営を諸大名に課す。本藩も命を受く(家譜続)(本)。
5. 11 使番津田平左衛門正重・書院番加藤平内泰直、肥後国目付を命ぜられる(実紀)7月10日熊本到着(本)(家譜続は6日とす)。28 さきの川尻船手と同町人の喧嘩について吟味の結果、船頭佐川次郎左衛門他2名に切腹、の加子十郎左衛門外2人と町大工吉兵衛・豆腐屋門十郎を誅伐に決す(家譜続)。是月家老長岡勘解由登城し拝謁す(家譜続)(寛政)。是月 麻生田の地鉄砲166人のうち3人欠け、163人となる(奉日)(奉覚)。
6. 10 お藤様と松平下総守の婚礼行わる(本)。29 大洪水、被害甚大(気)。
9. 是月 家老沢村宇右衛門友好、江戸着(家譜続)(本)。
10. 1 江戸屋敷出入、及び江戸役付衆への心得法度書を各奉行宛に下す(家譜続)。11 目付衆、この日から領内を巡視す(家譜続)。是月 長岡勘解由、江戸を発す。11月熊本着(家譜続)(本)。
11. 19 加藤忠広庄内配流の時の家臣ら、江戸・京・大阪・駿河以外の地の自由の居住が許可さる(実紀)。

是年 内裏作事、築地の石垣手伝命ぜらる(度譜)。町人ら存寄りについて二十二ヶ条にわたり献策す(神雑81)。家老江戸詰め、7月迄は澤村右衛門詰め、10月迄は長岡勘解由詰めとなる。

明暦元 4. 13 改元(1655) 乙未(家綱)綱利

1. 8 目付津田平左衛門・加藤平内、熊本出発(家譜続)(本)。3月1日帰謁報告(実紀)。29 綱利に鶴を賜う(実紀)。

3. 11 綱利、當中において能見物、料理拝領す (本)。
 5. 8 江戸証人交代す (実紀)。 15 宇土支藩主細川行孝参勤す (実紀)。
 6. 22 田井崎五郎左衛門手永より鳥の落羽 226 本差上ぐ (奉日)。翌日池田手永より同じく 226 羽、五丁手永より 580 羽差上ぐ (奉日)。 24 細川行孝、朝鮮使節を神奈川にて饗応す (実紀)。
 8. 21 綱利、朝鮮使節を三島より吉田まで護送す (実紀)。川尻若宮大明神祭礼の儀式を定む (川尻史 536)。
 9. 3 朝鮮使節来朝につき、三河吉田から伊豆三島までの駅馬、及び大坂川舟らを手伝う (家譜続) (本)。 是月 長岡勘解由、熊本を出発。10 月江戸着 (本)。この頃江戸政務は長岡勘解由・澤村宇右衛門の交代にて行ふ。小笠原右近太夫らの指図による (家譜続)。
 10. 7 朝鮮信使来朝、綱利登城す (本)。 19 知行衆病死後の跡物成給付の規定を定む (家譜続)。 是月 朝鮮信使来朝につき吉田より三島まで人馬を出す (寛政)。益城郡福原村福伝寺山の矢竹の勝手伐採を禁ず (奉日)。
 11. 6 御鷹の鶴を拝領す (本)。 7 沢村宇右衛門登城す。11 月 12 日下国の暇を賜う (家譜続)。 26 11 月 4 日に使番下曾根信由・小姓組小坂雄忠、肥後国目付を命ぜられ、是日暇を賜う (家譜続) (実紀)。 28 法眼弟子の絵書吉之丞の 15 人扶持 30 石取について吟味するため、三幅の書を登す (家譜続)。 是月 遊行上人来熊す。往生院にて越年す (家譜続) (本) (家譜続は 11 月 8 日の使僧への返書を載す)。
 12. 26 真源院様 7 回忌催さる (本)。
- 是年 鉄眼和尚、長崎にて黄檗宗隠元禅師に会い、また木庵和尚に師事す (先哲)。俳書毛吹草刊行さる。そのなかに肥後の名物に限本キセル・皮籠・焼物・八代密柑・御免革・高瀬紋木綿ら 29 品種を挙ぐ (毛吹草)。江戸詰は島田弥三兵衛 (本)。

明暦 2 (1656) 丙申 (家綱) 綱利

1. 7 笠清兵衛、筑前の様子について申上ぐ (神雑 18)。 13 遊行上人熊本発、川尻より船にて水俣袋浦に渡海す。家臣薙圖書、国境まで送る (家譜続) (本) (天草譜は渡海地を天草とす)。 28 目付下曾根三十郎・小坂助六郎、熊本着任す (家譜続)。
 3. 11 宇土細川行孝参向し、公卿に館伴す (実紀)。 22 江戸証人交代す (実紀)。 是月 將軍家綱の痘瘡見舞のため一日に両度登城す。また阿蘇・藤崎両宮に祈祷を命ず (実紀) (家譜続) (本)。 刑部少輔知行所八代郡上土村百姓ら、庄屋を嫌い、無実の儀を申立て目安を上げるにつき、数人を誅伐す (諸拔)。
- 閏 4. 14 去年肥後の廻船が大坂船と偽り、松平越後守蔵米 649 俵を但馬に着ける不正をなす。肥後人 6 人を磔刑に処した旨の通知をうけ、領内穿鑿の様子を報ず (家譜続)。 16 阿蘇山了覚坊・長善坊・浄光院・万福院を追放す (神雑 72)。- 5. 1 阿蘇山寺院紛議につき、了覚坊・長善坊・浄光院・成実坊・得善坊・万福院の 6 僧の追放を命ず (西厳殿寺) (家譜続)。
- 6. 23 將軍家綱平癒につき、綱利登城す (本)。 是月 赤気西方に数日見ゆ (本)。
- 7. 1 目付下曾根・小坂、任務を終り熊本発 (本)。 8 月 10 日帰謁報告す (家譜続) (実紀)。
- 9. 28 奉行衆、天守定番、矢倉定番などの奉行衆の軍役高を定む (神雑 97)。 是

万治元 (1658)

月 菊池北宮社、神殿・拝殿ら再興さる (肥文・菊池)。

10. 27 奉行衆以下の軍役について覚書を提出す。奉行衆は高1,000石迄無役、1,000石以上は半役、天守定番は200石迄は無役らと規定す (神雑73)。 28 綱利に鶴を賜う (実紀)。 是月 沢村宇右衛門江戸着 (本)。11月長岡勘解由、江戸を出発、12月熊本着 (家譜続) (本)。

是年 阿蘇宮の本堂修造す (玄察)。古閑新地18町8反余を開く (県史・年表)。八代郡松崎新地竣工す。また明暦古閑新地竣工す (松井) (土木史)。 著書目録 和仁之城落城之覚 史伝 中村浄心。中原雜記 史伝 中村浄心カ。

明暦3 (1657) 丁酉 (家綱) 綱利

1. 18 江戸大火 (振袖火事)。翌7つ時分に滝口邸焼失す (本) (実紀)。 19 綱利の江戸大火に際しての振舞、見事なりと賞さる (実紀)。 是月 4月まで大旱続く (玄察)。
2. 6 滝口邸焼失につき、作事のために3月1日より家中に二歩役を課す (家譜続)。 16 七之助、痘瘡にかかるも快愈に向う (本)。 19 江戸参勤の面々に心得方十一カ条を令す (家譜続) (県近3-450)。 是月 天草富岡城番の交替の人数を派遣す (本)。
3. 17 妙解院様17回忌の法事行ふ (本)。
6. 12 綱利登城し將軍に謁す。着座は以前と同様に仰付けらる (家譜続)。
7. 5 長六橋向側の明地への屋敷立てについて規定す (藩法・井田207)。
8. 4 長岡重政道伯 (三淵氏) 歿す。月秀院徳翁道伯 (本)。夜大風吹く。益城郡内河江・廻江手永の潮塘切れる (奉日)。 16 大雷雨、熊本千貫松に落雷す (玄察)。
9. 27 江戸本城の構築に付き、大手門・二の丸門・中の門・蓮池・喰違の普請を命ぜらる (実紀)。
10. 15 綱利、江戸本城構築の普請場所を自ら検分す (実紀) (家譜続)。領内は材木運送のため、川尻・高橋方面へ人夫多数集まる (玄察)。 19 砥用にて材木124本を伐採し河尻へ出す (神雑125)。 20 野尻金右衛門、中芋250貫・下芋700貫計950貫を入札値段より10貫に付き2匁宛安く納入するよう命ぜられ、差出しを勘定奉行・芋奉行宛に提出す (神雑53)。 23 綱利、江戸屋敷完成に付き移る (本) (家譜続)。 28 大雷雨 (玄察)。 30 長岡勘解由、江戸参府す (家譜続) (本)。 是月 道横目が在郷紺屋の郡奉行の札での織木綿・染物持出しを押えたことについて、郡奉行の許可通りにするように命ず (奉日)。
11. 3 廻船運賃定まる。小早舟150石積は10石に付き90匁宛、中早舟200石積は10石に付き80匁、並の廻船10石に付き60匁と決まる (神雑55)。 4 給扶持は若黨切米7石、中間・小者5石、役人6石と決る (家譜続)。 13 江戸証人交代す (実紀)。 23 江戸城の本丸普請と石垣手伝い命ぜらる (本) (普請場所については異説あり)。
12. 2 松向寺 (忠興、三斎) 様13回忌、大徳寺高桐院で法要を行う (本)。 25 川尻にて銀100匁に申しび2ツ、30匁で瓜1つの高値になる (玄察)。 是月 松平阿波痘瘡につき、宇野平太夫を見舞に派遣す (本)。

是年 方々にて狂病はやる (玄察)。阿蘇三の宮修造さる (玄察)。

万治元 7. 23 改元 (1658) 戊戌 (家綱) 綱利

1. 3 是夜より毎夜丑寅の方角に赤雲立つ(玄察)。 8 家老長岡監物は季、病歿す。73才、法名雲祥院仁勇紹寛(家譜続)(本)。 10 江戸大火、八丁堀に設けた江戸城修築のための普請小屋焼け、昨年中より準備中の道具類焼失す(実紀)(家譜続)。
 2. 21 普請について、家臣の行動の掟十三ヶ条の直触出さる。 25 普請工事中の覚書十二ヶ条触れらる(家譜続)。 是月 御手伝普請工事に付き、有吉頼母・志水伯耆ら追々到着す(家譜続)(本)。
 3. 12 本藩受持の普請工事の歟初あり。綱利を始め、関係の有吉頼母・長岡勘解由以下列席す。將軍より褒詞を賜う(実紀)(寛政)(家譜続)。 22 將軍普請場を視察し、綱利・有吉頼母・長岡勘解由に慰労の言葉をかく(実紀)。 23 江戸の証人交替す(実紀)。 27 熊本坪井町失火にて400余軒焼失す(玄察)(本)。 29 去年大猷院(家光)の法要の大赦により、加藤忠広の女子ら自由の身で進退を許可せらる(実紀)。 是月 本丸、二の丸、石垣の普請御手伝(本)(旧章)。
 4. 23 普請場へ上使をもつて鷹の鵠を賜う(本)。
 5. 12 大雨洪水(玄察)。
 6. 9 今度の普請役によって本藩の支出甚だ多し。江戸出張中の侍衆の借銀のみで585貫匁余となる。小倉藩主小笠原右近大夫の忠告により、家老2人宛上府し処理することになり、まず米田助右衛門上府に決る(家譜続)。 12 6月6日より降り続いた大雨にて古今無類の洪水となる。益城郡鶴の瀬ひぐりさぶた切れ、有安村の塘70間切れる(玄察)。 18 將軍、本城普請の状況を巡視し、綱利・普請奉行らに言葉を賜る(実紀)(本)。
 7. 3 普請の石垣(大手見附御門台・喰違)成就す(本)。 5 本藩受持ちの工事大略終り、残務も13日に終了予定(家譜続)(寛政)。 18 本藩受持ちの普請(百人組番所・本城二之丸・蓮池・喰違の石垣)成就し、有吉頼母・長岡勘解由へ銀100枚と時服10宛、その他家臣に賜物ある(実紀)(寛政)。 是月 大ひでり(玄察)。
 8. 19 翌日まで肥後・豊後両国、大風雨洪水(実紀)(玄察)。 28 本藩受持ちの工事計算書を幕府に提出す。銀218貫499匁、米3,595石29なり(家譜続)(神雜13)。
 9. 12 松井佐渡興長の室(忠興息女)歿す。74才(本)。
 10. 10 米田助右衛門出府す。是頃長岡監物と改称す(本)(家譜続)。 25 長岡勘解由、江戸発西下す。11月5日近江石部にて発病し、京都にて療養す。12月18日歿す。60才、玄冬院一法宗二。家来2人殉死す(家譜続)(本)。翌年1月小兵衛延将相続す(家譜続)。 是月 大飢饉、木綿すたれる(玄察)。
 11. 9 亥の刻に東の空より火が出で西の空に入る(玄察)。 是月 女院より佐賀関の黒石船一艘所望に付き献上す(本)。
 12. 是月 益城郡やばの村、上さぶた普請行わる。益城郡各手永より34,697人の夫役出る(玄察)。御船町に川尻正行寺の隠居寺、法光寺建立す(玄察)。銀100匁に大麦4石、小麦2石、米2石2斗、栗3石の値段となる(玄察)。
- 是年 菊池郡立野井手(赤瀬堰)竣工すという(土木史)。江戸幸橋石垣普請手伝(旧章)。

万治 2 (1659) 己亥 (家綱) 綱利

万治3 (1660)

1. 5 將軍家綱、前髪とりの祝能行わる。綱利登城し見物す (本)。 25 松平陸奥守母大病につき、細川伊貞を見舞に遣わす (本)。また綱利痘瘡により、幕府より上使川口源兵衛正信の見舞を賜う (本) (実紀)。
2. 26 本妙寺住職三世日遙上人遷化す (本妙寺)。 是月 普請による侍衆の借米銀目録を提示す。江戸普請借銀619貫5匁、年々借銀153貫786匁094、計772貫791匁0914、年々借米270石566なり (神雑2)。
3. 2 綱利、前髪をとる。17才 (本)。 5 綱利、痘瘡快愈し將軍に謁す。家老長岡監物同伴す (家譜続)。 26 大あられ降り、麦いたむ (玄察)。 28 長岡監物江戸を出発す。4月30日熊本着 (家譜続) (本)。
- 是春 銀100匁につき米1石7斗、大麦3石8斗、小麦2石8斗、粟2石7斗の値上りとなる。また大豆は銀100匁に2石となる (玄察)。
5. 9 宇土支藩主細川行孝、就封の暇あり (実紀)。 27 綱利、能見物に登城す (家譜続)。
6. 是月 とき三羽江戸より送られ、下江津牟田に放し置かれる (本)。
7. 24 来月15日藤崎宮神事に付き、神馬3疋、隨兵頭乘馬1疋、その他3疋の馬用意を中間・小頭に命ず (奉日)。 是月 立田山に猪多く出て作物を荒すため、中西伝兵衛に鉄砲打ちを命ず。また島崎谷尾崎にても同様に命ず (本)。
8. 13 綱利弟七之助 (利重)、登城し謁見す (家譜続) (本) (異本は10日とす)。 是月より11月まで旱天 (玄察)。
9. 1 將軍遷移につき万石以上の輩から調度を献ず。細川興隆・細川行孝ら、間鍋・錫金らを献ず (実紀)。 12 江戸城普請成就につき、能興行さる。綱利登城す (本)。
12. 19 三斎建立の彦山大構堂破損す。座主歎願により銀子寄附す (本)。 30 子刻に東より西へ火飛ぶ (玄察)。
- 是年 疫病流行につき、阿蘇宮・藤崎宮にて祈祷あり (玄察)。甲佐三宮の神事踊り始まる (玄察)。飢饉につき (小川年代記) 大豆高値、銀100匁につき2石 (玄察)。浜町丁頭茂右衛門、乱心者故に矢部会所にて切殺さる (郷歴)。

万治3 (1660) 庚子 (家綱) 綱利

1. 17 是夜非常の大雷雨 (玄察) (天草譜)。
2. 12 勘定方、明暦2年より万治2年までの米2,610石余と利子783石2斗余、及び土山長右衛門へ預置く分の利銀子30貫匁分を、相場で金小判両替えするよう土山に依頼す (神雑125)。 27 お竹様、有吉頼母佐邸へ興入 (本)。
3. 29 本藩の証人交替す (実紀)。
- 是春 肥後領内の大力もの相撲取り24人、公儀より召出さる (玄察)。
5. 是月より7月まで大旱 (玄察)。
6. 是月より10月迄、豊後国において切支丹者発見され、箱に入れられ長崎に送らるもの多し (玄察)。
7. 5 三光院に落雷す (小川年代記)。 11 宇土細川行孝参勤す (実紀)。 是月 13日から8月1日迄大雨続く (気)。
8. 14 幕府、細川越中守・稻葉能登守・中川佐渡守に命じ、さきに搦め捕ったキリスト教徒の家族奴僕らを追放す (実紀)。丹羽源兵衛を鶴崎に派遣し処理に当らす (肥)。 20 大坂洪水。大坂屋敷内を船で往来する程度であると、留守

居生田又助より報告をうく (家譜続)。

9. 是月 米・大豆高値、銀100匁につき米1石7斗、大豆2石 (玄察)。

11. 15 是夜晴天にも拘らず、輪ちがへの月、明白に見ゆ (玄察)。 28 細川七之助、従五位下に叙任、若狭守利重と称す (実紀) (本)。

是年 江戸一の操り太夫の喜太夫、熊本高麗門にて太平記の操りを興行す (玄察)。川尻にて御座船波奈之丸の造り替えあり。此船、初め豊前中津にて大坂天満町船大工棟梁高橋善兵衛を招き、元和9年より寛永元年4月迄に成就したもので、74挺立なり。肥後入国後は、天正年間丹後宮津にて造った泰宝丸 (初め80挺立、後に66挺立に改造) とともに川尻におく (家譜続) (川尻史245)。豊後鶴崎、大火事 (玄察)。家老は長岡佐渡守興長・有吉頼母英安・長岡監物は長・長岡式部少輔寄之・沢村宇右衛門友好 (本)。

寛文元 4. 25 改元 (1661) 辛丑 (家綱) 綱利

2. 3 綱利、上使をもって帰国の暇仰せらる。年令19才に達し、自ら政務をとることとなる (本) (実紀は2月6日とす)。 是月 切支丹宗門改の触れ出さる (本)。

3. 16 是日より22日迄、川尻大渡河原にて善太夫操りあり (玄察) (川尻史612)。

27 綱利、江戸発駕。豊前小倉にて小笠原右近大夫に対面し、豊後路を経て4月28日に初入国。沢村宇右衛門・坂崎清右衛門・大木織部 (憲近) を随伴して帰国す (家譜続) (本) (一説に3月7日発駕、4月17日熊本着とあり)。入国即日、御札の使者に長岡監物を指し登す (本)。 是月 熊本坪井の火事 (玄察)。豊後より切支丹数人長崎へ通る (玄察)。内裏炎上につき、使者として花房次右衛門、江戸より指し登さる (本)。綱利初入国につき本丸作事の役夫不足のため、家中より歩役を増雇用す (触)。熊本城本丸修繕につき、大工の食事を本丸内にて行ないたいこと、またそれに応じ竹の丸の出入の許可を願出る (奉日)。日光輪王寺藤崎社に掟を下す (部・寺社)。

4. 2 沢村宇右衛門、坂崎清右衛門、大木織部らを同道して入国 (本)。 28 入国につき、益城より豊後迄の道作りに人夫多く出る。また熊本在々町町作業もきれいに修復す (玄察)。 是月 熊本府中の灰小屋停止さる (肥)。

5. 1 3日熊本城入城につき、ほう當門・くらがり門・平重の門・大手門・南門・北門らに、それぞれ番侍の配備を命ず (奉日)。 3 綱利、本丸にて家中の礼を受く (本) (家譜続) (度譜は同4日とす)。 7 是夜大寒風、冬の如し。または月降雨なく、陸稻植付け困難 (玄察)。 是月 洪水 (気)。

6. 3 菊池郡笛師高木与五郎、合力米20石をうけ、笛師として抱えらる (肥文・菊池)。 6 入国の御祝の能、花畑にて行わる (玄察)。 27 家中3,000石以上の者の縁組は、以後は幕府届出不要となる (実紀) (本は8月とし、家譜続は8月14日の細川行孝より有吉頼母ら宛の書状を載す)。 28 松井 (長岡) 佐渡興長歿す。80才、智海院松雲宗閑。殉死者9名。養子式部寄之 (忠興7男) 相続す (家譜続) (松井)。 是月 知行の書出書替えが仰出され、先代に頂戴した折紙を待組で集める様に命ず (触)。松井新助直之、式部と改名す (本)。

7. 4 幕府、諸大名に町人百姓5人組を定めしむ (実紀) (禁令考)。 6 八代城代、当分の間小笠原民部長之を任命す (家譜続)。 10 肥後大地震、翌日までに中小地震3回 (玄察) (天草譜)。

寛文2 (1662)

8. 11 幕府、先祖以来領知した山城国2ヶ所173石余の領地を、引続き相続させる旨を長岡佐渡守寄之へ達す。寄之、八代城に移る。この頃寄之の嫡子新助直之、家老に任命さる(松井)(家譜続)。 15 綱利、藤崎宮祭礼の能を覧る(本)。
- 閏8. 12 綱利、是日より玉名・山鹿・菊池・合志・阿蘇・南郷・益城・八代・芦北方面を巡視し、同24日帰城す(本)(家譜続)。堀江勘兵衛知行(1,000石)召上げらる。江戸詰奉行役で、藩主の初入国を余りに華美にしたため、家老の怒にふれた理由によるといわれる(玄察)。是月 参勤について十四ヶ条仰出さる(触)。
9. 15 長岡式部少輔寄之(佐渡と改名)、継目御礼に江戸へ上る。12月14日江戸出發(家譜続)(本)。花畑にて知行の書出頂戴の命が出さる(触)(家譜続は16日とす)。 18 綱利熊本発(一説に11日発とす)。途中阿蘇社参、10月22日江戸着。有吉頼母随伴す(家譜続)。
11. 24 保寿院様13回忌(本)。是月 御用商人柏原(天野屋)金右衛門、父太郎左衛門が寛永6年浜田彌兵衛事件に活躍した由を、長崎奉行に書上ぐ(肥文・柏原)。
12. 2 松向寺(忠興、三斎)様17回忌(本)。 20 幕府、先年家々に召し預けた加藤忠広らの家臣は、各々その家で召し使うことを通達す(実紀)。 26 真源院様13回忌(本)。
- 是年 細川丹後守、芝白金下屋敷を拝領す(本)。大慈寺法丈堂建立さる(玄察)。萱野考潤、御茶道頭200石に任命さる(先哲)。疫病流行し、類ばれ多し。米の値段下る。銀100匁につき2石(玄察)。上益城郡奉行牧八郎左衛門、矢部田小野村上鶴田を開田(100石)す(郷歴)。上大川村 甲斐惣兵衛、郷原村飯星徳兵衛、加藤半之允地侍となる(郷歴)。備頭・奉行中の役務について仰出さる(家譜続)。

寛文2 (1662) 壬寅 (家綱) 綱利

1. 是月 江戸滝口邸焼失す(本)(寛政にこの記事なし)。阿蘇南郷小国・久住・野津原・鶴崎、飢饉に付き、救恤下さる(花日)。
3. 14 江戸証人交替す(実紀)。 15 細川利重に賄料原米5,000石を給す(家譜続)(本)。 18 久住山の境目について論争あり。この日久住の住民3人口上書を提出す(郡文)。 27 細川利重の屋敷、江戸越村に7,200坪拝領す(本)。是月 宇治茶壺差上げらるにつき、家中の所持する宇治茶壺の提出を求む(触)。
4. 7 御鷹之鶴拝領す(本)。 25 在府中の有吉頼母英安、江戸発し西下す。途中発病し、5月11日京都にて歿す。26才、長徳院米室宗運。殉死者2名。(家譜続)。嗣子なきにつき、有吉家は有吉内膳貞之となる(家譜続)(本)。
5. 8 大雨洪水(玄察)。
6. 是月 出家・山伏・社人、その他芸者ら、猥りに在中に入込むことを禁ず(肥)。是月より11月迄、疫病大流行す(玄察)。
7. 5 御鷹の雲雀拝領す(本)。中止していた物頭の江戸詰め復活す。切米取の道中の無掛乗りを禁止す(本)。
- 是夏 切支丹、豊後より長崎へ通る。ついで8月豊後より薩摩金山へ出稼中の切支丹の取押のため、中村伊織を派遣す(玄察)。絹布の衣類法度厳しく行われ、惣庄屋廻村し、少々の中ぎれも庄屋に取り集める(玄察)。
8. 7 綱利、直印をもって領内政策、知行、扶持、侍屋敷、借銀、升、足米ら諸

政策について仰出す。なお郡方・勘定所・奉行所は、奉行所・郡方に機構改革となる(家譜続)。

9. 19 是夜大地震(玄察)。 23 若狹守利重、前髪を執る(本)。
10. 12 御鷹の鶴を拝領す(本)。
11. 10 江戸証人交替す(実紀)。
12. 7 御召により登城、松平讃岐守養女と縁組仰出さる(本)(家譜続)。是月 家老名をもって家中の家屋敷の新規作事や修理について止むをえざるもの以外は禁止。家中衣類は紬・木綿の他は着用禁止。妻子の衣類も華美ならざる様に注意し、美作や新規調整を見合せ、振舞・贈答も必要やむをえざるものの他は停止せしむ(本)。

是年 阿蘇の煙り荒れ、また九重山にも煙出る(玄察)。家老は長岡佐渡寄之・有吉頼母英安・長岡監物是長・長岡式部直之・沢村宇右衛門友好(本)。八代郡古閑沖新地着工す(土木史)。人吉の林正盛、球磨川の改鑿に着手す(土木史)。公儀より疫病祈祷の木札村々に立つ。大疫病にて上益城郡早川村82人罹病す(玄察)。

寛文3 (1663) 癸卯(家綱) 綱利

1. 3 今晚、花畑にて謡初め(奉日)。
2. 3 清水道は入道歿す(本)。 是月 熊本坪井町失火、500余軒焼失す(玄察)。
- 是春 夏にかけて大旱。甲佐川の水2割となる。諸所雨乞の踊あり(玄察)。
4. 11 大猷院(家光)様13回忌、是日から21日迄妙解寺にて執行(玄察)。
5. 4 上使阿部豊後守、六月に綱利の婚禮行わる旨の將軍の意を伝う(家譜続)。御前様6月12日入興、翌年白金に移徙す(度譜)。御前様へ現米5,000石、小判1,000両進ぜらる(度譜)。 6 御鷹の鶴拝領す(本)。
6. 12 綱利、松平讃岐守頼重の養女久姫と婚姻す(夫人は延宝3年2月20日歿す。32才、本源院。実は水戸中納言頼房の女なり)(家譜続)。 29 綱利、領内豊後鶴崎にて切支丹信者33人を捕えた旨を幕府に注進す(実紀)(玄察)。

是夏 夏にかけて疫病大流行す(玄察)。

7. 13 本妙寺塔頭中正院、身延山末寺に変更するについて言上す(神雑68)。 26 九州大風雨、特に肥後・薩摩烈し(実紀)(玄察)。 29 町別当・町頭の設置について規定す(藩法・井田208)。 是月 大坂町人の酒売買、家中侍衆の米買い商人で代銀納入不可能な者の取扱いについて規定す(藩法・井田207)。
8. 1 江戸出発し、日光参詣す。木曾路通行の予定のところ、松平讃岐守夫人死去につき江戸帰着。お悔み仰せ達せらる(本)。 7 江戸出発。9月6日熊本着(家譜続)。 是月 大風吹く。田作全く不作、7,80年に例なしといわれる(玄察)。
10. 6 長岡監物宅を訪問す(本)。
11. 23 温泉(雲仙)嶽鳴動す。翌朝煙見ゆ(玄察)。
12. 24 長岡監物、御用番役を病氣につき辞退す(家譜続)。 是月 公儀法要に付き使者として有吉内膳を差越さる。翌年正月帰着す(家譜続)(本)。 熊本町中の絵図に銘々の屋敷の間口を書付けるよう命ず(触)。

是年 郡方を奉行捌きに改め、奉行瀬戸五兵衛・鎌田奎之助をこれに任ず。後に奥村次郎左衛門・松野八郎左衛門・平野清兵衛を加う(本)。鉄眼和尚、禪定寺に住し法華經を講ず。その後江戸海雲寺にて講ず。聴講者数千人なり。また一切

寛文4 (1664)

藏經の版刻をなす(先哲)。

寛文4 (1664) 甲辰(家綱) 綱利

1. 1 明日御花畑にて御礼あり(奉日)。 2 明晩、謡初(奉日)。 3 大守明朝鷹野(奉日)。 14 藩主明朝藤崎宮社参(奉日)。 16 藩主天草へ、24日八代着、25日帰る(奉日)(家譜続・本は出発を18日とす)。
2. 2 「郡方従前々の御定法」を達す(林制7)。 22 参向公卿の饗応使を定めらる。隨心院門跡俊海は細川豊前守興隆の受持(実紀)。
3. 25 細川越中守忠利、江戸証人交替す(実紀)。 是月 藩主大津にて鹿狩を催す(玄察)。
4. 1 飲食・衣服等質素儉約方重ねて達せらる。(家譜続・本・藩法集458)。 是月 大雨、折々洪水(玄察)。
5. 3 大雨大水(玄察)。 8 大洪水、水田田地流失(気)。 22 綱利、封地判物を受く(実紀)。但し綱利在国のため細川若狭守が名代(本)。 29 有吉内膳貞之家老となる(家譜続)(本は閏5月29日とす)。
- 閏5. 29 細川興孝隠居して立白と称す。興之相続して2万5千石を領す(家譜続・本)。興孝隠居料は千石(本)。 是月 家中召仕の者を猥に追放せざるよう達す(触)。
6. 7 伽羅387両5分、天野屋左太郎より買上ぐ(神雑126-2)。 11 綱利参勤のため熊本発、23日兵庫着、24日大坂着、7月9日江戸着(家譜続・奉日)(但し肥は大坂着を26日とす)。 11 在坂中天草在番の引上げを命じ、有吉内膳に出張処理せしむ(家譜続)。
7. 5 天野屋左太郎、上納銀差つかえに付、名代として布屋小左衛門を差遣わしたき旨申出る(神雑10-1)。 11 細川綱利参勤す(実紀・度譜)。 18 天草領主として戸田忠昌着任につき本藩は天草在番を引き上ぐ(天草譜)。 19 將軍家より御鷹の雲雀を拝領す(実紀・本)。 是月 天草巡見の大久保基右衛門・三好備前、肥前寺井より本藩の船で渡海(度譜)。 絹布1反は長さ3丈4尺、巾1尺4寸と定めらる(肥)。
8. 10 清田左近右衛門より小坂九左衛門へ山田九郎左衛門の息子善十郎を養子として養育中の由申し上ぐ(神雑35-5)。 16 泰岩寺、借銀返済不可能につき5ヶ年賦払いを願出る(神雑59)、8月19日当年分は延期とす(神雑59)。 26 天保4年の長崎御借銀のうち銀140貫目を天野屋左太郎らに届出る(神雑10-3)。
9. 一 是月彗星出づ(玄察)。
10. 7 將軍家より御鷹の鶴を拝領す(実紀・本)。 豊後日田領の百姓と手代・庄屋共との出入あり、熊本より松野主殿・松野善右衛門などを遣わす(本)。 19 細川綱利江戸証人交替す(実紀・家譜続)。 是月 公義より諸国の寺社に会し、延喜以後の公家・武家の旧記を求む(本)、野開運上銀の等級を定む(大覚)。
11. 7 大名・旗本の所持する和書の目録を差出すよう幕命あり(本)。 25 幕府・諸藩に切支丹改めの強化を命ず、そのため本藩はこの年より踏絵を始む(官制・玄察・部の類2)但し「肥」には寛文8年11月の条に在中影踏始ると記す。
- 是年 川尻・高橋間屋口銭受になる(大覚)。 御郡より召上の品々代物きまる(大覚) 本藩郡村帳を幕府に提出す(肥)。球磨川開鑿なる。明5年更に加工、航行容易となる(先哲一林正盛の頃)。 横手手永を廃し木倉手永に合併す(玄察)。

雲歩禪師を豊後に遣し邪法を破らしむ(玄察)「肥後国誌」にはこれを5年とす。玉名郡長洲新塘新地成る(肥)。安藤小平次、矢部金内村萱野を開く(郷歴)。

寛文 5 (1665) 乙巳 (家綱) 綱利

2. 一 是月、日田表の儀について風説があるので、大筒の試打をさしとむ(寛日)。
 3. 16 忠利の妹鳳祥院殿68才で死去(本)。 17 妙解院25年忌(本)。 25 昨年来の豊後日田の争論、幕府が代官を改易、手代百姓らを誅伐して結着(本・家譜続・先祖付)。 是月 御国中きりしたん御穿鑿奉行に田中左兵衛尉を任ず(触)。
 4. 7 熊本の手取町より出火、40余人焼死ぬ(本・玄察・奉日)。 10 熊本地方大地震(玄察)。 17 細川綱利、將軍の紅葉山参詣に供奉す(実紀)。 是月 火事の後、御直家は御城近所に、陪臣は外曲輪に居住し、屋敷が入交らぬようにす(奉日)。
 5. 18 綱利、江戸を出発、12日目に大坂着、6月7日鶴崎着、6月10日熊本着、6月11日帰国のお礼として西山八郎兵衛を派遣(奉日、本)。 22 大雷雨大水(玄察)。
 6. 13 家老沢村宇右衛門友好病のため辞職、座配は今迄どおり、10月7日死去、61才(奉日・本・先祖付・家譜続)。 15 細川左京(修理・忠利三男)に新知2万石を給し、長岡半左衛門・長岡与八郎に2千石宛加増す(奉日・本)、8月1日細川左京に当年物成出来るまで米千石を支給(奉日)。 家中長らく10歩1召上げられ、殊に近年は5歩1となり、家士の迷惑大なるにより当暮より5歩1を免ずる旨達せらる(家譜続)。 23 五家庄のものの初めて藩主に謁す(家譜続)。 27 綱利、白川にて水遊す(奉日)。 是月 日田代官支配地の物成収納方を命ぜられ、牧島半之丞、松野亀右衛門らが任に当る(度譜)(但し家譜続・肥・本は7月12日に記す)。
 7. 10 諸宗寺院法度達せらる(諸帳2)。 11日僧侶心得等之儀に付公儀の触達せらる(諸抜)。 13 幕府、江戸証人の制を廢す(実紀・家譜続)。 23 上条角大夫日田御目付鉄砲衆27人召連、宇佐川四郎左衛門日田代官・郡奉行4人に各鉄砲衆5人宛付て出発(奉日)。 28 藩主明朝錢塘へ出発(奉日)。
 8. 1 細川将監に引越料支給(奉日)。 是月 明暦元年より寛文4年迄10カ年撫高100石に付物成30石に満たざる家士15人に不足分米を支給す(奉日)。
 9. 一 是月、高瀬繁根木宮神事の警固を側筒4人に命ず。(奉日)。
 10. 7 沢村宇右衛門(家老)没、年61(肥人)。
 11. 2 藩主監物宅へ、12月18日も(本)。 28 南条左近元和家老に列し長岡の称号を許さる(家譜続)。 29 夫仕は惣庄屋の手形によるべしと達す(林制8〜9)。
 12. 6 恵良村の隠田非法につき取調べ(神雑140)。
- 是年 在々にて水籠作るを禁ず(大覚)。 矢部手永の年貢米を熊本御蔵入とす(大覚)。 9月10月は百姓召使わぬ筈の処、所々茶屋作事に使ったので1人1升の飯米を支給す(大覚)。 俵物他国出は5厘懸運上、他国より輸入は前々より停止、但し百姓飯米なく他国より雜穀買入は5厘懸(大覚)。 長洲新開1町3反余畝、年貢1反に付米3斗6升、畑1反に付銀6匁宛とす(大覚)。 佐敷町問屋口錢運上銀360目にして受銀に仰付らる(大覚)。 水前寺御茶屋繕出夫

5月6月は飯米1升下さる(大覚)。奥村次郎右衛門郡方奉行人に加えられる(大覚)。代官口米、高1万以上は35名、1万石以下6千石以上は30石、6千石以下3千石以上は25名(大覚)。大里儀太夫、知行下免ゆえ郡奉行在勤中は三ツ成に足遣す(大覚)。御用日きまる(大覚)。川尻へ馬大市立つ(玄察)。芝居の者下り、踊り狂言あり(玄察)。

寛文 6 (1666) 丙午(家綱)綱利

1. 6 長岡佐渡寄之歿す、年50。2月2日嗣子帯刀直之相続し佐渡と改む(家譜続)、寄之死去の時、直之江戸にあるを以て1月21日志水伯耆に一時八代城番を命ず(本)。11 細川越中守入用につき、石井五郎左衛門より銀100貫目借用す(神雜105-3)同じく丁銀50貫目を借用す、利足1ヶ月1貫目につき10匁。(神雜127-3)。24 紀伊大納言頼宣夫人(加藤清正の息女あま姫)痘瘡にて死去、年66(実紀)。是月 奉公人の給銀をきめ、人置奉行3人を任ず、また質奉公人各別捨銀は男女とも停止す(触)。
2. 13 江戸で菊姫誕生(本)。豊後、豊前公領に派遣していた家中の者引き上ぐ(本)。18 来月参向公卿の館伴、新院使は細川豊前守興隆命ぜらる(実紀)。是月 熊本城木形出来(本)。今度御公領郡奉行に任命の村山・長谷川兩人、去年より30石手取の所を35石手取とす(奉日)。綱利14日の晩、米屋権兵衛方へ、16日の晩油屋吉左衛門方へ(奉日)。
3. 3. 上知の者及び20石手取の者迄は在宅許可。借物返済の上で熊本へ帰る事(家譜続)。4 綱利参勤のため熊本発、14日鶴崎出船、28日大坂着船、4月13日江戸着、15日將軍に目見(奉日・本)。
4. 13 長岡佐渡江戸着・先祖以来の公義知行書を受領す(家譜続)5月15日佐渡登城これを謝す(実紀)(佐渡の登城を本は4月15日とす)。18 細川豊前守興孝子万千代興栄初見し奉る(実紀)。
7. 21 綱利、弟若狭守利重に知行3万5千名を内分し、御蔵米を以て給与することとす(新田支藩、江戸鉄砲洲に邸宅あり)(寛政・本・度譜・奉日)、其以前は御賄米5千石宛(度譜)。是月 日田新任代官着任につき本藩係員引き上ぐ(家譜続・本)。
8. — 是月、八木一郎右衛門北条新蔵より御頼につき知行300石にて召出さる(奉覚)。鶴崎御番代、佐分利加左衛門に代り佐分利兵太夫を任ず(奉覚)。
9. — 是月、大坂蔵屋敷御用仁保太兵病気につき、後任を中村兵介とす(奉日)。六所大明神祭礼に当町中の者が差上げた参銭目録を提出す(奉日)。細川丹後守へ宇土郡内に鷹場を進む(本)。
10. 29 將軍家より細川越中守らに鶴を下さる(実紀)。
11. 25 幕府、大内裏築地成工につき諸大名に課銀す、本藩割当銀60貫4匁4分(実紀・家譜続)。是月 田中左兵衛氏久、藩主に諫書数条を上る。(本・家譜続)。

是年 千石水夫米を100石につき3石6升6合とし、また塩納高を定む(郷史演2)。玉名郡塩浜上1反につき塩1石3斗、中1石2斗、下1石1斗(大覚)。菊池山奥在々熊本蔵入3斗6升俵を3斗俵とす(大覚)。大小麦値段付あり(大覚)。高瀬川口より高橋迄積廻の蔑運上の事(大覚)。御年貢方銀上納仕様の事(大覚)。八代詰知行取への替知は南郷・小国・阿蘇・矢部4ヶ所にて渡下

さる (大覚)。御年貢方御双場の事 (大覚)。在々町麴堅米、酒米100石に麴米40石迄は算用通に仰渡され、40石宛より上の分は通し申さず (大覚)。前々より御知行割、1、妙解院代寛永17年迄は土免にて4ツ成割、2、真源院代寛永18年より正保2年迄同割、3、正保3年より寛文4年迄は前3ヶ年の秋免の内下り免1年を除き2年の秋免をならし4ツ成割、4、寛文5年より土免割 (大覚)。著書目録 職人一首 歌文 永崎仁兵衛一見。

寛文7 (1667) 丁未 (家綱) 綱利

1. 一 是月、藩主厄払の祈祷両社にて執行・鉄砲衆・熊本惣町中・長柄衆など祈祷 (奉日)。
2. 22 駿府加番細川豊前守興隆大病により医員井関玄悦常甫をつかわさる (実紀)。
- 閏2. 28 巡見使に暇を下さる。九州地方は使番岡野孫九郎貞明・書院番井戸新右衛門幸弘・小姓組青山善兵衛正康 (実紀)。是月 長岡左近より中小姓元服の手續きを奉行所に問合わす (奉日)。
3. 11 鉄商売天野屋左太郎1人に免許の処、川尻横町鍛冶共13人連名で商売自由を願出る (奉日) 寛文11年7月鉄商売自由となる (奉日)。
4. 一 是月御高札浦々へ立つ (肥)。下旬より5月初旬にかけ大雨出水 (玄察)。
5. 19 藩主江戸発、6月1日伏見着、同2日大坂着、4日出船、7日兵庫出船、12日鶴崎着船、13日発足久住宿、14日内牧、15日熊本着 (奉日)。江戸発を5月9日、熊本着を6月5日又は12日などとするもあり (本)。
6. 一 是月、諸国巡見使の内浦廻りの上使、薩摩より来り、肥後沿岸を筑後へ通る (実紀・家譜続)。
7. 4 米田新十郎是正、家老に列し助右衛門と改む (家譜続) 3,500石加増されて5,000石となる (本)。25 諸国巡見使の内陸廻りの上使、この日南関着、8月1日熊本着、同13日薩摩へ入る (奉日)。
8. 4 藩士討死の者の跡目は、本人を除いて三代迄相違なく相続の事と定めらる (本・奉日)。13 藤崎宮神事、15日藩主神事能を見物 (奉日)。21 藩主甲佐方面巡覧、23日帰館 (本・奉日)。是月 西国巡見の上使、岡野、井戸、青山の3名、熊本、八代、佐敷、球磨を経て薩摩に赴く (家譜続・本)。
9. 4 天守銀につき奉行所への報告あり、即ち正保4年6月20日より承応2年7月13日迄残らず払切り、承応2年7月12日以後同3年、明暦元年は納り銀なし、明暦2年2月29日より納り、寛文3年9月3日まで請払仕り、残る分は納置くと (神雑 55-1・家譜続)。是月 六所大明神の参銭を当町中の者上納、奇特のことにつき奉行よりこの旨町奉行に申達す (奉日)。
10. 10 藩主八代城へ赴き数日滞在、この時より城内番士常詰となる (本)。15 細川豊前守興隆ら駿府加番を終り帰謁す (実紀)。是月 長岡佐渡借銀を願う (奉日)。本因寺看坊長遠坊、不受不施義を守りしため本国の駿河西山本門寺より国外追放を求む (部の寺2) 長遠坊は京都に上り事情を訴える (神雑174)。
11. 6 藩主、高瀬に赴く (本)。沢村大学屋敷 (後の作事所) 焼失す (本・家譜続)。12 細川若狭守利重へ細川豊前守興隆の息女嫁す (本)。28 藩主鷹つかい (奉日)。是月 中摩助次郎を鶴崎郡奉行に任ず (奉日・奉覚)。郡廻目付の派遣を決む (奉日)。小笠原右近太夫死去、御法事の使者は有吉大蔵貞之 (本)。

12. 一 付火流行につき廻番を増員す (奉日・奉覚)。
 閏12. 一 全文7ヶ条の肥後藩廻船式目出さる (熊史1-29・小森田家)。
 是年 御小人小頭今年以後苗字を称せしむ (本)。火の用心のため花畑館長屋並に塀を互葺に改む (本)。煙草を本田に作るを禁ず (肥)。公義より万事儉約すべき令出されしにより家老より達す (大覚)。玉名郡年貢塩代米100石に付7石宛上納 (大覚)。御郡より召上の鮎、銀1匁につき20宛 (大覚)。南郷、菊池、合志、益城より上納の萱代米きまる (大覚)。惣庄屋野開運上以前は、御赦免の処寛文4年より運上懸 (大覚)。熊本の者御郡にて誅伐の者は御郡馬に乗せ、追放の者は町方馬に乗せると決む (諸拔)。阿蘇大宮司友隆官位のため上京す、吉田家より矢部巫中に神楽男の免許を得 (郷歴)。著書目録 国郡一統志 地誌 北鳴雪山。

寛文 8 (1668) 戊申 (家綱) 綱利

1. 19 光姫様江戸で御誕生 (本)。29 細川将監興之卒す、年24、嗣子なきにより弟左門興知新知1万石を以て相続す (家譜続)。是月 白気西方に見ゆ (本)。
 2. 4 江戸の大火で宇土支藩主邸類焼 (本)。7 細川豊前守興隆ら、去る4日両国橋の火事消防に尽力、老臣褒詞をつたう (実紀)。23 本田以外に煙草栽培許可 (家譜続)。27 島原城主高力隆長改易のため、長崎番船は本藩のみの受込みとなる (翌9年9月松平氏が島原を受領、旧制に復す) (実紀・肥・本)。28 藩主、監物宅へ御入 (本)。是月 相良頼喬江戸参勤につき初めて川船で八代に下る (蔓綿)。

是春 大風4回、2月4日のもの最も烈し (玄察)。

3. 4 綱利熊本発、4月4日江戸着 (本) 4月15日参勤 (実紀)。是月 公義より在方支配に関する法度達せらる (県史近3-4661)。熊本火事の節、鉄砲頭衆は今迄勤めてきた火番無用となる (触)。島原城主高力氏改易につき下向の上使への付人を遣わす (本)。
 6. 6 荒尾手永原加村塩浜 (寛永20年、正保3年、慶安4年開) 帳を作る、畝数2町4反2畝3歩 (古庄)。是月 平野清兵衛を江戸に派遣 (本)。
 7. 21 藩内通用の櫛を8月より京櫛に改め、俵入は京櫛3斗5升入を1俵と定む (家譜続・本・触)。是月 阿蘇山鳴動、年をこえてやまず (肥国誌下-530)。代官を惣庄屋手永単位におく (城南326)。
 8. 一 綱利相州塔沢に入湯す (肥) (本は10月入湯11月6日帰座とす)。
 10. 1 切支丹大西村七左衛門以下男女20人を預る (神雑188)。15 豊後国にて代官隸下の民200人、本藩領民74人、中川佐渡守領民70余人、稻葉能登守領民30余人、天守教を奉ずるにより囚獄せらる (本藩「宗捕書」には本藩の分を64人とありと) (実紀)。18 作事所を元沢村大学屋敷跡に移す (家譜続)。是月 藩士の縁者帳作成を命ず (触)。
 11. 21 綱利、將軍家より鶴を賜う (実紀)。是月 諸郡きりしたん取締の影踏、血判を命ず (触・本)。
 12. 一 是月、島原在番中の臼杵城主稻葉通信、任務を終り昨日川尻上陸、1泊の上熊本通行、妙解寺・泰勝寺に参詣 (家譜続)。

是年 有吉内膳、大蔵と改む (本)。衣頼は型なしに染めるよう令し、また紫染めは禁ず (城南499)。久住在々よりの年貢米は3斗入俵とす (大覚)。新地方

物成を本方納とす(大覚)。俵詰は米・大小豆・小麦は3斗5升入、大麦・粟・蕎麦・胡麻・稗は4斗入とす(大覚)。諸役人加扶持を差止む(大覚)。木葉町宿継御赦免(大覚)。本年召籠の邪宗門惣人数男36人女48人、うち男7人は長崎送り、男20人女10人は籠中に病死(奉日)。日向銀山の御用多きため詫摩、南郷の宿継村は諸役御免なりしも、近年は銀山御用なきため諸役を復活す(大覚)。

寛文9 (1669) 己酉 (家綱) 綱利

1. 6 立田山の猪多く作物被害あるため猪狩を行う。猪3頭・兎など獲る(奉日)。是月 南郷・阿蘇・久住・小国・野津原・鶴崎の百姓共食料など難儀につき、代銀は秋上納にして塩4石程渡す(花奉)。高麗門に新牢出来す(本)。中根平兵衛与足輕、本妙寺谷より手負猪を切留め奉行所へ差出す(本)。
2. 13 淀川浚渫につき、参勤の通路とする、西国の諸大名に課銀す(実紀)。是月 大坂出航は船宿手形に大坂留守居役の加印を必要とす(奉日)。去年公義より西国は神善四郎秤を用うようとの触あり、当国平田庄三郎・右田庄右衛門ら秤以外は従前通り度量衡商売を許可さる(奉日)。
3. 一 是月、諸郡廻衆へ月番より申渡す(奉日)。革簡試打あり不残失敗(奉日)。
5. 一 是月、日蓮宗不受不施派の宗門改めにつき達す(触・肥)。
6. 18 緑川方面大洪水、諸所の塘切れ人馬死す(玄察)。
7. 3 綱利大病により幕府より使番千本兵左衛門和隆を遣して慰問あり(実紀)。綱利厄年の祈祷につき神護寺へ問合わす(奉日)。15 僧鉄眼一切経翻刻に着手す(肥)。
8. 4 幕府、全国に京桝を使用させることを令し、閏10月以降は古桝の使用を厳禁す(実紀)。11 是日より翌日にかけて北東の大風雨にて大洪水、1,432戸流失など被害多し、その後10月まで旱天続く(実紀・玄察)また人吉地方も当日大洪水(蔓綿)。13 細川槌千代、熊本で誕生(本)。18 沼田小兵衛、志水伯耆、沢村大学、田中左兵衛・小笠原民部ら組合にて藤崎宮で祈祷す(奉日)。
9. 6 去る4月18日綱利へ就封御暇の処所労のため延引、この日江戸発、10日大井川を渡り、19日大坂着、20日大坂出船、28日鶴崎着、10月2日熊本着(奉日・本)。11 明月21日女御入内により京に献物の制を令せらる。細川綱利らは禁裏へ金3枚、女御へ銀20枚ずつ(実紀)。
10. 6 家士中陽明学を信奉する者、切支丹信者の疑ある者等に暇を給わる。御小姓頭朝山次郎左衛門、奉行触小笠原勘助、同辛川甚太郎、同高原左五右衛門、医師大庭慶間、同北島三立(雪山)、歩小姓頭奥田勘右衛門らなり。家老長岡元和之を極諫し、遂に病気の故を以て上知蟄居す(家譜続・本・肥陽明)。7 長岡左近、病気につき上知を命ぜられ、毎年米2,000俵支給となる、翌10年4月9日屋敷を召上げらる(奉日)。是月 家中侍衆の女房娘など他国居住のため、出国の場合は御印にて、当分立帰などの場合は御家老中判形にて出すべし(花奉)。家中侍衆の病死者の家屋敷は向後妻子には借さず(花奉)。江戸へ召置きの番具足100領のうち3分2は損ず。修理費は熊本より京都が安い、熊本の方が丈夫である故、熊本で修理する(花奉)。
- 閏10. 一 当年の大積目録1通と先御兩代の御積目録4通について過不足の札をつけ差上ぐ(花奉)。

11. 5 長岡監物病身につき御役辞退のところ、そのまま自由勤務を命ぜらる (家譜続)。元家老長岡左近剃髪して道固と称す (肥)。8 細川綱利より幕府へ八代密柑を献ず (実紀)。23 同上 (実紀)。
12. 2 松向寺様 (忠興) 25回忌 (本)。15 南条以心を明日長崎に遣されるので籠乗物を用意のこと。使者は松野亀右衛門・佐藤安太夫 (花奉)。25 松姫様江戸で誕生 (本)。是月 南郷の百姓飯米なく、たぶの葉も食つくしたとの事で人を遣して調査す (花奉)。参勤御供衆には道服を支給する慣行 (花奉)。
- 是年 寛文7年より財津平右衛門奉行して造営中の阿蘇宮完成す (先祖付)。男成杜修覆の郡中奉賀の件につき、阿蘇・益城二郡に紙面廻る (郷歴)。長岡半左衛門より知行上知を条件に借銀を願出る (奉日)。新知増加、10月迄拝領はその年の物成支給、11月1日以後は翌年の春田より支給 (大覚)。玉名郡大島村本井手村と三池領早米木村との境目出入。なお三池領との境目一件は寛文12・13年、卓享1～6年にもあり (細分正167～8)。

寛文10 (1670) 庚戌 (家綱) 綱利

1. 1 年頭御礼、一門、大組頭衆ならびに常々朔日・15日・28日に罷出の衆、2日は組付の侍その外城にてお礼の侍、3日は八代衆・佐敷衆・陪臣など (奉日)。妙解寺・泰勝寺のお礼は2日のところを6日に変更 (奉日)。10 国中地侍・一領一匹、お花畑にてお礼 (奉日)。23日には五ヶ庄の5人お花畑にてお礼 (奉日)。29 惣門中と心光寺出入について善導寺あつかいに付き、覚書を提出 (神雑95—12)。
2. 6 藩主高瀬方面に鷹野 (本・奉日)。22 阿蘇谷惣庄屋内牧孫左衛門・坂梨助兵衛、今晚御城の牢へ召籠、内牧惣代太郎佐衛門・十兵衛は町牢へ召籠 (奉日)。28 細川豊前守興隆次男権之助和等、初見の礼をとる (実紀)。29 藩主監物宅へ御入 (本)。是月 清成武右衛門奉行所に出願、お礼の沙汰を依頼す (奉日)。藩主本妙寺谷の川で川狩 (奉日)。水前寺御茶屋見物は藩主在江戸中のみ許可、在国中の見物は大身歴々でも禁ずる慣例なり (奉日・奉覚)。側弓・鉄砲・外様弓・鉄砲の人数大分不足なるも、各別の事につき抱たぎするようとの藩主の意向達せらる (花奉)。諸役人へ申渡の稜々仰出さる (本)。真源院 (光尚) 時代の入目の書付、切米取衆組々の人数の書付、当代の入目人数に引合せ過不足の目録を仕立てて提出す (花奉)。氏家甚左衛門を鶴崎に遣わし御船手及び御郡方支配を命ず、鶴崎御番代の始まり (家譜続・本)。在々人飢餓の聞えあり、是月米銀を給する者あり (本)。
3. 10 水前寺作事、元田八右衛門が奉行として指揮す、日雇賃1日8分の定めを1匁宛とするも応ずる者なく、鉄砲衆・長柄衆を主としその他家中役人を動員す (奉日)。14 飽田郡河尻若宮の社家宮川宮内と荒木主水の争論について批判を下す (神雑57—11)。25 浄土宗往生院・阿弥陀寺・同隠居・安養院の4ヶ寺曲事につき追放と決定、心光寺と20ヶ寺の出入についても、心光寺も20ヶ寺も共に善導寺預りとす (神雑153—1・20—4)。是月 御台所方1ヵ月に11貫目余とす、但し薪仕置物は別とす (花奉)。納戸銀の取扱について、御前御用銀として15貫目ほどとすること、御作事方御銀高を20貫目減少させることなどを議す (花奉)。
4. 3 先に追放の4ヶ寺の帰寺につき江戸の意向を伺う。藩主は御構なき故家老

中での検討を善導寺より依頼（神雑28、年号は不確実）。是月 安養院・阿弥陀寺より御本山役者中へ、心光寺との出入につき善導寺より追放をうけた事に付き覚書を提出（神雑 95 - 13・神雑 1 - 95 - 11）。豊後高田鍛冶の刀脇差値段付（奉覚）。熊本浄土宗僧侶間に宗論あり（玄察）。忠利公、光尚公御両代之論旨を再認す（本）。

5. 10 幕府在町にて酒を造り、また辻売・振売を禁ず、9月15日重ねて醸造・煙草栽培につき嚴重取締を命ず（「郷史演」第2巻に是年川尻・高瀬・高橋の外揚酒商売禁とあり、また「玄察」の是年6月にこの記事を記す）（実紀）。14 屋敷拝領の元田ら3人に花畑へ出頭を達す（奉日）。15 従来病死者の跡役儀について、跡目なき時も後家にて8月迄は役儀をつとめていたが、以後跡目なき者は役儀を申しつけぬものとす（花奉）。是月 長岡佐渡、八代往来のため益城郡道上村替地を願う（奉日）。
6. 9 死者の跡目の件、扶持方の件、郡方の件などについて書き出し差し出す（花奉）。21 郡奉行・惣庄屋・小庄屋勤方心得を達す（部の国郡4）。22 藩主佐渡下屋敷へ出座（奉日）。25 出火の節条々を制定（奉日）。晦日上江津村、下江津村、上牟田村、下牟田村などの獵場についての覚書を出す（神雑202）。是月 山ノ獄堂建立、社銀のうちにて許可す（花奉・花日）。白川筋運賃舟、町人ども申請通り開通を許可す（奉日）。五ヶ庄疫病流行、兵糧もなく飢に及ぶにつき小麦10匁遣わす（奉日・本）。米900石銀にして60貫目、但し江戸双場は100目に付1石5斗宛（奉日）。御国中揚げ酒停止、まず当秋まで差止めて様子を見ることにす（花奉・花日）。新知加増之御書出仰出る（触）。火事場駈付の儀につき仰出さる（触）。新知・御加増・親の跡目などの書出しを命ず、また各郡ごとの惣高・村数・人数その他の様子などの書出しを命ず（花奉）。御米払の時期、当年の作毛に付き江戸へ報告のこと、長崎御蔵に不断4千石ほど入置くことを命ず（花奉）。
7. 2 御郡奉行・御代官・御惣庄屋・御内検・小庄屋の勤め方につき簡条書渡る（肥）。長岡監物三男米田甚内是員部屋住のまま家老に列す（家譜続）。3 奉行瀬戸五兵衛・御郡方専職に転ず（本）。4 熊本中火事の節御城門など馳付べき者などを定む（部の災事・本・触）。藩主参勤に先だち、留守中の政務・修養などにつき指示す（家譜続）。5 藩主参勤のため熊本発、7日久住発、8日野津原発、11日鶴崎出船、木曾路通行、8月7日江戸着、8月9日登城参勤す（奉日・本）。27 豊作の祈祷につき、町奉行より奉行に指示をもとむ（奉日）。是月 側組弓鉄砲の稽古を追廻田畑にて行うこととす（本）。走者ある時差図なく罷出ざること、喧嘩ある時は2・3軒の者出会うべきことなどを令す（触）。長岡与八郎・長岡半右衛門連名で明屋敷拝借を願う（奉日）。米田甚内・藤崎神事の馬を出すことを断わる。8月に有吉大蔵・長岡半右衛門も同様（奉日）。今迄の服忌令をやめて公義服忌令を用いる（本）。両御寺にて御尊霊様方御法事の節、使番小姓組祐筆詰方はじまる（本）。御山奥津山より5里外は御蔵納中より駄賃米を割賦す、所々継飛脚給米は在々惣割賦とす、鷹匠餌割は合符を発行す、鷹餌犬割符御免、火事の百姓には竹木を拝領、在々宮山の竹木は宮の造営にのみ使用すること、出作百姓の保護、屋敷廻り竹木は自由伐採を許可す（林制10）。

寛文11 (1671)

8. 8 上使御入 (本)。 9 綱利、江戸城で参勤 (実紀・本)。 16 藤崎神事無事終了につき大夫細三郎左衛門ら樽肴を持参す (奉日)。 29 鮑田郡の野開には一部たばこを耕作中につき運上銀を増す (奉日)。 是月 八幡神事で怪伐人を出さぬよう申し渡す (奉日)。 六所社家行藤内匠、祭礼の賄を辞退 (奉日)。津志田村河原にて石火矢練習あり (玄察)。 亀井村にて両頭の亀を捕え差上ぐ (本)。
9. 一 熊本町の判屋2人のところ今後3人とす (奉日)。郡廻横目を任命す (奉日)。
10. 一 是月、坂井弥兵衛・狩野四兵衛を密柑奉行とす (奉覚)。
11. 21 綱利、八代密柑を献ず (実紀)。
12. 29 熊本心光寺住持要誉、前代未聞の悪行により追放を命ぜらる (神雑73-1)。 是月 御郡方瀬戸五兵衛より、本藩入国のはじめ運上を半減した楮・茶・漆・桑・櫨・茶運上の増額を建策す (家譜続)。

寛文11 (1671) 辛亥 (家綱) 綱利

1. 一 是月、内牧に町を立そえる (諸帳5)。 下旬熊本大火、侍屋敷、足軽及町屋敷500余軒焼失す (家譜続)。
2. 2 従来切支丹改は誓詞血判の上影踏を行なわせていたが、今後は1ケ年に1度影踏だけに改める (肥)。 14 八代城下に前月下旬火事あり、500戸焼失するという (実紀)。
5. 25 是年3月5日、天草領主戸田伊賀守関東に替地となり、天草は再び天領となる。代官小川藤左衛門小身のため、この日幕府より切支丹の儀などで必要あらば附近諸藩に出兵の心付を命ず。このため本藩は物頭以下を派遣、在番させる。 (実紀・家譜続・天草譜)。 30 綱利、江戸出発、7月2日熊本着 (奉日・本)。 7月3日御使者木下三郎左衛門 (本)。
6. 27 林孫兵衛・阿蘇御田祭礼の名代をつとめ帰熊 (奉日)。 28 細川豊前守興隆参勤す (実紀)。
7. 4 太守腹痛につき奉行・目付同道にて見舞う (奉日)。 5 休無息女玉甫の知行高之覚 (奉日)。 13 揚姫様御誕生 (本)。 21 奉行、藩主の機嫌を伺う (奉日)。 24 侍衆死去後の屋敷は三七日を過ぎてから差上ぐべしと沙汰あり (奉日) (本は30日過ぎてからとす)。 28 段山舞台、定舞台工事完成す (本)。 藩主が方々に出る際、人夫費えなきよう郡奉行に命ず (奉日)。 是月中小姓の水泳をよくする者の吟味あり (奉日)。
8. 4 藩主、佐渡下屋敷へ出座す (奉日)。 19 是日と9月4日、7寸5分筒で100匁玉棒火矢の試射の結果報告、藩主甲佐川原にて御覧 (奉日)。 27 新一丁目に落書あり (奉日)。 28 住吉社に参詣した綱利の着想により、小島より牧山の麓付近に新地築造の設計をす (宇土史87)。 是月 綱利、是月より翌月にかけて4回甲佐に赴く (玄察)。 小原長兵衛ら棒火矢の打方を甲佐田口川原にて命ぜらる (奉覚)。 藤崎神事に長岡与八郎馬を出さず (奉日)。 矢部兵右衛門手永15ケ村の庄屋より、本年は豊熟につき御蔵納高に1歩進上したき由申し出る (花日・花奉)。
9. 15 綱利、甲佐より堅志田を経て日奈久に赴く (玄察)。 20 奉行瀬戸五兵衛・郡代洞院弥左衛門が出張し、新地の杭木を立てる (宇土史87)。 23 新三丁目別当善左衛門ら7名、熊本町中切支丹影響人別帳誓紙書物入の櫃19個の目録

を出す(神雑44-2)。本年4月の切支丹改につき、寺社山伏宗旨の本寺改めの書物箱の件の覚書を出す(神雑44-4)。是月 知行不免のため御足米を受けていた者は、今迄御譜請役を免除されていたが、今後は足米分の役をかけることとす(花奉)。

10. 5 綱利、甲佐に赴き数日逗留す(本・家譜続)。 14 綱利、河内へ赴く(奉日)。 21 藩主、監物宅へ赴く(本)。 是月 櫨の栽培を藩内に奨励す(城南452)。花畑裏の田に鷹の寄をつくらす(奉日)。
 11. 3 綱利、鷹野のため野津に赴き、7日八代、10日日奈久、12日野津、14日帰城(家譜続)。 20 川尻・高瀬蔵米の双場、銀100目につき2石1斗5升、同じく大豆は2石6斗(奉日)。 是月 紙不自由につき国中の櫨を他所へ売出さざる様に達す(触)。
 12. 8 藩主、高瀬に赴き数日逗留(家譜続・本)。
- 是年 小庄屋役を出精した者に、銀200目を無利子で借下さる(大覚)。阿蘇宮地村の内社領10ヶ年撫で定免とす(大覚)。諸郡野山などに櫨・楮など仕立るよう達す(大覚)。著書目録 巖殿観音縁起、諸家、池辺悰川。魚住道庵覚書、史伝、魚住道庵。長瀬助之進覚書、記録;長瀬助之進。

寛文12 (1672) 壬子(家綱)綱利

1. 1 是日より3日間、藩主新年の礼のため朝六ツに登城す(奉日)。 7 追廻にて鉄砲の打初あり(奉覚)。 18 家中借付の御銀米について、5ヶ年間取立てをやめ、当幕から来暮まで両年の延納を上申す(神雑139-1)。 是月 鍛冶永国に10人扶持を与え細工を仰付けらる(奉覚)。鶴崎浦奉行片岡新兵衛の跡役に加藤権助を任ず(奉覚)。
2. 5 花畑新御数奇屋にて備頭衆など16人、御手前の御茶を頂戴す(花奉)翌6日は奉行瀬戸五兵衛・平野清兵衛ら31人に(花奉)。 8 御花畑にて御備頭中に御茶を下され、心得方などの御意あり(本)。 10 藩主、田迎方角へ鷹野(奉日)。 19 藩主、油屋吉左衛門方より帰座の節、安田作丞より鍛冶永国の件につきお礼言上す(奉日)。大雪降る(気)。卯の上刻、八代城雷火にあい天守櫓、諸樓閣、兵器、火薬など焼失、死者29名(花日・奉日・奉覚・実紀・家譜続)。 21 藩主、長岡監物所に赴く(奉日)。 22 鉄砲100挺、長柄100本、大筒10挺、刀100腰、その他の品を八代城へ引渡す(花奉)。安田市助出頭しお礼言上す(奉日)。毎月11日・21日・晦日を御用日と定む(花奉)。託摩・益城・飽田郡内所々にて鶴・雁・鴨などの猟を許可す(奉日)。綱利熊本発、24日久住着、3月22日江戸着(家譜続・本)3月26日参勤(実紀)。 25 従来府内の火消番は4組なりしを6組とし月替り勤務とす(家譜続・本)。 是月 御物頭並に500石取以上の在宅を差止む(肥)。家中衣食住すべて質素を旨とすること、その他諸規則の厳守を命ず(家譜続)。竹部に出屋敷出来、御侍屋敷となる(肥)。笠岩古田の築造に着手、11月に潮塘築造に成功(宇土史87)。邪宗門改について、御侍御切米取まで毎月の触状に判形を仕ることなどを達す(触・肥)。家中の子供、町在の者、諸芸に達すべき心懸の者は申し出るよう命ず(奉日)。
3. 一 是月、熊本府中唐人町不動院本殿に落雷、本尊微動だもせずこと(肥)。宗門改につき家老中より申渡す(神雑128-2)。

延宝元 (1673)

4. 4 阿蘇北宮宝殿より炎上、拝殿ともに焼く、8月造営作事奉行の財津平右衛門賞せらる。延宝1年3月15日棟上、25日屋根ふき (奉日・家譜続・本)。
5. 1 將軍家より御鷹の鶴拝領、10月12日は鶴、閏6月26日は雪雀を拝領 (実紀)。
14 豊後鶴崎地方洪水 (家譜続・本)。是月 御天守米2,000石を貸付けることとし、天守には銀300貫大坂にて借入れ納置くこととす (奉日)。
6. 17 阿蘇御田祭礼の名代を小坂半丞に命ず (奉日)。21 江戸下屋敷工事出来是日藩主移転す (家譜続)。是月 本庄の笛吹平四郎の閉門を神事がすむまで赦免の願出さる (奉日)。
- 閏6. 4 細川若狹守嫡子江戸で出生、主馬助後に采女正利昌 (本)。7 六所宮造営につき来る11日に遷宮 (奉日)。14 在々田に虫入につき阿蘇・藤崎両社にて祈祷を命ず (奉日)。是月 清高院様・若狹守様熱海で御入湯、箱根、江の島、鎌倉などを遊覧 (本)。乞食に合札をもたせること郡奉行の処置にまかせることとす (奉日)。薩摩家老中より書状来り、公義流人が薩摩領分などに多数配流されており欠落の者あらば捕えおくべきよう依頼す (奉日)。
7. 7 石寺九兵衛江戸より下着、政治向など藩主の思召の書状持参す (家譜続)。
8. 25 熊本町の町人露屋弥兵衛、天草小宮地村にて新田築造を願出る (部の国部2神雑77-2)。27 藤崎宮の杜家宮坂出雲、在来の両部神道を改め唯一神道を唱えしため杜僧らに訴えられ、この日寺社奉行戸田伊賀守より閉門を命ぜらる (部の寺2、神雑137-1, 137-2)。
9. 18 明19日の河尻若宮祭礼につき口論などなきよう申渡す (奉日)。
10. 12 將軍家より綱利に鶴を下さる (実紀)。是月 是月前後領内の牛斃死するもの多く、明年6月に及ぶ (本・玄察)。
11. 27 花畑にて將軍下賜の鶴を頂戴 (奉日)。
- 是年 一領一匹開、他郡にて開の場合はその郡の百姓なみに運上銀上納のこと (大覚)。百姓は4・5・6・9・10月は召使わぬ筈のこと (大覚)。寺社・町人・百姓は必らず五人組を作り、邪宗門改めに責任をもたせることとす (『官職制度考』にはこれを五人組の始めとするも、寛永14年11月忠利より伊達政宗あての書状、「竹会記」の寛永16年4月奉行達により、その頃すでに五人組制あるを知るべし、「蔓綿」には寛永12年冬「九州商売人の往来を改め、国々五人組始る、亦三人組あり」と記す。著書目録 矢野三郎兵衛絵具秘方書 諸家 矢野三郎兵衛没後、門弟の作か。

延宝1 (9.21改元) (1673) 癸丑 (家綱) 綱利

1. 6 続助左衛門 200石加増され江戸留守居後に住ぜらる (奉日・奉覚)。是月 富田小左衛門、田中又助を鶴崎に派し、切支丹の者を召捕る (『宗捕書』にこの年切支丹の捕えらるる者20名とあるはこれに当るか) (先祖附)。
2. 一 沼田梶之助ら4人にお礼言上の着代の額を達す (奉日)。財政困難につき、稲葉美濃守に相談、簡略を幕府に願出る (本)。3月および9月にこの件につき奉行、諸役人に申達す (奉覚)。
4. 13 將軍家より御鷹の梅首鶏を拝領 (本)。18 綱利、就封の暇たまわる (実紀)。
5. 5 野原八幡で剣3腰盗難 (奉日)。8 禁裏炎上御見舞の使者を指立てらる (本)。11 この日と7月15日、玉名郡三池塚深瀬井手につき三池領と境論あり (奉日)。13 川尻岡町大火、152軒焼失 (奉日・本)。中旬 この頃より6月に

かけ折々洪水（実紀・玄察）。25 細川興隆ら大坂加番の暇たまわる（実紀）。28 幕府の指示により、参勤の際以外の贈答を簡略にし、参勤の従者を減し、城郭以外の修繕を見あわす（家譜続）。29 この12・3日領内洪水の由を幕府に注進す（実紀）。是月 長寿院より作事修了につき奉行中へ祝儀（奉日）。この月および7月、大筒の試打に成功（奉覚）。

6. 14 綱利江戸発、28日大坂出船、7月5日鶴崎着、7日鶴崎発、10日熊本着（奉日・家譜続）
7. 14 奉行、目付を召出し、御用日を5日、10日、16日、19日、28日と決定す（花奉）。23 筑後北の関にて、藤田助之進父子を前川勘右衛門打果し山名十左衛門助太力す（家譜続）。是月 藩主通行の際慮外なきよう申渡す（奉日）。
8. 21 長岡左門上知、在宅願を許可さる（奉日）。是月 鉄砲の師匠筑後より来る（奉覚）。
9. 1 この日より12日まで、地神経流に走り、なかまを外れた者に山瀬検校より帰座を説得、町牢に召籠られたのを更に説得した処帰座に応じたので身柄を検校に引渡す（奉日）。7 有吉大蔵より借銀返済方につき（奉日）。21 寅刻火の玉東より西にとぶ（玄察）。24 上御台所の諸事吟味は御側の者と堀田角丞・成瀬与三衛門担当、御馬方は柏原新左衛門、御鷹方は大木織部など諸担当を定む（花奉）。28 諸役人を奉行所によび財政緊縮を命ず（奉日）。
10. 21 讃州より天草へ欠落の百姓14人召籠めらる。28 天文23年以来、京都永源庵に預けありし細川頼有以来の器物、感状などを返却につき、永源庵に永世100石与うることとす（家譜続）。是月 若狭守へ歳暮、年頭その他機嫌伺いの書状を出すことを禁止す（奉日）。天狗講禁止（肥）。12月にも禁令（触）。
11. 27 小姓頭より明日大守通行の道筋を申来る（奉日）。是月 当年知行不作の者、いずれも25石手取とする旨惣銀奉行へ命ず（奉日）。他国者を屈出なしに同居せしむるを禁ず（本）。八代郡高子原新地起工、同3年成る、面積121町余、八代城焼失につき武備補充の資にあてるため築造（肥）。
12. 6 吉姫（綱利娘）誕生（本）。是月 御家中下々出替之儀、以後は2月2日切とす（触）。鷹の餌を以後は鳥餌にあらたむ（奉日）。花畑館の後方田畑に新御番所2カ所設置（本）。御鷹の餌に犬打を止められ唐鳩御餌付になる（本・度譜）。諸所浦々御番方の定詰を廃し、1年詰とす（本・度譜）。熊本御作事奉行以前は御番方より命ぜられていたのを中頃より御鉄砲頭兼役となる（本・度譜）。

是年 熊本作事方、河尻、鶴崎作事方、上御台所の積前は銀高請切とす、その他諸役所の算用について定む（花奉）。給人知仕立百姓も本高を作る時は夫役を勤めることとす（大覚）。夏、長崎へエケレス船渡来、交易を願うという（本）。寛永承応のころまでは、奉行のうちより郡方、勘定方と受持ちをつとめていたのが、郡頭、勘定頭と完全に二つに分離したのは延宝年中よりとの由（度譜）。

著書目録 永源師檀略記 史伝 僧 永源。

延宝 2 (1674) 甲寅（家綱）綱利

1. 1 藩主今朝六ツ時分登城、着座より小人頭までの礼を受く。2日は小姓組より留守居衆まで、3日は組付中小姓より切来取衆まで（奉日）。2 宇土郡浦へ阿波海部郡の男女36人、船にて来り当国に居住希望するも上陸を認めず（奉日）。18 瀬戸五兵衛役儀を断わりし処、花畑奉行所詰は御免、郡方御積方の儀まで

延宝3 (1675)

勤めるよう命ぜらる (奉日・奉覚)。28 上益城郡仏カ原村で切支丹らしき者を発見す。2月7日同所庄兵衛家内より見分け難き絵像13枚を熊本へ送る (花日・花奉)。是月 大阪より鉄砲打来り弟子をとる (奉覚)。

2. 1 綱利、昨年7月23日の関事件は、法の照らすべきものなきたため既往は咎めざるも、向後は注意すべしと諭す (肥)。2 生駒新九郎奉行に任ず (本)。10 藩主留守中の御用并御機嫌伺の書状の宛名人を指定す (奉日・本)。11 藩主、熊本発、15日鶴崎着、3月7日江戸着 (本・奉日)。3月15日参勤 (実紀)。是月 籠舎の者ども、軽罪の者は本源院様 (光尚) 御法事の節に助命、重罪の者も今一度吟味すべき旨藩主より仰出さる (花奉)。
7. 19 御鷹の雲雀を將軍家より拝領 (本)。是月 薩摩金山よりの欠落人は前例通り惣庄屋より先方国境番人に通報して引取らせ、郡奉行は関係せず (奉日)。
8. 10 細川興隆ら大坂加番を終って將軍に帰謁す (実紀)。17 是日より3日間肥後大風、人吉藩にてもこの日大風雨洪水 (玄祭・蔓綿)。是月 矢部仏カ原村の百姓らの切支丹一件、類族の關係上幕府より渡辺大隅守出張し、仏カ原村、高月村、安永村、阿蘇郡方が野村などにわたり百数十人を捕え、この月首魁9人を誅伐し長六橋にさらす (家譜続・本)。
10. 27 初代都甲太兵衛秋門歿す (肥)。
11. 4 綱利、將軍家より鶴をたまう (実紀)。

是年 矢部兵右衛門、仏原村結城半大夫召捕のため彼地へ到る、彼兄弟遁れがたく自殺す (郷歴)。在町受酒商売並びに参宿人など錢、土産停止の事 (大覚)。諸郡野開、今迄は自分勝手に荒野に杭をうち、希望の百姓に開かせていたが、今後は禁止し、百姓には希望せぬよう触を出す (大覚)。屋敷地子銀、1反に50目上納を命ず、但し5歩以下の所は免除 (大覚)。給地百姓を誅伐の際は郡奉行に届出の上誅伐すること、百姓を奉公人としていた場合も誅伐の場合は同様に届出の上のこととす (大覚)。 著書目録 仏原庄屋源左衛門覚書 記録 仏原庄屋源左衛門。

延宝3 (1675) 乙卯 (家綱) 綱利

1. 14 菊姫 (綱利娘) 松平左京大夫嫡子大七郎と縁組す、閏4月22日に結納 (奉日)。22 阿蘇山已刻に鳴動、黒煙有光石上る (肥国誌下530)。是月 例のごとく本丸において御礼あり (奉日)。
2. 20 綱利の妻死去、年31 (本・度譜)。22日幕府より弔使を遣わさる、この息女頼重の息女なれば光圀卿よりも弔使を遣わさる、この息女は実は徳川頼房卿の女子なり (実紀)。是月 盗人横行につき、田畑より山崎への追廻の木戸は藩主在国時のごとく閉めおく様命ず (奉覚・奉日)。3月4日盗人多きため小路廻の鉄砲衆を増員 (奉覚)。
3. — 飽田託麻、玉名、山本、山鹿の4郡奉行に各郡に出向くよう申し渡さる (奉日)。
4. 10 筑紫左近重門の妻死去、79才、細川幸隆の女なり (本)。26 伊藤権兵衛正次遺物配り、出自についての覚書を出す (神雜・無番13号)。是月 緑川洪水17度 (玄祭)。松井氏、下松求麻に立山を願い出る (林制11)。

閏4. 5 綱利、就封の暇たまわる (実紀)。是月 筑紫左近室門乗院死去につき知行上目録を同権左衛門より提出す (奉日)。

是夏 飢饉(本)。

5. 一 志水仁兵衛(金工)没(肥人)。
6. 一 米穀高値につき末々の者困窮、御蔵の麦を放出す(奉日)。祇園・藤崎神事能について達(奉日)。竹宮祭礼につき押えとして足輕2人を派遣す(奉日)。
7. 16 山鹿湯町祭礼、大川渡船沈没、男女19人溺死す(肥)。是月 西岸寺下河原にて相撲あり(奉覚)。
8. 22 綱利江戸発、9月17日鶴崎着、同21日熊本着(イ22日)閏4月5日暇たまりしも清高院暑気中介抱につき出発延引す(本・度譜・家譜続・奉日)。
9. 2 家老米田甚内乱気につき上知、12月10日死亡、継絶(奉日・本)。22 新二丁目惣兵衛、稲葉内記の侍女、息子三右衛門につき御尋ねにつき申上ぐ(神雜77-3)。是月 この月より御積書米良甚助、御近習にて段々取立、御勝手方御用専ら相勤由(度譜)。
10. 4 山名十左衛門重澄、城代を命ぜらる(先哲)。是月 藩主、監物下屋敷へ(本)魚値段高値につき熊本中に15軒の間屋を定むることとす(諸拔)。百姓の子供は他国へ養子に遣すこと前々より禁止(諸帳4・諸拔・大覚)。歩小姓のうち定役付は組を差除き、奉行より諸触を出し、欠人は抱次ぐべし(花奉)。従来 200石以内の者で物頭となりし者は 200石に加増し、300石以内の者で御使番役になりし者も 300石に加増し来りしが、以後は役料米を加えず(花奉)。山本郡円台寺村の拝殿再興願を許可す(奉日)。
11. 一 これまで知行高の役高に及ばざる者は知行を増額せられたるも、以後は役料米下付に改めらる(本)。家老および奉行の寄合日を定む(本)。服部武兵衛・小林半太夫奉行に任ず(本)。所々番所のうち知行取を命じおりし所、郡浦以外は佐賀関と同様に1年代に申し付くこととす(花奉)。月番を勤める家老衆が少ないので、以後は前のように奉行所に勤めるようにすること。奉行には役料を増し、知行高 300石の物成を役料とす、また目付も役料増にし 100石の物成を役料とす(花奉)。
12. 13 丁銀 300貫目の預り手形を高木彦右衛門(長崎商人?)に出す。利は10貫目につき 100匁とす(神雜69-4)。22 有吉大蔵貞之隠居して道雪と称す。嫡子四郎右衛門貞親家督相続す(家譜続・本)。四郎右衛門の合力米3000俵を大蔵の隠居料とす(奉日)。23 丁銀50貫目の預り手形を高木彦右衛門に出す。利は10貫目1ヶ月 120目(神雜69-4)。是月 八代泰嚴寺を宗雲寺へ移すことに決す。これ迄泰嚴寺にありし三斎(忠興)の御霊屋は焼失せしゆえ泰勝寺に立てることとす(花奉)。長崎町年寄高木彦七郎、水前寺御茶屋を拝見す(奉覚)。八代染皮屋兵右衛門、米10俵拝領(奉覚)。

是年 御廬にて病馬多く、正蔵院に祈祷を命ず(肥)。天下一統の飢饉なり(郷歴)。松野八郎左衛門、御番頭・御奉行職に任ず。奉行奥村次郎右衛門の名この年よりなし(本)。牧野安衛門山鹿郡奉行を御免、諸郡御免方御用を命ぜらる(大覚)。御国中揚げ酒停止の処、木山町米屋は冥加金指出良好につき上 酒御免(大覚)。玉名郡荒尾弥右衛門、年貢塩取立に付口塩拝領(大覚)。代官高橋吉左衛門の年貢御取立は去々々までは2000石以上に付口米20石拝領。去年は1800石なりしが前々の通り2000石以上の段にして口米20石をつかわす(大覚)。 著書目録 鯉之巻 史伝 伯耆太郎兵衛源長与。

延宝4 (1676) 丙辰 (家綱) 綱利

1. 1 この日より3日まで、藩主6ツ時分登城、御礼あり(奉日)。6 家中侍衆御役差引の儀は向後奉行所より沙汰すべきこととす(奉日)。12 明日藩主の通行に付、往來の者慮外なきよう達す(奉日)。15 役務中家老衆で決すべきこと、奉行段階で処置すべきことを定む。奉行所寄合は3・8・13・19・23・27日。御用日は4・9・14・21・24・28日とす。また大頭の心得を達す(花奉)。16 この時分の奉行、松野八郎右衛門、小林半大夫、鎌田奎之助、服部武兵衛、石馬九兵衛、生駒新九郎。同目付、松田角兵衛、牛嶋市郎右衛門、吉田善衛門(奉日)。17 町奉行の御用、今まで家老捌のところ、今後は奉行所にて沙汰す(奉日・本・奉覚)。18 藩主有吉四郎左衛門宅へ 22 監物茶屋へ(本)。是月 犬塚弥一右衛門と申す馬をよく乗る牢人を5人扶持20石の中小姓として召出す(奉覚)。松野八郎左衛門、小林半大夫、奉行所勤務中は普請方の役儀は免除す(奉日)。侍中の女、今まで国境を出る時は御印を坂梨番所、南関番所に見せるようにしていたが、今後は見せないでよい(花奉)。柏原新左衛門、有吉市郎兵衛に旅家老を命ず(先哲・先祖付)。
2. 11 家中大半逼迫につき、手取上知を許し、在宅などにより家政を整理さす(奉日・本・家譜続)。また借物については5ケ年に上納とす(花奉)。13 従来八代城付と松井家臣との間に種々問題おこりしを以て、向後の取扱方を定む(家譜続)。14 綱利熊本発、3月13日江戸着(奉日・本) 3月18日参勤す(実紀)。27 本丸御銀藏の銀紛失につき 御座敷奉行の原田又左衛門ら6人、竹の丸質部屋に召こめらる(奉日)。3月7日6人の跡代り当分として都甲新右衛門ら4人が任ぜらる(奉日・奉覚)。4月4日入籠中の6名出籠す(奉日)。是月 芦北郡百姓ども飢饉につき日奈久へ銀2貫目、球磨川端の8カ村に銀1貫目を貸与す。また郡中には山稼を御免(奉日・本)。瀬戸五兵衛隠居す(本)。はり文 落文など、奉行中見届け破りすつべし、公義たちたるものは家老まで届けるべし(奉日・本)。御城形二つ出来一つは江戸へ(奉覚)。御國中衣類につき先年小袖は代100目、帷子は50目と定めしが、近年は猥になりしたため、100目以上の絹布50目以上の帷子は売らぬよう令す(奉日)。宇土松合の石割、日用(の者?)なきため御鉄砲衆に申付くるよう申請あり。御普請方へ出る下奉行、従来は与ありしたため出おりしが、今は与なきため如何すべきか伺う(奉日)。家中上知の者の役儀勤めのこと、御銀米借用分は役儀を免除、御預り銀米借用分は役を勤めることとす(花奉)。主組林源七欠落し、上納米銀120目と6石3斗あり、請人に出京町弥兵衛らがなる(奉日)。科人の誅伐は今まで江戸の藩主の許可を得ていたが以後は必要なし(奉日)。蔚山町中、呉服・糸綿・細物・荒物・絹物などを商売し来りしが、10ヶ年以前より旅人商売のため蔚山町の商売不振となる。そのため空屋数多くなり、それを上記売物持参の者の宿にしたき由、願の通り許可さる(花奉)。古町の三つの懸を以後は西古町、中古町、東古町と称することとす(花奉)。
3. 1 小川藤左衛門より、参府のため天草より肥前路まで、肥後の船50丁立を2艘、馬船1艘を借用したき申出ありしに同意の沙汰出さる(奉日)。26 侍中勝手差つかえの者のうち、兵糧もなき者には貸付を行うことを惣銀奉行小林弥三左衛門に申渡す(奉日)。是月中益城の岩下町に以前は六斎市ありしが 退転せしたため、

駄馬市を立てたき由の願出許可さる (奉日)。芦北郡より玉名郡への移百姓、引越入目と馬代銀の件 (奉日)。

4. 4 川尻岡町新町の塘、今度の洪水で破損、以前より町と郡との間で訴訟ありし所ゆえ 繕方は郡方と町方とで折半するよう沙汰あり (奉日)。5 大雨洪水 (本)。8 八代城の石垣孕出につき幕府に普請の許可を申請す (神雜136-3)。
 - 11 將軍家より御鷹の梅首鶏を拝領 (本)。是月 内田手永の角のある馬について、売却してもまた熊本で見せ物にしてもよしとの沙汰あり (奉日)。大木舎人旅家老となる (先祖附)。18日より5月24日まで大雨洪水数回、被害甚大、6月幕府に届出る (家譜続・玄祭)。植付の苗流出につき対策をたつ (奉日)。
 5. 10 預り人伊藤権兵衛 (伊藤一庵正次) 死去につき死体は塩詰にし、旦那寺の本妙寺常住院を呼出す (奉日)。永良助亟より、中益城は小郡で大分の川ありて普請多く、益城郡を上中下三郡に分けし利点なきため、中益城を上益城に加えもとの通り上下に分けた方がよいとの意見を出す (奉日)。
 6. 9 甲田五郎左衛門、林太兵衛出入穿鑿一件につき米田助衛門に大帳を差出す (奉日)。是月 大風吹く (肥)。今度の洪水で長六橋流失、町の者の才覚にては急に材木調えがたく、藩庁へ材木の借用を申出るも断わらる (奉日)。
 7. 4 御台所薨去 (本)。8 將軍家より御鷹の雲雀を拝領 (本)。23 新二丁目惣兵衛、稲葉内記の件につき申上ぐ (神雜94-2) 是月 白金御屋敷竹御門内の墨地 (空地) を借受く (本)。
 8. 9 薩摩より書状来り、福州乱国につき石火矢の薬用硫黄の輸出を依頼されしことにつき相談したき由 (奉日)。是月 菊池郡松尾社人4人を穿鑿す (奉日)。当地踊子座の外にも町小路に置き者あるよし、前々よりの者は許可するが、その外は停止す (奉日)。留荷の件につき達。米・大小豆・大小麦など8品は在々より熊本へ持参する時は惣庄屋通り切手による。塩・農具・米雜穀を熊本より在々へ持出す時は切手なしに通行可など (奉日・大覚)。今月より鉄砲停止の所、うさき谷に猪多く居るにつき鉄砲で打ち殺しし者あり (奉日)。諸郡奉行中より、至極多忙につき郡ごとに惣代を召抱えたき旨願い出る (奉日)。
 9. 22 預り人駿河大納言家来稲葉内記の側女及びその子、息子三内について御尋ねにつき、新二丁目惣兵衛より申上ぐ (神雜72-6) 内記死去につき江戸へ使者を派して老中に上申す (奉日・神雜 144-1)。28 高瀬繁根木八幡祭礼の能を再興、藤崎、祇園社の例により大夫に樽肴を下さる (寺例)。是月 河田源十郎より、託摩郡の当御免の儀につき例年とちがうので1人で決しがたく談合人を申請す (奉日)。
 10. 27 藩主より御天守銀を600貫目差出すよう命ぜられしが、漸く150貫目を送金す (度譜・肥)。是月 大豆不作、麦作も悪いため両品とも津留とす (奉日)。
 11. 14. 將軍家より御鷹の鶴を拝領 (本)。20 江戸にて細川若狭守二男竹之助誕生、後の宣紀なり (本)。
 12. 11 熊本城坤方の石垣崩壊の所、修築につき老中奉書を受く (神雜 136-4)。是月 木村半平、御側御用銀として60貫目を貸した証文を提出す (神雜69-6)。
- 是年 球磨郡野開の儀、当年より請銀に仰せつけらる (大覚)。松野八郎右衛門、御番頭を免じ奉行役のみとし、御番頭上座となる (本)。丹後守知行内にて死刑とする者ある旨を家司役より郡奉行に連絡、願之通申付くるよう達あり (大

覚)。国中在々にて重罪の者自害の節は首をかけ、胴はためし申すべしとの事(大覚)。芦北計石村のささらあみ運上、1ヶ年 700目宛にきまる(大覚)。

延宝 5 (1677) 丁巳(家綱) 綱利

1. 5 御天守銀の貯え少なきため、借銀してなりと才覚して増備することを命ず(部の勘1) 8 先日薩摩の出水に着船の南京船について水俣町角左衛門より報告あり(奉日)。是月 八代永川筋の御普請に毎年穴生衆を差出せば人夫費になるので、人夫費にならぬよう郡奉行より上申す(奉日)。
2. 7 佐分利又兵衛の知行所、玉名郡下千田村の百姓、年貢未進のため2人を質にとりおいた所、男女17人走り者になる。その処置につき又兵衛より奉行所へ差出す(奉日)。
3. 18 橋本少左衛門、御郡使の証換札2枚を紛失せしたため、銀2枚の差出しを命ぜらる(奉日)。是月 細川丹後の百姓、丹後方の蔵より米を盗みしため庄屋より搦出す(奉日)。藩主水遊びの上り場の敷石によき石を使わぬよう申付く(奉日)。

是春 川尻富安氏、鉄眼禅師一切経写に喜捨す(川尻史 469)

4. 7 手取より出火す。8月火事逢の者へ高 100石につき米20石宛貸付け、切米取の者は勘定所集り銀御貸なし崩しとす(奉日)。15 細川綱利、就封の暇たまわ(実紀) 26 泉州湊新屋加兵衛より銀20貫目を借用す、その他佐野浦食野吉兵衛、海部屋甚左衛門、千地忠三郎、平松六兵衛、唐金喜右衛門らよりも借用(補雑90) 是月 矢部浜町火事あり(奉日)。他国より米雑穀の移入は禁止(諸帳4)。
5. 12 豊後府内表の様子を調査のため、鶴崎郡奉行より足輕を遣すこととす(奉日)。是月 湯浦清大夫と湯町郡簡市郎左衛門との出入につき裁決あり。市郎左衛門は今まで通り百姓仕の高を作るように申付く(奉日)。
6. 22 菊池郡半尺村の者、半尺山にて木を盗むにより、惣庄屋御山奉行の深川市郎衛門に過怠銀1枚、村中の者に杉3000本、盗みし者に2000本植立を命ず(奉日)。25 坪井町善五郎、新左衛門、家中の延売米を取込み欠落す、その処分として両名の家財売立など決せらる(奉日)。
7. 21 長福様御手代より金小判 500両、その他合計1300両を藩に貸した証文を提出(神雑69-6)
8. 5 將軍夫人の一周忌法会に綱利(銀)20枚を施物とす(実紀)。6 大風延宝3年成就の八代新田破損す(肥)。24 暴風小川町の大明神の本殿倒る(気)。是月 川尻新田町、同小路町の東側にある飽田郡中椎田村の土地町屋敷にしたが、所柄が悪い上、年々免が上って生活できないので、中椎田村なみの扱いにして欲しいと組頭共より申出る(奉日)。芦北郡惣庄屋湯浦清大夫あとに佐敷惣庄屋勘右衛門を任じ、そのあとに湯浦の地侍永野孫左衛門を任ずることとす(奉日)。
9. 6 綱利江戸発、10月8日熊本着江戸への使者有吉清助(本)。是月 長六橋修復を町人請にした所、工事が延引したが、町人請を変更せずと決す(奉日)。当年の御米仮双場 100目につき2石と決る(奉日)。
10. 8 藩主熊本着につき①来春の参勤行列人数決定の材料とするために当年の物成増分の報告を求める。②開に適する所は開させること、③湛水村に茶屋を作

り、波野から坂梨迄の間に新村をたてること、④御国山から材木を切出すなどして小物成方の増加をはかることなどを命ず（花奉）。16 上方御借銀のうち納崩分を利払いにし、古借銀を延置にして算用を仕立てることを命ず（花奉）。17 年貢取立につき、知行取衆は借銀高により30石手取から20石手取までに段階をつけ、江戸御供衆は35石、御留守詰は30石手取となったが、江戸御供衆、留守詰衆には厳しいので、苦しい者は御側衆へ談合すべきこととす（花奉）。21 御開は百姓ども困窮せざるよう、1郡につき1年に100石くらいで行なうよう。また小物成をとり、材木を切出すなどして財政の助けとなるようとの藩主の御意あり（花奉・花日）。御家中への懸り物、本年の暮は仰せつけられず、来暮も仰せつけられぬように藩主の思召あり（花奉）。先日決めた御借銀の返済を実施したいので、諸経費のうち10分の1を減らすようとの藩主の御意あり（花奉）。23 坂崎清左衛門成政、家老に列す（奉日・本・先祖付）。

11. 2 細川丹後知行所長崎村の百姓ら、丹後手前にて吟味の上誅伐し度との件に付百姓の誅伐については藩主の許可を得べしとの達（花奉）。23 長岡監物の外孫三洵勝千代（実は長岡左近元知の嫡子）を監物の養子とし、監物を隠居させ、勝千代を米田監物は庸と称させ家老に列す（家譜続・本）。30 従来新地を開き百姓を仕立てること自由なりしが、今後は郡奉行に届出ることとし、また旧来の新地も一応申出さしむ（家譜続）。これにより旧来のものを古新地、今後のものを新地と称す（官制）。是月 小路廻横目とりかえとして郡平藏、上原丞右衛門、桜井善助、三木角兵衛に申渡す（奉日）。阿蘇山万福院徳善坊、理不尽の儀あるにより御国追放となる（諸拔）。
12. 25 知行取のうち立山所有の者は自分の山から門松をとるよう近年はなっていたが、今度は以前の通り全員に門松を渡すこととす（花奉）。春光院を松井佐渡より御引、その跡を京都天授庵よりもらい、末寺として寺号をかえる予定（花奉・花日）。

是年 初めて戸数改めを行う。竈数8万2百50余戸（肥）。他国よりの米雜穀移入禁止なるも鶴崎は従来通り出入許可（大覚）。川尻、高橋、高瀬町上ヶ酒停止のこと（大覚）。家老衆判紙を遣す箇所のこと（大覚）。水前寺御茶屋の掃除など御郡奉行支配とす（大覚）。鶴崎郡奉行への覚書のこと（大覚）。藩内各地の野開運上を請銀とす（大覚）。 著書目録 中光半助覚書 記録 中光半助。

延宝 6 (1678) 戊午（家綱）綱利

1. 2 佐渡殿玉名の知行所の内差上げ、益城、宇土に替地を拝領、其所を丹後殿と替る筈のところ、玉名の百姓疲弊に付、免相など入念にせよとのこと（花日・花奉）。5 この頃、元日稽古あり、鉄砲50挺頭はじめ物頭衆輪番にてけいこに出動（花奉）。7 小物成につきよく相談致し櫓など植立る時期についても考えよ（花奉）。10 郡方政治に付き意見あれば各奉行は壺通宛封書にして差上げよとのこと、何れも提出した（花奉）。12 村上吉亟、奥田小左衛門と牧野安右衛門に郡方御用仰付けらる。（花奉）。14. 1 御侍衆立山について在々支障を来すので、中止すること。百姓に立させ、本木は御用の刻は伐らせること、2 麦作について、秋の年貢不足の時は麦請にし、麦作損木のときは米取りにしたき旨に対し、麦が悪いときは米にてとらせるようとの返答。3 太米の替口は御用ほど召あげ、あとは請させること、4 木綿10貫目に付米1石の換算は従来通

- り。5 大豆、胡麻、荳子の替口について代銀を米に直すようにする（花奉）。15 山奥駄賃銀今迄在々に懸っていたのを御赦免（花日）。「花奉」には17日に附してある。23 郡方の儀を村上吉亟、奥田小左衛門、牧野安左衛門に仰付られた旨を郡奉行らに申し渡す（奉日・奉覚）。
2. 4 郡方の仕置替、本年の御見積目録の請方は四ツ三分の物成、新地御国中の物成高は五ツ成(部の国郡4)。9 米田助右衛門茶屋へ御入(本)。是月 岩下御茶屋設置（花奉）。妙解院（忠利）の仰付けで植えた立田横桜馬場の切退については今度泰勝寺への道筋に桜を植えさせるようにする（花奉）。小路廻今迄の二人五組を三人五組とす（花奉）。禁裏筑地の普請入目銀57貫目を支出する（花奉）。
3. 22 天草詰は物頭1人、御馬廻り組1人、医師1人その他とす（奉日）。是月 在々飢饉に付御救一件稜々之事（花日）。興門跡末寺一ヶ所城下に取立られ度願出る（花奉）。天草横目役、作事方横目役、川尻横目役は在の御家人に異議なくば中小姓中から任命する（花奉）。
4. 一 松野八郎左衛門佐敷城番を命ぜられ、奉行は免ぜられる(本・先祖付)。益城の百姓が多く盗木する。山奉行ら常々不注意の故なれば、三浦平兵衛、村上喜左衛門らは扶持を召放される（奉日）。
5. 12 今度益城郡甲佐杉嶋廻江中山木倉鯨各手永の盗木の件に付の覚。是月 奉行所場所替（本）。
6. 1 家老中の奉行の仕事の内容について次の様に決定する。①公義のこと②他国取遣しのこと③軍用のこと④知行取并中小姓への諸事申付けやその他諸触のこと⑤知行取、中小姓の国境女出切手の件⑥知行取在郷へ参るときの判形について⑦少にても仕置になるとき（花奉）。奉行中の御用の内容について次の様に決めらる。①侍中訴訟書物について吟味のうえ家老中へ申達すること②侍中の借米銀について沙汰すること③普譜奉行、作事奉行、郡奉行、算用奉行の役人登用についての人柄の吟味をし、家老中へ相達し御意をうること④公事沙汰御穿鑿について詮義をし 計りがたい時には 家老中に申達しをすること⑤寺社町方にて町奉行が請込みがたいときには奉行所に相達しその沙汰をすること⑥科人の成敗について吟味をし家老中へ申達すること⑦籠差紙上判を行うこと⑧切取米以下御国境女出切手を出すこと⑨切取米について諸事沙汰をすること（花奉）。13 右田作左衛門儀判屋役御断之書付御家老中へ相達候処ニ…（花奉）。是月 玉名郡木葉に町を立添た（諸帳5）。詰衆側方衆茶道衆側衆医師衆の申上げは頭より直の申上げであったが、以後、品により家老中奉行所へも相達すること（花奉）。
7. 17 玉名郡正野神社神事中絶に付、再興のため現米50石寄進（本）。僧鉄眼、新刻大蔵経を後水尾院に呈す(肥)。是月 鶴崎に預置かれた口米代銀の内 2, 3 貫目程は鶴崎に残置其外は此方へ取越御天守に上げ置（花奉）。
8. 5 九州地方大風雨、福岡、佐賀、長崎、島原、平戸、柳河、久留米、熊本、天草等大損害（実紀）。本藩水損田畑66,570石餘、塘61.895間 船大小 232艘破損、潰家13,039軒、溺死3人其他なり（肥）。8 玉名郡海辺破損横島より小天村までの塘 4.000間余根切仕由此普請の人夫 8万余人を要し玉名山本山鹿三郡の人夫を寄せても15日程かかる（花奉）。17 家人 1,000人、熊本町中 500人

高橋川尻町中 100人地鉄砲 200人計1,000人の役人を出し潮留を行なう。鮑田郡銭塘手永五町村西走潟村両所の切所潮留を行う。夫数 5,6万人を要す見込みまた、横手池田各手永無田口村山下村切所破損、鮑田託麻で10ヶ所を数える。また家中でも「常々御役御免の衆も残らず御雇なられ候間高百石に付四分役夫柄を以」徴発す(花奉)。22 八代塩屋塘破損につき潮留に出す役夫人数夫高 270人(佐渡殿より出す)内30人過上。同 102人 5分6厘八代御城付衆より10人過上 夫数1744人、明俵4132俵、縄41束を八代町中より出す(花奉)。是月 ①本妙寺より下馬の札破損に付立替えたい②加藤清正死去の際上使下の節寛永9年の秋立てた高札も立てたい③門前の道も若宮八幡の前へつけ変えたい。以上につき、下馬札は従来通り許可す、殺生禁制の札も許可、道は当分そのまま(花奉)。

9. 7 家中御役被勤衆今迄に役夫三步増(七歩役)申し付ける旨家老列座にて普請奉行衆兩人へ申渡す(花奉) 11 綱利今朝発駕(奉)。10月11日江戸着、同15日登城(家譜続・実紀)。是月 参勤供衆江戸着時江戸での着用品支給(花奉)。八代郡奉行只今迄2人にて1人は熊本詰のところ今後城付の内から今1人増員現地2人熊本1人とす(花奉)。

10. 15 細川綱利始め参勤4人(実紀)。

11. 21 細川綱利等に使して鶴を賜う、綱利より八代密柑を献ず(実紀)。

是年 藩主の膳米撰米に及ばずと達す(肥)。預り人稲葉内記、伊藤権兵衛今年死去(本)。ところ(薺一葉草)拾俵召上らる(大覚)。大津手永野開運上銀は受銀に仰付けらる。(大覚)。植木の事、松材木の事、新塘の事但新開する者は古塘の石を取不申様。利米利足の事、但前々よりの定めのように(米は3割銀子は2割)にいたし申すべき事(大覚)。(なお「花奉」には5月14日付とす)。知行割は前々より納免3ツ8歩を根にいたし3ツ8歩5朱、3ツ7歩5朱位の両免を3年撫の秋免に用来ったが、右の3ツ8歩分を京升に直し4ツ3歩7朱ならし免にし、それに加えて2歩3朱上ケにて夫を土台に撫し高を極めれば割崩申さず歳納、給知とも村々碎ヶざる由、右の通りにせよとの儀郡方牧野安左衛門列相達す。(大覚)。大津手永中尾村南方村新町馬場村北方村5ヶ村の儀妙解院様御代御仕立成られ為有付諸役御赦免の処 最早40年余に相成に付本高同前諸役相勤申すようとのこと(大覚)。菊池隈府町にて喧嘩したる者共在牢の処相手親類共より御断申上げたによりお助なられし事(大覚)。

延宝 7. (1679) 己未(家綱) 綱利

1. 6 側足輕弓鉄砲稽古を当月より1ヶ月に両度と定む(奉日・奉覚)。15 山崎小路より出火、侍屋敷76軒焼失(実紀・本)。今日八ツ過に米田と右衛門屋敷より火事出来、山崎に火飛 侍屋敷 70余軒焼失、七ツ過に鎮火(奉日)。
3. 2 こたび大内御痘瘡湯漬賀物の制を、4品以上、10万石以上及び京近く所領ある輩に仰下さる。細川綱利等は銀30枚づつ(実紀)。是月 火付の同類左兵衛生所筑前へ送るが差返えされ召籠めらる(奉日)。
4. 5 米田助右衛門家来嘉兵衛と兎谷地鉄砲黒田徳兵衛、同長右衛門と竹部で喧嘩、これを援けた麻生田鉄砲勝尾半右衛門、これら地鉄砲3人之者共所追放。○地鉄砲の者共惣て嵩をはり御侍中へも慮外を働き、町方へ萱売に出て侍など申し威を張る。○御家老中御通の路次でもつくはい申さず不屈(奉日)。10

御鷹の梅首鶏御拝領(本)。菊姫様御婚礼、松平豊後頼路室(本)。**28** 藩主是日就封の暇あり、所勞に付一時滞府(本・実紀)。是月 茲因書御借米返上のため知行所より差出の米、川尻大渡町惣衛門請込むが、滞米16石余となる。惣衛門家屋敷家財悉く売却して弁済することについて、惣衛門口上書もあり、茲二九之介請取り惣衛門夫婦を召使うことにす(奉日)。近年高橋町へ来る商船が川口で小嶋村の者と出合商売するため高橋の町人共は衰微迷惑す。従つて舟出入、荷物出入の争いに付證文らしき物あらば持参せよ(奉日)。

5. 一 江戸留守居役田中八郎兵衛政遠、下国の途中従士の不軌を企てるを知り、遠州袋井にて誅伐す(家譜続・本)。御在國中江戸上御屋敷表御門は不開置(奉覚)。
7. 9 加州金沢静映寺の淨恵を阿蘇山極楽坊内山伏本行坊が刃傷死亡させ、本行坊は切服、兄や叔父たちが死骸引取る。この者共はいづれも坊中知行の者の由(奉日)。**15** 家中手取20石を定む(家譜続・本)。
8. **22** 綱利江戸発駕、9月22日熊本着、江戸への御使は茲二九之助(本・度譜)。**23** 刃傷沙汰の者を御預している河喜多九太夫と青木金太夫に、今度家中20石手取仰付けられたので、預人ある間は、5人扶持宛今月朔日より拝領せられる旨申渡す(奉日)。
10. 3 ○家老米田助右衛門は正病身に付隠居す。室園野屋敷に入助入と称す(肥国誌・先祖付共に之を9月28日とす。しばらく本文に従う)(家譜続・本)。○米田助右衛門病氣付願の如く家老職御免(花日)。役勤め難く知行も差上ぐ、代りに200人扶持1000俵拝領(花奉)。平野九郎右衛門奉行職御番頭上座となる(「先祖附」には、7月15日とあり)(本)。**5** 米田助右衛門法体にて助入老と改名お札参上(花奉)。是月 蔚山町中より旅商人振売停止下さるよう訴状が出たが、地の町人売物高直の時は旅人振売もゆるす。もっとも在郷へは行けぬ御法なり(花奉)。毎年積上せの米船運賃、今迄は1割2分にて積上しを当年上方船運賃7歩にて積む由、上方同様にせよと命じたが9歩という。しかし町の船持どもは9歩にても喜ばぬ。よって当年は上方船に積せることにす(花奉)。
11. **29** 誅伐者大勢につき、伐手兩人にては手つかえとなるので、沢村宇右衛門家来村上何右衛門を差出す様命ず(奉日)。是月 堀角左衛門死期に女房の弟を養子願叶い難く母に3人扶持下される(奉覚)。
12. 4 細川刑部興孝入道立白卒す、年63(家譜続・本)。**5** 有吉大藏貞之入道道雪没す、年67(家譜続・本)。**29** 六所宮は小姓頭中の支配に申付らる(寺例)。是月 長崎より持参の売物小売にせず済売に致し、夫れを買取った町人から侍中買うようになり、高利になり侍衆迷惑する。高利を取らぬとの誓詞出をしていたが長崎に居る者が此うり物持参して高く売る。町人一同よく讃談仕るよう御側衆残らず一同に申渡す(花奉)。

是年 奉行平野清兵衛退任(本)。火あぶり者ある時萱薪はりつけ木人夫共差出罪人拵付まで町方より仕来りし処、向後右品々は川原者から持出すよう仰付けられる(大覚)。田浦手永ささら網運上の儀向後請込仰付けられると(大覚)。取立奉行御郡へ出向いた節の諸渡物の事(大覚)。御馬飼料糠藁草、遠隔の郡は割賦から除いていたが、以後全郡に銀子の割賦にす。但し飽田、託麻両郡は諸役高に応じ半分。鶴崎筋は往還につき諸役御免(大覚)。

延宝 8 (1680) 庚申 (家綱・綱吉) 綱利

1. 5 今朝五ツ過町人共御楽屋にて年頭の御礼申上げ、大守出席して御覧成らる (花奉)。14 河匂藤兵衛息子三之助と菰屋村百姓理右衛門女房と密通、事情を穿鑿することとなる (奉日)。16 天草詰衆 1 人 1 年に 1 度宛兩人にて両度嶋廻りする様に。足輕の儀も 1 年に両度宛差廻可然と右の三人衆へ申さる (花奉)。18 1. 去年より御家中 20 石手取であったが、難儀する故に当年より 30 石手取江戸御供の者は 40 石手取とする。2 知行方所務は蔵納同前に御郡方の者共に支配させること。手取米は御蔵にて渡下さる。領知返却のときには本知割替えをし、下免の知行は物成宜き所を拝領するようにする。3 只今迄拝借の米銀の利銀は捨てること。元物は知行返却後に年々返すこと、もし手取米にて返却したい者は勝手次第たるべきこと。4 永々の在宅者は近年の内に出府すること (花奉)。27 白石三休目安読みに仰付けらる。今日初めて罷出る (花奉)。29 今度奉公人の給分を定めたが駕舁者給分の定無い故に 中間の給分同前で 1 人半扶持と佐渡殿が相きめた (花奉)。是月 在中土免きまり、1 歩 5 朱下げと為り、諸懸物も追々御免 (「本」及び「年」の一説に、本件を明年正月に置く説あるも、しばらく是年におく)。前年迄は定免なく、前秋の免を標準とせしと (拾圃)。是月 村上吉之丞奉行に任ず (本)。長須焼鯛、今朝長須にてとれぬため、河内浦で取れた鯛を長州のものに申付焼せ差上げること (奉日)。従来、江戸へ家老中并大身の衆遣される刻、知行高のかまいなく 6,000 石分の御擬作にしたから、拝借無之では不成儀故、今からは知行高相应に仰付けられ可然。尤足米も知行高に応じ拝領せられ、道中造作料知行高に応下さるよう。御扶持方は何人にも召連れ人数人別に老人扶持宛下さるようと佐渡殿仰さる (花奉)。
2. 4 奉行所の寄合に出す書物の内、御前へ出す書付については寄合場に出ない御側衆にも残らず見せ、その上で家老中に申すこと (花奉)。11 家中御制度之達 (諸帳 4)。16 野開など困置禁止、百姓開を侍開と名付るは曲事、野の専占禁止。立山の枝木取、根さらえ禁止 (林制 15) 立山の輪伐期は 20 年、その他山奉行の通達 (林制 16)。是月 専任の代官を廃止し、惣庄屋の兼帯とす (城南 326)。家中知行取は、従来自分収納なりしを、此時より御蔵米を以て給付と改む [官制]。而して本年より家中 30 石手取、江戸御供 40 石手取、合力米、切米歩一召上げとなる。財政復活した訳ではなく、諸士の困窮を救うため (家譜続・本)。在々へ地侍、地鉄炮を仕立ても地高を抱えさせない。しかし百姓身分なら構わぬが、すべて惣百姓なみの扱とする (触)。長岡佐渡、子飼の下屋敷坪数 3.537 坪 家数 13 軒を差上申す (花奉)。諸郡奉行内検、惣庄屋を呼出し大木織部より郡方の議につき、給知残らず蔵物になる旨を申し渡す (奉日)。法花寺久本寺只今の屋敷所柄あしく其上狭いので難儀している。立田構口の外にて 2 反余の屋敷地子を出し御貸し下さる可き由申出る。如願申附らる (花奉)。
3. 6 川尻、高瀬、高橋各町奉行に熊本町奉行に付けている十人組同様の者を 1 ケ所に 2 人宛情 6 人付けることとし 2 人扶持 6 石宛の給扶持で新規召抱 (花奉)。10 御家中当暮より手取に仰付けられたので従前の蔵納物成は今迄之通に勘定方支配仕り新御蔵納之御物成は惣銀方之支配に仰付けられ然るべし (花奉・花日)。24 鮑田郡河内の鮎は風味が良いので在国の間は留置くようにとの内意があっ

た(奉日)。是月 御家中不勝手之者立行御仕法之事(部・勘3)。在々飢に付き兵糧之儀は高を以抱えた者も抱不申る者も10歳以下は男でも1日1人に付1合女は老若共に右同前1合。10歳以上の男の分を1日1人に付2合宛借下されては如何有るべきやと申渡れる(花奉)。御奉行衆何れも罷出る様に申遣し、飽田、託摩、玉名、山本、山鹿、菊池、宇土各郡奉行出頭、この7名に時分柄に付郡へ出るべく申し渡す(奉日)。飽田、託摩に地侍1人も無之に付郡奉行願之通仕立仰付けらる(諸拔・本)。

5. 8 この日將軍家綱他界につき5月19日より28日迄日数10日御町市立相止申すこと(奉日)。次の將軍綱吉嗣ぐ(本)。高瀬、川尻、大津に新御藏出来す(本、諸帳4、諸拔)。江戸御留守詰の御番方案例年は22人宛遣わされたが来年は15人とする。来年は物成手取で小身者は難儀なので150石取は差除き200～500石位の中から人選すべし(花奉)。小豆島小海村庄屋三宅半左衛門、先年の大阪城普請の折の残り石800余ケが島に捨てられ年貢不納。今度の検地で畑除地となり家督の高を失ったので、肥後から大坂への上せ米の内を運賃並びに船積みさせて欲しいと願出(奉日)。
6. 6 飢肥伊東出雲守領外の浦湊へ漂着の異国船人の廻送について、八代松井佐渡より船1艘をかり、もう1艘は川尻から46丁立の差廻しを決定す(奉日)。23 山伏(長門の者)9人、比丘尼2人が益城郡御領村の女を連出したが女は取返し、山伏共は御国境に連れ出し、竹田領境にて追払う(奉日)。
7. 4 長岡監物は長入道住庵没す、年63(本)。12 山名十左衛門重澄、大木舎人兼近家老に列す、同日柏原新左衛門、有吉市郎兵衛御城代を命ぜられ、1人宛代りて江戸御供に定めらる(本)山名十左衛門、大木織部家老列仰付けられる。柏原新左衛門有吉一郎兵衛、右両人山名十左衛門跡の御城代仰付けらる。御供交代して相勤むべきの旨(奉日・奉覚)。続団右衛門、朽木隼人座配番頭の上仰付けられ、物頭中触等申付けると申渡す(奉覚)。13 参向公卿の館伴命ぜらる。女御使は細川豊前守興隆等なり(実紀)。18 綱利熊本発、木曾路を経て8月13日江戸着(本)。22 御継統拝賀昨日の如し。御よそひ先導又同じ。在封の輩、使者もて太刀目録を献ず。細川綱利は城州国行の太刀、各在封中なれば使を以て奉る。馬代金を添える(実紀)。
8. 5 川尻新藏奉行荒瀬団丞が同奉行恒富吉左衛門に意趣有之、杉島小庄屋甚兵衛方にて打果す(奉日)。6 荒瀬団丞を与頭志水三左衛門に御預け(奉日)。是月熊本町諸掟之御書付之事。質物之内盗物之由申出あっても相対にて埒明くべからず。町人共在々へ入込穀物買うことを禁ず。在々にて商売品極めの事。御町中古かね買無札を禁ず(触)。大風あり、倒壊家屋1659軒、其他破損多し。家士以下小者仲間に竹木、金銀等を給す(家譜続・本)。28 綱利將軍への気嫌伺いとして銀20枚を献ず(実紀)。
- 閏8. 13 綱吉將軍宣下、綱利束帯にて登城(実紀・本)。19 法皇崩御、従江戸御使者として津田与右衛門上京す(本)。
9. 9 奉行生駒新九郎江戸より下着(本)。翌10日登城(奉日)。23 是夜より西南へ彗星出づ、12月初旬に至り見えず(実紀)。是月 將軍家綱御靈屋御普請に付大坂へ貯えおかれた大石を差上らる(本)。
11. 一 玉名郡川崎村の百姓共大勢京町岩立辺まで来る。誠に飢及罷出たのか似せ

事に大勢連にて罷出たのか (奉日)。

12. 28 細川修理 (初め左京) 尚房卒す、年44 明年5月息大膳尚方相続す (本・肥)。

是年 踏絵人数男女48万1471人 (肥)。大飢饉、餓死者多し、城下請所にて粥を施す (玄察)。町人の在々に入込み、米穀を買取るを禁ず (肥)。諸郡より召上られたす (錫) 1 締に付米7合宛に相究の事 (大覚)。飽田、託摩両郡地侍仕方の事 (大覚)。御代官口米之事 (大覚)。御土免極仰付けられしと之事。検見之仕法改められ監免を石見に仰付けられしと之事。一統畑成田御吟味之上出高に仰付けられる由之事 (土管)。振舞、家作、音信、衣服等之儀に付達之事 (大覚)。水俣町仁左衛門と申者樟脳を焼くため杣取りを許し、楠の古根樟脳100斤に付5匁宛の運上を以渡下される (大覚)。荒仕子は、在々百姓の内より召抱られるが死亡の時は給米は其俣に差置かれるようとの事 (大覚)。惣山奉行勤方の事 (大覚)。生魚、塩魚、貝の類・海草、塩、木実類、此の分は問屋口錢銀 200目の受に仰付けらる様。肴代に取った米穀の類、芋、いちび、烟草の類、油樽、干鰯、菜種の類、此の分は問屋差出に郡奉行加印を取、川口出しをする様 (大覚)。南郷野尻菅尾高森の者共不作のため飯米雑穀を日向、豊後から買調たしとの儀、今から来る月迄国境入を許す (大覚)。家中直所務止み、蔵納となる (旧章)。百姓の衣服制限 (旧章)。

天和元 (9、29改元) (1681) 辛酉 (綱吉) 綱利

1. 20 平野九郎左衛門惣郡奉行へ國中打続損毛に付土免1分5朱御下げ、その外色々御赦免の旨を伝え、同趣旨を御惣庄屋共へ申渡す (奉日・藩法井田377)。
- 24 落文、はり文、落書らの儀については取上げないので、破り捨てにしても構わないことが先年仰出されているので、今度の西大手の前坂崎忠三郎屋敷のかどの腰板の書付1通もその様に処分すること (奉日)。
- 28 こたび御継続により、諸国巡見使を立られ、薩摩、大隅、日向、二筑、二肥、壱岐、対馬、五島は使番奥田八郎右衛門忠信、書院番戸川奎之助安成、柴田七左衛門康能にあてられる (実紀)。
- 是月 熊本中に参込みたる非人の人口1036人 (奉日)。
- 在中飢に付御救之儀郡奉行衆へ達す (奉日)。
2. 一 町奉行衆の報告によると、旅大工大勢入込家中を徘徊し細工を請込故、爰元之大工ども家中之細工無之迷惑向後旅大工御国へ入込不申様と願出る (奉日)。
- 武功之子孫御取扱之儀 (奉覚)。
- 鞍の他国売解禁 (奉覚)。
3. 28 長岡佐渡直之登城、將軍家御代替りの御札 (本・家譜続)。益城郡木崎村安兵衛他4人火付けの罪で焚刑の処、嚴有院様の一周忌だから刎首刑とす。引廻しの馬を春竹篠多村から出させようとしたが、以後駄賃稼ぎができないと断わられ、引廻しは歩行引廻し (奉日)。
- 是月 細川丹後守様御領人3人宇土へ差下さる (本)。

是春 大飢饉にて兵糧給恤あり (気)。

4. 19 綱利はじめ就封のいとま給わるもの16人。綱利には左文字の御差添を下さる (実紀)。
- 29 綱利江戸発駕、5月27日熊本着、江戸への使者米田監物 (本)。
- 蔵納土免1分5朱下げ (本・度譜)。
- 是月 芦北久木野手永くざい山にて中村惣左衛門の金山採掘は薩摩境につき薩摩境に向け掘らないようにすること (奉日)。
5. 26 本藩にて工事中の前將軍廟所成る、幕府是日工事関係者に賞賜す (実紀)。

- 27 綱利今朝辰、下刻着城（奉日）。是月 厳有院一周忌に付て綱利より銅籠両基御献上（本）。
6. 4 牧野安右衛門郡方之役儀差除かれる（花奉）。7 五ヶ庄雑座喜平次弟権六がもみ木之吉充と喧嘩、五ヶ庄は此方支配でないが、先ず領内之内で諸触等も此方より下す関係から此事の埒が明いた事を記録する（奉日）。10 家老坂崎清左衛門（成政）隠居し天心と称す（本・先祖附）。家老坂崎清左衛門隠居嫡子五左衛門相続（奉日）。28 奉行所目付松田角兵衛重病でもないのに役を断りの書付提出に付不届として知行召上閉門（花奉）。是月 切支丹の者牢死の時は、奉行が検死するこ（肥）。玉名郡奉行辛川孫四郎病氣にて勤め難いが郡奉行は押立断り難き御法に付、書付は差戻之事（奉覚）。御國中免相之儀今迄郡方より支配したが今度郡奉行の支配へ仰付らる（花日）。
7. 4 松平越後守光長の家中小栗兵庫の子ども9人及び兄本多不伯を松平陸奥守綱村、細川越中守綱利等に分ち預らる（実紀）。右の小栗兵庫、子供岡之助、八之助、小三郎御預り、享保5年御免、八之助、小三郎は病死、岡之助、六十郎は50人扶持宛被下（度譜・本）。6 綱利江戸を立ち8月3日熊本着（本）。7 松野左次兵衛郡方御用仰付らる（花奉）。28 國中免相は只今迄は郡方支配、当暮後は郡奉行支配に仰付らる（花奉）。是月 將軍家代替りの四国・豊後巡見使、使番駒井次郎右衛門昌勝、小姓組水野小左衛門守重、同小田切喜兵衛直利、四国より豊後に来り巡視（実紀・家譜続）。
8. 5 御巡見衆3人出京町口にて衣装召替、辰ノ刻に熊本に入る。太守は油屋平右衛門家で対面す（奉日）。13 小栗美作の弟兵庫と子供岡之助（8才）八之助（6才）六十郎（4才）小三郎（2才）乳母3人肥後預りとして今日到着す（奉日）。15 祭礼に出る足輕以下、強飯渡始る（本）。是月 辛川九兵衛郡奉行を命ぜらる（花奉）。本庄彦右衛門菊池郡奉行となる（花奉）。阿蘇宮地神具商人在町の通り商売許され振振は叶難し（花日）。
9. 11 医師光行玄佐に目見の上軒役免、辛島道珠に10人扶持支給（花奉）。忠興に殉死した蓑田平七娘に先に召上げられた20人扶持を支給す（花奉）。14 將軍家代替りの西国巡見使、使番奥田八郎右衛門忠信、書院番戸川奎之助安成、同柴田七左衛門康能、南関より肥後に入る、内牧で宿泊の折、阿蘇大宮司に推問せらるるところあり（「天草島鏡」に、此の三使7月21日に富岡着、天草巡見の上本藩差出の船にて口之津に渡らるとあり、又「蔓綿」には、三使8月9日佐敷口より入国、同11日人吉発とあり、尚「本」7月の条には「御巡見通行」とある（実紀・家譜）。16 当国に弓師なきため召出すこととす（花奉）。是月 高田鍛冶勝手逼迫につき忠行に10人扶持国平に8人扶持（花奉）。吉田侍従様より神書大成経謀書と判定されたので全国の神社所蔵のものすべて吉田へ回収すべき旨書状あり、領内布達（花奉）。川尻若宮社祭礼流鏑馬慶長18丑年より中絶仕居るを依頼再興仰付られし一件之事（花日）。
10. 一 公儀から去年当年耕作損毛のため節約の達あり、その意をうけて國中酒屋数酒之買数改めるよう家老から達せられる（花奉）。屋敷割に付き 300石取ニハ2間に10間の長屋1軒、2間半に10間の本屋1軒立申、入目銀1貫 500目、200石取ニハ2間に8間の長屋2間に10間の本屋此入目1貫目如此拝領せられ（花奉）。水野平太夫を呼び、触組の内布田平兵衛儀御奉行不届（算用不届）に

つき御国追放に決定、平兵衛せがれは其俣召使う、妻子はせがれ手前に召置くこと(奉日)。井樋板落札の事、去年松山手永之者落札1200余板のうち 800板程払申さず、そこで鯰村新兵衛に去年の落札値 1 枚 9 匁 1 分 7 厘の直段でひきとらせる(奉日)。肥前より来た瓦焼の与十郎へ銀 5 貫目貸し出し焼上た瓦にて差引上納のところ半分は上納、銀引替、半分は当時之代銀を下されることに申渡す(奉日)。御屋根葺の棟梁甲斐長左衛門老極、煩居ので家業を20才の孫に継がせたいとの願出、この者の先祖は丹後より御供したもの(奉日)。

11. 27 徳松君神田御殿より西丸へ御移徙若宮様と奉称(本)。是月 池田吉左衛門の給扶持を2男同平左衛門に支給す(花奉)。米価の事、銀 100目に米 1石6斗に御究の事(花日)。宇土郡浦の金山良好に付、採掘させること、入目銀4貫500目余については藩より差出すことにする(奉日)。
12. 6 安藤対馬守重博は上野国沼田の御使、内藤右近大夫等は同城請取、細川豊前守興隆等は同じ在番を命ぜられ共に暇給う(実紀)。26 真源院(光尚)33回御忌(本)。是月 本藩初めて御勘定所を置く(肥)。

是年 踏絵の者男女43万1471人(肥)。僧鉄眼の一切経全部ほん刻成る。18年の歳月を経たり(肥)。御米銀之出入に代々御印を受けたのを勘定奉行、勘定役となした処、此年12月勘定所初めて出来、山崎角左衛門勘定頭、今迄勘定役庄村八助後藤又助同役被仰付、翌2年御物頭列被仰付現米御役料30石宛被下(度譜)。酒屋杵屋油屋問屋などの運上銀を免除す(城南史 376)。真綿、漆御年貢御免(雑記古3番)。延宝8秋殊之外耕作あしく、同9年之春飢饉にて人飢死に付、城下へ出て乞食をし飢を凌ぐ(雑記古3番)。阿蘇坊中酒屋次平衛二季之彼岸に山上にて酒商売を許される(大覚)。諸国中所々川口出入之俵物其外品々運上銀が不同に付同一に被成度との事(大覚)。密柑植付方等之儀達之事(大覚)。御国中疫病逸大勢死に阿蘇、藤崎、祇園三社にて祈祷(寺例)。在中飢に付御救米等下置かれる。(奉日)。諸郡より召上られたしろの皮(棕櫚)の値段、皮 100匁に付3厘6厘(毛カ)宛に究(大覚)。孤児を養う者へは銀2枚を与える。小国生れの金蔵は芦北で孤児となったので、養う佐敷の者へ褒銀を与える(大覚)。国中打続く損毛に付、土免1歩5朱を免除し、その外にも段々御赦免するから、耕作に精を出すよう。又、惣庄屋存寄の筋あらば遠慮なく申出よ(大覚)。国中酒屋数 693軒、城下町在共(藩法井田 384)。著書目録 古今書法 諸家 山崎半弥勝枚。

天和 2 (1682) 壬戌(綱吉) 綱利

1. 一 諸運上及び町々出銀を一部免除す(本)。古金商売には五人組丁頭別当吟味請人を立てよ、古金商人数も固定す(式稿62)。
2. 3 安藤対馬守重博、細川豊前守興隆等上州沼田より帰りと共に拝謁す(実紀)。19 中山佐次兵衛奉行に任ず(本)。27 有吉四郎右衛門宅へ御入(本)。是月 戸越御屋敷傍示之御借添の地村々へ被指返(本)。切支丹宗門御改付て誓詞之前書罰文改る(触)。
3. 2 戸越村名主地主次左衛門以下、越中守屋敷に借り添えられていた畠地(3ヶ村)返却につき証文を差上ぐ、畠地20町4反8畝11歩半なり(部の屋)。6 (イ5) 綱利今朝卯ノ後刻発駕(奉日)。3月9日鶴崎着、4月7日江戸着(本)。13 江戸上屋敷焼失後、白金屋敷に綱利居住の処、是月上屋敷内に建増方を幕

府に願出づ (貞享3年工事成り移転)(家譜続・本)。22 僧鉄眼道光寂す 年53 (肥)。25 元家老坂崎天心歿す (本)。28 加藤家の遺臣俳人西山宗因歿す 年73 (イ78)(肥)。

4. 21 綱利去7日江戸着座。即日上使戸田山城守来る。9日に御参勤の御礼 (奉日)。是月 茶道、掃除坊主、絵師、其他諸職人の帯刀を禁ず (肥)。
5. 25 佐敷にて取押えの筑前者、市兵衛乗物にのせあみをかけて召連れ長六橋にて引渡す。長六橋に上田新兵衛ら使番足軽17人にて受取り南関へ召連れる (奉日)。是月 幕府、諸国に高札を建て忠孝を励まし尚奢侈、毒薬売買等を禁止す (読史備考 372)。新二丁目惣兵衛儀一兩年以前より長州表の塩問屋を願出た。彼地の百姓らは、差支なしとの事、しかし陸塩に口銭をかけるのは塩焼共のためにならぬから許可されなかった。然所今迄の間屋からの諸運上は赦免になって陸塩之口銭は取不申ことになった。然上は惣て塩問屋は八代、芦北にはあるが、長州表には塩問屋無く、依て是非長州塩問屋の件、許可され度 (奉日)。
6. 11 元家老米田是正入道助入歿す。年57 嗣子無く断絶す(先祖附・肥国上92)。23 宮川金右衛門奉行に任ず (「先祖附」には天和3年とあり)(本)。是月 山鹿郡新町口に町屋を立添 (諸帳5)。
7. 一 御城絵図出来 (肥)。
8. 25 当年疫病はやり申に付村中之者煩不申様にと合志小野崎村天神社に願を立申处、村中に1人も煩不申 (寺例)。27 朝鮮信使拝礼。綱利衣冠にて登城(本・実紀)。
9. 22 川尻御作事奉行衆存寄の書付、請込御銀にて調申物此方にて買い、御勝手能物を御買物所へ不申入直買する事。大坂毎年御上下之船に当地御手大工1人差のぼしていたが、船方で使用する桧材木其外品々は太坂買物奉行衆と立会調申様に仕度事。当地鍛冶所にて唯今迄は直釘造^{なかしくぎ}打せたが向後は請込の御銀之内で新鉄物、新釘共に打申様。売板買付は杣奉行衆へ被仰付杣頭彦市を求麻之へ遣わし買付けたが、町人方より買うよりよい。日用夫召仕申儀、此間は川尻町之橋作事ハ町夫を以仰付たが、只今ハ町夫にも夫米を被下故如前々町夫出申様ニ仕度事並川尻河口御番所御作事在中より如前々夫出申様ニ仕度事 (奉日)。
10. 25 伊津様(綱利娘)誕生(本)。是月 楮他国へ売出は停止之处向後は他国にて売買可仕旨之事(触)。矢部(手永)村々庄屋76人にて支配していたが村数多い故庄屋を42人に被仰付(雑記古3番)。高橋より往來の川船熊本より下り荷物を積む事禁止のため下旅船は高橋に不着。この禁止を廢すれば船持の生活もよくなり当地の賑にもなるの旨願出る (奉日)。
11. 25 阿部豊後守正武諸家三河以来之旧記を搜索せらる (本)。
12. 24 郡間衆列座の上郡奉行中の平野九郎左衛門より家老中の達を申渡す、当年作柄良好につき百姓の奢侈をいましめる。(虫喰のため不明部あり)在々へ御赦免之外商人入込申由之事等(奉日)。是月 猥りに野焼するを禁ず、札を渡した者の外炭焼禁止 (林制)。

是年 鎌田空之助奉行退任、奉行小林半大夫退任 (本・先祖附)。不時出之金銀米銭奉行印にて勘定所へ達することは天和2年より初り、不時通之名目此節より初る (度譜)。天和年中御積方出来。宝永元年銀札支配所に成る。其後段々建継に成り、物書役之頭取を根取と称す。これらは大体中小姓知行取から任命された

由。延宝8年より月積初、御積目録のごとく相成る。御勘定所御横目兩人いたが、元録元年諸役所定附廢止となり8人に成る。其後猶増19人に成る。江戸へも2人宛出向く(度譜)。御山藪仕立野焼等之儀に付御達之事(諸帳)。萬引高定る事(土管)。分米之名目を改め都て高となる由「田賦考」に見ゆ(土管)。算用奉行差止、勘定頭の支配となる(旧章)。野津原在々野開運上は受銀に被仰付る(大覚)。御国中諸町問屋口銭は戌正月より運上御赦免被仰付、去8月より12月迄は運上いたす筈に相究めたが、高橋小嶋河尻は前々からの受銀に付受銀高を極、2割にいたし8月より12月迄5ヶ月の上納をする様にと申渡す(大覚)。在中札運上御免之品并運上被召上品々之事(大覚)。在々へ乞食行倒相死亡の時郡奉行へ届出よ。不審成こともない時は死骸埋札を立て、村所之書付を奉行所へ差出すように(大覚)。知行取衆は手取に仰付られる。以後は御国中方々へ出張の時、郡人馬相渡申答之事(大覚)。著書目録 光永家記 史伝 光永氏。

天和3 (1683) 癸亥(綱吉) 綱利

1. 8 任方宇左衛門所へ菊池郡より門松を払うことになっていたにも拘らず、佐方猪左衛門所へ持参した。注意するように申渡す(奉日)。
4. 22 綱利はじめ、就封の辞見するもの9人(実紀) 是月 鉄眼の遺言にて弟子より差上げられた一切経全部24箱目録相添え書物奉行に相渡し封をさせる(奉日)。矢部浜町の牢人伴弥右衛門現米300石を献納(郷歴)。寸志の初見(城南史494)。
5. 10 綱利発駕、閏5月7日熊本着即日江戸御使者松野源右衛門来る(本)。30 貴田孫兵衛屋舗広間と玄関之間より未ノ刻出火侍屋敷39ヶ所切米取屋敷35ヶ所焼失申ノ中刻火鎮(奉日)。是月 阿蘇山鳴動如雷泥土沸騰す(肥)。葉鮎取の場について二俣より上野瀧迄の鶴投網入を二またより下鶴まで延長して欲しいと願により許可す、翌日九兵衛を呼出し川上は横野村庄屋前磧所から下は東善寺の前迄を御在国の折には例年の如く沙汰するようにと申渡す(奉日)。
- 閏5. 7 綱利己ノ上刻着座。江戸先月12日発駕同24日大坂着25日乗船は2日にて鶴崎着岸。翌日より道中5日にて着熊(奉日)。28 昨年より米下直になる、知行取、切米取共迷惑につき、知行取には、7、8月分扶持方借被為拝領、切米取には5石以上高10石につき5斗あて被拝領旨達す(奉日)。是月 御国中寺社官位昇進また論旨願等で上京の節は前もって届出るように達す(寺例続)。
6. — 貨物頭倭屋久左衛門貨物之支配役被差除跡役新三丁目米屋五平次に被仰付に付此儀長崎奉行川口源左衛門へ被仰遣、御状文箱壱ツ町奉行衆へ差越申さる。此文箱五平次長崎へ持参仕筈之由云々(奉日)。
- 是夏 京町火事、12月に火難の家士足輕に恩貸あり(本)。
7. 21 將軍家息男不幸に依り祇園宮神事は日執行(本)。23 都甲太兵衛暇(花奉)。
- 25 平野九郎右衛門奉行を免じ、番頭となる(本)。
- 閏7. 18 伊勢御師三村右京継目の御礼に罷下り、そのついでに国中奉賀を願出るも難叶旨を達す(借金返済のため近年家中懸米を申付けているため(寺例))。
8. 4 花島裏方新作事出来し姫様来場(奉日)。16 阿蘇宮地町神具商人増加し在郷に不相応なるものを売買するに至るをもって他の在町同様の商売を命じ殊に振売を停止す(寺例)。18 氏家甚左衛門奉行所詰を命ぜられ、御城代有吉市郎兵衛次席に列す、其の職務後の大奉行に当たるといふ(本)。石寺九兵衛、吉田善

貞享元 (1684)

右衛門奉行に任ず (本)。是月 阿蘇郡宮地の外在中にて神具売買を禁ず (本)。

9. 一 足輕は紬布木綿着用すべき条目 (花奉)。 是歳田畑満作に付、山本郡百姓の内上げ米を願い出づる者あり、奇特であるが、好意を褒めて断わる (本・玄察)。
10. 23 奉行所目付手付の横目は向後他国へは出さず (花奉)。是月 加来茂助 (長柄之者) 長崎より伝習のしつくい法在来の法に対し造作4分1にて調う (奉日)。御米俵相場之儀 100 目に2石7斗5升到相極可申由、奉行所より申来 四郎右衛門殿へ相達其通となす (花奉)。馬方目付を新設 (花奉)。
11. 14 従公儀被仰出し御書付之写。去年当年豊年故、此節凶年の心当いたすよう領主米穀等少々貯置よう心得ること (花奉)。(幕令 囲い扱の要請)。
12. 21 (イ27) 延宝8年家中の地方を収め粟米を以て給知の事に改められし処、是日知行は従前通りと為り、只「下免の領地は四つ物成 (4割) に足被下、且つ御合力米をも来秋より不被召上」と定めらる (「官制」及び「玄察」に、此事を貞享元年よりと記すは、同年より実施の為か) (肥)。22 御家老中より御渡被成た書付之覚一服装について (花奉)。27 今朝五ツ半時御用之儀有之に付御物頭列之衆花畑へ被罷出依之奉行中御目付中魚住新右衛門山崎角左衛門罷出事、近年御家中出米被仰付置勝手迷惑可仕と被思召るに依り来年より出米御免地方被差返、下免之領知は 割替四物成に 足被下条何茂所務入念百姓不致困窮様可申附旨被仰出。12月17日 (花奉)。 是月 当夏京町火事に逢った士、足輕へ米銭拝借被仰付100石に5石ツツ士席、50目ツツ足輕 (本・花奉)。京都御室仁和寺があるかと御領内御吟味の事 (触)。

是年 御国中之寺社官位倫旨願等にて上方へ罷登る時は前以様子相達様達之事 (大覚)。家中直所務となる (旧章)。奉公人給銀取立様之事 (大覚)。馬盗人に逢其馬之有所相分った上取戻様之事 (大覚)。高瀬町御年貢向後御双場を以代銭納被仰付事 (大覚)。沼理右衛門佐藤伊右衛門上野兵大夫惣御山奉行役被差除向後御山方目附役被仰付御山支配之儀は前々之通郡奉行ニ被仰付事 (大覚)。甲佐手永糸原村隠田之訴訟ありて各別検地被仰付16町6反余之打出新地出来たる由、「田賦者」に見ゆ (土管)。惣庄屋の帯刀を取上げる。享保13年芦北惣庄屋には依頼帯刀許可 (藩法井田384)。著書目録 歳序雜記 地誌 山崎半弥勝政。

貞享1 (2. 21改元) (1684) 甲子 (綱吉) 綱利

1. 14 妙解寺住職天岸宗玄 (光尚弟) 京都大徳寺に入る。2月1日卒す。年50 (家譜読・本)。22. 幕府、三河記校訂の為、諸家に家康以来の感状その他の写を呈させる。本藩では5月30日に江村亭伯作の漢文説明、山崎伝左衛門妻の感状写を「細川家伝」と名付け、柏原要人を使者として幕府に提出す (家譜続) (「本」は23日とす。)
2. 4 平野八兵衛知行召上隠居に付、当分扶持方18人扶持 (年頭御礼の時、門内にて家来を手付) (花奉)。22. 綱利発駕3月10日。1番立は2月28日。2番立は3月朔日に相極む (花奉)。26. 伊豆大嶋焼同27日止 (本)。御幸様御下此節初て箱根今切関所御手判願 (本・度譜)。是月、条々 (江戸参勤之面々心得方之儀に付法度の事)。(県史近3 - 451)。去々年豊年のため駄賃増銭の内割減仰付られる旨、且木貨は主人1人25文召仕の者は1人に付12文とする事 (触)。親が死亡しても当分屋舗を明ける必要はなく沙汰あるまでは其俣。但幼少の衆

は忌明次第家を明けよ（花奉）。家康曾祖父信忠から將軍家綱までに感状、御書并褒美を受けた者はその事を書認指出すよう江戸にて仰出あり、21、23、27の3日の内に奉行所へ指出すこと、三池善大夫と嵯峨藤左衛門は幼少のため田中又助を呼び出し尋ねたがなにもないとのこと（奉日・度譜）。

3. 10 綱利、今朝五ツ時前に熊本発、4月6日江戸着、7日上使、12日登城（本・奉日）。
 4. 5 東宮御所延焼（本）。是月 天草代官更迭し永田七郎左衛門真清着任す。本藩より物頭以下を派すること旧に同じ。10月10日病死（肥）。
 5. 9 花畑邸で御国様誕生。有吉立真孫女、年8才にて夭（本）。是月 熊本町にて商売物の儀に付、古金商売、町中に見世を構えての売買は其通。振売（虫喰）辻々、橋の上の懸見世での商売停止。古着の外古道具辻々勢屯などに集まる商売は停止。穀物中買入数を定め、今迄の人数の外は停止（触）。
 6. 5 川尻大慈寺方丈庫理（裏）修覆の為國中奉加勸進を願出、相對奉加勸進に限り許可（例帳）。21 村によって百姓の多少がある。米銀を出す時は高に掛け、人夫を出す場合は人にかけよ。然し村により左様ならぬ所はよく考慮して行え。藏納田畑少なく百姓多き村より出作など有る所へ参る百姓があれば随分諸々へ参りて成立つ様いたし遣すこと。百姓屋敷廻の木、其百姓の植立てた分は植立てた者へ与えるから惣庄屋へ相達、郡奉行衆の差図次第剪ること（御郡方記録）。宿町の一部に揚酒を許す（城南 382）。山奉行へ村継馬を渡す。村空地野山などを侍百姓より立山などに願出する時は百姓を先とす。御用外の藪は運上を徴して請藪とす。御立山以外の材木は剪買に申付く。往還宿々の堀立小屋を貫家に作り直す者には竹木拝領（林制19～20）。是月 百姓の公事其外に入は給人一切構ってはならぬ（触）。
 7. 18 社木等在来その社寺造営の為に願次第に拝領させたが近來山藪が殊に荒れたので、社木拝領の際も調査をとげ、やむを得ざるものに限り許し、尚剪取った跡の手当も充分行うことを条件とす（寺例）。23 新田支藩主細川若狹守利重息采女利昌、宇土支藩主細川丹後守行孝息熊次郎有孝初めて將軍に謁す（実紀）。是月 大津古井手筋1ケ月に5日宛水を通し船出米仕御米井手下に運べば御勝手によく駄賃懸よりも舟下の方が徳である（奉日）。小路廻のため側足輕10人を申渡す（奉日）。
 8. 16 衣類に付規程を定め、又茶道、掃除坊主、絵師、大工等の帶刀を更に禁止（肥）。28 於當中若年寄稻葉石見守大老堀田筑前守を切殺し、石見守即座に大久保加賀守等が切殺す（本）。是月 他国より養子願、他国へ娘縁組は格別の場合は許可（奉覚）。
 9. 6 細川豊前守興隆等、大坂城加番を終って歸り謁す（実紀）。28 細川豊前守興隆等、就封の暇給う（実紀）。
 10. 20 紀州にて吉宗誕生（本）。
 11. 13 綱利、將軍より領知判物を受く（本・度譜・実紀）。21 細川豊前守興文等、封地の判物朱印を受く（実紀）。是月 綱利、益城郡飯田山常樂寺に自筆の、普門品一卷を寄進（家譜続）
- 是年 神社の樹木は其社の造営に下附するとの達（肥）。奉行村上吉之丞退任（肥）。末女幸姫下る。御国に黄鷹生る。献上伺い出るもそれに及ばず旨（度譜）。天

王寺屋五兵衛扶持方10人扶持、貞享年中悴の引継を許さる(度譜)。矢部勘右衛門重光、矢部の内熊本往還三里大道の左右に並木の松を植える(郷歴)。郡方記録達になる。その中に小庄屋給米、高 1,000石に 1 石 5 斗宛下される段も見える(土管)。宇土町理兵衛吉市兩人上ゲ酒赦面の事(大覚)。宇土町別当孫右衛門不勝手に付締め油差免ぜられる(大覚)。南郷高森町へ月三度の市立御免の事(大覚)。

貞享 2 (1685) 乙丑(綱吉) 綱利

1. 21 鶴姫来月降嫁により城主并に 3 万石以上の輩より資装を奉る。細川丹後守行孝等は各綸子(実紀)。 22 後西院崩御(本)。是月 是頃五家荘住民中に出入あり益城郡砥用、八代郡四浦へ男女 37.8 人宛移住す。其理由不明のため 3 月 4 日幕府に指揮を乞う(家譜続・五箇荘出入竈数人数系図控)。其要旨①五ヶ庄四頭より砥用へ引越しの人数附 1 通拵え進ずること、②五ヶ庄雑座権之丞組下のもの悪事を企て欠落仕、色々の儀を申上げている由なので権之丞嫡子大蔵が出頭し全く身に覚ええない事を届出る。③欠落者の頭取は代衛門・左内・万右衛門と申者である。④権之丞は耳が遠く酒を呑むと途方もない事を述べるので悴が出頭したこと。⑤色々の申上様があっても在所に居るなら返答も有りうるが四散している為返答もよく出来兼ねる。助力を頼む(奉日)
3. 13 五ヶ庄立退きの 4 人の頭罷帰る様に申聞せたが権之丞父子が雑座にいる限りは立ち帰らないことを主張。この点について八代郡奉行寺川八郎兵衛益城郡奉行熊谷猪兵衛客屋にて承る(奉日)。是月 切支丹と申文字向後このように書くようとの達(触)
4. 10 松様逝去、年 17(本)。 26 綱利はじめ就封の暇給わる者 12 人(実紀)。
5. 23 綱利江戸発、6 月 21 日熊本着(奉日)。江戸への御使者寺本八左衛門(本)。
6. 7 綱利先月 13 日卯ノ刻江戸芝屋敷発駕の由申来る(奉日)。 29 水戸家の者長崎から島原・川尻經由で熊本城下へ来る。本日藤崎、妙解寺、本妙寺、成道寺、明日泰勝寺、国分寺の予定の処、明日の予定を取消し明日八代方面へ出立薩摩、日向と廻る予定(花奉)。是月 水戸の家来佐々助三郎・丸山雲平上下 12 人にて西国筋古跡社堂見廻りのため来る。豊後筋は 13 日の由当地来訪時の接待・案内手筈定む(花奉)。
7. 14 15 日盆に付丸中(藩庁内)役人休ませる旨氏家甚左衛門申出される、奉行所、郡方、勘定方は上ワ役以下 1 人宛出方いたす旨(本)。 19 幕府五家荘を天草代官支配に移す。是日家老長岡佐渡の名を以て家中に申渡あり(家譜続・本)。五ヶ庄支配について公義代官支配となったので緒方新左衛門、緒方左右衛門、雑座大蔵同門右衛門同権六を奉行所へ呼出し伝える(奉日)。
8. 10 沢村宇右衛門有吉清助伊藤一平らが立花飛驒守閑札ノ内に止宿したため閉門、なお知行は蔵納同前とし今月より当前扶持方支給(花奉)。 19 沢村宇右衛門元組 前川与三兵衛、続弾右衛門触組 谷与三左衛門・同田中次大夫、右江戸にて不行跡、知行召上扶持方下さる。松下清兵衛組 坂井十兵衛・続五左衛門・門司源兵衛、右 3 人江戸にて不行跡暇。有吉清助組 里杵之助常々の行跡叶わず知行召上当前扶持方。横山藤左衛門組 続三四郎、常々不行跡、暇(花奉)。是月 沢村宇右衛門友雅閉門となり知行召放さる(先祖附・先哲)。
9. 18 馬の筋伸べをすることは第一用方に不宜、其上不仁成儀に付て厩にいる馬

共先年より停止仰付られたが今以世上にては拵馬有之由、向後堅く制禁仰出さる。右の趣、備頭衆柏原新左衛門、続弾右衛門、柏要人、岩間弥左衛門、小姓頭衆柏原左内、氏家甚左衛門、町奉行衆奉行中目付中仰渡さる(花奉)。19 お幸様熊本にて逝去、年4(本)。是月 寛文8年の家老衆は誰々かとの間に佐渡、監物、大蔵、左近、助右衛門の5人と答う(花奉)。

10. 9 江戸二丸にて猿衆あり。細川若狭守利重等に肴を奉る(実紀)。
11. 16 備頭衆への達の覚。他国より御国へ呼越申者養子縁組不被仰付。乍然他国にてかかり可申一類無之御国へ引越申者は各別の事にて養子縁組共に吟味の上可被仰付事。末期に至て養子を願は書物の判元組頭見届可申。頭指合之砌は組脇見届可申。(花奉)。是月 米6,000石を船積で出すことは困難で5,000石積ませるよう。しかもその船を指下す時期が悪いと当方が支えるから勘定所役人よく打合せよ。これは当年だけか先永くかは今日決定は不可能。積米さへあれば当年とは限らず積せる。また5,000石と極めるのも困難でその年々の様子により決めよ(奉日)。
12. 6 荒木勘左衛門は天草にての勤悪敷、其上立山にて家来木を切申儀重畳不屈追放(花奉)。是月 能勢文左衛門谷忠兵衛乱心召上、里奎之助谷与三左衛門田中次大夫召上(花奉)。

是年 奉行服部武兵衛20挺頭へ、同宮川金右衛門用人へ転ず(本)。年貢蔵納の法及び代官・惣庄屋の口米高を定む(肥)。初めて銀札通用、町在に札座あり(宝永元年の条参照)(肥)。寺社本末改あり(肥)。東宮御所築造の費用の割当として、1万石につき銀88匁5分6厘4毛余の積りで賦課をうく(奉日)。口々にて切手無しに藩外へ出す品々押置、理相立不申ものは懸之惣庄屋へ渡、竹木は道橋の修理に用い五穀は郡奉行支配限に加へ申すように(大覚)。主人父母へ忠孝をつくした者へ被賞御米等被下置事(大覚)。泰勝寺妙解寺へ寄附した知行所務高之事(大覚)。阿蘇衆徒中開地年貢米去々年去年兩年分総銀所に被預置、衆徒社米に致置阿蘇社用等之節相渡申答(大覚)。国中往還宿継人馬賃銀定之通不申、猥に有之に付宿々へ壁書被遣事(大覚)。是冬 天草代官五ヶ庄へ罷越、立去る者も立歸る(奉日)。

貞享3 (1686) 丙寅(綱吉) 綱利

2. 6 合志郡板井村源四郎大勢人を集め喧騒の体となり死人も出る状態であった。依て源四郎に過怠として植松3,000本を命じ出籠を命ず(奉日)。是月 小者給、下々給銀、当年より米給になる(奉日)。藩主有吉四郎右衛門宅に入嫡子千松御目見。去年迄白金屋敷に被成処今度在国中、作事成就、今年より上屋敷へ住居(本)。
3. 10 堀部甚之丞奉行に任ず(本)。是月 藩主益城郡七滝見物、越えて貞享5年2月、石燈籠2基七滝社に寄進(家譜続・本)。養田平七娘、悴平助を相応に召仕われるよう願書出す(花奉)。江戸右廻の船に武具・馬具積廻は下田三崎で改められるから堅く積込を禁ず、家中士は勿論在々の牢人も注意するよう達す(奉日・奉覚)。知行取衆100石より200石迄の衆今迄は継馬1疋渡ったが、今度御供より1疋半宛被渡下(花奉)。

閏3. 1 今晚七ツ半時分古町蓮光寺より出火近辺焼失、山本玄哲と申町医師所にて六ッ少し過に鎮火(奉日)。4 総奉行氏家甚左衛門備頭を命ぜらる(本)。

貞享4 (1687)

綱利今朝辰の上刻発駕（奉日）。途中阿蘇社参、4月6日江戸着、竜口邸出来に付同邸に入る（年・本）。

4. 14 細川綱利はじめ参勤拝謁する者16人（実紀）。23 綱利去る6日着府（奉日）。是月 寺社本末改之事（触）。
 5. 8 束帯にて厳有院、將軍家綱靈廟に詣る、豫参は綱利等奉仕（実紀）。
 6. 27 將軍家厄年に付御賀の能あり、拝見のため綱利登城（本）。
 7. 28 奉行所に代官、蔵奉行、蔵横目、内検（各々その姓名を戴す）を召寄せ、諸事奉行日付列座の上吉田善右衛門より申渡す（奉日）。是月 惣庄屋五町甚右衛門病死いたし訳有者に付、弟長吉15才に跡役被仰付知行 100石被下置（奉覚）。宿町市日の外在々へ塩農具さこいわし売之外入込禁止、且町人在々へ入込穀物買禁止の沙汰（触）。
 8. 一 都甲太兵衛帰参被仰付、先知 300石無相違被下（奉覚）。
 10. 一 元奉行小林半太夫病死（本）。是月 熊本廻口留之側足輕今迄は兩人宛にて四ヶ所に居るが先日口留之儀念を入少も明不申様に。油断の様子あれば小頭の越度とする旨小頭佐藤市介に申渡す。小頭大浦伊三右衛門の申出により側足輕の人数を一ヶ所3人宛にして欲しいとの事、その通りに申渡す（奉日）。
- 是年 御召船波奈之丸大坂にて造り替あり、高橋善兵衛息善左衛門工作し、豊後鶴崎港に置くこととす（家譜続・本）。出京町に井戸なく諸民難渋に付井戸を掘る（肥）。波奈之丸大坂にて造営に付川尻大工竹内次左衛門請込む（川尻史 246）。藩内で向後新規の祭札無用のこと。今迄の神事は弥輕可致との触之事（大覚）。切支丹宗門改方之儀達す（大覚）。日田、小田境の槻倒木に付出入。元禄7年9月にも小国倒槻一件あり（細分正一165）。

貞享4 (1687) 丁卯（綱吉）綱利

1. 一 切支丹改を1月11日より3月15日迄に行うと定む（肥）。
2. 一 永田久右衛門奉行に任ず（本）。高札場増之事、鹿子木町小嶋町新建被仰付段記録に有之（会旧）。
3. 5 幕府近く即位式あるにより進献の制を定む。是日家老大木舎人使者として江戸より京都に赴く（本）。11 長六河原にて万町の子供金仏を拾ったので氏家甚左衛門、柏原新左衛門方へ申達、15日に拾い物を江戸藩主へ早飛脚にて送る（奉日）。21 靈元天皇護位、東山天皇踐祚（肥）。是月 私に船を貸申間敷事（諸帳一4）。
4. 21 揚様（綱利娘）細川若狭守の養子となり松平美作守へ嫁娶。（本）。29 細川綱利はじめ就封の暇賜わる者22人（実紀）。是月 田畑永代売買並に質地遺し置き無田地の者の年貢諸役勤めのこと幕府よりの禁止につき、永代売渡しの者は元銀を以て買戻し又は質地に仕替方を命ず（肥）。質地年貢並田畑永代売買之儀に付達（書拔）。
5. 2 万町小衛門子の小平の拾物は切支丹宗門の者の持物である事判明、1丁目札辻に黄金20枚の高札建てさす（奉日）。是月 寺社之儀に付当月於江戸国友八郎右衛門より寺号・寺領に関し大久保安芸守様寺社方の用人衆へ相尋ね、それにつき安芸守寺社方の用人筑間蘭右衛門が承聞した。（寺格）。石塘辺白川筋にて如鏡成鑄物を捨てる者有、切支丹宗門之者の持つ道具の由に付、捨てた者は可訴出旨之事（触）。

6. 1 綱利江戸発、29日熊本着。江戸への使者朽木内匠（本・家譜続）。
 7. 13 公儀よりの切支丹の仰出書、花畑にて家老中列座の上、奉行中、目付中、郡方、勘定方一列に召出され、書付の趣相守、其沙汰仕るべき様の執達あり、この旨を備頭中何れも組々へ申渡されるので奉行所触の衆にも触れること（奉日）。是月 八代染革は最早公義へ献上の必要なしとの儀を側衆へも申談ず様とのこと（奉日）。飛脚に、道中宿場等にて見聞事項、旱雨情況、川の深さ他大名参勤交替その他変事等詳細に書上げさすこととす（花奉）。
 8. 5 新田支藩主若狭守利重江戸に於て卒す。年42、9月27日嫡子左近利昌遺領相続す（本）。28 鍋様江戸にて誕生（本）。
 9. 27 若狭守遺領、嫡子采女相続被仰付同日主税様へも賄料 5,000石被達（本）。
 10. 4 綱利の嫡男与一郎江戸の白金屋形で誕生。（イ11月とあり）（本）。
 11. 29 古細工町六兵衛儀、3丁目御門際に宗門之儀に付偽を企て落文を仕る故にはり付に被仰付（奉日）。是日 野路弥五衛門、長坂弥次兵衛 5月長六橋際に長崎へ当て落文したかどで井手口にて刎首、坪井町ときや助丞・長坂弥二兵衛が落文を書認めた理由で助丞御国追放（奉日）。是月 益城郡坂谷村銅山採掘希望者があるので採掘を沙汰す（奉日）。はり付に被仰付（奉日）。是日 野路弥五衛門長坂弥次兵衛 5月長六橋際に長崎へ当て落文したかどで井手口にて刎首、坪井町ときや助丞長坂弥二兵衛が落文を書認めた理由で助丞御国追放（奉日）。是月 益城郡坂谷村銅山採掘希望者があるので採掘を沙汰す（奉日）。
 12. 9 阿蘇黒川坊中前々より争論不穩につき学頭新補を機会に衆徒行者中に学頭の下知を順守することを命ず（寺例）。
- 是年 松野八郎左衛門休庵歿す（先祖附）。寺社所替の事に付寺社奉行衆へ問合せた稜々の書付の事（大覚）。捨子あれば届に不及其所へ養置く様、其外鳥類畜類あわれみに付稜々御触之事（大覚）。年貢皆済不仕内他借返弁仕る間敷、諸勧進入申間敷との儀諸郡奉行へ書付渡す（大覚）。影踏之儀いつも延引に及び候間仕法替之事（大覚）。久住手永滝水村と竹田領下滝水村との境目出入、元禄2、3年、天明元年、弘化5年にも同様の出入一件（細分正 166～7）。落雷にて出漁中に1名死亡（気）。

元禄1. (9. 30改元) (1688) 戊辰 (綱吉) 綱利

1. 一 類族之者居所不明は不可故、常々相改る様、且1人他領へ出る事無用之旨之事（触）。
2. 一 奉行石寺九兵衛奉行上座として江戸定詰となり昨年10月4日誕生の綱利息与一郎附を命ぜらる。（本）。
4. 3 大広間の舞台にて將軍自ら申樂を舞う。細川采女利昌等奏者番（実紀）。
9 細川綱利はじめ参勤拝謁する者5人（実紀）。
5. 一 琵琶の平家派になった仏説派の座頭共又仏説派に立歸度由押々願いに付右之替者御国追放の事（花日）。
6. 12 宮本武蔵の剣統を嗣ぎし寺尾求馬介信行歿す。年68（先哲）。
7. 21 細川尚房息大膳尚方歿す、年20、断絶（本）。
10. 一 算用奉行は組付知行衆より命ぜられし処爾今勘定所支配に改めらる（本）。
11. 一 隣国へ使を遣した時知行取衆之内、預知にて扶持方迄之衆を任命する様に

元禄 2 (1689)

讃談仕り家老中へ相達す（花奉）。医師山田調庵、永野宇玄先頃病死。跡目は不被仰付、銘々知行当り前之扶持方嫡子に被為拝領（花奉）。知行取の立山手開仕置病死之節其子跡目立下されずとも中小姓段に被召仕ば立山手開は被為拝領（花奉）。

12. 25 新田支藩主左近利昌従五位下に叙し采女正と称す、年17（実紀）。天草詰目付は従来中小姓より任用せしを以後知行衆より命ずる事とす（本）。従来長崎留守居は小姓組より命ぜしを、使番より命ずる事となる（本）。久世三位中将重病に付知行 100石は其伋息女へ被下様遺書出来（本）。

是年 天草大矢野組は従来島原藩預りの処、是年より代官支配となる（肥）。天正年中より寛永年中其後延宝の初迄奉行や日附の組附も有之、延宝之末より今の如く一格に被仰付、元禄年中より郡奉行も組外に成、組附の上に被仰付（度譜）。江戸詰にて物頭以下は無礼にて御門出入が出来たが、元禄年中勘定頭は無礼にて出入が許され、御門留之節も夫に不及旨被仰付（度譜）。御山方之儀郡方衆支配に相成る事（大覚）。浦手は今度郡方支配に被仰付、今迄は浦奉行支配なりしが向後は諸帳目録郡方へ納る事（大覚）。猪鹿等田畑を損した時は成丈け追散し猥に殺生無用の事（大覚）。町人はこせこせせず花見遊山踊等之儀も今迄の通り仕れと御意之事（書拔）。玉名郡長洲町西東に裏町出来（諸帳5）。

元禄 2 (1689) 己巳（綱吉）綱利

1. 14 常陸国茂木の領主細川豊前守興隆致任し其子女蕃頭興栄に所領16,300石襲封さす（実紀）（「本」は同月19日とする）。与一郎着袴（本）。
2. 18 高田原大火事に付類火に逢った者共御借銀被仰付（花奉）。19 千次若様白金にて誕生（本）。
3. 一 五人組中に親類の者を組合す事禁止（「官制」は之を11月におく）（肥・触）。
4. 12 細川綱利始め就封の暇賜わる者20人（実紀）。18 光様酒井右衛門尉忠真と婚礼（本）。
5. 11 綱利江戸発、6月10日熊本着（本）。飢饉、双場、銀 100目 2石 3斗が翌年2月2石、6月には1石8斗となる（気・度譜）。
6. 22 沼田小兵衛組興津才右衛門8月朔日以後組の鉄炮打せ不届に付知行召上閉門（元禄3年3月妙解院（忠利）50回忌の時閉門赦免、才右衛門子弥五右衛門に200石）（花奉）。是月 他国商人の本藩内にて振売禁止（肥）。
7. 29 木下三郎左衛門跡の備頭に沢村大九郎を任ず（花奉）。是月 大水出づ（玄察）。死罪除日と断罪日を決定（花奉）。類族帳公儀へ差出すに付類族方役人住田五助荒本文右衛門差添らる（花日）。
8. 一 知行割替、去月27日松井佐渡が永田久右衛門へ渡してある八代城付之内、宇野理兵衛、瀬川長右衛門、平野喜右衛門らの知行が遠方の為割替を望むという書付を郡方衆へ渡した。合儀の上、先年家中知行取衆四ッ成不足之知行は四ッに足被遣。500石以下の給人13里外に知行所有之衆何も迷惑可仕旨にて願の衆へは割替被遣。向後 500石己下之衆へ13里外之知行割仕間敷旨被仰付。遠方知行先年割替願不申残居る小身之給人衆27人。下免知行割替願不申給人衆 125人。右之衆の内只今難儀仕と相聞申さば割替被遣様成ゆき諸事に差障もあり、下免知行割替する時は其年之秋より内に割替可申旨にて諸事願の儀秋より割替

(花奉)。

9. 27 奉行中目付衆へ節儉について全11ヶ条の書付渡さる。右の通来午正月より改之可相守者也、巳 8 月 (花奉)。是月 大津新町東端に新町の建添え許す (肥)。公儀儉約の触 (本)。
 10. 7 長岡与八郎忠恒隠居し知行 3,000石を弟半左衛門に譲る。合せて 6,000石となる (肥)。12 熊本高田原町出火 (肥・花奉)。23 奉行生駒新九郎鉄砲頭に転ず (本)。是月 人を殺す者は殺されるが親類の願により罪御免之儀は以来容易に難成極之事 (書拔)。
 11. 4 寺社に付公儀寺社方に尋ね度き儀あり戸田能登守家来寺社方用人古渡善大夫に問合わす (寺格)。是月 天野屋理兵衛綿座元被仰付。同 5 年 8 月依願被差止 (触)。本地、開地下免につき割替覚書之事 (覚)。
 12. 18 綱利監物宅に行く (本)。是月 自他出入の船の往来手形を定む (肥)。
- 是年 家中 3 分 6 朱上げを令す (本)。勘定頭の大坂詰始まる (本)。波々伯部権左衛門、吉住半四郎、矢野又右衛門奉行となる (本)。甲佐築場の御茶屋解かる (玄察)。大坂蔵屋敷町人の名代は前廉天野屋理兵衛であったが、元禄の末咎で木屋七郎左衛門に頼み十人扶持被下、享保年中長瀬七郎右衛門に改の由。尤常式の儀は塩飽屋清右衛門が勤め、重き事七郎右衛門に相違取計由 (度譜)。

著書目録 肥後名勝略記、地誌、辛島道珠

元禄 3 (1690) 庚午 (綱吉) 綱利

1. 16 三宅藤助側詰兼奉行所御用を命ぜらる (本)。是月 開地を知行高に直して下された年号並本知行之分の覚書之事但阿蘇組衆について (覚)。天和 4 年下免地割替以前に知行の内替地被仰付面々の覚書 (覚)。細川丹後守 (行孝一宇土) 室の知行、与八郎、長岡住安老知行割之事 (覚)。
2. 11 妙解院 (忠利) 50 年忌に付御供した筋目之衆へ衣服被下今日頂戴 (奉日)。
- 17 妙解院 50 年忌に付大河原治部進ら 12 名の勘気を免ず (花奉)。27 佐賀関番人へ唐船漂着の節取計等の儀に付、書付を以て被示置 (本)。28 米田監物は庸に長岡氏を称せしむ (奉日・本)。文政 4 年写本松井家譜には 12 月 28 日と記す (肥)。是月 盲目共心得悪敷者もある故、何分にも琵琶平家派に可相成旨之事 (触)。寛文元年以来追放、暇並知行召上の面々、病氣乱心にて知行差上られ又は依願暇遣の面々の知行高名附の事 (覚)。
3. 4 綱利熊本発、4 月 4 日江戸着、翌日上使、同 15 日登城 (本)。17 妙解院 50 回忌法要 (肥)。
4. 14 細川綱利始め参勤拝謁する者 16 人 (実紀)。
6. 4 宇土支藩主細川行孝卒す、年 54、8 月 10 日熊次郎有孝家督相続 (本・家譜続・実紀)。是月 切支丹転びの者死去の時塩詰とする為、塩、棺代を支給する事とす (肥)。蔵納新地方中分免之事 (覚)。
7. 一 御配知給人 1 人に付 1 村の内 2 割に用るの覚 (覚)。
8. 10 肥後国宇土領主細川丹後守行孝遺領 30,000 石をその子熊次郎有孝に嗣しめらる。この行孝は故中務大輔立孝の子。宗家肥後守光尚が遺領を分ち正保 3 年 8 月 4 日初見し承応 2 年 12 月 28 日叙爵して丹後守と称しこの 6 月 4 日 54 才にて卒す (実紀)。細川有孝熊次郎は越中守綱利と同道登城將軍綱吉に謁見、行孝の家督相続被仰付 (宇土史 102)。15 有孝より亡父行孝遺物信国の差添を奉

元禄4 (1691)

る(実紀)。是月 久住手永波野村百姓権三郎なる者、主人に忠義の故を以て所持の地方一代限り作取りを許さる(肥)。

10. 7 孔廟に典籍、祭器等を進献あり。綱利等は祭器其外種々なる品を献ず(実紀)。是月 野津原新田の磧、差止の覚書(合)。諸郡蔵納給知役高目録を作る様沙汰之事(合)。
11. 一 所々蔵納高割之事(合頭)。家老長岡佐渡(直之)筑後と改む(本)。立田山近在、猪鹿出て作物荒す(肥)。
12. 6 矢部浜町入口に構を立つ(肥)。26 宇土支藩主細川熊次郎有孝従五位下に叙し和泉守と称す(実紀・本・宇土史 102)。

是年 八代の球磨飯屋内に丹通庵草創(蔓綿)。天和3年給知返却され、元禄3年麦請之儀に付書付(度譜)。町人共は寛ぎ立花茶湯杯慰みとなし、上方同様掃除等奇麗にいたす様御意之事(書拔)。捨子益々禁制に付此以後捨子をする者は曲事に被仰付旨達之事(書拔・大覚)。盲目者平家派に成る様との事(大覚)。芦北惣庄屋被召籠之一件(大覚)。

元禄4 (1691) 辛未(綱吉) 綱利

1. 一 鉄砲所持並に稽古方に付規定を改め、又民間の鉄砲改めを行う(3月附にて玉名郡山十町村庄屋より鉄砲所持者を届出たる記録によれば鉄砲改にも切支丹改同様、五人組に責任を持たせし事知らる)(肥)。
 2. 3 吉様、細川采女正(利寛一新田)へ嫁す(本)。23 手取黒鍬丁より出火千反畑立田口新屋敷迄焼通る(本)。是月 右火事以後御花畑槻御門脇の小門萱門両所に朝より暮迄明居昼之内通行不苦に成る(本)。
 3. 一 牛馬売買の法を定む(肥)。
 4. 15 綱利始め24人、就封の暇下さる(実紀)。是月 悲田宗停止之儀に付公儀より仰出(書拔)。長岡有吉以下5人の家老連署にて飽田託摩両郡奉行宛に境目定式帳を出し木材の領外流出を取締る(林制21・熊史5)。惣庄屋の送手形を以て竹木を他領へ移出(林制21)。
 5. 4 綱利江戸発、6月4日熊本着、奉行堀部甚之允、矢野又右衛門等御供(肥)。江戸への使者奥田権左衛門(本)。27 4月より8月にかけて阿蘇山大いに荒れる。就中是日巳刻~午刻鳴動甚しく火石大いに昇り黒煙東北方に棚引き、坂梨村、宮地等の間晦冥にして燭をとりて至る。飛禽煙に咽びて死するあり(肥国誌下 530)。
 6. 12 小川町のみ洪水、米穀多く流出(気)。是月 鉄並白粉間屋新二丁目米屋権左衛門に被仰付、はがね商売は呉服町七右衛門商売付筈之段沙汰の事(触)。
 7. 6 国様(綱利娘)卒去、8才(本・花奉)。
 8. 一 岩立に塩硝置所出来(花日)。是月 2月の大火の結果坪井の道幅を広むる事、町家と侍屋敷を変更する事に付是月幕府の指令ありて着手し11月工事終る。坪井広町という(家譜続・花日・本)。柏原要人方へ申されるには岩立の塩硝置所の足軽2人の屋敷急度引渡可申、右之者共迷惑せざる様との達(花奉)。
- 閏8. 15 西国一中国、奥の国々巡察まかりたる勘定等帰り將軍に謁す(実紀)。19 古跡拝領地寺社方借添替之地に作事并作り出す事弥以堅仕間敷事。寺社門前町町屋敷新規作る儀は不及申作り出す儀も堅仕間敷事。右の書付は公儀御日帳之写今度江戸より知来仕る。奉行中寺社奉行中其意を得向後右之通心得可旨被仰

出(寺格)。是月 侍中先祖以来之様子書付差出す様との事(触・花奉)。沢田松右衛門養子願之御礼言上の仕形不宣に付暇(花奉)。

9. 22 財津惣左衛門への申渡覚。財津団四郎開地唯今迄下置かれた知行に加えられ頂戴仕度旨願之趣その通申渡すべし。此後右の通の願あらば本知共に高 150 石以上の場合には取次可被申、其以下は取次無用との事(花奉)。是月 日田郡津江山之材木板買取申間敷旨之事(触)。

10. 一 唐稗熊本御蔵入の事(合)。

11. 3 寺社奉行小笠原佐渡守へ寺社之儀に付当 5 月書付を以て内意御尋ねの事(11ヶ条の問合せに附札にて返事)(寺格)。是月 小国給人 3ヶ年撫物成付之事(合)。

12. 25 細川玄蕃興栄遠慮申付らる。所領の農民犬をもて鹿をとりし事に座してなり(式稿)。足米帳之事(合)。

是年 家士病死後の相続に就き忠利の所定以来時々変更されたが爾後此年のものを定制と定む(本)。帰国供奉行堀部甚之允、矢野又右衛門 2 人とす(本)。日蓮宗の内不受不施之儀は禁制の処小湊誕生寺に悲田宗と号す不受不施之新儀を立てしに依り悲田宗は堅停止之事(大覚)。

元禄 5 (1692) 壬申(綱吉) 綱利

2. 一 芦北郡久多良木在地筒郡代被召抱の覚書之事(合)。是月 先に却下されし吉野村靈山寺の再興願許可さる(寺例・城南史486)。

3. 1 綱利監物宅へ行く(本)。4 綱利熊本発、4 月 4 日江戸着、5 日上使、14 日登場(本)。8 来月御談合により参向公卿の館伴仰付らる。仙洞使は細川采女正利昌(実紀)。16 益城郡中瀬橋八代郡永川橋芦北郡佐敷橋は郷四ヶ所の橋同様費用は国中割とす(林制23)。

4. 18 知足院火の御番(本)。22 旱魃に付池上村池辺寺の独鉆を出し雨を祈る(肥)。是月 大津、保田窪、黒石の地筒の者の勤方を改め掃除方支配とす(肥)。山本郡味取町屋敷之事(合)。

5. 一 神護寺権現社建立(家譜続篇第20巻に神護寺記録を引用して寛永13年4月5日東照宮仮殿成就、元禄4年11月21日東照宮再興棟上とあり。元禄4年云々はとにかく寛永13年云々の件は別に之を證す可き史料を得て決すべし)(本・肥)。

6. 12 洪水、井手溝立筋往還打越住民10数人家共に埋まり死亡(気)。

7. 一 一領一正地侍開 5 町以上の覚書出しの事(合・覚)。

9. 一 矢部手永目丸村庄屋自分に井手分堀井高仕立の事(覚)。是月 野開運上銀請裁代米 1 割増に被仰付事(覚)。

10. 5 此度西より東へ白氣立つ(玄察)。29 長岡筑後直之江戸にて病歿す。年 55、12 月 19 日式部寿之相続す。山城国 2 郡内の所領故の如し(本・家譜続)。

是月 久住野開作霜痛に付半分下ヶ仰付らるの事(覚)。芦北郡馬手潟、日方、八代野津、鹿嶋の御開所小庄屋請之事(覚)。沼山津手永寺中村生嶋三右衛門上知免 3ヶ年撫極メ之事(覚)。

11. 20 歩小姓橋谷安之助小者手討(本)。

12. 一 立田口鉄炮場渡之事(合)。

是年 護持院火之番受持(度譜)。家士在国中の衣類を木綿物と定む(肥)。蔵米

元禄7 (1694)

の知行向後免四ツにして下さる(本)。代官口米歩一取立之儀に付勘定所書附之事(大覚)。郡奉行知行高250石以下の面々へ今度下された役米員数之事(大覚)。野開運上受裁代米等1和利増之事(大覚)。新知加増高、役料足米四ツ物成に仰付られる事(大覚)。新知加増知行割之儀秋免3ヶ年の内下免1ヶ年引2ヶ年撫四ツ3歩7朱3割方にて渡してきたが以後6ヶ年撫にして下免を引かず四ツ成にして渡さるとの事(大覚)。野津原手永五ヶ瀬村と公領塩手村との境目出入。この件元禄14~17年迄の史料あり(細分正167)。

元禄6 (1693) 癸酉(綱吉) 綱利

1. 28 新田支藩主和泉守有孝、江戸城奥詰を命ぜらる(実紀)。
2. 19 お召により登城の処、来る22日將軍自身中庸の御講釈、一同拝聞(本)。
3. 7 長岡式部寿之相続お礼の為江戸着。3月28日登城御目見(本・家譜続)。
4. 14 綱利始め就封の暇給うもの7人(実紀)。15 是日より6月12日迄雨なし(玄察)。21 將軍周易を講ず。爾後毎月8回開蓮を例とす(本)。28 知足院火の御番松平伯耆守へお引渡し(本)。
5. 7~6 25 旱魃日照日47日間(気)。13 綱利江戸発、6月18日熊本着、使者有吉市左衛門(本)。是月 式部が長岡の称号拝領帯刀と改名之事(触)。(「本」は4月22日とす)。
6. 12 細川和泉守有孝に預けられし朝比奈一郎右衛門某の子彦十郎某、源之丞某彦三郎某等、鍋島信濃守勝茂が家臣某等みな赦を蒙る(実紀)。18 綱利今朝卯之刻大津を発駕巳之刻着座の事(奉日)。20 揚様(綱利娘)逝去、23才(本)。25 夜にかけ大風大木の吹倒さるもの多し(玄察)。
7. 22 儒臣辛島古淵歿す。年63(先哲)。是月 新知加増の面々知行割当、年損毛の為割方困難に付蔵米渡下さる(覚)。綱利菊池川上、日奈久河原七越へ勝景見物に行く(奉覚)。
8. 10 元禄6年8月23日江戸矢野又右衛門方より奉行への書状ケ条写。①寺の弟子隠居町方在中に引込居住の可否。②在家にて仏壇を構えた真宗坊主先祖の寺号名乗り度き儀の可否。③辻堂、堂守へ出家の居住の可否(寺格)。
9. 12 海川筋で慰みの殺生堅く停止(奉日・奉覚)。14 坂崎清左衛門病氣の為役儀被差除(奉日)。18 綱利帯刀寿之宅へ来る(本)。是月 高瀬御蔵の米、山御用薪の割賦本方より出してきたが根取所よりの仕出に成る(覚)。
11. 14 柏原新左衛門儀家老列に仰付られるの旨(奉日)。(「本」「先哲」は15日とする)。21 綱利監物は庸の下屋敷へ行く(本)。中小姓養子願は訳なしの分は向後藩主に申さず家老承居にて相済(本)。
12. 4 綱利今度山鹿より菊池高瀬へ行くため今朝5時過出発(花奉)。25 玉名郡上沖須村名石大明神舞殿建立について、寺方の新改増築の規制は分明なれど社方については不明であるから石川能登守用人古渡善大夫に問い「寺社共に同前」の返事を得る(新地禁令は寺社共に通用のこと)(寺格)。是月 細川藩切支丹類族(肥後国のみ)約5,400人(切支丹63)。

是年 山本郡味取新町建つ(肥)。奉行波々伯部権左衛門奉行退任か(「本」には年より其名なし)(肥)。八代新田村の者へ鉄山採掘を許され、この鉄御国鉄間屋の外に売方も許される(大覚)。類族方を設置す(城南334)。

元禄7 (1694) 甲戌(綱吉) 綱利 94

1. 15 吉住半四郎奉行退任 (本)。
2. 28 長岡監物は庸熊本発。4月1日江戸着 (家譜続・本)。是月 京都大坂長崎天草へ召連れる下々の者の給銀は今迄お国で召仕う者の給銀に10匁宛増であったが向後京都大坂へは30匁宛増と改む (花奉)。小林十右衛門閉門赦免、当前扶持方支給 (花奉)。

10

3. 4 綱利熊本発、4月9日江戸着、11日上使、14日登城 (本・家譜続)。九州地方諸大名の鶴崎港懸船規定定めらる (本・家譜続)。
 4. 14 臨時朝会あり。綱利始め、参勤拝謁する者26人 (実紀)。
 8. 3 元禄5年新地の禁令緩み在来との取扱い方変更の割合について覚書を寺社奉行戸田能登守家来古渡善大夫へ尋ねた処、返信来る (寺格)。17 綱利監物の小屋へ行く (本)。
 10. 27 寺社方作事に付ての古渡善大夫の返事。寺社免許地并地子地共に在来の家の外に別屋を築する事に付ては許可す。同上次棟を延し亦是、かぎ屋にする事については大概可。庇に棟を立て又はかぎやに作る事は大概可 (寺雑草附)。
 11. 24 竹様卒去。有吉頼母英長妻56才 (本)。
 12. 2 松向寺 (忠興) 54忌 (本)。是月 御勝手向別而差支に付町在等より差上置いた銀米之利并家中内借物共に当暮の利分は支払わぬ旨 (触、大覚)。
- 是年 遊行上人来熊、阿弥陀寺に宿す (玄察)。市中麴商売難叶事 (大覚)。

元禄 8 (1695) 乙亥 (綱吉) 綱利

1. — 熊本の大津御蔵入の郡之事 (合)
2. 15 綱利息与一郎登城、将軍初見 (本、実紀)。
3. 1 将軍易の乾卦講釈、綱利登城聴聞 (本)。19 采女 (細川利昌一新田) 豆州熱海へ入湯 (本)。是月 奉行永田久右衛門退任 (本)。植木町 (味取新町) 建御免之事 (藩法383)。
4. — 大地震あり (玄察)。
5. — 昨年11月より是月迄雨天多し (玄察)。
6. 13 幕府切支丹の本人並に類族の制定む (実紀)。
7. — 合志郡妻越村氏神社、村より8丁離れ管理不行届に付村中に引移し度き由願出。元禄4年の公儀の意向は5—10間位は可、1—2丁となれば不可。依て古渡善大夫に問合せた処「古跡の社地にて御座候得ば御領主之御心次第引移不苦候」 (寺雑草附)。
8. 19 綱利江戸発、9月28日熊本着、江戸への使者津川一人 (家譜続・本)。
9. 14 長岡監物江戸発、10月12日 (イ、2) 熊本着 (家譜続・本)。
10. 28 藤懸忠右衛門堀岡右衛門奉行職に任ず (本)。是月 鼓瀧、はけのみやに飽田託摩下益城の内の楓の木、高さ2間以下のもの 150本移植、七越河原へは矢部より高さ2間以上なら50本、以下なら 100本移植の事 (花奉)。
11. — 小路廻りの足輕差廻様之覚。拾人組の者町奉行共より町中差廻様之覚。目付共手付之横目差廻様之覚 (花奉)。
12. 11 綱利監物宅に行く (本)。是月 町在杯より差上げた米銀之利、御勝手支に付昨年同様支払いが出来ぬ旨 (触)。

是年 大判等吹替あり慶長以来古金ここに消失 (本)。侍中へ制度之書附相渡 (大

元禄10 (1697)

覚)。代官口米員数之事(大覚)。味取新町出来に付商売之品に付奉行より差出されまた同町へ市日1ヶ年限御免(大覚)。金銀吹替に付古金銀同様相心得之事(大覚)。寄場解崩が命ぜられた由、捨芥記に見ゆ(土管)。

元禄9 (1696) 丙子(綱吉) 綱利

3. 6 綱利熊本発、4月11日江戸着(本)。
4. 16 増上寺火之御番(本)。「度譜」には日付なし。
6. 18 洪水、人々流失(気)。
7. 一 大仏建立奉加銀熊本町中割当銀4貫900目(式稿9)。
8. 6 將軍自ら能興行、綱利葵の上の脇を勤む(実紀・本)。
9. 9 大酒を慎むべし(花奉)。14 采女正(細川利昌一新田藩)伊香保へ入湯(本)。
11. 16 光様酒井忠真の室卒去。29才(本)。東山帝即位(本)。是月 紙并楮他所へ出すこと停止の処、他所之面々領内へ来り遣用に買調た紙は格別(触)。
12. 5 綱利左近衛少将に任ず(実紀)。19 去る5日綱利が少将に任ぜられるの知らせ18日に熊本到着、19・22両日祝儀あり(花奉)。是月 南関、阿蘇小国久住、野津原、鶴崎不作に付仰付られる覚(覚)。

是年 條約に付家中心得方被仰付(大覚)。大慈寺、永平寺の末寺となる(川尻史58)。藏納分の土免治定になりたる由(土管)。慶長金銀此年吹替其後も追々吹替(本・度譜)。天草代官五家莊巡視(玄察)。人吉藩士高橋七郎兵衛政重、幸野溝掘に着手、宝永2年完成(幸野溝8)。「肥」は「新田天神縁起」により元禄10年説をとる。日田の者訴訟等に付領内へ来た時の心得(大覚)。著書目録 西岡歴遊志、地誌、江村惺純。

元禄10 (1697) 丁丑(綱吉) 綱利

1. 11 少将任官口宣受領の使者として大木弥一右衛門京都へ発、2月4日京都着18日江戸着(本)。
- 閏2 14 儒家並に能書家北島雪山長崎にて歿す、年62(先哲)。
3. 25 幕府諸国に地図改訂を命ずるに依り本藩是日を以て正保年中差出しの絵図写を参考とし、調整を命ず。此図面は狩野良信執筆し、元禄14年8月12日幕府に提出す(家譜続)。26 大水、大風(玄察)。猿樂お遊びあり、家門の方々並に綱利、細川和泉有孝他拝覧(実紀)。
4. 26 幕府旧金銀貨幣を悉く新貨幣と交換を命ず(実紀)。
5. 19 綱利江戸発、6月25日(イ27)熊本着(家譜続)。即日使者松野主殿(本)。諸国絵図改(本)。29 是日より6月1日迄大水(玄察)。
6. 14 幕府新田支藩主采女正利昌の願に依り其弟主税利武に5000石内分を許す。8月13日利武登城、之を謝す(実紀)。是月、中小姓頭御殿詰始まる(本)。是月より7月初まで降雨なし。7、8両月に至り田にさねもりという虫大いにわき、損毛大なり(玄察)。阿蘇小国久住、野津原、鶴崎役男高之事(合)。
7. 25 長岡半左衛門忠春隠居し、息内膳忠重(後に忠季)相続す(肥)。従来御馬廻りと称したのを御番方と改め名称の厳行を令す(本)。家中若輩に遊泳練習を奨励す(本)。家老柏原新左衛門隠居、道慶と改む(本)。主税(細川利武)直ちに召出され新田之内分知仰付らる(触)。
8. 13 村上平内常々不行跡に付暇、親吉入わけ有且奉公も仕上たる者に付10人扶

持。上田宇小右衛門不行跡に付暇、親風寿に6人扶持(花奉)。是月 類族改様替りに付、定式帳出来、一統へ渡す(触)。侍中之嫡子病死又は病氣にて暇を申出の時の処置について(花奉)。中小姓頭1人宛花畑詰(花奉)。

9. 15 綱利長岡監物は庸宅へ行く(本)。19 筑紫権左衛門、清成助之進老衰に付、奉公断りの願書を月番受理、同21日隠居家督被仰付(花奉)。是月 領内諸郡田作大形虫入り、山本郡は強く痛み村により作柄皆無、又は6、7分程の痛(花奉)。綱利、長岡道固(元知)へ御小袖頭巾等与う。道固は寛文9年以来蟄居中の処、初めて使者あり。是、即ち勘気御免の意味なりと云う(米田家旧記には9月15日藩主監物宅へ行きし時と記し、「本」には単に9月、「家譜続」には12月19日とす)(肥)。

10. 9 奉行堀岡右衛門退任(本)。是月 酒屋に運上銀を課す(玄察)。

11. 12 球磨川開鑿の功労者林藤左衛門正盛歿す年74(先哲)。29 尾藤市左衛門奉行に任ず(本)。

是年 下々猥に飲酒するため5割程も高値になる。依て運上取立る様との事(大覚)。

著書目録 肥後全図 地誌 細川藩。

元禄11 (1698) 戊寅(綱吉) 綱利

1. 15 横井佐左衛門奉行に任ず(本)。18 伊津様(綱利娘)清水縫殿勝貞に嫁す(本、花奉)。
2. 5 儒医池辺棕川(名は楽水)歿す、年71(先哲)
3. 4 綱利熊本発小倉路通行、4月9日江戸着(花奉、家譜続・本)。
4. 14 護持院火の御番(度譜)。是月綱利始め参勤拝謁する者20人(実紀)。23 八重姫の資装を献ずる輩、細川和泉守有孝等は綸子10卷、綱利等は広蓋10宛(実紀)。是月 小国郡代屋敷畝高之事(合)。
6. 1 綱利松平加賀守と通款(本)。23 藤様(光尚妹)卒去、65才、松平刑部大輔忠弘室(本)。是月 高札場塩屋町高麗門両勢屯等掃除に付町中惣割賦(式稿7)。
- 8 一 天草郡魚貫崎に唐船漂着(本)。河江五右衛門跡之人柄、惣庄屋吟味に付常のように相達す(度譜)。御赦免開之内御擬作無之、無是之御中小姓名出し有之。尤譲渡并根帳直方等之事(覚)
9. 6 江戸大火(寛永寺勅額火事)昼頃竜口邸類焼に依り家中3分6朱の催合を止め、千石水夫米1倍増仰付られる(本、肥)。10. 被災の綱利へ將軍家より慰問の使あり(実紀)。是月 綱利、幕府より上屋敷増坪拝領(本・度譜)。竜ノ口類焼に付城内御用心米代銀之内、貫目郡方銀 200貫目御登。家中懸米被仰付、増水夫納被仰付(本)。
10. 25 水戸宰相綱條卿養女方姫、細川与市郎へ配偶の事仰下さる(実紀)。是月 関東諸川改修助役を命ぜられる(本)。諸役間筆紙墨記録究(度譜)。
11. 一 賄物所受払算用仕上げるようとの達(度譜)。家老江戸詰中6000石振舞を命ず(本)。上屋敷焼失に付、町在上銀の事(触)。山鹿湯小屋の定法の壁書渡さる(肥)。
- 12 8 天福寺住職雲歩行嚴歿す。年71(先哲)。27 竜口邸作事大体終了に付、藩主移転す。尤も藩主居間は翌年2月に至り出来(本・家譜続)。是月 従来奉公人の年季は10ヶ年迄を限ったが今後は相對次第と改めらる(玄察)。

元禄13 (1700)

是年 奉行矢野又右衛門退任カ(本)。 増永夫初めて被召上。同13年被召上、同15年より年々上納被仰付との由(土管)。 奉行矢野又右衛門元禄13年10月病死、但本文の趣は郡代支配矢野甚五兵衛先祖付にあり(本)。

元禄12 (1699) 己卯(綱吉) 綱利

2. 一 諸郡一領一疋、地侍所持の開地田畑、3町以上差上米仕る筈の事、并に塩浜、葎瀉、七嶋開等之事(覚)。
3. 一 跡目幼少之面々は15才にて始めて家督之事(合)
4. 15 綱利始め就封の暇を賜わる者22人(実紀)。 20 吉様(綱利娘)細川采女正利昌室卒去 27才(本)。
5. 16 五家庄火事(諸帳5)。 是月 領分の銅井に古地金を長崎へ差越し商売する者を沙汰する事(触)。
6. 9 洪水(「玄察」に此年当国北目大洪水、大津町かしらの土手山水にて切れ町々損ずる。南目は小洪水。右の大水熊本古町にて3尺水揚がるとあり。本文に該当するか)(本、度譜、肥)。 尾張中納言逝去に付祇園の神事6月晦日に延す(度譜・実紀・本)。 是月 肥前諫早の山潮で損害あり、高瀬、川尻、高橋海岸へ家具船具等流れ来る(玄察)。
7. 17 秀林院(忠利妻ガラシャ)百回忌(本)。
8. 25 綱利江戸発、中国路通行 閏9月7日熊本着。江戸への使者溝口藏人4月発駕之处清高院(綱利の母)所労に付延引(本)。 26 林又七(金工)没、年87(肥人)。
9. 一 当6月13日洪水に付蔵納給知田畑当荒永荒畝数覚書の事(覚)。
10. 7 側衆宮村団之進 500石加増、外に弓削新助に 500石加増、松野亀右衛門木村新五に 300石宛加増(花奉)。 是月 大豆割賦之内、青地大豆、上小豆の玉名郡への割賦の内27~8石程を郡代心得違をして蔵入が不足。その分は参談の上来夏割賦に加算する(覚)。
11. 一 従来知行取死去の時、従類付を嫡子より提出していたが向後組頭より提出と改む(花奉)。
12. 3 小姓頭平野九郎右衛門に 250石加増、都合1250石(花奉)。 是月 御国中田畑惣畝数雑穀積之事(合)。 高森手永新高札幌之事(合)。

是年 奉行中山左次兵衛退任カ(本)。

元禄13 (1700) 庚辰(綱吉) 綱利

2. 18 奉行堀部甚之丞鉄炮頭に転じ津田半兵衛奉行に任ず(本)。 28 綱利熊本発、4月3日江戸着、4日上使、9日登城(本)。
4. 9 綱利始め参勤拝謁する者12人(実紀)。 14 護持院火之御番(本・度譜)。
5. 15 甲佐川30年来の洪水(玄察)。 27 堀内善左衛門奉行に任ず(本)。
6. 13 宇土支藩主細川和泉守有孝初めて就封の暇あり(実紀)。
7. 21 綱利息与一郎孕す、年14。奏者番三宅備前守使して弔問す(肥)。(「実紀」は23日に附す)。
8. 13 肥前諫早、山津波1700名死亡当国海辺に死人、牛馬流寄る(気)。
9. 25 將軍綱吉水戸宰相の小石川屋敷へ行く。綱利は御先詰(本・実紀)。 是月 代官口米覚書の事(合)。
10. 一 寺社領高之事(合)。

11. 2 家老有吉四郎左衛門貞親病死、年50、12月15日（イ11月15日）嫡子万助立貞相続、家老に列す。万助後に大膳と改む（本・家譜続）。
12. 4 細川采女正本所猿江村へ屋敷替（本）。 23 八代城内出火（松井家記録には18日出火、19日鎮火と「家譜続」に記す）（本・肥）。

著書目録 川中島戦評、諸家、伊藤祐敬。

元禄14 (1701) 辛巳（綱吉）綱利

1. 7 柏原要人定道家老に列す（本・先祖附）。
3. 23 長岡左門興知病死す。年54（家譜続・本）。
4. 1 細川和泉守有孝等参勤す（実紀）。 12 綱利帰国の暇を賜わったが清高院の老衰に付夏中滞府願（本）。 是月 二ノ丸6ヶ所御門番人を今度1ヶ所に6人宛とし、1ヶ所2昼夜共に2人宛詰める様（奉日）。
5. 12 宇土支藩主細川和泉守有孝江戸城奥詰を許さる（元禄6年の条参照）（実紀）。 是月 大木殿脇御香所取繕、初て番人相詰（本）。
7. 16 盆後の町踊は27、28日に行くこと（奉日）。
8. 25 綱利江戸発、中国路通行、10月4日熊本着、江戸への使者楯岡七左衛門（本）。
9. 10 綱利先月25日江戸発、同日金川の駅へ止宿（奉日）。
10. 4 綱利今日巳ノ中刻熊本着（奉日）。 25 家老中の御用日、奉行所寄合日決定（各月5日）（奉日）。
11. 一 奉行藤懸忠右衛門番頭となり、平井貞之丞（初め喜右衛門）奉行に任ず（本）。 是月 野津原大井手出来（肥）。
12. 一 今迄諸役所の使番は足輕を使番、長柄の者を小使と呼んだが今後、足輕を小使、長柄之者は下使と呼ぶ（奉日）。
- 是年 小国宮原町へ南郷高見原新町の見合を以1ヶ月に3度宛の市日御免の事（大覚）。 影踏日限之事（大覚）。 阿蘇衆徒行者開地年貢御免之事（大覚）。

元禄15 (1702) 壬午（綱吉）綱利

1. 18 綱利監物宅へ行く（本）。 26 申刻より大風（気）。 是月 松井新太郎祐之は筑後直之の二男。元禄13年新知2000石拝領、2000石加増、家老になり奎と改む。後に猶求馬と改（本）。 洪水小川町中3～4尺出水（気）。
2. 25 綱利熊本発、4月3日江戸着、上使阿部豊後守（本）。
5. 一 国中寺社本末改の事、且つ前々より御免地等之事を書出せとの旨（触）。 立田八幡堂脇畑を御側足輕鉄砲稽古場とす（奉覚）。
6. 10 小川町洪水（気）。 是月 御蔵納新地方有高一紙の事（合）。
7. 18 幕府醸酒の米穀を限定し兼ねて物価の騰貴を戒む（実紀）。 是月 益城郡河原村に疫病流行（肥）。 井芹村御普請方石場渡之事（合）。
8. 23 河尻大慈寺が国中の曹洞禅寺の僧録に成る（天明村誌 282）（川尻史 418 には閏8. 23とす）。
9. 7 伊津様（綱利娘）清水縫殿妻卒去（本）。 15 綱利二男千次郎、将軍に初見、後に内記と稱す（実紀）。 是月 私領の金銀銅山は領主の所務と定む（肥）。
11. 一 瀬戸五兵衛、鎌田奎之助、奥村次郎左衛門、寛文9年閏10月朔日より郡方も奉行と一所に成り3人共奉行所へ詰める事（合）。
12. 5 将軍が綱利等を集めて猿楽を催す（実紀）。 14 浅野内匠頭家来46人報警。

元禄16(1703)

本藩は大石良雄以下17人御預(本・肥)(実紀には15日付とある)。19 改訂全国絵図成る。幕府は日関係者に賞賜す(実紀)。是月 古き御算用、30年以來を残置、其余は崩し反故にするよう定む(度譜)。

是年 國中水損洪水大變あり(「福岡県災異誌」に5月、6月及び8月に同方面大風雨洪水の記事あり、本藩の分もその何れかに関係あるか)(肥・本)。御簡略始まり、國中酒屋に運上銀を課す(本)。公用で長崎へ出兵の際の居所として稻佐悟真寺を充てる(肥)。寛永10年8月、300～350石の侍8人を町奉行とし、是年在町奉行13人をおく(浜町、隈庄、小川、宮原、日奈久、佐敷、水俣陣、味取新、大島、長洲、南関、隈府、馬見原の13町)(城南377)。御国許度々の洪水損毛に付て諸事御簡略願済に付、万事心を用い筆紙墨に至迄費なき様との事(大覚)。代官口米差上米之事(大覚)。領内寺社本末関係を調査し本末帳を作る(寺例)。玉名郡と柳川領との境目出入あり。文化3～4年にも同様の史料あり(細分正168)。

元禄16(1703)癸未(綱吉)綱利

1. 24 人吉城主相良遠江守頼喬卒す、年63、養子志摩守頼福、4月10日相続す(実紀)。
2. 4 大石良雄等17人白金邸にて切腹。遺体は望通り泉岳寺内内匠頭石碑の傍に埋む(実紀・本)。
3. 13 水戸幸相養女を綱利次子内記に配偶の事定まり、6月9日結納おくらる(実紀)(本は「内記様御逝去後松平播磨屋守様へ御嫁」と記す)。
- 夏 郷帳を亂させられ村名の分りに上中下東西南北を除き郷村枝村之定め仰付られる由(土管)。
8. 一 小天下下孕石垣普請に付櫓2ヶ所取除(奉覚)。國中銀札遣になる(郷歴)。
9. 6 宇土支藩主和泉守有孝病に依り隠居、宗貫(後に紹貫)と稱す。家督は熊次郎興生相続す(実紀・家譜続)(「実紀」は更に有孝の経歴を誌す)(宇土史102)。19 細川熊次郎愛宕下簀小路之屋敷御用に付、差上、此屋敷は忠興以來今年迄持伝えたるもの(本)。28 綱利江戸発、11月5日熊本着、江戸への使者氏家五助(本)。細川和泉守有孝致仕の得物として和州則長の刀を献ず(実紀)。
10. 15 去月27、28日江戸より差立てられた飛脚により綱利先月28日未ノ刻江戸へ発駕、河崎へ宿泊の段申来(奉日)。是月 立田口より水道仰付られたに付て違の事(合)。長崎の町人天草郡崎津へ参り帰帆の唐船に出買仕り、露顯して奉行所へ達せらる(奉日)。
11. 1 長岡左近元知入道道固病死す、年63、見性寺に葬る(本・家譜・奉日)。綱利9月28日江戸発駕、11月5日熊本着(奉日)。玉名郡長洲村亥刻より寅刻まで火事、町家殆んど全滅(肥)。18 江戸出火鶴姫主殿焼失(本)。22 細川内記登城將軍に謁し、従四位下侍従叙任兵部大輔吉利と稱す(家譜続・家譜・実紀)。水戸大地震相州小田原方同時強。民家破倒、箱嶺崩道路塞。同時所々出火死人多(本)。27 口宣拝受お使三野政右衛門(本)。是月 先頃の大風で寺社が破損した様に伝えらる(奉日)。
12. 6 吉田善右衛門着座(本)。是月 兵部大輔元服。吉の字を拝領侍従拝任。細川兵部大輔吉利(宣紀の兄)と稱す(花奉)。郡奉行を向後奉行所触とし座

配は組付の上とす（花奉）。武芸文学に精を出す面々書出様と達の事（奉覚）。

是年 他国商人の本藩内振売停止（肥）。是年より本藩年表に家老大木舎人兼近の名なし、然るに宝永6～7年には家老大木舎人とあるをみれば、是年以後も家老と思われる（宝永7年参照）（肥）。大坂上米、前々3～4万石程の処、此年8万石差上られ、一式お差支なき様。家原次兵衛、辻次郎右衛門、両替善五郎、吉田忠兵衛50人扶持下さる。善五郎手代吉文字屋市郎兵衛へも20人扶持下さる（度譜）。義士切腹に付てお触之事（大覚）。日向高知尾境松枝伐の出入一件（細分正）167）。**著書目録** 犬追物高覧記、諸家、伊東祐敬（改定）。

宝永1（3. 13改元）（1704）甲申（綱吉）綱利

1. 28 去々年以來在中の損毛により侍たちの勝手迷惑のこと藩主の耳に入る（花奉）。**是月** 江戸奉公人欠落への対策を命令（花奉）。
2. 25 長岡伊豆忠春卒去、年83（本）。25 綱利熊本発駕。4月2日江戸着。3日上使。11日登城（部の国郡・花奉）。**是月** 御側足軽 112名を8名増員して60人宛2交替とする（花奉）。諸町御番を町奉行と改稱（肥）。伏見御茶屋御番方を築山列から御家人に変えられる。（本）。
3. 一 下立田村の内、大中座元へ田畑を下される（合）。是頃天守閣北側の石垣を大修補（肥）。
4. 11 細川綱利をはじめ参勤拝謁するもの26人（実紀）。14 綱利らより將軍へ菓子献上（実紀）。28 綱利はじめ、蔬菜献上するもの10人（実紀）。
5. 8 綱吉東叡山に参詣、綱利ら勅額門内で拝謁（実紀）。23 洪水の季節になり、長六渡船修復を命令（春日）。
6. 1 金銀札の使用始まる（本・家譜続）。27 吉利、前髪・月代を剃り留袖を着る（本）。
8. 4 江戸及近国洪水（本）。
9. 7 増上寺火の番を仰せ付けられる（本）。22 藩主白金邸へ、世子竜口邸へ交替し移る（肥）。
10. 4 長岡監物は庫5000石加増されて（加増は10・25日付）世子附を主務とする旨藩主の命令（本）。
12. 5 甲府中納言綱豊、將軍家の養子となり、家宣と改む（本）。25 致仕長岡伊豆忠春死去（「本」には2月25日とす）（本）。**是月** 来正月より城内、花畑など飾江戸並となる筈（奉日・奉覚）。

是年 大阪での無苗の者抱方など宝永年中より大坂で取計い、後熊本へ達ときまる（本・史綜・度譜）。京都留守居、宝永年中片山繁之允御近習より仰せ付けられ、追々御用人、御家老脇となる（史綜・度譜）。大坂留守居は又使番 500石の振廻、元禄宝永にかけ追々仰せ付けられる（史綜・度譜）。大坂定詰切米取他所より養子等は熊本へ達しの上申渡（史綜・度譜）。大坂より江戸へ小廻荷物送手形、留守居勘定頭印形によって差廻すため、4～5年おきに印鑑達す（史綜・度譜）。佐賀関浦番、宝永年中定役仰付られる（史綜・度譜）。郡奉行、御奉行所触になる（大覚）。町奉行始まり（大覚）。内牧町に先規の通り月に3度宛市日御免（大覚）。竹迫町へ当秋来春秋、御免の月10日宛の続市御免（大覚）。他所才覚銀返済の書附勘定所へ達（大覚）。初めて銀札通用となる（旧章）。**著書目録** 禮格致 諸家 永広河水。

宝永3 (1706)

宝永2 (1705) 乙酉 (綱吉) 綱利

2. 19 養女初様松平采女正へ縁組の願済 (本)。 是月 妙解寺領より諸出米銀その外人馬等書付 (覚)。
3. 2 將軍綱吉大臣に、家宣大納言に転任 (本)。 11 長岡監物熊本発、4月1日江戸着 (本)。 16 人吉藩士高橋七郎兵衛、幸野溝の工を起し、同年12月竣工 (先哲)。 是月 吉利庖瘡 (本)。 監物江戸足米之事 (覚)。
- 閏4. 1 夜増上寺出火、受持に付綱利出馬 (本)。 2 丑ノ刻より卯ノ中刻迄地震 (奉日)。
6. 1 兵部大輔吉利江戸城登城 (本)。 25 綱利はじめ、菓子献上のもの28人 (実紀)。
7. 12 綱利はじめ、もの奉るもの18人 (実紀)。 25 繁根木村川端筋の簡湯に入湯者日に 100人程 (奉日)。 是月 一領一疋、牢人の子を侍の養子とする件由緒あるものは許される (奉覚)。 御加増割方に荒地が加わってれば給人が迷惑という内達があったから、荒高分全高振替の上渡し下す (覚)。
8. 6 火之御番御免 (本)。 9 幕府諸藩に命じて封内紙幣発行の時期・金額・年限を報告させる (実紀)。 13 嘉悦市太夫、熊谷早之丞奉行となる (本)。 是月 公私共在町での明松使用を禁ず (肥・部の国郡4)。
9. 11 徳王村塩硝蔵出来、千場城塩硝拵所より塩硝を移す (本。奉覚。奉日)。
10. — 元奉行石寺九兵衛病死 (先祖付)。
11. — 呉服共衣服商売は小袖の表絹代40目以下、但し綸子、紗綾、縮緬、羽二重の表は厳禁。帷子代25目以下。帯代20目以下であれば、綸子、紗綾、縮緬縹子、純子でもよい (触)。
12. — 主税守頼方、従三位中將に任じ吉宗と称する (本)。 熊本木枕町金右衛門、同船場三丁目白銀屋吉左衛門梓吉十郎にせ札づくりで磔刑 (城南 352)。
- 是年 南関肥猪町へ月6度宛市日御免 (大覚)。 鶴崎町へ月6度宛市日御免 (大覚)。 阿蘇大地震 (肥)。

宝永3 (1706) 丙戌 (綱吉) 綱利

1. — 大坂御登米之儀について沙汰筋のこと (合)。
2. 6 松平美濃守方にての將軍お成りに綱利出席。9月3日、12月11日にも同様のこと (本)。 是月 火事の際受持の役所へ出頭のこと (度譜)。 佐久間角助鶴崎郡奉行当分となる (奉日)。
3. — 薩摩領の漁師・馬喰など領内に入るものの取扱いについて六ヶ所浦番・十ヶ所所在町奉行へ達 (奉日)。 熊本御米河尻へ附越につき、駄馬を日数8日間1日 200疋宛差出すよう、1疋に1斗の駄賃とす (覚)。
4. 25 兵部大輔吉利卒、年18 (本・家譜続)。 (「実紀」には23日とある)。 是月 大地震、大地破れ家屋の倒壊、圧死するもの多 (肥)。 佐分利十右衛門御目付にて江戸秋代を仰付られる。 (本、度譜)。
6. 19 長岡監物江戸発、7月18日熊本着 (本・家譜続)。 27 綱利はじめ魚物献上するもの43人 (実紀)。 是月 元字銀吹替 (本)。 肥後洪水 (肥)。
7. 19 岡本吉左衛門・熊谷早之丞奉行となる (本)。 是月 八代宮之町吉兵衛八代郡の蘭表七嶋表問屋を命ぜられる (触)。
8. — 妙解寺知行物成を願に依って川尻御蔵に納め、その米高を熊本御蔵より渡

される(度譜)。油屋吉左衛門へ国中の綿座の間屋仰付られる。宝永4年7月29日この綿座廃止と決定(奉日)。

9. 7 奉行平井貞之允大坂定詰となり、同堀内喜左衛門是月退任(部の国郡4)。
15 江戸大地震(本)。是月 他国の綿油屋吉左衛門、鯨油大和屋十兵衛へ座本を仰付られる(触)。
11. 30 初様松平采女正と御婚礼(本)。
12. 11 將軍松平美濃守へ御成、綱利先詰を勤める(本)。

著書目録 南関紀文 地誌 井沢蟠龍

宝永4 (1707) 丁亥(綱吉) 綱利

1. 5 元家老柏原定治入道道慶死去、年84(本)。
2. 6 清水数馬勝正死去(部の城。家譜続。本)。
3. 5 府内山崎住江専右衛門長屋より出火、侍屋敷78軒、古町町家1036軒、本山村百姓20軒、寺18寺焼失(肥後国年歴は宝永2年とし、「奉日」には3月6日とする)(本・肥)。
4. 14 増上寺火の御番(本。度譜)。
5. 一 奉行所物書病人多く御用穿鑿口書差支へのため勘定所物書伊藤太右衛門を加勢させる(度譜)。
6. 一 尾藤市左衛門奉行を免ぜられ、翌7日佐々牛右衛門奉行に就任(本)。上益城郡矢部地方村々に去年以来熱病流行し、郡医師赤星玄周1人の手に余るため池部如堅を加勢につかわす(奉日)。
7. 18 西にて若君七夜の御祝。綱利、来国光の刀を呈す(実紀)。是月 衣服直段上方元値値上りに付、衣服商売は小袖の表絹代60目、帷子30目迄は御免となる(触)。帯刀殿閉門仰せ付られ、知行所作毛上取計の讃談あり(合)。
8. 一 夫米之事(合)。
9. 一 木村半平豊持御家老脇となる(部、城・先哲)。西竹ノ丸の塩硝を徳王御蔵へ移す(奉覚)。
10. 4 東海道大地震(本・合・覚)。4 肥後地震、とくに人吉において被害多し(蔓綿・肥)。13 幕府諸国の軍資予備の旧金銀貨を新鑄貨幣と交換させる(実紀)。29 札遣について町方に騒動があり、質屋へ大勢質物請取に集まる(奉日)。是月 幕府より紙幣使用停止を命ぜられ、本藩でも引替。現銀不足に付、札百貫目を銀25貫で交換するも猶不足。残は證文で遣わされる(本)。
11. 4 町方の者諸色買込み、殊の外騒がし(奉日)。22 この日から25日にかけて富士山麓山焼け近国大地震。宝永山生ず。28日に平静にもどる(本)。
12. 10 錢遣、老奴に80文を今度70文と改める由通知(奉日)。是月 藩主の実子死去のため、親族主税利武を養子とし是月龍口邸に入る(細川家先祖之記には龍口入邸を明年正月23日とし、主税の称もその頃とする)(部の城・本・肥)。

宝永4.5年ころ 10文錢通用(本・度譜)。

是年 家千代薨逝のため穩便とのことなれば地震による潮塘破損の修理につき伺い(大覚)。札遣について在中混乱発生(大覚)。水足庄三郎組附中小姓より根取に仰付られる(度譜)。去酉年肥後藩より調米の救夫食を皆済、元利扱高718石4斗2升2合(気)。著書目録 桧垣家集 歌文 井沢蟠龍。

宝永5 (1708) 戊子(綱吉) 綱利

宝永6 (1709)

1. 19 幕府主税利武の養子を許可する(実紀・寛政)。 28 主税登城し將軍に謁見する(実紀・肥)。 是月 在蔵にある米を河尻御蔵へ納めるよう達(覚)。
- 閏1. 1 松平采女守室女子出産。綱利、外孫にあたる人を養女とする(本)。 3 主税利武の采邑5000石を綱利に返す(実紀)。 7 幕府昨年11月富士山噴火につき諸国に上納金を課する。本藩は 10800両 (100石に金2両の割) (本・実紀)。 9 新田支藩主采女正利昌河川助役を命ぜられる(実紀)。 是月 各郡の竹木剪値が改訂される(林制24)。
3. 8 是日皇居、仙洞炎上、5月14日幕府は内裏造営助役を諸藩に命じ、本藩は築地修覆費として銀20貫目余を課せられる(実紀・本)。 10 坪井竹屋町より出火、1200余軒類焼、死人怪我が多く出たため、草葉町、広町が出来る。尚此節小磧より水をととり水道丁、声取坂に打出す。宣紀時代にこの水道止めとなる(「肥国誌」に、佐々牛右衛門、米良勘助等之に当り、のち之を新屋敷水道端を経て世継神社附近より高田原、山崎町を経て御花畑へと改む) (本・官制・肥)。 是月 長岡内膳忠季隠居し、愚隠と改め、其子忠雄(後に忠亮、忠英)相続す(肥)。
4. 14 細川主税利武は初めて就封の暇賜わる(実紀)。
5. 一 吉田善右衛門奉行を辞し、隠居(本)。
6. 19 世子主税利武江戸発。7月27日熊本着(本)。 22 京および畿内大風(本)。 是月 利武初めて入部の祝として町在祝の銀差上(度譜)。
7. 27 儒臣佐藤半七直方(号竹塲)歿す(先哲)。 29 増上寺火之番御免(本)。 29 世子城内巡覧(家譜続)。 是月 蔵納給知新地方一紙高覚書(合)。
8. 2 主税、妙解寺・泰勝寺参拝(家譜続)。 4 阿蘇山の池水赤変、又8月より南池水赤変、12月に至り涸渴(部の城・肥国誌下一 530)。 6 主税藤崎宮杜参(家譜続)。
9. 6 松姫様資装として、細川熊次郎興生等は火櫓蒲団3ヶ宛(実紀)。 是月 御勝手差支に付御家中唯今迄の出来之外に当1ヶ年上銀被仰付、御赦免開等上銀諸役間受込銀半減諸獵札5割増(触)。
10. 5 將軍松平美濃守宅へ行く。綱利先詰(本)。 16 代官丁に將軍隠居屋敷新築助役を命ぜらる(実紀・本・部の城)。
11. 27 代官丁譜請に付監物は庸求馬祐之江戸へ登(本)。 是月 鮑田郡岩戸雲巖寺に十六羅漢建つ(雲巖寺内碑文)。 川尻の町人木村安右衛門上ゲ銀 800貫で下益城郡中知行 700石宛行われる(城南 350)。
12. 29 晦日、大坂出火(本)。 是月 江戸御供衆当面覚書(覚)。
- 是年 吉住半四郎御奉行御免隠居(本)。

宝永6 (1709) 己丑(綱吉・家宣) 綱利

1. 4 阿蘇山噴火。池傍に新池出来(部舟・肥国誌下一 530)。 10 綱吉薨ず。家宣嗣(奉日)。 15 (イ13) 藩主登城の処、上野寛永寺に綱吉廟造営手伝を命ぜらる。2月3日御普請場受取3月10日歟初を行う(実紀には18日命ぜられるとあり)。惣御入目15万両(本)。 28 主税熊本発、3月3日江戸着(奉日・本)。
2. 9 故將軍綱吉の室死去(本)。 23 木村安右衛門普請手伝の御用金献金につき知行 700石拝領(奉日・奉覚)。 是月 浄光院逝去に付漁獵とも7日差止め

られる (奉日)。

3. 18 細川玄藩興業諸大夫命ぜられ長門守と称する (実紀)。是月 御奉行所寄合日、御家老中寄合日変更される (奉日)。改名は以後難叶 (奉覚)。
 4. 3 將軍代替之為、祝儀登城太刀馬代等々献上 (本・実紀)。9 長崎へ番船派遣、天草在番、鶴崎へ家士出張のこと先代の如く取扱うべき旨達 (家譜続)。18 主税登城、従四位下待従に叙任し、主税頭宣紀と称す (実紀)。
 5. 1 家宣、將軍宣下盛礼あり。綱利、宣紀登城束帶 (本)。致仕、長岡忠恒友山歿す、年89 (家譜続)。12 家宣の將軍宣下賀の第2日目に大広間にて松下若狭守吉徳らと共に拝す。宣紀病によって登らず (実紀)。
 6. 2 朝より大風、昼頃まで (氣)。16 將軍御台所従三位に叙す。品々献物 (本)。21 東山天皇讓位、中御門天皇受禪 (肥)。是月 宝字銀通用 (本)。町人往来手形なしに伊勢参宮を禁ず (式稿87)。
 7. 10 常憲院御仏殿へ銅炉竈兩基御進上 (本)。是月 初めて御蔵番人を置く (本)。
 8. 20 忠利百回忌を泰勝寺にて行なう (家譜続)。
 9. 一 御領内之紙不残紙座にて受込 (触)。
 10. 24 天守の白菊の伽羅江戸へ差登す (奉日)。27 九州地方巡見使に使番小田切鞠負直広、小姓組土屋数馬喬直、書院番永井監物白弘の3名が命ぜらる (実紀)。是月 禁裏造営完成。遷幸祝の御使者横山藤左衛門。太刀馬代献上 (本)。主上庖瘡平愈に付使者京都御留守弓削太郎右衛門を遣す (「肥」は11月12日とする) (本)。
 11. 19 東叡山新廟上棟式に綱利参列 (実紀)。25 日光准后弁法親王并に三家の方々、其簾中へも御使して八代密柑を送る (実紀)。28 常憲院 (綱吉) 廟完成す。本藩出費15万両という。12月15日藩主に、同25日長岡監物・松井求馬・木村半平等13人に賞賜あり (部の舟・本)。
 12. 5 綱吉廟の法会に綱利はじめ菓蔬を献ずるもの27人 (実紀)。15 綱吉廟造営の功勞により綱吉左安吉の刀を賜わる (実紀・家譜続)。25 新廟造営の助役せし綱利、松平右京大夫輝貞の家士に時服・羽織・銀を給う (本)。
- 是年 宝永5年10月江戸代官丁譜請手伝仰せ付られのち綱吉薨去。上野仏殿手伝、此時川尻木村安右衛門銀 400貫差上、御知行 700石下さる (「城南 350」には宝永5年11月とする)。(度譜)。宣紀部屋住にて往来は勘定頭召連れず、奉行より兼帯 (度譜)。寺社本末御改 (郷歴・寺例) 上野仏殿手伝。入用費15万両 (旧章)。著書目録 後地誌略・地誌・井沢蟠龍。

宝永 7 (1710) 庚寅 (家宣) 綱利

1. 2 掃初式あり。綱利、松平若狭守吉徳らと大広間で將軍に拝謁。太刀目録を献じ、時服賜う (実紀)。16 長岡監物江戸発、2月23日熊本着 (本)。
2. 12 綱利、清高院御看病のため滞府 (本)。
3. 29 綱利の母清高院歿す (実紀・肥)。
4. 1 幕府奏者番青山播磨守をして弔問せしむ (実紀・肥)。10 幕府明年の朝鮮信使来朝につき豊後国高田鍛治の大刀二腰献上を命ず。8月忠行・行恒の作二腰を献ず。世にきこえたる大太刀という (家譜続)。13 幕府金銀改鑄し、乾字金を発行し、二朱判金の通用停止 (本)。

正徳元 (1711)

5. 14 四国・豊後巡見使使番宮崎七郎左衛門成久、小姓組寛新太郎正尹、書院番堀八郎右衛門直方、是日臼杵より鶴崎に来る(実紀・家譜続)。17 使番佐賀関より乗船、伊予に向う。家老柏原要人等応接のため出張する(家譜続)。28 細川主税頭宣紀就封のいとま賜う(実紀)。
6. 1 長岡帯刀寿之将軍代替祝儀のため江戸城へ登(本)。
7. 6 世子宣紀江戸発、翌月6日熊本着(本)。伊勢長島城修築に付、宇土支藩主細川熊次郎興生助役を命ぜらる(実紀・宇土史 103)。19 幕府、長岡帯刀に先祖以来領知せしめた山城国2郡のうち愛宕郡八瀬を収め、9月22日替地を和泉国の中に与う(家譜続・肥)。22 北の大風吹く(気)。是月 在中より家来抱の儀について触(大覚)。御巡見通行(本)。京都町人平塚藤左衛門伏見屋寿松お国に於て繰綿実綿の座元仰付らる(触)。酒下直に致すよう。また質屋の利、前々の通1割とする(触)。
8. 1 西国巡見使使番小田切鞠負直広、小姓組土屋数馬喬直、書院番長井監物白弘入国す。是日熊本通行川尻泊り。5日佐敷よりり人吉藩に入り、8日佐敷に出て、夫より一旦薩摩に入り、更に球磨より入国。閏8月12日大津宿泊。宣紀、大津にて対面す。其後南関より筑後に出づ(実紀・家譜続・蔓綿)。15 宣紀藤崎宮神幸式を観る(本・家譜続)。
- 閏8 蔵納・給知・新地方惣高并諸引書付の事(合)。長岡監物に御巡見御用を命ぜらる(本)。
9. 21 宣紀初めて新開大神宮社参、直に川尻御茶屋に入り暮刻帰城(家譜続)。
10. 8 東叡山綱吉法会結願に細川采女正利昌はじめ15人菓蔬を献ず(実紀)。是月 琉球人来朝に付、大坂より伏見迄の川船一艘差出(本)。(「肥」は11月とす)。
11. 30 尾水両卿、かつ准后公弁法親王、大僧正門秀に御使あり。八代密柑を贈らせ給う(実紀)。
12. 14 禁猟区、家中拝領の鷹場での猟、鉄砲猟禁止(林制42)。是月 家老大木舎人隠居す(「先祖付」には正徳2年とする)。(本)。著書目録 菊地佐々軍記 史伝 井沢蟠龍。

正徳1 (4.25改元) (1711) 辛卯 (家宣) 綱利

2. 4 世子宣紀熊本発、3月7日江戸着(本)。8 中御門天皇御即位を賀して家老脇木村半平使して京都御所、仙洞御所に献上品あり(本)。
3. 一 座元の綿以外自余の綿一切取越すこと禁ぜらる(触)。
4. 1 長島城修築助役により、熊次郎興生に時服を賜わり、4日家人に羽織・時服、銀を下さる(実紀)。13 幕府綱利に就封の暇を賜う(事實は帰国せず)(実紀)。26 作毛、竹藪を荒す猪鹿などの銃猟許可(林制43)。
5. 一 朝鮮人へ下さる御太刀打上げたる高田鍛治忠行・行恒へ公儀より御銀下される(奉日)。
6. 一 銅所持の者、銅座構いなく長崎へ参り商売許可(触)。
7. 一 質屋の利子1割5歩仰付られる(触・郡方・肥)。
8. 15 是日7つ時、神事すみ、ご神体社内に入ると同時に藤崎宮鳥居前の大楠焼ける(肥・肥国誌上一61)。是月 諸郡往還筋の一里杭の熊本の熊の字、去夏隈字に改めたものを以前の字に直すべく沙汰あり。熊の字に段々改済む(奉日)。
9. 一 銭の直段1匁に60文、1貫文に16匁(合)。

11. 17 綱利女常姫（実は利重女）久我大納言家へ入興（肥）。 25 御台所はじめ後閣及び水紀両卿に八代密柑を送る（実紀）。
 12. 7 長岡監物は庸歿す。年48（本）。 13 柏原要人定道歿す。年60（本・先祖付）。

是年 奉行佐々半右衛門退任（本）。樹桑養蚕を奨励（本）。

正徳 2 (1712) 壬辰(家宣・家継) 綱利・宣紀

1. — 木村半平豊持家老に列す（本）。当春も下々奉公人在中より吟味の上高千石に1人宛出人仰せつけられる（奉日）。
 2. 6 米田源三郎是春、父監物の遺領相続し壱岐と改め家老に列す。ついで6月5日長岡の称を許さる（本・家譜続）。是月 銭双場1匁に52文と仰付けられる（合）。
 3. — 京都御造営費として銀 161貫9匁6分3厘4毛を課せられる。明年1月11日上納（本）。当春下々奉公人少く、今迄の外に千石に1人当奉公人増、20歳より50歳の間の者差出すよう沙汰（触）。蚕仕立について達（触）。
 4. 19 万石以上の輩に封地の判物を賜う（実紀）。 23 幕府、参勤諸候扈從の人員を制限（家譜続）。
 5. — 奉行嘉悦市大夫鉄砲頭に転ず（本）。本藩格別難波に付、家中4分1上げ米の外に1歩の上げ米を課す（本）。
 6. 19 家老長岡壱岐藩主の命により熊本発、7月25日江戸着。用終り9月2日江戸発、10月2日帰着（家譜続）。是月 所々に洪水、長六橋落つ（覚）。
 7. 6 綱利隠居を願出、同11日許可。主税宣紀相続。次で8月24日綱利の隠居料を3万石と定む（家譜続）。 11 熊本城主綱利致仕の請を許され、其子主税頭宣紀に原封54万石を継がせる（実紀）。 28 宣紀登城して襲封を謝し、備前友好の刀を献じ、綱利致仕を謝して来国次の差添などを献ず（実紀）。長岡壱岐・坂崎忠右衛門・木村半平・岩間主鈴・片山典膳共に謁す（覚・萬覚・肥）。 是月 神水、畠山、白糸、柳井谷、八景水谷、高野辺田の御茶屋を廃止。水前寺、岩下、的石の三ヶ所を残す（本・奉覚・大覚）。綱利隠居につき、隠居以前に仰せ出された印紙を9月限改め、宣紀印紙下書帳により、給扶持、役料に相違ないか否かを調べよ（神雑22）。
 8. 9 大風吹く、倒木倒家多し（覚・奉日）。 10 戌の刻より巳の刻まで大風（本）。是月 今度の大風について居宅修繕料渡し下さる。1万石以下3貫500目、70石以下50目迄。在宅は半額（触）。
 9. 1 宇土支藩主熊次郎興生初めて将軍に拝謁（実紀）。 5 今度家譜編纂を命ぜられし林字門江戸へ召寄らる（奉日・奉覚）。 21 人吉城主相良志摩守頼福致仕し、其子近江守長興相続。頼福は梁誠と改め享保5年3月7日卒、年73（実紀）。是月 所々代官仰付らる（合）。
 11. 7 主税頭宣紀ら諸大名に「御世つがれて慶賀の日に真の太刀献ずべし」と触れらる（実紀）。 15 新藩主宣紀、家老山名十左衛門が前藩主の勝手方として多年本藩財政に携わるをいたわり直書を送る（家譜）。是月 熊本蔚山町大和屋十兵衛御国鯨油座の処油樽焼印打替について達（触）。江戸荒仕子給米6石の内1石、御国荒仕子3石内5斗減ぜらる（覚）。
 12. 13 奥田小左衛門奉行に任ず（本）。 16 天英院殿、月光院殿はじめ後閣の方

正徳4 (1714)

々、日光准后並びに三家の人々に八代密柑おくらる (実紀)。18 御承統の賀により、細川主税頭宣紀、備前守の大刀を献ず (実紀)。是月 奉行横井佐左衛門鉄砲頭に転ず (本)。江戸奉公人の身柄、給銀について沙汰 (触)。

是年 坂崎忠左衛門成方・三宅藤兵衛重経、家老に、岩間主鈴・片山典膳、旅家老に列す (本・家譜続)。奉行熊谷早之允退任カ (本)。大風 (気)。

正徳3 (1713) 癸巳 (家継) 宣紀

1. 11 藩主新任正月の触を侍中歩小姓迄は花畑において仰渡され、歩小姓列以下奉行所にて仰渡さる (覚)。是月 小国野開請銀の内風損にて3ヶ1上納、久住も同 (覚)。
2. 一 凶作のため在中難渋、柿原村にて無高百姓に西山の山石販売を許す (肥)。蚕仕立について達あり (肥)。
3. 7 宇土支藩主熊次郎興生、従五位下に叙し伊豆守と称す (実紀)。是月 長崎御運上為替銀借用は向後止めらる (触)。
4. 11 主税頭宣紀、將軍宣下の拝賀あり (実紀)。16 宣紀、就封の暇を乞い景光の刀を賜る (実紀)。27 宣紀江戸発、5月28日熊本着。閏5月3日登城 (家譜続・本)。是月 御内検崩レの事 (合)。

閏5. 14 藩主妙解寺、泰勝寺参拝。18 藩主藤崎宮社参。29 本妙寺参拝 (以上家譜続)。

6. 3 先代より米銀拝借中の家士に返納を免ず (本・肥)。5 家中給知を廃し直所務を蔵米渡とす (肥・土管)。是月 奉行津田半兵衛20挺頭に転ず (本)。的場甚右衛門奉行に任ず (本)。
7. 13 大風吹く (本)。是月 八代の城や櫓等お繕につき竹御用仰付らる (覚)。佐分利十右衛門奉行に任ず (本)。
8. 28 儒臣林宇門長泰に命じ家譜を編せしむ (家譜続)。
9. 一 藩主文武芸心懸の諸臣を召し講述せしめ、武芸御覧あり (家譜続)。21 藩主祇園宮参拝。27 六所宮参拝 (以上家譜続)。

是年 本藩の財政困窮し、幕府より拝借金37万両余に上る (本)。家中手取米知行衆役付23石、無役20石、切米衆は10石に付8石5斗と定めらる (本)。奉行奥田小左衛門江戸詰となる (本)。佐々牛右衛門奉行復職カ。是年及び翌年にその名見ゆ (本)。田畑讓地質地證文案渡し下さる (土管)。著書目録 早川故事 記録渡辺玄察。

正徳4 (1714) 甲午 (家継) 宣紀

1. 3 長岡帯刀寿之隠居し、眺山 (後に冬山) と号し、其子右伝成之 (後に帯刀豊之) 相続す。長岡冬山は延享2.2.27病歿、年78 (家譜続・本)。
3. 4 宣紀熊本発、4月11日江戸着。奉行的場甚右衛門御供す (本)。是月 江戸詰奥田小左衛門帰着 (本)。
4. 一 先祖附調出す様との沙汰 (触)。
5. 21 老中井上河内守正岑宅に細川伊豆守外89の大名の家来を呼び、唐物私商横行につき嚴重取締方達しあり (宇土史 103)。是月 御側衆向後御用人と呼ぶこと (触)。阿蘇小国岳湯村中に明礬山を発見、採掘 (肥)。
6. 一 長崎よりの旅人往来手形期限切れに発病、手形書替のため仲間の者だけ一旦長崎に帰らせる (式稿14)。

9. 19 本藩経済不如意に付、5・6年簡略の旨願出(家譜続・本)。是月 領内紙座、大坂朝倉弥九郎紙座前々通売買、他所の者に堅く売間敷事(触)。
10. 一 矢部手永二つに分れ、中嶋手永出来る(郷歴・矢惣)。
11. 12 前藩主綱利白金邸にて俄かに発病、夜半卒去す、年72。諡妙応院雲岳宗庵(実紀・家譜)。15 綱利死去により香資銀 300枚を給ひ、その子主税頭宣紀を弔慰す(実紀)。18 細川主税頭宣紀の子三郎某卒す。奏者番牧野因幡守英成を使として弔慰す(実紀)。28 本藩喪中の密柑献上について阿部豊後守の指示により月番松平紀伊守へ20箱、翌1月13日15箱献上(家譜続)。
12. 23 日光准后および新宮、三家、増上寺大僧正、天英院、月光院へ密柑を贈らる(実紀)。

是年 山鹿、日奈久両湯に相渡壁書(大覚)。著書目録 両家習合武家古礼辨義 諸家 伊東祐敬。

正徳5 (1715) 乙朱 (家継) 宣紀

1. 18 吉田市右衛門奉行に任ず(本)。
2. 2 風雨強く塘破る(気)。5 在中質地、讓地について規定し取締る(「年系略記」には前年7月とす)(肥)。
3. 一 上益城郡沼山津手永上河原村の内に銅山発見、豊後公領より山師を招き採掘せしむ(肥)。
4. 2 熊本城石垣破損、5ヶ所修補方出願の処許可あり(本・家譜続)。22 宣紀江戸発、5月25日熊本着(本)。
5. 一 奉行的場甚右衛門江戸より下着(本)。遊行上人西福寺に止宿、6月29日八代に向う(肥)。
6. 3 新田支藩主采女正利昌卒す。年44。7月27日其子仁三郎利恭相続す(実紀・本)。是月 在宅の面々最早引取る様仰出さる(触)。
8. 6 家老三宅藤兵衛重経歿す(本)。13 備頭溝口藏人政世家老に列す(本)。
9. 6 新田支藩主仁三郎利恭登城初謁見す(実紀)。
10. 6 宣紀八代城に入り、滞在3日、9日帰府(家譜続)。27 石寺加兵衛奉行に任せらる(本)。
11. 1 家老坂崎忠左衛門成方隠居し栖隠と改む(本)。
12. 11 准后に八代密柑つかわさる。高家織田能登守信門使す(実紀)。

是年 奉行岡本喜左衛門江戸にて死亡(本)。去年以来上益城矢部地方に悪疫流行(本)。他郡并寺社方侍方、他支配町方等へ讓地叶い難きとの達(土管)。惣庄屋引高百石に仰付けられる(土管)。

享保1 (6. 22改元) (1716) 丙申 (家継・吉宗) 宣紀

2. 一 下々奉公人少なく在中より出入を仰付けられた侍屋敷に奉公し引込む者を召置間敷と達(触)。領内人馬賃1匁に60文渡し(触)。在々所々の堂宮に建添うる事禁ず(肥)。
- 閏2. 11 家老山名十左衛門隠居、聴水と改む(本)。28 宣紀熊本発、4月3日江戸着(家譜・本)。
4. 6 藩主肥満にて歩行不自由に付城内杖願許さる(家譜続・肥)。13 宣紀参勤登城、是日より越中守と改稱(改稱日を「本」4月9日、「年経略記」5月よりとす)(家譜続・肥)。30 將軍家継逝去、吉宗嗣ぐ(実紀)。是月 公領巡

享保3 (1718)

見使天草觀察の帰途本藩内を通る(天草島鏡によれば4月12日登立より八代へ渡海)(肥)。

6. 27 吉宗継統賀2日目細川宣紀青江正恒の大刀を献じ拝賀する(実紀)。
7. 21 諸国巡見使決定、九州は使番妻木平四郎頼隆・小姓組大島采女義敬、書院番小倉忠右衛門正矩(実紀)。 22 新田支藩主仁三郎利恭従五位下に叙し備後守と改む(実紀)。
8. 27 吉宗將軍宣下賀第3日、大広間で細川宣紀吉宗に拝謁(実紀)。
9. 30 午刻、千葉城長岡内膳家より出火、飛火にて竹の丸下、竹小屋焼失、下通から宝町筋、白川端まで焼失(家譜続)。
11. 23 天英院、月光院はじめ方々に八代密柑送る(実紀)。 25 方々に使して八代密柑送る(実紀)。

是年 無高百姓の商売吟味の上宿町のみ許可(大覚)。在中に農具、雑魚商人以外猥に入らぬ様(大覚)。百姓布木綿以外の着用禁止令不徹底のため再達(大覚)。

享保2 (1717) 丁酉 (吉宗) 宣紀

1. 7 江戸佐内町借屋敷類焼(覚)。 22 申刻、小石川馬場付近より出火、竜口上屋敷焼失により9月に至り家中手取米減少となる(実紀・本・覚・大覚)。
- 27 先の火災消防の褒賞があり細川伊豆守興生、一橋門の内をふさぎたる功により賞される(実紀)。 29 細川宣紀の邸先火災となり使番倉橋内匠久富をして訪せ給う(実紀)。
3. 一 奉行吉山市右衛門熊本発東上(本)。
4. 15 就封の暇下さる者28人、細川宣紀には志津の刀を賜わる(実紀)。 19 宣紀江戸発、5月22日熊本着、奥田小左衛門御供(本)。是月 御代替り西国・豊後巡見使使番津田外記正房、小姓組駒井求馬政周、同大久保源太左衛門忠恒鶴崎に来る(実紀)。
6. 28 増田真右衛門奉行に任ず(本)。是月 上益城矢部・中島手永疫病流行(肥)。切米取木村孫助俵大筒試打に付本藩見届人を出す(肥)。奉行平井貞之丞転役(本)。
7. 9 西国巡見使使番妻木平四郎頼隆、小姓組大島采女義敬、書院番小倉忠右衛門筑後三池境岩本口より入国。同11日熊本新二丁目昼休中、藩主同所にて対面当日宇土泊り、次で袋村より薩摩に入り日向を経て更に岩神口より入国、所々巡見、南関を経て柳河領に出ず(実紀・家譜続)。 13 江戸屋敷坪数を届出る。7369坪という(本)。 26 大木兼近入道夕岸死す。年68(本)。
9. 12 在封の輩に判物、朱印を給う(実紀)。
10. 18 將軍吉宗の本藩知行判物熊本に着く。家老有吉大膳立貞御礼の為熊本発出府、11月25日登城(本)。
11. 一 来春奉公人当春の通り1000石に3人の沙汰(触)。
12. 2 方々へ密柑をつかわされる(実紀)。是月 花畑附近六部の通行禁止(本)。長崎の廻船改を彼地の問屋平野屋兵次に命ず。荷物売高に応じたる3朱宛の口銭を改め津口出入荷物運上銀取立に代わる(触)。江戸城炎上、防火に当る(宇土史103)。 著書目録 細川全記 史伝 栗阪恕軒。

享保3 (1718) 戊戌 (吉宗) 宣紀

1. 一 諸事穩便中は自身番免除の時節でも自身番勤めること、但し医師は免除

(式稿30)。大坂町奉行に唐物抜荷の者召捕りを達す (宇土史 103)。

2. 27 宣紀、熊本発、4月1日江戸着。奉行石寺加兵衛御供 (肥)。
4. 27 宣紀第4子宗孝生る。幼名主税 (肥・家譜)。是月 奉行吉山市右衛門江戸より下着 (本)。
5. 12 坂崎成方栖隠歿す、年73 (本)。 28 長岡忠季遇隠故ありて其子内膳忠英に預け押籠らる (家譜続)。
6. — 大坂町奉行より諸国大名に抜荷の同類改めの達あり、細川伊豆守に対しては抜荷取締方嚴重なる達あり (宇土史 103)。
7. 22 武道家成田清兵衛高重歿す (先哲)。清兵衛は肥前の産、初め佐々木宇平太、次で志水甚兵衛、本藩御抱後成田清兵衛と称す (肥)。
8. — 三宝院門跡参向に付御馳走役仰付けらる (宇土史 103)。
9. — 僧面山禪定寺に入山 (先哲)。
10. — 紙楮輸出の禁に違反者あり罰則を出す (式稿88)。
11. 13 方々に八代密柑を贈る (実紀)。 23 幕府宗門改大目付横田備中守より切支丹類族の取扱について指示す (家譜続)。
12. — 年始かせ取に米その他重き品をうつべからず、軽き品は勝手次第 (式稿90)。八代密柑献上、今年は3度とす、又向後は毎年1回20箱宛献上のことと指示あり (家譜続)。

是年 去年竜口邸類族に付当年より5年間二の口米召上られ家中手取減 (部の類族 2・土管・大覚)。 著書目録 小土独歩抄 諸家 伊東治郎左衛門祐敬。肥後民彝伝 史伝 水足屏山。漢字和訓 辞書 井沢蟠龍。

享保 4 (1719) 己亥 (吉宗) 宣紀

1. — 錢流通不足故貯蔵町人は蔵を封ずる旨布告、流通回復す (式稿89)。
4. 18 宣紀江戸発、5月18日熊本着 (本)。 28 藪の内より出火、1403軒焼失 (肥)。是月 鉄砲衆不相勤後々のこと、家葺不申事以下46条の規定出る (触)。
5. 22 肥後洪水田畑13万石余損毛 (肥)。 27 奉行石寺加兵衛江戸より下着 (本)。是月 久留米の者、筑前の者に手負せ逃亡、加害には町宿に足輕を見張として付置、筑前より役人來熊、小人横目、町横目立会 (式稿13)。
6. — 竹田兵大夫奉行新任、吉山市右衛門20挺頭に転ず (本)。
7. — 往生院に飽田郡京町村へ寺床転地を命じ2町8反余を賜る (肥)。亥ノ秋より野開方運上銀1倍增被仰付 (覚)。
8. 15 去る9日幕府より延宝年中以降貞享年中迄献上せし八代染革につき照会あり。本日天平革5枚、正平革5枚、小紋染革5枚計15枚献上の沙汰あり、同時に従来よりの絹縮30端は献上に及ばずとなり、今後は毎年7月右15枚の外に老中・若年寄へも八代染革献上の事に定む (家譜続・本・部の類族 2)。 19 有吉大膳養子 (弟) 新弥、家老職御用見習のため是日より出勤、将監と改む (本)。 23 一領一正の資格と同時に開立山ともに相続 (林制45)。
9. 29 熊本城本丸子の方石垣一ヶ所、丑寅の方石垣一ヶ所孕出し、外曲輪未申の方外川岸土留、石垣共に一ヶ所崩壊に付修補方先月願出の処是日許可 (家譜続)。
10. 2 幕府、諸侯参勤の時の員数を定む (家譜続)。
12. 4 方々に八代密柑つかわさる (実記)。 16 本藩命により打物細工鍛冶の名簿を呈出す。之に依り明年3月25日命あり、同5月28日豊後高田住大和守藤原

享保6 (1721)

忠行の刀一腰を差出す (家譜続)。

是年 用人の内1000石高以下の者には1000石迄の足高を給す (肥)。家中衣類その他吉凶の諸礼、飲食に倏約を命ず (肥)。是年より地筒の者へ玉葉を給し大筒稽古を命ず (肥)。 **著書目録** 武家故実一統記、諸家、伊東祐敬。

享保5 (1720) 庚子 (吉宗) 宣紀

2. 27 宣紀熊本発、4月1日江戸着、奉行竹田平大夫御供 (肥)。 **是月** 奥田小左衛門奉行退任 (本・先祖附)。
 5. 一 幕府国役金賦課の法規を定む (肥)。麦屋禁止、けんとん屋夜営業禁止、竹商売の者路に邪魔にならぬよう、争い事は町横目に知らせること (式稿43)。
 6. 13 島原城主松平主殿頭忠雄に天草島を預けらる (実紀)。依りて本藩は7月11日付にて在番の処置につき伺、7月26日付にて向後家来並に道具、船類差出しに及ばず (家譜続)。
 7. 22 細川越中守宣紀 (他2人) に使番して雲雀30賜う (実紀)。 26 幕府従来10月より5月迄本藩、6月より9月迄島原藩にて受持の長崎在番を本藩の単独受持とすると通告 (部の奉公・家譜続・本)。
 9. 4 長崎在番事務引継を受く (家譜続)。 14 天草在番諸士道具類引取り翌日熊本帰着 (家譜続)。
 12. 16 宣紀第5子重賢生る。幼名六之助 (本)。
- 是年** 他国者の理由なく藩内居住禁止 (肥・大覚)。 **著書目録** 神道天璣予記 皇典 井沢蟠龍。大和女訓 教訓 井沢蟠龍。

享保6 (1721) 辛丑 (吉宗) 宣紀

1. 29 家老長岡帯刀豊之江戸に着く (本・家譜続)。
 2. 9 江戸大火八丁堀屋敷類焼 (実紀)。
 3. 28 長岡帯刀登城、將軍代替の祝儀且つ自分継目の御札のため。4月2日帰国のお暇あり。即日江戸発 (家譜続)。
 4. 19 宣紀江戸発、5月15日熊本着、竹田平大夫御供 (本)。
 6. 21 (イ23) 幕府諸大名に領内人数並に田畑の報告を命ず、同28日更に追加 (実紀・家譜続)。
 7. 11 人吉城主相良近江守長興致仕し養子 (弟) 遠江守長在相続す。長興享保19年11月6日卒、年42 (実紀)。 18 長谷川忠右衛門奉行に任ず (本)。 27 細川宣紀の実母死去、奉書を以て弔慰せらる (実紀)。
- 閏7. 18** 増田貞右衛門奉行御免 (本)。 25 幕府大坂各藩邸の糶米の延期及び無実の米券発売を禁ず (部の奉公・肥)。 **是月** 高正院 (宣紀母) 死去、町中2日蒞閉、振売買出禁止 (式稿28)。
8. 23 去る6月幕府の命による領内田畑人数調 (享保5年調) を呈出す。大要次の如し、但し長岡帯刀の山城和泉2国の内領地は9月5日附なり (家譜続・部の奉行)。田畑合5万9744町5反9畝14歩、外に拝領外新田畑9464町3反5畝9歩、人数合計54万7514人。帯刀上方知行田畑合15町7反2畝5歩、人数合183人。 **是月** 奉行竹田平大夫大坂に上る (本)。
 9. 13 元家老山名重澄入道聴水歿す、年76 (先哲)。 26 幕府令して大名道中の供連人数を定む (実紀)。 **是月** 商売人諸色の代銀等より歩を出し銭を望み、他所で出す様子あり之を停止す (実紀・触)。

10. 28 御用見習中の有吉将監立好部屋住の俣家老に列す、後に数馬と称す(本・家譜続)。是月 家老木村半平豊持隠居して主馬と改む(用人神谷矢柄専横にして家中困憊を極めたるを面白からず思いしによるといふ)(本)。
11. 24 水戸宗堯増上寺大僧正白随に使せられ八代密柑を賜う(実紀)。28 参勤御供の面々^髷服を着用すべき旨、家老より上達(家譜続・本)。是月 坪井伊勢屋伝次郎守志にて門松ご免(本)。

是年 下益城の郡医師に本田立德、これ郡医師の始まりか(城南史 482)。著書目録 故実大意小解 諸家 永広河水。清源寺略記 諸家 清源寺慈航。

享保 7 (1722) 壬寅 (吉宗) 宣紀

1. 一 河江手永中小野村孝子源四郎へ米銭賞賜(本)。家賃統制、前家賃禁止、家主の恣意で店子追出禁止(式稿54)。
2. 27 宣紀熊本発、奉行石寺加兵衛御供(家譜続・本)。是月 飽田郡春日村戸坂村の百姓難渋に付祇園山御丁場外之焼石並びに船越山の野面石売買許可(肥)。
3. 15 幕府献上物並に被下物を従来^の10分の1に減ず(肥)。是月 御国春駒の者惣庄屋并に別当より1年毎に名札を配り他国春駒と区別のこと(式稿16)。
4. 30 吉宗の家継廟参詣に細川宣紀他的大名らと共に予参(実紀)。
5. 22 奉行的場甚右衛門用人に転ず。奉行竹田平大夫に御勝手方根役を命ず。(本)。28 新町一丁目御門外堀2ヶ所、坪井方面13ヶ所浚え方幕府の許可あり(家譜続)。
7. 1 細川伊豆守興生に暇賜う(実紀)。3 石高 100分の1の税米を諸侯に課し参勤交代の期を緩かにす(実紀・本)。8 本藩献上物被下物を改正、簡略を旨とし多くは品物の代りに現銀とす(家譜続)。
8. 一 慶長年中より寛永年中に至る御手伝覚書を幕府に提出(家譜続)。上村理右衛門奉行に任ず(本)。質物利息2割を1割5分引下げ(触)。
10. 一 京都町人平塚藤左衛門へ金寿円を町在々へ3ヶ年売方を許す(触)。
11. 一 質物の利1割5分を更に1割に下げたが、是月再び1割5分とする(触)。爾今新版の書物、異説、好色本及び本藩に関する本の発行販売を停止す(肥・部の勘定1)。
12. 1 日門に八代密柑を送る御使は高家前田伊豆守長泰、増上寺にも同じ(実紀)。
- 是年 在中男女他所縁組、且竹木旅出支有無の事(大覚)。

享保 8 (1723) 癸卯 (吉宗) 宣紀

2. 28 (イ27又は3・27) 宣紀江戸発 4・25 (イ24) 熊本着(本)。是月 上村理右衛門江戸に上る(本)。御領内駄賃人足賃(人足1人1里2分 本馬1疋1里4分)新銀をもって払うこと(触)。
3. 30 幕府諸国に7年毎に戸口を録進せしむ(実紀)。是月 借物取遣利払口銭について達し(触)。
5. 22 大目付落合勘兵衛御勝手方根役になり従来^の役儀ご免(本)。是月 本藩格別難渋に付、特に省略方必要に依ると(肥)。井上進之允奉行新任、又石寺加兵衛江戸より下着(本)。
7. 一 本藩、京枡を励行せしむ(本)。
8. 一 御算用奉行復旧す(本・旧章)。
9. 一 渡辺源之允弟子に本藩備付御筒品々並にハラカンと云う筒の試射を命ず(

享保10 (1725)

肥)。竹田平大夫大坂に登る(肥・本)。宝永元年3月大津より熊本御曲輪内に懸た新井手村々引高書付之事(合)。

10. 18 去る2月5日戸田山城守を経て本藩小笠原備前に家伝の簞製作を命ぜられしが是日献上す(実紀)。 27 將軍家嘉納の由にて時服を与え賞せらる(実紀・家譜続・肥)。
11. 22 (イ21)辰の下刻、肥後大地震、山鹿辺最も烈しく山本郡慈恩寺温泉湧出づ(肥・肥国誌下—290)。是月 一郡限の郡奉行・惣庄屋・蔵納・給知現高調(合)。
12. 7 御三家并その室とに寒中の御尋問ありて、八代密柑つかわさる。日門増上寺にもおなじ(実紀)。 14 佐藤半七実祐(号固庵)死す。年41(先哲)。是月 家中手取2石5斗、但し2000石以上は1石5斗の割(肥)。
- 是冬 櫓仕立始まる(本・旧章)。熊本町人綿屋忠二郎櫓植付について郡方に上書す(城南史452)。著書目録 打出抗 記録 倉田宗倫。

享保9 (1724) 甲辰 (吉宗) 宣紀

1. 27 宣紀熊本発、3月1日江戸着、長谷川忠右衛門御供(本)。
2. 一 本藩より御扶持下さる諸職人並兩座大夫等寸延の脇差を使用し不相応に付向後9寸5分より1尺3寸を限りとす。(9月とする説あり) 翌月川尻・高瀬・高橋の別当座に在町御扶持米給与の者へ同様令す(本)。
7. 一 曲輪内に懸る新井手埋方仰せ付けられる(合)。
8. 14 大風吹く(家譜続)。是月 井上新之丞江戸詰となる(本)。内牧手永内牧村小里村新堤新井手打替畝など願(合)。
10. 4 宣紀江戸発、11. 4 熊本着(本)。
11. 7 本年早魃大風に付本藩損毛31万560石余と届出(本・家譜続)。 29 宣紀らはじめて家重に拝謁(実紀)。是月 石寺加兵衛御勝手根役を命ぜらる(本)。
- 末松孫右衛門奉行に任ぜらる(本)。
12. 2 日門、尾水両卿 増上寺に密柑送らる(実紀)。
- 是年 勘定頭を廃し郡頭より兼務せしむ。翌年9月旧に復す(肥・本・大覚)。
- 古町往生院を古町村に移す(肥国誌上—81)。無類の御差支にて一統衣服・飲食の取しまり達す(肥)。在中に烏乱者、博奕、芸者、芝居について達(諸拔)。
- 著書目録 和札掇集 諸家 永広河水。検地新議 法制 中根只右衛門。旦夕覚書 記録 堀内伝右衛門。

享保10 (1725) 乙巳 (吉宗) 宣紀

1. 一 宇土家中奉公人少く御知行役より渡下さる(触)。
2. 13 小笠原備前長知家老に列す(本)。是月 有吉大膳病身に付役儀お断りの処、御用番のみ免ぜらる(家譜続・本)。竹田平大夫熊本発江戸に赴5月帰着(本)。
3. 一 立田口成就門院前の者へ商札支給、火事の折は本坪井町人数へ加(式稿33)。
4. 29 奉行長谷川忠右衛門二十挺頭に転ず(本)。
6. 11 矢部勘右衛門(惣庄屋)歿 年81(肥人)。 22 元田尉大夫、野々口又之允奉行に任ず(本)。
8. 17 奉行竹田平大夫退任(本)。是月 奉行上村理右衛門御勝手方根役を命ぜらる(本)。

9. 25 是夜、天草地方大地震、引続余震あり（肥・天草譜）。是月 再び御勘定頭をおく（本）。
10. — 河尻大慈寺御領内町在5ヶ年之間相對勸化御赦免（触）。
12. 1 幕府は日元禄大判の通用を停め、新鑄の享保大判を使用せしむ（実紀・家譜続）。5 日門、増上寺にお使して八代密柑をつかわされる（実紀）。
- 是年 藩主在国（肥）。金森平左衛門奉行に任ず。（金森は翌年にはその名なし）（本）。御算用奉行去々年来兩人に仰せ付られるが、御用無の節は1人宛罷出ること（諸拔）。著書目録 九如集 詩文 細川家。

享保11 (1726) 丙午 (吉宗) 宣紀

2. 1 細川主税（後の宗孝）紀達と名乗る（家譜）。4 宣紀熊本発、3月6日江戸着、奉行末松孫右衛門御供（本）。是月 家賃滞納者名前町方へ上達せよ（式稿55）。
3. 8 俊茂の500年忌を泉湧寺に修し大円覚心照国師の号を加賜せらる（肥）。
4. — 奉行井上新之允江戸より下着御役御免（先祖付には元文4年2月御断り、4月病死とあり）（本）。
5. 25 新田支藩主備後守利恭、兄細川大内蔵嫡子右近を養いて嗣とす（本・家譜続）。
6. 25 幸野溝開拓功労者高橋七郎兵衛死す、年67（肥）。是月 切米衆諸役付は勘定所にて取扱いたるを勘定所支配以外は奉行所にて取扱うこととす（本）。
7. 22 去る2月領内人数調査の命あり、5月現在にて調査の末、肥後・豊後総人数55万9132人内男子30万4313人、女子25万4819人と報告（家譜続・本）。
8. 22 八代城二の丸門巽方石垣1ヶ所。二の丸侍屋敷東の方堀端1ヶ所孕出に付修復出願、同30日許可（家譜続）。
9. 11 幕府 宣紀ら西国大名に唐船打払い令の徹底を令す（実紀）。是月 立田山にて3日間獵師に猪を狩らせる（肥）。諸郡在町絵図に載分且絵図になき分記録の事（合）。
10. 4 宣紀江戸発 11月7日熊本着（本）。11 佐分利十右衛門奉行御免（本）。是月 在中無高百姓を御侍中并寺社方家来分として居懸の村に置くこと難叶旨のこと（触）。

是年 御勝手方至極差支え町在へ懸物を命ず（本）。

享保12 (1727) 丁未 (吉宗) 宣紀

1. — 志水治平奉行に任ず（本）。是月 家中手取減少に付備頭以下中小姓頭の組持衆へ御心付あり（本）。
- 閏1. — 小国久住郡奉行蒲池喜左衛門鶴崎へ所替、役料共 250石高に仰付られる（年覚）。
4. — 武器他国の者へ売渡中間敷旨達のこと（諸拔）。
6. — 妻木勘右衛門奉行となり同9月御免（本）。
7. — 穴生に帯刀を許す（本）。
9. 14 御山方御用之材木を長崎に廻送す（林制46）。是月 （妙見社）八代神宮寺板行鎮宝靈符を法皇及び妙法院門跡の所望により献上（寺例）。竹迫手永橋田村年貢米高瀬御蔵入仰付らる（合）。
10. 2 家中手取2石増として、100石に付役付20石無役18石、1000石以上は5斗

享保14 (1729)

増(本)。是月 松崎甚藏奉行となる(本)。

12. 18 紀水兩卿、水邸の北方ならび本清院、日門及び増上寺、天英院月光院に八代密柑を贈る(実紀)。是月 細川藩切支丹類族8396人内訥肥後国3538人豊後国4858人(肥録24、切支丹63)。

享保13 (1728) 戊申(吉宗)宣紀

1. 27 (イ28) 宣紀熊本発、2月23日京都久我家立寄り、3月7日江戸着(本・家譜続)。是月 六所宮造営分担、家中の者股引鼠色黒色を禁ず(式稿31)。岩下御茶屋を長岡忠英に賜う(肥)。
6. 一 幕府の命により本妙寺所蔵の清正記を呈出(肥)。
7. 13 住江萬之允昭猷(号滄浪)死す、年38(先哲)。
8. 一 当秋御免植等之儀に付郡奉行並内検へ書付渡之事(年覚)。
9. 26 (イ25) 宣紀日光社参のため江戸発、29日社参、10月2日帰府(本・肥)。是月 新堀御門普請あり、之に依り同町通行人無く難渋につき見世物芝居御免(本)。侍中惣銀所へ諸渡方有之節も罷出に及ばず(触)。
10. 8 藩主此夕俄かに気分あしく右の手不自由となる(中氣)本年滞府して就封せず(家譜続・本)。是月 正徳2年解除の御茶屋の内畑山御茶屋床山藪2町余享保2年主膳殿へお預けの様子吟味(合)。
12. 19 日門・三家の方々および簾中に八代密柑をつかわさる。増上寺にも同じく(実紀)。

是年 志水治平江戸詰(本)。銅山繁昌に付蔚山町長崎屋吉三郎に御免の相撲始む(大覚)。筑後柳川領之百姓男女大勢罷越、享保14年7月本所へ差し返さる(諸帳)。著書目録 新編肥後国誌草稿 地誌 成瀬久敬。

享保14 (1729) 己酉(吉宗)宣紀

3. 22 藩主幾分快方につき是日下屋敷に移る(家譜続)。
4. 28 大風、やぶの内より出火、上林、内坪井、本町、御座打町京町まで残らず焼失す(合・覚・肥・肥国誌上 102)。一説に千葉城塩硝所荒仕子の煙草の火より発し風荒に諸方に吹貫き内膳殿、持法院殿、朽木内匠、藤崎作右衛門その他大家多く焼失(肥)。
5. 19 この昼山崎町勘兵衛宅より出火、折柄西南の風強く、附近焼失(肥)。是月 旅人取締、勧進・操踊・踊・夜中念仏・夜売禁止(式稿18)。
6. 19 家老長岡壱岐是春、熊本発7月19日江戸着、此頃壱岐を丹波と改む(本)。
7. 一 上村理右衛門奉行御免(本)。
8. 19 矢部大洪水菅村白谷社後の山崩れ神殿拝殿流失(郷歴)。大風吹く(肥)。
- 27 長岡丹波江戸発、途中伊勢参宮の上、閏9月1日熊本着(家譜続)。是月 当夏旱に付田根付困難江戸へ達のため調査(覚)。当秋御免育に付き郡奉行并内検へ書付渡しの事(年覚)。
9. 13 強風吹く(肥)。16 細川備後守利恭竹姫の婚嫁を賀し浅黄羽二重を献ず(実紀)。22 細川越中守宣紀みずから製作せし甲冑を吉宗の御覧に供す(実紀・家譜)。是月 米穀・菜種子・荏子津口増運上仰付られしところ免除さる(触)。御勝手方根役を廃す(肥)。

- 閏9. 3 石寺加兵衛奉行御免(本)。13 藩主所勞により来春まで滞府願出、許可(本・家譜続)。24 藩主自作の三斎公流儀の革具足・陣羽織・蓑等將軍上覧

に差出す。28日お返しあり(家譜続・肥)。これは三斎かつて紀伊頼宣に具足を差上げ紀州家にありしを吉宗將軍江戸城に移されしによる(本藩史料この日におき、実紀に9・22とする)。25 細川宣紀、竹姫婚嫁を賀し台子を献ず(実紀)。29 細川伊豆守興生、同上に半文箱を献ず(実紀)。是月 堀田勘兵衛奉行に任す(本)。

11. 一 郡奉行役料米切米所より渡すに付、御免帳内引など取計様のことについて達し(合)。

12. 4 寒中見舞のため天英院ほか日門・三家・水戸の北の方その他に八代密柑を送らる(実紀)。是月 給知・蔵納有高の達(合)。

是年 大風及び虫勝ちにて不作(肥)。他国よりの竹工、竹木細工、肥後の材料での商売禁止、完成品を持参して売るのはよし(式稿61)。御勝手方差支へ家中15石、切米取2石手取(肥)。奉行志水治平江戸詰(本)。

享保15 (1730) 庚戌(吉宗) 宣紀

1. 11 六之助(重賢)紀雄と名乗る。13 主税(宗孝)六丸と改む(家譜)。是月 志水治平江戸より下着(本)。かり出奉公人今迄高1000石に3人宛出入仰付られしを2人出入に仰付けらる(触)。

3. 19 洪水で流れた材木を見逃したり隠置したものは処罰(林制46)。是月 奉行末松孫右衛門熊本発、江戸に赴き5月下着(本)。近頃損毛勝にて上下困窮百姓共衰微に及ぶに付二の口米、水夫増米を免ず(肥)。

4. 15 室鳩巢の献策により、明年より諸大名の上げ米を免じ、参覲交代は前々の通りとす(実紀・家譜続・触)。

5. 28 藩主病後、お礼の為登城(実紀)。是月 1万石以上の御衆来年より上げ米御用捨、勤務交代の儀前々の通(触)。

6. 4 幕府さきに藩札の使用を禁じたるも今よりもと用い來た所のみ許し、その旨を幕府に届出よ(実紀)。

7. 12 細川熊次郎山城守と改称(宇土史 102)。

8. 一 幕府、諸国に凶作に備えて困米を命ず(本)。「本」には8・19、「家譜続」8・14、「実紀」は日時記さず。奉行元田尉大夫江戸詰として熊本発(本)。

是秋 宇土支藩主伊豆守興生山城守と改む(肥)。

10. 7 去る9月書院番阿部四郎五郎政恒の家に加藤清正の書せし題目の旗、八種の伽羅及び忠広の藏せし虎頭を伝ふること上聞に達し、伽羅1種のみ受納、賞として黄金10枚を給ふ(実紀)。

11. 15 新田支藩主備後守利恭の養子右近利寛登城して將軍に初見。(実紀)。是月 飽田・託麻にある諸奉公人出作ならびに地子年貢滞分10ヶ年賦仰付らる。代官算用は一紙の切手仕上げのこと(合)。

12. 3 井沢十郎左衛門長秀(号蟠龍)歿す、年63(先哲)。是月 下益城惣庄屋廻江彦右衛門、託麻惣庄屋田迎次郎左衛門郡追放せらる(合)。

是年 虫害並びに旱魃にて領民困窮す、山野のすず笹に実なる、諸人餅にして食う(肥)。著書目録 太平策 儒家 水足博泉。

享保16 (1731) 辛亥(吉宗) 宣紀

1. 25 藩主の病状、將軍の上聞に達し、是日医員河野松庵を経て將軍自ら調剤せる七宝美髯丹を与えらる此の後もしばしば薬を賜い医師を遣さる(実紀・肥)。

是月 公儀役高銀、先年上野仏殿譜請手伝御用金その他往還橋掛銀、継飛脚請米并井樋出米銀などを山城守知行所に懸ける(覚)。

2. 28 幕府諸国に3ヶ年間の倭約を命ず(実紀)。是月 古金、古道具着物類、辻々蔭陰等にて商売禁止(式稿63)。
3. 一 町在より長崎への商売物の惣問屋熊本町人米屋権兵衛を差止めらる(触)。
7. 一 長六河原郡と町との相持との事(諸拔)。
8. 19 寺尾藤次(兵法家)没、年82(肥人)。是月 豊前宇佐宮炎上造営銀について細川家より白銀奉納、御領内奉加銀6貫700目余諸御郡へ(覚)。熊本町中は2貫138匁8分割賦(式稿10)。
11. 一 在中種子米利分上納、天和元年御赦免の事(合)。是月 国中の船、商売のため島原茂木浦行きの際は、指定船宿へ通知すること(式稿32)。
12. 18 上益城浜町出火、本町より横町まで悉く焼ける(郷歴)。20 日光淮后に高家大沢下野守基清御使し、増上寺大僧正に使番、岡野内蔵丞成方をして八代密柑送らる(実紀)。29 細川宣紀の病重きよし、内々將軍手製の七宝髻丹送らる(実紀)。

是秋 幕府の命により本妙寺蔵の清正記3冊呈出、翌年返換さる(肥・本)。

是年 御山方差止められ郡方支配となる(大覚)。

享保17 (1732) 壬子 (吉宗) 宣紀・宗孝

1. 一 奉行元田尉大夫江戸より下着(本)。
4. 9 儒家水足半助安直(号屏山)歿す、年62(先哲)。
- 閏5. 7 是日より洪水、13日迄減水せず、そのため田作腐れ害虫発生被害甚大(実紀・肥)。
6. 26 藩主容体悪化し、是日卒す、年57謚靈雲院(実紀・肥)。29 藩主死去につき、奏者番松平備中守正貞御使として香火料銀50錠を賜う(実紀)。是月 蔵納・給知・古新地田畑畝高并御国中男女惣人数48万7800人余との書付達す(合)。
7. 9. 津川平左衛門、谷貞之進家老脇となる(本)。13 小笠原備前、熊本発出府(肥)。16 宣紀重体となるや六丸の相続並に出府許可を内願して卒す、是日世子六丸熊本発、8月20日江戸着(肥)。29 家老長岡丹波熊本発、8月28日江戸着(家譜続)。
8. 25 細川六丸老中松平伊豆守邸に於て父の遺領相続の命を受く(肥)。是月 不作に付、新酒造込禁止、麴も麦麴とす。但し家中より米を渡して誂える分は許す。素麺干うどんも禁止す(式稿80)。不作に付国中一作の穀類現在高調べを行なう、町中貯米有高人別報告(式稿81)。高瀬願行寺当住不行跡の廉により、遊行上人来熊の節吟味をとげ追院に処す、藩も諒承(寺例)。
9. 13 細川六之助民部と改む(家譜)。15 六丸登城襲封を謝して山城国信国の刀・銀・縮緬・馬を献ず、長岡丹波・小笠原備前から随い調す(家譜続・肥)。28 幕府西南諸国の虫害を被れる諸大名に拝借金を許す(実紀)。本藩も拝借願出、11月23日金2万両拝領5ヶ年々賦償還(家譜続・旧章)。是月 奉行松崎甚蔵二十挺頭に転じ、同末松孫右衛門御役御免、中村兵助奉行に任ぜらる(本)。町在米、太米、大小麦之類商売1〜2俵の外取遣まじき事(触)。
10. 3 長岡丹波江戸発、12月3日熊本着(家譜続)。14 水足平之進安方(後に業元、号博泉)歿す、年26(先哲)。

11. 4 夏より秋にかけ蝗虫発生多く稲の被害前代未聞、夏期の水害損毛14万7800石、秋期の虫入損毛33万 390石合計47万8190石に上る、この旨幕府に届出る(寛・本・家譜続)。
12. 6 藩主六丸従四位下侍従に叙任し越中守宗孝と称す(実紀・家譜・万覚)。7 有吉大膳立貞隠居して大貳(後に大丹)と称し、将監立好相続し数馬と改む(本)。
- 13 沢村衛士重行家老に任ず(本)。
- 23 銀札は宝永元年より通用、4年幕命により停止の処、去る15年許可につき、来る丑年より領内にて使用の件伺出ず(家譜続)。
- 26 25年通用を期限として銀札認可せらる(家譜続)。
- 是月 牧市左衛門奉行に任ず(本)。
- 是年 御勝手向差支え、町在に寸志知行拝領を許す(本)。家中の新地手開を禁ず(肥)。
- 西国・中国・四国地方虫害甚だしく飢死相つぎ、本藩飢死届の分のみにて6125人(肥・実紀)。
- 土免1つ9朱余、御買上お救米2万8000余石(御勝手向しらべ・天明村誌 483)。
- 種子粃御貸米3万2900石、造酒、菓子製造停止(肥・家譜続・土管)。
- 法師放牛地藏尊百体建立を發願し、享保7年以来建立、大願成就し、この年出町村往生院に百体目を建立す、同年11月8日歿す(肥)。
- 宗孝公遺領相続并お礼(万覚)。
- 靈雲院(宣紀)逝去の事(万覚)。
- 矢部・中島元の如く一手永となる(郷歴)。

享保18 (1733) 癸丑 (吉宗) 宗孝

1. 23. 去秋作毛不熟に付、3ヶ年献上物御免(肥・実紀)。
2. 一 山伏、陰陽師へ達し、古祓、紙札等年末に寺社へ納めず藪木等へ結付置ちり溜所へ捨てるを禁ず(式稿92)。
3. 一 矢部浜町造酒屋中に1貫目づつ上納仰付らる(郷歴)。
4. 一 無高百姓を侍・寺社の家来分にし、居懸りの村へおいたまま、又高持百姓高地を子弟に譲る形で居村のまま家来分になることを禁ず(諸拔)。
6. 19 細川熊次郎(有孝のち治孝)卒す、年59(実紀・宇土史102)。
- 是夏 畿内以西疫疾流行し死者多し、幕府医員望月三英羽正伯に命じ備急の方劑を撰ばせ国々に示す(実紀)。
8. 一 素麴・切麦・干温飩・蕎麦切・味噌・米麴・9月朔日より商売御免(触)。
- 諸手永在宅之面々地子并内作の年貢米滞分、此節までは別段を以てお取立仰せ付られ、以後万一滞るについては代官迷惑に仰付られる段達し(合)。
9. 27 有吉数馬 熊本発 11月3日江戸着 同16日大蔵と改む(本)。
- 是月 上羽四郎大夫奉行に任ず(本)。
10. 一 御家中の面々分知は又は内分 500石以内と限る(肥・触)。
- 是月 塗屋三右衛門塗師頭仰付らる、悴吾蔵寛保2年父へ支給されし3人扶持を相続、父同様相勤む(式稿74)。
11. 一 入江伝右衛門江戸に於て奉行に任ず(本)。
- 諸国飢民賑救者に褒賞銀を下す、肥前、肥後には49村に20枚(肥)。
12. 一 町内事件取調の節提灯を差出し、町役人も呼出に即刻出頭の事(式稿3)。
- 米穀無多年高直にて末々飢に及ぶに付、米1俵代銀25匁、粟17匁、大豆13匁に究らる(触・大覚)。

是年 去年より西国筋大飢饉、本藩でも野の草まで食す(本)。

昨冬銀札使用許可あったので再び始まるも、差支えてまたまた中止となる(この中止の時明らか

らず) (肥・旧章)。奉行堀田勘平御役御免 (本)。大飢饉一件書附出来の事 (大覚)。著書目録 芦北入境誌 地誌 野村玄庵。諭訓 教訓 小堀常春。

享保19 (1734) 甲寅 (吉宗) 宗孝

1. 一 奉行元田尉大夫江戸より下着 (本)。御下国御用銀御手当差支えに付、見懸銀上納仰付らる (年覚)。
2. 一 御下国御用銀急に御仕向に付、郡方囲米当分振替えのこと (年覚)。諸郡普請御用石船造替等入目銭、郡方引請にて暮に勘定方より立用仰付けられる様 (年覚)。
3. 27 1 昨年以来の飢饉に付、救助の為本藩買入の米代皆済の旨是日幕府より通知あり、本藩買入米は昨年7月5日付薮丹右衛門覚書によれば2850石余 (家譜続)。
4. 18 宗孝始めて就封の暇あり、4月27日江戸発6月1日熊本着 (実紀・本)。初入部、御礼のため長岡内膳江戸に赴く (本)。是月 高森・荒尾両手永算用延下されし所、此節3分1上納。残りは延下しにする事 (年覚)。内牧、坂梨、高森、荒尾の算用の延願の事 (年覚)。
5. 10 是日より15日迄肥後強雨洪水 (家譜続)。是月 内牧弥右衛門在勤中、図書殿屋敷の切手申談売渡になったが、代銀の半分の未払分は切手取の儀に付願の事 (年覚)。
6. 4 宗孝、熊本城へ初入城、同6日、7日の両日、城中にて家中の御礼受けらる (本)。是月 江戸より下着の奉行入江伝右衛門其職を免ぜられ生駒新九郎奉行に任ぜらる (本)。
7. 一 町在の者并輕輩浪人等より在中の相对を以借付置いた古借米銀等を大身の方へ差出、納戸銀と名付押取等いたすことに付達の事 (年覚)。去秋凶作にて八代百姓飢死多く救として長崎で才覚するよう仰付られ返弁のため種山手永小斐納を以払替代米は借延にする (覚)。
8. 3 藩主白川八幡洲にて水泳、次に水前寺にて相撲御覧、吉田善左衛門父子も罷出 (家譜続)。是月 町在の者田畑質地に入れ、定め年の年季以前に他人に置替え過銀を取る様な事なきよう (触)。江戸への御飛脚向後1ヶ月に1度 毎月15日差立てられる様究める (触)。中山・廻江・阿蘇4手永近年零落諸取立も不埒に付寺永又左衛門列立会の事 (年覚)。(注一阿蘇谷は2手永)
9. 一 家老溝口藏人政世隠居 (本)。菊池居住の鞍師佐藤奥右衛門、藩主入国を祝し家伝衣袋形の鞍を献ず (肥)。阿蘇山学頭坊知行所田畑徳懸願の事 (年覚)。
11. 1 宇土支藩主山城守興生の息源次郎典里登城、初めて將軍に謁す (実紀)。10 再び銀札通用、札座を熊本2カ所、川尻、八代、高瀬、山鹿、久住、高橋の8カ所に定む (本)。(肥後国年歴には翌年11月10日下命、19日迄金銀錢受取り、20日より銀札通用とあり) (肥)。是月 当年御双場究の事 (年覚)。合志郡張生村庄屋九郎左衛門寸志郡奉行直触仰付らる (年覚)。諸郡御寄附の神社、寺院等修覆の儀に付郡奉行より願の事 (年覚)。
12. 4 藩邸の門松添竹五町手永陣内御薮より剪出 (林制49)。9 本夏の大雨洪水の被害36万石余と幕府に届出る (年覚・本・家譜続)。是月 現在の類族人数、本人同前の者豊後にて12人、その外 類族は 豊後国にて4858人、肥後にて3538人、計8396人 (肥録24)。新二丁目沢屋吉左衛門が屋敷前で御目見を許さる (式稿

27。御勝手向御難渋に付当暮手取米減少の事 (年覚)。高森手永色見村百姓14竈男女共竹田御領へ立除 (年覚)。当秋損高届しらべの事 (年覚)。

是年 本藩人口53万1248人男子28万5364人女子24万5884人 (肥録)。奉行牧市左衛門の名是歳よりなし (本)。

享保20 (1735) 乙卯 (吉宗) 宗孝

1. 6 宗孝、藤崎宮、六所宮社参、次で8日立田口大神宮社参 (家譜続)。是月去夏先納仰付らるる去暮御年貢の内に元利返し下され、右元分1万5000石外に5000石都合2万石参勤御用に差出す様達 (年覚)。1月より10月まで銀札通用中止 (旧章)。

3. 21 中御門天皇桜町天皇へ譲位 (皇私)。23 藩主藤崎宮、六所宮社参 (家譜続)。27 家老松井求馬祐之隠居す、延享4年9月10日病死 (本)。

閏3. 3 宗孝熊本発、5日阿蘇宮社参、19日大坂着、4月8日 (イ4日) 江戸着 (本)。8 不動院住持快旭阿闍梨歿す、年85 (肥)。是月 川尻大慈寺不勝手につき3ヶ年托鉢許さる (触)。飽田郡河内村江月院住持不都合あって隠居を命じ河内村居住を命ず (寺例)。荒尾手永杵村列3ヶ村懸御山内焼石原の石炭堀方願の事 (年覚)。御参勤御用金不足に付種子扱利米之内振替の事 (年覚)。

4. 一 小川町々人坂口屋新平1000俵を献納 (城南 494)。芦北久木野手永大宝木山金気相見、堀方の事 (年覚)。

5. 一 芦北金山堀方造用願の事 (年覚)。熊本城小天守に落雷 (本)。

6. 18 是日より7日間、清正 125回忌修法 (肥)。是月 東照宮勸請に付、幕府神社奉行より達を以て、神護寺内に権現宮勸請、御供料毎年八木30俵その他寄進す (家譜続)。阿蘇南郷、高森村々にて牛馬死す (本)。阿蘇御田植祭社家乗用の馬調達の願い出に関し以後新規の願出を取次がぬよう寺社奉行中へ達す (寺例)。

7. 5 幕臣丹羽正伯より阿蘇山に関する記事唐書にある故をもって問合せ来る、依りて阿蘇社に命じ資料を調査するも発見せず (家譜続)。

8. 26 林宇門長泰 (致仕後三陽) 歿す、年84 (先哲)。是月 奉行生駒新九郎病死す (本)。

9. 17 杣方役人御勝手方廃止に付御郡方支配となる (林制51・大覚)。27 利姫入興の献物として細川備後守利恭は長文箱、細川山城守興生は押金を献ず (実紀)。28 同上細川宗孝は鶯子を献ず (実紀)。是月 奉行上羽四郎大夫熊本発、江戸に赴き、翌年迄詰越 (本)。御勝手方の儀、前々之通御勘定方一手に仰付けらる (年覚・大覚)。

10. 一 今度札通用につき札座仰付けらる、札は5匁より1匁迄、5分より3分迄通用、2分以下は銭遣 (触)。

11. 2 宇土支藩主山城守興生隠居、源次郎興里相続、興生致仕後梅山と号し、元文2年1月7日卒、年39 (宇土史 104・実紀・本)。

12. 一 在中へ毎春差廻しの踏絵板損するため箱入とす (本)。

是年 影踏前々の通り直踏に成る (大覚)。

元文1 (4・28改元) (1736) 丙辰 (吉宗) 宗孝

1. 18 宗孝疱瘡を病む、2月全快 (年歴にこれを元文3、2に置く) (肥)。是月 松野八郎左衛門、藤崎作右衛門家老脇を命ぜらる (先祖付)。

2. 一 御苔場に高札を建て釣魚を禁ず (肥)。有馬陣百年忌に付安国寺にて茶湯

元文2 (1737)

あり、討死の者の子孫に参詣せしむ(肥)。

3. 9 新田支藩主細川備後守へ内分の3万5000石を知行せしむ、翌年蔵米渡となる(家譜続)。13 忠興が関が原に着用の甲冑を將軍御覽に供す、熊本城より右具足類を江戸へ取寄せたもの、4月8日返却(家譜続・実紀・肥)。15 藩主紀伊中納言宗直息女と定婚あり(実紀・肥)。
4. 19 増上寺火の御番御免(本)。是月 諸郡零落の様子郡方より達(年覚)。角力芝居其外見せ物芝居へ臨席した役人は小屋側の手引を受けぬよう(年覚)。
5. 3 宗孝江戸発、6月3日熊本着(本・家譜続)。12 金銀幣制を改め文字金を通用させる(本・実紀)。具君様、綱利養女逝去、50才(本・度譜)。29 是夜より翌晦日にかけ強雨洪水、水損田畑5062町2反余(高56918石余)塩浜46町4反余、川塘6370間余、礮所9960間余、潰家43軒、死人22人(肥)。是月 白川洪水にて長六橋下で馬船流れるのを繋留した者共へ心付を与う(年覚)。上益城5手永明高片付方につき拝借願(年覚)。御勝手向差支に付見懸上納仰付らる(年覚)。
6. — 忠興以来久しく確執ありし黒田家と和解(「本」にはこれを7月に置く)(肥)。
8. — 御帰国御用銀差支へに付 去冬 町中へ先納銀仰付らる(触)。在中無高百姓を侍中并寺社方家来分に居懸居住について願(年覚)。
10. — 小国馬場手永の題号差しられ、北里1手永に仰付らる(合)。
11. — 御用釘に目印を付す、商売釘に目印釘あるときは作事方役人より吟味(式稿69)。
12. 16 宇土支藩主細川源次郎興里従五位下に叙し大和守と称す(「本」は15日に附す)(本・実紀・宇土史 104)。是月 高持百姓2男末子へ高分けは15石20石分けても本家30石以上ならば如願仰付らる、20石以上の高分は停止の旨(触・諸拔)。御家中門松熊本拝領屋敷は各別、以後在宅屋敷へ拝領松建ることは無用との事(触)。

是年 御帰国御用金不足分在中居住の者共へ見懸銀仰付の事(年覚)。藩札使用を停む(肥)。牛馬売買猥に無之様のと事(大覚)。著書目録 加藤家伝 史伝 森本儀太夫一友。天下太平豊年記 記録 西宗庵。

元文2 (1737) 丁巳(吉宗) 宗孝

1. 7 細川熊次郎山城守興生卒去、年39(本・宇土史 103)。
2. 27 宗孝、熊本発駕、4月3日江戸発、5日上使御入、13日登城、室津より上陸、此年より白金へ住居(家譜続・本)。於安国寺、有馬御陣戦死者百年忌茶湯(万覚)。是月 享保申年以来年季明けの質地自今年季明け10年過ぎた訴出は取上げず(天明誌 235)。郡方軍用金勘定所へ振替に付証文の扣(年覚)。
3. 7 御赦免開を知行に直すこと向後禁ず、御中小姓以下の御開山を知行取に譲渡するを禁ず(林制55・触)。是月 酒粕、焼酒町在へ割賦して来たが当年から熊本町酒屋共迄割賦仰付らる(触)。
4. — 肥前より入込居る焼物受負差止の事(年覚)。備後守(細川利恭・新田藩)御知行所不作等に付御足米願の事(年覚)。17 新編肥後国誌草稿の著者成瀬次郎左衛門久敬(致仕後昨瀕)歿す、年79(先哲)。
5. 22 宗孝家督の祝(本)。於西丸竹千代誕生、祝として備前長光、相州広次の大

小、産衣、2種1荷を献上(実紀・肥・本)。28 備前守利恭は長谷部の差添大和守興里は助宗の差添を献ず(本)。是月 奉行上羽四郎大夫江戸より下着(本)。才覚銀の儀について達(年覚)。五町手永へ添御代官仰せ付らる(年覚)。五町、八代高田、南関、正院各手永へ地内検増員(年覚)。鯨手永畑作願の事(年覚)。

6. 一 浅川嘉平次、馬場桶水支配として当分差出さる(年覚)。川尻御作事所御目付皆川弥作稚田村屋敷畑の内、地子借村方故障の事(年覚)。
7. 一 諸国大雨洪水、本藩にて田畑6万7000石余損毛(肥)。
8. 一 浪人平塚藤左衛門の願により蓮台寺境内にて本藩初めて富講を許す(翌3年在中故障により差止)(本)。志水治平奉行退任(本)。
9. 一 甲佐御築、鶴ノ瀬普請等の出夫の儀に付甲佐吉之允書付の事(年覚)。御算用所を止め、御勘定所支配と定む(「大覚」には10月とする)(大覚・旧章)。
10. 一 鶴崎洪水にて損高荒積の書付岡田庄大夫へ達(年覚)。田浦手永大河内村銅山堀方に付鉄道具拝借願(年覚)。

閏11. 一 江戸定詰、上方定詰の物成支配の儀各別役人を命ぜられていたが本月差止られ惣銀所打込になる(度譜)。合志郡一領一疋磯部儀兵衛列大津、瀬田井手筋分支配役に付酒本手(酒造札)願(年覚)。

12. 2 御家督の御祝として御老中御招請(本・度譜は12、12)。25 八代密柑を例の方々へ進ぜらる(実紀)。

是年 御赦免開新地は願により知行高に直し下さるを爾後停止(本)。新地開発を禁止(肥)。御参勤御用は支に付、春受夏請米の内引越の儀達の事(年覚)。御算用所差止につき、今後御免帳は御勘定所に差出し、算用帳、皆済目録は差出に及ばず(大覚)。著書目録 旧説拾遺 雑書 井沢蟠龍

元文3 (1738) 戊午(吉宗) 宗孝

1. 一 帰国御用銀として才覚錢仰付らる(年覚)。
2. 11 宗孝妹岑、織田山城守へ縁組願済(本・度譜)。
3. 16 御作事御用材木今後年2700~2800本の見積とし、山出、川下賃を定む、杣手間料米は是迄通り、杣の者へ杣札を渡す、ほかに杣方仕法出さる(林制56)。
5. 3 宗孝江戸発、6月11日熊本着(本)。江戸使者益田弥一右衛門(本)。
6. 一 従来小国山奉行、惣庄屋兼帯の処、小国手永に馬場手永併合により、山奉行両人仰付られ度し(年覚)。
7. 一 御紋付の品々古着等売買を禁ず(式稿95)。人別帳差出年につき、5月現在調査し幕府に報告、惣人数53万6986人、長岡帯刀上方領 157人(実紀・家譜続)。
8. 5 6月藩主に随い下着した奉行野々口又之丞免職(本)。6 宇野理兵衛奉行に任ず(本)。9 米田壱岐是福、部屋住のまま家老に任ず(家譜続)。是月 在中の衣服制度出さる(諸帳2)。郡間勘定方へ吟味横目詰方仰付らる(合)。本城東竹丸塩蔵大破に付壊す(本)。宇佐八幡宮へ祈祷の依頼の時在中からの奉納銀は古銀に振替致したしとのこと(年覚)。
9. 一 奉行元田尉大夫番頭格となる(本)。江戸御作事 手当として 諸地方より反に2升、野開1升上納のこと(合)。御婚礼用意として諸地方反に少々宛百姓並びに出作人の作徳の内より祝差上げよう沙汰(触)。

11. 15 宗孝初めて八代に赴き、妙見神社参、19日帰城(家譜続)。是月 御紋付屋

元文 5 (1740)

根瓦禁止 (式稿96)。諸御役所 1 ヶ月限御米銀入用御覧につき、入念に致すよう水夫、小頭へ達 (年覚)。

12. 21 八代密柑を献ず (実紀)。

是年 寺社古跡の再興容易に許されず (郡方)。郡間勘定方目付差免られ吟味役の内より替る替る 1 人宛詰方仰付らる (大覚・度譜)。郡方勘定目附差止め吟味役詰 (旧章)。

元文 4 (1739) 己未 (吉宗) 宗孝

1. — 佐敷杣島獵師、子鯨打殺 (本)。
 2. 3 清水縫殿勝著家老に任ず (本)。22 長岡丹波・米田壱岐・御前に召出され御妹お悦様と壱岐守の縁組仰付 (本・度譜)。
 3. 3 宗孝熊本発、4 月 9 日江戸着 (本)。14 儒臣井上仁左衛門有基 (号雪溪) 歿、年 56 (先哲)。是月 近年相続き才覚銭仰付られ夫々御用相済に付、此上は御勝手向立直に心を用いる様達 (年覚)。
 4. 19 増上寺火の御番 (度譜)。宗孝妹、豊が織田山城守と婚礼 (本)。
 5. 17 享保 3 年以来押籠られし長岡忠季入道愚陰歿す、年 63 (本)。
 6. 17 21 日まで川尻方面大洪水、男女大小 79 人 4 日間西蓮寺にて養う (川尻史 291)。
 7. — 芝田町 8 丁目御屋敷不用に付、同町町人山田伝蔵へ譲渡 (本)。南関町市立について稜々問合の事 (年覚)。飽田、託麻、上下益城洪水、当夏納小麦取立なし (覚)。
 9. — 在々所々の寺跡再興容易に認め難きを令す (寺例)。御国中寺社本堂神殿の間敷差出さしむ (触)。
 11. — 寺社御改めあり (本・郷歴)。
 12. 25 八代密柑を献ず (実紀)。
- 是年 白金御賄所差止、御台所方受持に成 (度譜)。大坂御屋敷の内 宇土御蔵へ借置かれし鉄炮州 (新田支藩) 御米は本藩の御蔵へ頼み出し入れていたが、いつ頃からか堂嶋より求む (度譜)。子年幕府より借用金 2 万両皆済 (本)。飽田郡奥古閑村にて新地 20 町築造 (肥)。

元文 5 (1740) 庚申 (吉宗) 宗孝

1. — 御帰国御入目銀差支に付、春夏受米引越上納の事 (年覚)。
 2. 7 芝田町二丁目御屋敷不用に付中橋町人源蔵に譲渡 (本)。是月 奉行元田尉大夫御勝手方御用として江戸へ上る (本)。甲佐手永山潮洪水のため諸割賦物差除かれる様願出るも、残手永と申談するよう達 (覚)。
 3. 23 宗孝妹、八代姫、松平隠岐守と縁組 (本・度譜)。是月 目黒行人坂上の永嶺町抱屋敷に囲家を作る (本)。甲佐手永洪水に付、請裁荒畝分去 1 ヶ年代米上納御免のこと (覚)。
 4. 23 宗孝江戸発、5・23 熊本着 (本)。是月 本城新堀御門外出小屋、定小屋に成る (本)。矢部手永猿渡村、三ヶ村、葛原村、山潮洪水にて田畑永荒になるに付き、同手永寺川口村、藤木村、長田村の内に村移願出、許さる (覚・合)。
 6. — 宇野理兵衛奉行を免じ、上町理右衛門、吉弘貞之丞を奉行に任ず (本)。中村兵助上坐 (本)。白金御買物所元文 5 年より御勘定所兼帯 (本)。
- 閏 7. 9 本城外曲輪高麗門脇左右の堀、木下伊織屋敷脇の堀浚え方幕府より認許

(本・家譜続)。

9. 2 川尻方面大暴風雨、西蓮寺前の長屋倒れ、御堂の瓦ふきはぐ、其外被害あり(肥)。

12. 1 八代密柑献上(実紀)。

是年 所々洪水、別して益城郡甚しく収納殆んど皆無(肥)。三洩(山名)志津摩家老脇となる(家譜続)。上益城郡御山支配役木原文次、紀州より杉苗を移植(熊史5—林制沿稿105)。

寛保 1 (2・27改元) (1741) 辛酉 (吉宗) 宗孝

2. 11 津与姫、小笠原大郎へ縁組(度譜)。是月 上村理右衛門着任(本)。
 3. 3 宗孝熊本発、4・8江戸着、吉弘貞之允御供(本)。
 4. — 奉行元田尉大夫江戸に於て御用人に転じ、野田弥三右衛門奉行に任ず(本)。長崎御国商売荷改役彼地町人三木屋伝兵衛跡を御屋代加藤源左衛門へ仰付らる(触)。鉄炮商売猥に無之様達(諸拔)。
 5. — 奉行上羽四郎大夫江戸より帰着(本)。
 7. 8 大坂豊前座御蔵屋敷焼失、類焼なく蔵も別状なし(肥)。
 8. 5 御用材木は杣方差紙御役所肩書加印を以て伐採(林制63)。
 9. — 在宅願に付て近年連年手取少く掟なき分は御免ならも猥には許されず、親以来在宅の衆は年限を定め願うこと(触)。
 11. 18 紀州様結納、同22日友姫様白金輿入、御祝御能(度譜、家譜)。
 12. 1 宗孝新夫人、紅白縮緬2種1荷を將軍に奉り、婚姻を謝す(実紀)。是月 御婚禮祝儀として城下町16掛りへ樽1荷1種ずつ下賜、別当は奉行所へ、丁頭は町奉行宅へお礼言上(式稿6)。19 八代密柑を献上(実紀)。是月 下益城築地村積所破損に付抱夫の事(年覚)。

是年 益城地方洪水(肥)。玉名郡部田見村に陣開新地なる(肥)。八代氷川の橋度々破損し船渡とす(肥)。強風吹く(肥)。

寛保 2 (1742) 壬戌 (吉宗) 宗孝

1. — 奉行上村理右衛門出府(本)。
 2. — 藤崎社領質地の儀に付願(年覚)。御勝手向御難波に付、春夏受御年貢引越等の儀達(年覚)。婚礼の節礫打其他壁・建具破損行為禁止(式稿66)。
 3. 7 新田支藩主備後守利恭隠居、養子右近利寛相続(実紀)。16 山名志津摩藩主の命により本姓三洩に復す(肥)。是月 新座大夫左陣、祇園宮舞台にて勧進能を催す(肥)。
 4. 1 松下讃岐守(度譜に隠岐守とす)頼恭方へ八代姫輿入(本・度譜)。27 宗孝江戸発、6・1熊本着、吉弘貞之允御供(本・肥)。是月 神護寺にて国家安全、四民偕楽の祈祷、阿蘇催合にて大般若經転読(度譜)。益城郡上早川清吉杉木1万本献上(林制65)。
 5. — 国内杢物屋保護のため他国産柄杓・張抜甲輸入禁止(式稿52)。
 7. 18 宣紀の姉成姫逝去(本)。是月 山鹿郡中村手永熱病流行(肥)。他国商人のふり売り禁止、絹物細物荒物の旅商人は蔚山町問屋に着ける事(触)。
 8. 21 重賢の実母昌智院卒去(本)(度譜は27日とす)。長崎方面強風、御番船1艘破損(本・家譜続)。22 八代城外曲輪堀浚願出の処(7月13日)幕府許可(家譜続)。27 悦様米田壱岐と婚礼相整(本)。30 山崎元田尉大夫方より出火

延享元 (1744)

(肥)。是月 生田金吾 (のち又助) 奉行に任ず (本)。御家中先祖附一組切帳として差出すべし (触・本)。

10. 6 宗孝ら関東水害地の河渠堤防の修築手伝を命ぜらる、本藩支出12万7230兩在中に2400貫割賦、市在に寸志上納を認め家中の手取を減ず (本・実紀・家譜続)。16 奉行中村兵助死去 (本)。是月 池田手永養水井手宮寺村蓮台寺村にて堀替 (合)。
11. 一 関東川々普請につき34年前の上野仏殿手伝同様に熊本町中へ1万兩上納仰付らる (式稿70)。
12. 18 細川右近利寛 (新田藩) 采女正と称す (実紀)。19 八代密柑を献ず (実紀)。是年 奉行陳又兵衛を江戸詰として出府 (本)。利根川手伝、入目12万7230兩 (旧章)。江戸 郡方算用所切米取所物書も差越されるに付、惣銀所物書も差越に定む (度譜)。著書目録 北里旧史系図 史伝 北里文太夫。

寛保3 (1743) 癸亥 (吉宗) 宗孝

1. 一 昨年来鶴崎にて大坂豊後屋五兵衛を招いて造営中の波奈之丸竣工 (本・家譜続)。
2. 20 自今以後、五節句の出仕は物頭以上とし、以下は出仕御免 (肥)。
3. 3 宗孝熊本発、4月8日江戸着 (本・度譜)。
4. 3 照姫、伊藤大和守と縁組 (本・度譜)。29 昨年来工事中の関東諸川工事終了、翌日幕府に届出 (家譜続・肥)。是月 藩主・二弟民部・清記に桜の定紋を用いしめ、又清記に長岡氏を称せしむ (家譜・本)。
- 閏4. 15 関東諸川助役を賞して、藩主に時服15、家臣らにも賞あり (実紀・家譜続・肥)。17 家老沢村衛士重行 (のち友常) 病歿、年54 (本・家譜続)。27 長岡清記病氣につき江戸発、6月7日熊本着簡口屋敷に入る (家譜続・本)。
5. 21 本城諸所修築について幕府より許可あり (家譜続)。
6. 2 竹之丸松木に落雷 (肥)。是月 上村理右衛門御番頭次座 (本)。甲佐御築鮎の記録のこと (年覚)。
8. 一 御家中渡方差支に付、徳懸相済み次第蔵入りいたすよう (年覚)。
9. 一 飽田、託麻、上下益城、御年貢米熊本御蔵納之村々の事 (合)。
- 是 秋 本藩財政上困難多大なるにつき、3ケ年間諸事省略を命じ、家中手取扶持方許りとす。このため陳又兵衛野田弥三右衛門専任奉行となり、御家老脇三洲志津摩も特に奉行所詰命ぜられ、御勝手方一同日勤となる (肥・本)。
11. 一 御難波に付き、当年より3ケ年家中扶持方迄仰付られし処、強風につき、才覚銭等元利据置かる (年覚)。
12. 5～6 八代密柑を献ず (実紀)。27 元家老木村半平豊持歿す。是月 差止おかれた惣庄屋の帯刀御免 (本)。
- 是 年 奉行所郡方勘定所へ藩主特に臨む (度譜)。預山は家中一統召上げ (林制227)。

延享1 (2. 2改元) (1744) 甲子 (吉宗) 宗孝

1. 一 御家中奉公人人配について沙汰 (3000石以上 1000石に1人半、1100～2900石3人、1000石～500石2人、450石以下1人宛相渡申答 (触)。高森手代権之允楮床運上銀取立方出精を賞さる (年覚)。
2. 8 大和守興里 (源次郎) 勅使御馳走役命ぜらる (実紀・宇土史 104)。是月

諸郡去春明高片付其外下方取救の米高郡奉行より渡し下さる (合)。

3. 29 儒臣薨久左衛門弘篤 (号慎庵) 歿す。年56 (肥)。是月 近年不作につき長国寺において1000部執行仰付らる (年覚)。
 4. 27 宗孝江戸発、6・1 熊本着、使者平井貞之允 (本)。是月 大御番所常に張付の幕被止 (本)。
 5. 1 家老有吉大蔵立好歿、年49 (本)。 28 大膳立邑相続し家老となる (本)。
 6. 15 長岡図書興章歿す。年69 (本・家譜続)。是月 藤崎社領、吉永主馬分も質地同前惣庄屋支配仰付らる (年覚)。 藤崎宮社領質地に成る分、池田久右衛門支配仰付られ農具代等借下る (年覚)。
 7. 9 図書興章のあと図書興行相続す (肥)。是月 藩主在国の折、もと諸役所夕詰、夜詰あるを正徳3年夜詰を廃し、この時夕詰を廃す、8月には江戸藩邸も夜詰を廃し、御買物所を止む (本・肥)。御勝手向差支御借物の事について沙汰あり (触) (御借物高元利26万4050両、此米25万3490石余、百匁1石6斗にメ、御物成に直免4ツにメ高58万6000石余に当る)。江戸扶持方数年滞っていたが、此迄12年之間に改め渡下さる (本)。
 8. 5 辰上刻地震 (本)。 10 強風 (肥)。 21 藩主、菊池築場へ行く (肥)。 29 京町不残焼失 (肥)。是月 荒木惣兵衛列、樋方御用受込に付達 (年覚)。
 9. 一 奉行生田又助小姓組頭に転じ、真下源太兵衛奉行新任 (本)。御参勤御用等差支に付、御軍用銀より振替立用 (年覚)。去秋風損に付実入悪敷色米を以御蔵入願の処、過半能米相調、不都合に付、御徳懸等入念にせよとの達 (年覚)。
 10. 一 益城郡砥用手永に疫病流行 (肥)。町人共参宮送迎宴、新築祝、転居祝、を禁ず (式稿65)。藤崎社領池田久右衛門受込仰付られた分徳懸前の切手受取方等について伺 (年覚)。
 11. 9 本城石垣修築並に堀浚之幕府の認許あり (家譜続)。是月 奉行吉弘貞之允病死、大槻次郎兵衛奉行に任ず (本)。来年御参勤に付、米銀才覚について達 (年覚)。
 12. 2 忠興百年忌あり (家譜続)。 11 八代密柑を献ず (実紀)。是月 諸郡影踏日限について達 (年覚)。惣庄屋共のうち相對の才覚米銀等下方割賦等無之様 (年覚)。松雲院門前借屋建方御免 (本)。当暮上ヶ高片付方について達し (覚)。
- 是 年 樋方受込役人を置く (本・旧章)。この年まで12年間に川尻御手船7艘出来 (肥)。江戸扶持方数年滞っていたが、此迄12年の間に改り渡し下さる (度譜)。御國中銀札遺始まる (郷歴)。著書目録 程易夜話 儒家 平野深淵。

延享2 (1745) 乙丑 (吉宗・家重) 宗孝

1. 28 お幾様 (宣紀の子) 細川大和守興里と婚禮整う (本・度譜)。是月 田浦手永一領老疋塚弥五右衛門列抱畑の樋の実寸志差出 (年覚)。
2. 12 青山千駄ヶ谷より出火し、白金邸類焼、この新築のため、郡方集米銀の内より3,000両差出 (本・肥)。 13 宗孝邸火災により奉書もて問せらる (実紀)。 15 江戸城にて万次郎誕生、後に徳川宮内卿志水殿となる (本)。宣紀の病氣見舞に吉宗より心遣あり (実紀)。宣紀、三斎の甲冑を吉宗の御覧に供す (実紀)。是月 御参勤御用差支に付郡方支配米銀より振替 (年覚)。廻江手永田尻在村々植付木下運上御免 (年覚)。荒尾手永清源寺海辺にて有吉大膳開御

延享3 (1746)

召上櫛床仰付らる (年覚)。 矢部手永村々難渋に付、塩拝領願いの事 (年覚)。 在中難渋に付、郡方米銀等より、借渡救仰付らる (年覚)。 木葉銅山堀方積之事 (年覚)。御米無多事扶持方渡等差支に付、先納の儀勘定方より達の事 (年覚)。

3. 一 中富手永広町の者共、塩拝借願の事 (年覚)。 木葉銅山堀方に付、費地の事 (年覚)。 玉名郡沖の洲村塩焼の拝借分、年賦願の事 (年覚)。 高10石に付、櫛苗3本植付けることを通達 (城南 452)。
4. 一 三洲志津摩家老に任ず (本)。 今度御参勤に付、南関筋御通行に付90貫目出銀仰付られ、人馬はすべて賃銀渡下さる (年覚)。 御難渋に付、先納仰付らる (年覚)。
5. 一 参勤交代路として、小倉路とる故家中一統へ、課銀総高90貫目 (肥)。 御勝手支につき、御年貢の内先納仰付らる (年覚)。
6. 14 洪水 (年)。 18 宗孝熊本発、小倉路大里より乗船、7月2日大坂着、7月19日江戸普、竜口邸に入る (本)。 是月 下国に付、鶴崎に於て、他所馬雇方并御召仕る人馬員数の事 (年覚)。 大積目録出来年月の事 (合)。
7. 3 玉名郡内田手永薦田船継所について達 (藩法 635)。 是月 坂下・内田・南関・廻江・種山・高田・野津の各手永に一領一疋1人を櫛見締役人とする (城南 452)。
8. 13 是夜長崎強風、番船1艘破損、4名溺死 (家譜続)。 是月 櫛仕立方につき、以下たびたび通達 (城南 453)。
9. 25 將軍吉宗隠居、家重継ぐ (実紀・肥)。 是月 御登せ米運賃高値に付、御仕法替あり (年覚)。 従来諸社神位は京都吉田家にて、取扱の所、向後勅裁式による旨通知あり (肥)。
10. 2 家重継統賀第2日目に、宗孝大刀を献ず (実紀)。 5 宇土支藩主大和守興里卒す。年24 (実紀・家譜続・宇土史 104)。 25 大和守興里病革らんの前に、実弟大之亟を復家させ、急養子として、出府を促すにつき宇土出立。11月24日江戸久保町上屋敷に着く (実紀・宇土史 104・家譜続)。 是月 魚値段高値に付、熊本内問屋を15軒に限り、其他差上、又浦々の問屋外商売禁止 (肥)。
11. 11 細川民部、主馬と改む (家譜)。 12 家重將軍宣下賀第2日目宗孝拝賀 (実紀)。 23 同賀の返礼に、宗孝らに雁を給う (実紀)。
12. 13 宇土支藩主大之亟、興周と改む (宇土史 104)。
- 閏12. 1 八代密柑を献ず (実紀)。 16 興周、宗孝と同道登城、興里の相続仰付られ、従五位に叙し、翌17日細川興周と改め、豊後守と称す (宇土史 104・実紀・家譜続)。

著書目録 稲津弥右衛門奉願覚 法制 稲津弥右衛門

延享3年 (1746) 丙寅 (家重) 宗孝

1. 2 宗孝ら家重に拝賀 (実紀)。 是月 上羽四郎大夫、映心院様江戸御参向お供小姓頭代、上村理右衛門御番頭次座 (本)。 映心院、喜和姫、三千姫出府 (度譜)。
2. 19~24 銀札札座にて引替、一色銀札遣仰付らる (郷歴・本・官職制度考)。 是月 郡間本方御用朱墨冊の事 (合)。
3. 中旬 銀札割下げとなり、4月末には4~5割下げ (郷歴)。
4. 27 宗孝江戸発、6・1 熊本着 (本・家譜続)。

5. 6 熊本にて、銀札騒動起る。15日銀札で質物は渡さぬと、触廻る (郷歴)。
- 20 豊姫卒去、織田山城守内室、年24 (本・度譜)。
6. 16 家老長岡丹波隠居し、耕雲と改め、米田杢岐相続し、長岡の称を許され、名を監物と改む (本)。是月 銀札を停止す (城南 422・肥・郷歴)。奉行野田三右衛門小姓頭へ転ず (本)。
7. 6 木村宇太夫奉行に任ず (本)。12 隈府へ市立つ (米原庄屋日記一熊史17)。
- 16 九州巡見使、筑後三池より岩本口を経て入国、藩主新町沢屋吉左衛門方にて面接、8月20日再入国、本藩の巡見使御用係は陣又兵衛 (実紀・本・家譜続)。
- 是月 藩主領内出在の節、道筋に手桶1つ宛置いたが、今後町家各戸左右に1つ宛かいけ添えおくこと (式稿 103)。
8. 19 長岡内膳弟少進季規家老に列す (本・家譜続)。
10. 12 宗孝ら封地の判物を授かる (実紀・本・度譜)。
12. 1 八代密柑献上 (実紀)。

是年 紙楮方を廢し、櫛方役所とす (旧章・本)。銀札再び通用。夏頃、また中延享4 (1747) 丁卯 (家重) 宗孝・重賢

1. 一 大慈寺開山寒巖和尚再来年 450年忌に付、諸国の一派 600ヶ寺配下の寺院 100寺集会に付、5ヶ年間、托鉢御免の事 (触)。是月 御勝手支に付、才覚銀上納仰付らる (年覚)。
3. 4 宗孝熊本発、4・8 江戸着、家老長岡監物・奉行真下源太兵衛御供 (本)。阿蘇宮へ、20石加増御寄附 (年覚)。近年不作に付、御祈祷仰付らる (年覚)。
4. 6 采女正利寛、朝鮮使節往還時藤沢館伴を命ぜらる (実紀)。12 本城石垣崩れ、孕む所3ヶ所修覆、堀浚え、本日幕府認許 (本・家譜続)。是月 上野火の御番 (度譜)。
6. 一 白金御作事料として、懸米上納仰付らる (年覚)。
7. 一 在中才覚銀当幕利込迄仰付らる (年覚)。白金御作事料として、二ノ口米召上らるについて、郡方存寄の事 (年覚)。
8. 15 宗孝、江戸城内で、板倉修理勝該に切られ、翌日卒去、年32 (家譜続・実紀・家譜)。20 宗孝卒去、銀50枚を給う (実紀) (家譜は8・16卒とす)。23 板倉勝該に死を給う (実紀・本)。
10. 4 細川宗孝の遺領を主馬につがしむ (実紀・肥・触)。15 主馬襲封を謝し、備前盛光の刀、銀100枚、巻物50、馬2疋を献ず (実紀・肥)。
11. 28 主馬、従四位下に叙し、越中守重賢と称す (実紀・肥)。是月 才覚銀利払、仰付られる (年覚)。
12. 25 八代密柑献上 (実紀)。是月 御国お花畑において、祝囃子 (度譜)。白金作事料として、二ノ口米並びに、本方・新地・家中赦免開に五ヶ年間、反懸米を徴す (年覚・土管・肥)。

是年 家老衆奉行中御用承った稜々の取分、此年記録にあり (度譜)。

寛延元 (7・12改元) (1748) 戊辰 (家重) 重賢

1. 21 藩主、家老清水縫殿を下国せしめ、是日家中に対し、倫理を正し文武を励むべき事を諭旨す (家譜続)。28 上野火の御番 (本)。29 長岡丹波入道耕雲歿す。年50 (本)。
2. 25 久我大納言通兄女由布君と重賢縁組 (本)。26 御部屋様ご逝去 (藩法

寛延 2 (1749)

569)。 是月 八代氷川塘御普請に付抱夫20人抱方の事(年覚)。 百姓共衣服、吉凶札の諸式、先規の趣沙汰(肥)。 町人深編笠を着、尺八を吹徘徊するを禁ず(式稿 107)。

3. 7 東本願寺を朝鮮使節宿舎にあてられるにより、重賢防火を命ぜらる(実紀)。 是月 小国明礬山、豊後國小浦儀助に12年間請山として引渡(肥・年覚)。
4. 15 重賢初めて就封の暇あり、4・18江戸発、5・27入国、奉行真下源太兵衛御供(実紀・本)。
5. 22 久我様、遊ぶ様御縁組(藩法 569)。 是月 御勝手支に付、御年貢米の内先納仰付らる(年覚)。
6. 1 重賢熊本城登城、翌2日再び登城、帰途奉行所見分(本)。 4 御番頭以上召見、6・7日家中一同御目見(本)。 8 重賢妙解寺及泰勝寺参詣(家譜続)。 22 勝手方の取扱事務は一時御次一手に纏めていたのを、再び奉行所と御次とで分離取扱う(年覚・重賢伝)。 26 霊雲院(宣紀)17回忌(藩法 569)。 算用奉行復旧、兩人となる(本)。 是月 朝鮮人來朝此路次新居より淀迄馬26疋差出さる(本)。
7. 4 真下源太兵衛奉行御免(本)。 15 守随彦太郎稱改の達あり(藩法 569)。 是月 宮川庄兵衛、井口庄左衛門奉行新任(本)。 小姓頭生田又助辞任(先祖)。
8. 5 隆徳院(宗孝)一回忌取越法会(藩法 569)。 是月 例年7月の宗門触状判形の儀、在宅の面々は当年より8月朔日～29日迄の内役所に出て判形有之様沙汰(触)。 藤崎宮祭礼馬の取扱いについて達(藩法 635)。
9. 2 数十年来の大風雨にて倒家、倒木多し、俗に岩起という(本・家譜続)。 10 儒臣熊谷伝兵衛直平(号竹堂)歿す。年72(先哲)。 20 火事場に馬の乗入れを禁ず(藩法 663)。
11. 23 保寿院(忠利の室)百年御忌(藩法 569)。 有吉大膳立貞入道大円歿す。年70(御系図)。 八代密柑を献ず(実紀)。 是月 遺領相続について諸事慎方を令す(藩法 569)。

閏11. 一 靈感院(重賢)相続の節の書(節約と努力)(藩法 569)。

12. 13 藩主直書を以て、当時の宿弊5条を上げ匡正を命ず(重賢伝・家譜続)。 25 真源院(光尚)百回忌(藩法 569)。 是月 諸出方、家中扶持米の手当差支え、高10石に付8匁宛先納、追て利足を加え年貢に加えられる(肥)。 算用所、勘定所支配となりし処、今度算用奉行永良儀右衛門、仁保吉右衛門に仰付けらる(触・旧章)。 当年分種子粃の利米を御道中持せ金の御手当仰付らる様郡方より達(年覚)。

是 年 御吟味役へ御銀所詰仰付らる(諸抜)。 春冬両度奉行上羽四郎大夫大坂に赴く(本)。 大風にて本藩損毛高23万石、損米6万7500石、免3つ7分3厘(肥)。 著書目録 平野権九郎封書 法制 平野深淵。 雜聞書 記録 朝山斎之助。

寛延 2 (1749) 己巳(家重)重賢

1. 一 参勤の節、供の面々鶴崎筋人馬渡の事(年覚)。
2. 27 重賢熊本発、小倉路、4・5江戸着(本)。 是月 藩主参勤に先立ち奉行中に、為政の心得18条、勝手方に心得3条を達す(重賢伝・家譜続)。 御勝手方受込御用人田中小左衛門・堀平太左衛門に、郡方御用を命ず(郡方)。 参勤

御用銀不足に付 100貫目郡方より振替立用（年覚）。御勝手向につき、御書付渡さる（年覚）。

3. 3 八代城代長岡帯刀是日江戸に出、4・28登城、將軍に謁す、6・17熊本着（本・家譜続）。24 油物増運上御免（藩法 569）。29 川尻町人加納角次郎天台宗延教寺創建（川尻史 494）。是月 才覚銀調達等之事（年覚）。
4. 1 切米取役替祝不申様の達（藩法 569）。16 上野火の御番（度譜）。26 東叡山火の御番（本）。是月 城内北御門脇に、櫓方役所を建つ（旧章・本）。在中見懸銀造酒屋先納、追々日延差出日限通り相納不申由に付、猶達の事（年合）。
5. 3 熊本御作事所長屋雷火（本・家譜続）。是月 2月～9月迄、月割を以て納める先納銀利合は、願の趣有之利分は、付下さず、手永も1歩半の利分付下される（年合）。江戸表御差支に付郡方銀より、振替（年覚）。
6. 3 （元新田支藩主）細川備後守利恭卒す。年49（本・藩法 569）。是月 旅商人の在中直売買を禁ず（肥）。
7. 12 刑部卿簾中死去（藩法 570）。17 秀林院忠興室（がらしや）150回忌（藩法 570）。21 恵雲院様50回忌（藩法 570）。30 本寿院（宣紀の妹、お初）死去（藩法 570・本）。
8. 5 隆徳院（宗孝）3回忌（藩法 570）。是月 八代町平四郎塩硝拵方に付、床下の土取方の事（年覚）。在中諸出米銀等近年増方に付、減方達（年覚）。儉約に付、5ヶ年の間、家中音信贈答せぬよう（覚）。
9. 11 領内の紙売出禁止（藩法 570）。是月 御国中浦船造立の節運上銀を徴するよう（年覚）。御勝手方衆へ差引書、5日々々を限り達（年覚）。
11. 11 手取米について達（藩法 570）。25 家督の祝儀に、老中から招請さる（本・度譜）。是月 御家督お祝等につき、寸志奨励（年覚）。
12. 1 八代密柑献上（実紀）。

秋 矢部に始めて水車造る（郷歴）。是年 虫入等にて、損毛高22万8100石、免3つ7分3朱9厘（年系略記綱領）。知行取で、在宅の者、内作年貢取立は、叶い難く、地子2石5斗迄の取立は許す（藩法 569）。無願内々の縁組のちに願出は、叶わず（藩法 569）。母出奔の子は、家督成り難し、但し継母は不苦（藩法 570）。灰吹銀・潰銀・銀座のほか売出禁止（藩法 570）。諸御郡にて内々合葉いたし商売すること差留らる（諸抜）。

寛延 3 (1750) 庚午（家重）重賢

1. 12 穀物増運上、奉公人給銀風俗について達（藩法 570）。23 油物増運上、切金疵金通用を認め、百姓訴訟の禁（藩法 570）。24 由婦君（重賢の室）京都御発駕、御供堀平太左衛門（本）。
2. 13 重賢去る寛延元年2月久成右大臣息女と婚約の処、是日江戸着（本・細譜）。27 重賢竜口邸にて由婦姫と婚姻（本・家譜）。
3. 5 大塚丹右衛門久成（号字斎、退野）歿す（先哲）。15 油物増運上御免（藩法 570）。
4. 4 由婦君御前様と唱う（藩法 570）。20 大猷院（將軍家光）100回忌（本・藩法 570）。23 宇土支藩主豊前守興文初めて就封の暇あり（家譜続）。27 照姫（後三千姫・重賢妹）安藤対馬守信伊様へ御輿入（本・度譜）。28 藩主

宝暦元 (1751)

江戸発、5・29熊本着 (本)。

6. 3 藩主登城、4日両寺参詣、6日藤崎宮六所宮参詣 (家譜続)。
 7. 一 郡奉行、惣庄屋以下に郡方の心得について達す (諸帳2・諸拔)。
 8. 23 藩主、家老・奉行・郡奉行に対し、郡政匡正を諭示す (家譜続・重賢伝)。
 9. 3 家老小笠原備前長和隠居す (本)。 15 奉行木村宇太夫20挺頭に転じ、村山伝左衛門奉行に任ず (本)。 17 増運上御免の達 (藩法 570)。 23 勝手向差支について達、風俗匡正達 (藩法 570)。 是月 新米蔵納前内々付出売米あり、吟味す (式稿93)。 家来扶持米は、在中より各屋敷へ納め、町人は屋敷より買取ること、在中よりの直接取引を禁ず (式稿94)。
 10. 一 白杵領市村養水井手、本藩鶴崎門前村堀通す (肥)。 御勝手差支につき、何事によらず省減すべき旨達 (肥)。
 11. 22 米穀、油物増運上達→12・18御免 (藩法 570)。 是月 傍示内の諸獵取扱につき達 (藩法 570)。 薩州様本陣2丁目沢屋、魚間屋免許され松合より運搬のところ願により、宇土に下間屋設置 (式稿73)。 野開の内荒畝の外は、是迄の運上に5割増仰付らる (合)。 馬口労札の数をふやさる (年覚)。
 12. 1 藩主番頭平井空之丞を招き、組々の事、家士家計因窮の状況、風俗等につき質問あり、依りて各組頭より、心得方につき、組下に指示す (家譜続)。 19 八代密柑を献ず (実紀)。 是月 給知百姓の公事出入に、給人構不申様達 (藩法 635・触)。 年始門飾り子供らいたずらせぬよう達 (式稿91)。 野開運上銀割増仰付られたが、それにつき難渋願のこと (年覚)。
- 是 年 旱損・虫入等にて、損毛高27万9000石、免3つ4分5朱9厘 (肥)。 静證院 (宗孝の室) 白金御引越 (度譜)。 郡奉行、容易に所替仰付まじき儀について書付 (諸帳2・諸拔)。 在中、衣服御制度の達あり (諸帳2)。 組付中小姓の内より、目付役を設く。隔日詰 (旧章)。

宝暦1 (11. 27改元) (1751) 辛未 (家重) 重賢

1. 7 御勝手向御差支に付、当春夏請米の内2万5000石来る20日限相納る様達 (年覚)。 是月 奉行上羽四郎大夫退任、翌月下河辺十兵衛奉行新任 (本)。 奉行・用人・目付・勝手方掛・郡頭・勘定所を監物殿より、家老間へ呼被申、勝手支に付て、何れも存寄有之れば、屹と申上げる様 (度譜)。 御年貢銭納歩銭の儀に付、僉儀のこと (年覚)。 武藤助左衛門を日隈左大夫跡の、郡奉行に任ず (覚)。 高橋治部右衛門を郡頭に任じ、平野太郎四郎を高橋跡の郡奉行に任ず (覚)。 蔵納・給知一紙高書付、正月19日勘定所へ遣す (覚)。 小林半大夫・竹原清大夫の役儀を免じ、沢村才喜・藪丹右衛門を用人に任ず (覚)。 寺社領の高書付の事 (覚)。 津口出入運上銀去年10月3日より、地旅之船荷揚ともに、1貫目に付、50目の割合を以て、増取立仰せ付らる (年合)。
2. 27 藩主熊本発、4・7江戸着 (肥・本)。 是月 御穿鑿上役 (のち穿鑿頭) を設けて、断罪の公正を期す。平野権九郎・村上市右衛門之に任ず (銀遺・本)。 生田又助番頭となる (先祖附)。 上方・江戸・長崎よりの、荷物取扱について達 (藩法 570)。 御勝手方役人の勤方、在中零落につき下方難儀を救うため力を尽すべく諭示あり (諸帳5)。 下方難儀につき家中面・人馬相対雇差止らる (年合)。
3. 一 御勝手差支、在中惣庄屋、一領一疋、其外勝手宜しき者共に、見懸才覚銭

を課す。秋に至り利分を加え、年貢に代う(肥)。正院手永惣庄屋に阿蘇谷一領一疋田代武兵衛仰付られた処、依頼役御免、直に元の通り一領一疋に仰付らる(覚)。大坂登米御手当調わず、在中見懸才覚銀仰付らる(年覚)。町在ほか家中寺社支配の浪人に至迄、勝手宜者へ見懸才覚銀仰付られ、当秋は1ヶ月の上元利返下さる(年覚)。見懸銀調達出来兼ねに付、銀銭は1ヶ月に3歩、米穀は1ヶ月3歩半宛宛仰付られ、郡代中より達があったが、当秋に至利分宛仰付らる(年合)。下益城郡海辺川筋石手御普請御用の勘定所支配の石船7艘のうち、4艘減ぜらる(年合)。

4. 16 上野の火の御番(本・度譜)。是月 御年貢小麦の内、1240石郡方へ相納るようと玉名郡に御達(覚)。御発駕前御省略の儀、御意有之趣に付、御奉行中委き御書付の事(覚)。水前寺御茶屋抱夫の事(年覚)。
 5. 8 知行取在宅屋敷地子取立となる(藩法 571)。粟・大麦・小麦増運上仰付らる(藩法 571)。是月 浄るり語り他国者往来手形所持といへども、数日滞在禁止(式稿17)。在中へ仰付られし見懸銀急に、相調える様、尤も外に先納等は、仰付られないとの達(年覚)。室津御本陣名村左大夫病死、上知高百石俸名村左大夫へ拝領につき、引渡差紙の事(覚)。知行取在宅居屋敷年貢高 100石に付、2石5升、2000石以上は3石5斗宛、合力切米取も地子内代年貢は10石に1石宛、其以下は1石の宛取立のこと(年合・触)。
 6. 2 大御所様死去の件(藩法 571)。20 加々美又太郎貞一(号鶴灘)歿す。年48(先哲)。是月 奉行井口庄左衛門、勝手方御用にて、江戸・京都・大坂へ出張(本)。抜荷の儀につき達(藩法 571)。津口下改役(河尻・高瀬・高橋・小島)の給銀及び、造用銀支給の事(諸帳5)。津口・陸口・穀物抜荷の事(藩法 571・諸帳5)。南郷布田手永のうち、垂玉・湯谷・北里之内黒川、この3ヶ所にて、明礬仕立試の結果、垂玉・黒川にて仕立仰付らる(年合)。郡浦一領一疋佐田才助を、田代武兵衛跡山本郡惣庄屋とし、知行30石を給す(覚)。錢塘手永走渦村・横手手永白石村の井樋仕変え灰石宇土郡網津村より、取寄せる石船の願の事(年覚)。惣庄屋、池田・手永・本庄・田迎・松山・高田・河原・内牧・知行割相済所附目錄渡し(覚)。各手永の上知高吟味書付差出す様御郡代へ達(覚)。
- 閏 6. 10 吉宗、東叡山葬送に細川重賢ら一橋門より、小川町筋違門にかけて、警備命ぜらる(実紀)。是月 金峯山より、山潮出て、上松尾村の谷川塘損ず、普請のため、明俵4500俵差出すこと、内2000俵は熊本より(年合・年覚・肥)。家中の面々私用の人馬相対雇禁止(藩法 571)。吉宗死去につき、町中3日市は、10日閉鎖穩便(式稿29)。芦北詰扶持人水夫16人のうち、10人減方の達(年合)。
7. 20 津田七左衛門を郡代に任ず(覚)。25 御町奉行廃止、寺社方町方共御奉行所支配となる(藩法 571)。26 樽井左五左衛門、戸田儀左衛門、国武左三、松本助左衛門、郡代役御免(覚)。28 木村弁蔵、西村作左衛門、宇野市郎右衛門を郡奉行に任ず(覚)。30 石川源右衛門を郡奉行に任ず(覚)。是月 侍中、その子弟ら、惣庄屋、村役人宅へ出入遠慮のこと(藩法 631)。町在見懸才覚銭、計1015貫目うち未納分 395貫 466匁、依って半納で残分御免、半納にても猶、未納の不足分 151貫 791匁(諸帳)。所々口留番人足足輕・外様足

宝暦 2 (1752)

小頭の勤務規定出さる (諸帳 5)。 諸御郡徳掛の下見帳当年より直に (写でなく) 差出す事 (覚)。

8. 12 米・大豆・大麦・小麦・粟、増運上 (藩法 571)。 23 有徳院 (吉宗) 百ヶ日会 (藩法 571)。
9. 16 領内の紙および格他所売出重ねて停止 (勝手万)。
10. 7 長六橋掛銀 5 ケ町へ割符 (覚)。 8 昌智院殿を様と唱 (藩法 571)。 9 諸御郡共に土免通の物成田畑を分け書付達する様、御内検より申遣 (覚)。 是月 郡奉行衆紙墨代増方達 (年会)。 御奉行所奥詰のもの御所境口より出入あるも、向後諸町人出入不致よう御所境口錠をかけ、当用口より出入のこと (年合)。
11. 22 津口運上減方の達 (藩法 571)。 23 八代密柑献上 (実紀)。 是月 廻江手永下宮地村熱病発生難波につき御救願 (年覚)。
12. 3 年号宝暦と改む (藩法 571)。 12 郡奉行吉田庄蔵役儀を免ず (覚)。 13 芦北郡奉行大塚七右衛門役儀を免ず (覚)。 24 惣庄屋久住尉助召し捕えらる (覚)。 28 野間文左衛門に領内の船改仰付らる (諸帳 5)。 是月 村継、宿継状仕立について達 (藩法 572)。 有高蔵納・給知共勘定所へ遣す事 (覚)。 諸御郡日干、洪水にて粮物所持不仕百姓の救米合計 5,238 石渡下さる (年合)。
- 是 年 長洲町に裏町出来 (諸拔)。 在中にて侍納戸銀取立について達 (藩法 571)。
- 著書目録 程易雑話 儒家 平野深淵。

宝暦 2 (1752) 壬申 家重 重賢

1. 6 吉田加大夫跡松岡字兵衛・吉田庄蔵跡水野幸右衛門、小崎十郎右衛門跡野田伊兵衛、大塚七右衛門跡田辺孫右衛門らが芦北郡奉行になる (覚)。 13 家中奉公人支配方に付達 (藩法 572)。 是月 侍中支配浪人ら知行所又は年寄の所に入込む事禁ず (触)。 去年在中へ申しつけた見懸才覚銀、造酒屋先納銀共に去秋の年貢米で元利共に返却したが、其ため財政困難となった上去秋免率を下げたから益々困窮し、帰国御用銀も差支えるに至る。今度又々才覚銀を課し来月 10 日限差出すべし (年合)。
2. 7 細川豊前守典文、西園寺致季に伴い参伺 (実紀)。 11 宇佐川字左衛門を清田新助跡の郡奉行とす (覚)。 小田武左衛門倅嘉兵衛を親跡惣庄屋とす (覚)。 13 小原勘右衛門、関素兵衛依頼郡奉行を免ず (覚)。 22 池田今村へ御休所を建てるに付、高物成等書付の事 (覚)。 25 小笠原右近将監死去 (藩法 572)。 是月 上宮地の農民安右衛門、算学師範となる (城南 474)。 楮苗を渡し 6 分召上げ、4 分を作徳とす (城南 454)。 去 9 月の達により御焼物手伝夫賃 1 釜に付 24 匁宛とする (年合)。
3. 11 芦北郡奉行平野太郎四郎を合志郡へ所替 (覚)。 12 飯田三右衛門を奉行とする (覚)。 16 鯛瀬字兵衛を飽田、託麻へ、庄村五郎右衛門を野津原へ所替す (覚)。 是月 八代町人平四郎が芦北郡から塩硝土の取方を願出る (年覚)。 町人共、御用所役人へ贈答を禁ず (年覚)。
4. 2 八代城修理用材木を八代御用木山より伐採するを許す (林制 69)。 3 米穀割賦を出す時は、先ず御勝手方衆へ下地を見せてから行う事 (覚)。 9 正院手永惣庄屋才助役儀御免、同所の手代が当分代行の事 (覚)。 15 重賢始め就封者 35 人将軍に閱す (実紀 3-18)。 25 重賢江戸発、5 月 27 日熊本着 (本)。

- 27 重賢下国に付鶴崎人馬賃銀割符の事(覚)。是月 百姓抱高を親類に譲り又は隠居して無高になり、又は在町無高の町人等が家中や寺社方の家来、支配分又は1ヶ年奉公などに出る事禁止(触)。是月カ、役々により足高を渡さず勤めるべしとの内定あり(本)。
5. 1 正院手永手代嘉平惣庄屋を命ぜらる(覚)。19 津奈木養右衛門、久木野伊左衛門惣庄屋を命ぜらる(覚)。23 惣庄屋池田次右衛門役儀御免、諸御用承り、一領一正久住兵九郎は久住の惣庄屋となる(覚)。
6. 16 有徳院(吉宗)1回忌(藩法572)。28 家中御赦面開立山の一紙表を御勝手より提出(覚)。是月 両祭礼の時郡頭勘定頭御算用(本)。他国の富札禁止の事(会旧)。琉球使者大坂まで渡海(藩法572)。国中人別出銅仰付らる(藩法572)。
7. 8 寛永12年諸郡水帳を奉行所へ差出す事(覚)。21 堀平太左衛門初て大奉行。御勝手方上聞の儀、最初は藩主直接指揮、明暦万治の頃は家老衆惣連判、其後大木舎人1人受込。元禄14年頃から山名十左衛門、柏原要人が加わり3人、其後奉行・用人段々受込、享保20年被差止、勘定所一手迄となった。元文元年より家老脇、用人方受込となり寛文延宝の頃、氏家甚左衛門が奉行頭になり勝手方につき調べて有吉市郎兵衛、堀次郎右衛門が用人となり受込、元禄の半頃沢村主膳が行ったが、此節堀平太左衛門が一筋に受込、現在に至る(度譜)。
- 25 熊本町奉行を廃し、寺社町共に奉行所支配とする(家譜続)。27 納戸役竹原勘十郎上書して国政の得失を論ず。藩主その説を聴き、是日用人堀平太左衛門勝手名を大奉行に任ず(重賢伝・覚)。是月 八代焼物は今度商売焼を許されは迄渡されていた諸品手当は取止め、御用焼物を命ぜられた時は1釜に付代銀100目宛渡される(年合)。諸国の年貢は年内皆済を原則とするが、本藩では忠利以来、年内3分2、翌3月から7月迄に3分1納める例である。それすら滞る場合はその惣庄屋は帯刀禁止(諸帳5・勝手覚)。右筆、歩使番人数究、小姓6組の内2ヶ組を減ず(本)。上村理右衛門奉行を免ぜらる(本)。軒掛り出銭多く貧民難儀。年間出銭高調書を割当、丁頭に命じて提出させる。また祭礼時の油小屋を禁止(式稿56)。道中にて一門・家老に出合う者、荷を下し片隅に寄ること(式稿5)。
8. 12 小崎太郎左衛門の役儀を免ず(覚)。21 竹迫手永惣庄屋、池田へ所替、俸三次親跡竹迫へ。阿弥陀寺村庄屋庄三郎は横手惣庄屋へ(覚)。27 椋梨角兵衛を郡奉行に任ず(覚)。平井太郎兵衛に勝手方請込を命ず(覚)。是月 藩主、郡奉行を招き在方支配に付訓示す(肥)。熊本町歩役間高(惣月行司新坪井町中尾理平次より指出の書付)新壱丁目(間数省略、以下同)新式丁目、新三丁目、蔚山町、職人町、細工町、西古町町、中古町、東古町、紺屋町、京壱丁目、京式丁目、今京町、出京町、本坪井町、新坪井町、合計2517間8合8勺1拂(勝手覚・諸帳5)。惣庄屋は天和2年以来帯刀禁ぜられ享保2年以来再び帯刀御免となる(年合)。
9. 1 堀平太左衛門への紙面は家老脇衆同前にすべし(覚)。大奉行堀平太左衛門に大坂出張を命じ大坂御用達と交渉させ、従来の大坂廻米の外、江戸へ直送した米銀等も一旦大坂へ送り、江戸への諸運送を大坂用達に引受けさせる事となる。この時従来の蔵元鴻池善右衛門引受を断り、長田(加嶋屋)作兵衛が受

継ぐ(肥・重賢伝)。下河辺十兵衛の役儀を免ず(覚)。15 領内一統に人別出銅始まる。家士・寺社・町方30銅宛、寺社支配浪人家来の家内15銅在方5銅(在方出銅、或は宝暦3年より実施か)(肥・家譜続)。18 芦北惣庄屋湯浦浅右衛門病死に付、当分手代御用承りの事(覚)。矢部手永分る。中嶋惣庄屋に志賀幾平が命ぜられ長左衛門と改めた。先年中嶋丹右衛門が罷めて以来今年迄21年となる(郷歴)。23 諸郡番所、茶屋の修覆について在中市場不開期に行うよう達すべし(藩法 572)。是月 国中人別出銅に付、家中知行取、切米取共に扶持方の員数に応じ、一人扶持30銅宛上納、10月、11月限り上納の事(藩法 636)。櫛方にて集米銀仕立、人別錢櫛方会所へ上納(旧章)。手伝金、軍用金等臨時支払の方法として櫛方内に勘定所、其他にある銀 800貫目を集米銀と云う名目で、貨殖を図かり其の利息を手伝御用金に充て、又忠利以来軍用金に充てた小物成中の資金が、其後乱雑になつてを整理させた(肥・重賢伝)。奉行下河辺十兵衛退任、上村甚五左衛門新任(本)。

10. 5 鮑田郡下内田村金助、櫛実盗取、脱落。お尋ね者として達す(藩法 572)。9 家中并寺社方百姓町人に至迄出銅銭を命ぜらる。侍中は 100石に 120銅、家人寺社方は 1人前 5銅宛、毎年取立なり(郷歴)。11 橋本源右衛門の役儀を免ず(覚)。是月 村山伝左衛門留守詰として江戸へ指登る(本)。前句笠付の点をする者夜中集会を禁ず(式稿68)。献上密柑の熊本城下運送道順指定(式稿78)。
11. 27 生田又助経費、依頼隠居し長風と改む。又助は奉行、小姓頭、番頭を歴任、4年前の宗孝遭難の折尽力して細川家を全うせしめた(先哲)。是月 棕櫚の皮増割賦并山奉行見立の棕櫚仕立の達(年覚)。手取米増下さることなく、去暮の通り据置かること(触)。家中の被官、又は家来分の者、在中に留まり在中迷惑に付、村方人畜につけるか熊本屋敷へ呼取るかのいずれかにせよ(本)。
12. 9 八代密柑を献上す(実紀)。16 郡頭、現在 2人なれど夕詰を免ず(覚)。20 高揃帳仕替に付、中折紙など不時に受取る(覚)。25 稻津弥右衛門を郡方目付とし、日々郡間に出勤、存寄りの儀は隔意なく申談す旨達せらる(覚)。蔵納方の高書付は勝手方衆及び志津摩殿へ達(覚)。28 郡奉行上村千右衛門の役儀を免ず(覚)。是月 家中地居 300石以下の拝領米、手取米銭はその時期を盆前限りに渡し済すよう。故に時節外れの願はないようにとの沙汰。但し拝領米は 100石高に米 5斗、10石高に 2斗宛とする(触)。家中被官、家来分の在中居住禁止は堀平太左衛門より達あり。郡奉行は嚴重注意せよ(年覚)。国中井樋の修覆、維持は年 5・60貫目で在中出銀によるが、井樋の中には一門衆開地の分もあり、今後は本方又は新地に限り在中出銀による事(年覚)。湯風呂屋営業 4ツ時までとす(式稿97)。門松制限される(林制72)。出家在中に入って人を集め法談する事禁止(肥)。稻津弥右衛門を郡方目付役とし、日日郡間に出勤、存寄りの儀は隔意なく申すべし(肥)。

是 年 年貢月限の算用相滞りの惣庄屋は次の算用無滞済むまでは帯刀を禁ず(諸拔)。家中被官又は家来分で在中居住の者は家中の手より放たれる(会年)。当冬琉球人参着の節、河舟 1艘差出すべし(本)。家中の被官、家来猥りに在中居住叶い難し(本)。本藩総収入 35万 6000石余、総支出 42万 9360石余(銀台公 142)。堀平太左衛門大奉行となる。座配、城代の次座(旧章)。

宝暦 3 (1753) 癸酉 (家重) 重賢

1. 1 藩主 2月27日江戸へ出発 (覚)。 16 下村源兵衛に郡奉行を命ず (覚)。
 30 山鹿吉左衛門惣庄屋を罷免、当分手代が代役、尚年貢の取立方は横目齊藤長左衛門が当る (覚)。 27 家中先祖以来の知行相続は従来通り、新知及び加増知の相続は勤務振に依り決す (家譜続・重賢伝)。 28 郡奉行田辺孫右衛門、千場作兵衛の役儀を免ず (覚)。 加藤彦左衛門、鯛瀬宇兵衛、役御免 (覚)。
 29 郡奉行武藤助左衛門、西村作左衛門、宇佐川宇左衛門所替 (覚)。 是月晦日 筑紫市郎左衛門、沢田又大夫、堀田孫右衛門、郡奉行当分 (覚)。 家中被官、家来の在中居住禁止に付達す (諸拔)。 新地御加増相続に付在勤中拝領分に付いてはその勤務振にて決定、但無事相続されれば以後 3 代目よりは先祖以来の知行同前 (触・藩法・637)。
2. 4 惣庄屋横手庄三郎、役御免 (覚)。 12 千場作兵衛役御免 (覚)。 24 永田小右衛門、郡奉行当分 (覚)。 池田手永京町村四郎助、惣庄屋となり横手五郎左衛門と改む (覚)。 田迎幸助惣庄屋御免、後任決定まで手代が代役 (覚)。
 25 惣庄屋13人、年貢取立出精に付、金子拝領 (覚)。 長岡 (松井) 式部に家老見習を命ずとの達 (覚)。 26 習学寮創立の準備を奉行宮川庄兵衛、作事奉行小野彦次郎等に命ず (重賢伝)。 27 重賢熊本発、4月1日江戸着 (本・覚)。
 神江五左衛門郡奉行御免、鶴崎作事奉行に、又米銀出方の取計も命ぜらる (覚)。
 28 請役所夕詰中止 (覚)。 是月 藤崎宮永代修覆料の為薬師坂下瀬戸にて初めて富講興行を許す、3月23日第1回 (家譜続・郷歴)。 それの辻建札許す (年合)。 芝居興行は12月より3月迄に限る (「肥」は6月とする) (式稿20)。
 近年町家困窮振興の為公役削減、新商売の許可、米銀貸借高利の外の自由、貸借争の裁許を行う (式稿44)。 内牧町西之大橋修覆に用材下附願 (林制73)。
 陳又兵衛奉行を免ぜらる。都甲太兵衛奉行上座に列す (本)。 諸郡零落の村多き為当春より毎年1手永に1村程の割で農民に家作農具作食牛馬代等貸つけるとの達 (年合)。
3. 2 堀田孫右衛門、郡奉行当分役御免 (覚)。 是日カ 鶴崎郡奉行、是迄の2人定詰を己後1人の詰代りとす (覚・肥)。 3 橋本兵次、鶴崎郡奉行当分となる (覚)。 8 横手手永田崎村文平、田迎惣庄屋となり田迎清右衛門と改む (覚)。
 八代惣庄屋高田庄右衛門自分苗字御免 (覚)。 先の沙汰通り水帳しらへ方、奉行所へ移管 (覚)。 9 天守にあった郡中見図帳改方に付内意伺う (覚)。
 15 重賢始め参勤24人 (実紀)。 15 上野火の番 (本) (「度譜」は19日とす)。 17 発駕前監物へ重賢改革主旨の書付を示す (覚)。 22 野津市兵衛、種山浅右衛門惣庄屋免ぜらる (覚)。 是月 乱心自殺者の跡目相続許可の達 (触)。
 従来出来高払いの繕作事料は今後年間 600石銀40貫目の予算払いとす (勝手覚)。
 八代前川徳淵の渡は洪水の為中洲生じた為新規1艘を加え2渡しとなる (年合)。
 夜中身許不明者から物を預る事禁止 (式稿4)。 古鍋釜地金他国への流出禁止 (式稿60・会旧)。
4. 2 八代前川徳淵渡船新規出来、願の通り入目銀 461匁8分6厘交付 (年合)。
 13 当春より万石に付千俵の囲糶せよとの公儀の触 (藩法 572・会年)。 15 大慈寺で富講始まる (川尻史 419)。 重賢始め24人の大名・将軍に閱す (実紀)。
 上野火の番 (本・度譜)。 18 芦北郡より御用式歩薪30万斤余届く (林制75)。

- 29 1万石に付千俵の囲穀を命ぜられ本藩は3斗5升俵 54,000俵を囲穀として12月25日幕府へ届出(実紀・本・家譜続)。是月 近頃寺社造営し信徒を欺瞞する者あり5月15日迄に整理届出、200余人を捕える(家譜続・重賢伝)。
5. 8 郡奉行衆所替の事(覚)。9 芦北一領一正水俣弥四郎、八代野津惣庄屋となり野津弥四郎と改む。野津市兵衛養子弥平次、八代種山惣庄屋になるを以て市兵衛所持の赦面開(役儀御免により返上していた)を養子弥平次に与う(覚)。15 狩野源之允、郡奉行に(覚)。国中の開立山持はその所持年月を委しく書き達すようとの触(覚)。17 下益城郡一領一正藤井忠太兵衛廻江惣庄屋に(覚)。是月 家中の立山改実施(林制78,101)。備前牛窓出水屋安兵衛、南郷川ノ口御山を3ヶ年契約で伐採(林制79)。
6. 20 寛永年中水帳しらべ終了、天守方櫓に保管(覚)。影踏人数増減のこと(覚)。有徳院(吉宗)三回忌(藩法 572)。是月 八代紙漉は毎年貢楮を渡されそれを漉立上納していたが、勝手な改方で不都合もあり、今後高田手永宮地村紙漉九兵衛、次衛門兩名を責任者として諸事取計わせる事(年合)。諸職人、大工・柿葺・鳥葺・佐官・瓦葺・石剪・木挽・縄付師・畳刺・萱屋根葺の手間料を定む(勝手万一諸帳5)。為替商法流行にて金銀通用不活発、経済全体の衰微とならぬよう(式稿59)。杣方郡支配から作事支配になる(藩法 572)。奉行大槻次郎兵衛鉄砲頭に、後任奉行は佐野左太夫(本)。
7. 4 熊本町並の地子地は享保9年来町奉行衆支配の所、再び屋敷奉行中支配へ変更の沙汰(覚)。13 野津市兵衛倅相続に付き5・9の項参照(覚)。是月 大坂市場での肥後米相場ぎめの為、俵拵を入念にするようとの堀平太左衛門から御用番郡奉行への書付(年合)。免方並に1季畝物共年貢取損わぬよう、又年内に納めさせるようとの堀平太左衛門から郡奉行への沙汰(年合)。病氣狂乱による自殺者の家名断絶の旧習廃止(本・銀遺)(「御郡方年経略」は8月におく)。京一丁目印判屋惣右衛門廃業転居願出たが国内唯一の印判屋なる故養子を取り跡職引継ぐよう指示(式稿77)。
8. 5 隆徳院(宗孝)7回忌(藩法 572)。13 在中女出切手は奉行1判に簡略化(藩法 572)。16 在中に訳無く寺院を結ぶ僧尼停止さる(本)。25 侍中の村方への貸付金について(藩法 572)。諸社祭礼の踊は当日迄、翌日は禁止又踊りの起りに付書き上げ提出の事(郷歴)。是月 川尻柳堀(新田町)に遊廓設置許可(本)。廻役が丁頭へ町人を預ける時は必ず上司へ届ける事(式稿23)。諸郡村々名寄帳の整理不良に付、再度厳しく郡奉行へ達(年合)。在方へ貸付の米銀を地子、内作、年貢等に立替るについての沙汰(触)。
9. 一 湯浦手永へ初めて質屋(牢舎)を建てる為官有林よりの竹木支給許可(年合)。
11. 2 池田惣左衛門惣庄屋役御免(覚)。是月 旅詰切米取は近年指上米を納めていたが、困窮の為江戸大坂1ヶ年詰は指上米無し、長崎鶴崎1ヶ年詰は9石手取、但宅詰は今迄通(勝手覚)。近年不勝手に付藩主身内への者への贈物は己むを得ざるものの外5年間禁止、尚、更に5年延長の予定、京大坂詰の者に徹底させよ、良い思い付ある者は輕輩といえども申出よ、姓名共に藩主の耳に入れる。御家人の臨時の渡し方今迄は勘定頭衆より、今後は国元まで申越してから支給せよ(勝手頭)。小身者は難儀に付地面取に拝領米、年内3分の2、

残は春～秋に随時支給のこと。扶持方の者へは段格に応じ拝領（勝手覚）。阿蘇山硫黄吹上ぐ（肥）。田畑を譲地・質地とする者を厳に取締まる（肥）。惣庄屋の子弟で代役勤務以外は帯刀禁止（肥）。

12. 4 惣庄屋の筆紙墨代の増額要求通らず。但し先年より削減の代官口米はその3割を返し下さるとの事（覚）。20 池田惣左衛門役御免（覚）。28 錢塘善兵衛、惣庄屋役被免（覚）。是月 旅人商売以外の旅人が遊芸等にて数日宿泊は禁ず（触・式稿19）。知行所の夫仕猥に行わぬ事（触・藩法 637）。

是年 去申暮、藏納給知有高差引の書付、勘定所へ遣す（覚）。在中寺号無き寺の坊主の居住禁止法令、本寺に引取るか還俗するか（郷歴）。

宝暦4 (1754) 甲戌（家重）重賢

1. 6 柿原村庄屋加兵衛錢塘惣庄屋に（覚）。
2. 2 香厳院（重賢姉喜和）死去（藩法 573）（「本」は閏2・2につける）。29 諸大名に去年の収の外に本年も困収10分の1を貯る事との幕命（家譜続・実紀）。是月 求磨川渡船新規建造費、予算通り下さる（年合）。富講にことよせ博奕禁止（藩法 573）。紺屋町別当儀右衛門小倉路御参勤の人馬御用仰付られ大里まで同行、帯刀許可（式稿85）。自今、夜芝居興行禁止、鶴崎野津原小国は特に許さる（肥・触）。

閏2. 一 杣方は郡方支配の処、去5月、旧の如く作事方支配になり御用材木の取出、津口出入についての達あり（年合）。阿蘇山鳴動、久住手永村々の牛馬多く死ぬ（肥）。

3. 一 質地又は譲地の為の年貢不納者の田畑、又は年貢を納めず村役人から譲地にされた田畑に上米銀をかけ旧主の年貢のかわりとする、質地はそれでよいが譲地は旧主から離れているから上米銀をかけないよう下方に達す（年合）。御用職人共家屋修繕の為拝借銀願出、その返済は手間料から控除の旨は余儀ない訳あれば勘定奉行の諒承を得て許可す（式稿99）。京一丁目零落に対する振興策として相模興行御免の処雨天損失に付、熊本町中へ7000枚の札割当仰付けられる（式稿 102）。

4. 28 重賢江戸発、木曾路にて6月3日（イ6・）熊本着（本）。是月 穿鑿所新設、従来城内、高麗門牢屋内に各1ヶ所あったが不便故（本）。西古町内の食者へ救済のため懸内より1日1錢宛出銅を願出、許可（式稿79）。諸細工職人へ迅速且つ丁寧に低料金で仕事するよう訓示（式稿45）。

5. 一 堀平太左衛門刑法草案を奉る、明年1月より実施（銀遺・本・重賢伝）。川尻大慈寺にて富講興行（肥）。通用の柵に極印なきものは使用禁止（肥）。

6. 一 弟を兄の養子にする時の条件についての触（藩法 573・637）。奉行村山伝左衛門熊本着（本）。都甲太兵衛着座（本）。

7. 一 土免は例年7月末又は8月初、御殿にて御用番より申渡されたが最早郡代熟練に付その儀停止（肥）。秋作未収穫の田野鷹野にての網掛禁止（藩法 573・724）。

8. 24 夜、肥後国大風（本）。是月 井口庄左衛門著座（本）。外聞（探偵）役家屋修繕費、町銀よりの支給を今後取止め（式稿 100）。御用駒召上げの節博労らが直接在中にゆきその場で代銀決定するを禁じ郡代の沙汰で廐会所で行うべきこと（年合）。

宝暦 5 (1755)

9. 27 細工町播木屋茂左衛門枅改仰付られるにより別当列とする(藩法 891)。
10. 11 八代莊嚴寺前知恩院門主宮の靈牌を奉安し仏前に菊桐葵紋の提灯をかけ知恩院院家覚了院の許諾と称すも、寺奉行に届けざる故住持に提灯の取はずしを命ず(寺例)。 19 河尻浄慶寺慶存お咎、追放になる(寺例)。 是月 八代高田密柑園監督に郡方横目派遣の達(年合)。 社木を御船板其外御用材木に杣取禁止の事延享 3 年の達の写を以て重ねての達(年合)。 町在通用枅極印改(藩法 573)。
11. 1 藩主八代へ行き 9 日帰府(本・家譜続)。 是月 榎方会所建継出来御吟味方と唱う(本)。 長岡監物、助右衛門と改名(本)。 村山伝左衛門奉行を免じ蒲池喜左衛門を任ず(本)。 当暮手取米高 100 石に 2 石増、切米 10 石高に 1 石増下さる事(触)。 貞享暦を改暦、宝暦甲戌暦とす(藩法 573)。 村々の五人組心得違いなきよう達す(城南 471)。 町家役銀 5 歩を 10 歩とし、内 5 分は従来通中古町へ納、5 歩は各別当保管貧家繕等にあてよ(式稿 25)。
12. 15 学校(長岡内膳忠英を総教、秋山儀右衛門定政を教授)を二の丸内に興し其心得を定む(家譜続・本・重賢伝)。 17 浜町火災(郷歴)。 30 古今無類の大雪(肥)。 是月 国中寺社数、天台宗 110 寺(熊本 11、八代 2、在中 97) 真言宗 17 寺(熊本 5、八代 1、在中 11) 禅宗 175 寺(熊本 24、八 5、在中 146) 浄土宗 65 寺(熊本 26、八 6、在中 33) 法華宗 60 寺(熊本 20、八 2、在中 38) 浄土時宗 2 寺(在中 2) 浄土真宗 453 寺(熊本 74、八 13、在中 366) 西願寺派 1 寺(熊本 1) 合 883 寺、内熊本 161 寺、八代 29 寺、在中 693 寺、社方 617 社、内熊本 3 社、八代 3 社、在中 611 社(勝手覚-諸帳 5)。 時習館教育心得(藩法 579)。 今後鷹狩の道筋町家行燈出す事不要(式稿 104)。
- 是 年 代官算用狀以来郡代中印必要との達(会年)。 塘奉行廃止郡代の所轄とする達(会年)。 麻疹流行す(郷歴)。 時習館両榎出来(藩法 573)。 金銀懸合分銅改に付達(藩法 573)。 玉山詩集刻成る(肥)。 著書目録 御刑法草書法制 堀平太左衛門。 玉山先生詩集 秋山玉山。

宝暦 5 (1755) 乙亥(家重)重賢

1. 7 藩主初めて時習館に臨み開講式挙行(本・重賢伝)。
2. 3 奉行宮川庄兵衛五十挺頭に転じ同月清田新助奉行に任ず(本)。 4 安藤対馬守隠居、知行の内 15,000 石召上られ嫡子勝茂 50,000 石拝領、大名小路屋敷召上らる。 三千姫(対馬守室、重賢妹)病氣に付龍ノ口屋敷へとどめる(本)。 母親が出奔した子の家督等今後よろしいとの公儀触(本)。 今年より筈、徒、墨の刑初めて仰付らる。〔朱筆〕是迄死刑、追放の二つ用いらる(本)。 6 火事場作法に付公儀触(藩法 573)。 16 切米取養子に付達(藩法 573)。 21 藩主、物頭列以上を招き諸法度の厳守、質素、儉約等につき指示、特に衣服制度に付ては細目を定め励行させる(家譜続・藩法 573)。 28 奉行書簡式を改む(家譜続)。 29 重賢熊本発、小倉路、4 月 1 日江戸着(本)。 是月 宝暦 3 年 10 月~4 年 9 月の出方 822 貫 239 匁 7 分、予算との差 54 貫 909 匁 5 分の減、宝暦の改革による経費節減(勝手方-諸帳 5)。 鶴崎御船方御用の蓋笠、従来関手永大平村大志生木村小志生村より上納の処、去春の達により村々から船手へ積上げて来たが村方には迷惑至極故、以前通り船手より請取人を差出すよう仰付らる(年合)。 長岡助右衛門、堀平太左衛門へ律令格式立のため古格しら

へ申付(萬見合)。奉行所書簡或は布達に、以後御奉行所とあるものは御請書同前、御奉行中とあるはこれまでの奉行所とあるものと同格の扱いとの沙汰(触)。元文5年以降阿蘇宮境内に新規建立の仏神の祠隠宅等を報告させる。尤も願出るものは指置かる(寺例続)。長岡助右衛門、堀平太左衛門に諸制度改革の立案を命ず(重賢伝)。樹桑養蚕仕立方、島己兮を郡代格として教導せしむ(宝暦10、11の項参照)(肥)。衣服制度(旧章)。

3. 一 親孝行故に扶持下され居りし孝子死去後も両親存命中は扶持下きると定む(肥)。御餌差共造酒屋の屋敷裏へ網張り禁止(式稿71)。
4. 27 矢部郷下組庄屋源次郎上組村と地方公事により久しく禁籠の処、今日小川原(下組村の内)にて刎首、珍事故見物人多し(郷歴)。是月 阿蘇南郷郡代詰所は内牧にあり遠く、幸い高森町に頃あいの明家あり詰所同前にし、その繕諸入目等郡中へ割当てたしとの願の通仰付らる(年合)。松山手永網津村の内糠塚山は享保年来松井典礼の仕立山となりしが近年繁茂、猪鹿多く田畑を荒し下方迷惑の為下草等剪除くよう達し郡代并典礼留守へも通知す(年合)。在中百姓屋敷にある楠の杣取の節、畑畔などにあり作障に成り地主の迷惑する楠の御用に立たぬ枝葉はその地主へ渡下さるとの達(年合)。博奕の事聞出し次第その場へ押入り金銀銭取上げ直に訴え出ればその金子褒美として其者に下さる、又かるた商売を堅く禁ず(触)。商家妻子で駕に乗る者あればその五人組共越度となる(触)。不届きなる給知百姓追放の件は従来給人より郡奉行宛届けたが向後は奉行所へ銘々持参する事(藩法 637・触)。博奕禁止、かるた商売禁止(式稿1)。今京町次兵衛類焼にあい難儀故居風品願出許す(式稿117)。
5. 一 代銀上納にて渡し下さる塩、知行取は6月朔日～7月13日迄、切米取は6月15日～7月29日迄受取るよう、日限迄は渡さずと重ねての沙汰(触3)。外聞役は正邪商人をよく吟味せよ(式稿50)。奉行上村甚五左衛門弓頭へ転任、村山九郎次郎新任(本)。
6. 1 此日より9日迄強雨洪水、山崩、破損、流家死人多し、稲津弥右衛門活躍す(家譜続)。是月 諸寺院への御寄附米を減じ或いは御取上とする(寺院続)。雪駄商売上方并他国品禁止、エタ独占細工を適当な利で商売せよ。エタ直売禁止、雪駄商人名前、町方へ届出るべし(式稿49・覚合)。勘定方を置く(本)。
7. 20 家中切手預紛失は今まで再発行したが今後許されず(藩法 575・658)。22 秋山玉山富士登山(肥)。是月 盗難届の義務(式稿22)。諸細工物他国品輸入多く国内衰微に付国産振興の為願あらば輸入制限し融資もする。それでも怠る職人は所払い、吉凶音信贈答は親類五人組のみとする(式稿46)。国産品振興の為出願により輸入禁止商品の表を發表す(式稿51)。新細工町以前は別当役も置かれていたが今は丁頭1人のみ、今後2人とする(式稿98)。扶置方切手向後は毎月10日限仕出の事(触)。八代郡高田手永、今度の洪水にて井樋多数破損したので臨事御作事杣取飯米5石3斗八代御藏方より下されるようとの願出に付郡方詮議の上石辻下置かるとの事(年合)。
8. 1 本日より上方他領雪駄禁止(式稿49)。5 去6日の強雨洪水の損毛23万560石と幕府に届く(家譜続・新統跡覽)。24 夜戌刻より強風、倒家46,000軒余り、死者93人出る。山鹿神社神殿吹崩(気・肥)。是月 国中呉服下り荷物蔚山町呉服問屋へ到着したのを昔は町横目検査していたが近年中止、今後町

宝暦 6 (1756)

方根取検査せよ。明和 8 年根取立合をやめて外聞立合とす (式稿 84)。番頭荒木又三郎に閉門謹慎を命ず (先祖附)。

9. 一 宝町裏通惣庄屋出府宿、度々出火に付町はずれに移転 (式稿 101)。旅人直売禁止、遠在、祭、市等へも熊本町人出張とす (式稿 53)。

10. 15 去 8 月 24 日の風水害の損失 14 万 7,500 石余と幕府に届く (本・新統跡覧)。是月 宇土町桜間包 40 年来御銀所上納を認められているが、熊本判屋振興の為禁止するよう熊本判屋共出願するも斥けらる (式稿 64)。八代二ノ町に枳改所設置 (藩法 591)。

11. 一 伊津野屋長左衛門零落、格別の家柄故家持町家より月に 1 銅宛合力せしめ御町銀よりも 1 貫目拝領せしむ (式稿 67)。不作に付米輸入許可 (式稿 83)。新坪井米屋町宗心屋敷南の方を借屋に致度き願出許可 (藩法 881)。百姓の子弟を町人の養子にするを禁ず (肥)。小国馬場手永、先年北里手永に組入れられたから北里伝兵衛に骨折料として 10 石与えられ伝兵衛が病氣退任後は後任の伴喜惣太へ下さる (年合)。手取米、度々の天災にて甚しく損耗の為去西之年通りに仰付らる (触)。他国の米穀入津は兼ては出来なかったが当年は許さる (町方日帳目録)。

12. 9 八代密柑を献ず (実紀)。27 本年は 2 回の風水害で本藩所務 3 分の 2 を減ず、その善後処置の為幕府に拝借金願出る (家譜続・重賢伝)。是月 富山入葉他、他所より入込む品々の商売禁止 (本)。高野山僧、京二丁目に留り下人のみ無手形にて帰すに付南関へ連絡す (式稿 15)。家中家来給人段の者町借家の場合、門松禁止 (式稿 24)。侍中支配浪人譜代の家来給知百姓不屈者の取扱について (藩法 638)。享保 13 年筑後柳川領の百姓、玉名郡内へ多勢走り、翌年 7 月元へ返された件は以後も前例とすとの違写 (年合) (12 月末の記入であるが日付は 8 月とある)。町在托鉢或いは読経の者へ西願寺より札を渡すよう (諸帳 2)。他国品の領内商売は禁止されているが鶴崎、関町等他領と入交りの所柄、禁止では町家困窮する故免ぜらる (覚合)。川尻町浦島久馬進に土御門家より隠陽道触頭に申付らる (寺例統 4)。

是 年 無願にて順礼等に出る者、当人始め村庄屋以下も過料仰付らるとの達 (諸抜)。國中銭遣 1 匁 70 文に仰付らる (会年・藩法 575)。御用材流木を取揚げた者には 10 分の 1 代銀を下付 (林制 92)。諸簡式達 (藩法 575)。殿様文字分別達 (藩法 575)。寺社領に付達 (藩法 575)。父母の忌に達 (藩法 575)。当免 2 ツ 8 分 6 朱 3 厘余、此損米 13 万 301 石余、御救渡米 1 万 2863 石余、種子粃代米 833 石 (肥)。櫛木根帳出来 (旧章)。著書目録 時習館学規、法制秋山玉山。孝子記事 史 伝村井見朴。

宝暦 6 (1756) 丙子 (家重) 重賢

1. 26 役所根取長瀬宇平、同物書中津佐助兩人律令格式しらべ請込 (万見合)。是月、油粕他国へ出す事指留 (町日目)。小国久住より在中で地方細工品商売を願う (年覚)。北里手永村々難渋に付身上ある者寸志の事 (年覚)。荒尾手永野原村御山内での石炭掘方願 (年覚)。詫磨郡重富村、中瀬塘去夏の洪水で破損したが増水の為本塘築できず、今度普請に取懸るに付き不足空俵 7000 俵拝領願 (年合)。家中奉公人増奉公人割付様及び給銀の定 (藩法 638)。
2. 12 困粃売払う様との公儀の達 (本)。13. かしき場は入会にて刈取るべし (

林制92)。 25. 久我大納言(重賢室の生家)逝去(藩法 576、本)。 是月 竹部(建部)侍屋敷を百姓地方に差戻す(肥)。 一領一疋・地侍共弭筒 1 挺宛所持し打方嗜み向後親跡引続き、又は新規奉公願の節鉄炮所持の事相達す様との沙汰(肥)。 魚振売共の直買禁止、問屋を通じてのみとし問屋は公定価格を守る事(式稿58)。 昨年風水損不作に付新造酒禁止(9月解禁)(式稿82)。 上益城村々難渋に付御救願(年覚)。 荒尾手永金山村より御山内の石炭掘方願(年覚)。 菊池郡穢多共より雪駄振売願(年覚)。

3. 3 家中諸士に勤方の稜々、藩主代々申渡の次第詳細取調提出せしむ(家譜続)。 8 勘定頭 1 人役所へ呼出し勤稜、又代々仰出される趣等申伝える(度譜)。 29 従来城代扱の類族事務を奉行扱に改む(家譜続)。 是月 庄屋に脇差を許し精励の者には上下着用許可(肥)。 町中掛り毎の横目役廃止、外聞役の担当とす(式稿26)。 国中一領一疋、地士、地筒、所々諸足軽等惣しらへの事、但一領一疋、地士合 883人。久住野津原鶴崎諸足軽合51人。5ヶ所(兎谷黒石花立麻生田楡木)地筒小頭共に98人、大津同91人、保田窪平山同47人、惣合1170人(覚)。 諸郡鉄炮札筒しらべ高合1413人(覚)。杉島手永国町村にて白灰焼方許す(覚合)。
4. 6 松井氏所持の下益城郡の立山半分召上らる(林制85、94)。 15 重賢始め就封37人(実紀)。 17 翌18日迄強雨出水(肥)。 26 堀平太左衛門詰所を2間に1間継延機密間とし、律令格式調役長瀬、中津詰める(萬見合)。 28 堀平太左衛門は2間に3間の家新築、そちらへ出座す(萬見合)。 重賢江戸発、6月1日熊本着(家譜続)。 是月 開立山讓の儀に付達(藩法 639)。 国一番の閥相撰新坪井町相右衛門零落に付月に15日間稽古浄瑠璃興行を認む、但し2ヶ月で中止(式稿72)。 先祖以来の訳もあり、願に依って新三丁目高塚屋安右衛門居宅修繕の為、富講 1 組宛毎月輪番にて休ませ、その分を安右衛門へ廻し費用調達せしむ(式稿76)。 横手手永古町村新町へ熊本町并在中の者多く雑居致し取締りも不可能故惣庄屋は達により右町居住の間は在中同前商売札渡し、取締りに村方同前申付くる様(覚合)。 牛馬・船売買は証文を以て致す処、中に証文取交さぬものもあり以来は定式通りでないものは裁許に及ばずとの達(年合・式稿2)。 在中急飢の者熊本へ物貰として出居るに付御救米下される(年覚)。 錢塘手永村々難渋に付拝借願(年覚)。 山本山鹿急飢取救に付川尻年貢納の内 100石渡下さる(年覚)。
5. 14 肥後等25国の古銀搜索の令出る(実紀)。 是月 町人出願は五人組加判、丁頭別当取次にて奉行へ。町役人3度拒否するか30日以上遅滞せば奉行へ直訴も可(式稿47)。 小国宮原町理八売業許可、但触売禁止(覚合)。 右同町武右衛門鋳物師屋願の通達(覚合)。 五町手永金峯山御留山に仰付らる(年覚)。 目付差止。詰所目付10人となり、算用所、総銀所、切米所、東西蔵、御銀所、鍛冶方6ヶ所請持。6ヶ所目附という(旧章)。
6. 3 過分の礼儀は非礼なりとの達(藩法 576)。 4 藩主藤崎宮、六所宮参拝後時習館に入る(家譜続)。 5 両寺参拝(肥)。 6 藩主特別の思召により非常の赦あり、勘、咎、追は赦免、徒、死は2等を減ず(本)。 国中追放の者総て赦宥(本・重賢伝・式稿 115)。 7 幕府、本藩の願容れ金2万両貸与(実紀)。 10 非常赦免に付達(藩法 575・640)。 19 飽田郡惣庄屋横手五郎

左衛門は中嶋長右衛門跡役に所替仰付られ知行高30石拝領(覚)。小嶋町次郎左衛門は五郎左衛門跡同様仰付られ知行高20石拝領(覚)。20 月番の家老自宅での国政処理を城内の奉行所で行う、とする(度譜・本)。21 上益城郡惣庄屋中嶋長右衛門役方不吞込に付御免、最前の通地侍仰付らると奉行所より達(覚)。26 霊雲院(宣紀)25回忌(本)。是月 藩内男子人別名付帳の呈出を命ず(家譜続)。國中7才以上人別名付帳指出すべし(藩法 640)。藩主町内へ出かけの節、町横目と外聞役が先払いをしたが今後外聞役のみにて可(式稿 106)。八代家司或は町奉行より熊本奉行所宛文格定る。延宝以来家司は奉行所へ、町奉行は郡方、勘定方へ連絡の格例(藩法 879)。郡方支配役人已来郡頭支配と唱す等の事(年覚)。家老中当時辻月番受持の処向後日々用番を立て御用取計い、月番名前或は連名の沙汰も向後総て奉行所から、且御用筋貴賤の差別なく殿付で認め、殿文字段格分別究る事(触)。前年(亥)2万両拝借(旧章)。幕命により藩内総人口調査。家中、僧尼、町在合せ62万1294人、田2万9215町6反4畝余、畑3万1027町5反5畝余(肥)。家老の執務、機密間にて行う事となる(旧章)。

7. 1 諸制度の改革を実施。大奉行の下に6奉行をおき奉行所中心に12分職を分担させた。従来と奉行名あるもの総てその名称を廃止す(家譜続・重賢伝)。11 飽田、詫磨郡奉行名川源右衛門、鶴崎郡奉行に所替(覚)。18 家老脇を廃し中老職をおき堀平太左衛門を之に任ず(本・度譜)。29 高瀬荒尾手永高潮にて所々破損(肥)。是月 村山九郎次郎、中小姓の次席になる(本)。切支丹宗門改は城代へ仰付られていたが分職の奉行へ改方仰付らる(触)。御用馬50疋会所定請持仰付らる、馬銀 150目宛12月10日限、若し延引すれば50目増銀銭辻にて建継馬具等に至迄済す。馬医礼銀は別(町日目)。座頭共町在にて身代よき者に祝物の前借する者あり、吉凶礼のあてもなき前借禁ず(式稿 108)。国外に欠落の者も9月末迄に親類等の託言をつけ帰参御免願出すよう(式稿 116)。惣庄屋共の内算用差支えし者共脱刀仰付の処今度非常の赦免にて一統差免られたので刀帯びるようとの達(覚合)。
8. 25 長岡隼人、長岡図書の子に仰出さる(本)。家士の座班を定め物頭を5級に分ち又役高の制を定む(家譜)。山奉行を山支配役と称呼変更(林制96・会譜)。是月 米、町より在へ出買禁止、在中より付出米を買った場合は町方へ届出よ(式稿34)。川尻作事奉行、川尻作事頭と改称(川尻史 233)。選挙式定む(旧章)。
9. 14 野津原郡代詰小屋入口に訴出の書付箱を置き下方へも徹底させ隅々迄取締りも届く様との達(覚)。是月 今度仰出された座席惣次第帳一冊・年始其外諸出仕定沙汰帳を渡す(触)。年貢米納古来より定めた通、徳掛割当の日から真米は晴天日数10日、太米は5日限に納める事(諸抜)。代々相続の中小姓の嫡子御目見願は勝手次第、其外の中小姓の倅は遠慮する事(触)。奉行佐野左太夫退任(本)。年貢納入を12月限り皆済に改む(肥)。宇土町鶴崎町を熊本町同様の扱とす(本)。佐貳役触永山甚四郎倅甚次郎往来手形一般町人の如く別当から支給せず町方奉行より支給(式稿42)。宝町惣三郎老母と不具の妹2人扶養困難故風呂職出願、風呂職は容易に許可しないが惣三郎一代限り許可、他へ譲渡禁止(式稿 113)。中古町懸り小沢町丁頭2人とす(式稿98)。八代

宮原町作左衛門旅人宿并問屋兼帯を許す (覚合)。

10. 15 志水才助、山本一角奉行副役に任ず (本)。是月 母出奔し行方知らずの子家督相続は難しいが、家中の面々一概に右の通仰付られるとは限らぬとの事 (触・肥・藩法 640) (「法令撮要」は12月に附す) (宝暦 10. 5 を参照)。鷹狩の時道筋の家、行灯を出す事不用、川尻高橋町へも触 (式稿 105)。町在祝儀凶札の内座頭共祝物受くべからざる事項を明示 (式稿 109)。本坪井横町吉右衛門旅人問屋出願、外聞役が場所柄調査の上許可 (式稿 114)。百姓が米を売るには代官の許可を要す、切手なしに売買せば米、代金共に没収 (式稿 35)。天草銀納年貢基準として川尻、高橋、高瀬米双場を報告す、従来家老へ上申していたが今年より中老に達すべし (式稿 21)。八代宮原町作左衛門旅人宿并問屋兼帯を許す (覚合)。医業吟味に付達 (藩法 581)。鳶者着物道具等質入禁止、御用の品に付質に取れば御取揚とす (藩法 881)。深川手永水嶋村惣右衛門、同郡木野本分村の彦次郎所持の牒本手讓請許す (覚合)。
11. 16 網支配役矢野徳右衛門、松岡十太夫当役御免、右役は指止め、但此後右受の品は惣庄屋へ受込仰付らる (覚)。27 寺社間数を改む (寺例統)。是月 1 人で牛馬 4.5 疋を索連れぬ事、1 疋に口付 1 人付添往還の妨にならぬよう (諸拔)。知行取高 100 石に 2 石増、切米取は 10 石高に 1 石増下さる (触)。惣庄屋退役の節知行物成の事 (年覚)。10 月 1 日より例年通自身番開始、1 町毎に梯子手桶等出し置くべし (式稿 36)。町人相続は予め讓状を五人組丁頭の内 2、3 人宛に封印の上渡置く事、書直しは何度でも許可、死後跡式出生生じても讓状の通分配すべきこと (式稿 112)。
- 閏 11. 3 高瀬町奉行差止められるに付、玉名郡代兩人の兼帯とする (覚)。19 国中物貰共教悦支配仰付られ札相渡し諸事慎のケ条書相渡すこと、但歌舞伎座の役者も此節札渡になる事 (覚・肥)。23 八代密柑を献ず (実紀)。28 知行世減の法改む (「本」「家譜統」は 6 月とす) (肥・重賢伝)。是月 新一丁目、東古町、中古町、今京町、西京町、京一丁目、出京町、本坪井町、新坪井町年貢地、寺院地子、掃除方地子等に居る者共町並の諸役勤める様、尤町並出銀は半分に仰付らる (町日目)。町地子、寺院地子年貢地等居住者も番公役貫錢町並負担せよ (式稿 39)。物貰には別当より札渡す。無札で物貰えば丁頭五人組まで処罰す (式稿 110)。家中知行代々相続の儀 (藩法 510)。
12. 8 郡方役料向後本知 200 石内々の面々は 200 石迄に足下され 200 石以上は都而右役料を渡下されず (諸帳 2)。但し勤懸りは今まで通り渡し下される (諸拔)。20 年貢米皆納の達 (藩法 575)。27 諸郡村庄屋脇差御免成られ度、且吉凶札に上下着用の儀郡代より願の処庄屋数過分に付、近村は懸受持にて員数減じる様、されば脇差を差免ぜられ、上下も勤め方良き者へ賞美に仰付らる (覚)。是月 在中へ差出されし役人、郡横目上地内検等心得に付書付渡す (諸拔)。非人札の事、熊本上下河原其外村人畜になく村端に居る非人共都而教悦より札渡置き最奇々々非人小頭立置き影踏の節は小頭共召連踏せる様にとの事 (会旧)。諸寺社の 1、5、9 月の祈祷を止め寄附米銀等を取あぐ (寺例統)。御銀所より振出した銀子封切前なら取替えるのでよく調べる (式稿 41)。式日出仕に付達 (藩法 580)。再春館、薬園を設く (本)。奉行都甲太兵衛退任隠居す (本)。

是年 郡奉行役名を郡代と改称、郡医師頭の上座仰付られる達（会譜）。在中水半指止（会譜）。一領一疋名跡売渡表向倅と称すは不埒との達（会譜）。川尻作事所目付が兼帯をやめ熊本作事所目付より定詰 1 名となる（川尻史 233）。御召船泰宝丸新造す（川尻史 242）。寺社見世物芝居指止（藩法 575）。百姓子弟町人養子禁止（藩法 575）。郡奉行山奉行改称（藩法 575）。年頭礼式達（藩法 575）。惣庄屋算用滞に付達（藩法 575）。在中水半、医者医案、家中奉公人給銀（藩法 576）。奉行所溜の間規式改め（藩法 576）。宗門改を類族方へ移す（藩法 576）。唐船抜荷に付達（藩法 576）。虚無僧本則差出（藩法 576）。慶安坂筋に櫓会所設置（城南 453）。城代は家老を充ると定む（家譜続）。高瀬町奉行廃止郡支配とす（肥）。洪水虫入等にて損毛高 12 万 5000 石余と届出、免 3 ツ 8 分 6 朱 4 厘（肥）。是年より年貢年内皆済となる（旧章）。是年より奉行所家老間での家老、中老、大奉行、奉行等の会議に大目附、目附列座となる（旧章）。（安永 3 年 10 月 11 日より用人 1 人列座一寛政 4 年 6 月より同 8 年 5 月まで中止）。新知世減（旧章）。堀平太左衛門中老となる（旧章）。郡方請入の奉行を郡方奉行と改む（旧章）。郡頭 3 人より 2 人となる（旧章）。著書目録、時習館学規科条大意、法制 秋山玉山。踏水訣 諸家 小堀長順。水馬千金編 諸家 小堀長順。

宝暦 7 (1757) 丁丑 (家重) 重賢

1. 16 従来郡代は小姓組番方を任命、今度仁田市郎左衛門郡代当分役命ぜられ座席が低いので引上を願出たが当分役は自分持の座席のままとの達（覚）。17 野津原郡代永田小右衛門阿蘇南郷へ所替 鶴崎野津原両郷の束ねを平川喜八郎内藤勘左衛門へ仰付らる（覚）。19 時習館総教長岡内膳ら臨席して再春館開講（重賢伝）。是月 諸郡村庄屋減方 620 人とし退役の庄屋は郡限の名簿を差出せとの達（覚）。坪井米屋町より失火し類焼 74 軒（町日目）。六所宮例月の祈禱、以後社役とす（寺例続）。町中本番、立番、自身番入念に、特に夜半警戒を要す（式稿 37）。防火に際し争論禁止、廻り役指揮権なし、鳶役横暴禁止 火事場廻り役飲酒禁止、其他防火規定（式稿 38）。町方男女共順礼に出る時は届出、差図を受けて出発せよ（式稿 111）。江戸より御国相撲取伊吹山、不知火を酒井雅楽頭が召抱度しと申来る、年季を限れば兎も角永く他所へ出置く事禁止の国法と返事す（式稿 892）。
2. 12 中老乗興（藩法 582） 18 役々条々渡下さる（藩法 576・582）。21 藩主在府中の歡事に付小姓頭込申出よ（藩法 583）。24 藩主来月 1 日発駕の件（藩法 583）。25 他国の腕廻など芸人は惣庄屋送手形で何れの御口屋より国外へ（藩法 576）。27 役人士席以上お目見場（藩法 582）。是月 蒲池喜左衛門中著座同列（本）。村山九郎次郎江戸詰（本）。諸役職条目達せらる（度譜）。庄屋 1588 人中 620 人を減じ、家士中御暇の者あり（先祖附・肥）。田添源次郎を郡方横目とす（肥）。
3. 1 重賢熊本発、小倉路、4 月 3 日江戸着（本）。13 家老三淵志津摩東上、明年下向（家譜続）。14 郡方横目田添源左衛門役名は其まま郡方奉行附仰付らる（覚）。是月 村庄屋減方に付ては人物本位、芦北は元来小人数故其ままに置く（年覚・年合）。造出町運上銀去年 9 月 300 目増方の達に対し減方の願出るも許さず（町日目）。

4. 11 重賢を始め参勤25人(実紀)。 20 上野火の御番(実紀・度譜)。 是月 御奉公に付差出(藩法 583)。 小国宮原町市原町北里町商人共、商売御免の品
品在中持廻り商売は許されぬ(覚合)。 横手手永古町村新町に居住の町人 167
人中70人は熊本より無断入込み惣庄屋の支配下にあるから在町同様に商売札掛
渡し取締方村方同前たるべし(年覚、年合、覚合)。 諸郡村々竊改は来春に至
り沙汰があると山本一角に達あり(年覚)。 寄村の庄屋は各村庄屋給引高合計
の2割増、脇差は1尺8寸以下を許す(会旧)。
5. 6 家老中川尻通行の節、町奉行、別当共罷出るに及ばず(藩法 872)。 13
薩摩巡見使熊本通行(本)。
6. 一 泰勝寺の夫仕繁く寺領の百姓共迷惑致す故先年改めの月限もあり向後猥り
にならぬ様との納所への達(覚合)。 諸礼式改めらる(肥)。 地引合を命ず。
田添源次郎、緒方九郎右衛門を之に当つ、明和6年成就(本)。
7. 一 6月の達に対し、1日に夫仕何人程、賃米等は何程遣せばよいかと泰勝寺
納所より伺出し夫々に付達(覚合)。 高橋町盆役踊日程等恒例故熊本へ達に及
ばず(藩法 877)。 胡麻大豆は向後9月限り皆納するよう、さもないと新米納
とぶつかり蔵方も混雑しその新米を低当に遺繰する場合その返済も遅れ、その
延引分の利子だけ損となる(年合)。
8. 28 鷹場及び鉄炮傍示杭に付達(藩法 584)。 是月 家中地居の者へ当暮渡前
知行高 100石に7斗、10石高に3斗5升宛当暮渡の内より渡下さる(触3)。
鯨手永御米払早田米は後年共熊本御蔵納、中田晩田にかけ川尻御蔵入願の通仰
付らる(合)。 志水才助奉行本役となる(本)。
9. 15 衣服制度は去亥2月仰渡されたが今度更に達の事(藩法 584)。 23 天領
椎葉山御用材木球磨川下歩銀60歩の1と定む(林制 112)。 堀平太左衛門出府
留守中蒲池喜左衛門大奉行事務助勤(本)。 是月 宇土町并鶴崎町も今度熊本
町並に仰付られるの達(覚合)。 佐敷町は前々より熊本町並に仰付られ郡並の
御用も勤来り以来共今迄通りとの事(覚合)。 阿蘇防中町へ旅人問屋なき為、
願により一軒免許の達(寺例続4)。 近年内證で百姓潰れがあるが無拠き潰方
はその訳を明かにし農業を怠り又は不心得で潰れた者は村人畜を放し追放を村
役人に指示、明高の節も右同断(覚合・藩法 261・郡中法令17)。 小間物所請
方と払方を分つよう仰付らる(難稜)。 水夫高に懸る諸割賦物究の事(年合)
10. 一 阿蘇坊中旅人宿の客帳は宿主より学頭坊をへて月行司加印を以て届出よと
の差図(寺例続4)。 在中御家人又は出稼社人俗人共に男女宝暦3年より7年
西9月迄他国へ出た者 823人と記あり(年合)。 矢部中嶋両手永当年貢川尻迄
銘々で上納しては道程遠き故浜町在蔵へ年内皆納の間に合う様且々納めさせ度
との郡代伺の通り仰付られる(年合)。
11. 10 手取米は昨年通りで増方なしとの達(藩法 585)。 是月 八代に文武稽古
所建ち文を伝習堂、武を教衛場と名付く(本)。 為替納は下方迷惑に付安永元
年より停止(会旧)。 当暮手取米差引残の内3分の2渡、100石高に5石、10
石高に2石旅詰者5石渡下さる旨(触)。 在中窮飢の救方、銀高 225貫 210匁
の内去暮4分の1を還元、当年は去年の通り返下さる(年合)。 諸郡会所役人
数削減不徹底に付派遣の横目と相談の上実施せよの達(年合)。
12. 4 八代密柑を献ず(実紀)。 18 各役々の条目を頒布しその職務に付守るべ

宝暦 8 (1758)

き要道を示す、又家中軍役の法を定む(本)。 27 江戸詰奉行村山九郎次郎乱心す(本)。 是月 中村手永の35ヶ村不作に付年貢滞米の15ヶ年賦を許されたが足米拝領の上2の口米、増水夫米を免ぜられ願米も拝領したので3ヶ年賦で上納する事になった(年合)。 在方の者で所罰され帰村した者は惣百姓の末座に申付たき旨郡代より伺あり、盗賊、姦犯の者までも右同様に扱えとの達(覚合)。家老中を始め役人中通行道筋先払等以来差出すに及ばず御役により惣庄屋宿口に罷出る様との達の処芦北は佐敷御番代通行の節は郡簡4人、郡代の節2人、大紋の羽織着、鉄炮持先払案内と今迄の通にする様と仰付らる(年合)。

是年 諸国菜麦出来の模様江戸へ問合せの書附(覚)。御蔵納給知高揃の事(覚)。小庄屋寄村仰付られ此時筆紙墨代引高等当時の通極むとの事(土管)。諸郡村々庄屋寄村仰付られるの達(会譜)。地引合仰付られるの達(会譜)。矢部中嶋両手永共村々寄村に成る(郷歴)。軍用として御手賦しらべは享保9年の勘定頭廃止の時御用番に渡置かれたが寛保元年願卸となり封印のまま渡置れた。宝暦7年比から奉行所の差出となる(度譜)。八代郡鏡村沖新地築造(肥)。当夏長雨、土用中早魃に付損毛高9万8500石余(肥)。免3ツ9分4朱2厘(肥)。在中預馬の儀に付達、俟約の儀に付達、百姓内證潰に付達、橋懸銀郡中上納達、百姓居屋敷床に付達、6月達文案達、家中手取米拝借金に付増下されざる旨達(藩法 576)。発駕前奉行所入、郡頭以下御目見御意の趣あり(度譜)。著書目録、再春館会約、法制、村井見朴。ほととぎす、教訓、平野深淵。韻選、辞書、細川重賢。大慈寺記録、諸家、大慈禅寺。

宝暦 8 (1758) 戊寅 (家重) 重賢

1. 17 安場五太夫江戸火消の者と口論の為知行家屋敷召上らる(本)。 是月 諸事慎むべきの達(藩法 640)。
2. 3 細川豊前守(興文)中務少輔と改む(宇土史 104)。 25 長岡図書興行隠居、養子長岡隼人相続(本)。 是月 帯刀の奉公人中譜代并筋目の者は従来通、右の外の名字刀を許された奉公人は人置所へ差出を行い暇とり帰村した者は名字帯刀許さず(藩法 640)。海辺在商札は白浜村10枚、河内村10枚、般津村21枚、近津村10枚、合51枚。近年諸漁少き為困窮に付雑魚触売仕度、尤御免の品に限るとの事、毎年根帳正月11月指上、札は郡代より渡(会旧)。家中地居旅詰は去暮残米の内3分の1宛、地居の面々勤料は心付米残半分を渡下さる(触)。阿蘇社家中抱高願により定免とされていたが享保年中出来高相應の免にされた。更に3ツ7歩2米の免を願出たが許されず其上相應の出来高免仰付らる(年合)。
3. 28 西追手門繕に付達(藩法 585)
4. 19 堀平太左衛門江戸より下着(本)。 是月 職人町別当は職人の内より勤むべき処相應の者なく甲佐屋又右衛門を任命(藩法 882)。本坪井立田口構際番所修繕(藩法 882)。町中道造怠らぬ様掃除頭より下役へ差図守るべし、分職奉行見分は中止、根取、外聞役は今迄通り見分す(藩法 882)。阿蘇坊中町旅人間屋1軒では差支ある故、今1軒免許(寺例続4)。
5. 3 道中往来に付公儀触(藩法 586)。重賢江戸発、6月4日熊本着(本)。 26 藩主入国ご機嫌伺(藩法 586)。 是月 町内横丁へ塵芥捨ぬ様丁頭組頭たかも気をつけよ(藩法 882)。在々より抜参宮の者過料課す(覚合)。

6. 10 棕櫚仕立に付郡頭へ達 (覚)。 11 日隈奎太夫奉行副役に任ず (本)。 15 松井式部江戸着、三洲志津摩に代り家老事務を執り將軍家靈屋手伝総奉行となる。この掛りの郡織衛依頼免、朽木内匠跡役となる (肥)。 是月 日田代官楫斐十太夫熊本通行 (本)。 家中地居旅詰去暮残米渡の事 (触)。 木倉手永御船町氏神祭礼に付笹踊は百姓共の興行を差止、当日 1 日国役者を雇う様との事 (年覚)。 胡麻大豆徳懸は後年共土反懸を行う事 (年合)。
7. 一 地引合残改方の事 (年覚)。 近年零落取救として土免通りの毛上でも郡代は依頼心付米を下渡し、免帳から差引いたが当年は無難の村へは心付米は下渡されず極々零落村へのみとする。又備荒用として一兩年貢米の内から少量の粃を藩蔵に貯えてきたが今年から 1 郡毎に郡代が郡蔵に貯える事 (郡困粃) (年合)。 困粃の制始まる (4000石、後2000石) (家譜続・年覚)。 郡代、郡間日勤となる。郡間建つ (肥)。 上益城郡中島手永を廃し矢部手永に併す (肥)。 各手永に困粃を命ず (旧章)。
8. 9 町人花火禁止 (藩法 882)。 是月 自分仕立の山藪も無断に竹木伐採禁止、山口の差図うけ切るべし (林制 113)。 飢饉の節の救米は上中下とし、上は 1 升、中は 5 合、下は 2 合 5 勺、春秋作出来の上取立、繁根本御用表蔵に入置く様、尤無高者、無高同前の小高者は省き追々各会所へ蔵が出来れば手永限に入置く様、己後右に付小麦米銀高員数等達あり (年合)。 横手手永地引合の事 (年覚)。
9. 3 玉名海辺の村へ鉄炮傍示杭新設 (藩法 587)。 11 合志、菊池、山本の一門の鷹場廃止 (藩法 587)。 是月 町在船持共他領にて難船或いは病氣にて所々世話を受けた者一応の礼すませ帰国の上報告せよ (藩法 883)。 八代城付の面々、扶持方村方直弘望の面々は村方、代官が支え無く承合えば其段夫々の代官よりの書付相添え惣銀所へ指出す様の達 (年合)。 徳懸は入念にする様と郡間根取中から上地内検を呼出書付渡す (年合)。
10. 1 類族届帳当冬より御右筆調となる (本)。 是月 知行取の役料を足高と、中小姓以下の役料を足扶持と稱呼を改む (本)。 戸越御屋敷地続の所、預地を畠山紀伊守拝領に引渡す (本)。 地居知行取高 100石に 2 石、旅詰13石、地居旅詰切米取10石高に 5 斗宛先取渡の事 (触3)。
11. 一 家中手取米増下さる事、地居知行取高 100石に20石手取、無役者18石手取旅詰知行取高 100石に43石手取、地居切米10石高に 5 石手取、旅詰右同差上米無今迄渡下された勤料は差止 (「度譜」は10月とす) (触・藩法 587)。
12. 12 八代密柑を献ず (実紀)。 20 家中手取米に付再び達す (藩法 588)。 25 金森式部少輔所領没収 (本)。 29 家老三洲志津摩江戸より下着 (本)。 30 道中往來の様式達 (藩法 588)。 是月 宇土八代在蔵建方の事 (年貢)。 池田横手田迎郡浦中富布田廻江各手永、年貢上納差支の節熊本町人の口入で銀子借受上納の処身上を潰又は死亡の爲取立手段も無く年賦と究置いたが返済なく惣庄屋の取斗い不充分、必ず払う様との達 (年合)。 菊池郡西寺村高野瀬村東迫間村藤田村石切共石場運上銀50目宛上納にて石切る様と郡間よりの達 (年合)。
- 是年 会所役人已下神文前書一統改め (会譜)。 矢部へ内検出在の時の詰所下馬尾村に建 (郷歴)。 矢部中嶋再び 1 手永となり甲佐惣庄屋の中嶋五良左衛門をこの惣庄屋に任命 (郷歴)。 古金引替 (藩法 586)。 玉名郡部田見村に樺方新

宝暦9 (1759)

地7町3反築立(肥)。当秋損毛高12万800石余(肥)。紀州琴姫死去に付和歌山へ平野庄太夫御使(度譜)。畠方の徳懸、差止め、土免上納となる(旧章)。

宝暦9 (1759) 己卯(家重)重賢

1. 21 江戸御供に付達(藩法 589)。是月 志水才助中着座同列(本)。此頃芦北川堀普請 500石以上(肥)。保田窪松山は寛永12年地筒仕立の節阿部弥一右衛門承懸にて山形等迄差図により地筒らが植懸し処、同14年嶋原陳外様鉄炮頭芦村十郎左衛門手に付出陳、帰陳後同17年迄に残らず植立を終り保田窪組中へ永代御預けとなる(年合)。
2. 2 下々奉公人給銀近頃増借申出に付達(藩法 590)。4 厄年に付佐賀関剣宮社人祈祷札差上度との願の通達す(覚)。5 細川若狭守利寛に公卿館伴を命ず(実紀)。是月 紙の他出禁止、紙漉共へも札渡を山鹿南関惣庄屋へ指示(年合)。小庄屋筆紙墨代に付1人限の寄村高、格のかね合を以て極めては不足迷惑故1村限に米を極め出米する様と惣庄屋より願出其通許す(会旧)。
3. 1 重賢熊本発、小倉路、4月30日江戸着(本)。7 將軍家重先月4日より右大將と稱す旨(藩法 590)。25 大雨出水(肥)。是月 餅米は2万5千石を定規払と究められていた処八代南郷で2千石余の減方願出たので2万2千900石余を払高に究置く様との郡代の願の通り仰付らる(年合)。
4. 7 二ノ口、増水夫米御免の事(覚)。13 重賢始め参勤30人(実紀)。25 重賢長男治年生る。胤次と稱す(家譜)。
5. 1 金銀掛合分銅改めに付達(藩法 589)。是月 沼山津手永村々田畑免分願の事(年合)。
6. 9 借金返済滞り、切金員数不足に差出不將に付達す(藩法 589)。是月 布田手永永野村湯谷温泉湯小屋宿屋取建、栃木温泉同前にし1年銀1貫500目宛上納の事(湯谷温泉始まる)(年合、年覚)。
7. 22 是日より24日迄強雨、諸川出水(肥)。是月 胤次、長岡を稱す(藩法590・触)。阿蘇谷、内牧村々疫痢流行(寺例統)。山田五郎左衛門、下村源次郎と口論、知行家屋敷召上らる(本)。紀州大納言3回忌、小笠原斎和歌山へ使(度譜)。
8. 10 中村手永方保田村疫病に付同所社家へ銀1枚奉納祈祷仰付られる(覚)。
13 泰勝院(藤孝) 150回法会、来る19~20日挙行(藩法 590、家譜統)。是月 各郡の末木枝葉代銀定め(林制 113)。
9. 2 八代城修補方、是日願済(家譜統)。8 重賢9月11日に着座の筈(藩法 590)。16 野津原手永野津原村出火、家屋66、寺2、人馬会所焼失。米50石救恤あり(「年覚」には11月とする)(肥)。30 山本郡味取町出火、37軒焼失(肥)。是月 継飛脚、鶴崎南関佐敷筋を通過 鶴崎筋、熊本一大津5里、大津一内牧5里、内牧一笹倉5里(以上1時に2里宛) 笹倉一久住3里16町、久住一野津原7里20町(以上1時に1里半宛)。野津原一鶴崎5里(1時に2里宛)。道規合31里、時合17時。南関筋、熊本一味取新町3里、味取新町一山鹿3里、山鹿一南関5里(以上1時に2里宛) 道規合11里、時合5時半。佐敷筋、熊本一字土4里、宇土一小川3里、小川一興善寺2里半、興善寺一松江1里半、松江一日奈久3里半、日奈久一佐敷5里(以上1時に2里宛) 道規合18里半、時合10時(年合)。

10. 15 松井式部當之登城、將軍初見 (実紀)。 20 矢部手永70ケ村、庄屋37人では不行届故5年間に免高が下った。庄屋6人増員願の通り (覚)。 是月 油は大坂へ種子集まり少なき為高値となりし故、種子を余計に作るよとの触あり。されど態と余計に作るには及び申さずとの事 (年合)。 矢部手永年貢米、牛馬少なく運搬不能故在の蔵入を願う (合)。 正院手永味取新町出火 (年覚)。
11. 5 阿蘇郡吉田新町出火、21軒焼 (肥)。 25 八代蜜柑を献ず (実紀)。 是月 母出奔の子、家督相続、他家へ養子許さる (藩法590)。 在町絵図他出を禁ず (会旧)。
12. 3 増奉公人届出、例年1月15日限の処当月15日迄とし以後の分報告不要 (藩法 591)。 19 下益城の各手永会所役人増方願の通り達 (覚)。 是月 在人畜の者で熊本始め5ケ所の町へ入込居る者、又他所へ日雇稼に出る者共に法度の旨沙汰 (触)。 堀平太左衛門忌中に付蒲池喜左衛門大奉行助勤 (本)。
- 是年 当秋損毛高 10万6200石余、免4ツ8朱5厘 (肥)。 紙楮の他所売りを禁ず (城南 454)

宝暦10 (1760) 庚辰 (家重、家治) 重賢

2. 一 本庄手永保田窪道平野井手橋床替、井手堀替願の通 (年合)。
3. 19 野津小庄衛門知行に地方を望むならその事申出よ (覚)。 是月 本妙寺にて加藤清正 150回忌修法、物頭参詣 (本)。 矢部手永畑村川は筑後で飛渡の所であるが日向往還筋にて昼夜人馬の通行絶えず仮橋懸方許さる (年覚、年合)。 郡代出在の節馬を使えば夫役減少になる故その様達していたが、棕梨簡兵衛から遠路馬上にては難儀故止め度との願 (年覚)。 南郷栃木下湯、入湯者多く湯1ケ所では老人婦人共思う様に入湯できね故、今迄の湯坪に湯口2ケ所作の様委細は佐貳役より布田幸助に話してあるよう取斗えとの達 (年覚)。 大嶋久左衛門擬作高を地方に直下されたに付割付方しらべの事 (覚)。
4. 一 田浦在村の紙割賦、近年差止め中、又々当年より仰付られたが時節はずれ故払えぬとの願 (覚)。 養替に付宝暦5年、中老より書附渡され居るとのとの事 (覚)。
5. 11 北里手永村横目人数増37人願の通 (覚)。 13 將軍家隠居、家治嗣ぐ (肥・実紀)。 19 代替に付郡村帳公義へ差上の事 (覚)。 是月 甲佐手永三賀村、山口1人では見締届兼るに付2人にと願出に付その通り仰付 (年合)。 母出奔の子、家督相続苦しからずとの公義沙汰す (肥・触) (宝暦6、10の項参照)。 公儀代替に付判物を新しく渡さる (度譜)。 領内の廻船商売の為長崎に行く者積荷を茂木、網場浦より歩荷にて長崎へ運ぶ時は両浦船宿から長崎の歩荷問屋を通す様 (藩法 872)。
6. 1 在中雨乞あり (肥)。 是月 諸国大小の神社、京都より改に付神号難読のものには振仮名をつけ指出さしむ (寺例続)
7. 一 諸郡徳懸不揃であるに付て中老中より郡代并上地内検へ渡された達 (年合)。 時習館内に講堂建築始む (肥)。 幕府困米を命ず (万石以上1万石に粃1000俵宛) (肥・実紀)。
8. 4 公義触万石以上去年置粃の外分禄高1万石に粃1000俵置様、且万石より江戸廻米去年通りの内2歩通り減ず様の達 (覚)。 9 藩主江戸発、木曾路、9月11日熊本着 (本)。 29 合志郡上津久礼村の内新町出火 (肥)。 是月 玉

名郡清源寺村八兵衛油本手願の通(年合)。

- 9 2 此夜大風、被害大(肥)。 18 重賢妻(久我右大臣通兄妹)拝賀(実紀4—1)。 21 妙解寺衆寮出火、大事に至らぬも放火の疑あり(寺例続)。 是月山茶科と申木、八代釈迦院山、矢部山、阿蘇南郷山に多くその若葉は糧物として凶作時民家の助けとなるに付諸部広く植えよと(年合)。 大津町庄屋役2人の処1人減ずとの達(年合)。 高田手永寄村庄屋組合願の事(覚)
10. 9 備頭の坂崎兵庫登克依願役御免、栃木内匠昭真備頭、氏家基左衛門御側大頭を命ぜらる(家譜続)。 奉行山本一角、弓削清左衛門養子となり奉行職を辞す(本)。 19 町市郎右衛門奉行副役に任ず(本)。 是月 15才以下の者に駄賃馬索せる事禁止(町日目、藩法 841)。 歩小姓田屋久右衛門、吉武新右衛門吉住角右衛門に正蔵院幽泉へ貝吹入門を命ず。本藩螺貝師役の始りなり(本)。竹田平太夫(番方)病乱に付知行家屋敷召上らる(本)。本座年行司、平町人が勤めるのは格外だが新坪井町は本座少く、外に適当な人なき故来年々行司に米屋清四郎を申付られる様大夫より上申(藩法 841)。
11. 9 阿蘇中務、鷹司家来分に仰付られ、以後鷹司家執奏となる(寺例続4)。 13 村井復陽(儒医)没、年59(肥人)。 是月 惣庄屋正院武平次拝領の知行所柄に望有らば申出よ(覚)。 郡浦手永手場村百姓共大勢熱病煩い人蔘代 800目拝領願出た処、半高は勘定所より渡され、半分は郡間に有る唐産人蔘を代銀上納にて渡下さるとの達(年合)
12. 24 堀平太左衛門家老同格の御用受持(御用番)となる(家譜続、旧章)。 是月 阿蘇大宮司に於家来筋及び撰末社、社司等を処分する際は罪状等の書付を以て前もって届出るように達す(寺例続4)。 今度在中才覚銀 150貫目年内より来正月中皆済する様との達(年覚、年合)。 本庄手永村々寄村になっていたが当年から諸帳面を夫々仕立てるよう願う(覚)。
- 是年 養蚕業を盛にする為農民に桑樹を植えさす(家譜続)。 水足五郎兵衛重房に山林一切を司らす(肥)。 路傍、河岸等の宅地に楮、櫨を植えさす(肥)。 奉行日隈奎太夫留守詰として上府(肥)。 今夏以来打続き雨天時候不順、当秋損毛高16万5440石余、免3ツ8分4厘(肥)。 親鸞上人 500年忌法事3月1日より高福寺にて法事17日あり、齋米14石、参詣人3000人に及べり。続いて東雲寺17日あり、其外在々々次第に法会勤め大に利益を得たりと云(郷歴)。 赤星元周、願により薬種屋御免(郷歴)。 著書目録、村井見朴行状、史伝、村井琴山。慎庵遺稿、詩文、菽慎庵。

宝暦11 (1761) 辛巳(家治) 重賢

1. 11 時習館講釈始に付達(藩 591)。 24 増奉公人差出に付達(藩法 592)。 是月 時習館講堂(尊明閣)完成に付来る15日、出座の上講釈仰付らる旨、又以来毎月3の日4時より講釈始むと沙汰(触・肥)。
2. 11 鳥乱者取締の達(藩法 592)。 17 五町手永嶽村御留山に桧苗2万本植(林制119)。 28 江戸詰門札入出について(藩法 592)。 是月 衣服制度(藩法 592)。
3. 1 重賢熊本発、小倉路、4月5日江戸着(本)。 是月 徳懸の法潤色(肥)。 菊池甲佐築を郡受仰付られていたが鮎弘方不納にて進上差支るに付当年より己前の通御手築仰付られるの事(年覚)。 甲佐菊池鮎執方乏敷、己前の通本川筋

并枝川に至迄3月より4月中小鮎取り差留(年覚)。

4. 6 於花畑条目写達(藩法 593)。 7 たこ揚げ制限(藩法 593)。 12 映心院(宗孝の実母鳥井八郎兵衛の娘きわ)田町御屋敷にて死去(本・度譜)。是月 知行加増ある面々地方割合の事(覚)。高田蜜柑床木数等改に付小前帳控あるとの事(覚)。2尺以上の風上げ間敷との事(町日目)。
5. 14 郡山見締、杉松苗仕立方等受込役人3名をおく(林制 121)。 15 巡見使お越心得(藩法 593)。 25 拝領山、立山、在宅屋敷の立木伐採は許可を得る事(林制 122)。 26 楠仕立(藩法 593)。是月 御霊屋手伝拝領物あり、入目13万4720両余(本)。久我右府通兄死去(綱利の孫、重賢室の兄)(本)。本庄手永本庄村の高500石余の処、馬数9疋所持にて田根付手段致すに付、御買上の洩を庄屋源助へ仰付られたならばその利潤で毎年馬を買入れ零落の百姓に渡し度しと願出たが許されず(年覚)。
6. 6 産物帳2冊、奉行所へ遣す(覚)。11 巡見使通行に付紙園祭延期(藩法 593)。 16 將軍家重死去に伴い重賢靈廟の修理、墓碑建立の手伝を命ぜられる(熊本には28日、国内には7月1日に達せらる)(実紀、家譜続、藩法 593)。 24 幕府西国巡見使使番熊本巡行に付家老長岡助右衛門、新堀にて面接す(イ6、14又は8、24)(肥、実紀)。是月 江戸逗留は原則として1年を期限とし影踏には帰る様、但し相換取は例外で3年宛6年連続逗留許可さる(藩法 893)。天守支配頭并附屬諸役人泊り番始まる(本)。奉行日隈奎太夫下着(本)。霊屋御手惣奉行松井式部、副奉行松野亀右衛門等なり(本、家譜続)
- 7 一 免極めに付、郡頭へ書付相渡す(覚合)。在人畜の者、当分渡世として熊本并5ヶ所其外在町へ出た者に付、月番郡代へ書付渡す(年覚)。千反畑小場丁下渡場に居る物貴、生所八代郡丸山組と申し以前より普請方抱夫の由、坪井村人畜に差加置くとの達(年覚)。土山瓦代米差継上納分として瓦焼きを立て置いたが右瓦の未納分の代米は端境期算用の時、現米で上納命ぜられたが、それを古米算用迄延期し、瓦御用の節は瓦で上納致度との願(覚)。大阪よりの下船に僧俗、荷物等の便乗許可(藩法 894)。
8. 14 支配浪人譜代などの罷免については事後報告。不届による者は事前報告を奉行所へ出す事(藩法 594)。是月 博奕者に付ては郡代より届出るもあり、郡代銀締方にて処分するもあり、己後夫々の口書を届出させ、当方にて詮儀の上刑法仰付るとの達(年覚)。桑仕立方に付月番郡代へ書付渡す。(年覚)。玉名一領一疋北川万助を荒尾惣庄屋助役に任命(覚)。八代芦北にて今度砂糖の種仕立の場所見立を志垣理右衛門に達す(年合)。
9. 2 山支配役は惣庄屋の兼勤からはずし方角の在御家人の内より任命するようの沙汰(覚)。 18 御咎に付親類差控の達(藩法 594)。 25 大御所(家重)百ヶ日忌法会の達(藩法 594)。 25 現通用文字金銀及び古金銀質入禁止と公儀より触(藩法 594)。是月 大津手永平川村にて猪による諸作損多く猪追鉄炮願の通許さる(年覚)。今度江戸増上寺仏殿修覆の手伝仰付られたが御用銀に付、郡代支配の御家人并百姓の内に寸志差上度き者もあるようと聞くからその内容人数に付、内達せよとの達(年合)。
10. 21 將軍家治より判物項裁(本・実紀)。是月 諸郡囲籾藏の修繕の財源に付郡代よりの問合に、囲籾を売当てるので費用見積りを出せばその都度差図する

宝暦12 (1762)

との達 (年覚)。小間物所請方払方を分つよとの7年9月の達は差止る (難稜)。正月謡初その他祝事等にて両座年行司出頭の節席順は座に不拘、身の次第に座着する事 (藩法 841)。六部巡礼并旅芸人等往還筋外徘徊禁止、旅人間屋の外止宿も禁止 (藩法 842)。

11. 9 手取米に付、去年以来の物入で勝手方苦しく減方も有り得るが藩主の配慮で今年は去年通り (藩法 594)。21 領知御判物頂戴に付諸士出仕 (藩法595)。是月 宇土町宿役御用の馬数少く特に零落の為松山九右衛門より揚酒本手15本差免ぜらる様願出 (年覚)。

12. 15 来春増奉公人望む者本日迄に差出せ (藩法 595)。是月 玉名郡中富手永の島巳兮 (初め志賀半右衛門) 養蚕機織伝習の為京都、近江に出発、翌年6月帰着 (先哲、重賢伝)。

是年 御召船、円亀丸新造す (川尻史 243)。

宝暦12 (1762) 壬午 (家治) 重賢

1. 11 田中左兵衛、溝口蔵人跡備頭に、松井土岐、田中左兵衛跡の留守居大頭となる (家譜続)。是月 甲斐政右衛門豊隆算学師役 (城南 480)。野尻手永出火 (年覚)。
2. 6 布田手永宮山村村山仁九郎、知行の内上畝物願の通 (覚)。18 寺院の移転、改宗、及び寺院への寄附譲地無用の幕命 (藩法 595、実紀、土管)。本藩はこれを閏4、1に達す (肥・藩法 641)。
- 3 一 御大工、御屋根葺、御左官、刀御免の事 (難稜5)。高田手永松江村上野村は手永中の宿役を請持居るが近年零落、宿人馬雇銀粮物等差支に付、御米拝借願出たが宿役は手永出米銀の究故叶わず再度願書提出したが庄屋共と惣庄屋意見合わず吟味の上報告の事 (年合)。
4. 6 深川手永水次村川筋に鍍砂あり、御用に付古町鑄物師方に付出す様との達 (覚)。

- 閏4. 6 御改の産物帳1巻の事 (覚)。11 家老長岡助右衛門熊本発、5月15日江戸着 (本・家譜続)。18 長岡胤次、姓を細川と改む (本・家譜続)。21 三縁山惇信院 (家重) 宝塔拝殿落成、重賢赴く (実紀)。22 昨年来工事中の増上寺霊屋修覆竣工、5月6日関係者を竜口邸に引取る。工費13万4725両 (家譜続・本)。29 役替加増などの節宴会の禁 (藩法 595)。
5. 1 増上寺工事竣工に付、藩主に宇津国房の刀賜る。14日松井式部、松野亀右衛門、益田弥一右衛門、志水才助、竹原勘十郎等13人に御暇並に賞賜あり (「実紀」は5月14日とする) (肥・実紀)。10 奉行井口莊左衛門政賀、江戸にて自殺、松井式部營之と争論のため (先哲・本)。13 胤次出生時虚弱の為届出を見合せ中丈夫になったので届出る。当年5才 (藩法 595・触)。22 藩主江戸発、木曾路、6月21日熊本着 (本)。28 4月末来旱天に付、鐘巻雨乞い (本)。是月 来年朝鮮人来朝の節鞍置馬等差出さねばならぬ処願により用捨 (本)。沼山津手永西牟田村地引合に付達 (年覚)。先年木葉山で江副忠蔵が取出した銅石の場所見分の為郡横目林田伊右衛門指向けられた処、今直ぐ掘方をするよりまず10人程で試掘せよとの達 (年合)。領内海辺の鉄砂を鉄に吹試しの沙汰 (年合)。在宅の者の慎に付定沙汰の事 (触)。
6. 13 在人数の者永年町家居住いたし本所へ引取るべき縁もなき者は町人畜に入

- れよ。今後人畜違の者を借屋等に置くべからず(藩法 884)。是月 久木野手 永大室来金山、田浦手永大川内銅山、田浦助兵衛自勘にて堀方願出る(年覚・年合)在中揚酒本手に付達の事(年覚)。
7. 8 熊本大火(「官制」「本」等史料により年度を異にす)(肥)。19 御精進に付達(藩法 596)。21 時習館3の日に加えて8の日も開講(本)。22 時習館出樹の規則(藩法 596)。28 時習館総教長岡内膳隠居し商隠と改め長岡伊豆守家督相続(本・家譜続)。是月 在中桑樹員数を調査す(本)。吉海市之允奉行副役に任ず(本)。養蚕の一件に付中老より郡代へ書付渡す(年覚)。池田手永御馬飼料の豆葉 800束の代銭、只今ゝ渡下さる様願出(年覚)。士席以上の子弟10才以上の者時習館へ差出すべく仕方、算用等の稽古もあり、出樹に付ては先年沙汰の通り(触)。
8. 7 家老有吉大膳立邑(瀬母)隠居、堀平太左衛門の重用に伴い事ごとに意見の対立あるにより蟹居命ぜらる。9月1日弟賀七郎家督相続、後に四郎右衛門立喜と改む(本・藩法 596)。8 是日と翌日、鶴崎地方にて強風(肥)。10 藤崎祭礼差延、9月15日執行と8月15日達(藩 596)。是月 侍屋敷防火に雇われている町人、火事場で町火消に対し狼籍の仕形あり。以後嚴重に取締る(藩法 842)。火事場の心得に付達(本)。日隈空太夫奉行本役に任ず(本)。
9. 2 有吉賀七郎先祖の遺跡相続(藩法 596)。4 上益城郡岩下町出火 134軒焼失(肥)。18 正院徳右衛門山鹿勘右衛門知行渡下されるの達(覚)。19 御配知渡に付荒尾手永各村に聞合あり猶又聞合の事(覚)。是月 菊池水次村前に今度鉄吹所仕立の為、家1軒建るに付郡代直触、西寺村七兵衛寸志願の通り村中百姓共一同も寸志にて御用場へ出夫仕度くとの事(年合・年覚)。阿蘇社家中請持の地方地味悪く寛文年中の頃から享保18年迄は高に3ツ7歩2朱の免に定められていたが上納過半の不足に付願により土免の内当年は免2ツ4歩の仮免仰付られ後年については今究め難いとの達(年合)。鉄砂吹方に付松炭焼方山床は中村手永矢谷村百姓手立山にて焼方致し、それに付齊藤長左衛門より達す(年合・年覚)。五町手永徳王村塩硝御藏、何年頃の建方か吟味の処享永2年3月受畝野開の内2反9畝9歩を召上られたる由申伝えらる(年覚)。
10. 1 大木舎人兼連家老に列す(本)。6 松井式部営之江戸より下着、家老に列す(本)。28 是日より重賢阿蘇南郷巡覧(本)。29 大津町出火 189(イ 169)軒焼失(本)。是月 堀平太左衛門足高の内1500石地面(本)。時習館門弟心得(藩法 580)。願出なく出家したる者に還俗を命ず。即阿蘇谷の百姓等内願なく同山にて出家せるを還俗させ村人数とする(寺例続)。
11. 9 桑仕立に付在御家人の内請込仰付られるに付支配銀の内より銀 100目宛渡す事伺の通達す(覚)。11 先月24日將軍家に若君誕生の旨(藩法 600)。18 松井式部、主水と改む(本)。25 若君 竹千代と名付くにより竹並びにたけと唱うる名は替えよと(藩法 600)。是月 上へ懸る場合口達も書面も「被成候を以来被遊候」とすべきの達(藩法 597)。玉名郡一領一疋登甲弥次右衛門竹崎字兵衛桑見緒命ぜられ勤料 100目下さるの達(覚)。
12. 19 五町手永東門寺林御山に桧苗12万4500本植栽を決定す(林制 124)。是月 在中寸志差上の進席金額は従来郡代より達があったが向後は内存の趣を願書に添えて差出せ。百姓で一領一疋を勤む者は銀 100枚以上、乗馬は不許(年覚)。

是年 熊本出火、坪井正院町より京町辻焼、先年京町大火より34年になる(郷歴)。損毛高13万2000石余、免3ツ9分8朱1厘(肥)。

宝暦13 (1763) 癸未(家治) 重賢

1. 一 北里手永宮原町客屋番惣左衛門、西里村の内、岳湯村明礬焼方願出、運上銀60目で許可す。運上銀は郡間納とす(年覚・年合)。池田手永上代村勘右衛門出小屋願出の事(年覚)。郡を他国では「ぐん」と呼び肥後では「こほり」と唱えるのは何か理由が有るかとの藩主の間で吟味したが分らず(年覚)。組中支配は勿論、家来に至るまで年90才以上に達した者があれば男女を問わず奉行所へ届けよ(藩法 641)。曲輪内屋敷の鳥巢を除く可きこと(藩法 641)。
2. 一 宇土郡金柵村川の流金色となる。吟味の事(年覚)。沼山津手永上河原村銅山堀方の様子吟味の事(年覚)。在中奉公人の給銀を増さぬようとの達(年覚)。
3. 23 相続による知行減又は擬作となった分、依頼上知分、惣庄屋所替による上知、河尻作事所役人転任により空屋敷を下方へ戻した起高分、惣庄屋罷免の上知分、横手手永内作事所土取場分、大津御蔵火除の畳地分、錢塘手永内の塘下費地分を書付石高を勘定所根取、阿部忠平へ差出せ(覚)。是月 麦作成長の頃、鷹野綱掛へ罷出ぬ様(藩法 724)。高田手永古麓村、御簀竹木改が行われる(林制 126)。奉行町市郎左衛門鉄砲頭に転じ、大洞弥一兵衛奉行副役に任ず(本)。大津町出火(年覚)。
4. 一 往生院、浄土宗触頭を仰付られる(寺例続・会譜)。
5. 28 強雨にて諸川出水(肥)。是月 高瀬、八代、川尻御蔵納俵を3斗2升入に改む(肥)。山本郡岩神村新左衛門の野開地金山堀方の小屋建方に付、運上銀を地主に渡さる様(年覚)。曲輪中道幅改の事(触)。津端御蔵納年貢米3斗2升俵とする(会譜)。松合村船江築方願達の事(年覚)。
6. 一 砂糖黍種子卸より製法迄の仕法、横手小頭太平と申者から伝えられる(年覚)。布田手永の内湯谷と申所、温泉あり、阿蘇山衆徒中より支配し度との事、下方吟味の事(年覚)。
7. 一 火術稽古は人家田畑を離れた川原で行い、鉄砲は定められた角場でせよ(藩法 882)。
8. 11 八代宮原町出火(肥)。是月 谷村手永を廃し、野津原手永に併す(肥)。
9. 1 病氣にて参勤延期中の藩主、是日熊本発、小倉路、10月5日江戸着、此時三洲志津摩城代を命ぜられ、明和3年4月まで勤続す(本・家譜続)。8 菊池郡隈府町出火、家53軒、寺2ヶ所焼失(肥)。是月 宇土町中にて新米買った者がある由、吟味すべし(年覚)。日田代官手代大塚忠右衛門、同所豆田町伊豫屋清兵衛を以て北里伝兵衛と境目に付論談。その返答を伝兵衛が伺出たので指示する(年覚)。郡浦戸馳之海底に真珠種貝仕立の達(年覚)。
10. 9 家老長岡帯刀豊之、將軍代替拝賀の為八代出発、同月19日江戸着、12月15日御目見(家譜続)。15 重賢参勤(実紀)。是月 宇土戸馳村寺本兵右衛門知行所の潮塘内の潮溜りの江子5反を塩浜として5ヶ年間塩上納御免、6年目より相應の塩上納の予定だが、所柄悪く1反2畝の塩浜しか開けず、残は年々開明を願出る(年覚)。
11. 12 妙応院(綱利)50回忌法事(本)。27 後桜町天皇(智子)即位、京都へ

の使者、続弾右衛門 (本)。是月 郡浦手永赤瀬村黒崎へ鯨漂着、村方へ肥料として下渡す (年覚)。矢部手永弘原村田畑地引合見図帳出来 (林制 128～136)。

12. 1 秋山玉山 (時習館教授) 没、年62 (肥人)。26 御作所出火 (肥)。是月 家中並に家来の末々に至る迄90才以上の男女、毎年本月中に届出るべし (明和2年に至り9月限と改む) (肥)。八代郡求麻山々諸木御払に付、八代町森新右衛門、求麻御領松屋惣吉、油屋幸右衛門受負、運上銀97貫 600目余相納める様との達 (年覚)。家中門松3段松とす。町人は5段3段勝手たるべし (藩法 842)。

是 年 春、嶋己兮、矢部氏宅に來り浜町娘子供に養蚕採糸の方法教える、養蚕并桑仕立方の書1巻宛村々に渡される (郷歴)。矢部寄村前々の如く庄屋村々に立てる (郷歴)。高橋町に製蠟所を設く (重賢伝)。郡吟味役を2人とす (本)。火術稽古は川尻町大慈寺河原で行くと定む (肥)。宇土支藩主細川興文、学問所温知館を設く (熊本県教育史上巻)。当夏 旱魃に付損毛高13万7950石、免4ツ1分2朱8厘 (肥)。御側吟味役2名を設く、安永3年より5名 文化8年より4名 (旧章)。著書目録 以德政要、史伝、小堀常春。中星考 算書、池部如玉。養蚕裁桑同治法要略教諭、博物、嶋己兮。

明和1 (6・2改元) (1764) 甲申 (家治) 重賢

1. 23 北里手永西里村の内より明礬焼方出願に付許可 (覚)。竹千代を官位につくまで若君様と称するよう公儀より触 (藩法 597)。是月 作事所焼失に付変更した印鑑の控 (年覚)。隈府町出火、被災者拝借銀出願 (年覚)。菊池鉄砂場使用の炭の焼出に付御山并山切畑にて焼方を指示 (年覚)。
2. 16 朝鮮使参府 (本)。28 組に入らざる中小姓も中小姓頭の差図を受くべし (藩法 597)。是月 他所よりの御使者飛脚等川尻通りにて必要人馬調達の先触急ぐ場合は、通常の町方→郡間→郡代→下方の手順はひまがかかる故、直接別当より錢塘惣庄屋に通知すべし (藩法 872)。隈府町より火除場設置を出願に付許可 (年覚)。作事所焼失に付下益城村より寸志を差出す (年覚)。地引合入組調査に郡間根取出在に付、加扶持造用渡下される (年覚)。荒尾手永茗荷園村斉藤又五郎知行所畑地の内、水利よき所3反9畝3歩を田に仕立たく出願 (覚)。
3. 22 家老長岡助右衛門江戸発4月25日熊本着 (家譜続)。23 来月、馬及び乗馬御覧を仰出さる (藩法 597)。是月 春作盛長に付網鷹野停止 (藩法 597)。大坂平野屋又兵衛代理源左衛門、三郎兵衛に矢部御山の内にて請負を命じ引渡す (年覚)。砂糖製法を伝承せる横手手永小頭より黍苗を願出る (年覚)。
4. 18 藩主帰国の暇あり、然るに昨年来病中に付願済の上是年滞府 (明和2年も同様に付滞府) (藩法 599、10・4付) (肥・実紀・家譜続)。22 八代郡高田御山、山口人員3名に減員の処を5人に復旧 (林制 137)。24 知行取扶持方大豆受取の格 (藩法 597)。是月 新三丁目別当に大坂長崎への旅行者添手形に門名でなく外と同じく苗字を記す事許可、尤も客帳等加印の為の苗字願は不許可 (藩法 867)。中村手永蒲生村靈仙村は寄村にて庄屋は靈仙村にいたが近年両村零落し庄屋1名にては支配届兼、両村各1名の庄屋を出願、許可 (覚)。松平薩摩守通行 (年覚)。松橋手永諸村洪水にて田畑冠水す (年覚)。八代鏡

村干潟、野津小左衛門年限受にて開明塘築立を出願（年覚）。

5. 18 曲輪門屋敷の屋敷町幅張出の為狭くなった個所を改善すべく命ず（「年覚」は4月とある）（藩法 597）。是月 丁頭別当達の任命は町方口の間で行っていたが別当は佐式役申し渡しとし、堅めは町方之間とする（藩法 842）。菊池羽根木村の内竈穴河原に水車願、横目見合の事（年覚）。町人数の者土屋敷内に家を建て居住する事は屋敷を出る時解体する条件にても不許可（藩法 869）。小天村湯浦に以前からあったがまた白浜境に温泉を発見す（年覚）。八代において文武稽古所取上げに付玉名郡立花村沖、八代郡古閑村、海士江村の際目地を開発拝領願出ているが、村方故障の有無を問う（年覚）。
6. 26 霊雲院（宣紀）御忌（本）。28 佐式役の職務分担を規定（萬合）。是月 白浜村にて石灰焼方を許可す（会譜）。郡代取替仰付られる（覚）。五町手永原口村出火、被災者拝借銀願出（年覚）。郡浦手永里浦村の百姓ら痢病にかかり畑草手に差支ゆ（年覚）。
7. 10 火術稽古場所に付て（藩法 598）。25 隆徳院（宗孝）法会来る16日の由（藩法 598）。是月 知行取扶持方大豆乗馬飼料差出期限達（藩法 598）。双方親より媒を以て縁約すべき処当人相対の密通を以て実の縁約と心得、親不承知なら押かけ奪取ような躰あり、所々役人へ嚴重統制を命ず（藩法 894）。玉名郡小天村横島村間の築塘工事見込困難に付、下益城、八代、芦北の海辺に開仕立の場所を見立つる案起る（年覚）。芦北牧山仕法改正に付、差支ある由惣庄屋より申立て、田浦助兵衛牧山受込改の願書提出さる（年覚）。宇土牧山駒仕立を中津角七に命ず（肥）。
8. 20 曲輪出火の節無用の者滞らざるよう（藩法 663）。是月 小田手永小天村海辺湯浦に温泉仕立の出願あり（年覚）。小田手永小天村温泉繁昌のため小屋出来（肥）。玉名郡横島村百姓白灰焼出願（年覚）。家中屋敷門小路等で染物禁止の旨廻役へ書付（藩法 842）。年貢納入に付郡代より惣庄屋に指示あり（年覚）。甲佐手永上早川村地引合に付御給地農民ら願の筋ありて惣地撫を命ず。但し外給地農民よりは地撫を断り度旨申出あり（年覚）。深川手永水次村の鉄砂吹方を差止む（年覚）。野津原手永内寄村の諸村、庄屋遠方にて迷惑なる為村を引分け各村毎に庄屋を置かれたく出願（覚）。知行取在宅人の内作の年貢、合力、切米取の地子の内作の年貢を命ぜられ、その旨奉行衆より月番郡代石川奎平へ相渡す（年覚）。八代豊原村五郎兵衛娘とよ、嶋己兮弟子にて絹着用を出願、その業に従事の間に限り許可（年覚）。
9. 7 八代鏡津口を長岡帯刀支配として是日番所番人交代す（肥）。是月 坂下手永友田村不作、漸く 170～180石上納の見込み、荒瀬の知行所も同様、米粒極めて細く、扶持方は脇の知行所より受取るよう村方よりお断りあり（覚）。小天温泉の許可になる迄、諸方よりの道法及び上の湯、次の湯仕立を出願し許さる（年覚）。切米取屋敷拝領しながら不届なる儀ある由（藩法 598）。
10. 4 藩主当冬滞府（藩法 599）。27 江戸竜口邸出火、20軒焼く（肥）。是月 下益城手永損引調べ西村作左衛門罷出取調べた処仕法は明らかなものではなくその場で取計っていた（覚）。町疱瘡流行、疱瘡子 130人、死者28人（郷歴）。坂梨手永より年貢米は大津御蔵払で輸送に難渋したから川船に致したく船造立の材木を出願、但各自勝手に造船の様子に付以後は元木払下げ不許（年覚）。

下益城五手永拔米を停める為派遣している御家人の勤料は当秋から手永出銀を受けず自勤で勤める事(年合)。細川若狭守、同中務少将家来と養子縁組の節双方主人の異存なき旨を認め出す事(藩法 599)。塩焔商売免許制とし中小姓以上へ手形をとり、それ以下は請人を立てさせて売買すべし(藩法 843)。材木切出し等に付郡横目出張の規定(林制 139)。

11. 5 琉球人登城、同月25日も同様(本)。 9 藩主滞府につき心得(藩法 599)。是月 宇土両手永札筒を吟味、都合53挺にのぼる(年合)。士席以上従額90才以上達(藩法 599)。長崎出向の者、問屋以外宿泊禁止。船は改をうけてから荷揚げせよ、難船はその旨問屋より證文指出、改を受け荷揚する事(藩法 843)。
12. 7 竹田領安藤村百姓ら高田手永の中無札村へ罷越し色々問題を起す時は、先方の郡代へ、重大な時は家老から先方へ延宝7年以来の取極めに従うべし(諸帳 2) 是月 在宅知行取、合力、切米取等の内作の年貢米に付、本庄、五町、田迎、横手、池田より内意を伺い出る(覚)。久木野金山堀方に付、豊後国竹田万助より書付提出、又赤沢藤右衛門列より金堀造用小前帳を提出(年合)。馬口労札運上始まる、銀1匁5分宛、納期1月11日(会譜・肥)。朝鮮人蔘価格極め(藩法 600)。郡浦手永へ長崎御家代加藤清左衛門真珠種5つあこや貝積込、三角戸馳の間の海辺に入れる(年合)。中旬より阿蘇山噴煙常よりも強し(肥)。高瀬町奉行復旧(肥)。

閏12. 一 領内並に他領の百姓の立退、居住願を改める事を郡代に達す(年覚)。八代城石垣等の修理を八代普請所に命ず(年覚)。鯨、沼山津手永より水利の為堀川普請を出願(年覚)。甲佐築川上見締、並びに鶴打方の日数飯米の下附を地土ら出願、又鶴打方の鉄砲矢数を達す(年覚)。久木野手永金山に竹田の外財を加え堀方を出願(年覚)。侍屋敷道幅狭き所堀などの儀に付達(藩法 599)。銅、唐金等の古地金藩外流出多く払底町中きせる屋共の願により他国出し禁止(藩法843)。新大工町惣兵衛長崎より綿弓弦師を雇、城下両所にて発売させる(藩法 869)。

是 年 飽田郡奥古閑村にて錢塘手永開新地10丁2反築立(潮害)。当夏早魃、穂枯等にて損毛高11万 400石、免4ツ1分4朱6厘(肥)。 著書目録 井蛙笑具雑書、細川重賢公。紫薇字樣俚諺鈔、諸家 友田左近右衛門恒澄。

明和 2 (1765) 乙酉(家治)重賢

1. 一 沼山津手永馬水村在宅人に対し農民逃散す(年覚)。布田手永下田村、東下田村寄村にて迷惑に付、下田村にも庄屋設置出願(覚)。熊本御蔵払い小麦、大豆、米古米共に津端同様1俵3斗2升入を命じ、また河尻御蔵払いは古米なきよう種子卸より吟味さす(年覚)。阿蘇山噴火、砂、筑後豊前肥前薩摩に及ぶ、殊に阿蘇谷中諸人難渋甚し(肥)。
2. 2 家中の者長崎へ旅行の際、往来手形の他、同役の添状を持参せしむ(藩法 642)。 4 細川若狭守利寛、日光法会に参向の公卿の館伴を命ぜらる(実紀)。 15 相良頼貞初めて將軍に謁し、12月18日従五位下近江守と称す(肥・実紀)。 24 沼田勘解由、御留守居大頭(松井土岐跡)になる(家譜続)。 26 紀伊中納言吉将逝去(本)。 是月 大坂登りの船の往来手形改正(藩法 872)。御用量表請負の吉王丸村忠右衛門が御用召上られたので、前銀渡の分を上納するよう達に及んだが、前銀分は量表に代えたので表で上納したいと云う。然し猶銀

- 1 貫 520目残るので、それを 7 年賦で返済したいと願ったが許されず (年合)。桑見締役を止め御山支配役の受持とす (城南史 451)。農民の伊勢参宮は高 500石に付 1 人宛承認、但し年貢未納、心付米等拝領の者は参宮不可の旨達したが不徹底の嫌あり (年合)。町在の者時習館に居寮する事は抜群の者に限る (年合)。味取新町山鹿継飛脚町別当受込にしたいと願の事 (年覚)。召上り御用の星原茶気強きによりかせ群茶を用いる旨用人中より達あり (年合)。
3. 2 大豆並に乘馬飼料大豆取扱支配方より惣銀所へ達となる (藩法 600)。15 養蚕奨励の為家中以下一般に桑樹を植えしめ、不用の場合は相応の価格にて取引せしむ (度支彙函では 3 月とし日付なし)(肥・藩法 642)。23 (イ、11) 細川胤次熊本発、鶴崎、木曾路、5 月 23 日 (イ、22) 江戸着 (肥、藩法 600)。是月 鳥打に子供等つけまわらざるよう堅く命ず (藩法 843)。小国杖立の湯本に諸商売を免許す (年覚)。
4. 13 増上寺火の御番 (本・度譜一六日に掲ぐ)。17 家康 150回忌に付大木弥七左衛門日光へ使者 (本・度譜一月、日を失す)。是月 本坪井町類焼救助の為相撲、歌舞伎芝居等を許すも雨天のため却って損失多し、よって在中にて綿弓 10挺 10年間御免 (藩法 870)。郡方目付役廃止に付、仕法は従前通なれば諸人心得違いなきよう達す (会譜・年合)。熊本御蔵納の米穀 1 俵 3 斗 2 升入れとすべき旨勘定所より指示あれど、郡代より下方迷惑に付従来通りを希望する由奉行衆へ上申、よって従前通りと達す (覚)。御蔵納の宝暦 13 年 12 月の有高並に明和元年 1 年間の減知、又は跡目幼少扶持方下げ分けられ擬作になった分、郡代詰小屋起臥等の差引書付、本月 7 日中嶋清右衛門より積方根取馬淵十太へ渡す (覚)。阿蘇山鳴動 (肥)。
5. 13 親姫 (重賢娘) 誕生 (本)。是月 備荒用に町中に銀積立家持 1 軒月に 5 銅宛か又は戸口割賦か適宜実施の事 (藩法 843)。御弓側木になる檀木伐方の事 (年覚)。矢部手永御山の内大坂平野屋又兵衛代三郎兵衛受負山の分引渡し終了 (年覚)。山鹿手永麻生野村時疫罹患者人蔘を拝領 (年覚)。
6. 一 八代城修葺の出夫 930 人は享保 18 年の例により 1 升飯米を渡し下され度しとの願なれど宝永年中郡役で行ったから今度も郡役で差出せよと八代郡代竹山甚十郎に達す (年合)。熊本城大天守に落雷 (本)。矢部手永目丸村庄屋新吉所持の古具足差上げ、阿蘇殿着用具足の由矢部忠兵衛より申立てる (年合)。
7. 27 90 才に達した軽輩、支配家来とも 9 月中に報告せしむ (藩法 600)。是月 花畑近火の際表門前へ駄付べき町人は西古町、中古町、東古町、新坪井町の 4 懸りより 1 懸宛輪番と定む (藩法 844)。90 才以上の者の報告は従来前年末であったが 9 月 10 日を期限とす (藩法 844)。本庄手永下近見村に出小屋揚酒屋商売、外にも出小屋建方を許す (年覚)。
8. 13 江戸にて重賢娘斧姫誕生 (中頃説姫、後セツ姫)(度譜)。是月 菊池郡村農具札御免の者が御山内の良木を剪取り農具を作るを吟味したが分らぬから札を取上げ、今後はそれを職とする者に運上銀 3 匁を納めさせ札を与え木は手才覚で拵えるよう (年覚)。大津町水車願の事 (年覚)。抜米取締のため御家人を飽田託麻の各入口計 23 ヶ所に 1 人宛配置、新米を持出し町家へ売渡す事を禁じ違反者は捕縛すべし (年合)。
9. 4 堀平太左衛門熊本発、途中大坂にて用務、11 月江戸着 (本・家譜続)。

家老大木舎人熊本発(本)。是月 切米取の者屋敷を他に借すは召上ぐ(藩法 600)。坂下手永同田貫村の鍛冶共、刀脇差を鍛える者の有無を調べたが、現在は鉄鎌等を作成するのみで該当事なし。尚、同村元禄年中亀甲村と改称(年合)。

11. 一 相撲取の身持修行について訓示す(藩法 844)。野津原惣庄屋並に手代御算用について出張の節はその経費は手永より支弁せしも宝暦5年より自弁となる、これを在来通り手永より支弁されるよう願出る(年合)。在町の商売出小屋にても取扱うのは従前より沓、草鞋、木の実の類の外は扱かわぬ筈(年合)。菊池郡水次村の塩硝焼に付て御横目が在中に罷越焼方等の様子を調査の事(年覚)。高田手永東川田村は15ヶ年御損引願も申さず農業出精仕るに付樽肴を下される(年覚)。
12. 1 將軍の若君名乗家基ときまる(本)。12 八代郡松求麻村御山御留山なるも取締不十分に付達書(林制 141)。是月 飛脚、僧俗等の一夜宿從來旅人間屋輪番にて引受たるも今後呉服三丁目十右衛門を定宿とし、間屋中より月に22銅あて十右衛門に補助する事(藩法 844)。横手手永無田口村の江子塘筋において白灰焼の出願あり、よつて見分す(年覚)。高田、関両手永の諸村願により御救米を下附さる(年覚)。

是 年 夏以来氣候不順、度々風雨強く、風損、水損にて損毛高13万5000石(肥)。願により細川式部江戸詰懸部屋住にて御目見(度譜)。困穀量も例年の半高(2000石)とする(城南 370)。免4ツ1分1厘(肥)。著書目録 成籍考 辞書 真嶋秀長。

明和 3 (1766) 丙戌(家治) 重賢

1. 一 御勝手差支え在中に多少によらず才覚銀を仰付らる(肥)。在中才覚銀に付郡代からの達、勘定所でそれに答え付紙(年覚)。武井忠助、井川次兵衛、棕梨角兵衛ら御擬作 100石宛を地方に直して下されるに付御知行下割1巻之事(覚)。
2. 17 若君家基と称されるので名乗に基字あるは改めるよう(藩法 601)。22 御兼任將軍宣下若君誕生3つの御祝此節一同老中方御招請(本)。是月 嶋原城下出火 467軒焼失(本)。内田手永木葉町の者金山堀出しに付吟味の事(年覚)。
3. 一 郡代異動(覚)。水戸宗翰逝去7日穩便、但寺役の鐘、説法等はかまいたき旨、高瀬町奉行よりの伺いに回答(藩法 877)。將軍宣下御祝(度譜)。阿蘇坂梨手永宮地村財津次左衛門知行所、同宮地村、塩塚村江島伝左衛門知行所昨夏の洪水にて土砂流入荒廢せるにより当年より5年間上納免除を願出るにより許可(覚)。矢部御山内にて植木受負たる平野屋又兵衛代理三郎兵衛に伐り出せる材木を川下の錢塘、川塘他西原川原に積置く件、村方同意の旨通知す(年合)。穢多共衣服髪飾等の事に付達之事(年覚)。
4. 7 家基元服任大納言(本・藩法 601)。11 芦北郡野角村、大河内村より郡間御用薪買上げを命ず(林制 142)。是月 江戸白金に江戸定詰足輕の鉄砲稽古場を設く(肥・家譜続)。堀平太左衛門江戸発、途中大坂にて用務滞在、6月28日熊本着(本)。薮孤山時習館教授に任ず(肥)。藩主下国に付達あり(年覚)。

5. 1 重賢江戸発、6月4日熊本着(本)。 4 家老清水縫殿勝著隠居、耕雲(イ、朝雲)と改む(「家譜続」は前年とする)(本・先祖附)。 9 八代御城付寺尾平次、竹村次兵衛不行跡に付知行家屋敷を召上ぐ、また松田兵助、仲光七郎右衛門御城付及び水島市左衛門鶴崎御供頭右同断(本の付札)。 13 石井喜左衛門(鶴崎奉行裏印)士席不似合のかどにて知行家屋敷召上げ(本・付札)。 25 強雨洪水、球磨川1丈9尺、水俣川1丈3尺出水、田畑浸水 469丁6反余、萩原塘破損1255間、修覆人夫数19,507人(肥)。 是月 多勢参加の鬨闘あまり大規模故直ちに中止すべき処、それでは鬨末の者迷惑故12月迄に終りとすべし(藩法 846)。 御使者宿5軒を特定(藩法 845)。 野田伊兵衛郡代助役を免ぜらる(覚)。 商用にて領内旅行者正月影踏に間に合うよう12月中帰着の旨誓約五人組連判丁頭加印の上別当のもとに取置くべし(藩法 845)。 他国旅行者で正月不在者は3月影踏せよ、3月も帰らざれば欠落扱いとす(藩法 846)。 寺社心得方の儀に付達之事(年覚)。
6. 29 分銅改に後藤四郎兵衛名代九州へ下向の達(藩法 601)。 30 毎月晦日の精進は去年50回忌以後正月のみとなる(藩法 601)。 是月 旅人問屋肥前屋権左衛門、五ヶ庄宿、宇土御使者宿をつとめ多忙故、権左衛門差支の折は五ヶ庄宿を他に設ける(藩法 846)。 領主通行の道筋清掃に付て一駄橋近辺に不浄物を捨てぬよう(藩法 846)。 稲の虫害防除に鯨油を試用(年覚)。 横手永權田村より稲虫害に付鯨油代を願出る(年覚)。 6~8月九州諸国旱魃(気)。
7. 1 長岡帯刀豊之隠居、嫡子松井主人水當之相続、諸事帯刀の通り申付く、長岡の称を許さる(度支年譜は明和4年に掲ぐ)(本・家譜続・藩法 601)。 6 江戸洪水(本)。 是月 重賢、川尻を巡視の際惣庄屋の案内及び人馬寄せ置く事不用の旨達するも惣庄屋案内に立つ、よって改めてこの旨を郡代に達す(年覚)。 重賢隈府に赴く、案内等不要に付郡代に達す(年覚)。 大縄在中より差出し献上の事(年覚)。 南郷一領一疋加来松右衛門内より寸志として村方救米を差出す(年覚)。 飽田手永諸所稲の虫害防除に鯨油を試用せしめその効果を調ぶ(年覚)。 紙楮1ヶ年出来高、楮上納高、売買之儀、紙漉人数、漉立之所の紙船板の様子等之事(年覚)。 重賢、水前寺辺に赴く、止宿場所の有無等を調べる(年覚)。 重賢、腰尾辺に狩猟に赴く、止宿場所の有無を調べさす(年覚)。 重賢、山鹿・隈府・竹迫・大津等巡回、場所、道程、渡川等を調べさす(年覚)。 重賢、諸所に狩猟或いは逗留の際、人馬を寄せ置く事不用の達しあれど達しの通りにては人馬立方に差支えある為、一応人馬を寄置く事とする(年覚)。 河原手永広瀬古閑村、北里手永黒淵村それぞれ水車願、見分達の事(年覚)。 布田手永錦野外牧村、内牧手永黒川村田代村、それぞれ寄村の処、願により以前の通り別個に庄屋を設置す(年覚)。
8. 一 管尾手永柏在疫痢流行(年覚)。 新太米を川尻町で出買する様子、横目の耳に入る、よって杉島廻江両手永村々の抜米を調査し取締るべき旨郡代に達す(年覚)。 南関10町村より白檀の鉄砲台木1000挺出す(林制 144)。
9. 15 大膳弟有吉四郎右衛門立喜家老に列す(本)。 是月 村川作左衛門八代城付を命ぜられ、池田手永宮内、嶋崎両村の作左衛門の内作年貢米に付惣庄屋上申す(年覚)。 中富手永米野3ヶ村(堂米野、下米野、米野)寄村なれど庄屋1名増員願により設置(年覚・覚)。 新太米、川尻町に売渡すことに付吟味を

命ず(年覚)。

10. 4 三洲志津摩澄定家老御免、隠居、伊織助澄鮮家督相続(本)。 15 松野亀右衛門中老次座となる(本)。 17 船津村火事 141軒焼失(「年経曆」には11月25日に掲ぐ)(会譜・肥)。 是月 矢部手永大矢御山、木倉手永八勢御山の内にて炭焼の様子あり、吟味、取締を郡代に達す(年覚)。 今まで御米積船往来は川尻津方で改めなかったが、今後は実施、船頭等自分商売物を積むを禁ず(藩法 873)。
 11. 1 堀平太左衛門家老(本役)に列す(本・家譜続・会譜)。 是月 下益城郡河江手永三軒屋海手に新地畝 121町8反余成る(本・肥)。 質商売をする者は全て免許札を得て行う事(藩法 846)。 町在より参宮の者、小倉での宿は今後彼地での御用商人村上銀右衛門宅に定む(藩法 873)。 新米抜売の者1俵に付5匁の過料に処す旨達したるも宝暦6年の達もあり異同あるに付宝暦11年諸郡一統決定の通を達す(年覚)。 重賢、菊池隈府、山鹿、腰尾、田迎等に赴く、田迎に出御の際供廻りの者田迎小頭を打擲す、依而吟味の事及び隈府町右田藤左衛門宅を本宿にして差支の有無を調べる(年覚)。
 12. 18 山鹿郡下山山村百姓又蔵を火刑に処す(肥)。 是月 此頃に至りても本藩の収支合わず、総支出39万5000余石、総収入34~35万石なり、依て来年より5年間堅く儉約し諸事省略を命ず、年頭、五節句、朔望、其他諸札等何れも略式となる。 只家中手取米のみはこれまで通とし減額せず(家譜続・重賢伝)。 衣服制度(藩法 601・643)。 勝手方難渋につき儉約手取米に付て(藩法 643)。 祝事見舞酒宴に付制限(藩法 644)。 今京町伊曾路女房鶴崎へ旅し彼地で罹病するに付、彼地にて影踏願許可郡代へは郡方根取より連絡す(藩法 870)。 本庄多太夫御役御免、従弟田迎兵蔵差控えとして御用は田迎手代伝四郎受答う(覚)。 野津小左衛門御役罷免、後任決定まで同所手代安右衛門及び差控の種山弥平次手代金右衛門御用受答のこと(覚)。 御蔵納現在高その他減知、扶持方に下されたる分、擬作になした分、配知渡給地高等、阿蘇組寺社領、惣庄屋宮崎求右衛門、佐藤次郎右衛門知行分、芦北郡簡地侍知行分共にそれぞれ調査し勘定所に報告す(覚)。
- 是 春 京極宮家仁親王の所望により細川幽斎の影写(天野雪叟筆)を奉る。 親王より詠下賜る(本・家譜続)。
- 是 年 損毛高17万5500石(肥)。 免4ツ6朱1厘(肥)。 宇土家来井門三郎次郎道中に於て雇人馬の者を手討に致したに付、家断絶(本)。

明和4 (1767) 丁亥(家治) 重賢

1. 2 重賢来る4日5半時、時習館へ行く(藩法 602)。 4 年頭御札の方式(藩法 602)。 17 相良近江守頼完卒す。 年19、歿前の願により3月9月遠山佐渡守友明の3男源次郎福将相続す。 12月16日、源次郎従五位下に叙し、越前守と改む(肥・実紀)。 是月 宇土、戸馳、三角の海中に入れ置かれた真珠貝養殖、種子貝を拾い取る者ある由、吟味の事(年覚)。
2. 2 細川若狭守利寛、今春下向の公卿の館伴を命ぜらる(実紀)。 15 算学師範甲斐安兵衛歿76才(城南 480)。 是月 70文1匁替となる(町方日帳目録)。 細工町四丁目茂左衛門、上松尾村の畑に茶椀窯を願い出許さる(年合)。
3. 7 13、19日家治兼任將軍宣下、家基誕生の祝、老中招請の御能(度譜)。 是

月 大津地筒植立山間引剪あり(林制 150~152)。 八代密柑に鯛立肥を命ぜられたく願出、その代銀を拝借す(年覚)。 用心苗上益城にて仕立つるに付達(年覚)。 矢部手永菅御山内の鳥もちを樋方より取出す筈に付達之事(年覚)。 小国御山支配役杉松を仕立つ(年覚)。 御郡間御用紙、御支配役人中に支給の紙それぞれ減ず(年覚)。 木倉手永高倉山村の新堤井樋の造用銀を下附されていたも残金を返上(年覚)。 八代焼物師 5ケ年の間手間料拝領せず御用相勤、尚又永々手間料拝領せず御用相勤める者に名字刀を許す(年覚)。 阿蘇郡南郷村々熊本町家の者罷越、杉松の類を買取り御用材木にするが紛敷いので以来伐買出来る諸木を達せられるように(年覚)。

4. 9 江戸京橋辺より出火、初め竜口邸風下なりしにより刀剣その他重要品を大工町、左内丁下屋敷に移しし処、風向変りかえって下屋敷類焼し諸宝物焼失せり(「本」は3月5日とす)(家譜続・本)。 12 宗門改の儀分職御奉行当りを来年より類族御改所当りに改む(藩法 603)。 18 家老大木舍人江戸発、5月21日熊本着(本)。 是月 吉田三郎太夫を召捕り、11月高麗門に刎首(先祖附)。 八代郡を御郡代詰郡とす(肥)。 去夏八代求磨川洪水の節惣庄屋、在御家人らが夫方、水防に付不埒のかどがあり吟味(年覚)。 本庄手永戸島村野開畑の中に人蓼畑を仕立、地代、番人等の儀に付ての事(年覚)。
5. 一 花火禁止(藩法 847)。 郡浦手永三角浦白浜の真珠貝養殖場に羽瀬を設けようとしたが貝死滅す(年覚・年合)。
6. 19 社林、神木、社木の取扱に付達(林制 156)。 29 銀売買・銀道具拵禁止(藩法 603)。
7. 26 光寿院(藤孝の室) 150回忌(本)。 是月 田方虫入強く奉行所にある護符を神職が在中持廻る、一領一疋地土の内1人宛附添う。此護符は桜井惣次妻女、周防内侍に勤し節受けし護符にて作方の虫入等を除くと云う(肥)。 尾州、三州、東海道、宮嶋海駅、津浪洪水(本)。 オランダ船よりの海外風説を本藩年表に録す(本)。 田方虫付防除の為、鯨油を試用せし畝数、鯨油代を飽田、託麻より報告(年覚)。 沼山津手永木山町より竹宮村の間に御腰掛1ヶ所建設に付その場所を定む(年覚)。 木倉、矢部、砥用、野津、種山各手永の村々鋤柄、鋤床、轆轤札請持のもの吟味、但し木は才覚し御山内の木を剪取べからず(年覚)。 郡代が郡間に出席し申す儀に付、以前の趣は清田新助方より申聞かれた通の事(年覚)。
8. 一 二の口米上納御免、増水夫米は引続き徴収せらる(肥)。 油柚仕立方に付て田浦助兵衛上申す(年覚)。
9. 8 重賢倅豪次誕生(本・度譜)。 24 新田支藩主若狭守利寛卒す、年51(実紀)。 是月 郡間の御用紙記録減方の儀に付達(年覚)。 本庄手永戸島村の人蓼畑仕立に加勢せる在御家人数を報告す(年覚)。 大津手永東野馬草場に付て村々の者大勢熊本に押懸けた。依て取締を命ぜられていた者に過料を申付、差許す(年覚)。 芦北の獵師鉄砲札を紛失、或は鉄砲を所持せず乱雑なる様子に付、野津原、鶴崎と共に調査を命ず(年覚)。 田迎村より出仲間村之間に御休み所を設ける事を命ぜられその場所を調査す(年覚)。 竹丸入口の川手の櫓に地引合見図帳を格納す(年覚)。 諸郡の地引合諸帳の会所ごとの控帳は毎年虫干しを怠りなく行い嚴重に保管すべく命ず(覚)。 田添源次郎、緒方九郎左衛

門申談じ在中才覚御返算方并増水夫米今年より上納仰付らる (年覚)。

10. 一 盗伐木の末木末葉入札あり (林制 159)。在中質屋、造酒屋に郡代見込で銀高を極め運上銀を課す (年覚)。領内の津口、陸口の出入諸所運上を改訂す (年覚)。北里手永萩原村疫病罹患者多き為郡代支配銀の内より救恤す (年覚)。中村手永山内村疫病流行に付人蔘を下渡す (年覚)。小間物所納めの御用紙去冬御仕込の御用分納めず日限を以て上納延方を願い、当年御用分の楮で渡下され別紙を櫃方へ納、漉替え楮渡下されるよう願紙束数楮の積等の事 (年覚)。

閏10. 16 故若狭守利寛の3男将監利致相続す (本・実紀・家譜続)。

11. 15 長岡主人江戸着 (家譜続)。19 内牧手永綾野村小倉村現在庄屋1人にて迷惑なれば庄屋1人増員願出、許可さる (覚)。25 大木舎人家老を免ぜらる、座席御留守居大頭同列となる (家譜続・本)。是月 近年難渋に加え江戸町屋敷類焼に付手取米を減ず、地居知行取役付高 100石に2石減18石手取、地居切米取10石高に5斗減4石5斗渡し (触3・藩法 603)。

12. 15 長岡主水登城初御目見 (肥・家譜続)。是月 知行取扶持方大豆望受取の方法について (藩法 645)。小国杖立の湯銭諸商売の運上銀上納に付達、運上は櫃方に納入を命ず (年覚)。侍給地の百姓が寸志により一領一正に昇格の際、その給人に届出る必要なし (難稜 3)。

是 春 細川胤次瘡瘡にかかる (本・度譜)。

是 年 今年より5ヶ年間儉約、家中13石手取 (本)。旅詰渡方高改 (度譜)。静岡丸新造す (川尻史 243)。是年より櫃方へ納入の質屋運上銀 200目、150目、100目、50目の4段階 9月25日限上納。酒造屋運上銀 150目 (在中 120目)、100目 (同80目)、60目 (50目) の3段階 6月25日限上納 (藩法 898)。6月以來大雨、増水、虫入等にて損毛高24万1100石 (肥)。免3ツ9分9朱7厘 (肥)。著書目録 刑法論 経解 齊藤芝山

明和 5 (1768) 戊子 (家治) 重賢

1. 17 中瀬助之允長徳 (号柯庭・文山) 歿す。年81 (先哲)。是月 在の者を町家の養子とする事は家相続目的に限り認め、願書の外に養父同居家相続無紛段五人組より保証せよ (藩法 847)。細工四丁目茂左衛門木倉手永高山村にて亀瓦焼を願出る (年合)。
2. 6 長岡主人登城、帰国の暇あり、13日江戸発、山城領地に立寄りの上、3月19日熊本着 (家譜続)。13 大慈寺全焼 (年合)。14 三洲伊織助澄鮮家老に列す (本)。是月 西日本の秤受持神善四郎方より本藩内秤改入来る通報あり (肥)。鯨手永河山津牟田方の田植は格別の取計い仰付られ緒方九郎右衛門每每罷出見分いたす筈に付て懸郡代并役人中へ達之事 (年合)。
3. 13 松野亀右衛門と交代の為、平野新兵衛家老代として熊本を発す (本)。
4. 一 天草を日田郡代榎斐十太夫の預所とす (天草島鏡)。京、大坂、長崎よりの諸荷物陸口湊口通りの方法 (藩法 645)。家中の者京、大坂、長崎より荷物送らせる時は各留守居加印の証文見届の上御口屋を通すよう、其他の荷物は荷主より奉行へ申出れば陸口湊口通行手形を各番所へ送達す (藩法 847)。細工四丁目茂左衛門、松尾村にて皿茶碗焼方御免に付、御免の揚酒右の脇で商売を願出るも惣百姓中より断りを願出る (年合)。小代焼物師釜屋大破に付御銀拝借願出るも不許可 (年合)。新三丁目高塚屋安右衛門、長崎屋吉左衛門の御免

の焼物、在来天草石を使用すれど今後佐敷白嶋村の内嶋山白石で仕立度く願出、願の通り郡代に達す(年合)。

5. 1 重賢江戸発、木曾路、6月6日熊本着、松野亀右衛門、日隈空太夫お供(本)。是月 本藩内人口届出ず、総人数54万7590人、内男子28万9853人、女子25万7039人(原本数字に誤りあるべし一原註)(肥)。高田手永植柳村の空地に藤井源兵衛砂糖黍を植える(年覚)。
6. 20 公儀触により國中真鍮銭通用の事、真鍮銭1文に付銭4文の割(藩法 646)。是月 小代焼物師釜屋大破に付入用竹木苧縄等御郡代払を以て渡下す(年合)。盆前渡の米手当差支あり、双場をもって代銀を渡す(触3)。緒方九郎左衛門、田添源次郎の企画にて阿蘇湯谷に温泉仕立を命ぜらる(年覚)。松山手永笹原村、郡浦手永上下新開村の緑川筋干潟を中務少輔(土士?)開地にしたく願出見分の結果容易に塘築立を許されざる旨達す(年覚)。
7. 3 (イ4) 5月末頃より大旱にて6月23日健軍雨宮に於て祈祷、ついで日鐘巻出る(肥)。28 片岡善次郎惟良(号朱陵)歿す。年54、宝暦改革の名臣多くこの門に出づ(先哲)。是月 日勤の役朔望に1度の暇日を今後月1度に改む(藩法 603)。盆踊2踊の定規に成る(本)。
8. 8 長崎にて竜腦和製仰付られ、外来品同様、京、大坂、江戸にて定売渡しをするように(藩法 604)。9 川尻町柳堀の遊廓廃止さる(川尻史 620)。是月 日田代官榊斐十太夫領内通行(本)。
9. 28 御船方御用材木川下しの為、大津瀬田より下積筋水留を達す(林制 163)。是月 公儀触5匁銀通用、4分迄の輕重は不構(藩法 646)。法華宗町家で題目講と唱え大勢密々集会することを禁ず(藩法 847)。鍛冶職札改て支給、釘鉄物類製造に付ての達(藩法 848)。家中御渡方の節、印紙差出させ惣銀所へ差出してある印紙と照合して渡す(藩法 646)。惣銀所に印鑑帳を備つけ、頭々より印鑑を差出、代替、其他印形改訂の際はその都度頭より差出さしむ、又役付者は2枚提出、尚11月まで(触3)。
10. 2 今年より5年間格別の省略を命じ手取米を減ず、即ち地居知行取役付高100石に手取15石、切米取10石高に3石5斗宛、役料心附拝領米銀共4歩1減、当暮より5ケ年中御取上物を延置く旨を命ず(触3)。数年来の儉約の結果1ケ年の総支出33万5000石に減ずという(肥・重賢伝)。衣服制度(藩法 604)。是月 幕府蚕を生ずる地は、糸又は織物を製すべきを令す(肥)。
11. 19 役付の者は役料見合のため印紙を別に差出す事(藩法 646)。是月 大慈寺焼失に付建立材木を甲佐嶽で立木伐採の願が済まぬ内伐り始めた故 吟味の事(年覚)。
12. 2 御出の御供、又は御用にて出在の木賃、1宿主人4分、家来3分渡下さる(「法令撮要」は12月3日とす)(藩法 605・647・肥)。15 増奉公人給銭先年増方50目なりしが来年より40目と決める(「藩法 647」には12月13日とす)(年合・藩法 605)。27 御在国の節年頭御札規式(藩法 605)。28 来正月4日時習館御入講釈の儀(藩法 605)。是月 阿蘇南郷湯谷に温泉小屋建始む(肥)。文字5匁銀は銀相場に拘らず金1両に60目替、金1歩は銀3枚、1両に付12枚の割合とす(藩法 645)。御銀所より渡銀、欠半銀なきよう注意しているが若し渡銀に欠銀あらば封のまま銀所へ戻すよう(藩法 647・873)。川尻町の別当皆

門松を立つ、熊本と不釣合故在来の別当には差許すも以後新任の別当には禁止（藩法 873）。土席浪人の町宅借住は認められず（藩法 867）。砥用手永福良村粟津留村の者共が櫓方御用の半紙の漉方を命ぜられる様願出る（年覚）。正院味取新町、山鹿湯町、駅場町、別当惣代役の兼任を願出る（年覚）。

是年 泰宝丸造替（本・度譜）。前年より 5 ケ年儉約、地廻行列減、家中 13 石手取（度譜）。儉約の達（藩法 510）。運上築、釜、瀬張、縄場での漁獲は許されぬ（藩法 646）。馬見原町中の延岡往還に番所あり、惣庄屋支配にて番人も町人中よりきめおくも 特に仕事も無く 無用の番所なれば廃止方を郡代に上申す。然るに番所あるだけで旅人取締になる由にて在来のままに差置く事となる（覚）。菅尾手永馬見原町の者延岡萩原町へ出向き、騒ぎを起した事に付吟味する、以来商売に関し争いを起す場合に付郡代より達あり（年覚）。馬見原町の者下紙を漉ぎ商売したく願出る（年覚）。阿蘇湯谷仮小屋出来、来正月より入湯可能に付入湯其他の規則を定む、特に新規取立の所であるから特別に揚酒本手 1 本許す（覚）。在中出人の事、御国中一統の通り 3 万石の割合にて差出さる様にと宇土家司より願があったが出入増方は成り難い旨返事（覚）。田迎手永江津村土橋を石橋に懸替えたく費用は同村居住斎藤新左衛門寸志でと願出に付許可（覚）。五町手永宇留毛村の内白川筋石刳出来（覚）。追廻井手筋堀方に付坪井村庄屋より出願、郡間付紙の通り差許す（覚）。五町手永より御囲板蔵の建設を出願、願の通り承認（覚）。江津の清水苔に付疵苔の分は払方を認める様出願、疵苔は御音信所へ指出すよう（覚）。池田手永池亀村小川筋、下ノ川から大ぐろまで本地の内に新たに井手を堀りたき旨出願、その旨許す（覚）。矢部手永猿渡村に栽培の墨皮椿を上納したき旨出願、よって納入を許し以後は櫓方に納入すべく命ず（覚）。木倉手永御舟町源右衛門、物置の屋根を目板瓦にて葺替えたく出願、許さる（覚）。郡横目下田瀬助、砥用手永に御取立に派遣された処、水牢を設けたるに付、役目を差控さす、以後入選を入念にすべく郡頭に達す（覚）。高田手永敷河内村、植柳村の海岸開田の際、八代佐渡殿開田地に用水路が懸るので水路堀通しを出願、よって年貢、諸出米銀、諸役、賃米、作徳米等年々滞りなく村方に渡す事を条件に許可（覚）。中村手永下内田村は庄屋 1 人では届きかねるので今 1 人増員方を惣庄屋より出願に付承認（覚）。関手永市村、久原村、高田手永小中嶋村、中無礼村の 4 ケ村の庄屋は宝歴 7 年村庄屋人員整理に際し廃止されたが、取締等届兼ねるので従前通り庄屋を置かれるよう郡代より上申あり、承許（覚）。鶴崎高田手永嶺村の内下ケ名東原谷に堤堀方を出願、許可（覚）。布田手永長野村の内に湯谷は温泉あり、湯小屋建設したく郡吟味役より上申、許可（覚）。津口陸口の取締を在御家人に命ず（会譜）。当夏秋旱魃等にて損毛高 12 万 3000 石（肥）。免 4 ツ 2 分 2 朱 3 厘（肥）。**著書目録** 薬量考 医薬 村井琴山。

明和 6 (1769) 己丑(家治) 重賢

1. 12 (イ 6) 人吉城主相良福将卒す、年 20、歿前の願により、3 月 5 日松平伊豫守宗政の子護之進長寛相続す（実紀・渋谷記録）。**是月** 奉公人給銀定の通りにすべく達す（藩法 648）。
2. 27 江戸お供の面々裁付着用について（藩法 606）。**是月** 秤改め行なわれる（藩法 649）。矢部手永津留村の者、塩焔焼方を出願（年覚）。津津原手永矢野原村金堀の様子を報告す（年覚）。湯谷湯小屋の運営につき種々示達す（年覚）。

3. 5 重賢、熊本発、4月17日江戸着、途中大井川川止め5日、家老代松野亀右衛門御供(本)。是月 小代焼物師兩人、御入国の際御跡より御国に罷越し、御用怠りなく勤むるにより郡代直触れとなる(年合)。
4. 21 臨時朝会、重賢はじめ参勤22名(実紀)。是月 村人数放の適用範囲を定む(城南史494)。諸郡、新米を焼米にすることを当年より一統に差し止む(年覚・年合)。
5. 1 東叡山火の御番(本)。27 家老代平野新平衛、江戸より帰着(本)。是月 田浦手永にて焼立の白塩焔御用召上に付き、1ヶ年間の生産高書並びに出来合の白塩焔を添えて提出せよ、値段を達す(年覚)。田浦手永産出の白塩焔1斤3匁当として出すよう命ず(年合)。
6. 11 川尻方面大地震(川尻史 291)。21 順礼等に出かけるものは過料に処すべき旨御郡奉行中にて決す、また抜け参りに出むく者の処置についての控え(覚)。是月 矢部手永津留村にて産出の塩焔買上げを出願(年覚)。南郷湯谷温泉小屋竣工、6畳敷2間あてのもの2、7畳敷のもの4室出来(肥)。また入湯の仕法きまる(藩法 648)。東南の間に異星出る(肥)。天草高岡町に痘瘡流行(県史年表一天草譜)。
7. 17 細川豪次早世、3才、真覚院(本・度譜)。28 未ノ刻、熊本大地震(郷歴・本)。是月 在中無高百姓の内から、家中の開立山の見締として家来となし、普代として主人の屋敷へ引取ることの可否に付伺う(年合)。奉行日隈奎太夫江戸詰にて出立(本)。焼米、当秋より差止めを令す(藩法 649・触)。町家子女衣服統制厳守の旨を達す(藩法 848)。7月入津蘭船の風説を本藩年表に掲ぐ(本)。矢部手永津村の塩焔を買上げ、他に売ることを禁ず(年覚)。
8. 1 烈風地震(本)。川尻方面も地震(川尻史 291) 15 日田郡代天草に來り坪刈廻村する(県史年表一島鏡)。29 奉行清田新助(号南山)病死、年66(先哲・本)。是月 珍星出現(本)。在中奉公人町人立銀速かに差出すべきこと、人柄不安ならば請人を立てよ(藩法 848)。下旬より町在風邪流行し、感染せざる者なし、甚だ痛み強きこと例の感冒のごとし(郷歴)。
9. 3 幕府、本藩に対し、楫斐十太夫天草島預り中、唐船漂着または人数船等必要の節、及び十太夫公用にて渡海の場合等、人数船等差出方を命ず(肥)、これにより本藩にては、かねて手薄となりいたる武具の用意を行うことを得、数年の内に御備組は勿論、御側組、八代佐敷御留守居組何れも相応の準備をなせり(重賢伝・旧章)。15 新旧支藩主将監利致初めて参勤の礼を執る(実紀)。是月 外聞役は町家に対し諸事相慎み、圭角に相心得べく達す(藩法 848)。高瀬町奉行実姉の服忌中ゆえ繁根本社能興行警固出勤の節神拝遠慮すべく達す(藩法 877)。在中無高の百姓手永ごとに人数を調べ來春まで報告すべく命ず(年覚・年合)。
10. 9 神善四郎秤改め廻国の達(藩法 606)。19 堀平太左衛門大坂御用にて出発(本)。
11. 7 一町田組見立新田を役人見分(県史年表一天草譜)。11 細川胤次具足初竹原勘十郎これを勤む(度譜)。是月 大風地震(氣)。
12. 17 斧姫、説姫と改名(藩法 607)。18 重賢、任左兵衛権少将、新田支藩主利致叙従五位下、若狭守と称す(実紀・藩法 607)。26 年頭御礼規式(藩法 606)。

是月 三浦平右衛門奉行副役に任ず(本)。当夏田方虫入につき鯨油を入れた所は田高に1歩あて御米を拝領せられるべき旨達しあれど、油を入れた田にもそれぞれ違いがあり、また油の用い方にも異同があるので、それらを詳細に調べ郡代まで報告を命ず(熊史28号一渋谷記録)。

是年 池辺弥八郎に命じ、白川にて遊泳水練を指導せしむ(本・旧章)。玉名郡部田見村にて郡方開新地7町8反余成る(潮害)。奉行名簿に町市郎左衛門見えず(肥)。未熟の稲刈取糯米となすことを禁ず(本)。榎方へ納入の運上銀、紺屋職藍瓶1本に銀3匁、3月、7月の29日までにそれぞれ半分あて上納、締油、油船1艘に銀10匁、8月29日限上納、糞本手銀15匁、10月29日限、揚油本手同匁12月20日限、浦船帆1端同2匁7月29日限上納(藩法 898)。池田手永圃初蔵の建設を許さる(覚)。上益城馬場楠井手積所敷石普請(覚)。矢部手永大矢山付鍋川に桑の木多く、養蚕功者橘屋太兵衛を招き養蚕したき旨郡代より出願に付き許す(覚)。下益城諸手永に紙楮仕立の場所を出願に付き許可(覚)。南郷湯谷湯小屋取建につきての書付郡吟味役に渡す(覚)。杉嶋手永杉嶋村構口は水利不便につき井手を新たに設けられるよう出願に付き許可(覚)。甲佐築鮎御用分不足につき、御瀬張懸を命ぜられたる川上縄場の分は御用分がすむまで取除くべからざる旨関係各方面郡代に命ずるよう郡頭に達す(覚)。寸志により在御家人となった者、従類人畜放の儀、御郡により区々であるので以来申談之趣伺藩より許さる(覚)。当秋水損虫入等にて損毛高22万2336石(肥)。免3ツ5分9朱余(肥)。天草再度の増税(県史年表一天草譜)。

明和 7 (1770) 庚寅(家治) 重賢

1. **3** 堀平太左衛門大坂より下着(本)。**23** 細川胤次の嫡子屈を幕府に提出(藩法 607・家譜・肥)。
2. **15** 世子胤次の実名を賢年と定む(家譜)。**23** 胤次、埴姫との縁組願済、埴姫(細川中務少輔興文女)(度譜・本)。**是月** 明和4年より松井家にて築造中再度破壊につき、本藩にて引受け施工の八代敷河内新地 225町なる、此内 126町余は文武稽古所経費支弁のため長岡主水に給付す(本)。この入目銭 256貫 800目(肥)。八代植柳村出火、球磨仮屋類焼(本)。往還筋不明のため、旅人の道に迷うものあるを以て、石または木にて標示をたてしむ(肥)。村の内情によって分村を許す(城南史 363)。
3. **1** 説姫様(重賢の娘)の事御中老以上様と相唱(藩法 607)。在中地箇在方の妨なきよう締方(藩法 650)。**8** 天草に対する軍役配備す、然るにこれに付き浮説なきよう戒む(藩法 649・肥)。**29** 世子賢年と同文字唱の者改めの事(藩法 607)。**是月** 陸口湊口出入手形有効期限は翌月晦日迄とす(藩法 874)。御郡中御用向取扱の繁雑化につき、その調べ方の件堀平太左衛門書付渡さる(年覚)。里数木銘書の書き方堀平太左衛門より指示す(年合)。天草郡中地役人25名を13名に減ず(県史年表一島鏡)。八代植柳出火(年覚)。
4. 一 水俣津奈木より阿古屋貝を差出したので真珠の有無につき船津三右衛門より上申(年合)。
5. **3** 重賢江戸発、6月8日(イ6) 熊本着(本)。**7** 天草またまた増税し、向う10ヶ年定免となる新租額1万2268石余(県史年表一天草譜)。**22** 今度着城の上若殿様へ物頭以上便状御預(藩法 607)。**26** 天草翌日にかけ大雨洪水、西側

の被害甚大(県史年表一島鏡)。28 若殿様縁組につき物頭以上殿様へ便状(藩法 607)。是月 往還筋里数木の銘調方について指示(藩法 874)。東海道興津に朝鮮人漂着(本)。年貢米蔵納の節米廻の仕法を改む(覚)。鶴崎郡代 250石高なるを他の郡代同様 200石高とし、心附米10石を加うこととする(年覚)。保田窪人蔘場に百姓抱畑を召上ぐるにつき吟味(年覚)。往還筋追分に石を建つるよう指示す(会譜)。

6. 7 重賢、明 8 日着城に付物頭列以上御機嫌伺に出るべく指示す(藩法 607)。
24 宇土、八代郡代につき従前の通り両郡各別に任ず(覚)。25 御埴様今節より様と相唱(藩法 607)。是月 久住表売買の品々鶴崎町人請申すにつき銀拝借を願い出る(年覚)。池田手永岩立村京町村の内新出町に別当役をおかれるよう出願(年覚)。
- 閏 6. 16 浜町高札 1 枚新規に掛け加う(郷歴)。25 新坪井鍛冶屋町往生寺脇より出火、昼 9 ツ過ぎより炎上 7 ツ半頃鎮火、類焼 476軒、内坪井、京町、新堀、岩立、竜迫谷残らず焼失し古京町沢村大九郎宅飛火にて焼け、邸内の櫓も焼失すこの櫓は加藤家の臣森本儀太夫の築きしところと云う(本・官制・肥国誌)。是月 新米積登以前に新米大坂に出廻る由、川尻町別当共に問合せたが、その事実なしという。飽田・託麻・下益城・宇土・八代・玉名の各郡代へ郡頭より達(年合)。年貢楮を除く御買上楮の値段、前々からのままで下値につき値上げをする(年覚)。古米屋一丁目秀嶋屋忠兵衛に西 35ヶ国扱神善四郎秤座の取次所を許可(藩法 899)。
7. 2 元家老三淵志津庵死す、年 65(本)。4 宇土町入口の石橋欄干取除きに付達す(覚)。21 家老長岡少進季規辞職(「本」には 22 日と掲ぐ)桂山と改む(肥・藩法 607)。是月 石寺基助奉行副役就任(本)。
8. 30 在中へ無許可の商品を持ち運ぶようなれば惣庄屋村役人共に注意を促す(覚)。是月 家中・寺院支配及び町在の医師、振売にことよせ在中へ入れ薬をなすを禁ず(藩法 649・874)。大坂差登の包銀に中味不足がままある。今後かかる判屋は営業停止(藩法 848)。失火の節、六所宮及び行藤上総介が指置く防火方 10 人は職人町より遠近に拘らず必ず駆付ること(藩法 867)。
9. 6 家老代平野新兵衛、熊本発上府(本)。7 町家にて近年投機的空米取引を行いおる様子につき厳禁す。違背すれば本人はもとより、品により五人組町役人まで越度たる旨 5ヶ所町へ達す(覚・藩法 849・年覚・年合)。是月 在中へ無許可の商品を持込み密商売なすを禁ず。違反の品は取押えたる者へ支給(藩法 874)。
10. 一 奉行大洞弥一兵衛二十挺頭に転ず(本)。在中商売につき、茶、たばこ、とふたん、蠟燭、真綿、地布、せん香等の商品を許可(雑記古 3 番)。紙楮代銀を新一丁目久七、佐敷町その他の村方の者と相対にて前渡ししたが品物を納めず、よって久七訴え出たるも、かかる相対物の場合は取り上げざることとなっている旨を示す(年合)。藤崎堂近火(年覚)。
11. 20 家老代松野亀右衛門江戸より下着(本)。24 長岡主水先規の通り御先手を命ぜらる(本)。後桜町天皇讓位、後桃園天皇即位(「本」は先 28 日とす)(肥・本)。是月 下方売買代銀滞、借物の儀理不尽ありて訴出があれば、これを裁許(藩法 875)。天草より日田へ輸送の銀、其外役人の往来等円滑にはからうべし(藩

法 850)。筑後柳川へ肥前から伝来した大稲の種粃 1 斗柳川の台照院住持が吉井惣四郎へ御国への寸志の意で送り来る。本庄会所へ相渡し、そこから飽田・託麻上益城などへ分かつよう平太左衛門が命ず(年合)。本方年貢米に付郡代へ達しの一件の事(合)。

12. 16 人吉城主相良長寛叙従五位下、壹岐守と称す(実紀)。17 農家には巡見使並に大名方の宿の外、蘭表用うべからず(覚)。22 御備頭田中左兵衛不屈に付知行(4000石)没収、蟄居を命ず(本・付札)。27 阿蘇郡赤馬場村の内市原町出火64軒焼失(肥)。是月 薬種商の薬買付けは買札所有者のみ許したが最近不良薬を買い売歩くので、薬種屋中立合で人柄吟味し札を渡すよう、薬屋より申出あり、許す。(藩法 850)。農村販売に 9 品目の追加認む、都合17品目許可(城南史 374)。

是年 寺社町奉行所を塩屋町に建つ(本)。御物頭火廻番始まる(本)。「肥」には安永7年大河原火事の時よりとす(原註)。小天温泉御取寄について持夫賃銀願の通り渡されるので勘定所へ切手持参請取るよう指示す(覚)。矢部手永今村新井手掘りの願許さる(覚)。杉島・廻江・河江・中山・砥用 5 手永の寄村に以前の通り村毎に庄屋を置きたき願許さる(覚)。山鹿手永土蔵を建てるため竹木を御山より拝領したく願ひ出る。経費は郡間支配銭のうちから立替え払いとし、追而出銀取立返納致し度しとの願、許可す(覚)。山鹿手永湯瀬川の渡船破損につき造替を許されているが、古船を拝領したく出願、よって代銀上納しだい払下ぐ(覚)。久住町諸商売の仕法が定められたので、取引の便宜のため月 6 度の市日を許され度しと出願、許可さる(覚)。久住町源助家内宇右衛門なる者と不行跡につき、竹田領の者なれば差返しの出願、許可さる(覚)。鯨油を長崎にて購入、川尻へ廻着の予定、その受取ならびに在中への割当等につき郡吟味役田添源次郎、緒方九郎左衛門に相談するよう通知す(覚)。諸郡村々への地引合見図帳、名寄帳の清書共に完成す。これらは郡間の印形、或いは郡代の印形いづれにて下げ渡さるやとの伺いにつき達す(覚)。菊池川筋の築懸を一領一疋八並連駄弟同勝右衛門に請負せられるよう郡代よりの出願に付許す(覚)。普代家来を関所等の見締として知行所居懸りの村に差置くことは認めるが百姓を取立て、差置くことは禁ず(覚)。御徳掛の仕法潤色仰付られ下米に 1 割 7 分の御了簡下りを下される由(土管)。損毛高11万4000石余(肥)、免 4 ツ 1 分 7 朱 4 厘(肥)。三洲志津馬没(肥人)。九州諸国旱魃(気)。

明和 8 (1771) 辛卯(家治) 重賢

1. 4 重賢、登城時習館に入り講釈初(藩法 607)。15 宿次奉書を以て御鷹の鶴拝領(藩法 607)。17 竹田城焼失(「本」には 2 月の府内城下火事と併記)(本)。20 江戸麻布より芝辺まで大火(本)。27 家老代松野亀右衛門解任(本)。是月 高瀬町女旅行願町奉行手限りに申付く(藩法 878)。在中へ売買禁止の商品を持ち込まぬよう、また旅商人の直売は厳禁であるが、北里村は他領と境を接しているので従来通りの売買を認めるよう出願あり、但し野津原、鶴崎も同然なることとの議も尙議(年覚)。よって旅商人入込み禁止なるも小国・久住・野津原・鶴崎は他所入り交りの地故はまで通りに許可(「覚」には是年とし、月は明記せず(年合・覚))。
2. 15 宇土支藩主興文息興松立礼登城、初見の札を執る(実紀)。22 領内の御留

- 山確認の布達出さる (林制 168)。26 八代郡植柳村出火、民家 239軒、妙見宮球磨飯屋内に2108軒焼失 (肥)。是月 府内 (豊後) 城下大火 (本)。寸志 3代目の一領一疋は元の地土に戻す処、武具、乗馬等一領一疋の覚悟よき者は親の跡を継がす (難稜)。宇土支藩知行所は免方その他田畑人畜開立山諸竹木仕上剪方等一切御本方と違っている旨杉島、廻江、中山、松山、郡浦の惣庄屋より書付にて上申あり (年合)。
3. 5 重賢、熊本発、鶴崎路、4月16日 (イ12) 江戸着 (家譜続・本)。7 阿蘇郡坂梨町出火、157軒焼く (肥)。9 賢年嫡子届の件にて堀平太左衛門熊本を發す、留守中大奉行事務は蒲池喜左衛門、志水才助代理す (本)。11 (イ25) 家士縁組につき達 (藩法 608)。29 長岡豊之大山歿す、年68 (家譜続)。是月 荒地起方の仕方定まる (肥)。家中乗馬持の糠藁代に付て (藩法 608)。家士先祖武功について (藩法 609)。大坂より楮1万本の苗木を取寄せ、植付を奨励す (城南史454)。郡中御用筋減方に付いて郡代より達せられたケ条の内地方の模様違い、大火の場所の絵図の儀、村用水土手普請の仕法、遠在雨乞虫追願の事 (年覚)。宇土支藩知行所の免方等その他大豆粃上納年貢払米楮仕立其外色々について外の給知と異なる事宇土惣庄屋より報告 (年覚)。
4. 15 上野火の御番 (本・度譜)。28 後桃園英仁即位 (本)。是月 甲佐築は郡代受込請築に命ぜられているが、築筏内に無用の侍ら立入るに付き立入禁止の木札を立てる (年覚)。椋木御用木に指定されたので入念に取扱うよう布達ありしため、宇土支藩知行所内の取扱いに付き惣庄屋より伺い出る (年覚)。
6. 1 5月中旬より早魃、6月17日まで諸社祈祷、是日鐘巻出る (肥)。2 江戸大地震 (本)。14. 公儀御儉約 (藩法 609)。17 去る4月5日の幕命により、本藩5ヶ年の儉約を命ず (実紀・肥)。是月 野津原手永栗灰村の内に3丁程井手掘通し、それより延岡領竜原村の内1里6丁余掘りぬき、野津原小野村列9ヶ村の養水工事に着手す一安永4年竣工 (肥)。出火の節馬上での火事場入り制禁 (藩法 650)。役人廻在の節寺院に止宿すること故障なきや、また寺院に止宿するに差支えある役人あれば事前に承知したく、この旨郡代より内意を伺う (年合)。薩摩一來焼と称する茶碗は毒水を入れると忽にワレル由、芦北の御郡医師並、大塚玄林内々入手したるに付き献上す (年合)。矢部手代津留村徳助塩硝拵を上納したので代銀を下げ渡す (年覚)。在中村々にて病にたおれる馬多し (寺例続)。郡代より奉行衆郡間其外の達筋へ帳面で達しおかれたものに郡間の意見を書加え奉行衆へ達した既済の達について (年覚)。
7. 4 博奕取締達 (藩法 609・651)。18 細川若狭守利致当秋参向の公卿の館伴を命ぜらる (実紀)。24 隆徳院 (宗孝) 25回忌取越 (藩法 609・本)。是月 日田表御用助合穀銀相对借受禁止 (藩法 880)。在中にて畳表に薄縁を用いること不可、縁なしの畳を使用し建具等質素にすべく心がけるよう指示 (肥後藩後期法令集)。八代鏡の郡間築塘工事の人件費材料代等の支出方出願 (年覚)。高瀬御蔵米の積登の際上乘船として櫓方平田船も差し出さしめたので、これを「違曲」として大浜滑石小浜村船持どもより願書が提出された (年合)。
8. 5~6 隆徳院 (宗孝) 25回忌法事 (本)。
9. 27 世子賢年竜口邸より白金邸に移る (本)。是月 他国商人密々に領内で商売すること多く、熊本商人に打撃あり、嚴重に監督す (藩法 850)。長崎来航のオ

ランダ船ボルネオに漂着の筑前人 1 名送還す (本)。佐敷手永白木村のうちに金山らしき所あり、願により自勘にて試堀を許す (年覚)。

10. 1 山ノ口勤方の精励を達す (林制 171)。12 小堀東溪 (茶道) 没、年 72 (肥人)。15 堀平太左衛門江戸発、12 月 8 日熊本着 (家譜続)。是月 当年 89 才となった者と 90 才以上は別通にまとめて上申せよ (藩法 850)。
11. 25 天草郡中出米騒動が起り大庄屋の譲歩により解決す (県史年表一島鏡・天草譜)。是月 町内にての馬つなぎは往来妨害にならぬよう家主より注意のこと (藩法 850)。乗馬持ちの面々へ糠藁代は 3 才以上駿を置く乗馬だけに支給する旨 (触 3)。紀伊国の椀売について御達の趣もあり取締りについて郡代より達 (年覚)。他国商人が在中にて販売している商品は下関あたりの旅人が肥後向商品として上方で仕入れた物の由 (年覚)。
12. 23 乗馬糠藁代について (藩法 651・608)。是月 再春館位置不便利につき、山崎町に移し、明年正月より開講の事とす (藩法 651)。惣庄屋の親子兄弟は無苗にて帯刀を許し、また在人数より在御家人を命ぜられし者の親も帯刀を許さる (肥)。5 ヶ年儉約年限終りのこと (藩法 609・650)。日田銀相対借制禁 (藩法 650)。日田銀助合穀銀借用の手段 (藩法 651・880)。明攀の儀に付頭書の事 (年覚)。

閏12. 一 切れ金通用について達 (藩法 652)。朝鮮人蔘売捌について達 (藩法 653)。

是年 藩主留守中の城代は、一門の内にて任ずることとなる (本)。川尻河野家、参勤御船賦役を命ぜらる (川尻史 179)。永泰丸新造す (川尻史 243)。即位につき京都への使者木下平馬 (度譜)。在中地引合済、見図帳徳掛一件取堅、年貢納蔵々に付き改正 (本・度譜)。侍中乗馬飼料一統割賦仰付けらる (土管)。宇土八代の郡代、前々通り両郡別個にもうける旨示達あり、八代郡代藪市太郎、宇土郡代筑紫一郎右衛門それぞれ任命さる (覚) 一明和 7・6・24 に各別任命の記事「覚」にのすーよってこれまで宇土の諸願も八代の座に記載あり (覚)。津端より魚類を熊本町にふれ売りし、また熊本町より津端へ出向き直買は禁止されているが、今度、蛤貝・漬あみの類は許可されたから在中もれなく通知すべく月番郡代へ達す (覚)。在中の百姓のうち蘭表の畳を用いている者は 3 年のうちに取りはずさせ、4 年目には全て取替終了するよう郡代より命ず (覚)。宇土入用の紙楮を佐敷町より付越の時宿人馬差出すよう申来たと御惣庄屋より伺に付、受負の者共が、相対雇で人馬を差出すことは勝手次第と返答する (覚)。宇土家司佐方右衛門より増奉公人増方を願出、郡代より内意達す (覚)。楮の買上げ中止となりしたため小国産の楮を他所に売たき旨惣庄屋より出願、さりながら他所へ出すことは古来より禁止のため聞きとどけ難き由返答 (覚)。内牧町彦兵衛は参勤交代の宿を勤めているが、居室がせまいので自費にて増築したい旨願い出許可さる (覚)。松山手永園板蔵完成、底に目板を入れざれば板洩すため、目板を入れる願、許可さる (覚)。高瀬町奉行用宅の修理につき郡より提供の材料等準備しておくよう申しつけられていたが、郡に関係ある用宅ではないので、以後町方で取り計うように惣庄屋より出願許さる (覚)。廻江手永宇土御知行所木原村に有る郡間一毛畝物を宇土畝物にして欲しいという願、郡間の付札にて差支なしとの返事あり (覚)。大津御蔵年貢米受取り時刻は今年より八ツ時限となる、但し阿蘇南郷小国は遠方に付き郡代よりの申し出により七ツ半時頃まで受

安永元 (1772)

取ることになる (覚)。甲佐手永船津村より堤堀添えの事願あり許可 (覚)。松山手永立岡村新しく堤を築きたく出願許可 (覚)。鏡御開の潮塘筋の普請願に付いては御郡僉議の通り異儀なく許す (覚)。内田手永津留村より新たに井手 1ヶ所堀たく出願につき許可 (覚)。荒尾手永本井手村の川筋に筑後、三池領より水取りの礮をもうけ、井手を掘るに付、高役、諸出米銀村方よりの支弁のあてもないので支配銀のうちより下げ渡しを出願につき許す (覚)。当秋の出来高見分のため、田添源次郎郡吟味役を宇土、八代、芦北へ巡視させる伺い、これを許す (覚)。永井宇七兵衛俵坤寿金峯山嶽平人蓼仕立方の取締の為同所小屋に赴く (覚)。五町手永惣庄屋永井宇七兵衛心得違により手永中不取締に付差控えを郡代より申し渡す (覚)。鯰手永下鯰村列10ヶ村邪風入込み牛馬急死するに付薬拝領を出願、よって馬医よりの薬を下げ渡すべく通知す (覚)。当夏以来旱魃、虫入、種枯等にて、損毛高20万9270石余、免3ツ8分9朱7厘 (肥)。

安永元 (11・16改元) (1772) 壬辰 (家治) 重賢

1. 2 日隈空太夫江戸より帰着 (本)。21 幕府公料地に令して雑税を課す (県史年表一天草譜)。22 歩使番以下の刀脇差金拵禁止の令が守られぬ。頭支配方より十分達せよ (藩法 652)。25 宇土支藩主中務少輔興文隠居し、月翁と改め興松立札相続す (実紀・本・藩法 609・宇土史 106)。是月 兵学門弟入学、初学の心得 (藩法 610)。百姓の居室に藁表の畳を敷くことを禁ずる旨達あり (会譜)。
2. 25 米田波門は著家老代として熊本発、江戸に向う (本)。27 講釈の節8の日は小児輩出席なれど大人も勝手次第 (藩法 609)。29 江戸大火、竜の口、大工町桧物丁等の屋敷類焼、藩主、説姫石小田へ立除く (度譜・実紀・本・藩法610)。藩主晦日白金邸へ入り、見舞として上使来る (度譜)。是月 町家表向の作事見苦しくないようとり繕う事 (藩法 851)。矢部手永津留村徳助、白塩硝焼立仰付られ、納入の時馬は藩持ちで、御紋付の昇を許され度しとの事その願は許されず、馬も相対雇との事 (年合)。松雲院慈徳庵地子頭兩人丁頭に仰付けらる (藩法 870)。
3. 1 細川中務少輔隠居、与松家督 (藩法 609)。14 竜口邸類焼につき中小姓以上便状を以って江戸の藩主らに機嫌を伺う、4月1日上使を派す (藩法 610)。是月 天草郡はこれまで日田郡代預所と称したが、以後日田郡代兼任代官所と改称 (県史年表一島鏡)。上内検は土免割に際して内検と相談し、地方出入の書拔書を地方に当はめて決定せよ、また1戸内に2人の高主は許されず、高30石以下は兄弟で分けることは出来ない。これらのことは郡代へ達し各人よく心得るように (年合)。
4. 28 重賢、江戸発、木曾路、6月7日熊本着 (本) [藩法 610は5月23日に揚げ、6月7日の項に去る2日鶴崎着、6月11日に登城の予定とす]。是月 幕府、百姓の徒党、強訴、逃散制禁の法を定む、本藩これを御高札にかかぐ (肥)。大豆払につき達 (藩法 653)。乗馬所持届の書式について指示 (藩法 653)。
5. 8 騎射稽古に際し、見物人の規制、稽古人の心得を布達す (藩法 654)。17 長岡内膳忠英入道商隠歿す、年74 (家譜続・本はこれを23日とす。今墓碑銘に従う)。23 藩主江戸発駕、6月2日鶴崎着、11日登城の筈 (藩法 610)。是月 浦々の漁師の直売許され、高札渡る (肥)。盗物につき質屋心得 (藩法 851)。芦北、苦生産割賦47,700帖 (年合)。

6. 6 西国郡代揖斐十太夫死亡 (県史年表一島鏡)。8 家老代平野新兵衛江戸より下着 (本)。13 疫疾流行につき今晚中町平助・弥市両組男女残らず御宮に通夜す (郷歴)。19 簀養子願の様式変る (藩法 610)。23 所々役人惣庄屋へ雑穀類を代替するよう頼みの方迷惑。以後堅く受合申まじく、若し相対で申談ずれば惣庄屋も越度たるべし (藩法 610)。27 年頭、五節句御物頭の嫡子以下無足の面々御札規定 (藩法 611)。是月 家中乗馬所持の者へ糠藁代郡間より渡し下すにつきその手続を規定 (藩法 654)。
7. 3 烈風のため堤防諸所18,000余間破損す、また長崎御番船並びに荷船数艘破船 (本・家譜続)。5 3日の強風にて倒木倒家あらば届け出るよう達す (藩法 611)。20 乗馬飼料大豆払方について (藩法 654)。是月 町に“御”の文字は使用せざること、馬場でなき所を馬場と称さざることを含す (藩法 851)。五島沖にて蘭船難破、長崎へ曳き入る (本)。阿蘇久木野村山内にて金堀方藤井源兵衛に許す、金出さる由にて中止 (肥)。

当夏 天草大旱魃にて田方の損毛甚し (県史年表一天草譜)。

8. 14 新出町出小屋運上銀御免なるようお願い出たるも叶い難し (覚)。是月 奉行三浦平右衛門30挺頭に転任 (本)。雨降り続き田畑冠水す、為に玉名郡6手永急に飢え、救助として榎方より錢60貫目、其他御郡代才覚を以て、冬より春にかけ交附の錢 199貫余、粃23,360石余 (肥)。諸事慎方の儀につき達 (藩法 655)。新古川町子の字屋武七、天草廻船惣問屋願の如く仰付けらる (藩法851) 家中家来のもの酒屋などにて理不尽の行いあるときは内分にせず町方根取まで申し出さしむ (藩法 852)。
9. 23 侍并子弟馬乗御覧仰付らる (藩法 611)。是月 南寮銀2朱判通用両替の件 (藩法 655・本)。六所宮祭礼の節日数3日両座より雜興行はじまる (藩法852)。城・花畑近火の節、町中職人50人宛半年交替で作事所に駆付け、指揮を受くべし、当番の者で町並田子番は免除す (藩法 852)。薮市太郎奉行副役を命ぜらる (本)。歌舞伎芝居興行は領内歌舞伎座の者のみにて、旅座の興行や他より雇入れ等一切禁ず (年合)。
10. 18 来る12月4日関白近衛内前の姫入内、その祝儀として重賢は島津、前田らと共に朝廷へ太刀馬代金2枚、女御に銀20枚を献ず (実紀)。是月 長崎倭屋与三太を御国定問屋根締とす (藩法 853)。家中の士が私用を公用並に熊本町の馬を使用することを禁止し、相対雇の場合は迷惑を与えぬよう、賃金を支払うべし (藩法 656)。杖立温泉入湯規定 (藩法 657)。豊後梅を植えるため土地を吟味した処飽田・託麻・上下益城・宇土・山本・合志にある梅木及び梅の台木共に190本を来る正月に払伐る様にとの達 (年合)。
11. 一 致仕細川月翁宇土に下着 (本)。旅人宿改方の仕方は定式通り間違いなく行なうよう郡代へ達す (年合)。町方に疱瘡流行子供数多く罹患 (郷歴)。薬用密柑葉江戸にて品うすのため百通入竹皮簍1つ差上 (年合)。割賦物は申達後20日以内に仕向せよ (藩法853)。別当列の者着席順は5ヶ所町別当の次とす (藩法 853)。死刑執行日は全奉行慎とす、また町内の者死刑の節は、分職当番の奉行、根取慎のことを町中へ知らせること (藩法 853)。揖斐十太夫の嗣富次郎西国郡代となる (県史年表一島鏡)。

安永 2 (1773)

12. 4 女御入内に付き、氏家甚左衛門使者をつとむ(本・度譜)。米田与七郎是知家老職御用見習を命ぜらる(本)。18 細川立札叙従五位下、和泉守と称す(実紀)。19 11月16日安永と改元の旨を達す(藩法 611)。23 町人受刑者を町へ引き渡につき、手続規定を簡略化す。なお別当は毎月その生活の様子を報告書にして提出(藩法 896)。是月 奉公人は従来人置所より割渡していたが、以後取止め来春の出代りより相対となる。但し増奉公人は割渡(藩法 658)。八代屑密柑はこれまで音信所へ納入していたが、献上の残の屑密柑は全て百姓へ払下げとなる(覚)。旅人問屋組合成立により組内の1人の不将は組合中の落度たることを令す(町日目)。在人数の者が寸志等により在御家人に昇格の場合は、その者の従類は人畜よりはらず(難稜 3・覚・雑・難稜 5)。池田手永出火(年覚)。

是年 長岡是福天草表御手当総奉行を命ぜらる(本)。失火の節の火元の処罰について(藩法 895)。道方掃除の件(藩法 655)。火の番御免(度譜)。損毛高269,260石免3ツ9分3厘(肥)。高橋・川尻・小島に天草問屋を置く(天草譜)。著書目録 横田勘左衛門房卿覚書 諸家 横田勘左衛門房卿。再春館会約刪定解 法制 村井琴山。方極刪定 医薬 村井琴山。肥後国誌 地誌 森本一瑞。鹿郡旧語 伝記 地誌 山下甚左衛門親之。

安永 2 (1773) 癸巳(家治) 重賢

1. 19 近々建宮において狩仰付けらる(藩法 611)。29 御目見御礼について(藩法 611)。是月 吉海市之亟奉行本役に任ず(本)。蒲池喜左衛門 200石地面(本)。影踏の節15才以上の男には高札写を読み聞かすべく達す(藩法 853・町日目)。
2. 8 浄岸院(島津継豊室竹姫)遺骸薩州へ御越しにつき、2月10日熊本御通棺(藩法 612)。23 長須町疫病流行に付き、祈祷并に鉦太鼓を打鳴し追い払たく出願により許可(覚)。是月 住吉川口番所新たに出来す(難稜)。寸志差上たる者の相続は以来2代目までは寸志を差上ぐるに及ばず(難稜)。領内の船江戸へ廻航の際これまで江戸の船問屋未定なりしも、以後鉄砲州船松町船問屋長崎次郎に決定、在町の船持に漏なく通知すべし(年合・藩法 854)。旅用衣服及婦人衣服につき達することあり、次で8月さらに改むるところあり(藩法 658・肥)。押立の願書または伺筋等の達は親類あるいは町方根取取次を以て達するよう川尻町奉行へ回答す(藩法 897)。
3. 20 堀平太左衛門御備組組頭兼務を命ぜらる(肥・重賢伝)。23 長岡主水、妾腹の男子岩次郎を嫡子とす(藩法 612)。27 重賢、熊本発、4月8日江戸着、白金邸に入る(本・藩法 612)。

- 閏3. 2 外様向の武具は武具付けを達したので、奉行触も達するようにとの廻状(藩法 612)。19 北里手永松木村列疫疾流行につき藤崎にて祈祷、また参拝料は郡間より代銭上納を以て願の如く下げ渡す(「寺例統」は閏2月とするも今年の閏月は3月)(覚)。是月 天皇疱瘡を患う、御使番青木多角(本)。
4. 一 扶持方切手25日より翌月10日まで御蔵へ提出し、米を受取るべし(藩法 854)。高橋薪会所を差止めらる(難稜)。
5. 4 藩主4月8日江戸着座の達(藩法 612)。10 輕輩陪臣又は町在の者で御制度を犯す者又は疑しき風体の者へは遠慮なく姓名を承届させよ(藩法 659)。
- 11 大雨、諸川洪水、球磨川大水のため萩原堤塘外石王村受塘破損(肥)。25 志水才助本日御役御免(藩法 612)。盗みにあいたときの取扱(藩法 659)。是

月 物頭以上江戸詰の者の子女婚礼整いし時の御礼 (藩法 612)。諸郡近年不作等により御救い金銀を下げ渡すこと多く、その高も莫大にのぼる、しかも下方は出願さえすれば、何の差支えもないと心得違をし、仁政に甘えたる傾向あり、郡頭、郡代の教示不行届の点もあり、よく考慮するようなる達書を郡頭より郡代へ渡す (年合)。

6. 3 国産の榎の実を他国に売渡すを禁ず、よって惣庄屋より調査のうえ残らず藩の買上げに差出すように通知す (覚)。是月 定鍛冶不足につき町中の鍛冶の者 4 人あて毎日御鍛冶方へ出頭し加勢すべく命ず (藩法 854)。横手・銭塘・池田手永村々に「しい」と云う動物出で、牛馬の急死するもの多し、鉄砲 6 挺を貸し与え打払わしむ (肥)。
7. 21 教悦 (非人頭) 掟書の事 (覚)。恐 (ママ) 悦支配の者男女心得方掟書等の事 (年合)。諸郡の御免極について見積損引の仕法仰付られているが、所により区々の取り計いがみられるので、尚よく調査をし全てに仕法書を渡す (年合)。
28 暮頃より北の方空一面炎光見え、夜四ツ頃に至り、熊本内白昼の如く明り、其炎光の内に縦に笠を立てしようのもの幾筋も見ゆ、夜半消失 (肥)。是月 熊本町の漁船等に至るまですべて帳面に仕立て毎年 12 月 5 日まで上達せよ (藩法 855)。町在の女離縁の者侍屋敷へ推参の儀は禁止 (藩法 659)。阿蘇中務官位執奏につき上京 (度譜)。
8. 11 大身衆の家来の身分女中の服装に付問合せ (藩法 612)。25 三洲伊織助、分部若狭守弟松之助を養子に願い許さる (藩法 613)。是月 大里角次奉行副役に任ず (本)。杣方を御郡間附属とす (肥)。高瀬町願行寺遊行上人宿寺とす (年合)。諸手永の諸出米銀帳は毎年 1 月 15 日限に御郡間へ郡代より差出し調方吟味役へ渡していたが、今後提出に及ばざる旨を奉行より郡頭を経由郡代へ通知す (年合)。
9. 11 堀平太左衛門熊本発上府 (本)。24 栃木湯小屋の作事に関しては、是まで谷在の村々より請負管理してきたので願により湯亭の請負を仰付らる (覚)。23 天草牛深村茂串の隠れ切支丹、発覚する (県史年表一天草譜)。是月 家老職見習米田与七郎町方御用上聞を命ぜらる (本)。
10. 一 省略の儀は従来のままなれど、手取米を増加、その他拝領米等につき次の如し、役高 100 石につき 2 石増 17 石手取、300 石以下は 18 石手取、切米取 10 石に 1 石増、4 石 5 斗あて、御役料米銀 5 ケ年中 4 歩 1 減しておいた分は返還、拝領米高 100 石に 5 俵あて、200 石以下は 10 俵あて、10 石に 2 俵あて、中小姓は 5 俵あて (触 3・本・藩法 612)。売米が安値になるのは結局在中の抜米が多いからであると勘定所から報告があったので、各地の口留に出むかせる外様足輕小頭どもへ、厳しい処置をとることもあり、精々取締をするように申しつける (年合)。
11. 11 竜口邸新築なり、藩主移徒す (12 月 11 日の達) (本・家譜続・藩法 613)。
15 世子賢年登城、將軍と初見 (12 月 22 日の條) (実紀・本・藩法 613)。
17 遊行上人高瀬発阿弥陀寺に入る、29 日八代に向け出立 (肥)。24 河江手永小川、住吉、川口番所の設置を命ぜらる (覚)。是月 寺社方間数改めあり (郷歴)。
12. 一 面を隠す頭巾を用いる者多し、今まで有来りの頭巾の外かぶり物禁止 (藩法 660)。

是年 二朱判につき公儀より通用触 (藩法 660)。遊行上人巡国の達 (藩法 660)。増奉公人を 6 月以降に暇出した者には跡柄は渡さぬ極めなり、今後は 6 月以後でも跡柄を渡す (藩法 660)。御召船藤崎丸新造す (川尻史 243)。朝鮮人蔘の種子 1439 粒矢部手永御山内八ヶ所に蔘付、その造用錢 300 目の内 69 匁 8 分を使用、残りは榎方へ返納 (年合)。5 月大雨、8 月気候不順等にて損毛高 115,700 石余 (肥)。免 4 ツ 2 分 3 厘 (肥)。役割所内へ蔵 4 戸前建替え (本)。

安永 3 (1774) 甲午 (家治) 重賢

1. 1 米田波門江戸より下着 (本)。**是月** 賢年五節句、月次出仕願の通仰付らる、席は外様の下、譜代の上 (度譜・藩法 613—2・28 付)。塩硝を南郷で焼けば 1 釜幾日程で焼立てるかの儀、芦北塩硝焼の者に問合せた処、1 釜当りの火取日数 7~8 日で白塩硝が出来、1 日飯米 1 升代錢 1 匁 2 分 5 厘諸道具持越人馬渡下され 300 日として諸入目 1 貫 632 匁の積となる。(年合)
2. 一 家老三洲伊織助出府 (本)。永泰丸御用の革屏風 1 枚につき 100 目、草摺革大小平均 1 枚 60 目あて、革陣笠 1 ツ 6 匁あてで召上げ下さるよう春竹村より出願につき惣庄屋より郡間根取まで申し出る (年合)。諸郡疫病退除の祈祷を行藤上総介に命ず (寺例続)。
3. 22 賢年、従四位下侍従に叙任、中務大輔治年と称す (実紀・「藩法 613」は 4 月 13 日付・肥)。
4. 10 領内宿駅の人馬賃銀、銭双場の変動により増方を達す (藩法 660)。18 宇土支藩主細川立礼初めて就封の暇あり (実紀)、5 月 9 日江戸発、6 月 15 日熊本着その日のうちに宇土館に入る (本・家譜続)。**是月** 拝領着用紋付は拝領日付書載となる (藩法 613)。長六橋かけかえの期間中の渡舟は無料となる (町日目・藩法 855)。河尻、八代より長崎へ出むく者は湊手形に滞留日数を書き加えること (藩法 876)。
5. 1 重賢江戸発、6 月 5 日熊本着 (「藩法 613」は 5 月 25 日の条に記載・本)。
27 熊本町中疫病流行 (寺例続 4)。**是月** 本藩人口を幕府に届出る、総人口 549,687 人、内男 289,672、女 260,015 人 (肥)。
6. 23 米田与七郎家老に 2000 俵、米田波門、平野新兵衛は中老に任ず (藩法 614・本)。
29 諸郡田方虫気のための鯨油を希望に応じ渡し、その代銀は冬に上納するように命じていたが、今年より半分は補助することになる。虫害防除の必要がないときは下々の灯油として配分するが、この分は補助はなく全部代銀を上納すべし (熊史 28—渋谷記録)。
7. 5 堀平太左衛門より御前提出その他文書に敬語の「被」の使用法が乱れているので再検討を指示す (藩法 896)。
18 八朔御礼の儀達 (藩法 613)。
28 森石見久大 (号省斎) 歿す。玉名郡江田村祠官、経学に精し、大塚退野死に臨み、その門人を託すと (先哲)。
是月 領内駅人馬賃本馬 32 銅、人足 16 銅にきまる (肥)。徳懸の法を潤色す。下り物成に 2 割 5 分の了簡下米を下さる (土管・肥)。搗剥師、一子相伝のゆえ八代町安之允の外に領内になし (藩法 879)。
2 朱判通用について公儀よりの触 (藩法 661)。
8. 一 八代城堀浚あり (本)。従来郡代は一郡何名と定めしを、手永々々に分けて受持つことに改む (肥)。川尻町奉行は年頭御上下の節のみ罷出、その他は出仕の例なし (藩法 876)。東西蔵諸調べ御算用 1 ケ年請持に仰付けらる (難

稜)。

9. 14 幕府諸大名に貢米10分の1の貯米を命ず(実紀)。 20 重賢川尻に赴き、翌21日藤崎丸に乗り八代に行く(本)。 是月 年貢上納中熊本町の者在中に出て米及び雑穀の出買禁止(藩法855)。 私用人馬雇に付達(藩法661)。
10. 一 町鍛冶等の内頭取を選任し、鍛冶方御用はすべて頭取を通じて行う(藩法855)。 愛宕山使僧死去に付、下人のみ帰る際の取扱を定む(藩法868)。
11. 7 仲間は今後は同役または同僚と表記し、人畜は在人数、町人数と記すべく達す(藩法884)。 18 江戸詰勝手向差支えある向は出立前に願出づることを達す(藩法614)。 三洲伊織助備組頭兼任を命ぜらる(本)。 28 当年損毛物入の内ながら拝領米、手取米昨年の通と達せらる(藩法614・触3)。 近年高橋町零落、御救の為揚酒本手10本を永代免許す、その他立直りまで救銀を下附当年は銀1貫目、ただし救銀、町集銀、酒本手貸銀収支帳面を分職に提出せしむ(藩法878)。 是月 益田弥一右衛門御用人を退き、翌年10月隠居一翁と称す(先哲)。
12. 1 長岡助右衛門是福、家老を退任、隠居し芳渚と称す。米田与七郎家督を相続し、長岡の称を許され、長岡助右衛門是知と称す(藩法614・本)。 8 日隈奎太夫退任、志水才助奉行再任(藩法614・本)。 20 南良安(名医)没、年42(肥人)。 27 年頭、五節句、式日、其外御札規式達(藩法164)。 30 年頭御礼式来年より改む(藩法614)。 是月 新三丁目門内出小屋、長六橋内両側出小屋、新三丁目橋の左右の地子、これらの地は御用地につき建物破損せば夫限りにて建替禁止、但し新堀門外の京町の定小屋は近年互葺にしたばかり故、京町だけは御町方として除外す(藩法856)。法華宗学頭職を本妙寺に仰付けらる(寺例続4)。

是年 役割所内に6間梁50間8戸前、同梁18間4戸前の米蔵一棟を建つ(本)。是春以来雨繁く、虫入等にて損毛高121,400石余、免4ツ1分5朱4厘(肥)。世子の住居として山崎に新御殿を建つ(本)。米田波門、平野新兵衛、中老家老に加わる(旧章)。 著書目録 士林要言 諸家 横田房郷。毒薬考 医薬村井琴山。

安永 4 (1775) 乙未 (家治) 重賢

2. 4 細川若狭守利致、今春参向の公卿の館伴を命ぜらる(実紀)。 7 長岡助右衛門監物宅に重賢赴く(本)。 21 堀平太左衛門熊本発、3月25日江戸着(本)。 24 陪臣で知行を与えられている者並びに知行取格又は給人段は家中士席の制度に准じ衣服刀脇差の拵、軍役の制に従うを許す(藩法615)。 是月 石寺甚助奉行本役に任ず(本)。 御家人より惣庄屋になった者は本苗を名乗るを免す、人畜より惣庄屋になったものは許さず(郷歴)。「会譜」は4月とす。
3. 5 重賢熊本発、小倉路、4月9日江戸着(本)。 7 庄屋・山ノ口などのお断り願は8月中で締切の旨を達す(林制179)。 15 増奉公人を求め、割渡をうけながら、脇へ廻すなど自分で抱え置かぬ者あり、吟味せよ(藩法615)。 是月 百姓心得方の書付、在中一統へ渡る(肥)。 火の用心花火線香商売禁止(藩法856)。本坪井下三丁目権左衛門無願にて借屋を2軒建築したので取除くよう命じたが、願により許可す、ただし火の用心のため板葺を命ず(藩法881)。川尻御蔵より熊本御蔵まで米を運ぶ馬の賃米、飯米1升を下附することになって

いるが、今少し心附をと出願あり、然し領内一統の定めなる故叶い難し、ただし農繁期の人馬使用は用捨の事 (年合)。

是春 非常の長雨にて小麦凶作 (肥)。

4. 14 火事場に馬上で罷越さぬよう再度達す (藩法663)。18 井芹において灰石丁場を長岡監物へ拝領させるに付、諸木取除かぬ様との達 (覚)。是月三洲伊織助江戸発、6月4日熊本着 (本)。池田手永島崎村のうち日向崎に御腰掛 (休息所) 出来る (肥)。御郡頭廻在、農業出精方を訓辞す (會譜)。山鹿郡石村のうち牟田、田野に温泉あり、近年入場者も次第に多くなるを以て湯小屋整備を命ぜらる (年合・覚)。

5. 18 治年御袖留 (度譜・本)。是月 上野火の御番 (本・度譜)。志摩鳥羽浦に琉球人漂着 (本)。国中所々の疫疾退除の祈祷あり (寺例続)。

6. 一 八代郡古麓村の御薮畝数改め (林制180)。

7. 1 合志郡竹迫町火事、74軒焼失 (肥)。是月 御用物其外何品によらず高橋町への廻船は同町の間屋佐敷屋藤十郎の引受けとし、船頭は世話料鳥目2分宛支払うべし (藩法879・覚)。

8. 14 長岡芳渚は福歿す、年57 (本)。23 家老代溝口三伍熊本発、翌5年7月7日病死 (本)。是月 公儀の触により潰銀、銀座以外での売買禁制また銀座より札渡された京都職人以外に銀箔打立叶難し (藩法663)。八代密柑の由来旧記なく相知不申、俗説神功皇后高麗より植柳村へ移す、征西將軍も賞味す、秀吉征肥の折、植柳村庄屋、弥三左衛門献上、これ献上の始め (年合)。

9. 1 重賢、治年は日登城、治年に帰国の暇あり、28日江戸発、11月7日初入国、山崎新邸に入る (実紀・家譜続・藩法616)。4 切米取の拝領屋敷を余人に借すことを禁ずる旨再び達す (藩法615)。16 秋暑強き故、昼の内帷子着用勝手旨を布達 (藩法615)。是月 軒帳前書 (町家売買の覚) (藩法885)。

10. 22 山崎御部屋の廻り下馬を達す (藩法616)。堀平太左衛門江戸発、11月28日熊本着 (本)。26 治年、初入国御目見の達 (藩法616)。

11. 14 治年、熊本城初登城、15. 18・21日家士拝礼 (度譜・家譜続)、12月1日御祝御雛子 (度譜)。19 増奉公人抱方制限につき達す (藩法616・664)。是月 土居ある町々へ杉苗を渡し、土居の荒れざるよう管理を命ず (藩法856)。

12. 18 手取米拝領米とも去暮の通 (触3・藩法616)。是月 公儀触、大名乗物供廻りの服装等の規定 (藩法662)。面鉢を隠す頭巾は制禁 (藩法662)。

閏12. 11 一向宗の宗風、民間の弊害になる趣あるにより、同宗両法頭に書付をもって注意をうながす (寺例続4)。是月 府中所々に盗入多き様子につき惣庄屋、在家人に内々見締するよう達す (年合)。

是年 下益城郡代片山甚十郎、野津原鶴崎郡代に所替 (覚)。筑紫丹右衛門宇土へ井沢慶助阿蘇南郷へ度辺喜平次玉名へそれぞれ郡代所替 (覚)。杉島、廻江、河江三手永の村々疫疾流行のため守山八幡にて祈祷す (覚)。砥用手永村々疫疾流行のため小国満願寺にて祈祷 (覚)。近年疫疾流行し、ために村々の馬急死す、村々の馬医者たちへ療治方法を伝授されたと願い出あり (覚)。錢塘手永野田村の洲の中に大渡船場を築立につき見積帳を郡頭より提出 (覚)。健軍社より御免の相撲芝居を国府村の内にて興行したしとの願、許す (覚)。八代の前川の中河原は高田手永の地方なるも、このたび芦北郡杉本院の御免の見世

物芝居をここで興行したき旨出願があり、よって熊本上河原の例に准じて今後他の支配の芝居興行でも差許す(覚)。五町手永柚木村天神社境内の楠・杉を彦左衛門列4名盗剪る、よって郡代限りにて過料に申付ける(覚)。今夏以来早魃にて、損毛高154,600石余、免4ツ2朱6厘(肥)。野津手永で楠の元木改あり(林制184)。治年入部の御用懸の面々に時服等拝領(度譜)。本年より樫方へ納入の運上銀のうち紺屋職、締油、杵本手を半減す(藩法898)。著書目録石井茂助覚書 記録 石井茂助。

安永 5 (1776) 丙申 (家治) 重賢

1. 13 治年、時習館に臨む(家譜続)。是月 久住町火事(年覚)。
2. 一 家中馬飼料として大豆望の儀に付知行所たりとも払方差支なきこと、惣庄屋と懸合った上で差出さしめる(藩法664)。町中で御用馬所持の者、参宮湯治等に出るとき御定め賃銭で町馬を渡される(藩法857)。本庄本山村白塩硝煎方を中止し、その場所は村方へ返却す(覚)。河江手永東小川村鍛冶九郎左衛門、野津原手永の御仕立百姓の農具の内銀を100工請負ったが、その内50工分は寸志として差し上ぐべく申し出あり、願の通り許す(覚)。南関手永肥猪町33軒焼失(年覚)。
3. 1 治年、西山に猪を狩る(本・家譜続)。20 岩野村の三楠御口屋は旅人の出入り多くよって継馬、旅人宿等建ておかれるようお願い出るに付きその旨許可す(覚)。是月 府中すみずみまで博奕などなきよう達す(藩法664)。御大名供廻人数等について幕府より達(藩法665)。
4. 2 治年、熊本発、5月4日江戸着の件につき達(藩法616)。13 將軍家治日光社参(本)。治年、再び時習館臨場(家譜続)。17 治年、本妙寺参詣(家譜続)。18 治年追廻にて相撲をみる(肥)。22 治年、熊本発、6月4日江戸着(家譜続)。是月 河江手永住吉口御番所を新田村に移す(肥)。知行取にして在宅を許可されし者は移居後の期間に由らず一応在宅者としての手取米を給付するが、11月15日以降の許可者に限りその年末までは熊本居住同様の手取米給付たる旨を示達す(触3)。
5. 1 家老家来の中に逮捕される者のあった場合の規定、従来と変る(藩法665)。是月 御使番田中五郎右衛門罪あり、知行召上げらる(本)。
6. 2 重賢、就封の暇(藩法616)。29 再犯、累犯者については丁頭より特にその渡世方を世話するよう達(藩法896)。是月 入津蘭船風説(本)。
7. 7 家老代溝口三伍江戸にて病死す、奉行志水才助代役す、9月に至り之を免ず(本)。8 重賢、足痛により発駕延引の旨達す(藩法616)。是月 番頭谷権右衛門罪あり、知行没収さる(本)。堀平太左衛門の比類なき勤務によって嫡子丈八御番頭に取り立てられ、米1,000俵役料ともに下さる(本)。所々渡川船、渡守共の仕法の事(覚)。
8. 2 15日祭礼陣笠着用を差止めらる(藩法666)。6 重賢江戸発、木曾路、9月7日内牧より直ちに熊本着(家譜続・本・藩法616)。17 中老平野新兵衛熊本発、10月18日江戸着(家譜続・本)。是月 寺院が買添たる町屋敷は年限をきって町並に差返すべし(藩法857)。
9. 一 宗旨替のことにつき達あり(郷歴)。二の口米当年も免除、増水夫米は昨年通上納すべく郡代上地内検へ通知す(覚)。五ヶ庄の者が商売取引を甲佐手

安永 6 (1777)

永源兵衛へ仰付られ度いと願出たが下方を吟味した結果、断わってきた (年覚)。

10. 1 小笠原佐織大目付を命ぜらる (本)。是月 八代御城附夏間才藏罪あり、知行没収せらる (本)。
11. 19 手取米達 (藩法617)。手取米、拝領米ともに昨年通り (触3)。25 志水才助江戸発、翌年1月5日帰着 (肥)。是月 横手手永中樫田村懸の内川尻岡町裏梅答分田3反1畝7歩のうち、6畝20歩を鋳物吹屋の場所にしておいたところ、この場所は洪水の際に難儀するので、川尻新田町裏行畑に場所を移したく、もっとも梅答分は元通に返還する旨願い出 (年覚)。鶴崎郡代より米双場の報告とともに銀納のものは1石6斗5升あての相場で銀子上納をすること、銀子が不調の場合は其の日その日の銀相場の鳥目で上納を申し付る由上申し来る (覚)。
12. 5 沼山津手永、宇土の鷹場替地仰出下さる (藩法617)。6 医者 of 病家での御馳走は遠慮せよの達 (藩法617)。是月 家中家来等町家において難題など無きよう達す (藩法667)。御家老中家来末々の者威をかりて以下同文 (藩法881)。分職奉行中、熊本町中見分始まりの事 (藩法857)。熊本町の者河尻町相物問屋、薪問屋にて強引な値引交渉はせざるよう達す (藩法857)。他所の附木の入込みを禁じ国産を保護してきたが、製法出来具合粗末なるゆえ警告 (藩法880)。当年相場銀銭両様仰付られ、年貢銀は熊本と同様相場にて銀納を仰付られたが、鶴崎は銀子が少ないので百目1石4斗の相場で3歩の前銭を添え上納している、従って、この通にてまづ皆済目六 (録) を仕上げたく出願あり、よって今年はすでに上納期になっているので、そのままにしておくが来年よりは前もって伺い出るよう達す (覚)。細川領内の切支丹類族改740人 (細切63)。砥用手永の諸村における飢民救恤に下益城一領一疋井芹京七が莽走し、一領一疋野尻弥次右衛門弟弥三太出銀したる旨郡代より報告 (覚)。

是年 瀬戸内海より佐賀関へ鮮魚を積登す毎に船一隻に付銀30目あての運上を取立つ (覚)。山鹿郡岩野村三楠の口屋に旅人宿2ヶ所継馬4匹設置願あれば、その通に許可 (覚)。下益城、八城両郡の境小川・吉本の川筋の渡場を定橋に命ぜられるよう郡代より伺あれば差許す (覚)。五箇荘の男女10人中山手永下安見村に移滞せるに付緒方大部より惣庄屋に照会あり、よって引き渡す (覚)。当土免につき、例年の通り下達すべきやと引切書にて郡代より伺あれば、堀・平野両名にも被見に入れ、例年の通り口達す (覚)。小国・久住郡代当分、坂根長右衛門、山本山鹿郡代に所替 (覚)。八代郡野津原手永の村々は零落甚しいので宝暦6～安永4年迄の20ヶ年間に毎年465石余の救米を与え、本年からは救銀170貫目余渡す外に、悪田作治仕法を適用して救米と諸公役米免除合計371石6斗を毎年与えることにする (熊史24・鹿子木量平「御奉公実紀」)。作初穂粃の扱出をやめ、新たに高10石につき粃3升宛徴収す (城南史369)。夏中雨降続き虫入にて損毛高148,500石余、免4ツ5朱7里 (肥)。著書目録 肥後遊草史伝 阿波國中嶋屋専助。

安永 6 (1777) 丁酉 (家治) 重賢

1. 20 盲人にて百姓町人に属する者、及び武家陪臣の盲人にて遊芸・鍼等を渡世する者は総て検校支配たるべきにこれを犯すものあるを以て昨年11月、幕府より周知方通達あり、是日、本藩奉行よりも示達す、尤も無職の者は例外とす (「度

彙」は11月とする) (肥・藩法667)。21 五箇荘のものを藩主に謁す (肥)。26 家中下々奉公人給銭、近年定額以上に高騰し抱方難渋の様子につき今後不当の給銭の申し出あらば人置所に通知することを命じ、また丁役に注意を促す (藩法667・881)。是月 奉行志水才助に悉皆分職を命ず (本)。元日、町人御礼の節、町方根取1人は残ったが、以来残るに及ばず (藩法859)。藪市太郎奉行本役に平井三郎大夫同副役に任ず (本)。「ちゃほ」早稲植付その刈り跡に晩田を根付したが成功せざる旨水俣吉左衛門より報告あり。早稲の始り (年覚)。造酒屋、質屋運上銀、揚酒、糶、拟油、藍瓶等、帆前運上銀及び在中御免の富札運上銀等について郡代より照会あり、詮議の上、これらそれぞれについて下達す (年覚)。坂梨町御茶屋2軒とも明和7年の同町火災にて類焼し、それらの1軒は家亭和平太より銀年賦拝借を願い出、自勘にて復興したが、この拝借銀の返納に差支え、よって御客屋並びに勝手向家床ともに差上げて返納を免除されたく出願す、よってこれを許し、坂梨手代平太を当分家番に命ず (年覚)。長岡主水の八代郡における知行高付の書付堀平太左衛門へ達す (覚)。

2. 6 八代城警備並びに一切の修覆に充つるため、本藩より毎年2,000石給与することとなる (肥)。26 重賢28日発駕を達す (藩法617)。28 重賢、熊本発小倉路、4月3日江戸着、出発に先立ち諸制度改むところあり (家譜続)。是月 奉行蒲池喜左衛門退任 (本)。馬会所改築の間新古川町久五郎宅を仮会所とす、なお心付銀1枚下賜す (藩法857)。質屋、造酒屋運上銀は榎方納めのところ以来熊本は町方へ所々町は各町用銀に加へ、在中は郡代へ納入とす (藩法897)。諸役御条目御改 (度譜)。白川筋上河原の中島、子飼中島、中河原等の芝居小屋は3月中の興行が終了すれば4月1日にはときのぞくよう惣塘支配より申入れがあり、その旨を下達す (年合)。
3. 一 中門内御銀所所替え此跡御郡代詰問出来、御郡代出在の外は此に日勤す (寛政9年中止、享和2年再置) (本・官制)。家中春秋扶持方望む者は、大豆望の場合同様、惣庄屋へ事前に連絡了解をえよ (藩法668)。馬飼料豆葉について家中の馬飼料糠草藁代は蔵納給知打込みに割賦になっているが、これも同様なりやと郡代より伺い出あり (年覚)。飼料御用の豆葉代銀は従前通り下附されるやと飽田託麻6手永より伺い出あり、一束に1匁1分あて下附の旨回答す (覚)。八代城の大小の繕いは城主の松井家の負担であり、熊本地廻の御繕同様で竹類は松井家買上、材木は元木を渡下げ、縄その他は積帳を差出し、代銀は松井家支払、大繕の時は竹木その他は郡扱とする (年覚)。
4. 2 領内宿馬貨銀改正 (肥・藩法668)。是月 福引、福富と名付けた富突興行の禁止と火事場目印についての公儀触 (藩法669)。御進上用菊池苔の御用受込を河原手永原村の地侍原陸右衛門に命ぜられ、勤料として毎年米1石5斗あて下附す (年覚)。在宅の侍や軽輩・寺社・在御家人の従類・諸支配の浪人など内作の者は村人数とし、また在町居住支配違の面々や在御家人の家代は都て町人数とす (年合)。西国郡代掛斐富次郎没 (県史年表一島鏡)。
5. 一 再春館試業始まる (本)。大里角次奉行本役に陞る (本)。切疵の金通用についての公儀触 (藩法671)。奉行中の町見分の折、請場廻りの外様足輕先払につき達す (藩法858)。町居住の他支配并に町医死亡、改名等の節は直ちに上達を命ず (藩法858)。質屋運上の5段階を6段階にあらたむ (藩法898)。横手

惣庄屋仕立の油桐の実1斗7升櫓方へ納入すべく指示す(年覚)。内牧、坂梨両手永所在の阿蘇社領、大宮司知行所、学頭坊寺領は御郡の支配を受けるよう下命の程郡代より上申あり、吟味筋あらばその都度伺い出るよう奉行中より申来る(覚)。

6. 18 竜口邸にて尚齒会を催され、70才以上の御知音老人を招き、又出入の者、家中の男女70才以上の者に料理等下さる(家譜続)。27 去る3月、幕府公領私領にて富突きを禁ず、是日本藩奉行所より此旨を達す(会譜)。是月 各郡における揚酒本手の数を定め、新規の本手を禁ず(城南史385)。古川町又右衛門、豊後の絞染師を雇入る願を許可(藩法869)。八代御蔵へ出張の役人定宿について町奉行より願い出あれども不許可、役人逗留につき少しも会釈がましきことなきように達す(藩法880)。御進上用菊池苔の屑苔は売払い上納の足にしたき旨出願あれど許さず上納苔の値段で買上げを示達す(年覚)。
7. 3 堀平太左衛門熊本発、8月1日江戸着(本)。12 鶴崎町7軒焼失(肥)。25 肥後大風、南御門櫓中程より吹き破られ、其他家屋倒潰29,000余軒、死者26(イ23-原註)人、天草も同様大風城郭破壊(本・天草郡史料・年覚)。新免辨之助(兵法家)没、年52(肥人)。是月 町孫平太奉行本役に任ず(本)。肥後大風により手間料、諸色値段騰貴せざるよう達す(町日目)。両社祭礼の能番付の藩主御前差出は小姓頭付根取が取扱う(藩法858)。諸職人手間料は定の通り守るよう、大風等の節手間料竹木縄等値上げするを禁ず(藩法858・町日目)。永井宇兵衛にじゃがたら種芋7箇渡しおいた処早損にて少々しか出来ざるに付きそのまま差出し、また来年植付けたく、差上げた芋はそのまますぐに下渡されたく出願(年合)。
8. 1 矢野雪叟(画家)没、年64(肥人)。17 中老平野新兵衛江戸発、9月19日熊本着(本)。24 是日より翌日まで肥後大風(天草年表)、天草は西海岸ことに激し(県史年表-天草誌)、この両度の大風にて熊本在府の大工にては間に合いかね、郡部より残らず呼び寄す(肥)。是月 公儀触により秤改め達(藩法670)。家中一統渡り米は一旦支給された後でなければ町人買取を認めず(藩法858)。於津世卒去、重賢妹小笠原備前母(本・度譜)。
9. 6 宗旨替、寺院替は双方の寺院納得の上嚴重に行うこと(川尻史482)。是月 十禅寺山王社祭礼囃興行、御忌日数の内なれど許可(藩法859)。
10. 25 小笠原佐織家老代として熊本発上府(本)。是月 在中影踏人数一紙今までは巻目録にととのへて来たが、以後帳面に仕立たき由、玉名惣庄屋連名にて出願(覚)。西国郡代に揖斐富次郎養子鞠負が就任(県史年表-島鏡)。
11. 18 治年前髪をとる(本・度譜・藩法617)。25 手取米、拝領米は当秋大風にて損毛なれど去暮の通手取。拝領米は知行取100石に3俵、200石以下は7俵宛、中小姓1人4俵宛、旅詰独礼以下10石高4斗宛、地居6斗宛(藩法617)。是月 新一丁目旅人間屋笠屋藤右衛門客屋下宿勤むるに付一宿輪番及日田御用箱輪番ともに免除さる(藩法859)。細川藩切支丹類族740人(切支丹63)。当秋の年貢米相場の件に付て鶴崎郡代より書付を申達す(覚)。当年の相場次の通り決定の由勘定所より通知あり、錢100目に1石3斗あて銀100目に1石6斗8升あてなお野津原鶴崎は年貢銀上納100目に1石5斗8升あての相場にて上納(覚)。
12. 23 年頭座並につき歩小姓列は来25日限り支配人より中小姓頭へ名付差上ぐべ

きこと (藩法617)。是月 東海道往来について公儀触 (藩法668)。御年貢買払次の通、1. 御郡間櫓方渡切手差紙預 2. 当暮家中現米渡り切手預 3. 当暮寺御合力御寄附米現渡切手預 (覚)。

是年 江戸詰諸士の扶持方は従来米の時価により金品給与の処、本年より現米支給となる (本・家譜続)。永井宇兵衛在中取計抜群の功者たるにつき知行20石加増 (会譜)。荒尾手永長洲村当年より15年間米反6斗あて上納に仰付られたく願ひ出に付きその通り許す (覚)。八代植柳村流藻川筋は従前より長岡主水御免の留川であるが、今度川の上下全てを留川して欲しいと願ひ出たが許されぬ (覚)。鯨手永小池村土山瓦師等御作事御用の瓦を焼き納入していたが前払を求めて、外払の瓦を馬留めにせんと願ひ出た。作事所は吟味して御仕込瓦が3分1程残っているが、焼立と同時に支払う事を達す (覚)。村井藤十郎句読師を仰付けられたから、増奉公人を渡し下さる (覚)。田添源次郎に高田手永零落の村々の仕立方を野津手永同前に受込み仰つける (覚)。井樋方、御郡間、御銀所、杣方の御役人中1ヶ月に一度の休暇を許さる (覚)。夏中旱魃、7・8月大風雨にて損毛高274,600石余、免3ツ8分6厘 (肥)。郡代詰所出来、寛政9年差止め、享和2年再建 (旧章)。

著書目録 楽洋集 詩文 蕨孤山編集。江戸美耶計 地誌 有馬白嶋。

安永 7 (1778) 戊戌 (家治) 重賢

1. 13 清操院逝去 (重賢妹・松平讃岐守室) (本・度譜)。是月 元日町人御礼の節、町方根取1名は残ることにしていたが以後は残らず (藩法 859)。長崎にて唐船に輸出する煎海鼠、干鮑は鶴崎佐賀関海辺の産出なり、御国用の外は佐賀関佐渡屋嘉右衛門より請負人徳見伝助の手元の者に渡し長崎へ差出す (年合)。長崎唐船輸出の煎海鼠干鮑について買方を坪井町伊平列に仰付く (年覚)。
2. 5 川尻方面大地震3回 (川尻史 291)。晦 薩州家中川尻止宿、川尻町馬不足で熊本町馬の応援を求む (藩法 859)。是月 今京町別当、湊手形に名ばかりでなく前例に従い苗字を記すこと (藩法 867)。内田手永庵門村上小田村零落に付き当年より5年間儉約 (年覚)。
3. 21 重賢、不例の処快勝の達 (藩法 618)。是月 往来手形の書式享保年中の定めは近年変更箇所もあるので、ひな形を5ヶ所町へ通達す (藩法 876)。内田手永江田村のうち皆行原の百姓等疫病流行のため農業取続が困難、造酒屋・質屋の運上銀のうちより拝借を仰付けらる (年覚)。天守方御用の白塩硝を深川手永水次村惣兵衛に焼方を命じ、山鹿・玉名・山本各郡より土の取方をしていたが、取り兼ねるので所替を許す (年覚)。土山御用瓦此節より鯨惣庄屋受込みに仰付られ瓦師五右衛門を棟梁とし名字帯刀御免 (「年覚」は2月とす) (難稜)。
4. 8 藩主当春以来持病の疝癰、其上足痛にて就封不能に付、滞府願ひ出翌年まで療養 (肥・藩法 618、7月の達)。是月 大筒練習場を赤尾角場より立田山室園角場へ移す (年覚)。室園村角場に通る新道の入口簗戸の開閉ともに師役を御山支配役に達になる (年合)。佐敷手永添川内村基平より小場畑内にて茶碗類の焼方を願ひ出あり、許可す (年合)。横手手永上白石村、妙実村、椎田村零落し門潰になり跡主無高にて困惑の由郡代より上申あり (覚)。高瀬蔵納の胡麻4斗入1俵に2升程多く入れて納入するよう命ず (覚)。日向国延岡御

領、高地穂山の三本松、谷村角左衛門請持畑の畔に寄生している桑を矢部浜町和七が御用として買取度いと事、吟味する(年覚)。 杉島廻江普請御用石場として長浜村御山のうち二本松を石取場に許可す(年覚)。

5. 17 堀平太左衛門江戸発、大坂にて用務処理の上、7月4日熊本着(本)。 27 三洲伊織助熊本発、6月28日(イ7月2日)江戸着(本)。 是月 深川手永水次村惣兵衛御用の白塩焼方仰付られ土場願の事(年覚)。 他所より藍を直売することを禁ず、丹後紺屋岩崎茂兵衛染藍買込問屋中へ売渡せしむ(茂兵衛安永8年12月染藍総問屋となる)(藩法 859)。 桑寄草1袋矢部浜町和七差出す(年覚)。
6. 8 藩主病後初めて登営の達(藩法 618)。 是月 松雲院地子に移居のもの、新坪井より移ったものは新坪井より、本坪井より移ったものは本坪井よりそれぞれ支配す(藩法 871)。 御献上御用清水苔立方が多いので苔師三人増方を願うも許されず(年覚)。
7. 10 肥後大風雨、洪水(本)。 是月 矢部浜町勘助桑寄生を差出す(年覚)。 松井氏、八代へ帰る際各町馬20匹雇の予約をし、当日それを使わず町方に迷惑をかけたので留守居役へ入用分だけ数を明示するように申遣す(藩法 860)。 重賢大病後故帰国取止の由(藩法 618)。 川尻蔵米を熊本御蔵へ輸送するため馬7000匹7月15日頃まで飽田託麻より出すことに差支えがあるので8月中旬頃に出すよう、また町馬も出向くよう仰つけられたく惣庄屋連名にて出願(年合)。 侍中屋敷内で鉄砲の稽古をしているが閏7月から渡鳥の期に当るので町方禁止(藩法 670)。 芦北津奈木手永町原村の下の入江を塩浜に仕立たく出願(年覚)。 肥後大風雨(本)。

- 閏7. 6 家老小笠原備前(初伊織)江戸発、8月17日(イ18日)熊本着(家譜続・本)。 15 阿蘇山鳴動、山麓民家大いに震動、硫黄砂降る、阿蘇宮地坊中に祈禱を命ず(寺例続)。 28 此夜極楽寺町大河原治部進宅より出火、千反畑、広丁、通町、手取、高田原、追廻、宝町を焼き、西岸寺際に及ぶ、また飛火にて川向の代継宮も焼失す。焼失家屋1798軒、内侍屋敷 353、輕輦屋敷1353、町家92、寺社13、その他なり(肥・家譜続)。 30 去28日出火面々へ心附渡し下さる(藩法 618)。 是月 荒尾手永海辺村々姥貝を肥料に使ったところ鴨が喰い来るので鉄砲御免を願出、危険区域の榜示を建てるよう達(年覚)。 大火にて竹木値段、手間賃の急騰を戒む(藩法 860)。 川尻口より積登御米14艘御手平田船も加えて輪番で積受けて来たから拝借並びに運賃の減方分を返却して欲しいとの願(年覚)。 川尻町奉行所、御船方作事所は書状類など、いずれかが両方分を受取って協力し合うべし(藩法 860)。
8. 8 大風吹く(肥・本)。 14 火の用心のこと(藩法 671)。 19 火廻并盜賊改役仰つけらる(藩法 861)。 29 物頭中より火廻盜賊改役を仰つけらる(藩法 671)。 是月 城内その他火事の節の心得方示さる(藩法 619)。 類焼の町々当年より3ヶ年御免軒の事(町方日帳目録)。 火の用心入念、用水を汲ためおくよう示達(藩法 881)。 当年も二ノ口米免除、増水夫米は去年の通郡間納入すべく命ず(「覚頭」9月にも同様文あり)(覚)。 去7月大風洪水にて鶴崎御船の道具、小屋等破損につき修理用の竹木切出の出夫の飯米を願い出(年覚)。 郡中の百姓ら屋敷高の内に仕立おいた柵実が樋方に召上げられ迷惑しているの

で、以前の通り勝手に売払うようにしてもらいたい旨の出願あり、一統にその通り許す(年覚)。

9. 9. 堀平太左衛門足高1500石地面となる、旧知と合せ3500石となる、再三の辞退に関らず、強いての加増という(藩法 619・重賢伝)。是月 錢塘手永は野山も空地もなく牛馬を飼うに難渋するので古くから宇土郡御山内で馬草を刈ることを許されている旨を伝承しているが、差支の有無につき問合せあり(年覚)。錢塘手永塘筋洪水破損の際に必要な材木 2 間物末口 4 寸程の丸太 500本、杭木になるような末口 2〜3 寸の丸太 500本その他はめ草等宇土郡御山より伐出願(年覚)。
 10. 7 西日本にて使用の枡は京都福井作左衛門焼印あるものを使用すべき処違反のものあり、必ず右枡を使用すべく、又近く作左衛門より検査に赴く旨、去る 8 月幕府より通知に付、是日奉行所より下達す(「度彙」は 8 月とす)(肥・藩法 672)。15 細川玄蕃頭興晴の子喜十郎興徳はじめて見参す(実紀)。是月 樋蓋、水除等の上は摺板を敷き、損ぜぬ様にして通行すべし(藩法 860)。坂梨惣庄屋の屋敷内に植付ておいた朝鮮人蔘を試製法のため提出するよう命令により差出す(年覚)。ジャガタラ芋 3 ケ坂梨勘助へ渡し植付させた処秋 93 ケとれたので、そのうち 85 ケを本年屋敷内に植付けたら 2376 ケ出来。よって阿蘇南郷へ配分を仰付けらるべきや伺い出る(年合・年覚)。日向国延岡町石見屋理兵衛列、同国椎葉山運上稼に付、入用米矢部村々から買受たしとの願(年覚)。五丁、池田両手永の海辺に寒のりが立つよし惣庄屋共から報告あり(年覚)。
 11. 19 夜中火事の節大手を出入しうる役柄の者について(藩法 619)。27 手取米去暮の通(藩法 619)。是月 阿蘇南郷零落につき諸商人の村方へ立入禁止札を立てたき旨出願。よって許し尚別段の儉約を申し付け、また諸勧進物貰等の立入禁止札もたてさせる(年覚)。熊本 of 火事につき布田手永より持込んだ竹・家萱が殊に高値であるので不埒のかどなきよう厳達(年覚)。年貢銀上納相場、錢 100 目に付 1 石 2 斗 5 升宛、銀 100 目に付 1 石 7 斗 5 升あて、また野津原、鶴崎の年貢銀上納相場は 100 目に付 1 石 6 斗 5 升と当年よりきまる(覚)。郡代手付横目に地士より任命した場合は在勤中は一領一疋を仰付らる(難稜)。作事所御用の大小の竹は割賦で決めるが、その外は買上にする、下方の都合を吟味す(年覚)。
 12. 2 去る 7・8 両月の大風雨による損毛高 319,070 石余と届出づ(肥)。19 (イ 9) 飽田郡船津村出火、79 軒焼失(肥)。27 知行取の扶持方は春秋二度、書類を出す、来年は閏月がありその分は当暮残米の内から引落し置く筈、惣銀所へ書附を出せば熊本御蔵より在宅は津端御蔵より渡し下される(藩法 670)。是月 町人数の者で家中抱その他、他支配になった者は居懸は勿論、重ねて町居住は許されず(藩法 868)。杖立温泉繁昌のため諸商売を仰付られているが、それらの運上銀は集まり次第榎方へ納入するよう命ず、尚運上銀は諸他のものと同様郡代より取計い、また湯錢も榎方へ納入になっているが、当暮は温泉小屋修理にあてたので納入なし。それ故集次第納入のこと(年覚)。春竹村で出来の馬具等その品々の値段を本庄惣庄屋より相談するようにと達す(年覚)。
- 是 年 質屋、造酒屋、紺屋職、搦油杵本手、揚酒本手、浦船の運上銀は今後錢上納とす(藩法 899)。町家錢預、現錢同前に心得、何時にても鳥目と引替渡す

安永 8 (1779)

こと (川尻史 370)。高瀬に33間蔵建つ (本)。八代郡古閑村に安永古閑新地築立、畝45丁7反余、御郡方開。芦北郡平生村計石村海辺新開築立、御本方開、畝59丁4反余 (肥)。免3ツ8分6朱6厘 (肥)。著書目録 堀部家覚書 記録 堀部弥三兵衛。薬徴統編 医薬 村井琴山。ふきよせ 辞書 鸛嘯閣。綿考輯録 史伝 小野武次郎其他。

安永 8 (1779) 己亥 (家治) 重賢

1. 27 穢多非人について、郡代へ達 (覚)。是月 湊田屋儀平、飽田郡岩戸雲巖寺に五百羅漢建立を發願し、是月より着手、享和2年完成 (肥)。鉄砲傍示建替、本庄・大津・荒尾・坂下 (藩法 620)。式朱判吹方について触 (藩法 673)。衣服制度改めらる (藩法 673)。
2. 5 阿蘇山鳴動す、静謐の祈祷、この節より定例に大宮司に命ず、7月にも硫黄砂降り、11月に至るも鳴動止まず (寺例統)。29 大納言家基薨去 (本)。是月 阿蘇山昨秋より鳴動、旧例に依り、毎年一度宛山上にて大宮司に祈祷を命ず (肥)。
3. 16 売薬の薬種を制限し、売薬免許には医業吟味役関与す (藩法 885)。26 家中及寺社町人雇の諸職人の手間料を統一す (肥・藩法 672)。国中諸々疫病流行の為祇園宮にて祈祷 (寺例統)。是月 白浜清源寺、南関御番交替に際しての達あり (年覚)。
4. 24 増上寺火の番 (本・度譜)。是月 山鹿星原茶値段増 (年覚)。小田手永二俣村受持山にて楠剪取についての吟味あり (年覚)。
5. 1 武具蔵なきものは御櫓にて預ること (藩法 620)。21 奉行所中門の開閉時刻を定む (藩法 620)。是月 熊本城乾櫓修覆、棟札発見 (肥)。出火の際、町方根取の目印を改む (藩法 860)。
6. 1 熊本城外曲輪水堀の浚えを幕府許可す (家譜統)。火廻・盗賊改め物頭に衣服取締を命ず (肥・触)。18 志水才助大奉行となる (藩法 621・本・職員概見)。是月 志水才助家老代として出府す (肥)。町中に馬つなぎの場所を定む (藩法 861)。高瀬に御蔵会所建つ (肥・本)。宇土新町一丁目に汲井設置さる (年合)。布田手永村々へ諸勸進等、米正月迄入込禁止の建札建つ (年覚)。木倉手永北田代村隼人様 (長岡隼人) 知行所にて無高百姓地筒となり影踏を除かる (年覚)。領内における漉紙は一品拾枚宛小間物間納となる (年覚)。日向領延岡の町人、矢部・馬見原での米売買を許さる (年覚)。錢塘手永の村にて、作馬購入について拝借ゆるさる (年覚)。坂下手永鉄砲侍等杭木の引除願ゆるさる (年覚)。
7. 16 郡代詰間竣工、23日より常詰となる (覚・年覚・郷歴)。17 三湊伊織助江戸発、9月2日熊本着 (家譜統)。是月 蘭船入津の風説あり (本)。湯浦手永野角村懸久木野川村瀬戸にて櫓床召上げらる (年覚)。
8. 5 高瀬洪水 (肥)。8 山鹿地方大風 (年覚)。11 侍中の知行所目録、諸間にて加印あるようとの郡代よりの達示 (覚)。16 隆徳院33回忌 (本・藩法 876)。是月 本妙寺、寺領を蔵納地に願ひ出る (年覚)。塩竈拵所の水車を渡鹿懸大井手下撫井戸に設置予定、諸村故障有無を本庄より相達 (年覚)。
9. 1 夜半地震、桜島爆発 (郷歴)。16 長岡典礼早乗のため町中道筋小荷駄など片付方、隼人家司より佐式役へ頼来れど、津出馬多き時分ゆえ平太左衛門拒

否 (藩法 885)。 29 是夜より地震頻発、桜島噴火 (本・肥)。 是月 高橋町零落につき、銀10貫目無利子15年賦返納にて榎方より貸出す (藩法 879)。 本山村塩焔拵所水車敷地見分のため惣庄屋以下立合調査 (年覚)。 所々御蔵年貢払について郡代より達 (合)。

10. 21 玉名郡長州町火事、126軒焼失 (肥)。 是月 横手手永産出の桐油、田方殺虫剤として試用 (年合)。 熊本御蔵への年貢米搬入の折、3斗5升・3斗俵と別日とす (年覚)。 池田手永柿原村塩焔拵所見立のため役人見分調査 (年覚)。 領内における漉紙はすべて差出すことになる (年覚)。

11. 6 國中諸々疫病流行、祇園宮にて祈祷 (寺例続)。 9 後桃園天皇崩御、光格天皇踐祚 (肥)。 23 家中手取米去暮の通りとす (藩法 621・触)。 是月 火廻物頭の見方取締について達示あり、猥に打擲するをいましむ (藩法 861)。 隈府町中島伊次郎越中富山より、新品種 (百万石) の種粃購入仕方、粃種子差出 (年合・年覚)。 年貢米搬入本年は今迄の通り (覚)。

12. 一 吉海市之允中着座 (本)。 火災時、奉行衆への駆付義務、出京町は輪番免除 (藩法 861)。 客屋料理人、出火の節、客屋駆付を命ず (藩法 861)。 8月8日の大風で楠・松・杉倒木、味取新町高本高圀材木願のこと (年覚)。 五町手永山室村塩焔拵所水車立仕予定に付見分あり (年覚)。

是 年 御花畑大書院中桂歌仙の間等の屋根、銅瓦となる (本)。 夏中氣候不順、8月大雨にて損毛高 213,480石 (肥)。 総支出 352,800石余 (銀台公)。 足高総計11,830石 (度彙内編 2)。 耕改め、細工町播木屋茂左衛門を頭役人として京杓焼印をもって統一す (藩法 888)。 南関町焼失 (年覚)。 著書目録 薩州桜島燃出覚書 水俣陣内村外聞五四平・文助。

安永 9 (1780) 庚子 (家治) 重賢

1. 23 諸御町奉行を今後は諸町御奉行、何方町奉行と称す (萬見合・藩法 862は2月とす)。
2. 一 水俣で試焼の樨炭を郡間に差出す (林制 204)。 大慈寺本堂再建入仏供養 (寺例続)。 他国旅行の請合証文に、詳細な内容記載を命ず (藩法 862)。 阿蘇南郷、打続く凶作につき儉約建札 (年覚)。 中村正尊 (通称忠亭) 「人倫大意」を著す (肥)。
3. 24 宗旨方達示について町在共に書付上る (郷歴)。 是月 宗旨御改の触あり (郷歴)。 寺社本尊開帳は7年毎と定む (本)。 尚、開帳の際、賑合のための見世物を魚・鳥・作り物に限ることとする (肥)。 奉行平井三郎大夫熊本発上府 (本)。
4. 16 他国へ旅行し、影踏に帰郷しない者の処罰は分職限りの順覧で決済することとする (藩法 896)。 18 火の番御免 (本)。 是月 錢預は富裕な者に限定す (藩法 862)。 愛宕山初穂銀は判屋包とする (藩法 862)。 清水苔拵方の見分人1人を任ず (年覚)。 御郡間印鑑各村に達す (年覚)。 河江手永西北小川村余地の吟味を行う旨達示 (年覚)。
5. 1 八代城石垣修補を幕府許す (家譜続)。 9 藩主帰国を許さる、8月発駕の達 (藩法 621)。 治年女寿姫出生 (本)。 是月 人口調査、惣人数 550,404人、男 289,821人、女 260,583人 (肥)。 宗旨替寺替は双方寺院納得の上おこなうよう達 (藩法 862)。 合志郡山支配役増員す (林制 330)。 薩州様御宿、

宇土町判屋善十郎宅、御水屋番となる (年覚)。

6. 4 家中武具用心のため櫓に差出すこと (藩法 862)。 23 家老代小笠原備前熊本発上府 (本)。 是月 出火の折、即刻最寄の根取宅へ注進すること (藩法 863)。 江津川筋清水苔下見拝会所詰小頭の内 1 人は兼帯となる (年覚)。 本庄手永方指崎・平野・西三ヶ村馬代銀拝借認めらる (年覚)。 当年御下国、小倉路通行につき、道筋手入の達 (年覚)。
 7. 一 蘭船入津の風説 (本)。 大坂上米の荷船、借船等川尻入津の折、船頭・加子等は川尻町奉行印札に問屋書付を持つもののみ熊本への通行を許す (藩法 877)。 合志郡御山支配役、1 人は大津、1 人竹迫在勤とする (年覚)。 鯨手永にて、百姓作馬 27 疋急死 (年覚)。 川尻・高瀬・八代・大津御蔵の算用、一ヶ年請持とする (難稜)。
 8. 19 八代密柑の献上、筑後原ノ町より宿継によることとなる。密柑の数量 35 箱 844 貫余 (家譜続)。 22 重賢江戸発、美濃路・小倉路、10 月 2 日 (イ 20 日) 熊本着、志水才助御供 (家譜続・藩法 621 は 21 日発とす)。 是月 横手手永惣庄屋の鐘巻・雨乞行事の由来について書上ぐ (川尻史 639)。 坂下手永繁根本村湯本に温泉涌出 (年覚・年合)。
 9. 4 家治右大臣転位 (本)。 是月 高麗門内勢屯水道浚につき、掃除方と町方協議す、浚方は町方、15 間半の樋蓋修理は町方受持とする (藩法 863)。 二の口米は御免、増水夫米は毎年の通りとする (覚)。 八代密柑成実見込調査、42,000 個、35 箱必要の処、本年見込 28,000 で 14,000 個不足の見込 (年合)。 本庄・田迎・横手・銭塘・鯨・杉島・廻江 7 手永の村々にしい (いたちに類似) による牛馬の被害多し、藤本左五左衛門に命じ鉄砲にて排除す (肥)。
 10. 4 重賢の養母静證院逝去 (本・度譜は 6 日とす)。 7 (イ 4) 三洲伊織助熊本発、11 月 8 日着、同月 28 日江戸発、翌年正月 11 日下着 (本・家譜続)。 15 静證院容態悪化につき、看病の為重賢の出府願、許可さる (藩法 621)。 21 静證院去る 6 日夜逝去につき、看病出府取り止め (藩法 622)。 是月 町人数離脱、欠落達、一季若党奉公願、他国旅行願に類族の有無を記載の上、提出すべきこととなる (藩法 863)。
 11. 一 手取米・拝領米の定め (藩法 622)。 大坂・長崎への送証文の殿文字の記し方について指示 (藩法 863)。 判屋包銀摺破を引繕ったものは通用させず (藩法 864)。 宇土町 5 丁目の橋、石橋に懸替を認可 (覚)。 米双場、銭 100 目に 1 石 5 斗、銀 100 目に 2 石 1 斗とする (覚)。 百万石稻種子、田浦・水俣両手永に試植、結果は良好 (年合)。
 12. 4 兼仁皇子即位についての使者志水数馬 (本・度譜)。 是月 手取米は去暮の通り、拝領米は 100 石に 3 俵、200 石以下は 7 俵、中小姓は 4 俵、独札以下、旅詰は 10 石につき 4 斗、地居は 6 斗給さる (触)。 小田手永大浜町在宅坂本五郎助高瀬町津方下会所取建に地床等寸志差あぐ (年覚)。
- 是 年 夏中天候不順 (7・8 月雨)、損毛高 213,480 石余 (肥)。 免 3 ツ 8 分 1 朱 (本)。 著書目録 読類聚方 東洞先師家熟方 村井琴山。
- 是 頃 本藩用船、泰宝丸 (66 挺立)、波奈之丸 (74 挺立)、圓亀丸 (66 挺立)、福寿丸 (64 挺立)、万亀丸 (52 挺立)、千秋丸 (50 挺立)、鳳麟丸 (66 挺立)、静国丸 (56 挺立) (家譜続)。

天明1 (4・2改元) (1781) 辛丑 (家治) 重賢

1. 11 三洲伊織助熊本着 (本)。是月 飽田・託麻・上下益城郡に疫病流行につき輪宝鉄打方許可 (覚)。傍示見払について達 (藩法 673)。上方他国酒密輸入の様子につき取締る (藩法 864)。
 2. 14 堀平太左衛門の大奉行兼帯を免じ、志水才助を大奉行に任ず (本・度譜)。
15 重賢、松井宮之の別荘に入る (本)。25 中老米田波門は著隠居し、松洞・米著と号す (家譜続)。29 米田波門は著隠居、章太郎1000石下さる (藩法 623)。是月 郡代の月番受持を日々御用受持に改める (肥・覚)。銭塘手永式町村・式拾町村、下内田村・鶴森村の分村を願い出る (覚)。参勤の節乗馬は町馬、荷馬は在馬とする。これにより今後川尻町10疋、高橋町8疋応援さすべきこと (藩法 864)。江戸詰の面々に衣服を質素にせよとの達示 (藩法 623)。
 3. 1 時習館聴衆の中に不敬の者あるにつき達示 (藩法 623)。7 重賢熊本発駕、4月12日江戸着 (藩法 623・肥は5日発4月11日着とす)。23 奉行平井三郎太夫用人に転ず (本)。24 上野火の番 (本)。是月 本荘手永本山村にて塩焔拵所、水車床御用に収用さる、4月再吟味、5月、水車仕立につき、井手筋左右石垣築造 (年覚)。
 4. 13 天明と改元 (藩法 673)。29 上野火の番 (度譜)。是月 花畑近火の節町火消は板葺屋根から消火すること (藩法 865)。小坂九郎助奉行副役に任ぜらる (本)。
 5. 13 小笠原備前中老となる (藩法 623)。小笠原備前長栄江戸にて中老に列し6月19日熊本帰着 (本)。15 月次の朝会、細川治年、就封の暇 (実紀)。22 世子発駕、閏5月5日鶴崎着、11日熊本着 (藩法 623・本・家譜続)。23 旅僧講釈の日数制限を廃止す (寺例続)。25 新田支藩主若狭守利致卒す、年23。6月21日弟亘利庸相続す (肥・実紀)。是月 高雲院 (重賢妹) 死去 (度譜)。薬種問屋は向後人柄検討の上許可することに改まる (藩法 871)。島津氏通行につき、道筋町内円居階子田子5ツに水を入れ出しおくこと (藩法 623)。
- 閏5. 一 横手手永上白石村への庄屋仕立の願出さる (覚)。本荘手永本山村塩焔拵所水車床畝数改め (年覚)。熊本蔵米付下在高世子の下国前につき見合わせる様との達示 (年覚)。
6. 2 信長二百年忌、織田左近へ香奠白銀2枚 (度譜)。(イ5月20日) 八代泰巖寺にて法要施行 (家譜続)。26 霊雲院50回忌 (本・藩法 623)。30 山崎御部屋廻下馬に及ばずとの達 (藩法 623)。是月 町人の屋敷交換を許す、売買時の上納拾歩銀を免ず (藩法 869)。雨乞のため鐘巻の作り物、町内通行につき口論を禁ず、在中雨乞に町人衆の参加を禁ず (藩法 865)。在中旱魃のため藤崎宮にて祈祷 (寺例続)。
 8. 一 町人数の者、他支配になりたき願について家屋数持は原則として不許可、止むなき場合は家屋数は丁役へ引渡し、引払うべきこと (藩法 868)。久住山と竹田領朽網山との境論あり、12月に至り従来通り決定す (肥)。大木総馬大目付に任ぜらる (本)。
 9. 一 侍の隠居後における町居住はゆるさず (宇土史 107)。細川立礼、新女院使大宮使の御馳走役を任ぜらる (宇土史 107)。

天明2 (1782)

10. 4 静證院一周忌法会の儀 (藩法 623)。是月 甲佐手永浅中村に庄屋仕立を願ひ出る (覚)。家中の侍、江戸往来の節の鶴崎止宿の木賃きめる (年覚)。
11. 19 世子参勤時分伺 (藩法 624)。30 治年子雄次出生 (本)。是月 勝手向難波のため省略達示 (藩法 623)。儉約の励行を達示 (触)。手取米去年の通りとする (藩法 624)。土山瓦師不心得のため御用瓦不埒につき郡代より注意 (年覚)。田浦御蔵出火のため、家中の手取米差支え、八代御蔵より渡される様出願 (覚)。本庄手永本山村塩焔拵所の水車懸の井手筋拡張を命ず (年覚)。五町手永麻田村に塩焔蔵取揚の出願 (年覚)。鶴崎町木賃、1人6分5厘とする (年覚)。
12. 16 細川亘理従五位下に叙し、能登守と称す (実紀・家譜続)。是月 大津手永川部田村の男女50人余府中へ逃散 (年覚・覚)。
- 是年 鮑田・託麻・上益城郡に疫病流行のための藤本左五右衛門に墓目執行を命ずる (覚)。鮑田・託麻・上益城郡に疫病流行のため死馬多し (覚)。上河原中嶋にあど土打ち寄せし処を開明る (覚)。普請方御用の石船難破のため入目銭渡し下さる (覚)。早魃のため白川の井樋、外様組13人見払 (覚)。本庄手永会所の困糶・粟虫入のため各村に拝借させることについて郡間にて僉議 (覚)。鮑田・託麻・上益城・宇土・玉名各郡の井樋作事御郡引受となる。在御家人より井樋助役を勤む (覚)。沼山津・木倉・矢部三手永各村零落のため救立拝借願ひ出る (覚)。八代郡高田手永高子原村新地に無高者、兄弟別家等6竈を移す (覚)。八代、芦北郡井樋作事御郡引受を願ひ出る (覚)。当秋虫入痛田の試刈は畝刈とすること (覚)。借金銀返金滞公許について達 (藩法 674)。夏中早魃・虫入にて損毛高 285,634石余 (肥)。損米61,630石余 (本)。

天明2 (1782) 壬寅 (家治) 重賢

1. 15 御垣様御前様方へ御引取なさる (藩法 624)。23 若君様家齊公と称する (藩法 624)。是月 算学師役甲斐政右衛門豊隆、独礼に召直さる (城南史 480)。昨年11月の日奈久の火事類焼番に竹木を支給 (林制 208・年覚)。南関手永宮尾村・下長田村・岩村に庄屋仕立 (覚)。
2. 2 唐和明簪売買について江戸・京・大坂・堺4ヶ所の会所で売買すべき旨、公儀よりの触について達 (覚)。5 八代郡高田の松井氏建山焼失 (林制 208)。19 世子治年熊本発、3月23日江戸着 (藩法 624・家譜続)。この時、峰山人参園係永井宇七兵衛より献上の猩々いすか一羽持参せらる (肥)。26 京都玉屋宇兵衛より銀子借入について (藩法 674)。27 元奉行栗崎善右衛門時亮死す、年82 (何時頃の奉行か不詳) (肥)。是月 中古町懸板屋町丁頭辞職願許可、勤むべき者なきにより隣町小沢町より板屋町丁頭を任命 (藩法 869)。祇園社を祇園宮と改称 (藩法 896)。備後国三次、西城鉄売買について御触 (町日目)。延寿寺配下の寺院での旅僧の説法以後免ぜらる旨を各郡代に達す (寺例続)。久木野手永大河内村よりべにがら製法を願ひ出る (年覚)。日奈久町往還筋、熊本より入口の所 100間築出許可さる (年覚)。矢部・砥用産出の白塩硝値段増 (年覚)。御用塩硝焼方三上屋甚兵衛よりの諸郡差支無き所での焼方願出許可さる (年覚)。田浦手永日奈久町去11月大火の大半を焼失のため新規に海岸に道巾九尺程の道路設置を願ひ出る (年覚)。中富手永宮村、久野村に庄屋仕立許可さる (覚)。

3. 2 (イ6月2日) 重賢、殿中にて杖を許さる(家譜続)。 5 大目付大木総馬熊本発、4月江戸着(本)。 11 松山手永御山焼失につき、後の植付を指示(林制 211)。 是月 井樋方助役を惣庄屋の兼帯とす(城南史 446)。 分職触の宗門覚書、以後分司々々輪番で調べること(藩法 897)。 芦北一領一疋浅野利八同門中大筒稽古場を計石に開くことを許さる(年覚)。 中山手永の荒畑に紙楮仕立を願ひ出る(覚)。 八代植柳球磨辰屋出火、120軒焼失(本)。
4. 1 治年参勤(史綜)。 3 若殿様御婚礼、若御前様と称す、大納言様と称す(藩法 624)。 家斉任大納言(本)。 11 治年、宇土中務少輔興文女塙と婚姻す、享和3年1月10日卒す。 年49、瑤台院と称す(本・肥)。 22 町在者の離縁について(藩法 674・865)。 是月 新座年行会计費乱なきよう、出費規定を定む(藩法 865)。 町中、物書・肝煎給銀安永6年以来毎年更新で増給銀を断続支給してきたが、その後当分制限なしに増給とす(藩法 866)。 往来手形なき旅人あれば、火廻りより宿所たしかめ上達せしむ、町家の2階に灯許可、尤火の用心肝要、自身番、町番所深更も灯を絶やさぬ様(藩法 866)。 町中の作事料拝借は以後利付とする、往還筋は1割5分、他は2割、10年又は15年賦償還とする(藩法 867)。 内田手永塘普請について惣庄屋より達(覚)。 町諏合ども不正商売なきよう諏合札出願には五人組受合連印書付提出すべし、丁頭、別当よりも人柄吟味すべし(藩法 900)。
5. 9 小笠原備前江戸発、6月19日熊本着(本)。 是月 是月より数十日強雨(肥)。 慈徳庵地子居住の者合薬札願不許可(藩法 870)。
6. 16 家中江戸往來の宿賃を定む(藩法 624・675)。 26 高田手永新道筋水無川仮橋を定橋にする様命ず(覚)。 是月 米穀増運上のこと(町日目)。 名寺勘助中着座同列(本)。 藪市太郎御役御免(本)。 八代城石垣修補の積書、出夫は御郡役召仕とする(年覚)。 久木野手永大河内村での“へにから”製法は薩州加治木町瓦屋十左衛門の指導による、御郡横目見分(年合)。 長崎御番船引上を許さる(本)。
7. 14 江戸大地震(本)。 16 玉名郡岩原村にて48竈焼失(林制 214)。 是月 火事の節、小屋頭共は外聞役の指揮を受くべし(藩法 900)。
8. 11 水前寺苔新坪井米屋町海老屋太郎兵衛独占請負にて商売許可、従来は商売禁止(藩法 897・町日目)。 19 重賢江戸発、木曾路、9月21日鶴崎着、10月1日熊本着(本・藩法 624は8月22日江戸発とす)。 20 熊本大風、倒家 669軒、田畑損毛甚大(本)。 22 今度の太風に倒木、倒家解除につき達(藩法 624)。 中富手永上広村にて杉10万本の植付計画承認さる(林制 214)。 清源院(重賢妹)下向、10月3日着(本・度譜)。 23 佐敷手永の竹木を薪にするため、八代郡宮原の杣者に払立を許す(林制 215)。 24 在中病馬多し(寺例続)。 是月 樋方扱銀貸与に規定を定む、低利とし是迄納入の利分は特に元入と利分に区分、上納したものとする旨達す(肥)。 玉名海辺潮塘、補修のため熊本・川尻・高瀬御倉より明倭20万俵払下げ、不足分は熊本・川尻・高瀬の町家より調達(年覚・町日目・覚)。 雜式草書編纂(藩法 841)。 在人数の者、御駕、御廐等に召抱の節の人畜放れ有無の規定、町人数の者については申出次第に離れており各懸にて扱いも区々(藩法 883)。 馬会所割賦銀(御用賃として役所より支給額)(藩法 886)。 祇園宮に疫病消滅の祈祷を命ず(寺例続)。

川尻口より本山塩硝所内の井手浚、公費負担の規定(年覚)。

9. 2 儒臣池辺平太郎(号蘭陵)歿す、年68(本・家譜続)。 4 井鳥景雲(劍客)歿、年82(先哲)。 是月 合志郡久米村での死者、葬儀の折、よみがえる、以後葬儀は時刻を考へること(藩法 899)。京町中疫病流行、祇園宮に疫病消滅の祈祷を命ず(寺例続)。歩札商売指留(町日目)(10月再触・年合)。近来歩札で米穀の空売買が流行、このため値段にも相障る取、差留(年覚)。御下国につき浄行寺入口、石橋下の浚を命ず(年覚)。八代城石垣普請の出夫断り願ひ出る(年覚)。高田手永田方虫入のため、主人殿手取米払を小田宇土断り方申し出る(覚)。
 10. 19 (イ21日) 近年家中の病家より医師への謝礼を怠るものあり、このため難渋の医師少なからず、故に去る6日医業吟味役より通知、医師には相応の謝礼をする様達(肥・「触」は11日とす)。是月 長崎番船、引払い以後小岩瀬村下堀川にけい留(年覚)。所々御出の節、町内先払外間役へ合羽代として町銀より3人へ15匁5分宛給したが、以後は御本方より支給(藩法 900)。
 11. 26 家中の衣服、飲食の限度を示し、又藩主の食膳を内示す(肥)。諸事心をつけること(藩法 625)。是月 細工町茂左衛門、病気のため養子新左衛門へ別当役引譲、苗字・刀御免、枡改所共に父同前に任ぜらる。12月新左衛門、斉藤茂左衛門と改名(藩法 891)。御留守中、家中子弟稽古励みについて達(藩法 625)。当秋作不熟のため代官御米壺分減、杣方受込料70貫目以内とする(年覚)。熊本町才覚銀、当暮は渡されず(町日目)。秋作不熟につき、儉約方を命ず(藩法 625)。役替祝事は口祝に止めること(藩法 625)。家老中、脇方へ参らる節の品数のこと(藩法 625)。在中、疫病退除のため、祇園宮に祈祷を命ず(寺例続)。
 12. 1 奉行より着座以上への文面に同役の名を記す場合は殿と付すこと(藩法 900)。是月 門松、五段松より三段松に改む(藩法 676)。売薬御免の者のほかは売薬禁止、合薬札所持の者でも、自分で薬を拵え商売は禁止(藩法 900)。新三丁目出小屋3軒、須崎久左衛門跡屋敷へ移転(藩法 900)。新坪井寺原町、紺屋町両町丁頭田代屋九平次、多年出精により家内共に影踏を免ぜらる(藩法 901)。熊本御蔵より川尻御米付下馬、賃米1升増となる(年覚)。米高騰につき新米出来まで1俵(3斗5升)36匁を限度に売買すべき旨郡頭へ達(覚・年覚)。京都の町人、菱屋徳右衛門、領内より雲母産出について達示(年覚)。
- 是 年 櫛方銀流用について(藩法 675)。この年より御積帳出来(旧章)。風水害にて損毛高 335,520石余(肥)。免3ツ3分4朱(本)。在中物置蔵、居蔵共瓦葺にしたい場合は願ひ出る様達(会譜)。唐和明礬の販路拡張について、いかがわしきものは取扱わぬよう支配方に達示すべき旨、郡代に達示(覚)。線香、桧物屋細工の柄物、他国産が入り込み、線香職、桧物屋難儀のため、他国産の入込を差留、在庫分は八月中に処分すべし(覚)。西郡吟次、阿蘇・南郷・高瀬文平、山本・山鹿郡代に所替(覚)。下益城郡代小野武次郎・中路加右衛門兩人にて宇土郡中也取計らうよう達(覚)。林七郎右衛門、宇土郡代に所替(覚)。神山忠兵衛、上益城郡代より玉名郡代に所替(覚)。八代郡古閑村沖での塩焼に拝借銀許さる(覚)。米不作につき町在での米穀の費なきように造酒屋も2〜3歩減の造とすべし、郡頭へ達(覚)。託麻郡本庄手永12村零

落のため無利息15年賦返納で貸付金を貸与(覚)。木倉・甲佐・沼山津・鯨4手永の各村粮物難渋のため粃拝借ゆるさる(覚)。松山手永、連年の不作にて熊本より粟を購入(覚)。佐敷手永乙千屋村・計石村、無利息10年賦返納の拝借銀許さる(覚)。南関手永増水夫米、延納分を代錢上納となりしが、双場高騰にて上納不能のため、1日双場での上納をゆるす(覚)。中富手永藤井村零落のため先年救い立、去る申年(安永5カ)より、29人の明高片付の処、質地に遣す(覚)。大津・竹迫・鯨・沼山津・河江・横手・本庄・田迎・杉島・廻江・中島・南関12手永零落のため御米拝領(覚)。著書目録 結舌編 医薬 村井琴山。

天明3 (1783) 癸卯(家治)重賢

1. 15 長岡助右衛門、監物と改む(本)。親姫痘病、2月1日酒湯(本)。是月江戸詰供外出府面々勝手不足に付達、集会着服儉約の達(藩法626)。熊本町中で売米無多事見世売貯無き者へ御蔵米を去暮の双場で放出す(町日目)。去秋不作のため、万人困窮 矢部中の飢人4000人に及ぶ、このため1人1日粃2合宛救米として渡す(郷歴)。
2. 15 長岡隼人(藩主舎弟)隠居し、青丘と号す、養子典弥興禎(後興貞)相続す(本)。是月 佐敷町宿所の粮米不足につき、佐敷手永残米の内から売払いを達(年覚)。本庄手永本山村、夫平次、中山手永岩下村にて鉄吹方の試みを願により命ず(年覚)。本山村塩硝所近火の折の駄付夫について(年覚)。
3. 6 重賢熊本発、4月9日江戸着(本・藩法626)。野津原町出火、本藩御客屋7戸類焼(肥)。15 松井式部御用見習同席へ差出さる(藩法626)。29 他国売薬禁止の処、富山及び江州日野の者に限り、売薬を許す(覚・肥)。是月 通りがかりの六十六部其外廻国舩の者一宿については従来旅人問屋が輪番で受持ったが、新坪井鍛冶屋町米屋惣吉受込とする(天明7年1月一宿問屋廃止、どこでも止宿をゆるす)(藩法901)。在中より府中へ物貰大勢入込む、下河原に小屋を懸け救う様との達(年合・年覚)。本山塩硝捨所近所で作菓子等焼かぬ様との達(年覚)。郡浦手永中村の御山に流金あり、萱柴等は夫方に払下ぐ(年合)。
4. 6 大奉行志水才助熊本発上府(本)。是月 旅人駄通の入用人足7、8人迄は町方より、其余の人は本庄へ申出る様達、薩州・日田役人等一同通行につき馬指より申出る(年覚)。在中・市中疫病流行、祇園宮に疫病退除の祈禱を命ず(寺例統)。
5. 1 若御前(治年室)袖留(本・度譜)。5 玉名郡小天村出火、74軒焼失(本)。
- 6 飽田郡古町村出火、86軒焼失(本)。是月 栃木湯本普請入目割合書付(年覚)。畑村イギナ原にて処刑、敲拂(地方を入質、不法の願直訴による)(郷歴)。
6. 17 関東及諸国洪水(本)。高良町廻欠跡に在御家人を移す(難後)。25 大木総馬下着(本)。26 火の用心につき達示(藩法626)。是月 穿鑿所、賄物所、荒仕子会所近火の節、町火消共へ各役所役人より指揮、役人で間にあわぬ時は町方根取より指揮(藩法901)。重賢、相州熱海へ湯治(本)。
7. 7 浅間嶽焼出(本)。8 元家老長岡桂山(季規)歿す、年81(肥)。23 肥後強風雨、錢塘手永で344軒倒壊(本)。是月 徳懸の法を潤色、安永3年の

改正も却って悪結果を生じたので、種々改革あり(肥・土管)。家中の者江戸へ差登せの折は先触については宿筋を郡代より達示するので一統に触れること(年覚)。田沼主殿頭、名所古跡の産物・石類・草木所望につき、郡代へ達示(年合)。塩硝拵所水車井手筋の土橋懸かえの達(年覚)。7月下旬不時の冷氣にて田畑作共皆無の処多し(損)。

8. 25 三洲伊織助病氣により家老退任、中老同列、桐の間詰(藩法626)。翌年7月隠居、遊鱗と号す(本)。是月 博奕らしきもの取扱(藩法626)。佐敷浜村の船頭、郡間薪、積廻の帰路難破(年覚)。日田代官所預りの天草島、再び島原預領となる、本藩出役止む、10月引継終了(肥)。
9. 1 中老平野新兵衛家老に列し、三洲伊織助所管の御備組を預る(本・藩法626)。5 親姫様喜十郎様と縁結願、許さるとの達示あり(藩法626)。14 阿蘇山上本堂修繕なり、遷仏供養(寺例続)。是月 止宿中、旅人府中徘徊の節は問屋より木札を持たせる様(藩法901)。御銀所渡の銀・錢支払困難につき、10月より銀・錢差別(年覚)。鯨手永土山の瓦師棟梁に勤料を支払う様にとの郡代よりの願出(年合)。
10. 12 新女院崩御(本)。是月 盲僧ら相達すべし、他は座頭組に加うべし(藩法677)。矢部奥御山より、材木4万肩取出(林制219)。
11. 一 博奕制禁取締令(藩法677)。町在の博奕取締困難につき、内訴を奨励、同類であっても内訴のうへは其罪をゆるし、又その負け分を取立て返還することとする(肥)。米穀無多事ゆえ、造酒の仕込を12月15日限りと令す(年覚)。在中の造酒屋、造込を1月15日迄の日延を願い出る(年覚)。
12. 2 上方酒商売御免願出次第(覚)。5 親姫様、細川喜十郎と婚礼(本・度譜)。14 芦北郡浜村出火、79軒焼失(肥)。19 府内大火(本)。是月 家中手取米去年の通りとす(去暮減さる、御役料は元の通り、拝領米は渡さず)(触)。門松に小振松相扱うことにつき達(藩法626)。熊本町人、帯刀御免の者は来春より家内共影踏御免(藩法902)。米双場100目につき1石5斗(肥)。八代城北ノ丸石垣修覆のための出夫に飯米の支給を願い出る(年覚・年合)。小田手永横島村作事所葺積廻の運賃増を願い出る(年覚)。郡間御用の葺、高橋へ積廻の運賃増を願い出る(年覚)。

是年 八代城警衛のため高田・種山手永に地筒61人仕立(肥)。在中諸出米銀の引締を郡代、郡吟味役へ申し渡す(覚)。在中の富裕の者、村への貸米銀の元利撫遣か質地等の元銀を捨、返却する者には相応の褒賞を行ったが、以後は取り止め(覚)。昨年以來の不作につき、米穀の浪費をいましむ、又造酒量も2・3歩減、扱売等不法の商売なき様、郡頭へ達(覚)。在町にて酒本手も所持せず、造酒・密売の噂あり、当番郡代に取締りを命ず(覚)。本庄手永本山村夫平次、矢部手永岩下村の緑川支流小川で製鉄試し願い出る(覚)。水俣手永郡筒の稽古について、従来鉄砲・玉薬共自勘であったが、今後空地に松・雑木を仕立て、玉薬代に充当することを許可する(覚)。小田手永小天村の海辺部田より、御普請方石垣御用石取場に指定される様願い出る(覚)。当秋阿蘇・南郷・矢部格別の不作、このため商人米粟を里在より買のぼす(郷歴)。田浦・佐敷手永の球磨川筋の各村は、筏・小舟にて八代迄諸品を運搬し、他領産物と同様の運上を上納していたが、本年中の運上免除を願い出る(覚)。

河江手永当春急飢につき、救粟300俵、熊本坪井町河内屋に預け置いたのを運ぶ(覚)。矢部手永の養蚕についての拝借錢返納を糸出来までの延納許可さる(覚)。飽田・託麻手永田方用水井手、渡鹿村井樋仕替のため御花畑水道、本山村塩硝所水懸の井手通水中止(覚)。

天明4 (1784) 甲辰(家治)重賢

1. 6 小笠原備前、熊本発、閏1月5日江戸着(本)。27 昨年浅間山噴火により損害をうけた武蔵・上野・信濃の諸川の修復助役を命ぜらる。閏1月10日竣工(実紀・家譜続)。本藩の出費96,390両余(本・旧章)。芦北郡日奈久町出火93軒焼失(肥)。是月 博奕制禁達(藩法678)。在中市中疫病流行、祇園社に祈祷を命ず(寺例続)。在中の者、百才以上は衣服制外であったが、以後九十才以上とする(肥後藩後期法令集)。佐敷町造酒屋の日延願許さる(年覚)。

- 閏1. 10 武州・上州川々御普請御手伝命ぜらる(藩法678)。13 武州・信州川々御普請手伝御用の出銀は町方は先例の通り一統に、在方はこのたびに限り富裕者にのみ命ずる(覚・町日目)。22 武州・上州川々御普請手伝に対して、重賢時服を給わる(実紀)。26 地居奉公人、人置所へ達すべき由達(藩法678)。27 藩主登城の処、関東諸川助役につき賞賜あり、ついで2月8日小笠原備前・志水才助・福田空平等13人に時服・羽織・銀を賜う(実紀・家譜続)。堀平太左衛門、熊本発、4月江戸着(イ2月27日)(本・家譜続)。是月 西古町町人に他国御使者宿等を命ずる、年に米10俵を給す(藩法902)。大慈寺河原にて犬追物はじまる、犬追物は天明の初年、斉藤権之助川尻御作事頭在勤の節、同志の面々と申合せ同所大慈寺河原にて場所を取立て、自勘稽古を始め、同年上より千葉城に稽古場取立云々とあり(肥・本・旧章)。横手手永春日村の百姓に祇園山・長谷山より小石採取をゆるす(年合)。五ヶ所町中御免の酒本手、在中へ譲受についての達(年覚)。廻江手永鰐瀬村・藤山村・前塚原村の用水井手凌普請時の抱夫給銀増方を許可(年覚)。
2. 2 五ヶ所町の酒本手、在中への譲受、在中での商売場所について郡代より達(覚)。12 玉名郡長洲町出火、324軒焼失(肥)。20 火事場での御度度達(藩法678)。是月 寿鏡院(重賢妹・米田是福室)卒(本・度譜)。町家の者穿鑿所へ出頭の際、別当よりの添書提出のこと(藩法902)。3丁目御門勢屯の内、町に懸る分は常々町より掃除のこと(藩法902)。御手木の者無札にて見世物・芝居に入るべからず(藩法902)。川尻の犬追物、斉藤権之助・江良又十郎を師範として再興す(川尻史274)。横手手永の各村、金峰山御山での葛根堀許さる(年合)。玉名郡中富手永下米野村、八代表海辺在地にて砂糖黍仕立許さる(年覚・年合)。
3. 10 玉名郡小天村出火、146軒焼失(肥)。11 儉約のため江戸地廻行列を減ず(本・度譜)。15 藤崎宮造営350年祭、参詣人、見せ物で賑う(郷歴)。24 佐野嘉左衛門、田沼主殿刃傷(本)。是月 国中疫病流行、祇園社に祈祷を命ず、更に郡代・惣庄屋・村役人等に参詣をうながす(寺例続・壁書)。当春非常の不作につき行倒れ多し、行倒れに対する処置について達(年覚・年合)。八代稽古場のしない竹、高田三冠山より採取をゆるす(年覚)。
4. 7 阿蘇南郷高森町出火、83軒焼失(肥)。田迎手永各村に去年来疫病流行(312人死亡)につき、百姓の意気高揚のため氏神での鳴物をゆるす(覚)。8 高森町全焼(郷歴)。18 志水才助江戸発、5月29日熊本着(本・家譜続)。

- 22 藩主帰国の暇あり、然るに足痛につき願出、5月23日江戸発、熱海に湯治し、6月22日帰府す、遂に本年滞府す(家譜続)。是月 内牧手永疫病流行(寺例続)。端午御用真菰在方へ相拂うようにとの達の処、沼山津手永より少々宛相拂、残りは断る(年覚)。近野平左衛門、松皮製の団子差出す、粉にて差出すようにとの口達(年合)。
5. 18 疫病流行のため退治の祈祷を行う(藩法627)。藤崎宮にて祈祷を行う(寺例続)。21 竹迫手永大池村に山之口1名新設(林制223)。25 紅花1俵の運上銀5匁に減額(町日目)。是月 祇園祭札数懸の夫賃銀の増額を願出る(年覚)。大里角次中着座同列(本)。
6. 8 (イ4日) 志水才助清冬中老に列し、大奉行兼帯となる(本・藩法627・職員概見)。22 竹迫町に別当1人仕立(覚)。23 應五郎(治年の子)出生(本・度譜)。29 諸国に疫病流行のため薬法について触(藩法627)。是月 国中に疫病流行のため六所宮・祇園宮に祈祷を命ず(郷歴)。阿蘇小国にて明礬製造を許す(本)。全国に疫病流行、本藩も同様、幕府去る享保18年医員望月三英・丹羽正伯の記した薬法を示して治療法を命ず(肥)。
7. 一 唐人屋敷全焼(本)。
8. 一 他国酒を販売したき者は、上方酒問屋永山甚次郎より買調えるようとの達あり(年覚・年合)。池田手永下代村にて困糶の払下げに不正あり(年覚)。
9. 8 山鹿灯笼、両夜に執行すること(覚)。19 久木野手永において長門生れの炭焼に入百姓を許す(覚)。23 堀平太左衛門江戸発、11月11日熊本着、江戸滞在中鞍置馬を下してその功を賞せらる(家譜続)。是月 道中往来について諸規定の達示(藩法679)。米穀値段高騰のため造酒屋の仕込減少の書付(年覚)。内田手永木葉町の2ヶ所に恵美須堂建立をゆるす(年合)。
10. 一 藩主足痛につき10月まで熱海滞在願、12月まで滞府願達(藩法627)。
11. 1 森本儀太夫昌栄(一端、肥後国志の著者)歿す、年80(先哲)。是月 当暮家中の手取米、去暮の通り儉約につき達(藩法627)。拝領米高100石に3俵、200石以下7俵宛、10石高に4斗、地居は6斗宛(触)。堀平太左衛門江戸より帰国の節、新品種の種子粃を持ち帰る(年覚)。杉嶋に植付けし榎樟を中富手永に移植することを千田村庄屋断る(年覚)。年貢未納入には荷覆蕨を持参すべし、朝6つより蔵に搬入(年覚)。門松は来年より五段松とする(藩法680)。
12. 一 府内大火(本)。他国への積出し品の抜荷は処罰するとの達(町日目)。
- 是年 天草島の島原領預りとなったため、天草御手当の名儀を唐船漂流の節御手当と改める(本)。夏中長雨のため損毛高114,200石余(肥)。免4ツ4朱4厘(肥)。諸郡への困糶の拝領・拝借を許す(覚)。在中居住の御小人、御手木・御中間の取締りについて達示(覚)。飽田・託摩・上・下益城・宇土・玉名郡井樋御作事御用、河尻町又三郎への1ヶ年の代銭5歩増額をゆるす(覚)。高田手永、種山手永の郡筒、影踏を免ぜらる(覚)。山鹿灯笼の節の喧嘩は科料とする(覚)。京都人参方、角屋六兵衛代人の領内での販売禁止につき、郡代へ達示(覚)。郡代所替、山内次郎助・山本・山鹿、渡辺善右衛門・下益城、中路加右衛門・芦北、高瀬文平・野津原・鶴崎、また、内藤儀左衛門・合志、水野伝左衛門・芦北、中路加右衛門・飽田・託摩(覚)。当春疫病大流行、川尻

町にて死者200人、熊本にも大いに流行、浜町にも死者2・3人(郷歴)。御国中町在一統疫病流行(寺例統)。著書目録 建議 法制 山田茂時。古今肥後見聞雜記 地誌 寺本直廉。

天明5 (1785) 乙巳(家治) 重賢・治年

1. 15 月次の拝賀、細川中務大輔興文参観す(実紀)。25 飽田郡白浜村74軒焼失(肥)。29 参向の公卿の館伴を命ぜらる、勅使は亀井隠岐守矩賢、院使は細川能登守利庸(実紀)。是月 切金通用について公儀触(藩法680)。
2. 15 若殿様江戸発駕の処延引(藩法628)。治年江戸発、3月11日鶴崎着、3月18日熊本着(肥・本)。16 大豆の他国への積立差留(町日目)。19 重賢江戸発、同22日熱海着、湯治、3月15日同所発、3月17日江戸帰府(肥・家譜統)。29 一門・家老・中老よりの書付、殿を様に改む(藩法680)。是月 飽田郡椎田村にて犬追物の稽古あり(本・旧章)。郡浦手永前越村木ノ浦にて小松塩焼法はじまる(年合)。老町目御門左右の堀凌。飽田・託摩より出夫、惣庄屋、掃除頭の差図を受けること(年合)。
3. 26 守道策売薬を願い出る、医師身分ゆえ売薬を許さず(寺例統)。是月 内田手永青木村にて水晶採堀、差出す(年覚)。煎海獺、干鮑、長崎会所へ廻すこと(町日目)。
4. 3 治年時習館に臨む(家譜統)。10 治年堀勝名の別荘に入る(本)。11 治年追廻にて相撲を観る(肥)。14 豊前国宇佐宮の富札を売らないように(覚)。
5. 一 中嶋手永を矢部手永と併合(肥)。
6. 13 5月10日より降雨なく、6月24日まで大旱、是日鐘巻出る(肥)。
7. 5 細川興文月翁卒す 年63(宇土史104)。「肥人」には年61とあり。是月 江崎淡路、上御門家陰陽道目代となる(寺例統)。類族改め、町中懸々で存命帳を仕立て差出すこと(町日目)。奉行大里角次退任、町孫平太奉行本役となる(本)。
8. 11 藩主去る7月20日頃より容態宜しからずとの連絡あり、このため翌12日貫角右衛門、13日朽木多仲・沢村尉太夫(此兩人9月初め江戸着)、同25日平野新兵衛(10月2日江戸着)等出発上府す(家譜統)。是月 近見村御進上御用白芋不作のため脇売差留(年合)。
9. 5 大風(肥)。7 上益城大風(肥後藩の政治151)。大風雨田畑作に障る(損)。11 (イ21) 藩主不例につき治年熊本発、小倉路、10月11日江戸着(本・藩法628)。13 龍口邸手狭につき、願により同月25日神田橋外松平玄蕃頭旧邸跡2,000余坪貸与あり、10月10日引渡終了(肥)。是月 御花畑広間銅瓦となる(本)。盲僧は武家・陪臣の忤のみ(藩法681)。売薬御免の者は薬調製の上、再春館へ1貼宛提出のこと(藩法681)。
10. 19 江戸神田門外に拝借地をゆるさる(藩法628)。26 重賢病氣、牧野忠精使者として見舞う(史綜)。重賢卒す(実は22日という)。年68、謚靈感院徹巖崇印(肥)。29 重賢卒す(実紀)稲葉正護使者弔慰銀50枚。是月 飽田郡中牟田村の現況報告(天明誌276)。
11. 7 藩主卒去の急報熊本に達す、志水才助同9日発、12月12日江戸着(家譜統・本)。藩主卒去の達、穩便の達(藩法628)。8 藩主逝去につき穩便の触まわる(郷歴)。是月 当暮知行取役料米は去暮の通り川尻御蔵渡し(触)。

手取米、拝領米去暮の通り (触)。

12. 1 35日法会 (藩法628)。 7 埴姫竜ノ口屋敷へ (本)。 12 治年遺領相続 (本)。 24 若殿様遺領相続の達 (藩法628)。 28 治年登城、襲封を謝して献上物あり、又家臣平野新兵衛・小笠原備前・志水才助・朽木多仲・沢村尉太夫随伴謁す (実紀)。 是月 本夏の旱魃、9月の大風のため非常の凶作につき救恤あり (肥)。

是年 夏中旱魃、9月大風雨につき、損毛高143,800石余 (肥)。 免3ツ9分5朱6厘 (肥)。 朝鮮種人参上方より買付け、熊本町に売場をたて下直にて売渡す (覚)。 内藤儀左衛門・玉名、林七郎右衛門・上益城、西部吟次・宇土、河喜多藤平・八代、坂口唯之允・合志、岡嶋猪右衛門・山本・山鹿、郡代に所替 (覚)。 他所富札売買禁止 (肥後藩後期法令集)。 当年より文化6年まで矢部手永に杉60万本を仕立 (林制224~6)。 著書目録 学校考 法制 中山昌札。

天明6 (1786) 丙午 (家治・家斉) 治年

1. 1 日蝕皆既 (肥)。 藩主治年此日より越中守と称す (実紀)。 5 青丘 (宣紀末子) 長岡隼人興彰 (初紀近) 没す、年60 (肥・本)。 11 御家督につき18日御祝の達 (藩法628)。 13 役付の書付下る (度譜)。 15 江戸にて新藩主治年家督相続の祝儀、熊本は同18日 (本)。 24 靈感院様百ヶ日法会の達 (藩法628)。 是月 正院手永にて平井村、宝田村の分村を願い出る (覚)。
2. 1 藩主治年越中守と改む (藩法628)。 5 小笠原備前江戸発、3月13日熊本着 (本)。 6 長崎唐人屋敷出火 (本)。 11 五十挺頭中村市郎右衛門、御用銀の不正発覚、食禄没収 (本・先祖付)。 本荘・横手・田迎三手永水害、村々18ヶ村水抜新井手出来、間数6,606間、経費122貫500目余、夫数180,500人 (肥)。 26 御曲輪内屋敷門前道作の達 (藩法629・681)。
3. 5 (イ4日) 大木総馬熊本発、4月江戸着、明年6月下着 (本・家譜続)。 15 御代替につき花畑出頭の達 (藩法629)。 17 有隣院、白金屋形へ移る (本) (度譜は18日とす)。 是月 町内作事料拝借を制限、貸与分は5年賦返納とする (藩法903)。 紅花売却の制限 (年合・覚)。
4. 19 稲津弥右衛門頼勝 (号北地) 没す、年82 (先哲)。 23 治年備前守行の刀給わる (実紀)。 29 治年江戸発、5月14日大坂着、同26日鶴崎着、6月3日熊本着、志水才助御供 (肥・本)。 是月 八代郡種山手永北種山村にて庄屋排斥の騒動、翌天明7年7月3日判決 (肥後藩の政治)。 遠坂関内奉行副役となる (本)。 内田手永下社村分村を出願 (覚)。 柳川領にて百姓仕立の風聞、南関の隣接地にて開墾の様子につき吟味 (年覚)。
5. 1 平野新兵衛江戸より下着 (本)。 4 元奉行日隈奎太夫永貞没す、年74 (肥)。 13 太守様御暇の上使、拝領物を給わる。5月15日歓謁の達 (藩法629)。 25 家中の者御礼の節進上の御肴代銀を、以後は銀1匁に付丁銀百銅宛、音信所へ上納の達 (藩法629・触)。 是月 本藩人口届出づ、惣人口528,788人 (本)。 祇園祭札数出夫、手永割となる (年覚)。
6. 3 長岡監物は知熊本発、7月10日江戸着、同25日江戸発、10月1日下着 (本)。 7 藩主登城、又奉行所・時習館にも臨む (家譜続)。 8 本日より23日まで御城御礼 (本)。 24 門司源兵衛藩主の鎗稽古に出席を命ぜらる (本)。 25 宇土地方洪水 (覚)。 6月下旬より7月上旬にかけ藩内 (内田・中富・坂下・矢部手

- 永) 洪水 (覚)。 26 城内竹丸往来差紙付のほか禁止 (藩法682)。 29 強雨増水 白川1丈7尺、長六橋流失 (肥・町日目)。 是月 御内検手伝役、見図帳・名寄帳しらべのため帳口より10人宛差出すよう手伝役より出願 (年覚)。 八代郡大無田量表1枚につき7歩宛増方 (年合)。 灰吹銀其外潰銀など銀座のほか売買禁止 (藩法681)。
7. 3 城内竹丸往来差紙のほか禁止、家来ばかりは不可 (藩法629)。 10 堀平太左衛門の功勞に対し、加増辞退につき藩主愛用の十文字鍵を給う、御国中先槍に持たするよう藩主特命 (肥・本)。 24 江戸洪水 (本)。 28 夜大洪水 (氣・川尻史291)。 是月 奉行小坂九郎助用人に転じ、中山辰之丞奉行副役となる (本)。 阿蘇山衆徒、成満院・中福蔵坊、近年在中の疫病流行、不作の連続のため密法執行 (年覚)。 靈感院一周忌 (本・度譜)。 歩札商売差留について達 (町日目)。
8. 9 浪人鉢の取締について達 (藩法629・682・904・触)。(浪人、町家にて合力銭等ねだらば帯刀者たりとも押捕え、差出すこと)。 15 阿蘇山噴火、村々の作物被害多し (肥・年覚)。 28 大風 (肥・氣)。 是月 両社祭札の節御能番組、樽肴差上に町方物書が大夫年行事を連れ御花畑に行き小姓頭付根取に引き合わせていたが、今後物書の紹介は廃止 (藩法903)。
9. 8 將軍家治薨じ、家斉嗣ぐ。 23 御家督御祝能、9月23日より27日まで拝見 (藩法683)。 是月 他領の富札禁止 (藩法904)。
10. 30 坪井・古町・新町三ヶ所に銀錢預会所を設く (肥)。 町家銀錢手形、新町・古町・坪井町三ヶ所の銀錢預会所取扱いとなる (藩法683)。 是月 草薺製様について公儀より御触 (年覚)。 関東地方水損のため米・雑穀を回送すべしとの御触 (町日目)。 凶作 (覚)。 布田手永川後田村垂玉温泉の再興を願い出る (享保17年の山崩のため潰) (年覚)。 翌7年再興のため入目銭の拝借を願い出る (年覚)。
- 閏10. 10 公儀御日柄慎の達 (藩法629)。 鷹野・網懸 田畑を荒さぬ様達 (藩法683)。 25 家老長岡主水に將軍家御継目御札のため江戸出府を命ず (家譜続)。 是月 八代球摩川洪水 (年覚)。
11. 14 公方様御法号浚明院様 (藩法629)。 17 年暮手取米・役料代銀にて (藩法629)。 手取米去暮の通り損毛甚しきにより、手当不足分は代銀にて渡す、損毛届高348,600石余 (触)。 藩主直書を以て家士を諭示す (肥)。 23 小笠原備前鶴之別荘へ入る (本)。 27 家斉公本丸へ移徙 (本)。 是月 番頭弓削清左衛門、堀の悪行を上書し、蟄居命ぜらる (城南史359)。 濃州産種子粃、菊池・玉名に植付を命ず (年覚)。
12. 4 藩主治年川尻の犬追物を見物 (川尻史274)。 24 竹原玄路・境野嘉十郎・斉藤權之助、椎田村に犬追物を始む、是日藩主これを観る、69騎出場 (肥・本)。 27 在国年頭お札の達 (藩法629)。 是月 治年疱瘡 (本・度譜)。 町在、諸上納錢、未8月朔日よりすべて市差にして上納のこと (藩法904)。 大坂にて御国船定問屋6人を定む (藩法903)。 川尻正中島町宇七丁頭役となる (川尻史118)。 荒尾手永下荒尾村出火、11軒焼失 (年覚)。
- 是年 夏中度々大雨洪水、8月大風に付損毛高348,670石余 (肥)。 免3ツ1分6朱6厘 (肥)。 春、廻江手永惣庄屋藤井常右衛門新井手開さく (城南史455)。

天明7 (1787)

算学師役甲斐安右衛門豊隆中小姓に召直さる(城南史480)。天明新川の開さく完成(川尻史298)。矢部手永大川村にて水取口の開さくをゆるす(郷歴)。先年の地筒仕立の達について再度達(覚)。矢部手永に御内検役1名増員、2名となる(覚)。唐船へ売渡す煎海鼠、干鮑等長崎より役人が浦々を廻ることになったので惣庄屋へ連絡するよう郡代へ達(覚)。寸志願の督励(覚)。立田御山見拟地筒3名辞退につき早々に跡役を決めるよう達(覚)。託摩郡両手永の野開運上銀、今後10年間増額を命ず(覚)。錢塘手永会所に諸郡へ渡す鯨油蔵取建(覚)。中島伝九郎・山本・山鹿、田中九郎兵衛・八代、柳井瀬右衛門・宇土、西郡吟次・阿蘇・南郷、御郡代所替(覚)。米・雜穀高騰のため市中に打崩流行(肥後藩の政治149)。著書目録 和説苑 教訓 杉谷貞之進。学政考 法制 本田四明。

天明7(1787) 丁未(家斉) 治年・斉竝

1. 13 御家督能の達(藩法630)。 28 治年妙解寺参詣(家譜続)。是月 増奉公人抱差出(藩法683)。治年妹おとし灘波少将と縁組(本)。お花畑にて御祝能(度譜)。
2. 4 藩主新開大神宮参詣(家譜続)。 12 藩主先祖藤孝より伝来の犬追物を復活することとし、斉藤権之助・江良又十郎に師範を命じ、是日追廻にて犬追物を観る(家譜続・旧章)。 14 藩主追廻にて相撲を観る(家譜続)。 21 有馬陣戦没者のために安国寺に於て150回忌法要取越執行(肥・藩法684)。 22 藩主妙解寺・泰勝寺参詣(家譜続)。 25 藩主登城、奉行所・時習館・藤崎宮・六所宮・本妙寺御入(家譜続)。 28 藩主治年熊本発、豊後路、4月8日江戸着(本・藩法630)。是月 倭約の達示(本・藩法630)。旧古の職人、上下の節の御目見場は今後町独礼の坑木の末とする(藩法903)。去秋凶作につき他国よりの穀物の買入をゆるし、運上銀を免除す(肥)。
3. 13 家老長岡主水、將軍家御代替り御礼のため熊本発、豊後路(本)。 28 就姫出生(度譜)。是月 手当請持の番方指物渡さる(本)。
4. 12 諸郡水害(寺例続)。 15 家斉將軍宣下(度譜)。 30 銀錢預会所廃止(肥・藩法684)。
5. 8 東叡山火の番(本・度譜)。 15 藩主吐血、其後浮腫生じ疲労加わる(本・家譜続)。 18 熊本古町・新町及び川尻等に打崩しおこる(肥)。歩札により穀類高騰のため熊本古魚屋町・呉服町・中唐人町・西唐人町・新二丁目に打崩しおこる(郷歴)。 19 河尻町に打崩しおこる(郷歴)。 21 出火・口論の場の野次馬は打拂うこと(藩法684)。是月 大坂・江戸町人騒動(本)。落書・戯言の取締り(藩法684、904)。内望の寸志停止(難稜)。玉名郡内田手永・坂下手永洪水(覚)。
6. 6 国学者伊形莊助質(号靈雨)没す、年42(先哲)。是月 徒党をくむものはすべて誅伐に処する旨を令す(肥)。江戸米価高騰、1両に1斗8升(本)。藤崎宮修覆、棟上げ(寺例続)。五ヶ庄難決のため島原より大麦100俵渡さる(覚)。
7. 一 落書を戒め氏名を記し上書すべきことを達す(肥)。
8. 4 藩主5月中旬より不例の達(藩法630)。 11 藩主不例のため中老小笠原備前出府、翌年6月熊本下着(本)。是月 公儀より倭約の触(藩法684)。大

風洪水 (気・川尻史 291)。

9. 2 藩主不例のため家老平野新兵衛出府 (本)。 4 藩主病篤きため、予め分家和泉守立礼に相続許可の件出願す (本)。 15 上野火の番免ぜらる (本)。 16 藩主治年卒す、年30 (実は8月15日卒去という)、謚大詢院禅月宗関 (本)。 実紀は9月19日とす。 歿前幕府奏者番板倉左近将監をして問わしむ (実紀)。
- 18 和泉守家督、太守と称す (度譜)。 19 宇土支藩主和泉守立礼本家を相続し、宇土は其息与松相続す (実紀)。 22 長岡清記 (初伊三郎、織部) 紀休箇口邸内にて卒す、年65 (肥)。 29 大詢院様 (治年) 遺骸江戸発駕、11月10日熊本着 (本・度譜・藩法631)。
10. 1 宇土新支藩主細川与松登城、相続を謝す (実紀)。 10 先太守法号大詢院と称す (藩法631)。 26 靈感院3回忌 (本)。
11. 11 和泉守掛盤を献ず (実紀)。 15 新藩主細川立礼登城、相続を謝し是日より越中守と称す (実紀)。 長岡主水・平野新兵衛・小笠原備前・溝口藏人・田中兵庫随うて謁す (肥)。 19 家督相続につき肴進上、12月7日お花畑お祝等の達 (藩法631)。 23 当暮手取米の件、手取米は去暮の通り、拝領米高100石に5俵宛、200石以下10俵宛、中小姓5俵宛、10石高に7斗宛、旅詰5斗宛、3人扶持以下は拝領米なし (藩法631・触)。 是月 家中被官・家来・浪人等虚無僧弟子になるもの寺社奉行へ届のこと (宝暦6年12月の再触) (藩法685)。
12. 23 藩主登城、従四位下侍従敏任、名を齊茲と改む (実紀・本)。 是月 奉行中山辰之允退任、松下久兵衛奉行副役就任 (本)。 他国よりの売薬禁止 (年合)。 新町・古町に疱瘡発生 (郷歴)。
- 是年 8月雨続にて損毛高84,700石余 (肥)。 免4ツ2分3朱5厘 (肥)。 疱瘡町在に流行す (郷歴)。 湯浦手永大河内村の囲籾蔵修理につき寸志をゆるす (覚)。 坂梨手永井手村の穢多、阿蘇宮末社を穢す、入牢20日 (覚)。 富元を町家とす (旧章)。

天明 8 (1788) 戊申 (家齊) 齊茲

1. 10 五町手永船津村疫病流行につき地祭のため子供角力 (覚)。 11 藩主旧臈元服齊茲と称す (藩法631)。 14 平野新兵衛江戸より下着 (本)。 23 於御国御祝 (度譜)。 25 公儀代替につき御法令2月3日読聞 (藩法631)。 30 京都大火、禁裏および二条城炎上、公卿邸宅も類焼 (実紀)。
2. 1 上益城郡山ノ口に対し注意書を付達 (林制230)。 21 家齊前髪執 (本・度譜)。 22 禁裏炎上につき3日間鳴物禁止 (藩法632)。 是月 去月の京都大火の節、重賢室有隣院の実家たる久我右大臣家焼失、居館造営のため在町へ4年賦にて4万両の上げ金を課す (肥)。 朝鮮人参、以後人参製造所取扱となる (藩法686)。
3. 5 領知御判物頂戴 (本・度譜)。 判物頂戴につき中小姓以上御花畑出仕 (藩法632)。 9 大木総馬熊本発上府 (本)。 是月 博奕など訴人に褒美のこと (藩法686)。 銀通用について達 (藩法691)。 算学師役甲斐政右衛門、安兵衛と改名 (城南史480)。 鶴崎町止宿の節上旅籠2匁3分、中2匁、木賃6分5厘にきまる (年合)。 敷河内村御山に肉桂仕立 (年合)。
4. 4 長岡主水江戸より下着 (本)。 15 藩主齊茲、祖父重賢の遺志を継ぎ国用繁多の折柄時務奉わるべき旨内々申出の処、是日御用番牧野備後守を以て其趣

旨を嘉納し、愈々国用あらば其節沙汰すべき旨指示せらる (実紀・肥)。是月射術の稽古に賭をおこなわないよう達 (藩法687)。天守方御用の砂鉄、荒尾手永より1貫目差し出す (年合)。宇土郡長浜村笠岩村にて姥貝殻での白灰焼ゆるさず (年覚)。

5. 10 齊茲江戸発、豊後路、6月21日初入国、中老小笠原備前御供 (本・藩法632)。長岡左仲、藩主帰国御礼のため上府 (肥)。是月 盗難被害者は刑法方に届出ること (藩法687)。藩主、公義御用勤めたき段願出ゆるさる (藩法632)。
6. 5 齊茲弟長岡寅次、筒口御屋敷に移る (肥)。是月 加納遠江守、本藩白浜の白石20俵所望 (年合)。博奕制禁について達 (藩法687)。内田・荒尾手永豪雨 (覚)。

閏6. 一 蘭船入津風説 (本)。

7. 6 奉行石寺基助番頭に転ず (本)。23 藩主直書をくだして家士の心得を示し、直言を求め、併せて家中往々党をたて分外のことを私に相謀るものを厳に戒しむ (肥)。是月 益田弥一右衛門奉行副役に任ず (本)。2 朱判吹方差止、丁銀吹方にかわる (藩法688)。寅次様、筒口御屋敷への引移について、近火の節の除場・駆付夫についての達 (年覚)。
8. 18 阿蘇宮摂・末社社家の宮位昇進は大宮司取次にて鷹司家執奏によることとする (寺例寺)。是月 遠坂関内奉行本役に陞る (本)。切金・軽目金通用方について (藩法688)。
9. 11 幕府豫て本藩より申出の趣旨を容れ、本藩並びに島津藩に京都造営の上納金を命ず (実紀)。このため本藩では4ヶ年賦にて20万両を献上することとする (城南史416・肥)。14 大詢院一周忌取越 (本)。是月 松井式部徹之家老に列す (本)。佐敷町近辺で梟首、野津原で死刑執行につき、穢多指越について心付願 (年覚)。
10. 5 京都造営手伝上納金について達 (藩法632)。14 藩主熊本府中巡覧 (肥)。30 諸事省略の達 (覚)。是月 高木慶蔵時習館教授に任ず (肥)。五町手永東門寺村分村を願い出る (覚)。
11. 12 当年の米相場について勘定所より達 (覚)。29 当夏中降雨繁く気候不順のため稲作虫入につき損毛高142,000石余と届出づ (肥)。是月 他国売薬禁止、郡医師調合の売薬のみ (年覚)。中村手永霊仙村での白塩硝製造について支障調べの達 (年覚)。
12. 1 櫛方へ盗賊侵入 (度譜)。3 京都造営上納金につき達 (藩法632)。29 儉約について達 (藩法633)。是月 家中手取米について (藩法633)。口上書差上につき達 (藩法633)。新町御客屋隣に寺社町奉行所新に出来、奉行数市太郎勤務し、寺社町の諸達はすべて此処にて取扱い訴訟等も処理す (肥)。
 (「肥」には 天明7年に設置、寛政2年中止し奉行所内にて勤務とする史料紹介あり)。5ヶ年間諸事省略を命ず (肥)。唐船技荷不正のこと (藩法689)。矢部手永年貢米不足につき、33匁の双場で代銭上納を願い出る (覚)。布田八左衛門御内検役を命ぜらる (覚)。山鹿在々の紙、杣方にて買上げとなる (年合)。

是年 6月11日より在国 (本)。衣服・飲食儉約の達 (本・度譜)。御城御祝、

齊竝初入部（度譜）。家督元服祝御用懸拝領（度譜）。川尻若宮社獅子出しを始む（川尻史571）。禁裏焼失につき20万両の御手伝上納金（旧章・城南史416）。「御勝手向しらべ」では寛政1年。出京町構外の池田・五町支配の出小屋、出京町の支配となる（会譜）。

寛政1（1. 25 改元）（1789）巳酉（家齊）齊竝

1. 12 細川齊竝生母長照院死去（本）。13 藩主息長岡猶之丞（後の齊樹）出生（度譜・肥）。25 家中、寺社譜代御家人、村人数放しについて達（藩法689）。是月 式歩半真鍮銭永代通用の達（藩法689）。国中疫病流行につき阿蘇宮にて鎮疫祭執行（寺例続）。
2. 一 將軍家篤姫と婚礼（本）。是月 町絵図・見図帳毎年1月19日提出を、2月10日に限直し（壁書）。
3. 19 藩主熊本発、4月28日江戸着（度譜・本）。22 長岡応五郎死去、6才、翠雲院（本・度譜）。23 河井藤兵衛、合志郡代に所替（覚）。25 元家老三淵伊織助遊鱗没す（本）。27 富田小左衛門を奉行副役に任ず（本）。是月 六ヶ所目付を所々目付と改む（本）。音信・贈答は青銅をもって過分なきようにとの達（度譜・藩法690・肥）。將軍浜御殿にて相撲を観る、吉田追風相撲由来を差出す（肥）。奢侈品の製造禁止を達（藩法691）。道中往来規制（藩法692）。
4. 3 奉行藪市太郎安（一名政村、号槐堂）没す、年61（先哲）。是月 荒尾手永府本村にて石炭の試堀を命ず、堀夫賃、郡間負担（年合）。
5. 一 荒尾手永小代御山黒岩での石炭採堀を命ず（年覚）。
6. 7 幕府巡見使熊本通行（度譜・本・実紀）。是月 熊本地方 旱魃、白川渇水（本）。然るに6月14日より玉名方面強雨、洪水、高瀬御蔵浸水、米1,767俵濡米となる（肥・覚）。
- 閏6. 26 宇留毛村の内、立田山山潮、百姓家3軒流失、馬1匹溺死（肥）。是月 松下久兵衛奉行本役となる（本）。小田・坂下・内田手永洪水（覚）。
7. 一 唐・蘭持渡りの品に長崎宿老の手板添えること（藩法695）。越州富山・江州日野の薬売、紀州の椀売、筑前姪ノ浜の売人5ヶ年間入国禁止、売懸金取立には本年中入国をゆるす（年合）。
8. 20 旱魃につき仙勝院自勤にて祈祷（寺例続）。24 河喜多藤平、山本・山鹿郡代に所替（覚）。29 堀丹右衛門、家老代として熊本発上府（本）。是月 島田嘉津次町奉行・寺社奉行を兼ね（本）。造酒他所への販売は鶴崎の5人を除き禁止（年合）。
9. 16 大詢院3回忌（本）。17 幕府諸藩に囲米を命ず（実紀）。本藩囲糶27,000石（肥）。是月 酒の移出入を禁ず（肥）。
10. 5 五町手永万石村・室園村分村を願い出る（覚）。8 大地震にて此日迄日数7日昼夜数度襲う（肥）。25 幕府堀平太左衛門の勤功を賞す（本）。是月 長崎奉行より、長崎宿老の手板なく唐・和蘭陀の渡来品の買取禁止の達、このため領内に取締令（年合）。
11. 6 高瀬文平・上益城、片山八郎兵衛・野津原・鶴崎、国武十之進・小国・久住、神山忠兵衛・菊池郡代に所替（覚）。22 土佐国羽根浦沖へ異国船漂流（本）。25 大目付大木総馬江戸より下着（本）。29 幕府万石以上の大名に系譜の提出を命ず（実紀）。是月 当暮手取米去暮の通、拝領米100石に5俵

寛政 2 (1790)

宛、200 石以下10俵宛、中小姓 5 俵宛、 3 人扶持以下は拝領米なし、旅詰 5 斗宛 (触)。

12. 10 益田慶次・玉名、宮本伝右衛門・鮑田・託摩郡代に所替 (覚)。 13 五町手永立田山見奴役の昼飯米・心付米の支給法を改む (林制 240)。 是月 在宅の面々地子・内作年貢、月限の通上納せよとの達 (触)。

是年 春築地墳の改修 (城南史455)。 4 月以来旱魃、6 月中大雨洪水にて損毛高134,300 石余 (肥)。 免 4 ツ 2 厘 (肥)。 小国は不便につき他国商人の入国をゆるす (覚)。 著書目録 郷党歴代拾穂記 史伝 男成大和。封事 法制 幸川貞次郎。

寛政 2 (1790) 庚戌 (家斉) 斉茲

1. 25 大女院死去 (本)。 是月 刺墨を受けた罪人のうち、改心後 5 年経過すれば、これを除く (本)。 天草より奉公のための入国者は雇うべしとの願出る (年覚)。
2. 1 球磨川下竹木運上拾歩一の起原調査 (林制 244)。 24 「御家譜続編」の編集を薮茂次郎・高木敬藏に命ず (肥)。 是月 大塚平右衛門・坂根少九郎・熊谷多十郎、藩主の思召に叶わずとして知行家屋敷を没収さる (本)。 玉名郡坂下手永繁根木村、洪水のため野開設を荒地へ地目変更を願い出る (覚)。 荒尾手永金山村にて石炭試堀をゆるさる (年覚)。 屋敷の取扱について達 (藩法 696)。
3. 10 藩主斉茲妹就姫熊本出立、4 月30日江戸着 (本・度譜)。 このため白金屋形増築 (度譜)。 11 藩主斉茲第 1 子長岡浜次郎出生 (本)。 17 妙解院 (忠利)150回忌 (本)。 是月 蘭人江戸城登営 (本)。 刑罰命ぜられし者の届出について (藩法 696)。 荒尾手永金山村御山の内、焼石原にての石炭採堀の願出る (年覚)。
4. 25 一寺一社の行状を 6 月迄に報告するよう達 (寺例統)。 29 藩主斉茲江戸発、6 月 4 日熊本着 (本)。 是月 家中の女、他出の節の仕法について達 (藩法 697)。
5. 24 幕府、朱子学を振興し異学を禁ず (肥)。 是月 大宮司は阿蘇宮惣司にて阿蘇坊中僧俗社格古法等すべて大宮司に伺い、また学頭職の進退も大宮司より取り計らい、僧俗も社家同様たるべく達 (寺例統)。 諸郡商札改めおこなわる (年合)。 小田・坂下・荒尾・中富手永の穢多、年貢米買払御免および人別出銅御免を願い出る (覚)。
6. 15 忠利 150回忌法要あり (肥)。 是月 中老以上、通行の節の仕法について達 (藩法 697)。 五町手永、沼山津手永洪水 (覚)。
7. 19 中老小笠原備前長栄、家老に列す (本)。 29 旱魃のため池上村池辺寺独鈷開塔 (本)。 是月 このころ在中作際の楠木伐払 (林制 248)。
8. 3 家老平野新兵衛退任 (本)。 16 益田弥一右衛門 (致仕名一翁) 歿す、年 80 (先哲)。 25 鐘カ浏にて、藤崎杜中雨乞祈禱 (肥)。 是月 南蛮薬種の取り扱いについて達 (藩法 698)。
9. 11 松野外記、家老代として熊本発上府 (本)。 15 幕府、儉約令の 5 ケ年延長を命ず (実紀)。 是月 式朱判通用について触 (藩法 698)。 町孫平太、奉行職を免ぜらる (本)。 家中手取米を 100 石につき 20 石とし、家中への年賦返

- 納の貸付金の方法を改む、また儉約の励行を命じ、衣類横目5人を置く(度譜・肥・本)。諸郡寺社間数、寺社支配の浪人、庵持坊主改めを達す(年合)。
10. 7 竹原勘十郎用人分職担当御免、上聞役となる(分職帳)。11 堀平太左衛門の勤勞を賞し、三家に准じ、有吉四郎右衛門次座と定む(肥・本)。19 島田喜津次を奉行副役に任ず(先祖附・本)。23 藩主他出に対して在方の仕法(藩法 697)。是月 9月規定の儉約方法につきさらに励行をうながす(肥)。衣類横目を設置す(城南史 499)。当先渡旅詰知行取 100石に13石宛、地居同 2石宛、地居切利取10石高に5斗宛渡さる(触)。寺社間数、由緒を改む(寺例続)。旅人問屋株、薬種屋株、米穀合株の新規願出を禁ず(壁書)。
11. 22 帝、新造内裏へ還幸、禁裏還幸の使者松平求馬(本・度譜)。25 家老代(大目付)堀丹右衛門江戸より下着(本)。是月 陰陽師の占い、一切禁止(肥)。中老志水才助 500石加増(本)。藩主他出に際して危急の仕法(藩法 697)。農民の離村制止(在人数の者の奉公は在中に制限)(熊本史学 5号)。
12. 2 琉球使、江戸城登営(本)。3 本妙寺末寺中の隠居後住について本妙寺において申し渡すこと(寺例続)。6 藩主、はじめて会議日に奉行所に臨む(本)。14 南関手永中和仁村にて“きち土”採堀ゆるさる(覚・年覚)。15 大目付堀丹右衛門を中老に任ず(先祖付・本)。23 質地・譲地証文の取扱いについて判決(菊池郡中原家文書・熊本史学21・22号)。是月 佐敷に文武稽古所建(本・旧章)。高橋町にて榎方晒蠟を町家に請負製造せしむ(本・旧章)。郡方目付を設く(肥)。小代焼物を国中商売にする旨達(年覚)。陰陽道取締につき土御門家より竹宮村江崎淡路に命あり(寺例続)。江戸地震(本)。
- 是年 江戸屋敷に文武稽古所を設く(旧章)。夏より数10日旱魃・虫入等にて損毛高 189,500石余(肥)。著書目録 長岡太一郎上書 法制 長岡太一郎。南条氏系図 史伝 松岡元善。

寛政3 (1791) 辛亥(家斉) 斉茲

1. 17 藩主、矢部砥用地方にて狩猟のため熊本出発、同夜砥用原町泊、20日矢部浜町泊、21日矢部にて狩、22日浜町裏山にて山神祭、23日御船泊、24日熊本帰府(肥・郷歴)。29 大坂山崎半兵衛、水前寺砂取にて油払をゆるさる(覚)。
- 30 本妙寺本堂焼失(本・肥)(「寺例続」は2月とす)。忠利より当代までの系譜を編す(肥)。是月 志水才助、次兵衛と改む(本)。在人数の者、町家奉公により町家の風躰にならない様との達(市雑乾1)。人馬賃錢上納について(藩法 699)。
2. 10 金峰山火事(度譜・肥)。11 赤星以碩薬草の苗取りに加賀に出立(郷歴)。
- 14 新居群助を奉行副役に任ず、奉行吉海市之允退任(先祖付・本)。27 (イ29日) 斉茲熊本発、4月15日江戸着(度譜・肥・本)。是月 奉行遠坂関内中着座同列(本)。下々奉公人給銀について規定(藩法 699)。本妙寺近辺出火の節の町火消駈つけの達(市雑乾2)。郡受の場所での芝居興行の節、町方横目詰めること不要(市雑乾3)。長崎へ赴く商人の心得、長崎定間屋10軒名前明示(市雑乾4)。甲斐優隆春三人扶持諸役人段算学師役となる(城南史 480)。川尻町影踏おこなわる(川尻史 169)。府内での開帳等人寄せの願は家老に提出のこと(壁書)。
3. — 他国よりの旅役者、本藩滞在中の国法順守証文は町別当の中印を得、町方

根取に提出することとする(市雑乾5)。大坂山崎半兵衛、油杓指南のための来熊(年合)。小代焼物御用の外は一般販売をゆるす(年合)。

4. 2 齊茲、御鷹の捉えた鶴を給わったのを謝す(実紀)。18 齊茲、参勤す(実紀)。是月 井手ノ口町の日小屋商品統制(市雑乾6)。陰陽道上御門家支配免許について(藩法 700)。
 5. 13 6月12日まで大雨降続川々洪水(損)。14 奉行副役益田弥一右衛門、同富田小左衛門を本役に任ず(先祖付・本)。是月 城下四軒に長崎米座の出店を設置す(市雑乾7)。米質の質札、空鉢取組の禁止(市雑乾8)。藤崎宮寺社目付を命ぜらる(寺例続)。領内洪水(覚)。
 6. 9 是日より12日迄大雨、莫大の荒地出来(肥・本)。高瀬御蔵浸水(覚)。11 將軍家齊吹上にて相撲を観る(肥)。第19代吉田追風勤仕す(肥)。12 高瀬洪水(度譜・肥)。是月 鶴崎近領に盜賊船出入につき手当あり(本)。京都七条権介類焼につき、助力として白銀50枚遣わさる(本)。百姓訴訟の手続等を定む(肥)。両祭礼御客屋弘の品、惣月行司より納入の時、町頭1人を同伴のこと、又、受取には町方横目立合とする(市雑乾9)。唐人町古着商人在市中では御田祭礼の他は禁止(市雑乾10)。町家の訴訟手続を定む(市雑乾11)。雨降り続き天候不順のため、祈祷執行(寺例続)。甲佐御築、在御家人請築となる(年覚)。
 7. 一 小倉沖に唐船現わる(本・度譜)。奉行所新規建直し、9月出来(肥)。唐人町古手屋在町市廻ゆるさる、村方、往来道筋での商売は禁ず(年合)。
 8. 1 林藤八(金衛)歿、年69(肥人)。8 八代城付、脇山半兵衛、土席不似合の儀あり、擬作家屋没収さる(本)。
 9. 4 関東大風雨(本)。8月6日とこのたび両度の強風にて、江戸田町石垣崩以前より5尺築上(本・度譜)。11 陰陽道土御門家へ入門すべきこと(藩法 701)。14 矢部手永長田村にて金鉱採掘(郷歴)。是月 川尻・鶴崎・船手組脇等を免職逼塞(本・肥)。幕命により「肥後孝子伝」にもれたる者を調査(本)。町在の者、獵札所持のものの遊獵を禁止、山立海辺は従来通りとする(本)。再春館駈付につい 明和9年の通りとする再触あり(市雑乾12)。寺社町奉行所廃止につき、廻役を差止、定廻の内3人、寺社方・町方兼帯(市雑乾13)。高持百姓諸獵禁止、無高者などに願により獵札を渡す 山在海辺は従来通り影踏は仕廻とする(覚)。
 10. 7 松井式部、帯刀と改む、是日熊本発(本)。26 靈感院(重賢)7回忌(本)。27 惣銀所、切米所を廃して勘定所付属とする(度譜・藩法 701・肥・旧章)。是月 米穀類府外への出売禁止の再触(市雑乾14)。
 11. 22 知行取、手取米暮渡の印紙、11月中に差出すこと(藩法 701)。是月 手取米、去年の通り(触)。阿蘇小国にて唐紙漉立(肥)。
 12. 18 府内城下竹町より出火、400軒焼失(本)。24 矢部浜町出火(郷歴)。矢部新町出火48軒焼失(郷歴)。是月 長岡内膳の願により小島川口に新地干拓をゆるす(本)。天草島にて百姓徒党騒動す(本)。細川齊茲、妹寿姫、長姫と改む(本)。杉谷檢校処罰(度譜)。朝鮮人夢の作付自由(藩法 700)。
- 是 年 追廻にて騎射はじまる(本)。損毛高 249,800石余、免3ツ6分1朱7厘(肥)。地方証文改につき達(土管付録)。妙見社祭礼の折、毎年喜奴組の催

を執行 (熊本史学14)。

寛政4 (1792) 壬子 (家齊) 齊茲

1. 2 高山彦九郎熊本に来る。7月28日再来 (肥)。 15 大目付松野外記江戸より下着 (本)。 27 田迎六斎門外で犬追物あり (度譜)。 是月 困窮で医療困難の者を再春館で治療す (肥)。 北里村内岳湯村に明礬山仕立の見積仰付られ、北里伝兵衛より財政支出を願うこと (年覚)。
 2. 2 川尻町、影踏おこなわれる (川尻史 169)。 10 坂口唯之允・阿蘇南郷、不破九郎次・野津原・鶴崎、道家左八郎・上益城郡代に所替 (覚)。 是月 上知配知等覚書のこと (覚)。 他国の俗人を寺社内に留置くことを禁ず (寺例続 4)。 竹の丸で犬追物の稽古あり (本・旧章)。 奉行所士席の間の上に郡方二階出来 (肥)。 上野左学、坂下手永下沖須村鍋田村の内わんとうと申所、50～60町余開明願。村方故障吟味のところ、8月に津波で溺死者多く村方お断り言上 (覚)。 猫谷村御山へ松井家中の下奉行人侵入伐採するを取締る (林制 249)。 負銀で分散になった者、完済まで町並表家に居住禁止。裏借家は勝手次第 (市雑乾16)。 紙楮他所に出すこと前々通り禁止 (市雑乾17)。 安田平吉・八代、高橋権右衛門・芦北郡代当分仰付らる (覚)。
- 関2. 12 教授高橋敬蔵・国学相誘方につき学校方奉行に意見書を提出、20日更に補うところあり、3月7日これを許す (先哲)。 是月 医業の面々、年中の医案治験、翌正月吟味役へ達のこと (藩法 702)。 旅人間屋共心得方達 (市雑乾18)。 新町1丁目吉文字屋勘右衛門、出版業願につき事前検閲、版權等江戸表の出版統制にならって許可 (市雑乾19)。
3. 1 熊本地震60余度、島原温泉岳に煙り見ゆ。5日よりよな降る (肥)。 14 柳川城下出火、900軒余焼失 (本)。 宮本伝右衛門・菊池、河喜多藤平・鮑田・託摩、横田勘左衛門・山本山鹿郡代に所替 (覚)。 是月 町内鉄砲屋試射、玉目10匁以下は各屋敷内で、10匁以上は室園村角場で行なうよう、前以て申出差図を得よ (市雑乾20)。 横手手永椎田村騎射稽古場、地主へ返還に付当年年貢扱いについて (覚)。 天守方御用白塩焼深川手永水次村惣兵衛より納来 (年合)。
 4. 1 肥後沿岸一帯に温泉崩れ津波来襲、2,250軒流失、5,520人死亡 (年譜) (「肥」は 2,252軒流失、5,209人死とす。「本」は 1,520人死とす)。 川尻で泰宝丸新造出帆式あるも津波で二丁村陸地に突上げる (肥)。 9 杉谷伊兵衛・宇土郡代に所替 (覚)。 12 矢部原村出火11竈焼失 (郷歴)。 19 齊茲江戸発、中国路、5月25日熊本着 (本)。 是月 銀所より払出の中に鑄銀等あっても通用さすべし (市雑乾21)。 御家人名前の地子屋敷、町家の者相対借用になり難し (市雑乾22)。 細川治年室瑤台院、湯治のため帰国 (肥)。
 5. 20 高瀬方面洪水 (本)。 是月 紙楮商売仕法定む (同12年12月再触)。 山鹿南関に紙楮問屋建つ (市雑乾23)。
 6. 一 旅人一宿のこと問屋中 (古町2ヶ所・新町1ヶ所・坪井1ヶ所・京町1ヶ所) 惣輪番に申付く (市雑乾24)。 高瀬川洪水、雑穀共計 4,869俵濡米となる (肥)。
 7. 9 家老堀平太左衛門隠居。中老志水次兵衛の大奉行兼帯を免じ遠坂関内を大奉行とす (本)。 21 質屋・紺屋・搦油・粧商売願は郡代限り取扱 (覚)。 是

月 田浦手永二見村山内にある焼物石取出を細工町別当忠助より願出(年合)。馬士 1 人で馬 2 疋ひかぬよう(市雜乾25)。

8. 21 益田広次奉行副役に任ず(本)。新座役者共諸事年行事の指揮に従うべきこと(市雜乾28)。藤崎宮祭礼に新町 1 丁目より 61 年間中断していた獅子を出す(市雜乾29)。深川手永水次村に宝暦年中鉄吹場仕立てられたるを廃止するに付、預置いた品々惣庄屋達によってお払(年合・年覚)。
 9. 3 大目付朽木内匠、熊本発上府(本)。 4 津波につき幕府より金 3 万両拝借(実紀)。「藩法 702」は 8 月とす) 10 年賦返済なり(旧章)。是月 五島近江守領内大風にて収穫皆無、種子粃 2000 俵購入申込あり(覚)。郡代共在足高手永望のこと(覚)。宝暦 7 年に侍中扶持方米および開米等在中より付出の際代官認印の点検を命じたのを再触(市雜乾26)。
 10. 一 御銀所預振出はじむ(藩法 702・本・旧章)。米価高値に付 1 俵 40 目以下に統制(覚・肥)。真宗一派在中門徒のうち小本と称し俗人が仏事を行う者あり、禁止(寺例続)。家中へ割賦の塩、従来 1 俵 5 匁のところ津波損害で 5 匁 8 分と定む(藩法 703・肥)。他所者同士旅人問屋で口論、傷害事件あり、和陸内済願証文にて赦す(市雜乾30)。
 11. 3 長岡猶之丞、六之助と改名(肥)。 11 京都御所造営費献納につき藩主以下賞賜あり(実紀)。 25 川尻大慈寺江月和尚、河尻府主歴代墳墓略記を表わす(川尻史 722)。是月 郡間で御本方同様銭小預取扱う(藩法 705)。御鷹場取締について布告(藩法 703)。主水殿および佐敷詰手取米、芦北郡より例の通り手当あり、米銀銭受取り家中へ渡すべく伺(覚)。瑤台院様(治年室)御殿新築に付宮村平馬野屋敷を召上(覚)。竹迫手永群原にて炮術、今年より来春まで試打(年覚)。当暮手取米三ヶ米渡、三ヶ二銀銭渡(触)。
 12. 4 漂流異国船の取計について公儀触あり(藩法 703)。 6 松井帯刀江戸より下着(本)。是月 早乗遠馬に関して規定(藩法 704)。立田山で家中の者猪狩許可(林制 254)。八代高田焼物師土取を村方より断われ、惣庄屋解決案(米 5 升宛代銭払)により藩より支給(年合)。
- 是年 二本木屋形建方はじむ(本・度譜)。損毛高 369,800 石余(肥)。著書目録 肥後事蹟考誌 地誌 長瀬真幸。嶋原一件書状之写 地誌 佐田右州。

寛政 5 (1793) 癸丑(家斉) 齊茲

1. 11 砥用にて御狩あり(郷歴)。奉行副役新居群助転役(本)。是月 木倉手永御船町、村徳兵衛鑄物職許可(年合)。
2. 25 細川齊茲熊本発、4 月 9 日江戸着(本)。(「肥」は 4 月 2 日着とす)。是月 熊本城修理を許さる(本)。有吉四郎右衛門立喜隠居、同主善立直家督(本)。中老志水次兵衛を家老に、大目付松野外記を中老に、入江十郎太夫を奉行副役に任ず(本)。
3. 8 玉名郡南関町 124 軒焼失(肥)。 9 合志郡竹迫町 114 軒焼失(肥)。是月 古町薩摩屋栄蔵、善吉に紀州表より腕師呼下御国産腕類仕立方を許可(年合)。
4. 23 堀巢雲(平太佐衛門)歿す、78 才(本・先哲)。臨時朝会、細川齊茲はじめ参勤の輩 26 人(実紀)。 27 二本木新館へ瑤院移転(本・肥)。是月 尾州で使用の鋏便利ゆえ下国の際求めるよう指示(年覚)。

5. 4 他所の侍路用無心に八代町奉行所へ申入るに付指示 (市雑坤93)。 8 志水新之允八代番頭仰付けられ引越に付、扶持方払之儀について村方より願あり (覚頭)。 是月 南関町出火で 124竈焼失の為御銀拝借願のこと (年覚)。
7. 一 塩 1 俵を 8 匁 8 分に値上げす (肥)。
9. 16 大詢院 (治年) 7 回忌 (本)。 24 家老志水次兵衛清冬病死 (肥)。
10. 12 細川齊茲長女峯姫誕生 (本)。 是月 細工町別当忠助郡浦手永網田村の内にて茶碗焼方を許さる (年合)。 熊本薩摩屋善吉菅尾手永黒峯山に椀類挽方を許可。用材伐跡に運上銀で植林す (年合)。
11. 9 郡間で銭預り発行 (藩法 705・肥)。 11 (イ 6) 長岡六之助、細川氏を称す (本・肥)。 是月 郡中より徴達の品目リスト調べ (年合)。 手取米去年の通り (触)。
12. 18 元奉行蒲池喜左衛門正定歿す、66才 (肥)。 是月 米売捌方難波の様子に付双場通り 3 斗 5 升に付 28 匁で御用達共へ買方を命ず (触)。
- 是 年 他国商人の在中直売、5 ケ年差留を更に延長 (年合)。 上益城郡御山支配役木原才次、惣庄屋布田桂右衛門惟令と共に大矢野山林へ 120 万本植林 (熊本史学 5)。 2～3 月雨天続につき晴の祈祷を藤崎・祇園にて執行 (寺例続)。
- 著書目録 村上名和系図 史伝 寺本直廉。笹啼集 歌文 肥後熊本世中庵。万葉集佳調 歌文 長瀬真幸。

寛政6 (1794) 甲寅 (家齊) 齊茲

1. 17 遠坂関内を中老に任じ大奉行兼帯 (本)。 18 大目付三淵守礼家老代として熊本発上府 (本)。 29 在中鉄砲打には入念吟味し農事の妨げとならぬように達 (藩法 705)。 是月 灰吹銀漬銀等銀座で取扱うこと (藩法 705)。 受帳しらべに付御内検 12 人をやとい使用のこと (覚)。 吉村貞右衛門去る 10 月野津原惣庄屋仰付けられること (覚)。 武井弥十郎儀擬作高 100 石下されるにつき知行取並の屋敷を拝領願 (覚)。
2. 2 川尻町に影踏行なわれる (川尻史 169)。 7 細川六之助嫡子届出 (肥)。 9 影踏証文例年 3 月 24 日限に仰付けられるが今年から当月限とする旨達あり (郷歴)。 是月 南関手永御山伐採 10 ケ年停止 (年覚)。 奉行副役入江十郎大夫上府 (肥)。
3. 13 細川六之助の実名茲樹と名乗る旨 (肥)。 是月 佐敷町助三塩焔焼方許可 (年合)。
4. 9 將軍家斉浜苑で相撲を観る、19 世吉田追風勤仕す (肥)。 杉谷伊兵衛宇土郡代に所替となる (覚)。 11 細川興里室清源院江戸で死去、70 才 (本)。 21 国武十之進・玉名、増田角助・野津原鶴崎、大村源内・小国久住、横田勘左衛門・山本山鹿、高嶋権右衛門・玉名、佐藤勝之助・阿蘇南郷、佐久間角助・飽田託摩郡代に所替仰せ付けられること (覚)。 28 細川治年参勤す (実紀)。 是月 郡浦大田尾村・赤瀬村・三角村・下網田村、津波で損害 (年覚)。 刀指の者新規町居住を禁じ従来居住も次第に引払うよう (市雑坤 106)。 砥用手永名越谷村土喰村御藪畝之内受藪仰付けられ下されるように願出の一件 (年覚)。
5. 4 細川齊茲江戸発、6 月 4 日鶴崎着 (本)。 10 大目付朽木内匠江戸より下着 (本)。 是月 射術稽古に賭禁止の達 (藩法 706)。 塩代銭 7 匁 5 分のこと (家中郡間渡の塩代銭) (藩法 706)。 球磨紙楮他所売出差留られること (年合)。

郡中の寺社堂宇間数人別等改方のこと (年覚)。

6. 6 主水殿給地八代郡塩屋村塩浜一卷 (覚頭)。是月 博奕賭勝負制禁 (藩法706)。川尻奉行支配内の諸買物は現錢買物通帳を以て買取ることを達す (川尻史 372)。氏神祭に踊を禁止 (肥)。池田手永上松尾村・下松尾村の津波被害者で救願に洩れていた48軒分の本材を下ちれるように小山立助よりの願出 (年覚)。玉名郡へ割賦のうち荒尾手永で仕立た晩田粳1石4升を引捨てるよう仰付けられるやの伺 (年覚)。
7. 18 下益城郡水野伝左衛門・八代、野津原鶴崎田中九郎兵衛・下益城、八代後藤喜太夫・野津原鶴崎郡代に所替仰付の事 (覚)。是月 藩主町内通行の節町中心得について (市雑坤33)。球磨御領紙楮商売の儀についての達 (年覚)。正院手永平嶋村両七瓶瓦焼職許可 (年合)。寺院境内地にある町地借受の分米卯年限町並に差返す (壁書)。
8. 25 大目付朽木内匠を家老に任ず (肥・本)。是月 新町1丁目より藤崎宮祭礼に獅子出し方願出、以前は無願で出る (肥)。
9. 12 小国西里村岳湯村の明礬焼立熊本町薬店へ売捌願之通に達すること (覚)。18 同上品他国へ売出すことは叶い難し (覚)。是月 田浦手永田浦村出火に付再拝借願のこと (年覚)。関町焼失拝借願のこと (年覚)。郡代在渡御知行所付のこと (覚)。
10. 1 相良壱岐守長寛息左京頼徳登城、將軍家初見 (実紀)。是月 宇土町独礼の内苗字刀御免の者其身までで子弟は特権なし (市雑坤34)。高瀬町高橋町奉行宅に御紋付大丸挑灯二張宛渡 (市雑乾42)。川尻正中島町横目、同町要助仰付けられる (川尻史 119)。佐敷手永牢屋建替に付本材拝領願のこと (年覚)。
11. 9 竹原勘十郎玄路歿す、75才 (先哲)。16 中老堀丹右衛門熊本発 (本)。28 細川重賢室有隣院逝去、65才 (度譜)。是月 父祖へ下し置かれた御紋服着用願叶い難しとのこと (触)。川尻町川口二町村に勝手方付所々横目詰所新規建方のこと (覚)。
- 閏11. 一 所払刑の者については生活の道取はからい落つき先住所もたしかめるように (市雑乾35)。手取米去年通仰付られること (触)。田浦手永田浦村焼失に付拝借銀のこと (年合)。
12. 2 松向寺 (忠興) 150回忌 (本)。是月 相良左京従五位下志摩守に叙任 (実紀)。高森町火事拝借年賦延長願のこと (年覚)。紙楮問屋願に依り熊本町に相究めること (年覚)。御客屋御用勤の町医師影踏御免のこと (市雑乾36)。服蔵の者も新座年行事を勤めてもよし (市雑乾37)。大坂文学稽古所出来 (旧章)。著書目録 洙泗正旨 儒家 渡江松石

寛政7 (1795) 乙卯 (家斉) 齊茲

1. 8 「肥後孝子伝」の著者中村忠享正夢歿す、73才 (先哲)。是月 細川齊茲芦北巡覧 (本)。
2. 17 増田角助・上益城、平山繁平・野津原鶴崎郡代に所替のこと (覚)。是月 細川齊茲熊本発、4月2日江戸着 (本・肥)。藏納・給地高物成差引の書付ほか (覚)。参勤の節小倉路人馬賃錢割賦のことに付勘定所御供方に小物成方から申し談ずること (覚)。
3. 4 大目付三淵守礼江戸発4月11日下着 (本)。9 中村左助・阿蘇南郷郡代

に所替の事(覚)。 15 遊行上人高瀬発阿弥陀寺に入る、25日江戸へ立(肥)。
是月 二口米御免、増水夫米は従前通り郡間納の事(覚)。 相撲行事任命は町
方口之間で根取より申渡(市雑乾38)。

4. 2 高木紫溟(画家)歿、年60(肥人)。 是月 火事の節町方御横目出役御紋
付中丸挑灯持たせること(市雑乾39)。 町家の者刀差に無礼なきよう(市雑乾
40)。 高橋町奉行火事場目印について(市雑坤90)。
5. 19 中老堀丹右衛門江戸より下着(本)。 是月 田浦手永火事に逢い拝借年賦
延願のこと(年覚)。 飽田託摩御山荒れたため20ヶ年杣取を見合すようねがい
のこと(年覚)。 諸郡寺社間数等につき郡代より内意のこと(年覚)。 南関手
永吉兵衛・甚右衛門火事に逢い拝借再願はかないがたいとのこと(年覚)。 熊
本町に准じ在町の者に寸志を賞せらる規矩、以来町人同様取扱仰せ付けられ
ること(難稜)。 金銀の寸志は米穀寸志の通り時々値段をもって大概積合せ相
しらべ申すべく究のこと(難稜)。 野津原手永吉熊村救立のこと(覚)。 諸郡
胡麻大小豆青菜改之儀に付土地内検および郡代へ達の事(覚)。 竹迫手永鳥栖
村田北村寄せ村に仰付けられ庄屋1人で勤め来たが居兼ねるので以前の通り村
限庄屋をおかれるよう願のこと(覚)。
6. 8 可児清左衛門八代城附御意に叶わせられず(本)。 11 大洪水、京町山崎
のほか一切水浸(本)。 12 阿蘇山出水、熊本洪水(気一肥後の風土史一熊本
県災異誌)。 23 世子細川六之助一橋紀姫と縁組、6月28日藩主これを謝して
礼物あり(実紀・本・肥)。 是月 高森手永上色見村地方の内三瀬守礼方家来
荒牧幸右衛門と申者と村方論地のこと(覚)。
7. 一 川尻正中島町源蔵丁頭役仰せ付けらる(川尻史 118)。 御前御用にて江戸
詰奉行より差登依頼、田浦禹餘糧石村より羚羊差出(茶は菅尾より)(年合)。
藤崎宮作事棟上(寺例統)。
8. 一 国中の革類旅人買方差とめる様に春竹村より願のこと(年覚)。 本庄手永
春竹村穢多共天守方御用に陣笠30枚宛年々相納め代銭を下されてきたので冥加
寸志を差上げたいとのねがい(年合)。
9. 11 元奉行吉海市之允景純歿す、72才(先哲)。 是月 郡代中在御足高所望の
こと(覚)。 大津手永片俣村の下中窪田村は寄せ村になり庄屋一懸のところ川
をへだて御用筋間に合い兼ねることもあるので所柄として庄屋を立てられるよ
うに願出のこと(覚)。
10. 12 町方疫痢流行(郷歴)。 是月 泰勝寺知行物成の内三歩半を以て寺へ相納、
残り分は蔵納いたすよう勘定所より達のこと(覚)。 南関手永類焼拝借銀延願
のこと(年覚)。 小森田和学蔗製法方につき門弟中も心懸出精いたすに付き各
地での製法を許す(年合)。 家中渡しの塩1俵7匁5分のところ4匁7分とす
(藩法 706・肥)。
11. 19 細川斉茲妹寿姫松平頼説に縁組、翌4月2日入興、同7月20日逝去、17才
宝鏡院(度譜)。 是月 日蓮宗不受不施派を厳禁(肥)。 八代北小路御据地撫
に付郡出夫達の事(年覚)。 手取米去年通り仰付けられる(触)。 田浦手永田
浦村類焼拝借年賦年限延願のこと(年覚)。 富山薬売共より国中直売御免の御
札として寸志差上げの願あれど、他国者の寸志召上の例なしとて召上げられず
(市雑乾41)。 小路屋敷で紺屋職いたし染物干すこと廻役より差止むべし(市

寛政8 (1796)

雑乾42)。町家で諸職人賃銭過分につかわさぬよう(安永8年3月の再触)(市雑乾43)。

閏11. — 竹村左近之允佐敷詰仰付けられた節拝領野屋敷を召上げられたので、伊佐角之允見合を以て返されるようねがいのこと(覚)。

12. — 長姫、咸姫と改名(本)。在人数より町人数に移ることを禁ず(肥)。託摩郡錢塘村沖に新地14町余出来(肥)。町絵書は火事の節御絵書所へ駈付けるので火事場の町並公役御免(市雑乾44)。

是年 川尻津方運上銀三歩免除さる(川尻史 369)。著書目録 古今集 歌文 長瀬真幸。芍薬花品評論 博物 中瀬適叟。辨名補義 儒家 齊藤芝山。古学規 儒家 渋谷松石。

寛政8 (1796) 丙辰(家齊) 齊茲

1. — 拝領屋敷敷不足対策についての達(藩法 707)。鶴崎町零落に付拝借ねがいのこと(年覚)。南関町類焼の者共拝借錢上納の儀について達(年覚)。諸郡竈改仰つけられ御達並に郡代より内意(覚)。屋敷取扱の仕法達(藩法 707)。
2. 11 秤改めのため神善四郎役人来熊の下達あり(肥)。是月 荒尾手永向野赤崎両村庄屋一と懸で難渋ゆえ村限庄屋を立てられるよう願のこと(覚)。御免方例一例に仰せつけらるべきやの段郡頭より達書(覚)。藏納・給地高の増減書付ならびに諸願米拝領米当夏作出来まで延米、諸床物成等の書付(覚)。家中家来町家で法外の行為があれば刀指でも押置申出よう(市雑乾46)。
3. 5 儒者草野運平歿す、82才(先哲)。10 田中柳宅(名医)没、年73(先哲)。是月 花火線香商売停止(先和来度々触)(市雑乾47)。二尺以上の大きな風をあげぬこと(市雑乾47)。二ノ口米御免(覚)。
4. 23 細川齊茲江戸発、6月1日熊本着(本)。是月 芦北計石平生両村前御開塘筋に櫨植付を命ず(年覚)。幕府へ進上の豊後梅在中より買上のこと(年覚)。
5. 4 猟薪取は耕作山立の障りにならぬよう達(藩法 708)。是月 大津町の者共凶作につき拝借願、叶い難しとのこと(年覚)。往還筋町人作事料拝借願の筋は親類五人組請書出すべし(市雑乾50)。旅籠代は日限払を励行すべし(市雑乾51)。両社祭礼の節町中より献備の挑灯掛修覆はよいが新規は禁止(市雑乾52)。15日頃より雨降続、度々洪水(損)。天明三年早田の儀に付郡代ならびに郡吟味役上内検存寄の趣書抜のこと(覚)。
6. 11 大雨降る、熊本大洪水(郷歴)。12 洪水1丈6尺、緑川加勢川筋53ヶ所塘切れ、藤富村権藤「古ホゲ」を生ず、俗に「辰の年の大水」(川尻史 291)。13 非常洪水につき粮米前渡さる(藩法 709)。21 疫痢流行(郷歴)。29 祇園社祭礼是日にのぶ(肥)。是月 鯨手永より例年新米上納の儀は洪水のため例の通りの俵数上納なりがたしとのこと(年覚)。古今未曾有の洪水、熊本府内京町山崎の外全域浸水、潰家 2,927軒、冠水田畑15,000町、損毛36万石(宝暦以来御勝手向)(「肥」は潰家 2,545軒、田畑15,202町、損毛 362,000石とす。又「度譜」は潰家 2,927軒とす)。
7. 23 恒例の御国御礼献上の鯛不良につき返却、是日より藩主以下謹慎、藤崎宮祭礼も9月15日に延期、寺々の鐘も打方止、幕府の指示により8月16日より平常に復す(度譜)(「藩法 707」は22日謹慎とす)。29 西里七兵衛(義民)没(肥人)。30 細川齊茲2子熙吉逝去、7才、桂林院(度譜)。是月 竜田口

子飼方面に堤防築、豊年塘後に一夜塘という(肥)。

8. 16 隆徳院50回忌(度譜)。是月 横目廃止(城南史 499)。
 9. 30 細川斉茲3子職五郎誕生(度譜)。是月 郡代中在御足高所望の事(覚)。日奈久町海岸洲崎と申所塘築方を仰つけられ年貢定米上納仰せつけらる(年覚)。北里手永万成寺教願と申者へ作紋小袖下置かる(難稜)。藤崎宮祭礼執行(藩法 709)。
 10. 2 八代城内昨夜出火(御達)。是月 五町内永宇留毛村懸立田山洪水で諸木根こげになったものの処置について(年覚)。
 11. 7 金津久助、松浦亀蔵と口論手きずを負につき知行家屋敷没収士席差放さる(本)。是月 手取米去年の通り仰せつけられ、水害に付渡分はこの節すべて渡しすてとすること(触)。家中手取米ならびに在御家人心付米の儀につき伺いのこと(覚)。質屋酒屋等の運上銀を郡支配銭として農民救恤にあてる(城南史 371)。印判職は出頭の上許可を受けるよう(市雑乾55)。火事場受持で奉行宅へかけつけの足輕共心得方達(市雑乾56)。
 12. 一 町居住御擬作取以上侍および医師、町並に門松不許可(但し寛政9年3月医師について許可、享和3年12月侍について許可)(市雑乾57)。養蚕功労者島己兮歿す。年75才(先哲)。琉球使江戸城登城(本)。細川左膳朽木家へ賀養子(本)。飽田郡古閑村に新地9町2反築造(潮害)。刑場を高麗門内勢屯より下河原に移す(本・旧章)。塩屋町に榎方晒蟬役人詰所出来(旧章)。
- 是年 琉球人来朝の大坂川船入目 626両余(損)。著書目録 往還蹤 歌文 脇愚山。高波記 地誌 鹿子木量平。洪水之私記 地誌 垣塚文兵衛。顔子 史伝 脇愚山。

寛政9 (1797) 丁巳(家斉) 斉茲

1. 15 奉行益田慶次鉄砲三十挺頭に転じ渡辺善右衛門奉行副役に任ず(本)。是月 佐敷上町焼失に付家建料拝借のこと(年覚)。川尻町民へ条規五ヶ条を示達(川尻史 131)。奉行島田嘉津次着座同列(本)。
2. 15 長岡監物は知隠居・米田織居は常相続、長岡左馬助と改め家老に任ず(肥)。
- 18 西沢文助自働にて砂糖製法に付て甘蔗代など 500目渡されること(覚)。
- 21 白石清兵衛を奉行副役に任ず(本)。
- 23 細川斉茲熊本発、4月11日江戸着(度譜)。
- 24 郡間を廃し奉行所郡方に合併(肥)。
- 是月 郡間を廃し小物成方は勘定所付属とす(林制 274)。郡間御銀所は小物成方御銀所と改む(藩法 709)。小物成方を勘定所付属とし後に郡方付属とす(肥)。
- 6月10日から12日まで洪水のさい流材木を取揚げた者を吟味するにつき明細書を差出すこと(年覚)。家老小笠原備前熊本発上府(本)。
3. 一 鍛冶頭取在勤中は丁頭列とす(市雑乾58)。山鹿郡の内において刑罰仰せつけられた者のこと(覚)。御料乙津川石垣修覆に付てのこと(覚)。
4. 7 奉行所附属局中部署変更のため建物継足あり、そのため溜間などを変更す(肥)。
- 14 米田波門は著歿す。78才(先哲)。
- 15 細川斉茲参勤す(実紀)。
- 是月 是月より御用紙赤紙になる(度譜)。洪水で流失しないように下馬橋・観音橋・船場橋などの守りを東古町・京一丁目・二丁目などに命ず(市雑乾60)。宇土知行所下益城郡中山手永山崎村零落につき寸志差上の者を賞す(難稜)。
5. 一 大目付津川平左衛門江戸より下着(本)。板・竹木その他領出を禁ず(肥)。

寛政10 (1798)

飽田郡嶽村の内で紺青堀方を許す(肥)。熊本町別当条目改正、1懸1通づつ渡置(市雑乾62)。町家銭預について家持富裕な身代以外は銭預差出停止(市雑乾63)。

6. 一 判彫職奉行所に報告のことなど(市雑乾64)。鯨手永村方当時受持有前の通名寄帳など調替申度願について地引合帳に記録(覚)。庭帳改正を命ず(肥)。

7. 13 切支丹改めについて令を出す(川尻史 163)。是月 医業以外の者の家伝の薬などによる治療を禁ず。あわせて如神丸一粒丸の販売を禁ず(肥)。

閏7. 4 西依成斎(垂加神道)没、年96(先哲)。是月 郡浦手永網田村藪内の榎床荒れたので五ケ年木場作、六ケ年内より榎苗渡下されれば植付たき願のこと(年覚)。是月中旱魃、健軍雨の宮御神幸式あり(肥)。

8. 一 昨年来小松原より築造中の新塘石垣 1,887間修築完成、惣入目 197貫880目余(肥)。濁酒商売免許の者以外禁止の処違反者多し、嚴重取締る(市雑乾66)。

9. 一 金銀出入今後奉行所では取扱わず(藩法 711)。山田手永山内松虫付により祈祷願のこと(年覚)。郡代在御足高所望の書付(覚)。

10. 2 八代城天火で焼失(度譜)。8 元家老有吉四郎右衛門立喜歿す(本)。

17 八代城天火で焼失御触廻る(郷歴)。20 郡代衆一昨日御越にて手永中勝手宜者共呼出され見懸り銀仰付られる(郷歴)。是月 南関手永居住の切米取年々切米受取の儀につき達(覚)。

11. 18 改暦宣下(本)。21 紀姫茲樹と縁組ととのい白銀邸に入る(度譜・肥)。

是月 夥しき借物打重なり難渋至極なれど手取米は去年の通仰付られる旨のこと(触)。勝手向窮迫につき役人共心をつくすべきよう(藩法 710)。来午年より新暦頒行のこと(藩法 712)。別当共火事の節かるさん裁付着用許可(市雑乾70)。

12. 27 延享元年以来の借銀訴訟について同3年奉行所にて取上を規定せし処、是日従来 of 訴訟中未済のものは全部棄却し今後出訴の分に限り裁決することを定む(肥)。29 侍屋敷外壁落書停止のこと(藩法 711)。是月 川尻町中有船の吟味をなす(川尻史 358)。左義長の乗馬遠慮すべし(藩法 701)。六所宮高麗門新牢近火駈付は従来 of 職人町に代って新町中惣受持、職人町は脇々並に火事場出方を命ず(市雑乾68)。中富手永中富村・上中富村・分田村・中分田村寄村にて庄屋一懸仰つけられしところ、間隔り以前の通各村に庄屋立て下さるようお願い(覚)。廻江惣庄屋藤井常右衛門知行洪水にて皆無の旨下益城惣庄屋より達しあり、心付米8石下し置ること(覚)。著書目録 昇天秘説 皇典 林桜園。

寛政10年 (1798) 戊午 (家斉) 齊茲

1. 14 左義長の火で池田より出町まで70余軒焼失(度譜)。22 儒者古屋鼎歿す、68才(先哲)。是月 四山会所設置、10月より勘定所受となる(肥)。

2. 3 高田原より出火 109軒焼く(肥)。27 大目付氏家甚左衛門家老代として熊本発上府(肥)。是月 奉行中火事出役の節は町火消一懸輪番を以て付添うべし(市雑乾72)。

3. 5 正院手永有泉村疫疾流行に付祇園宮において祈祷仰せつけられ、供物など差越されること(覚)。

4. 18 細川斉茲就封の暇をたまう(実紀)。是月 御餌刺造酒屋裏で網敷禁止。竿で刺すのは苦しからず(市雑乾74)。衣服御制外を認められた町人といえど絹縮緬の上着は禁(市雑乾75)。
5. 9 細川斉茲江戸発、6月13日熊本着(度譜・肥)。砂糖製造に付手島三郎左衛門製作場并水車共に差上願あるも、未だ公式決定前なので表立って召上はならず(覚)。是月 松井家で御用町人を家来分扶持人に召抱に付、町所居懸りにて抱は認めぬ藩の方針なれど格別に許可(市雑乾74)。洪水の節御花畑前川へ作事所より御用船3艘差出につき竿差の者細工町船持より4人寸志にてつとめることをみとめる(市雑乾76)。犬追物稽古場を千葉城向櫓下より田迎村に所替(肥)。
6. 23 家老小笠原備前江戸より下着(本)。是月 出京町類焼の者家建材拝借願(寺社方諸帳目録)。慶長・宝永・享保銀と新銀引替基準(藩法 712)。長岡内膳忠昌隠居、次郎太郎忠虎相続(肥)。
7. 一 玉名郡亀甲村の者鉄砂吹を許さる(肥)。
8. 1 家老小笠原備前に大組を預く(本)。是月 珍らしき鉢物高価で取引停止(藩法 713)。種山手永柿迫村・栗木村・河俣村の者山内の柞曲木をもって灰焼方願出のこと(年合)。大津町定例花火のこと(年合)。
9. 14 古銀引替の率分について川尻町民につぐ(川尻史 375)。是月 神水村苔立方少なきにより釣漁取締の件(藩法 713)。寺支配の者寸志にて苗字御免の者病死いたし、倅へ引継願かないがたきこと(難稜)。杉島手永杉嶋村上地荒地にて無免になり小庄屋給切手渡願(覚)。
10. 21 奉行入江十郎大夫転役、不破万平を奉行本役に任ず(肥)。23 諸寺院内墓所掃除おこたりなきよう達(藩法 713)。29 出火の節の仕法および火の用心のこと(藩法 714)。是月 横手手永古町村・宮寺村庄屋一懸にて御用筋届兼るにつき庄屋下されるようねがいのこと(覚)。諸郡先年一統寄せ村仰せ付けられた分、郡代より直に達すべきよう飽田託摩井上平八より達のこと(覚)。
11. 15 勝手向難波につき来未より成年まで四年間省略の達(藩法 713)。18 筒獵について炮術稽古の上でおこなうこと(藩法 714)。是月 本年より猶4年間諸事省略を命ず(肥)。手取米去年の通り仰せ付けられる旨のこと(触)。英彦山坊中抱置同宿の者で還俗追放された者が札守等くばり勤化祈祷したりして過分の施し物をとるなどしているが、これらの者は藩の手で独自に処分するよう英彦山より依頼(市雑乾79)。
12. 14 幕府諸藩に令してみだりに米札を発行することを禁ず(肥)。20 藩主お出の節行列通り抜けないうちに横丁屋敷より出ないこと(藩法 715)。26 真源院(光尚) 150回忌(本)。是月 小路内の者出商売は格別、居商売する者があれば町内同職の者より見聞次第訴出すべし(市雑乾80)。鷹場井手筋で8月より2月まで網漁禁止(藩法 715)。大津町庄屋一懸を前の通兩人に仰せつけられるようねがいのこと(覚)。当幕渡双場通28匁宛で買上のこと(触)。地面改正仰せつけられ、畑成田・空地開等の類郡方格別上納畝物として見図帳・名寄帳別冊に出来仰せつけらる(土管)。同年中より30石以下の小高たりとも別宅高分り御免仰せつけられる由のこと(土管)。長六橋および所々橋掛銭についての書付を勘定頭仕出のこと(覚)。著書目録 万葉集諸説 歌文 帆

足長秋。瀧川催比簿 法制 山東・小原・境野

寛政11 (1799) 己未 (家齊) 齊茲

1. 一 家老小笠原備前美濃と改名、朽木内匠明恒退任し奉行益田弥一右衛門用人に転ず (本)。町家に帯刀者雑居は好ましくないので新規借宅願は不許可、但し数十年御家人居住跡を刀指に譲渡は許可 (市雑乾81)。
2. 一 旅人雇人馬従来客屋支配より人馬会所へ差紙していたが今後は急ぐときは従来通りとし、不急ならば客屋一町方一会所の順に送達する (市雑乾82)。松井家より扶持の八代町人苗字御免について、町人数の者は藩から御免のほか認めず、尤も家中家来に抱えれば可能 (市雑坤95)。中老堀丹右衛門に勝手方上聞を命ず (本)。大目付三淵守礼澄盈を家老に任ず、翌月八郎左衛門と改名 (本)。
3. 4 細川齊茲熊本発、4月11日江戸着 (度譜)。5 中老兼大奉行遠坂関内熊本発、留守中奉行松下久兵衛大奉行事務助勤 (本)。6 中小姓頭町孫平太を奉行に再任 (本)。10 八代三手永疫疾流行につき祇園宮において祈祷を仰せ付けられ、お祓供米渡さる (覚)。是月 一統在御家人に五人組を作らせる (本)。此春御用紙色替止む (度譜)。町家より作事料拝借願は町方横目僉議の上貸与していたが今後完成後も検査す (市雑乾83)。京・大坂・長崎へ旅行の寺社町人それぞれの地で旅行日限延期を願い出たさいは直ちに許可の上国許に通告すること (寺例統)。
4. 25 大目付氏家甚左衛門江戸発、5月27日下着 (本)。是月 八代町奉行より武者修業者の扱について伺 (市雑坤96)。家中木曾路通行について、士席15人独礼以下20人宛年々両度まで認む (本)。
5. 6 松山手永大見村篠原村疫疾流行に付祇園宮において祈祷、お祓供米渡下されること (覚)。16 大津町定例花火差止めたき段の達し (年覚)。22 新出町の者共永代熊本町人数に仰付らる (年覚)。是月 中旬頃より早魃7月末まで降雨少し (肥)。圖講又はたのもし講と唱える数百人参加の大仰な講は禁止 (市雑乾84)。
6. 14 長岡内膳同佐仲痛取につき家老小笠原美濃祇園御名代 (本)。17 早魃に付6月19日暮より翌20日暮まで白川筋川上蹟所々板蓋おろし分水す (年覚)。是月 宇土知行所の者寸志で苗字御免惣庄屋直触仰せ付けられること (難稜)。貞亮院 (重賢妾) 格式を改め寺納物等数量定む (本)。藩主より派遣の火元見の者及御召馬火事場試の者昼夜の目印定む (市雑乾85)。町家に処罰者あれば五人組1日追込連坐のところ、今後かわりあれば格別原則として廃止す (市雑乾86)。他藩の軽き刀指飛脚等は武家定宿でなく新町古町間屋輪番で引うけよ (市雑乾87)。他所商人等公家門跡武家の荷物と称し絵符を差出し定賃錢にて人馬調達を禁ず、真に本所用向にて絵符持参せば到着後直ちに届出でおくべし。旅人間屋へ申付 (市雑乾88)。
7. 9 坂下手永亀甲村宇平鉄砂試吹差支えぬよう入用松木渡下さる (覚)。17 秀林院 (忠興室ガラシヤ) 200回忌 (本)。
8. 15 細川与松、細川立礼の跡式相続仰付られ和泉守と改める (宇土史 107)。祭礼の節両一門痛取につき家老長岡左馬助名代 (本)。
9. 16 大詢院 (治年) 13回忌 (本)。是月 在々所々へ砂糖製造所設く、享和元

年廃止 (肥)。

10. 1 宇土支藩主細川与松立之登城、將軍家初見 (肥)。 18 阿蘇山鳴動砂吹あぐ (寺例続)。 是月 八代城石垣修補及堀浚許可せらる (本)。 高瀬御蔵より積登の米穀、晒川口迄永徳寺村川平田船にて積平仰付けられ、運賃1俵に付太米1合5勺率渡下さる分、例年の通御年貢差継願 (覚)。 寄り附祈祷代加持を禁ず (寺例続)。
11. 一 延寿寺門前勢屯馬繫塵芥捨禁止、新古川町伝七勢屯見抔申付、勤料として揚酒本手1本御免 (市雜乾89)。 細川雅楽助 (藩主実弟・宇土支藩一門) へ毎年米500俵進められる (本)。 5匁預、2匁5分預はじまる (旧章)。
12. 18 細川与松從五位下和泉守に叙任される (実紀・本)。 是月 馬子共心得方条目定む、年2回人馬會所で読聞かす (市雜乾90)。 波奈之丸作事あり (度譜)。 鯨手永内檢詰所建直願。 積帳共 (覚)。 御差支えの折柄なれど手取米は去年の通仰せつけられる旨達のこと (触)。
- 是年 年貢米双場の儀銀子高値によって銀錢釣合申さずに付諸取立年貢銀納等差別をつける旨勘定所より達 (覚)。 川尻大慈寺開祖寒巖禪師500年忌を行う (川尻史473)。 著書目録 蜚業役相続連綿記 博物 男成守寿。

寛政12 (1800) 庚申 (家斉) 齊茲

1. 27 八代高田手永下松求磨村疫痢流行に付祇園宮において祈祷祓供米渡下されること (覚)。 是月 町内馬繫乱雜往来指支にならぬ様家主共注意せよ (市雜乾91)。
2. 7 丹羽式部少輔弟同仏次死去 (本)。 是月 郡方根取に津方を受込み取扱わしむ (肥)。 町並居宅取繕怠らぬよう近年作事料拝借願多し、今後は容易には認めぬ (市雜乾92)。 他国商人在中直売弥禁止、御国者も在中禁制品違反すれば品物押え惣庄屋より郡代へ名前上達 (市雜乾93)。
3. 7 大目付郡夷則、家老代として熊本発 (本)。 途中乗馬についての定 (藩法715)。 是月 本座大夫往来手形に苗字許可 (市雜坤98)。 就姫・峯姫痘瘡 (本)。 川尻新町橋3間掛直し工事始まる (川尻史291)。 八代御屋方建方御用下張紙、中山砥用に紙漉共仰付られ候処、紙楮払底に付漉方御免仰付られるよう願 (覚)。 是春 (イ10月) 燈籠仏徒林田幸漸・齊藤養蔵を死刑に処す (本・肥)。
4. 2 田浦手永浜町疫疾流行に付祇園宮において祈祷祓供米渡下されること (覚)。 14 細川齊茲弟長岡寅次死去20才、常応院 (本)。 25 細川齊茲馬を賜う (実紀)。 是月 早魃にて野津原大龍村用水、府内より分水、前々の見合通り彼方大庄屋已下へ金銀おく。 小物成方より支出 (年合)。 佐敷町別当久木田金四郎類焼につき銀拝借のこと (年覚)。 長崎への旅行の者御国定間屋11軒以外宿泊禁止 (市雜乾94)。
- 閏4. 6 細川龜之丞はじめて御越につき藩主会见す (本)。 15 細川齊茲江戸発5月23日熊本着 (度譜)。
5. 22 繁根木寿福寺隱居豪潮の旅行を差留めたが郡代衆のねがいにより90日間許可す (寺例続2)。 是月 東古町、紺屋町表手塘筋見抔につき諸規定 (市雜乾95)。 寺院買添町地安永5年より20年間に町へ返すこととしていたが難渋し、一堂塔破壊等容易ならざるゆえ別段を以て従来の通りさしおかれる (市雜乾96)。

杣方、取出余材木料出方1ヶ年に40貫余(林制 286)。

6. 6 打続く永雨につき阿蘇山衆徒行者自勘で快晴祈祷(寺例続4)。 20 有徳院50回忌(本)。 28 細川和泉守立之、参向公卿の館伴命ぜらる(実紀)。 是月 川尻、竹内庄吉河尻作事所大棟梁仰つけられる(川尻史 238)。 大津手永在渡扶持方、8・9月の米高期には振替を以利境算用一限に仕出、古米御算用は中止したき旨届(覚)。
7. 28 新田支藩主息、細川亀之丞利国登城將軍初見(実紀)。 正院手永宮原村穢多共受持の上納分、定規外熊本御蔵立払願(覚)。 中富手永川崎両中富、合志橋田村、余水を以って養水としており荒地開明上畝物など年限上徳米上納ごめん願(覚)。 川尻、高橋町奉行支配の御家人町人の賞罰、選挙方刑法方へ直接上申しているが今後町方御奉行へ上達のこと(市雜乾77)。 奉行不破万平退任(先哲)。 入江十郎大夫奉行職復任(本)。
8. 11 豪潮諸国歴遊の途中、京都の聖護院宮から花台院住職に補したい旨五ヶ寺組より願出の処却下される(寺例続)。 22 家中子弟・輕輩・陪臣ら不法取しまり達(藩法 716)。 25 晴厄祝として花畑で能興行(度譜)。 是月 山鹿手永平山村庄屋を二人制とするようねがい(覚)。
9. 10 公卿、発途により細川和泉守立之らまうのぼる(実紀)。 是月 町内に入職の他所者、家中屋敷へ出入許可(市雜乾97)。 細川長門守勝手差支につき年々格別 500両宛遺進し、同和泉守当秋勅使馳走役拝任につき助力として 200両つかわす(本)。 原田次郎助途中において幼年百姓を手討し知行家屋敷を没収せらる(本)。
10. 12 三角瀬戸より上沖の浜村まで海上鉄砲を禁ず(御達)。 是月 熊本町薬種屋株他へ譲渡禁止、出店は許可(市雜坤 100)。 海上一円鉄砲禁止(藩法 716)。 豪潮に九州外へ旅行を差留める(寺例続2)。 高瀬蔵出の米穀、永徳寺村平田船を以て積下すに付、右貨米渡下される分立払ねがい(覚)。
11. 7 職五郎袴着(本)。 21 高瀬文平不埒につき知行家屋敷召上げらる(本)。 25 損毛高 169,200石余届出(肥)。 28 細川重賢室有隣院7回忌(本)。 是月 跡式断絶の町人家屋敷、遺言状により町内の者に下さる(市雜坤 101・本)。 従来作事方は郡方に併局のところ当用方に入れる(肥)。 二朱判吹方再開につき達(藩法 716)。 宇土知行所の者寸志にて傘御免のこと(難稜)。 久木野手永寺床村茂右衛門と申者、椀類拵方願の通許され御山内より元木30本、1本に付5匁5分あての上納をもって渡し下されるとのこと(年合)。
12. 一 田浦手永浜村町清吉船津村海辺で砒灰焼許可(年合)。 元家老朽木内匠隠居(本)。 系譜のことにつき書付相渡(本)。 養田左五右衛門弟乙次、用人柏原新左衛門家来勝木頼助を手討(本)。 八代郡新牟田村海辺新開31町余築立(肥)。 著書目録 薩州様川尻御茶屋え御止宿の筈に付上書 法制 境野凌雲

享和1(2.5改元)(1801) 辛酉(家齊) 齊茲

1. 一 正月15夜綱引前々より停止の処迎町新3丁目紺屋横町などに余風あり、別当より差留(市雜乾99)。 浪人衆の者町在にてねだりがましき行為あれば留意注進せよ(市雜乾 100)。
2. 19 銀所預改方につき追々引替の仕方(藩法 717)。 23 細川齊茲熊本発3月27日江戸着(度譜・肥)。 25 中老松野外記熊本発上府(本)。 是月 人馬雇

- の仕法達 (藩法 716)。知行取、扶持方他村より受取の手段 (藩法 717)。佐敷に入交りの在郷町、今後佐敷町同様熊本町並とす。御郡並御用は今まで通り郡代の差図をうけよ (市雑乾 101)。久木野手永所々御山にて大川内村卯兵衛と申者櫛木取出願のこと (年合)。銀所預雁皮紙に改めたので八代芦北雁皮楮売買禁止されるよう達のこと (年合)。銀所預書替あり (度譜・肥)。
3. 一 郡浦手永前越村塩上納の内3月まで延置分を以て五ヶ庄へ渡下されたところ差引払すぎになった分7月上納のうちより差継ねがい (覚)。召上り星原茶、近年遠香悪しく、依って江戸廻り加勢群相渡すよう茶道方よりの書付 (覚)。勘定頭井上長九郎大坂詰、小物成・櫛方備金の内4万両引渡 (度譜)。時習館に千石以上の家士子弟の出席少きを以って督励す (肥)。
4. 19 中野八郎助、切米取松山新次を討果す (本)。是月 賄物所御用に桑酒造酒 (年合)。湯浦手永大野村の者、難波に付鳥もち拵許可 (年合)。
5. 11 大目付郡夷則江戸より下着 (本)。是月 似せ預が出たので獅子の図柄の黄紙に改める (城南史 422)。熊胆、再春館に貯めるにつき矢部・砥用・菅尾3手永で毎冬とれ次第、1手永3疋宛再春館に払うように、尤も相応の代金を渡下されるとの達 (年合)。
6. 24 氏家甚左衛門 (江戸家老) 没 年54 (肥人)。是月 鶴崎文武稽古所に番代以下出席はじまる (本)。郡方の儀、郡間併局以後諸御用多く、内証失費も有る様子につき心付支給されるよう書付のこと (覚)。中山会所類焼に付跡家取立のこと (年合)。銀所預につき諸規定 (市雑乾 102)。火事の節、作事所駆付の職人、出在・病気等の時は名代名前届出おくこと (市雑乾 103)。御次より拝領の能衣裳、今まで本坪井町別当が預っていたが今後両座年行事で預るよう (市雑乾 104)。御領・私領の別なく博奕打召捕のこと (藩法 718)。
7. 一 高瀬町別当苗字名乗について (市雑坤85)。
8. 一 百姓の五人組制を改め、隣伍に組合おすこととす (肥)。家老小笠原美濃長栄歿す (本)。銀所預紙、本庄手永今村の内砂取で渡方仰せつけらる (覚)。
9. 26 隈府市立あり (熊本史学14号)。
10. 一 御買上の倭物といえど熊本付出しより船積禁止のこと (市雑乾 105)。富山日野薬売、紀州椀売、姪浜商人共国中直売免許の処、俟約第一につき禁止 (市雑乾 106)。佐藤鼎知行分諸懸り物上納の儀に付て惣庄屋より願の趣あり (覚)。宇土知行所中山手永山崎村の儀、一懸では届兼ねるので南山崎、北山崎と唱庄屋兩人に仰つけられる様願 (覚)。
11. 18 中老兼大奉行遠坂関内を免職し閉門謹慎せしむ (度譜)。中老堀丹右衛門勝文を家老に任ず (先祖附・肥)。19 奉行松下久兵衛に大奉行助勤を命ず (度譜)。21 大目付郡夷則を中老に任ず (度譜)。25 20匁以下の預すみやかに引替うべきこと (藩法 719)。29 遠坂関内退役触状 (郷歴)。是月 留守居大頭津川平左衛門の職務を免じ閉門させる (「肥」に大目付とあるが疑問) (先祖附)。武家屋敷内・寺社・在町等で不届をなす輩召捕えよ (藩法 719)。
12. 一 細川斉茲左近衛権少将に任ぜられる (実紀・本)。頭布で面簪をかくす者多し、以後糺明す (藩法 719)。西園寺左中将様家来西村勘解由判官より町別当2人へ紬袷羽織贈られるが、町家禁制のため他所はともかく御国では禁止

享和2 (1802)

(市雑乾 107)。手取米去年の通仰付られること(触)。当暮手取米など三ヶ二米渡三ヶ一は3斗5升に付40日宛で代銭渡すこと(触)。正院手永宮原村穢多共年貢米の内150石立払願(覚)。

是年 小間物所御用紙代銭半方まで当年より現銭渡し下されること(年覚)。木葉山で銅石堀方に付鉄道具御払になること(年覚)。関手永の榎実入小屋建方に付御山支配役より願出あり(年覚)。村々五人組組合仰せつけられること(雑記 古三番)。藤崎丸御作事に付、江津塘築方剪方御用夫、飯米渡し下されること(年覚)。著書目録 肥後郷名考 地誌 渋江松石。桂源遺稿 詩文 細川月翁。

享和2 (1802) 壬戌(家斉) 齊茲

1. 28 世子細川六之助茲樹登城、將軍家初見(度譜)。是月 奉行宅へ駈付(火事の節)の町夫名前奉行宅へ届けおくよう(市雑乾 108)。町独礼別当列諸願町方根取への直達をやめ懸別当を経由すること。天明8年正月につづき再触(市雑乾 109)。奉行松下久兵衛を大奉行に任ず(先祖附)。
2. 5 相良耆岐守長寛致仕、志摩守頼徳相続(実紀・肥)。15 坂梨加賀黄連仕立方の事(覚)。23 細川六之助茲樹従四位下侍従に叙任、兵部大輔齊樹と称す(度譜)。是月 国町板積の完成(城南史 456)。
3. 9 野田左次兵衛奉行副役、渡辺善右衛門を奉行本役に任ず(本)。18 遠坂関内・津川平左衛門に塾居を命ず(本)。江戸鉄砲洲能登守利庸邸失火(実紀)。是月 5 匁・2 匁5 分小預は現銭引替禁止(藩法 719)。苗字刀御免の町別当列の者、縁続にて他に適当な者なき場合は寸志御中小姓の養子となるを許可(市雑乾 110)。南関在牢移転に付、右跡床畝物上納願(覚)。小代山、寛政5年より10ヶ年間留山、猶また5ヶ年年延仰付られること(年合)。住江甚右衛門を氏家跡大目付に任ず(肥)。
4. 6 世子細川齊樹一橋治済娘紀姫と婚姻(度譜)。7 八代郡古麓村八丁御山の内くら谷を木場畑に許可(林制 298)。8 是日より10日まで強雨、諸川満水(肥)。20 儒臣薮茂次郎歿す68才(先哲)。21 細川齊茲就封の暇たまわる(実紀)。是月 火術稽古は田畑等人家を離れた処で行うこと(藩法 720)。一統困窮につき預り廃止(度譜)。
5. 2 立田山で作毛を喰荒す猪を狩ることを許可す(林制 300)。9 細川齊茲江戸発、6月11日熊本着(度譜)。10 是日より29日迄雨続き諸川満水(肥)。19 横尾永助、日和見所根役助勤から船頭本役仰付らる(川尻史 202)。26 熊本府中西中刻より殊に強風雨(肥)。是月 銀所預引替代銭手簿につき本地新地などより寸志米上納に関する達(藩法 720)。小屋頭共、前々通り芝居見物等の場で不行儀の押えをすべきこと(市雑乾 112)。緑川筋鵜ノ瀬御普請に付ての寸志(難稜)。
6. 3 宇土灰屋源右衛門製法の酒灰で造酒した酒、風味として上垣猪助より差出ること(覚)。銀所現銭引替につき家中渡御鑑引合に改(藩法 720)。4 是日より7月8日まで旱天つづき雨乞祈祷あり(肥)。是月 豊後路通行について泊付人雇人馬出立前届出る事(藩法 721)。高瀬町永徳寺鎮守祇園社祭礼に俄禁止(市雑乾86)。
7. 12 「綿考輯録」の著者小野武次郎景湛歿す72才(先哲)。25 寛政9年に

勘定所附属とした小物成方を独立させ郡方分職奉行に属せしめるが、御用指揮は勝手方上聞あるいは大奉行が直接に支配す(覚帳・度譜)。是月 売薬御免は再春館に見合、以後新規売薬不許可(藩法 721)。大坂留守居萱野尚太郎、御用につき帰国(度譜)。軽輩・陪臣共士席以上に不敬なきよう(藩法 722)。

8. 9 木倉手永東上野村疫疾流行に付祇園宮において祈祷仰付らる(覚)。26 銀所預り潰方に付寸志仰付らる(郷歴)。27 士席浪人軽輩より養子の者は以後軽輩浪人の服装とす(藩法 722)。28 堀内坤次を奉行副役に任ず(本)。郡代詰問出来、日勤となる(安永6年一旦日勤となり其後廃止となっていたもの)(肥)。
9. 9 大坂留守居役萱野尚太郎 勝手方御用を兼ね勘定方奉行同様の取扱いとなる(度譜)。14 奉行入江十郎太夫に蟄居を命ずる(本)。
10. 5 長岡佩之助誕生、翌閏1月4日死去(度譜)。19 勘定頭井上長九郎、大坂借物取計一件不埒により当役を差除き知行召上げ留守居中小姓に格下げ(度譜)。是月 長崎奉行所よりの内意として肥後で樟腦を製し長崎へ差廻してはとの連絡あり、郡代・杣方に見込み調べさせたところ楠木少く御用差支えとなる由でことわる(年合)。
11. 一 本藩諸事省略期間を更に3ヶ年延長す(肥)。寸志にて苗字御免惣庄屋直触は一代限にて跡目相続仰付られず(難稜)。在町居住士席浪人格ならびに郡代直触等寸志にて倅に扶持支給願はなり難し(難稜)。
12. 21 年頭門飾若年のもの剪取方小児とはいえ禁止(藩法 722)。28 細川長門守養子同恒五郎死去(度譜)。是月 鷹場持たざる者、大鷹・隼所持禁止(藩法 722)。三野文太夫鷹場内で鶴を打ち知行屋敷召上げられる(本)。側御用櫛・栳仕立はじめる。水前寺に蠟締所出来(肥)。玉名郡葭場開新地築造(肥)。河江手永江頭村伝助に波瀬場(ヤナ的一种)許し、運上銀15匁宛小物成方納め。佐敷町焼失に付拝借の御銀年賦延願のこと(年覚)。関手永の内疫疾流行に付不染方渡下されること(年覚)。内田手永に牢屋建方のこと(年覚)。竹迫村々多業粉売捌難渋に付御買上願(覚)。

是 年 内牧手永黒川村で笠踊、御米渡下されること(年覚)。阿蘇谷内牧手永黒川村踊山杜氏子共笠踊雑用渡下されること(年覚)。入牢の者下行賄米等、御本方より支出、刑法方集銭も御本方へ引渡になるはず(年覚)。死刑執行の規定(時期)を定む(旧章)。著書目録 浄勝寺善慶父子武功覚書 記録 寺生庄右衛門真清。

享和3 (1803) 癸亥(家斉) 斉茲

1. 10 細川治年室瑤台院二本木館で逝去 49才(度譜)。是月 細川能登守利庸暇を賜う(実紀)。
- 閏1. 一 幕府の触により、今後村の実態によっては枝村も郷村帳にのせる(城南史 363)。諸家参勤に継人馬多く使わぬよう(藩法 723)。
2. 7 銀所預のことにつき違あり(度譜)。この時勘定頭残らず免職、根取物書咎、用達牢舎(度譜)。11 家老三洲八郎左衛門歿す(本)。19 中老郡夷則を家老に、大目付小笠原式部を中老に任ず(肥)。19 全奉行が勘定方総担当(分職帳)。21 大目付溝口蔵人家老代として熊本発(本)。22 長岡主水を門に準ず(本)。25 細川斉茲熊本発 3月27日江戸着(度譜・肥)。是月

秋作取上げない内に鷹野網掛などしないように(藩法 724)。勝手向難渋につき諸費削減の仕法を改める(藩法 725)。建山所持の者へは門松を下付せずと決る(林制 304)。火事場殉職の鳶役に町方御銀より錢 100 匁追善料下賜(市雜乾 115)。勝手向差支に付御立行しらべ仰付けられ、手取米等削減に付、年頭御札など略式とす(触)。富田大洲大鳳歿す 42 才(先哲)。3 ケ年間格別省略(肥)。大目付溝口藏人勝手方御用担当、用人堀次郎大夫・水足左助勝手方御用懸として奉行所詰、取次富田小左衛門・伊藤又右衛門勘定所詰、新たに勘定所目付 2 人任命(度譜・御勝手向しらべ)。在中受免 上米の制を定む(肥)。勘定所目附を新設し、井上平八・中崎源助をこれに任じ向後勝手向立行しらべを命ず(度譜)。

3. 11 家中才覚などで他所向へ金銀調達なすべからず(藩法 726)。13 学校居寮差止(御達)。是月 銀所預潰方につき仕法(藩法 724)。御家中手取米減少につき在宅の仕法(藩法 726)。私用人馬雇、賃銭規定(藩法 726)。「肥」は 4 月とす)。
4. 22 是日より 5 月 23 日まで降雨諸川増水(肥)。
5. 10 幕府、本藩にも東海道其他諸川の修築助役を命ず(実紀)。21 大目付住江甚右衛門江戸より下着(本)。是月 高麗門新牢囲外に塵芥捨てぬよう達(市雜乾 117)。瑤台院宝塔出方に付嶋崎より妙解寺までの道筋手入等について飽田郡代へ達のこと(年合)。
6. 2 関東川々浚方手伝ご用を命ぜらる。右につき小物成方銀 15,000 両指登(御達)。4 内藤市之丞を奉行副役に任ず(本)。奉行渡辺善右衛門退任 白石清兵衛本役に任ず(本)。21 勘定頭以下数人貶黜せらる(本)。
7. 3 当盆前渡、現米と御蔵渡で値段に差あり、売捌に難渋するので双場立会 32 匁でお買上の由書付(御達)。21 長岡主水隠居、松井帯刀家督相続(本)。27 宇土郡戸口浦村 89 戸焼失(肥近表 129)。是月 横手手薄羽河原中洲および塘手空地に植てあった油桐を橋材木に渡し下されるよう願出のこと(年合)。御進上御用白芋買上値 100 本に付 12 匁、同芋の茎 3 尺 8 寸がきまり(年合)。
8. — 宇土町・佐敷町・鶴崎町の者寸志によって御賞美の取扱、今後はすべて五ヶ所町同様に仰せつけられるはずのこと(難稜)。
9. — 本山塩焔所徳王村へ移転に成り諸道具等持越人馬へ 5 合飯米渡し下されること(年合)。熊野長床坊諸国午王配札に付紀州様より依頼あり、相対配札許可(市雜乾 118)。中山源助出府(度譜)。
10. 6 菊池郡と合志郡大津手永の者共境論(御達)。是月 在人数を譜代家来に召抱えることは今後格別の寺柄の他は許さぬ旨を定める(寺例続)。八代氷川筋え築をかけ野津手永取救の備にしたいとのねがいについて(年合)。御国中宿駅馬士人足等酒代等ねだり其他不埒申方禁止(市雜乾 119)。御茶屋・客屋・役宅・寺社等作事ねがいは前回修履年月記入の上出願のこと(市雜坤 79)。
11. — 勘定所用達、寸志にて御蔵米の知行下しおかれ、町独札にて差しおかれること(難稜)。諏訪幾平(金工)没 年 72(肥人)。
12. 1 東海道その他諸川助役につき藩主賞賜あり。ついで同 9 日家臣に賞賜あり(肥)。是月 玉名郡小天立花両村海辺に側金をもって新地起工翌年竣工、63

町余蠟締所附属（肥）。山鹿・山本・玉名の村々大勢申談、物貰に御府中へ出た件につき郡代身分伺のところが咎なし（肥後藩後期法令集）。小路内居商売禁止再触（市雜乾 120）。熊本町造酒本手他へ譲渡禁止、町中造酒屋中として譲うくべし（天保10年10月市在相互譲渡許可）（市雜乾 121）。小物成方改正、綾部伝喜受込、井上平八・中山源助・伊藤又右衛門右御用承るよう（度譜）。大坂詰勘定頭の格式を250石高とす（度譜）。

是年 預の総額15,000貫目に達す（城南史 422）。竹迫手永在牢建方所替等に付て達のこと（年覚）。三野綺石養子三野次郎召出され新知を下さる（覚）。試としてまず三ヶ年受免仰付けられ、御国中で3万石の上げ米及び惣高に二歩の備米割賦仰付らる（土管付録）。関東川々普請手伝84,671両（旧章）。

著書目録 鶴崎夜話 法制 脇愚山。

文化1（2・11改元）（1804）甲子（家齊）齊茲

1. 1 御擬作三代目15才未満の者はまず扶持方まで下しおかれ、15歳で切米下しおかれるきまりのこと（難稜）。山本山鹿中村多石村の内新開ねがいのこと（覚）。4 大坂会所根取差添鶴殿新吾下着（度譜）。6 火用心および見廻入念にすべし（藩法 728）。25 家中屋敷に居る町在人数の者取扱仕法（藩法 728）。28 責馬や左義長乗馬に怪我なきよう（藩法 729）。晦 河江手永村々疫疾流行につき祇園宮において祈禱仰つけられ、鉄砲打方も願の通り許可（覚）。是月 大坂留守居萱野尚太郎下着（度譜）。
2. 1 熊本町人御用達私欲有る故一昨年8、9人召籠めおいたが、この頃出牢の上府中追放仰つけられると云う（郷歴）。7 奉行野田左次兵衛用人に転出（本）。18 山本・山鹿郡代築山与右衛門、宇土郡代後藤喜大夫、御役お断に付助勤のこと（覚）。25 増奉公人に暇をつかわす際の仕法（藩法 729）。29 本山村塩硝拵所を五町手永徳王村へ所替（藩法 730）。是月 大坂御用達長田作兵衛まかり下る（度譜）。算学師役 甲斐優隆春 歩小姓列に召直（城南史 480）。海土江新無田石井樋取替出来（覚）。府中料理屋暮六つ限店内飲食禁止、売残り分を夜に来た者へ売渡は許可（市雜乾 122）。
3. 11 松下久兵衛出府、留守中堀丹右衛門・郡夷則大奉行代行、同日奉行堀内坤次出府（度譜）。是月 高橋川口年々土砂うずまり通船困難につき手入あり（肥）。阿蘇・南郷・坂梨手永、荒地夫飯米支給し開明仰付られる（覚）。
4. 4 家中の御赦免立山改実施につき達（林制 309）。5 細川齊茲2女宿姫出産、翌2月晦日死去 2才蓮光院（度譜・本）。8 細川長門守大番頭（本）。23 所々洪水（肥）。
5. 6 奉行副役堀内坤次を本役に任ず（本）。14 大雨、白川満水（肥）。是月 野津原手永宿駅の一切夫役など難浚につき出米銭拝借ねがいのこと（年合）。
6. 17 山鹿手永内在々石降る。重さ35〜85匁赤銅色鉄石なり（肥）。18 細川齊茲滞府願済（本）。是月 玉名坂下海辺平洲2町程開明（覚）。
7. 21 長岡主水當之隠居 松井帯刀相続（本）。是月 目付奥田権之允を奉行副役に任ず（本）。各別省略中町人八朔御礼に及ばず（市雜乾 123）。荒尾浜、願に依て浜成畑仰付けられる（覚）。当春以来、盜賊放火の噂あり火廻並びに盜賊改増人2人差出す（本）。
8. 2 阿蘇山鳴動（肥）。22 藩主齊茲江戸発、10月3日熊本着（本）。29 野

文化2 (1805)

津原、鶴崎町大風洪水 (本・肥)。

9. 19 細川能登守嫡子右近前髮執 (本)。是月 阿蘇宮神酒屋造酒米を以前の通り60石願出、不許可 (寺例続)。
10. 一質屋利子高利禁止、是迄通り1歩5朱とす (市雜乾 125)。酒、濁酒振売禁止、文化4・7年にも再触 (市雜乾 126)。家中面々御銀拝借仕法達 (藩法 730)。旅詰面々費用工面出来ぬ者の処置 (藩法 731)。家中貧窮の者へ拝借の儀につき書付渡 (本)。塩浜運上銭洪水で焼方成難いので翌夏まで延方ねがいのこと (覚)。
11. 21 幕府七ヶ年の儉約を命ず (実紀)。是月 来年参府早め願 (本)。旧家筋の者役付に召仕わるべき哉につき番頭等に達あり (本)。大炊御門大納言家使者来る (本)。家老堀丹右衛門へ刀一腰拝領 (本)。家老郡夷則足高1800石内500石加増 (本)。奉行島田嘉津次に足高 650石内 200石加増し、なお足高 200石を与える。座席佐敷番頭の上座 (本) (先祖附では同年2月)。山鹿御茶屋建方入目の寸志は御才覚銀寸志同様賞美のこと (難稜)。諸商売は何品によらず受売勝手、但し特定商札15種については扱禁止 (市雜乾 127)。阿蘇山鳴動、忽ち山池出来 (肥)。中山源助軽卒の儀あり当役を免ず (度譜)。伊藤又右衛門・下林茂平大坂へ引返しに差越される (度譜)。
12. 一 八代宮地村宮田善助と申者、御用紙漉方仰付らる (年合)。野津手永荒地の内、御出方を以開明仰付られ、右上納米取教として会所備に渡下されたき願 (覚)。田浦手永田浦村利三と申者瓦焼工場浜村町定米畝物の内に建替たき由、大崎村権次と申者も同様願出、願の通仰付られ年貢米は究の通上納仰付らる (年合)。受免潤色仰付らる。3万石の上納を2万石に仰付られ2歩通の御備米を1歩半に減方に仰付らる (土管)。府中物貰の者の内60才以上15才以下と廢疾者へ古綿入下され、この救手当として小物成方へ銭50貫目引渡、その殖方利分について毎年綿入購入費とす (市雜乾 128)。河尻大渡川船渡賃掟 (市雜坤80)。高瀬川舟渡賃銭定 (市雜坤81)。
- 是 年 この年より生蠟にて大坂出荷、晒蠟中止 (旧章)。井上平八等4月登坂8月帰国 (度譜)。大坂御用達米屋三郎兵衛俸罷り下 (度譜)。鬼塚源八勝手向立行しらべ御用懸 (度譜)。家中勝手向取直のため銀所預1800貫目振出 (度譜)。損毛高 224,290石余 (肥)。本藩人口総人数 541,393人、内男 281,163人、女 260,230人 (肥)。水前寺苔場漁獵禁制 (肥)。著書目録 游豆小志 地誌 松崎慊堂。

文化2 (1805) 乙丑 (家斉) 齊茲

1. 23 世子細川齊樹登城 (本)。25 宮本伝右衛門を奉行副役に任ず (本)。是月 影踏の節少々病氣なら踏場へ出べきこと (市雜乾 129)。神善四郎、秤改めにつき達 (藩法 731)。勝手向手薄につき貨殖の仕法を命ず (肥)。百町開着工、10月9日竣工 (肥)。歌舞伎等御城下に有来るものは免許するも寺社開帳は4月以降許されぬ旨を達す (寺例続)。
2. 3 上益城大矢御山杉松仕立場所、野火防止の費用下付を決定 (林制 316)。
- 4 細川齊茲熊本発、3月4日(イ14日)江戸着 (本・肥)。9 歌舞伎、淨瑠璃踊、願により在方興行許される (藩法 732)。晦 古分銅使用禁止ゆへ両替仲間で売買を禁ず (藩法 732)。是月 家老長岡帯刀、熊本発上府 (肥)。湯

浦手永野角村懸および大野村懸野地の散松切株根を以て松煙焼きとき由、願の通り許可、運上仰付られること(年合)。

3. 27 寺本湖萍(肥後見分雜記等の著者)没年69(先哲)。是月 奉行島田嘉津次登坂、3月10日下着(度譜・肥)。町家の者寸志にて新に衣服制外成難きこと(難稜)。歌舞伎興行中に穩便にて中止の節は願により日延を認めるもその日限りの由各寺院に達す(寺例続)。江戸大火竜口邸類焼(損)。
4. 3 世子細川斉樹江戸発、6月7日熊本着(度譜)。6 細川斉玆3男長岡職五郎江戸発、5月着(度譜・肥)。是月 御用宿塩屋町源左衛門処刑につき新3丁目河島平三郎跡受持、御用宿修覆料として富組1つ以前の通りに付置(市雜乾 131)。郡方かしき株不足につき自他村々無差別入会となる(藩法 733)。鶴崎高田手永村、去秋(文化1年)非常の洪水(年合)。長洲塩浜開明の儀に付達(覚)。竜姫・芳姫、鎌倉八幡・江の島弁天へ参拝(本)。幕府天文方、国々へ派遣(本)。
5. 1 職五郎熊本到着後所々お出の節の仕法(藩法 733)。3 長岡帯刀相続御礼のため江戸城登城、17日江戸発6月28日熊本着(本)。11 若殿入国につき諸仕法(藩法 733)。22 蘭法外科医福岡英安歿す55才(先哲)。29 塩不足につき家中へ支給される塩代金値上に関する達、但し寸志の者はのぞく(藩法 734)。是月 阿蘇大宮司家来士席分のもの寸志にて桜御紋の品下賜について郡代より問合せ、不許可(難稜)。野津原新野開田作願(覚)。潰銀、銀箔は決った銀座・京都職人に限ること(藩法 734)。他所よりは勿論在町よりも府中へ油持込禁止(市雜乾 133)。
6. 11 祇園宮祭礼、多人数けんかなど禁止(藩法 734)。是月 近年歌舞伎禁止以後、旅芸人の輕業見せ物許可していたが、今度歌舞伎解禁、但し旅芸人雇禁止、国内芸人興業許可(市雜乾 132)。
7. 一 砥用手永、桑津留村新規出来(覚)。本妙寺富の富元ならびに富組、財津惣三郎・箕田八左衛門に引受を命ず(寺例続)。世子斉樹奉行所にのぞむ(度譜・肥)。作事所目付横目上聞の命あり(本)。奉行町孫平太に100石増(本)。
8. 8 府中近辺人家田畑近くでの花火禁止(藩法 735)。28 下積村にて草場入会争論(林制 317)。是月 川尻町奉行難波町人544軒の救済金支出(川尻史 141)。一部の郡につき揚酒本手数増、不合理是正す(城南史 385)。深川手永道場村の者共越訴いたす節のこと(肥後藩後期法令集)。阿蘇波野原開明試の儀願(覚)。
- 閏8. 5 廻江手永藤山村近山の内にて砥石堀方願出に付、試に取出相對売捌をみとめる(覚)。是月 隨兵飾り馬の真似し造り物費多く小路打廻禁ず(市雜乾 134)。御用物運漕の者不正あり炭薪等酒代に引替買ったり預ったり禁ず。川筋町々へ触(市雜乾 135)。旅人直売相對注文禁止、問屋呉服屋共心得方示す(市雜乾 137)。
9. 5 街道通行について人馬数・日数先触の通にすべし(藩法 735)。7 奉公人取逃、欠落に際し給銀取扱のこと(藩法 735)。21 玉名郡滑石村95軒焼く(肥)。是月 幕府諸藩に困艱を命ず、万石につき千俵(肥)。公迎にかかわる不念は以来差控とす(本)。
10. 18 細川長門守舎弟、監物死去(本)。是月 追廻馬場山崎の方土手垣手入の

文化3 (1806)

こと(藩法 736)。御鍛冶方廃止、町鍛冶に御用受負わす。御用つとめぬ鍛冶は運上銀を杣方へ上納のこと(市雑乾 136)。菜種大坂届の他外所売渡禁止、国産油他所売出禁止(市雑乾 138)。家老長岡左馬助、実名を是常と改む(本)。家老松野外記に 200石加増本知 2,000石(本)。士席以上と一門・三家の家臣との養子縁組旧に復す(本)。

11. 9 火消役の見舞・附届は翌日にせよ(藩法 736)。29 鉄砲弾危険なきよう(藩法 736)。是月 「肥後国誌」を幕府に献上(本)。勘定所御用達寸志によって別段を以て九曜御紋の品下しおかれること(難稜)。
12. 8 世子斉樹会議日につき奉行所にのぞむ(肥)。17 新田支藩主能登守利庸逝去(肥)。27 就姫、久我通明へ縁組願の通仰付けらる(度譜)。是月 坂下下沖須村海辺開明願(覚)。白川尻および高橋川尻の間水当強きケ所塘築立仰付られ、費用人夫等手配(年合)。垂玉温泉再興(肥)。
- 是年 損毛高 220,300石余(肥)。著書目録 代頌編 教訓 脇愚山。索隠甲廟記 皇典 奥田庄九郎益元。

文化3 (1806) 丙寅(家斉) 斉茲

1. 19 斉樹室登城(本)。23 斉樹熊本発 3月2日江戸着(度譜・肥)。是月 郡浦新開村海辺にて宇土様より新開願(覚)。当年より三ヶ年稠敷儉約仰付られること(年合)。火の用心入念、風強き節特に入念にすべし(藩法 737)。町方横目拝領銀・加扶持は今後町方御銀より渡す(市雑乾 139)。小姓頭供奉のとき対鑑本棒駕廻人など省略願(本)。
2. 10 細川右近利国、能登守利庸の遺領相続(本)。是月 富札改の際不正があれば指返をみとめざる旨達す(寺例統)。宇土三宮社再建願(覚)。八代焼物師共より松橋土取方いたし度由願出に付指示(年合)。
3. 4 江戸大火、竜口邸類焼(本・度譜)。本年より三ヶ年間大節約にて諸役人削減(度譜・肥)。7 久住町出火48軒(本)。11 住江甚右衛門家老代として熊本発、奉行白石清兵衛も同日出発上府(本)。29 竜口邸類焼につき家中より寸志つる(御達)。是月 甲佐手永川筋御山荒れたので五ヶ年間留山とす(年合)。鶴崎町播磨屋喜十郎に勘定用途を命ず(度譜)。
4. 23 細川斉茲、就封の暇を賜う(実紀)。27 竜口邸手狭に付東隣 3,500坪拝領、神田の拝借地は返上す(度譜・本)。是月 仙台通宝は他所で禁止の旨達について(藩法 738)。寸志の者相続について、安永2年に2代目迄跡目寸志不要としていたが今後必要(市雑坤 1)。続目の寸志は現に官府に差出すように、在中取救または諸入目などの寸志は別段相当の賞美仰付らる(難稜)。先祖以来拝領の御紋品、子孫願により着用許可(本)。
5. 25 細川斉茲ならびに姫方浜町仮住居に引越(本)。是月 町在物貰渡世の者下河原教悦より提札受取るべし、年1度改め心得掟書読聞かす(市雑坤 2)。熊本町86丁名、八代町46丁名幕府へ書上げ(市雑坤 3)。付火のもの取押に褒美のこと(藩法 737)。奉行島田嘉津次に大奉行助勤を命ず(本・度譜)。継目寸志差上げねば引継なりがたきところ、御才覚銭ならびに預潰方寸志は申立の趣次第で引継を許すこともあり(難稜)。
6. 2 輕輩・陪臣・中小姓涉張日傘使用許可(藩法 738)。是月 藤崎宮・祇園宮祭礼の節、菓子酒差止(藩法 738)。江戸戸越御屋敷と浜町御屋敷相対替達

- (本・度譜・藩法 738)。江戸竜口類焼につき川尻町に寸志銭賦課 (川尻史 379)。
7. 17 阿蘇山噴火 (肥)。19 細川斉玆3女温姫誕生 (本・度譜)。27 大奉行松下久兵衛江戸より下着 (本・肥)。是月 仙台通宝通用停止につき、より分け事務指示 (藩法 738)。・市雑坤4)。
8. 28 町家より家中屋敷借受の者商売禁止 (藩法 739)。是月 阿蘇山不穩 (寺例続)。町人寸志にて衣服制外なり難きこと (難稜)。寅卯の間に箒星あらわる (肥)。川尻にて三つ子誕生、例によりて銀5枚下されるべきところ、すぐ1人死亡ゆえ下されず (市雑坤82)。船頭共、過分の衣服手道具等用うべからず (市雑坤5)。
9. 25 家中寺社在中に自分仕立の櫛の相対売を禁ず (肥)。是月 久木野手永御山内で椀類拵方許し置くと、元木無く止めたき由願の通りみとむ (年合)。
10. 一 竜口へ幕番所再取立願 (本)。公迎勸向・御用筋入念のこと (市雑坤83)。この頃上益城郡代を1名減じ御山支配役も兼帯となる (林制 321)。
11. 24 細川長門守興徳室節卒す 42才 光輪院 (本・度譜)。28 細川重賢室有隣院13回忌 (本)。是月 梅堂新地寸志御賞美の規定、才覚銭と同様仰付られること (難稜)。芸州江戸留守居より銀西瓜の種子所望される。飽田託摩より差出し勘定方より仕向 (年合)。当春類焼につき困取取用を願う (本)。八代海中の築島、本藩領と決す (肥)。高田手永下豊原村に櫛方出会所設けられる (城南史 453)。漁師共は漁運上のみ課していたが船往来所持の者へは帆前運上ともに賦課す (市雑坤84)。
12. 25 行倒者、訴出の仕法 (藩法 740)。是月 医師倅親の業を相続の場合も変業願提出すべきこと (市雑坤6)。御家中新開所三年歛入なきは召上または他人開にする旨達 (藩法 740)。新規の富講願は暫く許否の決定をさし止める旨を達す (寺例続)。米倉窮民御救備空地開明願 (覚)。櫛方を郡方附属と定む (本)。桐苗仕立方を示す (肥)。
- 是年 飽田郡上松尾村梅洞新地築立、時習館学料新田とす (潮害) (「肥」には異史料も挙ぐ)。高田手永豊原村の内、櫛方出会所建方仰付られるに付、豊原村以下五ヶ村より夫方寸志、東本野村より古縄20束寸志、いずれも願の通り仰つけられること (年合)。井樋方を廃し、塘方の兼帯とす (城南史 446)。八代に蠟所出来 (宝暦改革時に高橋蠟所出来) (旧章)。損毛高 251,900石余 (肥)。著書目録 琴山琴録 諸家 村井琴山。

文化4 (1807) 丁卯 (案齊) 齊玆

1. 11 年頭しめ飾剪取は子供の致し方なれど禁ぜらる (藩法 740)。23 布田手永惣庄屋芥川喜佐衛門御役御免、一領一疋仰付られるに付、杉嶋村へ居住願許可 (覚)。是月 町中家屋敷譲渡の節、早速軒帳直し御印受べし (市雑坤7)。
2. 20 山鹿郡味取新町出火 (度譜・肥)。23 是日より本妙寺本堂地づきあり町々より俄踊奉納 (肥)。是月 野津手永不作打続き年貢諸出銀差支え余計の借物有り、右銀主共え寸志の申談いたし、賞美に付てのこと (難稜)。砥用手永山寺原村馬入藪4町3反余、竹生育悪く仕立替を許していたが、櫛木仕立とす (年合)。求磨川筋萩原塘御備のため麦嶋村沖新開願一件 (覚)。渡辺左右衛門・浦仁右衛門、御備金差上間違につき差控 (度譜)。売買税十歩銀、天明8年以来減じ5歩銀としたが遅滞なく納むべし、家屋敷訴訟は軒帳前を以て処理す

- (市雑坤 7)。油粕輸出禁止、宝暦 6 年天明 5 年の再触 (市雑坤 8)。寸志銭差上置いまだ賞美もなきうち零落大病の者へ鳥目下さる (市雑坤 10)。
3. 27 平川村百姓、昨 12 月 26 日類焼に付、家作のため松井氏建山の材木を下付 (林制 323-5)。28 大奉行助勤島田嘉津次熊本発上府、9 月 20 日帰着 (度譜)。29 藩主妹就姫江戸発、4 月 14 日久我家へ入興、4 月 22 日婚姻 (本・度譜)。是月 勘定方受の櫛方を蟬蛸所と共に郡方受込とす (肥)。内膳殿先年久住手永中江村の内野方 10 町余召上られたので、代地として八代手永宮地村の内山畝 6 町開明し、櫛木植付成実を御買上に差出したき由、願の通り仰せつけられること (年合)。荒地報告書年々 6 月中調べ達すべきよう上地内検より達 (覚)。文銭を地鉄に鋳崩を禁ず (市雑坤 9)。飽田・託摩御山簔に在中より薪取悪敷につき達 (藩法 740)。
4. 一 梅堂新地寸志賞美の規矩、類焼寸志同様に仰付られること (難稜)。諸郡え桐仕立方仰付おかれるにつき員数改の書付相達すべきよう、且又桐苗仕立に付、宇土より桐枝引渡方差支有無問合のこと (年合)。廻役より質屋に盗物吟味の節、遅滞なく取計うよう達 (市雑坤 11)。間屋職新規差止、また宇土皿山焼物を郡方受込とす (肥)。
5. 24 日田代官并に西国郡代、羽倉権九郎熊本止宿 (本・度譜)。是月 芦北郡所々御番所え附置かれた立山剪方について、是迄は彼方限の取計になっていたが御山にも接する所柄に付、今後は何方番所附立山畝数何程・本数何本剪方の旨前以て芦北郡代え届出のように達の事 (年合)。湯浦手永大野村懸鉄山え同手永杉園村用四郎と申者を山番に派遣、空地・野地木場作許されるに付家床ならびに木場作畝数等報告を命ず (年合)。
6. 19 家中寺社支配浪人ねだりがましき儀取締の仕法 (藩法 741)。是月 熊本町に相撲会所 2 ケ所建 (市雑坤 13)。植木町類焼につき富を許す。西基左衛門・箕田八左衛門半分宛興行を許す (寺例続)。
7. 12 坂下手永惣庄屋河野十郎兵衛吟味中に付、片付くまで小森田吉郎助に代官職も兼勤仰付られること (覚)。28 家老郡夷則熊本発、8 月 25 日大坂発、同 28 日京都着。9 月 17 日熊本帰着 (度譜・肥)。是月 田浦手永二見村白嶋坂焼物御用白石、脇方より堀取申さぬ様村方より心を付、見締いたす様に達のこと (年合)。牛馬売買仕法 (市雑坤 14)。新 3 丁目町会所新設、壁書六ヶ条 (市雑坤 15・旧章)。
8. 5 細川斉茲 3 女温姫死去 2 才 真観院 (本・度譜)。是月 大坂借物五ヶ年返済延期 (本)。歩入願寸志継目に立下される儀は叶い難きこと (難稜)。
9. 11 府中の女奉公人口入所を新坪井職人町竹屋平四郎に命ず (藩法 741・肥)。象牙の櫛等前々通り売買禁止 (市雑坤 17)。
10. 一 田迎手永固秘蔵建直し、入目寸志は才覚銭寸志同様の賞美仰せ付けられること (難稜)。菜種子大坂積登せ、地船・旅船の差別なく送手形渡すべし (市雑坤 18)。
11. 一 1 人役の別当は惣月行事勤方免除 (市雑坤 20)。藩主、宇土支藩一門実弟細川哲之丞と義絶 (本)。
12. 一 武具類質取受入の節心得、享保 12 年・宝暦 5 年・安永 9 年にもあり (市雑坤 21)。寸志の者公借多く、家屋敷扶持方別当格ともに差止の例 (市雑坤 22)。

産業精勤・忠臣孝子御賞美は従来町方でも審査したが今後はすべて選挙方で行う(市雑坤23)。馬口勞弥兵次、御用馬建替の節立会を命ず(市雑坤24)。寸志知行取より江戸留守居以下旧古新緑共婚姻・養子縁組ともに苦しからず(本)。水俣手永岡叔蔵修繕(難稜)。菊池郡上飲物出来に付寸志の事(難稜)。帶刀殿より、八代本町魚屋伝十郎と申者に樟脳製法を申付たいとの由に付、楠株渡し(年合)。内膳殿知行所坂下手永立願寺八ノ窪山10町余に櫨木仕立願、村方故障もないので願の通仰付られること(年合)。小代山寛政5年より留山とされて以来15年になるので猶また15年留山に仰つけられるよう惣庄屋・山支配役より上申、まず10年の間は迄の通り留山とす(年党・年合)。諸郡質屋・造酒屋運上、八代不作につき鹿子木幸平より達(党)。

是年 芸州様御所望銀西瓜の種子一件(年党)。湯浦手永村々甘蔗仕立に付、前銭小物成方銀から拝借仰付られ30ヶ年賦返済(年党)。植木町え御免の富講、当年分の富銭植木町え渡されるよう願のこと(年党)。久住野津原鶴崎死牛馬は竹田・府内の穢多共より取扱って来たが、今後は本庄手永春竹村穢多共より取納るように(年党)。国産の白塩焔、他邦えの売出しについて郡代より聞合の儀達のこと(年党)。佐敷町重次郎樟脳製法願出の事(年党)。五町手永船津村多人数の所柄にて居屋敷狭いので海手に少々宛染添分を新屋敷に致し、年貢は反4斗5升宛の定米飲物にて同手永鰥寡孤独の御救備に差加おくこと、また、築添残分は出来の上なおまた同様に願出ることを認む(年党)。神戸倭屋久左衛門所有船福德丸、小物成方え指出、御銀拝借いたし御用船に仰付られるようにとの願について船見分のこと(年党)。藩主滞府、大目付住江甚右衛門・奉行白石清兵衛江戸詰越(本)。是年の物成 294,926石余(官制制度考)。江戸浜町矢の倉屋敷作事(本)。八代郡麦島村萩原塘普譜料として手永開19丁4反築立(肥)。玉名郡横島村の中に新地3ヶ所築造(肥)。川尻西教寺住職、藩命に服さず入牢申付(川尻史 477)。役人廻在にて荒地開明、文化8年までに田畑 183町7反余(藩法 363)。損毛高 220,300石余(肥)。著書目録 淹のやどり 歌文 脇愚山。わらべ歌 教訓 脇愚山。菰海漁談 雑 脇愚山。

文化 5 (1808) 戊辰(家斉) 齊茲

1. 20 勘定方奉行事務扱 萱野尚太郎下関で難船溺死(肥・度譜)。「本」は3月、「先哲」は1月21日とす。**是月** 町家の者他所旅行の節、往来手形申請の請合証文に目的地他みだりに脇寄せぬ旨記すこと、また不正唐物を持出さぬこと、他所で商売などせぬ旨記すこと等いよいよ以て厳守を命ず(市雑坤25)。久住へ御割砒前・勝藁・鶏尾代の儀につき郡代より達(党)。野津内田下村沖新開古塘床開明け窮民御救備願(党)。
2. 5 櫨成実届出の仕法(藩法 742)。**是月** 能両座年行事、士席浪人格も名代をもって年番勤むべし(市雑坤26)。尼関所越の旅行禁止(市雑坤27)。往来札無しで他所旅行の者や抜参宮の者は過料とす、本人銀1枚・丁頭1貫匁・組頭 500文・5人組 300文(市雑坤 102)。塩焔蔵のこと 徳王村2つ、古阿弥陀村2つ(万見合)。富興行場所藤崎(17富)本妙寺(7富)瑞巖寺(7富)代継(7富)宇土(7富)(万見合)。歩入預寸志賞せらる規矩究の事(難稜)。種山北村沖古塘床開明願(党)。松山笹原村懸新開願(党)。
3. 3 長岡左馬助熊本発、江戸滞在中に監物と改める(本)。7 奉行堀内坤次

熊本発上府(本)。 19 藤崎富々元財津惣三郎願に依り 100文富に仰付(御達)。 是月 順正寺地突 4月法念寺地突(度譜)。 跡部喜善、道家平蔵を討果し自害(本)。 永広九助刃傷(度譜)。 旅人金銀両替のため町人兩名宅へ小物成方より金子渡置き、八代町は櫛方出会所へ備置く(市雑坤28)。 切米扶持取賞美、同病死跡救米について(市雑坤29)。 来年朝鮮信使対州来聘について高役金納方仕方(藩法 742)。 本庄小山村、以前寄せ村になり庄屋1人仰付置れたが不便ゆゑ兩人申付ること(覚)。

4. 6 内田手永惣庄屋小森田吉郎助、坂下兼帯免除のこと(覚)。 11 志方半兵衛組の者手討(本・度譜)。 13 藩主斉茲、竜口邸へ移徙(度譜・肥)。 細川斉茲江戸発、6月7日熊本着(度譜)。 是月 寸志不足に勤勞取束賞られる儀は叶い難き究のこと(難稜)。 河原新田作願(覚)。 富元財津惣三郎倅財津九十郎に富元指添を命ず(寺例統)。 簡薬製法御用水干硫黄を井芹安助に請負仰付置かれる(壁書)。 堂建立寄付相對によらず町内一統取立は禁止の旨、寛政2年6月令にあるが、近来みだれ、また俄など催し仰山な様子を禁止再触(市雑坤30)。 薩州様・相良様御通の節日雇の者不敬なきよう、売物高値にしないよう(市雑坤31)。

5. 3 大目付住江甚右衛門江戸発、6月9日熊本着(本)。 25 来巳年、朝鮮信使来聘高役金納方の仕方(藩法 742)。 27 長岡観水營之病死(本)。 29 朝鮮信使 国役金上納(本・度譜)。 是月 町在の者猥に魚獵禁止、業とする者は漁獵札渡置(市雑坤32)。 木倉荒地年季請開明の事(覚)。 松山海辺有吉主膳殿より新開願(覚)。 佐敷杉谷海辺開明け窮民備の願(覚)。 大水杉水村等、養水難渋に付大勢集り八代表へおしかく(覚)。 松橋焼物仕立方に付、上菓等の御用のため田浦砥石鼻山内を石取場に仰付られること(年合)。

6. 21 大奉行松下久兵衛辞任(本)。 是月 木倉荒地開明願(覚)。 高田竹中村等より空地開明願(覚)。 野津荒地開明願(八代)(覚)。 正院水車跡床開明願(覚)。 藩主、実弟細川哲之丞と和す(本・肥)。 川尻町薩摩屋源兵衛、薩州表では先祖以来苗字を名乗ってきたので、往来手形に苗字許可、彼方への手紙にも苗字許可(市雑坤87)。 町中作事の板園道路に張出さぬよう(市雑坤33)。

- 閏6. 9 熊本府中、落雷11ヶ所(本・肥)。 21 奉行島田嘉津次を大奉行に任ず(度譜・肥)。 是月 他領の富札商売停止、天明5年同6年の再触(市雑坤34)。 渡辺喜右衛門を奉行副役に任ず(本)。 日田代官羽倉権九郎、病気に付き小姓組の内を以て見舞の使者派遣(本)。

7. 21 郡中自分仕立の櫛、相對売・他出禁止の達(藩法 742・市雑坤35)。 櫛実、櫛方水前寺蛸が所が買上の達(藩法 742)。 23 杉島・廻江両手永に疫病流行につき、祇園宮にて祈祷、御札渡下されること(覚)。 是月 大坂積登の米穀、倭損せぬよう町馬口牽共へ指令(市雑坤36)。 久住町に米蔵建つ(肥)。 沼山津希路無田荒地開明願(覚)。 新2丁目へ割渡の随兵棧敷地代、8月10日まで掃除方へ上納のこと(市雑坤37)。

7. 7 家老堀丹右衛門隠居、子息次郎大夫勝貞家督相続、松野外記跡の中老に任ず。 中老松野外記を家老に任ず。 小姓頭下津久馬を奉行に任ず(度譜・肥)。

8. — 井芹川陣の橋より安国寺下まで、祭礼の節にかぎらず平日も殺生禁断に定む(本・肥)。 荒木角助、御赦免開大津会所へ買方達(覚)。 久木野諸村御山

畝空地等の内を開明御出方願(覚)。造酒屋・揚酒屋高利を貪らぬよう、また、在中より熊本へ出て新たに酒荷渡禁ず(市雑坤38)。長崎へ急使者の際、案内の者を熊本町人より指定(市雑坤39)。町在の者、京・大坂その他他所に借金あり公訴されればたとえ返金してもそのままではすまぬ(市雑坤41)。延寿寺門前空地は白川塘筋普請の節わざわざ人馬会所や町家等を立のかせたもので新築家居禁ず(市雑坤42)。露艦船長崎へ入港につき川尻町に水夫銭10貫目賦課される(川尻史 228)。

9. 2 奉行副役渡辺善右衛門手当方(軍備)を主として担当(分職帳)。是月細川齊茲直書をもって家中心得を諭示す(肥)。家中手廻日雇の者、雇方とりしまりの達(藩法 743)。河原四町分村空地開明願(覚)。鶴崎救立として綿・雑穀・富を願出(寺例続)。中村新開作、初穂上納に付達(覚)。馬方共往還筋で無礼のないよう、道筋諸作馬に食い荒させないように(市雑坤88)。
10. 21 齊藤芝山(犬追物)年66(先哲)。是月豊作につき御祝あり(肥)。寸志差上の者で其身は内望なく、甥を賞美のことあり(難稜)。大津上津久礼村開明残分尚延願(覚)。平石計石御用塩廻り塘の外潮溜の内塩浜仕立の願(覚)。江戸借物畳置一件につき中山源助、内田恒助派遣(度譜)。薩州樺山列切腹(本・度譜)。伊達江戸御留守居より佐賀関の白黒石を所望される(年合)。旅行の節京・大坂送証文裏書をとって帰るよう(市雑坤44)。
11. 3 熊本地震(本)。10 野津原新町より出火(肥)。19 荒尾手永金山村栴山村掛り山中で村上甚大夫石炭堀方指免せられること(覚)。是月異国船渡来等警備お手当の際町夫出方割当(市雑坤40)。安行馬建増す際は吟味の上馬札支給(市雑坤46)。子供教育について心得(市雑坤47)。米穀羽書商売は空籾商売ゆへ禁止(市雑坤48)。五町楠原町零落につき郡代取計の趣達(覚)。米1俵32匁、下相場28〜29匁(肥)。熊本内出火の節小姓頭銘々願により園居持を御免(本)。細川治年室瑤台院7回忌(本)。奉行白石清兵衛中着坐同列となり100石加増(本)。阿蘇社参(度譜)。
12. 6 阿蘇郡内牧出火、全町残らず焼失(度譜・肥)。11 長崎番船として2艘川尻出帆、24日長崎入港(度譜・肥)。21 犬追物師範齊藤種之助歿す、66才(肥)。是月諸士以上心得達の処行ありて表向発覚せざるうち親族中にて処分したる場合の跡目相続につき、規定を定む(本)。御儉約年延仰付られ拝領米等の事(触)。家中長屋借の者へ子供の教育に不法がないようにとの注意の達(藩法 744)。内牧会所類焼に付、御免帳達の儀につき願(覚)。正院手永植木町焼失に付、跡家取立造用48貫150目拝借仰付られ寸志を以て返納仰付置かれるところ、寸志取計出来兼につき、富落銭5貫目を上納したい由願の通り仰付らる。尤も、本方分は無利、町方小物成方櫨方分は通し1割を加えて右5貫目割合当暮より上納仰付けらる(年合)。明年度より更に3ケ年の儉約を命ず(肥)。子弟教育筋について沙汰あり(肥)。2匁5分以下の銭預はじまる(旧章)。奉行所及び用番名元の仕出の文格相改(本)。
- 是年 中山源助を大坂留守居勘定頭勤稜当分に任ず(度譜)。郡代との用談は詰間に罷通り、双方通議するよう勘定所目付へ書付相渡(度譜)。松村英記を勘定所目付に任ず(度譜)。御隠居御家督内密しらべ、松村英記・矢野吉蔵・湯川彦之允・内田恒助に受込(度譜)。松田源太郎を吟味役当分に任じ、勘定

文化6 (1809)

所小物成引除を命ず(度譜)。玉名郡横島村にて二番開新地16町2反8畝築立(肥)。五町村の荒地開明たき願達(覚)。久住・野津原・鶴崎死馬牛取納方の儀、去12月春竹村穢多共より願出の儀(年覚)。植木町に免許の富講一ケ年一富宛のこと(年覚)。國中死馬牛革1枚につき70文宛運上仰付られ、穢多の内兩人革間屋仰付られ右一切受込託摩御家人桧武助え仰付られること(年覚)。松橋焼物上薬御用石場引渡方の儀につき芦北郡代達のこと(年貢)。奥州会津漆仕立方の儀につき合志山支配役より達あり、まず試のため仕立方を仰付られること(年覚)。高持百姓の内高地は女房共へ仕置、其身は密々他所へ日雇稼に出ることを厳禁す(熊本史学5)。今度宇土知行所分御免方等引受仰付られる(年覚)。この年支出38万石(肥後藩の政治)。損毛 155,300石余(例年の調べ方なれば 207,400石位なれど藩主の意向でこの通り届出)(肥)。

著書目録 水練火術全書 諸家 片岡伝左衛門恒恭。学校私説 法制 脇愚山。

文化6 (1809) 己巳(家斉) 齊茲

1. 11 宮本伝右衛門手当方担当(分職帳)。 15 家老郡夷則勝手方の儀につき格別功勞につき足高 800石地面本地 3,000石。大奉行島田嘉津次同断につき 650石地面本地 1,000石(本・度譜) 27 領主外出行列の節の仕法(藩法 744)。去寅年より三ケ年各別儉約の仕法(藩法 744)。 28 知行取拝領屋敷替につき達(藩法 745)。 是月 小山門喜を奉行副役に任ず(本)。英彦山拝借滞に付同山知行物成より南関高瀬御蔵入のこと(覚)。知行取拝領屋敷、以来当所より 100坪以上に越た坪数はすべて割方仰付られ、今までの屋敷 100坪以上の過坪はこの節際目を入御用次第召上られるはずの段達の事(触)。
2. 1 長岡職五郎3丁目屋敷へ移徒(本・度譜)。京町三懸り組合にて惣月行事輪番受持べし(市雑坤49)。 11 世子斉樹室袖留(本)。 15 斉樹子於恭出生、同28日早世(本・度譜)。 是月 蔵納・給知高しらべ書付、午年分勘定所へ達(覚)。
3. 6 留守居城代長岡内膳へ仰付られる(藩法 745)。 11 御府中萱屋根葺雇について達(藩法 746)。 18 細川齊茲五子猪八郎誕生(本・度譜)。 26 関手永東木佐上村次郎兵衛等3人自勘にて銀試堀願の通許可のこと(覚)。 29 細川綱利母清高院 100回忌(本)。 是月 国産酒灰利用すべきこと五ヶ所町造酒屋へ達(市雑坤51)。町人半弓射身分不相応ゆへ禁止(市雑坤52)。町人へ非常備の囲米仰付られる節、寸志差上の士席浪人格以下九曜御紋附下置れる様町方より内意あるも不許可(難稜)。沼山津手永零落の者へ馬代遣し、寸志預潰の寸志同様に賞美仰つけられるはずのこと(難稜)。長岡帶刀家来佐藤満津平父の仇を討つ(本)。薄場河原ではじめて備頭沼田勘解由、蔵内蔵允組調練あり(肥)。富札のにせ札等は厳科に処すべき旨達す(寺例続)。
4. 一 御手当御用薪10万斤坂下手永晒・小代両山より剪出、荒尾会所内に囲方仰付られ御用薪と建札いたし見付御家人等宍置かれること(年合)。雇飛脚継立請負人指定(市雑坤53)。本坪井町非常備米蔵出入の仲仕共札渡(市雑坤54)。
5. 5 端午御祝(藩法 745)。猪八郎の兜貴賤の差別なく拝見(本)。 11 大奉行島田嘉津次退任、下津久馬大奉行助勤(度譜)。鹿子木幸平野津手永内田村下村沖に新田築立に付て厚く心配いたすに付、田畑2町5反に5升宛の上納米を以て永代受持仰付られ、内田村庄屋平次儀も同5反右同断のこと(覚)。 15

藩主熊本発、6月18日江戸着(本・肥)。是月 他所家中の飛脚、飛脚宿の指定はあれど、城下いずれの間屋にも止宿許可(市雑坤56)。八代佐敷詰の面々引越の儀につき以来の儀達(本)。桐元木の儀是まで5寸角廻1本に付1匁2分5厘宛の宛の処、今後は4匁1分宛渡下さる(年合)。内牧御茶屋等焼失に付て跡取立入目銭寸志、御才覚寸志同様の賞美仰付られるはずのこと(難稜)。川尻にて海運調練(本)。

6. 一江戸へ旅行の寺社町人旅行日限延期を願い出た際は直ちに許可し、その旨国許に通告のこと(寺例続)。平野九郎右衛門を大目付に任じ家老代を命ず(本)。
7. 11 榎方銭預幅広で取扱不弁利につき小幅に改めるにつき達(藩法 745)。19 猪八郎来る22 御発途(藩法 746)。是月 町家より家中へ奉公の者請状に丁頭裏書のこと(市雑坤58)。小物成方榎方大形銀預差止め、小形預振出し引替所熊本・宇土・八代三ヶ所(本・肥)。出京町構口御土居築立に付、五町池田御郡地の内地子米極にて町役人へ引渡に成ること(覚)。独札より魯西亜御手当米代銭1貫500目余寸志差上歩使番列仰付らるべきやと郡代より伺に付、其通仰付らるべき段達のこと(難稜)。近年岡領銀札御領内に入りこみにつき、防止策として阿蘇南郷表へ銀所小預振出仰付られること(覚)。
8. 7 長岡監物江戸発、9月18日熊本着(本・肥)。9 奉行堀内坤次江戸において病死47才(本・先哲)。10 泰勝院(忠興)200回法会について(藩法 746)。20 泰勝院200回忌(度譜・肥)。是月 町家屋敷売買税5歩銀の出納、町方根取横目印形で帳面作成のこと(市雑坤57)。御蔵弘以前に新米買取禁止(市雑坤59)。塩焔抜方御用鹿本矢部手永より相払うよう達(覚)。
9. 一行司、頭取、助役いずれも相撲芝居興行中帯刀御免(市雑坤61)。他所より入職の者ありふれた職業なら認めず(市雑坤99)。刑罰仰付られた者の渡世の仕付教諭(市雑坤103)。町在より寸志差上げた者追て其身および俸・二男・三男・甥等まで申立に因て賞美仰付られて来たが、以来は其身と惣領の外賞美は決して仰付られぬはずの段、町方および郡代に達のこと(難稜)。松山手永早損にて年貢米不足に付、寸志差上た者へも賞美仰付られぬこと(難稜)。
10. 14 靈感院(重賢)25回忌について(藩法 746)。26 靈感院25回忌(本)。是月 町人賞美についての6月達各懸よの上申書式(市雑坤62)。御手当御用として鑓50本野津会所へ備置たき由で右栖本山内より願の通り渡し下されること(年合)。郡代根役当分2人とす(藩法 366)。
11. 21 蔵米取・擬作取・扶持方門松建方願12月5日限の達(藩法 747)。25 加嶋作兵衛手代喜兵衛まかり下り翌正月帰坂(度譜)。是月 下津久馬を大奉行に任ず(先哲)。小田・荒尾・坂下三手永海辺農民のため晒浦へ御米山床出来(肥)。
12. 14 長岡左仲興貞隠居、信次郎相続(本)。28 損毛高167,600石余と届出でる(肥)。是月 小田手永道西山1反開明け右徳米悉皆鯉寡狐独御備仰付られるよう願出あるも、御山藪など開明で徳米は当春改め、三ヶ二手永備仰せつけられ三ヶ一は郡方各別納仰付られること(年合・年覚)。阿蘇山衆徒行者清正公200年遠忌自勘で執行、追て参拝の旨願出を許される(寺例続)。見世物芝居興行の節相撲方へ運上銭差出すよう(市雑坤64)。職人共家中誂物入質禁ず、質屋紛はしき物質取禁止(市雑坤65)。御一門衆より紋付の品下賜されても制

文化7 (1810)

禁の品は着用禁止 (市雑坤68)。奉行町孫平太、座席佐敷番頭上座となる (本)。
是年 足高総計15,330石 (度彙内編二)。 著書目録 松石文稿 詩文 渋江松石。
諸国遊覧記 地誌 鹿子木謙之助。統算学小筭 算書 牛島盛庸。

文化7 (1810) 庚午 (家斉) 斉姦・斉樹

1. 1 佐渡国大地震 (本)。 22 新田支藩主右近利国卒す。3月14日式部利愛相続す (本・読史備考・藩法 747)。 是月 奉行副役渡辺善右衛門を本役に任ず (先哲)。 水俣手永陣内村吉兵衛に御山内の立木10本代銭上納にて渡下す (年合)。
2. 9 本妙寺本堂再興成就につき、本日より11日まで入仏供養、同19日より清正公 200年忌法要、同29日相済む (清正の 200年忌を「本」は6月に置く、「寺例続」も) (肥)。 12 細川右近死去についての諸心得 (藩法 747)。 15 世子細川斉樹長女泰姫白金屋敷にて誕生、同月28日卒去、華溪院 (本・藩法 747)。 19 熊本御蔵7間に21間建添あり、是日引渡 (肥・本)。 28 5匁、2匁5分預改め古預は焼捨、鶴崎御銀所預、久住小物成方歩入会所預振出 (藩法 747)。 是月 御銀所 500目 (5匁カ)、2匁5分預書替あり、3月2日より乾櫓にて取替え、11月25日迄に相済む (肥)。 菊池郡上畝物出来について寸志預漬同様賞せらるること叶いがたし (難稜)。
3. 5 大雷雨にて白川石塘切れる (度譜・肥)。 7 強雨、諸川満水、白川1丈5尺、球磨川1丈8尺、佐敷川1丈7尺 (肥)。 11 泰姫死去につき3日隠便のこと (藩法 747)。 21 幼年の者火薬遊び取締り達 (藩法 748)。 是月 算学師役甲斐優隆春独礼に召直さる (城南史 480)。 旅人間屋共今後客引禁止 (市雑坤68)。 両座年行事受持中番公役御免 (市雑坤69)。 各郡代・町奉行宛証文、手形類様書に統一のところ、八代町奉行発行のみは従来の殿書きをみとむ (市雑坤97)。 浜町御殿御用の瓦、土山に焼方命ず (難稜)。 ロシア御手当米寸志、類焼寸志に准じ賞美の筈のこと (難稜)。
4. 7 細川式部、右近跡目相続 (藩法 748)。 9 上益城郡鯉手永井寺村葭原年中諸漁禁止 (藩法 748)。 12 御備組調練見物禁止心得 (藩法 748・市雑坤70)。 是月 久住町に歩入所出来 (度譜・肥)。 南関零落所救立につき借財捨方いたしたる者に賞美の筈のこと (難稜)。
5. 18 是日より20日迄強雨大水 (肥)。 20 江戸おらくの方死去 (藩法 749)。 30 親類病死の節忌服についての達 (藩法 748)。 是月 熊本人馬会所へ御紋付小丸挑灯貸与 (市雑坤71)。
6. 4 松井主水、堀次郎大夫熊本発上府 (度譜・肥)。 途中にて主水発病、室津より引返す途中、7月18日南関にて死亡 (本)。 16 家老有吉主膳病死に付此日より3日間隠便 (本・度譜・藩法 749)。 25 横手手永麻疾流行につき祇園社へ退除の祈祷を命ず (覚)。 28 中老小笠原大部熊本発上府 (本)。 是月 幕府、西日本にて福井作左衛門製の枡以外の使用を禁ず (肥・藩法 749)。 是月初旬より強雨大水 (本)。 寸志誘方について郡代へ指示 (市雑坤29)。 阿蘇南郷高森にて竹田札・岡札防ぎ方として産物御買上出願につき小物成方見込の趣をもって試みに買上げのこと (覚)。
7. 一 嶋田嘉津次を再び大奉行に任ず (度譜)。 寸志賞美につき達 (難稜)。
8. 13 鷹場内の井手川堀筋は8月より2月まで漁禁止の達 (藩法 749)。 16 幕

府、後藤庄三郎を仕置す(本)。是月 晒蠟製法に復す、八代御用場、3丁目御用場にて製造(旧章・本)。寸志しらべの月限にしらべかねるので郡代日延願いである(難稜)。八代郡敷河内村三官山内に仕立の肉桂、代錢上納にて堀方願出あるも却下す(年合)。

9. 4 徳川家治25回忌(本)。18 伊能忠敬一行此日天草大多尾村に上陸(肥)。23 故有吉主膳の知行と家老職を有吉七郎相続し将監と改む(藩法 749・本)。是月 郡目付を再設し郡代の兼帯とす(肥)。洪水出役御紋付挑灯、新古川町子字屋助蔵宅へ渡置(市雑坤72)。

10. 11 有隣院(重賢室)17回忌(藩法 750・本)。25 虎千代死去につき2日穩便のこと(藩法 750)。是月 幕府、諸大名に1万石につき1,000石の囲米を命ず(肥)。藩主隠居願、家督許可さる(藩法 750)。

11. 10 藩主斉茲隠居して左京大夫と称し、斉樹相続す。同13日斉茲浜町屋敷へ移る(実紀・肥・藩法 751)。15 藩主細川斉樹越中守と改め、登城相続を謝す(実紀・藩法 750)。是月 小笠原大部美濃と改む、堀次郎大夫、平太左衛門と改む(本・藩法 751)。町在枳改めについて達(藩法 750)。英彦山知行物成1石高瀬御蔵弘につき達(覚)。町在寸志願年賦上納の残高、上納に及ばざる旨達(難稜)。八代萩原塘修覆(年合)。

12. 9 伊能忠敬一行此日熊本に宿す(肥)。16 新田支藩主式部利愛、従五位下に叙し、采女正と改む(実紀)。29 藩主弟長岡猪八郎死去、2才、瑞巖院(本・度譜)。是月 熊野那智新宮大破につき、領内武家町在へ寄進するよう達(藩法 752)。100才の者の町並影踏御免(市雑坤73)。盗物につき廻役より質屋改めの際、等閑にすべからざる旨達す(市雑坤74)。歩入預寸志に差出したき者は召上らる筈(難稜)。北里手永嶽村付の御山に運上錢年々360目宛上納をもって木地入職を差免す(年合)。岡札防方について杉田茂平小物成銀拝借願すみ(覚)。公儀測量方役人通行についての達(年覚)。阿蘇大宮司へ坂梨手永において懸尾敷1ヶ所下賜(年覚)。玉名郡御山支配役瀬上林右衛門義明、150町歩100万本の植林を行う(熊本史学5)。冬頃より免方につき申談(藩法 364)。39ヶ寺に富講を許可す(寺例続)。

是 年 本藩人口を幕府へ届出ず、553,352人(肥・藩法 364)。平山村雲巖寺五百羅漢全備し、開眼供養を行う(肥)。この年の支出39万石(御勝手向しらべ、宝曆以来御勝手向)。一向寺宗意惑乱の儀あり、本願寺使僧肥後に下向す(本)。伊藤又右衛門、横田勘左衛門に勘定所に出席し諸書付巡覧を命ず(度譜)。大坂御用達永瀬七郎右衛門、長崎年番罷越すついでに熊本へ罷越(度譜)。回米大坂御預一件につき湯川彦之允を大坂に派遣す(度譜)。著書目録 上書 法制 佐藤敬助。

文化8 (1811) 辛未(家斉) 斉樹

1. 7 長岡左仲冲貞、刑部と改む(本)。25 中老小笠原美濃熊本下着(本)。是月 長崎留守居類役集会取締の儀達(本)。旅人案内は問屋より雇はともかく旅人と町人相對雇は禁ず(市雑坤75)。
2. 11 江戸大火(本)。15 藩主細川斉樹妹芳姫、松平出羽守斉恒と婚姻、同9年4月11日離別(本・度譜・藩法 752)。17 大津町零落につき、試みとして春秋日数15日宛の市立ならびに春市に見せ物追込差免す(覚)。25 家督につ

き花畑において書付読渡(度譜)。是月 幕府、代々藩主の事跡提出について沙汰(本)。勝手向しらべにつき内田恒助江戸へ出発(度譜)。

- 閏 2. 25 大目付松井直記家老代として熊本発、上府(本)。 29 長岡左門興礼、図書と改む(本)。是月 郡方貨殖を停止す。この頃小物成・樫方・杣方貨殖繁昌(度譜・肥)。長六橋左右塘上の松、町役人の世話行届木振よきゆえ、茶道方より花畑御庭へ植替建議あり、町方より反対、中止となる(市雑坤76)。真宗寺旅行の際の添翰は分司より郡代へ内達(寺例続)。
3. 4 中老小笠原美濃を家老に任ず(本・藩法 752)。
4. 9 大目付松井直記誠之を中老に任ず(肥・藩法 752)。 19 大目付平野九郎右衛門江戸発、5月27日下着(本)。 20 是日より上野火の番(本・度譜)。 21 家中地筒の扱いについて(藩法 753)。 30 是日より5月9日まで強雨大水(肥)。
5. 一 渡鹿村懸磔所、本庄・田迎反懸18貫目余出し方にて石畳出来(肥)。大奉行嶋田嘉津次郡方事務処理等の沿革に付書上求む(藩法 360)。1歩半米荒地起米根帳出来(藩法 364)。
6. 一 諸間新預振出し差止められ、1匁以下の小預も東目在の外は引上ぐることとす(肥)。
7. 8 竜口邸にて齊樹女篤姫誕生(本・度譜)。 25 儒臣大城文卿歿す、71才(先哲)。 30 前藩主齊竈女誕生、即日卒去、享貞院(本・度譜)。8月13日この件で3日間隠便達(藩法 753)。是月 惣御備組に毎年1度宛調練を行うべき旨を命ず(本)。中旬より西北の方へ箭星出ず(肥)。八代に郡筒50人仕立(肥)。堀平太左衛門江戸発、7月大坂着(度譜)。大坂町人米屋芳兵衛預米取組一件につき呼下していたが7月帰坂(度譜)。
8. 7 長岡職五郎茲詮(藩主弟)額直(本)。
9. 7 御備組調練見学者の心得についての達(藩法 753)。 10 境野嘉十郎意明歿す、63才(先哲)。 16 大詢院(治年)25回忌(本)。 27 家中扶持先渡の儀、旅渡しをのぞきその半分は3斗5升につき27匁5合の双場にて引替、暮にいたり調整するの達(藩法 753)。
10. 3 家中の面々公私の旅の出入馬に関する達(藩法 754)。 14 徳川家宣 100回忌(本)。是月 奉行奥田権之允、中小姓頭に転ず(本)。
11. 10 是法村にて久光牛蔵、清原寿吉郎・貴田小十郎へ手疵を負わす、清原の祿を放ち、久光は病乱につき手堅いたしおく(本)。是月 竹田騒動、臼杵表も同断(本・度譜)。買物方値段記録取締(度譜)。鶴崎町零落につき富講をゆるさず(寺例続)。
12. 15 幕府、明年より5ヶ年間儉約を命じ、期間中拝借願を承認せざる旨達(実紀)。 22 託摩郡春竹村出火(肥)。是月 田浦手永圀叔去年非常の洪水にて1軒流失1軒は崩損(年合)。米価下落、下相場1俵につき26~27匁(肥)。
- 是 年 郡夷則に脇差拝領(本・度譜)。家老間建継、おつて解除(度譜)。中山源助長崎詰、留守居兼帯(度譜)。文武芸試業復旧す(本)。宇土支藩にて飽田郡古閑村に鰥寡開築造(潮害)。内田恒助勘定方根取当分仰付られ、35万石目当のしらへ且当前御立行しらへ引除仰付らる(万見合)。測量方絵図中嶋平右衛門宅にて出来につき近火の節馳付夫は差出におよばざる旨達(年覚)。 芦

北郡田浦手永大崎村瓦焼願の通り沙汰（年覚）。 錢塘走瀨村懸緑川筋樟植継等の達（年覚）。 種山手永興善寺村懸岡谷川岡中村岡小嶋村拵村懸御山、7合目より上は諸木はらえ下は馬草かしき場に、長尾大谷平山御山は二ヶ年木場作三ヶ年目より諸木植付の達（年覚）。 松井帯刀、樟脳製法用に楠株渡し下さる（年覚）。 長崎町人大橋駒次郎当国にて線香製法願出づ（年覚）。 本年損毛高153,700石余（肥）。 この年足高17,650石（度・葉内編二）。 著書目録 官職制度考 法制 垣塚文平。 尺準考 法制 松崎謙堂。

文化9 (1812) 壬申（家斉）齊樹

1. 11 去11月よりの竹田領一揆が豊後熊本藩領へ波及せざるよう達（藩法 754）。
是月 竹田白杵東目一統騒動（本・度譜）。 芳姫、延と改名（本・度譜）。
2. 3 長岡職五郎（藩主弟）熊本発、3月19日江戸白金屋敷着（度譜・肥）。 9 家老松野外記、奉行白石清兵衛熊本発上府（本）。
3. 20 跡部平蔵弟喜善、道家平蔵を打果し切腹（肥）。 27 幕府、新田支藩主采女正利愛の一族邦衛利用を養子とするを許可す（実紀）。
5. 1 藩主細川齊樹江戸発、6月3日熊本着（肥・本・藩法 755）。 奉行副役宮本傳右衛門を本役に任じ、服部武右衛門を副役に任ず（本）。 13 芳姫離婚のことについての達（藩法 755）。 22 藩主初入国について注意の達（藩法 755）。
是月 百姓の公事、出入に給人は一切構わざるよう達（藩法 756）。 勘定所諸帳面出来（度譜）。
6. 5 藩主登城、奉行所御入（度譜）。 14 城中礼式について達（藩法 756）。
25 省略中式日札の方式について達（藩法 756・触）。 27 奉行渡辺善右衛門退任（本）。
7. 1 備頭沢村宇右衛門友輔を中老に任じ、勝手方上聞を命ず、これにより郡夷則の勝手方上聞を免ず（度譜・藩法 756）。 7 下益城・宇土郡代不破敬次郎・横井太平、管内惣庄屋に真宗西派宗意惑乱の儀につき達（城南 488）。 25 大津手永村々疫疾流行につき祇園社へ祈祷を命ず（覚）。 26 大河原次郎九郎を渡辺跡の奉行に任ず（本）。 28 藩主齊樹帰国を謝し使してものを奉る（実紀）。
是月 小物成方へ郡方格別米銀方を設け、郡方米錢の一切を取扱わす（肥）。
8. 7 享和3年より受免年限中御赦面開反懸米上納のところ差免ず（藩法 756）。
9 下益城郡杉島磯より下新堀川小岩瀬渡までの内を半分建川となすとの達（藩法 757）。 29 芦北郡日奈久町 215軒焼く（肥）。
是月 優良納税者又は農業精勤の村々賞美のこと、近年は郡方にて調査しているのを以来は従来のごとく選挙方にて行う（難稜）。
9. 4 長岡休隠歿す（本・藩法 757）。 12 島田嘉津次「旧章略記」提上（旧章）。
15 藩主行列に際して家臣の心得触（藩法 757）。 19 講堂にての講釈に家老も出席させる（藩法 757）。 21 500石以上の給人地筒抱方に関する達（藩法 757）。
是月 民力強めの寸志の基準を定む（難稜・城南史 497）。
10. 1 銀所錢預の偽物引かえ中止の達（藩法 757）。 21 藩主入国祝についての達（藩法 758）。 25 知行取・切米取・中小姓寸志知行等の屋敷に関する達（藩法 758）。
是月 来る4日晚玄猪御祝につき物頭列以上出仕のこと（触）。 阿蘇御神酒屋の出店場所替願を許さず（寺例統）。 当年以後も是まで通りきび

しく儉約につき、御礼等のことについて達 (触)。

11. 4 江戸大地震 (本・度譜)。是月 真宗西派宗意惑乱の儀にて本願寺使僧下国教化 (肥)。請免以後百姓出精し本年豊作につき祝として酒肴下さる。惣百姓人数 464,532人 (肥)。

閏11. 3 仙洞崩御 (本)。

12. 7 長岡職五郎元服 (本)。21 上半下を奉行副役に任ず (本)。27 家中の面々の年礼その他交際に関する心得 (藩法 758)。28 家中の者の拝賀の心得 (藩法 759)。是月 藩主斉樹家督につき家中御書出渡、条目改め (度譜・本)。町孫平太の座席を上着座同列とす (本)。火事取締の物頭に衣服制度取締兼帯を命ず (肥)。寸志にて苗字迄御免 御郡代直触はその身 1 代限りとす (難稜)。正院手永穢多共立払願のこと (合)。

是 年 在中火の用心について達 (年覚)。芦北会所の現銭引替は差止む (年覚)。内牧町焼失について拝領銭一件 (年覚)。諸郡海船川舟替合又は売買等について達 (年覚)。野津手永凶作につき榎方・小物成方よりの拝借銀の返納年限延をみとむ (年覚)。種山手永北村沖古塘の榎木下作分当年より反に 5 升宛上納 (年覚)。惣庄屋年数相勤め退役の者に心附銭を渡す (覚)。寸志在御家人等へは以来拝借叶いがたし (覚)。油類御買上につき新大工町清九郎願書、各別米銀方より添達のこと (覚)。同代屋英次へ矢部米および川尻古太米御払 (覚)。大津蔵納の内御払当時一統差止め (覚)。竹宮銅練の節の水汲夫に飯米支給 (年覚)。竹田・臼杵にて百姓騒動、坂梨・久住・野津原・鶴崎へ人馬派遣 (年覚)。切米方物書井上七郎助、惣銀方物書緒方瀬助の不正発覚す (度譜)。川尻町奉行伊藤又右衛門の当職を免ず (度譜)。(先祖附によると 3 月とあり、後任は同 6 月上半月下)。安永旧復しらべ (度譜)。目付に勘定所への出席を命ず (度譜)。この年足高総計 20,380 石 (度集内編二)。この年支出 40 万石 (御勝手向しらべ、宝暦以来御勝手向)。著書目録 諦観院様初御入国之節中山市之助より指出候書付 法制 中山昌礼。鳳僊 雑書 脇愚山。田賦考 法制 宇野騏八郎。勸農富民録 法制 鹿子木量平。学校興隆の議 法制 村松英記。仁助話 法制 瀧松軒主人。壬申封事 法制 脇愚山。党民流説 記録 脇愚山。遼先録 教訓 辛島塩井。

文化10 (1813) 癸酉 (家斉) 斉樹

1. 4 日光山門焼失 (本)。15 5 月 27 日参勤発駕の触 (藩法 759)。28 家老郡夷則隠居、九郎大郎家督 (本・度譜)(藩法 759は 29 日とす)。芳姫、延姫と改名の触 (藩法 759)。
2. 1 藩主斉樹妹融姫、浜町にて誕生、7 月 18 日死去、涼機院 (本・度譜)。6 勘定所用達を免ず、これにより享和 3 年より 7 人扶持給せし扶持方上る (度譜)。13 参勤発駕に際し郡代以上および江戸お供の中小姓以上への達 (藩法 759)。25 他国への金銀流失防止のため、当年より 7 ケ年間別紙品目のほか他国産物入国禁止の達 (藩法 759・度譜・肥・本)。27 藩主斉樹熊本発、4 月 6 日江戸着 (度譜・本)。是月 中山市之進昌礼、時習館塾長となる (城南史 477)。藩主犬追物を観る (肥)。天草島を長崎代官高木作右衛門兼帯支配とす (肥)。
3. 3 羽織着用に關する心得 (藩法 760・本)。15 中老沢村宇右衛門熊本発上府 (本)。18 川尻町奉行町民に節儉を令す (川尻史 140)。是月 川尻町 5

人組の仕法を定む(川尻史 130)。川尻河野家参勤につき召仕わる(川尻史 179)。賀来衛門七、森幸吉を打果す(本)。検校の盲人支配に関する触(藩法 761)。

4. 23 是日より上野火の番(度譜)。

5. 10 諸郡鍛冶運上此節より小物成方の扱いとなる(覚)。18 出火火消および盗賊防止のための達(藩法 760)。是月 杣方を作事所付属とするように作事頭建議あり、しかし従来通りとする(年合)。旱魃、雨乞あり(肥)。

6. 2 細川友松死去(藩法 761)。是月 近年切米取員数増加につき、以後側・外様の両組に分ち、召出と決る(度譜・本・肥)。オランダ船より英仏蘭戦争について風説あり(本)。オランダ、小象を献ずるも幕府本国へ差戻(本)。鯨手永土山瓦師四郎兵衛、丹後以来の訳をもって土山浦田にて土場五畝願出づ、許可せず(年合)。

7. 25 家老松野外記江戸にて病死(度譜・本・藩法 761)。是月 幕府、諸大名に困米を命ず(度譜・肥)。郡中御役人等御手当調あり、中小姓以下惣庄屋支配浪人 5,237人(肥)。

8. 10 去丑(文化2)年鍛冶方差止、杣方引受けとなっていたのを作事所付属とす(覚・年覚)。26 川尻町奉行町民に対し取引の厳正化を令す(川尻史 140)。是月 所々算用の期限厳守のことについて達(藩法 762)。(浄土宗)説法席にて軍書敵討など説くことを禁ず(寺雑附)。時松教願歿す、年86(肥人)。

9. 19 勝手向安永に旧復を命ず(御達・度譜・肥)。是月 前藩主斉茲相州宮の下へ入湯(本・度譜)。「肥」は4月とす。勘定所・算用所物書欠落自殺(度譜)。熊本富仕法改正、財津惣三郎の富元を除く(寺例続)。

10. 23 中老松井直記を家老に任ず、島田嘉津次を中老に任じ、大奉行兼帯とする(藩法761・本)。25 勘定所を奉行所に併局することとし内田恒助にその準備を命ず(度譜・本)。是月 渡辺直右衛門を算用頭当分に任ず、安田九兵衛・内田恒助勘定頭勤稜当分に任ず、同12月勘定頭助役に任ず(度譜)。

11. 1 乾櫓にて銀所預引替はじまる(度譜・本)。7 組支配の勤方の賞美に関する規定(藩法 762)。12 妙応院(綱利)100回忌(本・度譜・藩法 762)。

29 浜町屋敷近火、藩主斉樹出馬(度譜)。是月 勝手方御用につき奉行副役上月半下東上(度譜・本)。熊本富仕法に統一する(寺例続)。鯨手永秋只村零落所につき小池村庄屋中村貞七を右村庄屋へ所替、万ヶ瀬村併勤(覚)。富元富岡安之進らを賞す(寺例続)。

閏11. 3 仙洞崩御(度譜)。21 従来の5匁・10匁・20目・30目・40目・50目の銀所預は不便につき、100目・10匁・2匁5分の3種に改む(肥・藩法 762)。

12. 1 婚礼の家への狼籍について厳しく戒む(藩法 763)。延姫、邨姫と改名(藩法 763)。9 勘定所目付、勝手方御用懸中山源助の役を免ず(度譜)。

26 高本敬蔵歿す、76才(先哲)。是月 上書は実名をもってするよう達あり(本)。奉行宮本伝右衛門に50石加増(本)。藩主直書を以って非常儉約を命ず(肥)。領内歌舞伎改め(肥)。正院手永会所、石野村へ移転(年合)。

是年 勘定所目付松野英記に勘定頭兼帯、江戸詰中算用頭兼帯を命ず(度譜)。湯川彦之允を吟味役当分に任ず(度譜)。勘定所の儀不取締あり奉行中に取締を命ず(度譜)。留守中長岡監物に勝手方上聞同様心をつけるよう(度譜)。

祇園にて順雨祈祷(度譜)。玉名郡鍋島村にて湾頭開(肥)。河原手永下河原村甚助・文左衛門、無願にて御山開明るにつき過料(年覚)。杉方払錢反物類櫛方へ引渡の捌方相済んだか否か問合のこと(覚)。櫛方へ引渡されていた反物代のうち1貫目杉方、米銀方へ仕向となる旨櫛方より申参(覚)。郡方御米当年より養浦平之允へ捌方命ず(覚)。水前寺水をもって造酒貳六百町鉄屋にて取扱(覚)。内膳へ米100石拝借仰付らる分、元利以上納入に付、富落錢より取上に及ばぬ旨郡方へ達(覚)。文化8年分の郡方御米売却員数書付(覚)。鴻池伊助に仕切書および小物成立用取組等について返書(覚)。妙楽寺富落錢を別当拝借願出ず(覚)。国産たばこ大坂への積登を試みる(覚)。進上御用の蕨買上げ(年覚)。日奈久町焼失、跡家取立のため拝借願(年覚)。在中火の用心等達(年覚)。高橋町本陣作事(年覚)。久住町焼失(年覚)。河原村築地村空地に越後芋仕立願(年覚)。西古町懸古桶屋町喜助に長六橋番を命ず(年覚)。八代城下囲塘修覆(年覚)。内田手永空屋質部屋、会所内に引直(年覚)。下小田村空屋廃止。平野一兵衛に芦北郡中櫛楮惣横目、徳富太善次に湯浦手永櫛楮見ヲを命ず(年覚)。正院手永窮民救済のため丸山一本松開明、願の通差免ず(年覚)。著書目録 阿蘇烟 記録 内田靖共。文武の辨 法制 大木理都。陽春献言 法制 脇愚山。脱譚 雑書 帆足長秋。東路日記 歌文中島広足。辺備略 法制 脇愚山。公退観省 教訓 辛島塩井。

文化11 (1814) 甲戌(家斉) 斉樹

1. 3 佐賀関沖にて難船(肥)。13 同席はもちろん、大身の家内絹の美服よろしからずとの触(藩法 763)。14 家老松井直記熊本発上府(本)。25 家中寺社支配町在の処罰を受けた者の前科届出の達(藩法 763)。是月 家老より五ヶ庄面々へ塩37俵送る(覚)。
2. 13 赤杉苗を矢部安方村に試植(林制 396)。17 勘定所目付松村英記を奉行副役に任ず(本)。23 奉行小山門喜退任(本)。是月 大矢御山新仕場野火取締につき達(林制 337)。櫛方新蔵建方(覚)。日奈久町米払底につき代錢上納にて拝領願(覚)。
3. 2 亀井南溟歿す、72才(肥)。13 知行取切米取足高受ける者の屋敷・地子屋敷譲渡に関する達(藩法 763)。18 川尻町奉行小林左七左衛門惣町取締りの仕法を定む(川尻史 124)。27 諸達および願書の用紙についての規制(藩法 764)。
4. 5 非常儉約につき特別のほか家中の者の旅行を禁ず(藩法 764)。18 藩主斉樹馬拝領(実紀)。19 独礼以下昇進家禄その他願立の書式に関する達(藩法 764)。24 藩主江戸発、6月2日熊本着(肥・度譜・藩法 765)。沢村宇右衛門熊本着(本・度譜)。28 宇土支藩主和泉守立之江戸発(肥)。是月 7月にかけて大旱(肥・本)。菊池郡河原・深川両手永植立諸木数調査、31万本(林制 346)。小物成方御用金大坂より差下す(覚)。
5. 6 儒者渋江宇内公正歿す、年72(先哲)。7 日光御宮遷宮(度譜)。是月 砥用手永惣庄屋非常の際に備えて囲米、同手永のみならず実施方達す(肥)。貧民救済寸志についての達(難稜)。洪水1丈3尺(9・10年にも8~9尺増水あり)(気・川尻史 292)。
6. 9 旱天につき、是日鐘巻雨乞あり(度譜・肥・本)。13 奉行分職のうち選

- 挙方と刑法方、勘定方と郡方は夫々事柄により合議せしむ（分職帳・覚帳）。
- 23 3丁目蟬所落雷（肥）。 25 家老有吉将監立憲隠居し、織部立生相続、家老に列す（本・度譜・藩法 765）。 28 勘定所を奉行所勘定方に併局のことを達、12月11日勘定役の座席を平士佐式役の次座とす（度譜・肥・藩法 765）（覚帳は27日とす）。是月 仏蘭対決の戦争今にやまずとの風説あり（本）。上月半下郡方分職御免（覚）。富講潰方について御省略年限中は寺社方より1ヶ月5貫目宛引渡に相成る（覚）。
7. 3 切支丹類族改を嚴重に行うように奉行所より達す（肥）。 10 暴風、花岡山の名木たる老木根本より吹倒さる、220年持ち来る阿蘇殿の松という（気）。 21 奉行町孫平太隠居、是月奉行副役上月半下を本役に任ず（本）。 25 非常の儉約のため藩主の朝御膳を本日より一汁減じ、御向ばかりとする（度譜・肥）。 28 五ケ年間格別儉約を命ず（度譜・本・肥）。 29 藩主外出のための道路整備のこと（藩法 765）。是月 法事等の節歩使番頭に歩頭打込み寺詰はじまる（本）。諸役人褒賞規定三ケ年間の調査検討の末完成、但し実施延期、天保11年再度検討の上実施さる（考績格式、諸職考績之格草書）。湯川彦之允吟味役勘定所詰差止められ、目附付横目口の詰所出来（度譜）。御側金等減らされ、かつ諸役間出勤等の儀につき達（触）。勝手向危難につき当一ケ年扶持方迄に仰付らる旨達（触）。
8. 5 山東彦右衛門嫡子弥源太町人を手討（肥）。 26 徳川竹千代死去、穩便10日（度譜・藩法 765）。川尻町別当往還筋の修繕について諮問す（川尻史 143）。是月 廻江手永河高村願七に火針類焼方許可（年合）。浄土宗に軍書敵討などをまじえて説法する寺院あるにより往生院に注意する（寺例統）。諸渡方滅方仰付らる（触）。
9. 22 増奉公人を希望の願書形式について達（藩法 765）。 28 峯姫引移（実紀）。大坂屋敷改革、銀所差止、蔵元長田作兵衛に金銀錢引渡す（肥）。是月 沢村宇右衛門元譜代の家来を打果（本）、北里手永嶽村御山内へ木地師入職をゆるされしところ、もはや立木なきにより津田村浦手御山へ所替ゆるす（年合）。久住質物所ならびに高橋炭薪会所のことにつき達（覚）。
10. 15 人吉藩主相良志摩守息護之進頼之登城初見、12月16日従五位下近江守に叙任さる（実紀）。 20 夜、東叡山本坊炎上（本）。 28 家老小笠原美濃長頭隠居し、中老沢村宇右衛門を家老に、備頭藪内蔵允を中老に任ず（本・藩法 765）。是月 將軍家慶事につき赦宥の沙汰あり、ただし遠坂関内列3人はゆるされず（本）。前藩主斉茲の分料を減ず、かつ側金等をもって心附米錢支給す（触）。五町手永白浜村砂糖製法を来年より差止む（覚）。
11. 7 家中手取米減につき熊本質屋の利子を引下ぐ（藩法 765）。 15 松井式部督之、部屋住にて家老に任じ、有吉織部跡の大組を預けらる（本・藩法 765）。 27 藩主、直書をもって五ケ年間非常の儉約を命ず（肥）。三河口八蔵困糶を見分（度譜）。是月 白川増水のとき排水のため下手石塘口に水越し石塘出来（肥）。小倉騒動（度譜）。川尻町民、丁頭藤吉以下4人家取繕貸付金の返済免除を願う（川尻史 142）。旦那寺変更について達（雜記古三番）。
12. 11 奉行宮本伝右衛門退任、奉行副役服部太門を本役に任ず（度譜・肥・本）。 23 藩主在国の節年頭礼式について達（藩法 766）。是月 額直前髪執等、年

令相應にするよう達す（本・藩法 766）。寸志にて進席仰付おかるる者より貸方捨遣さば継目の節これを加味して判断する。もつとも右捨方は現の寸志高には立て下されず、半分程立下さる（難稜）。常の町人より独礼以下に貸方捨遣は新に進席は仰付られず、以前寸志賞美極り高の一俵程にて拝領物仰付らる（難稜）。川尻水夫採用の法を改め、櫓手熟練の者を撰び定柄水夫 3,371人と定む（肥）。

是年 非常儉約につき10月以後諸役間出方筋一統減方（覚）。富落銭拝借引当にて郡方銀拝借は当年より五ケ年間は利分のみ取立（覚）。左義長用の大竹南郷御山より渡していたのをやめ、掃除方より渡し下さる（年覚）。南関手永在牢、質部屋床替をゆるす（年覚）。佐敷在牢質屋とも会所床引続、白岩村少脇と申所へ引直たきよし、願の通ゆるす（年覚）。久住町富講の度を減ず（年覚）。非常の儉約につき普請御用鉄道具差止（年覚）。五町手永河内・船津・白浜三三ヶ村御山内、みかん床に開明、願の通ゆるす（年覚）。惣塘支配役枋方役人兼帯仰付らる（年覚）。選挙方・刑法方分職、ことがらに応じて両分職通議すべし、勘定方・郡方も同様（年覚）。知行取極至貧の面々へ相應の拝借を仰付けらる（覚）。御前様・就君様分料を減じ、且他所合力なども減らす（触）。村人数放の適用範囲を改む（城南史 494）。田町御蔵朽原亭蔵米 750石余掠取る（度譜）。蛸所役人柘植寿兵衛落雷にて果てる（度譜）。郡代中当1ケ年隔日勤務（度譜）。緒方瀬兵衛一件につき惣銀方根取浦仁右衛門留守居中小姓に仰付らる、勘定役へ達筋あり（度譜）。勘定方物書大岩栄八、江戸登中脇方瀬にて不正の唐物薬種持越すにつき咎（度譜）。飽田郡川口村に葭場開2ヶ所9丁6反築立（潮害）。阿蘇山炎上（肥）。旱魃虫入等にて損毛高 185,090石（肥）。この年の支出 305,550石（宝暦以来御勝手向）。**著書目録** 安支波芸 雜書 脇愚山。香山俊助覚書 法制 香山俊助。肥後犬追物発端 諸家 志方半兵衛。籬艸抄 歌文 脇愚山。

文化12 (1815) 乙亥 (家齊) 齊樹

1. 7 奉公人給金の規定（藩法 766）。25 朽木縫殿助妻（丹羽式部少輔妹）去る12月18日死去（藩法 767）。**是月** 駒井軍馬、林文吉を手討（本）。
2. 7 江戸勤番の死亡者は身分により藩指定の寺に埋葬のこと（藩法 767・度譜・肥）。9 諸郡影踏の節、郡代相互に助役相談出在いたしたき由、願の通ゆるさる（覚）。13 藩主齊樹田迎にて犬追物を観る（肥）。15 宇土支藩主和泉守参勤登城（実紀）。23 藩主齊樹熊本発、3月23日江戸着（藩法 767・本・度譜）。30 徳川家継 100回忌（本）。**是月** 鶴崎鈴木三郎七、早水次左衛門に手疵を負わせ自殺（本）。数年来非常儉約中のところ、藩主思召をもって23石5斗手取、御役料心付2歩減にて給与し、儉約のことは従来通りと達せらる（肥・触）。宇土より寸志の者の賞美規定の問合せあり、返答のこと（難稜）。佐敷手永白岩村計石村新開の儀、郡横目差出し糺方仰付らる（覚）。
3. 1 儒医村井大年椿寿、号琴山歿す、年83（先哲）。9 知行取へ差出す大豆地子証文塩切米取切手および諸渡方諸拝借等の願に関する触（藩法 768）。10 中老島田嘉津次熊本発上府、12月7日帰着（度譜・本）。15 2月26日俣姫死亡の公示（藩法 769）。**是月** 寺社にて金鰯ドンス使用のばあい前もって届出を命ず（寺例続）。

4. 13 藩主斉樹参勤登城 (実紀)。17 日光廟 200年忌につき家臣を派して太刀を納む (度譜・肥)。是月 上旬より6月下旬まで阿蘇山鳴動劇しく、ために硫黄気強く、諸村作物不良、牛馬病む (度譜・実紀)。阿蘇宮地、坊中にて度々祈祷あり、また南郷・久住在々災害の諸手永に錢53貫 411匁を頒つ (肥)。川尻町河野家参勤に召仕ある (川尻史 179)。文化5年市中へ非常備米御手当仰付られたときの調達米、寸志に差上げたきものあり、賞美の儀町方より伺あり、僉議のこと (難稜)。当暮手取米渡方割合につき達 (触)。
5. 1 銀所預書替えあり (肥・本)。12月3日までかかる (肥)。2匁5分預 942,500枚 (肥)。7 是日より27日まで旱天 (肥)。21 藩主斉樹室、篤姫を養女とす (度譜・本・藩法 769)。是月 新坪井町懸寺原町出火32軒焼失 (壁書)。道具方を勘定所に併局 (肥)。5月上旬より7月まで阿蘇ヨナ害 (損)。
6. 4 作事所雷火あり (肥)。17 家老松井直記熊本下着 (本)。18 松井式部、山城と改む (藩法 769・本)。是月 法華宗にて説法のさい他宗を誹謗するを注意 (寺例続)。川尻町医村田南山の顕彰碑を建つ (川尻史 730)。代々中小姓にかぎり出府屋敷渡し下さる旨達 (触)。
7. 3 的場善太郎を奉行副役に任ず (本)。6 是日より8日まで強雨、諸川満水、球磨川1丈1尺 (肥)。是月 下旬、畿内・東海道洪水、田畑多損 (本)。
8. 12 強雨にて球磨川1丈1尺、山鹿川1丈2尺出水 (肥)。13 小笠原大膳大夫逼塞 (本)。
9. 7 長岡山城熊本発上府 (本)。23 郡代隔日出勤のところ不便利につき日勤とす (覚)。
10. 一 野津原零落につき富講を不許可 (寺例続)。天守方御用樟腦、南関手永文左衛門に製法を命ず (年合)。矢部手永小中島村清助鍛冶炭焼方10ヶ年許可、運上銀12匁宛小物成方納、職札は郡代渡 (年合)。
11. 25 藩主斉樹妹部姫一条閑白忠良に嫁す (本・度譜・藩法 769・肥)。是月 馬口労札年々引替の儀差止め、以来は惣庄屋仕出手永一紙の根帳をもって1月11日目録の節運上銀納めるよう平井次右衛門より願出につき僉議 (覚)。
12. 1 長岡山城登城、將軍家初見 (実紀)。13 儒者中山市之進昌礼歿す、54才 (先哲・城南史 477)。是月 宿駅人馬出小屋の者共、旅人に対し不遜の儀などなきよう、また暑寒のしのぎのため往還筋に木を植付けよう達す (年合)。産物買方について派遣の横目、役人へ心附願 (覚)。細川藩切支丹類族数 (肥後国のみ) 103人 (切支丹63)。
- 是年 朝鮮人来聘につき上納金引上げ引渡の儀につき勘定方へ懸合のこと (覚)。轡轡師入込の儀につき奴留湯省吾より達 (覚)。紅花製法の儀につき、京都より志賀源右衛門申越す趣達になる (年覚)。小物成方の貨殖止む (度譜・肥)。大坂御蔵米虫入多く、正福寺にて祈祷あり (度譜・肥)。坂下手永部田見村に郡方葭場12町2段余、佐敷手永計石村に手永開築立17町7反余、費用錢 110貫目 (肥)。当秋損毛高 272.190石と届出づ (実は 181.000石余なりしを割増す、此例他にもあり) (肥)。当暮より家中14石手取 (度譜)。勘定方根取1局1人宛引分れていたのを以前の通り当用御積方旧復 (度譜)。留守中長岡監物に勝手方上聞同様心を付け、また大奉行の勤稜差図するよう。沢村宇石衛門に大奉行の勤稜右同

様、追て監物は免され、松井直記に命ぜらる。(度譜)。目付安野形助に勝手向御用懸を命ず(度譜)。斉藤郡太江戸詰作事頭兼帯(度譜)。郡代間封金 324両、郡代立合封印(度譜)。**著書目録** 犬追物馬場拵作法の事 諸家 志方半兵衛。堀殿行状 史伝 島田嘉津次。天御柱 法制 長瀬真幸。

文化13 (1816) 丙子(家斉) 齊樹

1. 一 一条忠良室郎君を政所と称す(藩法 770)。
2. 一 奉行白石清兵衛に 100石加増(本)。
3. 9 中老藪内蔵允熊本発上府(度譜・本)。10 奉行副役的場嘉太郎熊本発上府(本)。11 藪田斉嫡子岩次、河井三郎左衛門を打果し、切腹(本)。13 郎君婚姻につき去年までの犯罪者赦免の旨達、遠坂関内、津川兵左衛門、入江十郎大夫も墓参・父子対面のみ許さる。(本・度譜・藩法 770)。29 藤懸伝次組の者弟を手討(本)。**是月** 錢塘手永奥古閑新地築立につき、郡筒50人仕立仰付らる(肥)。月初より強雨、諸川満水、就中 6月14・19両日増水甚しく、田畑 7,819町余水浸荒地、塘 2,234ヶ所27,058間破損、溺死男女17人、8月23日同断、溺死男女6人、ために田畑荒地 5,227町余、塘破損 520ヶ所(肥)。
4. 2 將軍家転任、右大將兼任につき装束登城(本・度譜)。21 藩主齊樹就封の暇をたもう(実紀)。24 藩主齊樹江戸発、不例のため伏見滞在静養、5月18日伏見発、6月7日熊本着(度譜・本)。**是月** 熊本滞在中の浪人大草莊兵衛、砲術に巧みなをもつて在御家人入門修業(本)。榎方より榎実圀所少につき、小物成方高橋のうち御蔵借受けたきよし申来る、貸渡すべきかを伺う(覚)。江戸武家屋敷にての博奕寛政4年の達の通り、今後ますます取締るようにとの触(藩法 770)。独礼以下の借財捨方の儀相続の節にいたり筋付下さるべきところ常の町人より捨遣は新規寸志同様昇進仰付らるべきやの儀につき、町方より伺(難稜)。受免後諸床費地分など一手永限り取調べの儀、郡代へ達(年合)。
5. 13 阿蘇山鳴動(肥)。**是月** 南関手永柿原村文右衛門に樟脳製法許可す(年合)。
6. 2 長岡山城督之江戸より下着(本)。12 前夜より阿蘇・南郷湯谷温泉異変あり、地中鳴動砂泥吹きだし、大石とび、湯小屋12軒破損、怪我人男女5人(肥)。13 強雨のため大津御蔵裏手岸崩あり、四五六番御蔵打崩、球磨川も大增水(肥)。19 飽田郡徳王村焰硝所、落雷により御蔵土台石共散乱し、近村障子倒れ壁くずれ、8里の外までも震動(肥)。
7. 9 藩主齊樹帰国を謝し、もの奉る(実紀)。**是月** 白焰硝を熊本府内にて製造禁止(肥・触)。中老島田嘉津次病気につき、用番の外諸役御免(本・度譜)。下益城南田村三宝寺再建入目銭作徳米引当拝借願出、しかし叶いがたきよし(覚)。
8. 23 強風雨、虫入(損)。24 前藩主齊茲湯治のため帰国を願出ず、ゆるさる、8月4日江戸発、途中京都滞在、なお儉約のため船路の予定を中国路に変更し11月3日熊本着、熊本滞在中遠坂列3人へ目見を許す、ついで川尻御住居に入らる(度譜・藩法 771・本)。**是月** 植木町零落につき20富のうち8富を中止(寺例続)。算学師役甲斐優隆春、中小姓に召直さる(城南史 480)。他所の富札密売の者多し、取締を命ず(寺例続)。
- 閏8. 3 江戸および東海道、畿内大風雨洪水(本)。**是月** 津奈木手永中村懸りにて新開築立のための拝借願(覚)。

9. 4 徳川民部卿逝去(本)。23 前藩主下国途次滞京長く老中より尋の筋あり、これにより10月4日伏見発下国の予定の達(度譜・藩法 772)。29 奉行上月半下、伏見出張のため熊本発(度譜・本)。
10. 13 川尻古城神社再建さる(川尻史 406)。18 京都三角典薬少允熊本滞留中の家中の者の心得について達(藩法 772)。25 藩主不例について江戸より幕府医員三角典薬少允下向(度譜・本)。7才以上の男子の人別調見合わせにつき侍中輕輩支配浪人譜代の家来に至るまで1才以上の男女もれぬよう人別調の達(藩法 773)。是月 阿蘇山衆徒行者支配家来等、造酒・麴屋・紺屋職その他の願出は以来御郡の故障の有無を確認の上、僉議すると阿蘇郡代へ達す(寺雜附)。
11. 1 家督御札以前の者、前藩主への目通りについての達(藩法 773)。3 御茶屋廻りの下馬についての触(藩法 773)。6 京都の一件10月27日土井近江守へ差控伺差出のところ、同日それに及ばずとの返事ありとの触(藩法 773)。7 10月23日に女子出生、同日死亡の通知あり(藩法 773)。是月 同田貫小山右兵衛へ先年脇差打方仰付られたき由にて小森田佐三右衛門より錢10貫目差出、成行の儀内藤市之允より相馬勘兵衛へ内意問合になる(覚)。松下三郎助へ桐苗仕立のため桐実3俵代6匁山方銀の内より渡下さる(年合)。
12. 19 老中松平伊豆守より長崎港へ差出の番船は、向後9月頃より3月頃までは領分に引取り、3月頃より8・9月頃までの間長崎波止場に繋留しておくよう命ぜらる(肥・本)。28 奉行白石清兵衛退任(本)。是月 他国に現金銀の流出を防ぐため呉服類の他国よりの移入を禁止し、そのため一統難儀につき、桑樹養蚕を奨励し、絹布類を製産することとす、新町一丁目会所を絹織所とし、上州・西陣などより織師を雇入れ、領民に技術を習得せしめ富国利民の道をはかることとす(後に絹織所を廃し、自宅にて織ることとし、また産物受込方を設く)(肥)。南関富元を河崎平三郎一人に命ず(寺例続)。石火矢船出来(覚)。
- 是年 本藩人口調査報告あり、惣人口 569,729人、内男子 293,055人、女子275,775人(肥)。家中15石手取(肥・本)。風水虫入などにて損毛高 275,000石余(肥)。錢塘手永海辺にて新開築立一件(覚)。中富手永広町構12間程山鹿口の方へ引直願叶いがたし(年覚)。河江手永小川人馬会所痛損につき新規惣瓦葺に建替願許可される(年覚)。水俣駅に人馬会所建方許可される(年覚)。中島良友(画家)没(肥人)。

文化14 (1817) 丁丑(家斉) 齊樹

1. 13 昨秋凶作につき参勤交替の節、供廻り足米・戻米は半分、役料米は全部去暮双場で代銭とす(藩法 774)。是月 前藩主川尻にて相撲を観る。翌2月また興行、第20代吉田追風並びに勤仕す(肥)。長崎番船3月9日まで(本・度譜)。
2. 7 山の郡境不明の個所は確定まで留山とす(林制 347)。15 本妙寺常題目堂黄金仏開眼供養、見世物40余ヶ所に出来、非常の賑合にて3月末まで日延(肥)。家中の者馬術稽古の折の心得(藩法 774)。是月 内牧手永湯浦村と北里手永中原村と境論争(年合)。奉行副役松村英記に国産仕立御用上聞を命ず(先祖附)。網田皿山焼物一件につき拝借年賦滞焼物代渡下される内より1割通取立にして立用にしたき旨勘定方根取中より達(覚)。
3. 5 当春参勤交替、中国路通行の達(藩法 774)。11 在家にての説法は禁止であるが、法話は苦しからざる旨、郡代へ分司より達(寺雜附)。13 日奈久町

- 134軒焼失(肥)。22 光格天皇讓位、光孝天皇踐祚(肥)。藩主快気の達(藩法 775)。23 中老島田嘉津次隠居、小笠原美濃長視を中老に任ず(度譜・藩法 775・本)。去年川尻御茶屋作事の際、用材安価で差出し、この日川尻町人鳥目 500文をうく(川尻史 278)。是月 篤姫痘瘡(本)。
4. 5 当年参勤、4月25日供揃にて出発の触(藩法 775)。6 藩主留守中の城代長岡図書に命ぜらる(藩法 775)。15 奉行上月半下八代番頭に転任、林平格・妹尾寛太を奉行副役に任ず(本)。20 留守中の心得達(藩法 775)。21 藩主斉樹久しく病中のところ参勤のため是日熊本発、中国路、途中不例にておくれ5月23日大坂着、6月18日江戸着、同日家老松井直記熊本発東上(肥・本)。
5. 8 将軍家実母逝去(本)。是月 前藩主斉茲阿蘇社参(本)。
6. 4 野津原手永野津原村 130軒焼く(本)。「肥」には御茶屋・郡代詰所・惣庄屋宅、人家36軒とする史料あぐ。16 淑姫5月29日死去につき是日より20日まで服喪(藩法 775)。是月 五町手永徳王村焔焔蔵の取扱について注意(藩法 776)。
7. 3 切支丹類族改の厳行方、類族方奉行より達す(肥)。25 前藩主斉茲川尻大慈禅寺河原にて火術を観る(肥)。26 光寿院(藤孝室) 200回忌(本・藩法 776)。是月 宇土長浜新地築方一件(覚)。
8. 7 前藩主斉茲川尻御茶屋発、小倉路通行、途中伊勢参宮の後9月江戸に着す(実紀に10月15日参府とあるは公式届出の時か)(肥・本・藩法 776)。中老蔵内蔵允熊本下着(本)。29 鹿子木量平等に命じ、八代郡大牟田沖築立準備中のところ是日鋤初あり、10月下旬一旦中止(肥)。是月 上旬菊池郡深川・河原両手永に水論起り、郡代出張せしも効なく、ついで穿鑿頭以下目付・横目等30余人9月15日より出張、10月14日にいたり着落す、吟味を受くる者 1,300人に及ぶ(肥)。「本・度譜」は翌文政元年8月とす。
9. 11 武具見分当年まで中止のところ秋より再開との達(藩法 777)。21 仁孝天皇即位につき平野九郎右衛門を使者として派遣す(本)。23 知行取、切米取屋敷に関する達(藩法 777)。28 川尻町民玄八、前藩主斉茲御茶屋滞留中出精につき褒美を受く(川尻史 278)。29 斉茲本日江戸着との触(藩法 777)。是月 野津原町類焼につき拝借をゆるす(覚)。金銀町家へ両替は売双場をもって御払になり、買双場をもって御買上げに決める(本)。
10. 14 上野火の番(本・度譜)。26 靈感院(重賢) 33回忌(本)。是月 長岡山城黄鷹所持の趣、将軍家聞召され、福井九蔵・岩瀬元作兩人を八代に遣わさる(肥)。正院手永入百姓仕立料および救立米拝借分、願により当12月まで上納延期、もっとも百姓仕立料は当年中上納を命ず(覚)。
11. 20 当秋豊作のため米価下落手取米相場に関する触(藩法 777)。24 鹿子木量平維善本妙寺内に神道碑(浄池公廟碑)を建つ、前藩主斉茲の病氣平癒を祈願し、その験ありしに依ると(肥)。是月 西甚左衛門銀所預消方として富講興行の際格別出精につき、御紋小袖、白銀などを賜わり、忤甚次に富元本役を命ぜらる(寺例統)。
12. 5 佐田右州(多芸)没、年59(先哲)。27 加来衛門七(水泳達人)没、年59(先哲)。
- 是年 内密御用金 300両、御上下度々勝手方案へ差出すようきめる(度譜)。玉名郡

上沖洲村新開築立、畑16丁2反余 (肥)。当秋損毛高 153,683石 (肥)。佐敷町高札場白洲へ場所替にて建方仰付らる (年覚)。文化9年より同13年までの郡方金銀米銭しらべ (覚)。郡方ならびに老歩半米売捌分と囲置分しらべ達 (覚)。後任の大奉行任命まで家老松井直記・同沢村宇右衛門に右勤稜を命ず (覚)「先祖附」によると4月のこと。八代新開入目銭のうち、銘銭つけこしについて小丸并御茶巾拝借の儀、勘定方へ懸合 (覚)。

文政1 (4・22改元) (1818) 戊寅 (家齊) 齊樹

1. 17 他所の富札取扱者は召捕、吟味を命ずる旨達 (覚)。是月 御所にて女御入内、使者三淵永次郎 (本)。水前寺蠟所への寸志は民力強寸志に准ずる (難稜)。
2. 19 前藩主病気のところは日床揚 (度譜)。29 他国産物一部解禁 (藩法 778)。生蠟は従来通り他国産は禁止 (藩法 778)。是月 国産仕立始る (本文は文化13年2月の記事に関連するか)(本・度譜)。奉行副役松村英記を本役に、目付横井太平を奉行副役に任ず (度譜・本)。民力強寸志にて影踏除は認めず (難稜)。伏見宮作事につき五ヶ庄へ材木取出のため伏見御用達来国 (年合)。
3. 4 中老小笠原美濃、奉行本役松村英記熊本発東上 (本)。22 江戸往来飛脚は従来月1回のところ特に2回とす (本)。是月 匿名訴状の取扱について (市雑坤 105)。町方囲米銭として熊本町より差出置分、此節、賞美申立叶いがたく、右米銭このたび返下さる (難稜)。小物成方より在中へ米銀拝借の宝永以前の帳面なし (覚)。熊本・大津御米御払値段横目より達す (覚)。増水夫米は元禄13年よりはじまり、翌14年は上納仰付られず、同15年より本方へ上納のところ、明和4年より今もって小物成方へ8,000石程年々納、もっとも寛政9年より右の内4,600石程は本方へ引渡になる (覚)。
4. 19 藩主弟職五郎茲詮病死 (度譜・藩法779・肥)。是月 寺社開帳の年限と見世物類について定む (寺例統)。開帳見世物数ならびに開帳日数残りあるとも7ヶ年は開帳叶いがたし、安永9年の再触 (寺雜附)。植木町類焼につき文化4年4ヶ所より拝借、其後返納延願櫓方へ指廻すべきところ、洩れているので小川嘉次郎より懸合 (覚)。
5. 1 宇土支藩主和泉守立之就封の暇あり (実紀)。15 藩主齊樹に就封の暇あり (「実紀」はかく記し、翌年4月15日条に藩主参勤と記す、然れども事実は本年翌年とも滞在なるべし、「本」には御滞府とあり)。是月 暗尼利亞船豆州浦賀へ漂着 (本)。
6. 10 吹立二歩判通用 (度譜・本)。18 宇土支藩主和泉守立之、江戸において卒す、年35 (度譜・宇土史 107・肥・本)。8月9日興松立政、立之の遺領を相続 (実紀・度譜・宇土史 108・藩法 782)。27 藤崎祇園両宮祭礼についての達 (藩法 780)。29 養浩院 (齊樹弟職五郎) 命日4月19日を4月18日に変更の触 (藩法 781)。
7. 10 当年早魃、是日健軍兩宮神水中島に神幸あり、雨乞の儀あり、雨の宮の御神体は高さ1丈5.6寸、三角形の白石にて往昔中島より出現すと (肥)。29 藩主病氣につき幕府より帰国延期の許可 (藩法 781)。是月 鶴崎お米払および府内銀札崩にて町在へ入込おる銀札、ことごとく彼地へ持越50文札、25文札に一統引替になる (覚)。八代米弓削又兵衛へ売払、他領出の分は俵につき2分増上納、積出しの節船頭名前船数石数等達するよう (覚)。

8. 24 頼山陽熊本に来る、10月まで滞在 (肥)。
9. 5 深笠着用を禁ず (藩法 781)。8 徳川家治33回忌 (本)。10 阿蘇神制により阿蘇谷内における殺生禁断の触 (藩法 781)。是月 細川哲之丞卒去 (本) (「度譜」には文政2年、「肥」には文政3年9月2日とあり)。松尾焼物師へ御好御用の焼物を仰付らる (年合)。
10. 6 人吉城主相良志摩守頼徳病により致仕し、その子近江守頼之相続す (実紀)。7 江戸大火にて新田支藩主下屋敷類焼 (度譜・肥)。11 上益城郡内の鷹場に関する触 (藩法 782)。18 藩主病のため帰国延期、10月15日幕府より許可の触 (藩法 782)。是日八代妙見社祭礼警固の御城附家士、俄かに病気の故をもって帰宅す、然るにかねて城附と松井家家臣との間に不和ありしを以て、これを機として松井家と城附との間に種々の問題を生ずるに至る (肥)。19 家老松井直記熊本下着 (本)。29 嶋田但見 (嘉津次) 政治向意見申出のため役所への自由出入を許す (藩法 782・度譜)。是月 中老薮内藏允の勝手方上聞当分、大奉行勤務を命じ、翌2年閏4月免 (本)。豪潮、尾州家の請により名古屋に滞留中日限切れとなるも、一橋家人をもつて滞留延期を江戸屋敷に願出る、よって差支なき旨を返答 (寺例続)。改宗についての定を町在に達す、なお浄土宗より心願にての改宗差止めを願出ず (寺例続)。法花宗の内、互いに教義を誹謗する者あり、不穏様子につき達 (寺雑附)。改宗または旦那寺変更は容易には叶いがたし (寺雑附)。出雲屋武吉竹刀御用地草染上げ代銭引当拝借分上納延期を願うにつきゆるす (覚)。
11. 19 北里手永宮原町富講願につきゆるす (覚)。21 大嘗会 (本)。28 有隣院 (重賢室) 33回忌 (本・藩法 783)。米価下落につき年内に相場にて買上げの旨達 (藩法 783)。是月 富講の儀につき寺社方より書付来る (覚)。嶋田但見心附毎年米 500俵下さる (本)。
12. 14 久我家にて侍従様薨去 (度譜)。23 中山手永巢林村穢多甚之允、嘉三下益城穢多組頭申付く (覚)。29 氏家志摩養父を曾祖父打果す (本)。是月 本藩非常倭約を更に5年延長 (肥・触)。一統拝領米、但し3万石取 200俵、中小姓3俵、歩使番・独礼6斗、もっとも米価下落につき双場をもつて代銭渡 (度譜・触)。
- 是年 宇土郡郡浦手永長浜村沖10町余新開築立、この費用70貫 700目余 (肥)。玉名郡坂下手永高道・浜田両村沖に新開 142町築立、翌年成る、なほ同所に窮民救助のための新開11町8反築立 (肥)。飽田郡奥古閑村にて奥古閑開62町5反、益城開31町9反、採蠟司開11町5反築立 (潮害)。早魃・虫入・穂枯にて損毛高 180,810石余 (肥)。苗字まで御免の郡代直触に限り小前より養子縁組をゆるす (覚)。在中にてから芋焼酎煎ること、以来共一統禁ず (覚)。白川分水について (年覚)。小嶋町より旅舟廻着のときの上荷舟造立願出づ、しかし高橋町より故障申出、以前の通下松尾村平田船借方ゆるさる、白川筋通船は不許可 (覚)。松尾手永高良村穢多皮他所売につき、出雲屋武吉、百次郎内廻にいたし、虫付皮に印形を用、直に売却をゆるす (覚)。国中残皮熊本たはこ屋宗兵衛買方願出づるにつき、出雲屋武吉より春竹村へ入込銭辻差出す由につき相対買方をゆるす (覚)。著書目録 清風堂史論 史伝 近藤淡泉。小萩が本 歌文 長瀬真幸。牧民類衆論 法制 垣塚文兵衛。游東陬録 地誌 松崎慊堂。

文政2 (1819) 己卯 (家齊) 齊樹

1. 9 旧12月24日達姫江戸にて死去についての触(藩法783)。11 伯州赤崎浦へ朝鮮商客漂着(本)。13 水戸家より將軍家へ大日本史を献ず(本)。藩主持病のため4月参勤時まで滞府許可の達(藩法784)。14 これまで勘定方を奉行所へ併局していたのをやめ旧に復す(本・藩法784)(覚帳は13日とす)。吟味役詰方を命ず(度譜)。21 家老沢村宇右衛門熊本発、2月25日江戸着、4月21日江戸発。閏4月23日熊本着(本・度譜)。26 幕府、甘蔗を本田畑に作るを禁ず(覚)。
2. 10 他領富札商売禁止を強化(藩法784)。29 秤改のため神善四郎方の役人來熊のため準備の達(藩法784)。是月 老歩半米双場をもって代銭立、初発より16ヶ年分の現高立合しらべ(覚)。
3. 一 的場善太郎中着座同列、服部太門右同断(本・度譜)。
4. 11 大目付長岡治郎丞家老代として熊本発東上(本)。30 元大奉行松下久兵衛歿す(致仕後子莊と称す)年72(先哲)。是月 奉行松村英記退任(度譜・本)。勘定頭尾崎藤市に足高50石加増、使番列(度譜)。嶋田但見の政事向意見上申を免ず、6月14日心附米はまでの半分を減ず、12月病死(度譜・本)。鳥丸様使番大沢典を客屋において勘定頭尾崎藤市接待(度譜)。非常の儉約なお5ヶ年延長につき手取米等の儀について達(触)。阿蘇・南郷人参仕立方について市原助兵衛等より願出ず(覚)。近年別して在中難渋により、東西派寺院の本山納金などを門徒へ奉賀なりがたし(寺雜附)。非常の儉約なお5ヶ年間延長について年頭札などの儀につき達(触)。豪潮、ふたたび一橋家用人を通じて3年の滞留を申出る、これをゆるす(寺例続)。
- 閏4. 1 坂下手永滑石村疫病流行につき大筒打方差免ず(覚)。3 長岡山城、江戸に向け八代出発5月5日江戸着、9月6日熊本下着(肥・本・度譜)。是月 中頃 菊池惣屋庄緒方嘉八、石渕七郎右衛門所替につき相互隔意なきよう達に及ぶ(覚)。真宗坊主職格不相当法服用等着用、猥なるをもって達す(寺雜附)。中老藪内蔵允、沢村宇右衛門留守中勝手方上聞当分、大奉行勤務を命ぜられていたのを免ず(覚)。
5. 7 合志郡大津町出火、民家13軒、御蔵御用宅4軒焼く(肥)、跡家取立難渋について本方、小物成方より10ヶ年賦にて拝借(年覚)。9 この日より12日まで、および20日、21日大雨洪水、田畑浸水3,323町余、塘破損816ヶ所5,630間、溺死男女11人(肥)。21 狩漁は耕作を妨げざるよう再度達(藩法785・年覚)。是月 新小判吹替成就、引替仰出さる(本・度譜)。
6. 7 大津町出火、民家100余軒、御蔵内官宅類焼く(あるいは5月7日と重複か)(肥)。12 是日および15日府内雷鳴、諸所落雷(肥)。京都および伊勢、美濃辺大地震(本)。19 中老小笠原美濃江戸より下着(本)。
7. 3 藩主齊樹室の生母一橋にて死去(藩法786)。4 小山門喜奉行職に復職し前藩主齊茲住居として本山に御殿新築につき、その作事係を命ぜらる(度譜・本)。
8. 30 幕府、細川越中守および松平隠岐守に日光山靈廟修覆課金を命ず、本藩支出74,096両、大坂御才覚諸役間出銀のほか町在に課金す(肥・実紀)。12月28日右につき藩主に賞賜あり(実紀・度譜)。是月 元中老遠坂関内、元大目付津川平左衛門、元奉行入江十郎大夫の罪を許さる(「本」によれば関内は今年4月

11日死去とあり、「先哲」には11月11日死亡、65才と記すも、墓碑には2月11日死亡、69才とあり (肥)。祇園・藤崎祭礼の芝居見物取締役足輕に対する侍の心得 (藩法 785)。

9. 16 昼八時半頃本妙寺庫裡出火 (肥)。細川宣紀33回忌 (本・藩法 786)。21 本山御殿新築斧初あり (肥・本)。12月11日棟上げ、翌年3月24日落成 (肥)。24 八代大牟田新地は先年工事中止のところ、昨年11月8日再工事をゆるされ、今年2月9日より着手し、是日竣工す、耕地 330町余を得、世にこれを 400町開と称す (肥・本)。是月 新鑄の小判一步判引替えの触 (藩法 787)。五町・池田・横手 3手永新堤、新井手等の年貢の儀願のこと (合)。金 150両宛毎年機密間へ引渡来るところ、八代新地と蟬お所へ振替になれば御銀甲斐なくなるにつき暫く引除き御免の儀伺い (覚)。日光御霊屋修覆御用につき出方のこと達 (覚)。御手伝御用につき勘定頭尾崎藤一を大坂に派遣す (度譜)。在中瓦葺は宿町・在町のほか農家は叶がたし、蔵・鍛冶屋は別段 (肥後藩後期法令集)。
10. 1 宇土支藩主細川立政登城初見 (実紀・宇土史 108)。2 嶋田但見貞孚 (号撫松) 歿す、年65 (先哲)。10 前藩主斉茲を少将様と称していたのを浜町様と改む (本・度譜・藩法 788) (「触」には11月とあり)。20 松浦三郎、僧志考を手討 (本)。27 去る8月上旬より長六橋掛直中のところ、是日渡初あり (肥・年覚)。
11. 1 前藩主斉茲還暦につき赦あり (藩法 787・肥・度譜)。6 尾張中納言家より豪潮律師所望 (肥)。10 致仕長岡斉 (監物は知) 歿す (本)。28 旦那寺替の触、安永7年、文化13年達の通り (藩法 788)。是月 150両引除できかねるとの伺に対し、御側金、上々様御分料など別手当につき、いかようとも繰合をもって指出すべきとのこと (これは9月の伺に対する返答) (覚)。
12. 16 藩主斉樹左近衛権少将に任ぜられ、息細川与松は従五位下に叙し、中務少輔と称す (実紀・本・宇土史 108)。27 家中の子弟不行跡多きにつき父兄へ取締を命ず (藩法 789)。是月 衣服などの制度は宝暦の規定以来、必要に応じ時々変更ありしが、此年あらためて制定し、また音信贈答祝事などについても示達す (肥)。高瀬町願行寺遊行上人宿泊につき、本門、塀などの修復を願う (年合)。父へ下置れた御紋の品の着用は今迄通りゆるし、先祖より祖父まで拝領の御紋の品の着用は禁ず (触)。拝領米、3万石取 200俵、中小姓3俵、独礼6斗 (触・度譜)。

是年 当年の損毛高は従来の計算によれば17万石余になるが、水損届も出しあるゆえ、届出に至り、損毛高 196,900石余とす (肥)。非常儉約打続き家中16石手取 (肥)。玉名郡滑石村に坂下手永開58町4反築立 (肥)。飽田郡蓮台寺桧垣 850年開帳あり (肥)。吟味役3月諸書附被見のことにつき達 (度譜)。買物方従前の通り勘定所附属とす (度譜)。御手伝御用掛尾崎・永嶺・下林、公儀御銀ならびに御品物拝領 (度譜)。御手伝御用懸尾崎藤一・永嶺嘉右衛門、本山作事御用懸湯川彦之允 (度譜)。御手伝御用のため郡代問封金の内より 3,500両支出 (度譜)。万寿君様政所様実子成祝につき助力金 (度譜)。村人数放の適用範囲を改む (城南史 494)。勸農教諭につき郡方出職衆等廻在の儀、僉議に控置 (覚)。南関手永関村へ柳川表より桶師入職 (覚)。正院手永木留山開明徳米銭、当卯年より窮民救済備とす (年覚)。天守方御用弓側木にする櫨木の剪方について達 (年覚)。佐

敷番頭ならびに佐敷番に対し廻浦の節は無賃銭、出府などの節は代銭を支払うよう達す(年覚)。作事所御用粉、元木布田手永久木野村懸禅師坊山より渡し下さる(年覚)。荒尾手永上井手村にて石炭試掘をゆるす(年覚)。川尻御船場桐ならびに梅檀剪除願につき、桐宜しき分は御船鳥毛身木に渡下され、残りは入札払、代銭は彼方集銭に加えおくよう達(年覚)。横手手永上権藤村に漁留めの建札願の通り差免す(年覚)。植木御山より杉取出を禁じ、留山同前とする(年覚)。諸郡仕立櫓場内にて櫓木の障に成る諸木剪りたいときは、木筋・尺廻・御用有無、払代等を見込み櫓方より山支配役へ達するよう(年覚)。内田手永村々の内仕立楮、半分村方へ渡下され半分は代銭上納仰付らる(年覚)。

文政3 (1820) 庚辰(家斉) 齊樹

1. 15 奉行小山門喜熊本発上府(本)。26 幕府、前藩主斉茲病により請うままに封地入湯の暇を与う(実紀)。是月 在中にて農家の瓦葺を許さず、只、土蔵は例外とす(肥・覚)(ただし、文政2年9月にも同種の法令あり)。一門両社名代等の節途中下座請なく下乗なしと究る(本)。
2. 3 藩主の少将任官を祝して家老長岡山城宅にて能あり(度譜)。9 奉行大河原次郎九郎病死(肥)(「本」には2月10日とあり)。13 大目付清水縫殿家老代として熊本発上府(本)。27 矢田郡平嫡子仁左衛門「井田衍義」を提出す(覚)。
3. 一 川尻御船乗組水夫 1,000人増加して 4,648人とす(肥)。
4. 12 本山屋形外堀堀端四方下馬下乗の触(藩法 790)。14 前藩主斉茲熊本着、本山御殿に入る(度譜・肥・本)。〈2月26日江戸発、3月7日伏見着、3月21日大坂発、4月7日下関発〉(「肥」には3月13日到着とする史料あぐ)。21 長岡刑部興貞歿す(藩法 790・本)。25 藩主斉樹江戸発、日光廟に参詣し、それより引返し江戸通過、5月4日川崎泊り、6月17日熊本着(度譜・肥・本)。是月 美濃・伊勢地震(本)。勘定頭尾崎藤一足高50石増下さる(度譜)。町人寸志にて下置かるる扶持方、代替の節差上げ継等のことについて長岡山城留守居より問合せあり返答す(難稜)。
5. 23 宇土支藩中務少輔立政、帰国の途中野津原御茶屋に宿す(肥)。25 大目付長岡治部丞江戸より下着(本)。是月 5月8日より霖雨数十日降続き諸川満水(損)。
6. 6 清心院(細川治年実母)卒去(度譜・藩法 790)。17 大雨諸川満水、白川 1丈2尺、緑川 1丈5尺、高瀬川 1丈6尺、田畑 8,466町9反余砂入水浸洗崩塘 5,575ヶ所破損56,569間、寺 1ヶ所倒潰、家 7軒流失、倒家 108軒、溺死男女12人、牛馬 5疋、12月3日此の損害を幕府に届出づ(肥・本)。22 大浜町吉十郎より当年大風なしとの予言(覚)。是月 銀吹直しについての触(藩法 791)。小国宮原町富元を甲斐清三郎に命ず(寺例続)。宇土講 5ヶ年間停止(覚)。
7. 13 野津原会所にて質物歩入の取はからい特別に許可(覚合)。25 本山御殿近火の節大守出御の通筋についての達(藩法 790)。是月 新銀吹替(本)。
8. 19 前藩主白川筋にて漁撈見物のため網漁禁止区域の達(藩法 791)。23 切米取両先渡しの切手についての達(藩法 791)。是月 宇土・八代・下益城 3郡海辺に新地大干拓工事計画をすすむ(肥)。
9. 2 宇土支藩細川哲之丞(はじめ左膳、冬菊)歿す、年54(肥)(藩法 791は 3

- 日に死去の触)。15 去る文政元年妙見社警固のことより紛議起りしが、是日藩主上裁をもって、それぞれ示達せらる(肥)。是月 油値段高値につき菜種に増運上を命ず(覚合)。田浦手永浜村町焼失につき家建料の拝借を願出ず(覚)。
10. 5 妙見社事件の紛議につき、家老長岡監物は常引責辞職、なお大組は従来通り預置かる(本・度譜・藩法 791)。10 小田手永部田見村疫疾流行につき大筒打方差ゆるされ、傍士横目を派遣す(覚合)。15 目付安野形助を奉行本役に任ず(度譜・本)。17 家中増奉公人山行薪とり附荷など禁止の達(藩法 792)。是月 年内多忙のため武具見分を来年に延期(藩法 791)。
11. 7 祝能の節花畑表門参入の際の供連れの規定、これは少将拝任につき11月15日祝能興行のため(藩法 792・度譜)。9 奉行小山門喜江戸発、12月21日熊本着(本)。28 奉行副役横井太平鉄砲20挺頭に転ず(度譜・本)。是月 三郡新地700町築立成る(本)。
12. 3 藩主齊樹女篤姫、宇土支藩主細川中務少輔立政と縁組願、12月29日許可(本・度譜)。本年の損毛高も割増にて 232,322石余と届出す(肥・本)。17 日光御霊屋修復御用のため来年の参勤は特に7月中にすべきとの達(藩法 794・触)。是月 日光手伝寸志について町人影踏免ず(難稜)。河原、深川両手永諸木調査あり(林制 358)。北里手永年貢米の内 600石余、雪深にて人馬往来成りかねるにより来年2月まで蔵払い延仰付らる(合)。在国中の年頭礼はこれまで元日2日までに済ませていたのを、来年よりは以前の通り日数3日に仰付らる(触)。家中一統拝領米(本)。
- 是年 玉名郡部田見村に東開21町5反築立、費用 144貫目(潮害)。八代高島沖新開99町6反余築立、費用 700貫目、この新開は最初長岡山城着手のところ、度々破損し、其効なく本藩にて施工す(肥)。奉行本役服部太門に勝手向しらべ御用受込を命ず(度譜)。花田儀左衛門に賄所現改受込を命ず(度譜)。御帰国道中持金手薄につき 300両道中まで差越す(度譜)。在中人離のところ出小屋取立、郡代見遣のうち、まず布田手永倭山、内牧手永狩尾村掛に1軒宛ゆるす(覚)。横手手永筒口村忠七、出小屋において御免外の米穀など商いたすにつき、品々差上げ仰付らる(覚)。田浦手永日奈久町栄右衛門、同町問屋理吉申談じ、下問屋職いたし不埒の至りにつき、以来、右体の儀なきよう、此節問屋願新規につき叶いがたしとの達(覚)。銀所預現銭は差別なく通用のところ宇土・八代・芦北にて歩指取りおる様子につき吟味(覚)。小国宮原町綿屋又兵衛、日田栃木村元助より猪を買い、代銭相渡し、追て買戻しになるにより仕向方いたすよう達す(覚)。五町手永坪井村才吉紺屋職をやめたく、もっとも職札紛失につき鳥目3貫文の過料、また宇土町喜助も同断につき銀1枚の過料(覚)。郡代先触にて小川駅惣代同町別当兼帯高橋直三次御咎(覚)。長崎御屋代竹内五郎兵衛、文政元年郡方町方より年賦拝借仰付らるところ、去年より延納願ゆるさる(覚)。在中にて質屋・造酒屋一切の雑職、百姓はもちろん在御家人・寸志士席以上の面々たりとも不許可(覚)。野津原手永零落につき質物出入所取建願ゆるさる(覚)。本庄手永春竹村穢多に屑皮の他所売をゆるす(覚)。野尻手永矢津田村石礮出来竹田石工雇入る(覚)。中無田村出小屋甚八、綿打方を出願、不許可(覚)。五町手永船津村伊兵衛ツグロ焼酒煎方願、不許可(覚)。中山手永巢林村、松山手永高良村穢多とも皮旅出の節、熊本出雲屋武吉印形を受くること難渋につき、御

国用は圀置き、屑皮は勝手に輸出をゆるす、春竹村穢多は武吉より前銀受取居るにつき是までの通り(覚)。垣塚文兵衛列に旧例・記録類の集取を命ず(覚)。下国の上諸局の古書付ご覧につき頭書に仕立提出を求む(年覚)。松嶋勝平に天守方御用の弓の製作を命じ、五町・池田・田迎・正院・4手永藏内より6寸廻竹70本代錢上納にて渡す(年覚)。天守方御用の弓竹、布田手永にて伐方につき郡代へ達(年覚)。水俣手永袋村の内野方空地150町に樫仕立方(年覚)。産物方取計にて京都より弓師入国につき弓竹および側木の榿木の調査を命ず(年覚)。作事所御用の杉粉、元木見立のため屋根葺付棟梁、杣方役人を南郷・小国・久住へ派遣す(年覚)。天守方御用の弓竹、飽田・託摩・上下益城において剪方(年覚)。池田手永小嶋村政八白灰焼方願の通りゆるす(年覚)。鶴崎高田手永迫村庄右衛門、居屋敷添葺開明願をゆるす、右徳米はすべて鰥寡孤独備に加うる(年覚)。本山御殿、前藩主の住居となるにより火事の節本山村・本庄村・春竹村より罷出、消し方を命ず(年覚)。作事所御用の粉元木、野尻・菅尾山内より渡す(年覚)。内田手永村々御山空地等に植付けの郡方仕立楮は、半分は村方へ渡し、残り分は代錢上納(年覚)。池田手永方近村儀平次本山御用の白灰焼立を引続き願出るによりゆるす(年覚)。金吉寿平(金工)没年55(肥)。著書目録 居東見聞録 雑書 長瀬真幸。勸学譚 雑書 帆足長秋。秋のやまぶみ 歌文 中島広足。

文政4 (1821) 辛巳(家齊) 齊樹

1. 7 鎌倉八幡宮炎上(本)。是月 熊本城石垣手入届済(本)。
2. 5 油値段高値につき去6、7月の撫双場にして上種子1俵錢37匁を限り(覚合)。是月 出京町長左衛門両替商売につき、現錢の渡下を願出ず(覚)。
3. 一 米銀方金銀錢は手伝御用金ならびに新地築立支出3,720貫目、その他臨時の支出も多く郡方預振出2,200貫目のところ、わずか150貫目の備しかないため、右備出来るまでいささかたりとも斟酌仰付けられたく伺いにつき、伺いの通り仰付らる(覚)。
4. 7 中老藏内藏允を家老に任じ、備頭三淵永次郎を中老に任ず(本・藩法794)。
9 阿蘇山鳴動、天地砕くような音す(肥)。目付永田内藏次を奉行副役に任ず(度譜・本)。10 陽七郎江戸にて死去(藩法795)。是月 灰吹銀、潰銀の銀座以外での売買ならびに銀道具製造を禁ず(藩法795)。
5. 8 魚類、浜浦にての直買、途中にての抜買いたす者ある由、問屋への直送を達す(覚合)。19 是日より27日迄大雨、諸川満水、田畑3,151町余砂入浸水、塘1,420ヶ所破損28,881間、家13軒倒潰、溺死男女2人(肥)。28 奉行副役林平格退任す(肥)。「本」には8月。是月 境野丈之助を奉行副役に任ず(本)。新金銀吹替につき古金銀引替の触(藩法795)。御先箱願済(度譜・本)。
6. 4 両御銀所および榿方現錢引替不正のとりくみに対する咎の達(藩法795)。
15 山鹿湯町旅人宿久八、自宅へ奥州仙台国分町正兵衛を30日滞留させ、紙たばこ入細工習いたきよし、願出ず(覚合・覚)。是月 大浜町吉十郎、当年大風吹かざる見込の書付を達す(覚合)。
7. 28 痢疾流行につき藤崎宮への祈祷の触(藩法796)。是月 前藩主湯治願継(度譜・本)。オランダ船入津、將軍家へ駱駝2疋献上(本)。歩入預寸志にて在支配の者の進席拝領方の規矩を定む(難稜)。銀子高値につき銀上納品々、以来

5割増をもって代錢上納願叶がたし (合)。

8. 4 畿内地方大雨洪水 (本)。29 奉行本役の場合喜太郎退任 (本)。是月 志水藤七奉行上座に任ず (本)。古金銀新金銀引替えについて江戸詰、大坂詰勘定頭より申来ることあり (覚)。
9. 3 藩主留守中の城代を長岡内膳に命ず (藩法 796)。13 藩主齊樹熊本発、10月20日江戸着、11月1日参勤登城 (本・実紀・度譜・藩法796)。14 家老有吉織部立生熊本発上府 (本)。是月 本倉手永東水越村宇右衛門、清八に炭焼札許可、運上銀6匁宛 (年合)。
10. 7 狩猟の面々耕作の障に成らざるよう達 (藩法 796)。17 前藩主八代城入城 (肥)。是月 飽田・託摩・玉名郡代は1人宛のところ以後2人宛と定む (覚合・肥)。前藩主日奈久に入湯す、此の途中12・13の両日にわたり百町新地および築立中の七百町新地見分 (肥)。諸郡穢多ども年貢払のこと (合)。藩主在府中の新知家督加増その他役付の者御札について達 (触)。
11. 9 書家矢野良勝歿す、年62 (肥)。17 銀所黄色預り偽物はこれまで引替認ざるところ、今後は文字を改刪しあるものにかぎり引替ゆるすこととす (肥)。25 本年1月29日より八代・宇土・下益城3郡海辺新地着手のところ、是日潮留工事完成す。畝 740町5反、総費用 5,456貫 900目 (イ。5107貫目余) 総入夫 108,706人、世にこれを七百町開と称す (度譜・熊本史学24・肥・本)。是月 郡代附横目10人を新たに置き、専ら御免方に関する事務に当らしむ (肥)。銭吹方先年差止めのところ再開の触 (藩法 797)。
12. 6 佐藤五郎左衛門殿、困艱見分にて熊本止宿 (度譜・本)。27 大目付清水縫殿家老代として上府のところ是日江戸より下着 (本)。是月 産物会所を廃止 (本)。白塩硝の他所出差止 (壁書)。

是年 江戸石小田新田買上げらる (本・度譜)。辛嶋才蔵 (塩井) を時習館教授に任ず (肥)。夏、風水損・旱魃にて損毛高 191,710石余 (肥)。勘定頭渡辺直右衛門に七百町新地御用掛を命ず (度譜)。石原新助列の者死刑 (度譜)。永嶺仁右衛門、孤山遺稿彫刻につき上下一具拝領 (度譜)。算用所物書江戸詰旧復、所々横目兼帯の儀につき達 (度譜)。御台所集金 750両 (度譜)。勘定所僉議、身分取扱など関係ないことまで取調べ申さざるよう達 (度譜)。勘定頭尾崎藤一 8月2日発坂 12月5日帰着 (度譜)。安田嘉兵衛、非常儉約厚配につき小袖拝領 (度譜)。教悦支配慶助列鶴拾取差上 (覚)。油値段高値につき菜種値段究、かつ在中~~ヲ~~油在中売出ゆるさるにつき他国の油抜入の取計いをいたさざるよう達 (覚)。山鹿新町祐八禁制の革提類密入につき僉議、刑法方へ差廻す、隈庄町米八右同断につき、品物差上させる (覚)。日田陣屋蔵屋敷手狭につき、拡張方を問合す (覚)。筑前姪ノ浜商人の在中にて鎌商売を禁ず、かつ鶴崎鎌の無札にて在中で商売も右同様 (覚)。荒尾手永長洲町馬場林助家代、旅人宿願 (覚)。在中より仕出の穀類町家の者途中にて出費いたすこと差留のところ、願により寛政3年の達を再触す (覚)。郡代勤方の儀について達 (覚)。坂下手永小浜村百々次無札にて菓子売買いたし、火盗物頭に見とがめられた際、偽を申出るにつき品物没収、郡代限り相当の咎を申付るよう達す (覚)。久住町十作等3人他所古手類買入願ゆるさる (覚)。坂下手永滑石村問屋藤吉、嶋原表へなお5ヶ年間輸出ゆるさる (覚)。菜麦歩通のこと (覚)。魚類売ならびに抜買いたさざるよう達置くところ

五丁宇土浜浦にて心得違の者ある由、問屋へ達（覚）。菜種子津出の儀につき達（覚）。菜種子値段究仰付らるるところ疑惑の筋あり、売出し申しさる由について、なお僉議に及び指高の四分の一国用分として売出し、残分は勝手津出しをゆるす（覚）。三郡新地出来につき八代高田手永古麓村の者ども新屋敷ならびに在蔵床替願出ず、在蔵床は潰方仰付られ新屋敷はゆるさる（年覚）。松嶋両助・同勝平へ国産竹仕立を命じ山藪より竹木代錢上納にて渡下さる（年覚）。小国宮原町杓油仕立につき拝借錢櫃方より1ヶ月7朱の利子にして当年より上納命ぜらる（年覚）。桐仕立方の儀につき玉名山支配役より達あり（年覚）。八代郡高田手永山鹿町井桶広め方作事あり、惣入目内三分の一郡方、三分の二本方、山城より七歩三の割合にて渡下さる（年覚）。矢部挽物師3人御用にて熊本滞在中在方人別公役免除を台所方より申請、かないがたし（年覚）。進上御用の白島石手水鉢積廻引船の運賃を願により渡下す（年覚）。芦北平生・計石両村の開井桶など損所手入願ゆるさる（年覚）。作事所御用の杉粉元木見立につき達（年覚）。

著書目録 東肥玉さく理 博物 安東貞。野坂のうらつと 歌文 中島広足。

文政 5 (1822) 壬午 (家齊) 齊樹

1. 23 篤姫、宇土支藩主細川中務少輔との婚姻を幕府より許可されるの触（藩法 796）。30 薩摩鹿児島 5,000軒余焼失（本）。是月 民力強めならびに水前寺竈締所御用のため寸志として3代分の上納高一度に差出すものは3代相続を差許す旨内達せらる（肥）。
- 閏1. 16 19日まで奥蝦夷地大地震（本）。23 公義よりの道中心得の写、各支配方への触（藩法 798）。是月 新銭吹替増の触（本・度譜）。櫃方裏櫓石垣出来、6月下旬成就（肥）。寸志のことについて川尻町奉行より問合せあり（難稜）。
3. 1 大目付長岡治部丞家老代として熊本発上府（本）。8 錦絵商売を禁ず（覚合・覚）。28 町在の者無届にて長崎に逗留し唐物抜荷する者あり、これにつき明和8年の達を再達す（覚合・覚）。
4. 1 八代御堀凌方、当5～6月中に完了すべし（年覚）。10 商売禁止の品目を列举す（覚合）。19 藩主齊樹就封の暇、馬を賜わる（実紀）。旅行について公義触（藩法 802）。22 宇土支藩主立政江戸発、5月22日鶴崎着、下国（肥）。24 藩主齊樹江戸発、5月24日鶴崎着、5月28日熊本着（度譜・肥・本・藩法802）。27 儉約のため五ケ年間取締を命ず（度譜・本）。是月 美濃路旅行許可が必要との達（本）。宇土郡松山手永小曾部・両松山・善道寺・古保里新堤、井手堀あり、夫数 161,316人、費用42貫 300目（肥）。宇土郡網田皿山焼献上品中止となり産物受込方引受とす（肥・覚）。江戸右大将3月1日より内府様と称する旨の触（藩法 797）。
5. 21 在中法度筋ならびに人倫の道教論書郡代へ渡る、これより惣庄屋は毎年正月村々を巡回これを読み聞かせ、庄屋は春秋の彼岸に村民に読み聞かせ、頭百姓・五長・手習師匠もその趣旨の普及につとめしむ（覚合・肥）。29 家老有吉織部江戸より下着（本）。是月 宮部斧蔵を手打（本）。借銀についての公義触（藩法 802）。庄屋代を庄屋当分と改む（城南史 465）。
6. 4 作事所材木蔵雷火にあう（度譜・肥・本）。25 大浜町吉十郎より当年大風吹く見込みなしとの達あり（覚合）。29 江戸道中荷物賃目に関する規定の達（藩法 803）。是月 家中抱の地筒より寸志は召上られず（難稜）。川尻御出御用

の家具類寸志に召上られず (難稜)。

7. 一 是月より8月まで旱天 (肥)。土居大炊頭卒去 (本)。
8. 11 是日より祇園宮にて雨乞祈祷 (肥)。28 前藩主来春帰府、来秋帰熊との触 (藩法 803)。
9. 24 鹿子木量平の七百町、四百町、百町新地築造にあたるや、常に清正公に祈念するところありしをもって、竣工により公の霊を勧請することとし、9月22日神輿本妙寺発、是日貝洲に鎮座す (今の加藤神社これなり) (肥)。是月 一門名代御断につき書付あり (度譜・本)。在中寺社間数改帳文政 6 年 3 月までに提出方を郡代中に達す (寺例説)。
10. 5 古金銀通用停止および引替について達 (藩法 804)。12 玉名郡大浜町 191 軒焼失 (肥)。21 賄所桐油方焼く (度譜・肥・本)。25 家中・寺社の家来在中居住禁止、および家中立山についての達 (藩法 804)。是月 浄土寺列より町在へ渡の教諭書を説法席にて普及せしむべき建議あり、叶がたし (寺雑附)。
11. 27 前藩主、有吉織部宅に赴く (本・度譜)。28 手永見締は容易に置くべからず (覚合)。
12. 3 臼杵領市尾村と関手永木田村との境論争 (覚合・覚)。9 在中抜米についての取扱方を問合す (覚合)。締方過料など申談決す、本人15日程、庄屋 1 貫文、頭百姓・村横目 500文、五人組 300文 (覚合)。14 在中教諭の儀、宇土・芦北・鶴崎 3 ケ町は 5 ケ町に准ずる所柄につき、郡一統の達振にては主意違の箇条もあり伺 (覚合)。20 傍示外の鉄炮猟の禁止ならびに危険防止についての達 (藩法 804)。27 阿蘇郡内牧町56軒焼失、外に惣庄屋客屋 2 軒焼く (肥)。28 家中の者およびその子女の歌舞伎見物取締の達 (藩法 804)。是月 中小姓および阿蘇組の 2 男末子の席次を定む (本)。高瀬川浅くなり通船難渋につき、浚方の法をたつ (肥)。牛深沖にて唐船難船 (本)。拝領米、文政 2 年に同じ (触・本・度譜)。篤姫縁組 (本)。杉水村建山坪付見図帳作成さる (林制 373)。

是年 在中心得の儀、毎月申渡10ヶ条控のこと (覚)。本藩惣人口届出ず、惣人員 577,788人、男子 298,217人、女子 279,571人 (肥)。当秋損毛高 168,435石 (肥)。在御家人家族人数放余議一件 (覚)。他国物産の内御国入をみとめられたばあいでも、上品など入れざるよう達す (覚)。小物成方御手船若吉丸へ御出方 (覚)。種山手永大野村次平に白灰焼方ゆるす (年覚)。荒尾手永長須村小物成方年貢塩去己年分の小切手流失につき再発行す (年覚)。杉島手永築地村用平、薮開、野開畝と打替畝願出ず、かようの畝方救恤備に仰付らる段決め達す (年覚)。久住町当暮上納分、他国銀双場をもって上納願出ず、叶がたし (年覚)。荒尾手永長洲町茂吉他所蠟燭を取扱、他所物と知らざるにつき郡代限相当の締方 (年覚)。大津手永上大津町、文政 2 年 5 月火災にあい、跡家取立のため拝借していた分の返納延期を願出ず (覚)。河尻大渡町非常の火災家建料拝借返納難渋につき富講許可を願出ず (覚)。内牧町も拝借返納願出ず (覚)。正月、12月23日夜 9 時より翌寅 6 時まで例年酒禁のところ当年より解禁 (覚)。託摩両手永田方養水不用につき井手口に築留らる段用人へ問合 (覚)。坪井・竹迫・段山 3 ケ村は郡代権限で瓦葺をゆるす (覚)。**著書目録** 志水隼太封事 法制 志水隼太。藩臣閥閥録草稿 史伝 辛島塩井。程門静坐集説 儒家 松崎謙堂。

1. 9 先祖武功ある者の服装に関する達 (藩法 806)。10 白金屋敷出火 (本)。11 祖先武功の者の子孫に以後毎年具足鏡餅を与う (度譜・肥・本)。29 前藩主斉茲の思召をもって赦あり (肥・藩法 806)。是月 大津手永平川村松井氏建山藪調査あり (林制389)。郡代附横目 1 人宛のところ 2 人宛に増員 (覚合)。
2. 3 城内竹ノ丸通抜禁止の達 (藩法 807)。14 本山において前藩主女出生 (本・度譜・藩法 807)。20 日考姫と命名 (藩法 807)。22 考姫を藩主斉樹の養女とするの触 (藩法 807)。25 民之助、千三郎と改名の触 (藩法 807)。是月 海辺以外の手永にも自己の費用にて新開仕立を許す (肥)。宗論の儀につき寺社方見込を達す (寺雑附)。
3. 19 一条関白辞職 (本)。27 藩主斉樹熊本発、5 月 6 日江戸着、5 月 15 日参勤登城 (度譜・実紀・肥)。28 中老小笠原美濃、奉行境野丈之助出府 (本)。是月 前藩主帰府延引、12 月 3 日湯治願継続 (度譜・本)。元奉行松村英記・郡目付杉浦仁一郎を勘定所目付に任ず (度譜)。宇土様難渋につき御本方引受 (本)。志水藤七家老間近く相詰、12 月組外同列 (本)。60 年勤勞についての待遇なり (度譜)。在中男女によらず百姓不似合の遊芸禁止 (覚合)。
4. 21 阿蘇郡内牧大火、先の焼残りすべて焼失 (度譜・肥・本)。江戸城西丸において松平外記、相番 3 人を切殺し自害 (本)。25 衛藤蟠谷 (画家) 歿、年 63 (先哲)。是月 山繁茂取締支配役を増員す (本)。在中衣服など違犯者に対する咎筋について (覚合)。他領金銀高値のとき熊本などより金銀を持行き利潤を得ることなきよう達す (覚合)。
5. 15 家中への塩渡し少く難渋のところ八代新地内塩浜より年貢塩上納、渡し量倍加の達 (藩法 808)。是月 是月より 6 月まで旱魃、諸所祈祷あり、6 月 19 日健軍雨宮神幸、6 月 23 日鐘が洩にて藤崎宮寺社中雨乞 (肥)。
6. 21 大目付長岡治部丞家老代として上府のところ是日下着 (肥)。25 当秋氣候不順について前藩主の帰府を延期するとの触 (藩法 808)。是月 塩倍渡しに関して達あり (藩法 808)。郡目付中村庄右衛門に山林水理の事を命ず (肥)。町在の者俗人にて琵琶を弾ずるをゆるす (覚合)。
7. 13 藪内蔵允足高の内 200 石地面 (本)。19 元奉行上月半下歿す (先哲)。是月 石州銭の由にて古銭に取交え、密々町在にて流布するところもあり、吟味 (覚合)。産物会所を櫛方産物受込方と改称 (難稜) (「肥」は文政 4 年 12 月産物会所廃止、天保元年産物方起るとする)。
8. 一 杉島手永水引のため、廻江川尻堀替あり (肥)。吉田家附属の社人他家の執奏にて官位叙任なきよう達す (寺例続・寺雑附)。衣服制度につき、家来中心得方については寛政 3 年達の通、今度郡中衣服制度・調度取締など命ず (寺雑附)。
9. 21 家中の面々地子内作年貢取立について達す (藩法 808)。是月 阿蘇菊池深葉山の管理につき達 (林制 390)。
10. 15 家中長屋住の者在人数の内、病身不具の者出商売は許さるも居商売は禁止 (藩法 809)。21 前藩主、長岡山城督之の別荘に入る (本)。27 宇土百貫目講再興 (度譜・肥)。是月 宇土八代鷹場境定む (本)。山崎本記、手討仕損じ出奔す (本)。関手永木田村と臼杵領境論争解決し、彼方より音物来るにつき伺う、受けるよう達す (覚合)。
11. 1 宇土支藩主中務少輔立政参勤 (実紀)。是月 奉行小山 100 石加増、安野同

文政7 (1824)

断(本)。高田手永無札村山藪改行わる(林制 424)。郡中一統に関することはもちろん山川に関する事など達筋は郡目付へも連絡するよう郡代へ通達す(覚合)。

12. 2 彗星卯辰の間に出現(本)。19 楯岡七左衛門を奉行に任ず(度譜・本)。22 白金屋敷近火(本)。23 本年5ヶ年儉約終了、なお5ヶ年延長の触(藩法 809)。是月 奉行妹尾寛太退任(本)。松村英記本山御殿を二ノ丸へ引直し御用掛(度譜)。

是年 松村御心附 520f 願により召上げらる(度譜)。玉名郡横島村三番開新地5町2反、同郡大浜にて一夜開7町2反余築立(肥)。当秋損毛高 206,240石余(肥)。松村・杉浦八代新地御用掛(度譜)。松村・杉浦宇土勝手向御用掛。杉浦を江戸・大坂へ派遣す(度譜)。寄姫の御用金月々20両宛(度譜)。勘定所目付の心附以前の通30石(度譜)。侍の子弟病死などの節相達すよう(度譜)。田浦手永井無田村海辺干出、3歩新屋敷ゆるされ反に1斗3升宛救恤備とす(年覚)。大津手永瀬田村大津幸助所持の赦免建山、山畝に指加え、開明救恤備に仰付おかるるところ、開明申さず、猶5ヶ年の延期願ゆるす(年覚)。河原手永原村の内目鑑橋完成(年覚)。鶴崎高田手永国宗村内の空地を開明救恤備とするをゆるす(年覚)。佐敷肆修場焼失、再建について(年覚)。矢部手永金内村新屋敷願、空地分は受藪代米の見合をもって定米畝物上納し救恤備とす(年覚)。矢部手永目丸村利左衛門、御用頼相納るにより矢部・砥用山に少なくなったため、高田・中山両手永より渡下さるとの達(年覚)。近年旅人在中にて直売買する者あるにより、旅人参着の節そのようなことのなきよう問屋より申聞すべし(覚)。大坂鮎屋庄七・平野屋市兵衛、国産皮の買方許可を願出ず、ゆるさず(覚)。矢部に各別見絡役を置く(城南史499)。在中塩浜に雇入れの者その他、他所者が府中へ罷出、通行するばあい惣庄屋が印鑑札を渡すよう(覚)。岡領の者4~5人逃散、久住の村庄屋より内々引渡すにより謝礼来る、受けるよう達(覚)。河江手永久見村出小屋へ揚酒本手願、新規につき叶がたし(覚)。他所にて出来の役引等国入を差留(覚)。問屋願の儀は新規のほか、株譲の分は以来郡代限申付名前だけ達するよう(覚)。他所のごめん下駄など月限をもって商売許可の達(覚)。長崎盗賊方手付同所使杉山為五郎より、小嶋問屋丈助へ願置の砂糖代仕向の儀、掛合来るにつき吟味し返答す(覚)。著書目録 ふなちのなやみ 歌文 中島広足。蠹糧雜識 史伝 大石真麿。

文政7 (1824) 甲申(家齊) 齊樹

2. 9 阿蘇深葉山内にて各村に薪の採取をゆるす(林制 425)。15 松村英記作事頭兼勤(度譜)。20 新吹南鐮通用始(本)。22 飽田郡小島町58軒焼失(肥)。27 前藩主息女政所薨去(度譜・本)。増上寺火の番(度譜・本)。是月 大津手永山松虫駆除の御札を下す、正福寺に祈祷を依頼(林制 427)。浄土真宗一派の僧侶の内、騎馬佩刀にて国内を徘徊する者あり、注意す(寺雜附)。
3. 19 前藩主保養のため、本山御殿を古京町へ引直すの触(藩法 810・触)。23 家老藪内蔵允政純熊本発上府、途中発病して4月7日播磨明石にて病死66才(本・先哲・度譜)。27 知行取・切米取屋敷坪数に関して規定す(藩法 810)。是月 東本願寺焼失について末派の寺々門徒へ奉賀のことは先年達のごとく心得るよう触(寺雜附)。

4. 5 熊本府内質屋の例により在中にても衣類1歩6厘、道具類2歩と定め励行せしむ(肥)。元家老堀勝文歿す、82才(先哲)。
5. 15 藩主齊樹江戸発、6月11日鶴崎着、6月17日熊本着(度譜・藩法 811・肥・本)。19 二朱判引替ならびに古金銀通用につき江戸よりの触(藩法 811)。
6. 6 古京町長岡内膳屋敷に昨冬来建築中の二の丸新屋形竣工し、是日前藩主引越、本山旧屋形は解体し内膳宅は牧崎に引越すこととなる(度譜・触・肥・本)。19 大目付長岡治部丞家老代として熊本発上府(本)。26 是日より28日まで強風雨、大木折れ、家根、垣根破損す、白川1丈2尺余出水(肥)。27 寄り付の祈祷執行停止の達(藩法 812・寺雑附・寺例続)。是月 行倒又は不慮死などは以来郡代限り仮埋し、その後報告させることとす(覚合)。
7. 8 薩摩宝島にて異国船と紛争(本)。13 一朱の歩判金新規吹立につき古金銀との交換に関する達(藩法 812・覚)。
8. 15 阿蘇郡内牧にては去る3月21日も23戸焼失せしに是日大火あり、331軒焼く(肥)。諸郡野山火振り方につき達(林制 428)。17 一朱の歩判金新規吹立、古金銀との交換に関し再び達(藩法 813)。24 小林佐七左衛門自殺につき妻不審、水拷問にも白状なく翌年死す(本)。是月 諸宗僧侶先蹤なき官階叶がたき旨寺院一統に達す(寺例続・寺雑附)。西本願寺 3,000人講組立になるも当地にては先年停止の達あり(寺雑附)。教悦支配の者吟味筋は小前同様との達(肥後藩後期法令集)。

- 閏8. 1 新田支藩主采女正養子邦衛登城初見(実紀)。10 前藩主齊茲、是日より12日まで八代方面新地御覧あり、鏡町宿泊(肥)。25 小笠原美濃江戸より下着(本)。是月 豊後の幕府領より野焼につき申入(林制 432)。町人所払刑の者、落着先にて生産に基くよう村役人世話せよ(市雑坤 107)。僧官昇進は僧侶の功德にて本山よりの沙汰にて昇進は別とし、自身の望による先例なき昇進はなりがたし、又本山の沙汰による場合も国法に障あるやもしれず前もって照会方を東西本願寺に申入れる(寺例続)。
9. 10 小野繁右衛門、足輕を手討(本)。11 中老小笠原美濃を家老に、備頭平野九郎右衛門を中老に任ず(度譜・藩法 813・本)。16 諸寺墓地手狭のため古墓あばかぬよう、宗旨に関係なく合同墓地4ヶ所に埋葬のこと(藩法 813)。27 非常の儉約触あり(肥・度譜)。30 国中医者再春館に名簿を届け日夜医学に専心のこと(藩法 814)。是月 府中近辺の野葬地を、五町手永室園村立田山、横手手永万日山、五町手永古閑村尼子の塔、池田手永富尾村富尾山内と定む(肥)。手取米増、熊本居知行取、役付 500石以上高 100石に17石手取、無役16石手取在宅無役15.5石手取、熊本居 100石取役付27石手取、在宅役付 26.5石手取、無役26.5石手取、在宅無役26石手取、切米取10石高に5石宛、中小姓は5斗増(触・度譜・本)。「藩法 814」は10月11日とす。
 10. 一 山伏、六部など烏乱駁の者の村々への入込を禁ず(覚合)。
 11. 1 至貧の者へ救金支給(本)。9 奉行本役小山門喜を中着座同列とし足高 100石増(度譜)。「本」は11日とす。是月 江戸外山屋敷出火につき伺(度譜)。久住歩入所はこれまで小物成方扱のところ勘定所付となる(肥)。奉行副役永田内蔵次出府(本)。士席浪人格は留守居中小姓の次に取扱、その子弟は一代中小姓の子弟に准ず(覚合)。寺社支配無苗の者を家来とすること禁ず(藩法 814)。

文政 8 (1825)

12. 15 熊本城下積雪 1 尺 7.8 寸、吹寄のところ 3 尺余 (肥)。20 奉行本役服部太門を上着座同列とし足高 200 石増、勘定所目付杉浦仁一郎を奉行副役に任ず (本・度譜)。27 前藩主より目付などへ内々金 (度譜)。28 奉行本役志水藤七の直隠居をゆるす (度譜・本)。是月 新地絵図出来 池辺長十郎測量、惣坪数 4390 町 6 反 (肥)。鶴崎関手永に郡簡 30 人仕立を命ず (肥)。熊本町影踏御免の者向後父母も御免 (市雜坤 109)。公義測量方役人通行につき領内里程達 (年合)。願濟まざる内の出家は元のごとく引戻、寺院にも咎 (寺雜附)。真宗寺の弟子入禁ず (寺雜附)。竹田表へ熊本町その他の商人共銀持越、岡札余計に入込む由、取締を嚴重にするよう達 (覚合)。

是年 当秋損毛高 158,013 石余 (肥)。諸僉議滞らざるようとの趣書付 (度譜)。勘定所目付松村英記・杉浦仁一郎・勘定頭尾崎藤一、諸向取締筋御用掛 (度譜)。尾崎、大塚大坂詰受込のところ尾崎はご免 (度譜)。郡代間封金 305 両 1 歩封方 (度譜)。瀬戸口繁助大坂詰頭代新古金銀引替内密御用掛 (度譜)。僉議延引に付松村・永嶺・杉浦・下林差控 2～3 日 (度譜)。中村手永山内村幸助居屋敷畔空地無願開明につき、徳米一同上納仰付らる、右徳米は救恤備に差加える (年覚)。矢部手永目丸村椿原にて銀山試堀をゆるす (年覚)。内牧町度々出火につき家造り質素にするよう (年覚)。物頭支配在宅の面々への穏便触、以来惣庄屋より通達するよう (年覚)。河原手永五斗橋を目鑑橋に懸直し (年覚)。大津御蔵詰横目定詰指止められ交替制とす (年覚)。山支配役増人仰付らる (年覚)。御花畑下通り追廻田端御取入相成一件 (年覚)。池田手永牧崎村本妙寺への縄手広め方仰付らる (年覚)。教悦支配茂平、3 才になる孤兒の娘を厚く介抱せしにより鳥目 1 貫文渡下す (覚)。荒地改方のことにつき安永以来の達の写をもって猶達のこと (土管)。著書目録 潜溪先生遺事 史伝 佐藤敬助。桧垣嫗家集補註 歌文中島広足。

文政 8 (1825) 乙酉 (家斉) 齊樹

1. 4 藩主登城後、時習館講書始に臨む (肥)。15 長六橋普請始、4 月 17 日竣工 (肥)。是月 内牧手永にて山藪改あり (林制 436)。宇土家中旧家調を行ない禄制を改める、丹後以来 8 人、豊前以来 24 人、八代以来 25 人、宇土入部以来元禄 3 年までに召出されたる家 49 人 (宇土史 109)。
2. 15 幕府、異国船打払令 (実紀・本)。27 西丸様御誕生、御男子様 (本)。是月 宇土郡松山手永立岡新堤堀添え (肥)。芦北郡加賀俣山金銀銅試堀 (肥)。加勢川工事縄張り始 (川尻史 292)。
3. 3 中老三瀨永次郎退任 (肥・本・度譜)。5 奉行境野丈之助江戸より下着 (本)。15 溝口藏人中老に転じ、境野丈之助小姓頭へ転任 (本)。21 元奉行町孫平太歿す (先哲)。是月 小国黒川にて明礬仕立 (肥)。惣庄屋は 10 日以上の旅行不許可 (合覚)。
4. 8 陣橋より牧崎村迄桜切倒犯人ととりしまりを在御家人及村方へ申付 (藩法 816)。是月 寺社、宝暦の改に申告なき新規の半鏡禁止 (寺雜附)。
5. 22 飛脚問屋指定、出立日、料金等も定む (肥)。30 賄物所の塩節約令 (藩法 817)。是月 御手船神法丸新たに造替に付、拝借願 (覚)。寸志それ迄 $\frac{1}{2}$ 郡代間の引除のところ今後 $\frac{1}{2}$ 郡方貯えとす (覚)。
6. — イスパニア王位継承戦の風聞あり (本)。惣庄屋・山支配役などの採用につ

き達 (林制 439・合覚)。湯浦惣庄屋伊藤丑助40余年勤続の上辞任、心附銭 5 貫目 (合覚)。

7. 20 細川雅之進誕生 (本)。是月 熊本各町竈数書上げ、家老宛 (市雜坤 108)。先祖上り開拝領の者達について徳米所務について達 (触)。八代蘭表長崎への運送賃、鏡町浜田幾平より大無田表運上43匁6分余上納にて津出御免滞分償上納 (覚)。
8. 7 竹迫手永御山松虫退治のため熊本正福寺祈祷札50枚つかわす (林制 445)。13 強風雨被害、浸水田畑2,371丁、流失倒潰 347軒 (肥)。22 浜町様本妙寺参詣 (肥)。27 植木往還筋は杉並木、川尻往還筋は桑並木とす (年覚)。是月 深葉山御仕立についての費用概算計上 (林制 442)。歩入鯨油、米村儀八より見上願 (覚)。砥用山にて推茸仕立 (肥)。上旬より9月下旬まで箒星出る (肥)。東海道諸河洪水 (本)。
9. 24 有吉織部、熊本発上府、11月27日江戸着 (本)。25 藩主熊本発、途中病氣12月2日江戸着 (本・肥・度譜)。是月 沢村宇右衛門、新地築造の功により刀拝領 (本)。地引合、地押調を命ず (肥)。オランダ、ロシア等の目印旗御渡 (本)。サフラン値段、水前寺蟻ノ所見合を以て懸目 1 分 4 匁究 (覚)。
10. 12 大矢御山茸仕立に豊後佐伯の者来る (林制 447)。29 屋敷過坪、知行取は100坪以上、中小姓は70坪以上の過坪は地子上納、歩使番以下の過坪も地子上納とす (触・藩法 817)。是月 浜町様御用向念を入れる様達 (本・度譜)。戸川内蔵助様屋敷買上 (本・度譜)。
11. 一 700町新地へ新蔵建つ (肥)。年貢米抜売は15日扨方のところ 3 日、開米抜売は村役人組合共 500文過料のところ村役人は叱にそれぞれ軽減 (合覚)。
12. 2 高麗門禪定寺出火 (肥)。7 藩主痘瘡発病 (肥・藩法 817)。15日幕府より慰問 (実紀)。25日藤崎宮で祈祷、27日容態軽からず (肥・度譜)。26 増上寺火の御番 (本・度譜)。是月 小国宮原町に歩入所取建 (合覚)。是頃寸志献上者の取扱方究 (肥)。

是年 川尻・矢部・菊池水理起る (本・度譜)。当秋損毛 206,300余石 (肥)。是冬寒気強く柑類、茶樹枯損明年茶価騰貴 (肥)。1 朱判年貢諸上納差支えぬ様触 (度譜)。親類等の件での差扣伺10才以下は不要 (度譜)。砥用手永で駒生産、胤馬下賜 (年覚)。同惣庄屋内田大左衛門、用人よりの達により産馬駒子仕立ならびに駒子買上御用受込 (年覚)。黒石水足五郎兵衛仕立の諸木苗を本庄手永春竹村花屋共に仕立さす (年覚)。横手手永在牢新規建方は不許可 (年覚)。浜浦魚類直売及び途中抜売等禁止 (覚)。矢部手永入佐村宇左衛門養老米下さる (覚)。矢部手永下大川村の穢多弥助祖母養老米下さる (覚)。

文政 9 (1826) 丙戌 (家齊) 齊樹・齊護

1. 10 藩主重病に付、浜町様より赦仰出さる (本)。元奉行志水藤七歿す、73才 (先哲)。11 家老小笠原美濃熊本発東上 (本)。御酒湯、家中惣代御使者西浦九兵衛早打出立 (本)。12 奉行楯岡七左衛門東上 (本)。14 藩主病につき左義長はやし中止 (本)。15 江戸留守居中川唯之允着熊、一橋家より養子相続の内諭を伝う。一藩動揺 (先哲)。18 奉行副役杉浦仁一郎早打にて東上 (先哲)。中老溝口藏人東上 (本)。25 川尻町影踏帳面を提出 (川尻史172)。26 一橋家よりの件中止となる (先哲)。是月 米価高騰に付歩入米の処理について伺、双場維

持を命ず (覚)。唐船遠州浦漂流 (本)。

2. 12 藩主齊樹歿す (度譜・藩法 819)。(「肥」は2日とす)。29 齊樹、宇土支藩主に家督相続させたき旨幕府に願出 (肥) (藩法 820は22日とす)。是月 古金銀引替御触写 (覚)。日奈久の銀糸石、沼山津の亀文石、献上品となり留石とす (肥) (「年覚」には銀子石とあり)。
3. 9 知行取扶持方、知行所外の津端蔵納村方より受取を来年8月より禁止 (藩法 821)。29 幕府、宇土支藩主中務少輔立政を本家相続さす (肥・本)。是月 川尻町奉行不破敬次郎、町民に触などの徹底化をはかる (川尻史 134)。川尻警備についての手配書を町方より差出す (川尻史 229)。お国居住願の者は本所へ身元問合せるべし (寺雜附)。
4. 1 遊行上人熊本入込 (肥・度譜)。4 細川熊之丞之寿、宇土支藩相続 (実紀・肥)。細川熊之丞 (行芬) 兄細川立政の跡式相続、同年10月入部 (宇土史 110)。13 遊行上人、川尻通過について触あり (川尻史 470)。15 家老代、郡九郎太郎熊本発上府 (本)。18 中務少輔立政、越中守と改称 (本・肥)。(「実紀」は5月9日とす)。28 中老平野九郎右衛門退任、朽木内匠昭久後任 (本・度譜・藩法 823)。是月 上総国群盜蜂起 (本)。町在鑄物師に職札渡し (肥・覚)。
5. 7 山鹿湯町火事 (肥)。同 140余竈焼失、会所用錢より拝借認む (年覚)。9 細川立政、従四位下侍從叙任、齊護と改称、6月3日お花畑にて祝 (本・度譜)。家中塩渡不足、お買上を以て渡下さる。惣並渡しは当夏より割賦塩は10月以降1俵5匁5分上納 (藩法 823)。11 齊樹遺髪等着熊 (本)。15 細川齊護、就封のいとま (実紀)。21 前日より大雨、高瀬川、球磨川出水 (肥)。25 細川齊護江戸発、6月27日熊本着 (本・肥・度譜)。是月 塩代上納5匁5分宛 (度譜)。米価高騰、相場厳守を命ず (肥)。是頃疫病流行 (肥)。
6. 4 口宣項戴の使者松山形馬着 (本)。22 家老代長岡治部丞熊本下着 (本)。27 長岡図書熊本発上府、11月9日熊本下着 (本)。是月 池田・横手・錢塘海辺に浜町様開新地築立 (肥)。高森歩入所建つ (肥)。同久住出会所の附属とす (合覚)。内牧地方に天草などから92人の移住入植を認む (肥・合覚)。雲州・予州洪水、東国大旱、江戸地震 (本)。將軍家代替にて仰渡あり (度譜)。就 (ナル) 君様、就 (ナリ) 君様と改称 (度譜)。
7. 13 垣塚文兵衛 (官職制度考の著者) 歿 (先哲)。18 西御丸にて暉姫誕生 (藩法 828)。是月 エケレス国ベルマンス国戦争の風説 (本)。加勢川掘通工事始まる、藩より 500貫目補助 (川尻史 292)。
8. 18 走潟外新地塘築立あり (川尻史 292)。
9. 2 阿蘇山噴火 (肥)。7 9日迄強風諸作痛む (肥)。24 松井徴之没、年61 (先哲)。26 致仕長岡帶刀病死 (本)。是月 南郷より大津への通筋を北向山の内へ付替 (肥)。正院手永味取新町に歩入所建つ (肥・合覚・覚)。吉田平兵衛、足輕段有働郡平を手討 (本)。
10. 1 細川熊之丞、將軍家齊に謁見 (宇土史 110)。15 奉行永田内蔵次、御近習御次組脇に転ず (本)。23 阿蘇山鳴動 (肥)。
11. 28 有隣院 (重賢室) 33回忌 (本)。29 宇土郡松合村出火 (肥)。是月 桑蚕受込見締役を手永毎2人とす (肥)。加勢川工事に付鯰、沼山津手永「覚書」を出す (川尻史 304)。

12. 10 瑤台院 (治年室) 25回忌 (本)。藩主齊護と松平安芸守息女縁組 (本)。16 宇土支藩主、従五位下に叙し、中務少輔と改む (宇土史 110)。22 耆姫死去 (度譜) (「本」には24日)。28 貸借、高利を戒む、借方も不心得なき様とのこと (藩法 831)。是月 松山手永松合村の者火事逢一切焼失に付拝借願 (覚)。豊作に付お祝の酒肴下賜 (肥)。

是年 損毛高 153,074石 (肥)。この年支出 405,470石 (宝暦以来御勝手向)。不破敬次郎奉行副役に任ず (本)。僧俊菰の 600年忌を泉涌寺に修す (肥)。窮民救恤 8614人救銭41貫 480匁、米 192石 8斗 9升、粟92石 3斗 1升 (肥)。浜町様御用の件、御勝手向の件 6月御書付あり (度譜)。当年より一統地推御改仰付らる (土管)。小国宮原町歩入所取立てたが太き俵物は村方に備置くべし (覚)。松山手永吉野村疫病流行に付祇園宮御祈祷 (覚)。米価高値に付、3斗 5升 双銭38匁 8分 8厘と定む (覚)。長六下河原にて浜町様施餓鬼執行 (覚)。御国入職御免の隅州鑄物師及忤内田手永社家村人数入 (覚)。遊行上人宿佐敷町戸平次居宅作事入用材木御山より売払 (年覚)。同上宿小川妙音寺作事材木、お山の木売払その代銭で調達せしむ (年覚)。菅尾手永御山推茸仕立、地元と産物受込方協議とす、深葉山茸禁止 (年覚)。中山手永岩下村小川筋材木増加につき緑川同様筏運上取立許可 (年覚)。野焼に付ての利害得失を各手永より上申せしむ (年覚)。白金作事御用硃灰1500俵つくる (年覚)。南関、砥用、鶴崎、高田の者寸志認むるも五穀金銀銭の外は継目寸志を認めず (年覚)。著書目録 筑山家由緒 史伝 筑山与十郎。東肥群芳百瓶 諸家 亀齡軒斗遠。

文政10 (1827) 丁亥 (家齊) 齊護

1. 25 宇土支族細川榮真病歿 (本)。是月 家中私用雇人馬賃増額 (肥)。前年火災の松合村救のため新地築立用石拾い賃支出 (覚)。
2. 15 加勢川新川堀始まる、藩主臨場 (川尻史 292、303)。藩主の命により郡方年系略記編纂に着手 (肥)。20 一橋儀同薨去 (本)。
3. 4 藩主熊本発、4月19日江戸着 (本・度譜) (実紀は4月25日参勤とす)。9 知行取擬作取扶持方当 8月以降も是迄通り受取るべし (藩法 833)。13 長岡山城督之八代発、4月23日江戸着 (肥)。15 浜町様熊本発、5月11日江戸着白金邸に入る、以来少将様と奉称 (肥・本・度譜)。18 將軍家齊、太政大臣となる (本)。21 細川右賢に米 300俵遣す (本)。28 阿蘇山上強風、諸作牛馬痛 (肥)。
4. 27 奉行楯岡七左衛門、江戸より下着 (本)。28 東叡山火の番 (本・度譜)。是月 宇土郡網田皿山の産物方役人詰方廃止 (肥)。砥用原町に産物受込方の歩入所建つ (肥)。阿蘇山灰降り原野荒る (肥)。牛馬の灰害消毒薬10,500服分再春館で調合下賜 (合覚)。その薬代 1貫 430目余は御本方で立替追て阿蘇、南郷郡代より寸志を集めて差出とす (覚)。5月まで地震頻発 (肥)。真宗住職相続の時門徒より人選希望申出を禁ず (寺雜附)。日田代官所講世話の者への心付について平準方より問合 (覚)。米価下落に付書付 (覚)。
5. 7 芦北大河内で銅吹、産物方受込とし、平準方御用の郡横目の内 1人加勢 (年覚)。19 20日迄大雨、諸川満水 (肥)。29 浜町様を少将様と称するよう令す (肥)。是月 寺院相對奉賀なりがたき事 (寺雜附)。登米積船 1,300石を限度とす、積過禁止 (覚)。
6. 4 強雨、水損多し (肥)。9 安芸守息女縁組整、竜の口へ御引越 (度譜)。11

家老代郡九郎太郎江戸より下着 (本)。

- 閏6. 2 細川越中守養祖父左京大夫位階昇進の祝、幕府より奉書 (実紀)。是月 外国戦争の噂 (本)。南関手永関外目村お境杭木立替 (覚)。諸郡に1村1人宛御郡簡を置く (肥)。
7. 11 明和8年達の通、先祖附の外武功旧記を届ける様 (藩法 834)。22 24日まで大雨 (肥)。29 奉行小山門喜熊本発上府 (本)。是月 宇土高良村居住根取人入徳村又兵衛、村所の害に付村人数へ引戻 (覚)。本藩帯刀以上総人数27,681人 (本)。上河原居住の物貰共あまりに清正公勧請に付堂取除 (覚)。
8. 9 中老溝口蔵人病氣退任、郡九郎太郎中老となる (本・先哲・藩法 834)。輕輩、陪臣、中小姓以下日傘使用禁止のところ文政3年より諸役人段以上、陪臣、中小姓は渋張に限り許可したが、近時の乱れを戒む (藩法 834)。衣服制度も文政2年規定の乱れを戒む (藩法 836)。11 輕輩、陪臣に土席以上への不敬を戒む (藩法 836)。12 家中作法、衣服の制の厳守を達す (肥)。是月 子弟心得方について書付渡し (本)。
9. 7 宇土町71軒焼失 (肥)。再建入用竹木山藪より渡下さる (年覚)。14 丹羽長門守死去 (本)。23 阿蘇山鳴動 (肥)。是月 矢部浜町零落に付、願の通質物所取建、郡代引受とす (肥・覚・合覚)。穢多共年貢払直上納に付払頭付添処理 (覚)。油及糟値高騰に付、以後町方同様に中にてても油本手許す (覚)。
10. 1 宇土支藩主登城、將軍家初見 (実紀)。15 家中増奉公人減少に付対策及び奉公人風紀取締達 (藩法 835・度譜)。23 夜子刻、阿蘇山噴火 (合覚)。是月 廻江・杉島手永に蛭見扮役新設 (城南史 451)。荒尾手永腹赤村の柳川侯先祖古墳のため金 100両の提供あり、平準方で預り貨殖を以て見付1人と墓守1人を立つ (合覚)。
11. 6 藩主斉護、浅野安芸守女と婚姻 (本)。29 夜大雨、大雪降る (肥)。是月 在中僧侶取締 (肥)。魚価高値に付値下げ仕法 (合覚)。(肥は12月とす)。
12. 4 家中手取米本年も去年同様とす (藩法 837・触)。7 奉行服部太門依願役免 (藩法 837・本)。占に盜賊の名を尋ね拷問のこともあり、盜賊についての占禁止 (藩法 837・本)。9 公義届、損毛高27万石余 (247,699石とする史料もあり) (肥)。12 松井直記江戸より下着 (肥)。16 細川熊之丞 (宇土) 中務少輔となる (実紀)。21 杉浦仁一郎奉行本役を命ず (藩法 837)。25 唐物の抜荷密売、海鼠干鮑昆布等直買すべて死罪、寛政2年長崎市中触の通り (触・藩法 837)。28 斉護、歳首の札着座のこと命ぜらる (実紀)。是月 長岡忠虎隠居、熊千代相続 (肥・本)。1村1人宛郡簡仕立、但し宇土御知行所を除く (覚)。植木町 157軒瓦葺費用捻出のため富講願出、禁止年限中に付不許可とす (覚)。
- 是年 求磨領西ノ村忠七より八代上松求麻村源四郎買取季代滞懸合一件 (覚)。繁根本村人数に一旦入れた物貰末五郎、教悦支配の者と判明に付元の通引戻 (覚)。竹迫手永弘生村在宅緒方十郎、居村百姓を譜代家来に抱、開所内に居住させた旨願出許可 (覚)。正院手永山鹿往還筋詰小屋にて揚酒願、一旦不許再度願出許可 (覚)。郡目附中村庄右衛門本目在歩入所取建御用 (覚)。小国・高森出会所歩入産物扱所設置 (度譜・覚)。中山手永糸石村響の原に相良家先祖墓地あり、その立木盜伐の風聞に付横目調査するもその事実なし (覚)。献上御用かせ板の楡梓仕立方命ず (年覚)。小国明礬製法方、大坂町人木屋市郎左衛門世話するに

付、御賞美下さる様大坂詰勘定頭より達 (年覚)。浜町様御帰府に付白金大作事 (度譜)。蓮性院 (齊樹室) 白金引越 (度譜)。長崎唐人屋敷騒動 (度譜)。家中増塩渡平準方受到に成る (度譜)。梅珠院様御穩便 1 月 4 日迄 (度譜)。御家譜編集のため書出提出さす (度譜)。窮民救助 8,349 人救銭・米・粟 (肥)。12 月梅花咲、雪気なし (肥)。玉名郡横島村四番開、同村川浚料開築立 (肥)。御蔵納高 31 万石余、御給知高 40 万石余 (肥)。阿蘇山硫黄水溢出、作毛に障る (損)。著書目録 兵談雜記 諸家 伊藤権七。佐喜草考 博物 中島広足。慎集記 史伝 牧紫恒範。

文政11. (1828) 戊子 (家齊) 齊護

1. 一 中老郡九郎太郎熊本発上府 (本)。町在人数より社司への養子は同姓の外禁止 (寺雜附)。
2. 12 諦観院 (齊樹) 三回忌 (本)。14 家中若輩の何々連と唱、党を立てるを禁ず (肥・本)。砲術未熟者の狩獵を禁ず (肥・本)。21 奉行不破敬次郎熊本発上府 (本)。去 9 月宇土町 1 丁目 2 丁目焼失、伊勢田両家御本陣御次宿に付再建拝借、勘定所小物成方両局より 10 年賦 1 割利で貸付 (年覚)。是月 玉名郡中風俗不良、新牢つくる (肥・合覚)。芝増上寺方丈自火焼 (本)。昨年 5 月破損の石塘修理着手、4 月 7 日より俄踊などあり (肥・度譜)。家中武器歩入取計に付宇右衛門殿へ伺 (覚)。村々の大高百姓召使作り子奉行人ここ 10 年少なくなる (熊本史学 5)。
3. 17 竹迫手永竹迫町歌舞伎座本又三郎より座多人数に付分離し二座にて興行いたしたき願、不許可 (覚)。是月 御上下御用川尻水夫 10 年撫 5 歩増賃上納仰付 (覚)。
4. 4 若君様大納言様と称し奉る (本)。13 夜八代地方地震 5 回 (肥)。23 長岡山城江戸より熊本着 (肥)。28 藩主江戸発、6 月 13 日熊本着 (本)。是月 浜町歩入所、郡代支配銭にて不足し拝借願あれど、不許可、300～500 目以上は歩入所、それ以下は他の質屋で取扱う様指示 (合覚)。芦北銅山櫛方産物方で担当中止、11 月より蟬所受継堀方 (肥)。
5. 5 奉行小山門喜江戸より下着 (本)。大雨洪水、球磨川増水 (肥)。9 宇土支藩主帰途大坂着、22 日鶴崎着 (肥)。20 雷雨、翌日大雨、緑川、球磨川増水 (肥)。23 吹上御庭御茶屋焼失 (本)。御側蟬所手伝大村小助、御用櫛苗見採のため本庄手永今村に当分居住 (覚)。29 29・30 日大雨満水、白川・菊池川・緑川など (肥)。是月 小山悉皆分職奉行、楯岡上座 (本)。阿蘇山噴火被害甚大 (肥)。本藩人口調査 64 万余人、内士席以上 4,052 人、独礼以下帯刀以上 15,393 人、百姓 558,257 人他 (肥)。
6. 7 大雨、白川・菊池川・御船川・緑川・合志川など大洪水 (本・肥)。鞍嶽山潮、長六橋流失、田畑水損 7,083 丁 1 反余 (本・肥)。15 藩主在国中の講釈、文武芸の稽古日を定む (肥)。17 大雨、白川・球磨川洪水 (肥)。是月 オランダ船より外国情勢伝う (本)。荒尾手永長洲町年 6 度市立許可、春市には見せ物も許可 (覚)。
7. 2 強風雨、白川・御船川・緑川・河江川・高瀬川など出水 (肥)。9 綾部四郎助奉行副役に任ず (本・肥)。11 御側向節儉の余分で家中拝借錢 (本・度譜・触)。風水害に付、京大坂御借物返済断る (本・度譜)。12 強風雷鳴白川増

水、長六仮橋又々流失 (肥)。18 内田・中富・南関・坂下4手永催合の塩浜にて周防国の者6人雇入許可 (覚)。24 洪水にて流失の長六橋工事始、10月9日渡初 (肥)。是月 中村手永にて無頼の者方のため在牢1軒立つ (合覚)。

8. 9 夜大風倒家多し、公儀役人天草渡しの船難船 (本・度譜)。玉名郡中倒家取建に火事逢の半分宛お山藪より渡 (年覚)。細川宗仙え義絶御免 (本)。10 前夜よりの大風で被害甚大。このため藤崎宮祭礼9月15日に延期 (肥・本)。長崎御番船破損、新造の三船顛覆 (肥)。24 夜大風。非常の大損毛 (肥)。

9. 23 中村手永多久・推持両村に出会所設け、粮物買入地元産物と交易許可 (覚)。是月 困糶を救米に充つ、27,000石。米輸入許可 (肥・度譜)。寸志による進席加禄を許す (肥)。西国筋洪水、中国虫付 (本)。医師中御役医の外伍列究む (本)。旅僧夜説法禁止 (寺雜附)。真宗西派新義古義の論説停止 (寺雜附)。当年変災に付、去年米での造酒禁止、全体として造酒高は是迄の三分の一とす (合覚)。

10. 6 前藩主室蓮性院登城、將軍などに謁す (肥)。16 細川長門養子、玄蕃死去 (本)。17 作事所出火 (肥)。20 藩主齊護限府に宿す。21日山鹿、22日高瀬、23日長洲、24日高瀬に宿す、25日熊本帰府 (肥)。23 川尻町民へ救恤29貫97匁余貸与、10年賦 (川尻史 145)。30 江戸にて寅姫誕生 (本・度譜)。是月 医師数、安永に比して倍に増加、今後制限す (肥・難稜)。諸郡非常鯨油錢塘会所で取計、代銀は御米銀方立替 (覚)。

11. 12 越後長岡岡地震 (本)。21 本藩損毛高 370,849石と届出 (肥)。25 幕府儉約令を更に5年延期 (実紀・肥)。是月 草字二歩金吹増通用 (本)。長崎にてシイホルト国禁 (本)。宇土松合御狩 (本)。手取米昨年同様 (触)。

12. 4 中老郡九郎太郎江戸で病死 (本)。15 長岡山城養子式部家老職見習 (本)。21 奉行杉浦仁一郎に出府を命ず (肥)。22 宇土郡松合村 269軒焼失 (合覚・肥)。是月 米銀方と小物成方を分離 (肥)。大津御茶屋移転 (肥)。当年変災に付窮民取救を各郡代へ指示 (合覚)。泰勝寺へ下地 108石の外、賄料72石計 180石高当暮より渡 (寺雜附)。

是年 鶴崎御銀預振出、同步入所設置 (本)。米価、強風前1俵33~34匁、重陽前後39匁5分、10月49匁5分、粟4斗入32匁 (肥)。窮民御救 9,892人、錢52貫856匁、米 130石3斗7升、粟 244石、雜穀17石2斗3升 (肥)。郡浦手永海辺にて鹿子木謙之助石灰堀方許可 (年覚)。八代新地塘大損壊 (度譜)。久保改平米買方一件 (度譜)。風水害に付江戸御借物御断延、承知せず (度譜)。大塚御借物一件に付9月より立帰、登坂 (度譜)。著書目録 医道二千年眼目編 医業 村井琴山。

文政12 (1829) 己丑 (家斉) 斉護

1. 6 強風雨、汐塘等破損 (肥)。15 有吉市郎兵衛時展中老となる (本)。以後2月中緑川向地にて射獵御免 (本)。23 杉浦仁一郎上府 (本)。25 中老朽木内匠熊本発東上 (本)。是月 岡崎安三郎、甲佐で父の仇を討 (本)。米相場2月初まで俵49匁、同中頃より53匁8分迄上る (肥)。
2. 15 宇土鷹場内亀崎新地にて17・18日宇土様火矢打通告あり (覚)。17 80才以上へ酒肴、土席 150人輕輩 300人町在2,300人 (肥・本)。21 藩主登城、奉行所・時習館入、次で藤崎宮、六所宮、本妙寺参詣 (肥)。23 温泉嶽荒る (肥)。川尻町民に五ヶ年間儉約令達す (川尻史 146)。25 府中雷鳴強風雨50目位の氷降る (肥)。27 飽田託麻在宅人、以後は同居を禁ず (覚)。28 藩主熊本発、4月3

日江戸着 (本)。4月15日参勤 (実紀)。30 昨年11月の俸約令の細則を定む (肥)。是月 尚当年より5年間俸約令 (触)。坂下手永鍋村わんとう新開塩田より初塩上納 (肥)。

3. 11 江戸大火、矢の倉及鉄炮洲屋敷類焼 (度譜・肥)。12 郡浦手永網田村森中にて天草の密右衛門と申者行倒、俸を同村木下藤十郎育往々は同村百姓とするよう達 (覚)。16 内田・中富・南関・坂下4手永催合の塩浜へ周防の者7人雇入 (覚)。26 住職相続に付門徒講中よりの申出は受けぬ旨達 (川史尻 479)。是月 長崎御番船は今後必要の際派遣することとし同地引上げ (肥)。長六橋下刳築、下河原分流のため掘通し (肥)。
4. 14 奉行不破敬次郎御留守居御中小姓触頭に転ず (本) (「肥」は4月23日とす)。是月 諦観院 (齊樹) 遺事しらへを大城隼太・近藤英助に命ず (本)。沼山津手永馬水村鉄砂鑄造 (肥)。永田金右衛門奉行副役に任ず (本)。坂下手永龜甲村鍛冶共鉄入願 (覚)。船場1丁目川端筋空地御免地の訳について告示 (市雜坤 111)。
- 5 21 宇土家中の者2人宇土郡代支配となり浪人扱ゆへ特別座順なし (覚)。22 幕府、関東諸河川工事手伝金を課す (実紀・肥)、本藩課金71,682両余 (肥)。池田手永牧崎村に白硝石製造所建つ (肥)。是月 高橋町光榮寺弟子大寂、俗家に人を集説法華のことあるにより達あり (寺雜草附)。坂下手永鉄買入代金払、郡代手付横目中山宇兵衛立会のこと (覚)。厳有院 (家綱) 150回忌 (本)。
6. 3 羽書と称する米穀空舁商売ますます禁止 (覚・合覚)。4 寅姫様死去 (度譜)。9 去秋の大風にて天草糧物難波に付、大坂登米より3,300俵売渡し (覚・合覚)。15 家老沢村宇右衛門隠居 (本) (「度譜」には16日)。16 長岡監物は陸 (是常) 嫡子米田源三郎是容、御用見習のため家老職出仕 (度譜) (「本」は6月とだけ)。是月 大坂御用達泉屋治兵衛解任、鴻池1人となる故、長田別家加島屋作五郎に御用達申付けるべく内々大坂へ打診 (覚)。
7. 2 五町手永嶽村藤次郎高利貸に付、屹叱の上早々在中へ引戻す (覚)。3 生蝨大坂売捌について勘定頭以下へ達 (度譜)。12 古町魚会所、上、下二会所に分け1月づつ輪番勤とす (覚・合覚)。19 宗旨替には旦那寺、法役、五カ寺組の連印を要す (川尻史 480)。是月 廻江手永阿高村馬風邪流行倒馬多く大筒打方 (合覚)。南鐐1朱銀通用始 (本)。オランダ船より情報 (本)。遠坂貞右衛門、沢田順積を打果 (本)。山鹿手永内千人講と称し大勢集、出銭多し全面禁止 (覚)。北里手永明攀山拝借金、年賦上納月延期 (覚)。
8. 8 八代地方強風雨 (肥)。11 城下出入口に近年出小屋建許可するも今後は容易に許さず (覚・壁書)。是月 野津原、高田両手永に御郡簡10人仕立 (肥)。中村莊右衛門、増田角助御勘定頭任命 (度譜)。陪臣知行取は輕輩扱、触頭塔中寺号持は役僧は一寺同様扱 (寺雜草附)。龜甲村鍛冶へ売渡の地鉄運上について達 (覚)。筑紫勘太、三宅勘之允を打集 (本)。
9. 1 日食なれど見え (肥)。14 大津茶屋番并御山支配役齊藤次左衛門、日頃過酒かつ名子共の扱よろしからず、格別謹慎、名子撫育を訓示 (覚・合覚)。21 將軍家和姫様婚儀につき細川越中守は膳部一を献上 (実紀)。23 天守方引受にて白塩硝製造に付、熊本町、飽田、託麻の家々床下土支障なき限り差出す様 (覚・合覚)。25 上田源大夫宣珍歿す、75才 (先哲)。川尻町奉行、町奉行手形

による出入津の厳守を命ず (川尻史 148)。是月 有吉市郎兵衛、御勝手方上聞となる (覚)。二の丸御用表受となる (本)。坪井川水抜き、大工町裏堀通し (肥)。天草蔵々にて石炭試堀、平準方起る (肥)。

10. 5 矢部手永年貢米、牛ヶ瀬在蔵で5年間扱う。矢部米に限毎年 300石他国売許す (覚)。11 菊池川平田船商売船間屋廃止、舟庄屋1人と1年交替の肝入にて積荷扱 (覚)。13 松野国(直行)家老に列す (肥・本)。江戸矢の倉屋敷を津軽越中守へ譲る (肥)。浜町御屋敷酒井様へ、木挽町譲受 (度譜)。24 領内大絵図および手永分絵図作成 (覚)。是月 鹿子木謙之助、天草造蔵へ平準方御用石炭調査のため 100日出張 (覚)。墓所の拡大を禁ず (寺例続)。
11. 6 川尻町奉行再び津出入について達 (川尻史 149)。16 奉行安野形助(南岳)歿す、69才 (本・先哲)。17 疫病流行に付、7日間社寺祈祷 (肥)。是月 池上本門寺より清正公像写方頼来るも断り、模像彫刻も仏師共へ禁ず(寺雑附)。御給仕役復旧 (本)。数年間の貨殖で相当利益あり、郡方備とす (覚)。諸役人段以上の者、町在人との縁組許可 (肥)。
12. 1 隈府町幸右衛門、仙助米穀仕入株出願、不許可。無運上ゆへ下値売捌を命ず (覚)。3 大風諸所風損 (肥)。5 家中手取り前年通、但³/₅は代銭渡 (肥)。13 当秋、田畑穂枯による損毛高 161,732石余と幕府へ届 (肥)。15 関東諸川工事手伝に付、藩主へ時服賜う。24日には家臣関係者へも賞賜 (実紀)。22 藩財政支出につき格別達あり (度譜)。24 金峰山権現社来年で鎮座以来 1,000年に付、祭礼準備のため木材伐出許可 (年覚)。29 江戸烏森松平豊前守屋敷譲受、長屋建継ぎ、浜町・佐賀町屋敷詰の者に引越命ず (肥)。是月 志水淳助奉行となる (本)。村備 (文政2年より始まる) について在蔵建方命ず (肥後藩後期法令集)。中村手永惣庄屋 西嶋尉助若州より井戸繰貫師雇下り、試掘願許可(合覚)。手取米去年通り (触)。

是年 関東筋川普請に際し御手伝寸志の基準を定む (城南史 494)。江戸家中扶持方これまで糧米の外代銀渡のところ現米渡とす (肥)。玉名郡部田見村に西開新地成る (肥)。久保改平召籠らる (度譜)。江戸荒仕子廃止 (度譜)。稲川安五郎大坂御蔵元御免 (度譜)。御城郭御用石場池田手永上松尾村権現山野開畑の内に所替に付、地代銭調査を命ず (年覚)。正院手永にて長岡山城、樟脳製法を始む、楠株渡し (年覚)。御天守方椽板、雨戸板、杉材をやめ楠とす。寸尺等杣方へ連絡のこと (年覚)。著書目録 村井多治満上書 法制 村井多治満。

天保1 (12・10改元) (1830) 庚寅 (家斉) 斉護

1. 3 奉行杉浦仁一郎江戸より下着 (本)。13 幕府より藩主へ鴈下賜 (実紀)。是月 酒井雅楽頭の小石川下屋敷を譲受 (本)。借受中の佐賀町屋敷出火 (本)。
 2. 14 稲津久兵衛奉行副役となる。6月28日本役 (本)。28 平野九郎右衛門家老代として熊本発 (本)。是月 郡中犯罪吟味はなるべく郡代手元にて済ます様指示 (合覚)。
 3. 5 新川堀通し工事開始、4月完成 (川尻史 303)。16 中山手永降雪 (肥)。23 奉行志水淳助自殺 (本)。26 他所物産購入禁止 (肥)。是月 疱瘡流行 (肥)。坪井川寺原町裏堀掘、庚申堂移転 (肥)。
- 閏3. 10 八代にて新川堀、惣町俄踊、高島新地地堅め相撲 (肥)。是月 医者増加に付容易には召出されず、しかし3代以上継続の医者は出精次第相応に召出す

（難稜）。 サフラン 1 分に付 2 匁 5 分に値下げ（覚）。

4. 5 松山手永松合村 315軒焼失（肥）。 15 藩主、將軍に下国のいとま（実紀）。 27日江戸発、6月11日熊本着（本・肥）。 22 強雨、白川出水（肥）。 28 朽木内匠江戸より下着（本）。 29 江戸にて細川能登守娘於茂誕生（本）。 是月 曲渕甲斐守・大久保加賀守屋敷の内借受（本）。 松平豊前守屋敷譲受（本）。 桑山九兵衛様屋敷、白金屋敷の内と相對替（本）。 加勢川堀通 5 カ年にて成就、費用2700貫目、夫役 300万人（文政 9 年春、鯰・沼山津水害除のため加勢川の緑川に入る所を築留め 400間堀割り、川尻新町川に入れ、又川尻町等の水害よけと水勢を殺ぐため走潟在平木村の内 700間程川口に向い堀割りたるもの（肥・川尻史 304）。
5. 7 奉行杉浦仁一郎咎、独断にて江戸で多分の米穀買入、米価騰貴を招きたるによるという（肥後国年歴にはこれを前年 4 月とし、野津手永久保改平なる者大坂米相場に携り25,000両程損失に付奉行杉浦仁一郎、勘定頭大塚林右衛門、河上貞助、根取加悦栄七等退役と記す）（先哲・本）。 是月 藩内の現錢を他所へ密出するを禁ず（肥）。
6. 15 大雨球磨川出水 2 丈余（肥）。 加勢川・緑川出水（川尻史 293）。 19 徳川兵部卿様逝去（本）。 22 阿蘇山荒る（肥）。 28 沢村太兵衛奉行副役に任ぜらる（本）。 稲津久兵衛奉行本役に任ぜらる（本）。 藩主時習館にて聴講（触）。 29 百代姫江戸にて誕生、8月18日死去（本）。 （「度譜」は8月 日死去とす）。 是月 オランダ船の海外情報あり（本）。
7. 2 昨夜半より大風（肥）。 京都大地震（度譜）。 8 昨夜より大風雨、八代洪水、鶴崎強風（肥）。 10 諸所落雷（肥）。 21 阿蘇山鳴動（肥）。 是月 真宗僧侶本山にて功業あり寺格以上の宮位に昇るとも、それは本山に対してのみで国法においては持前通りの扱いと定む（寺雑附）。
8. 4 藩主の使者郡弥四郎いとま賜い、幕府より賜物（実紀）。 17 就君様への使者岡平兵衛（本）。 23 鷹場・留川を改廢（肥）。 是月 綾部四郎助奉行本役に陞る（本）。 勝手向格別取締達（度譜）。
10. 一 父母の忌について達（本）。
11. 7 家中手取前年通り（肥）。 15 当夏秋、風水害、虫害等による損毛高 366,560石余と届出（肥）。 23 中老朽木内匠昭久退任（本）。
12. 20 藩主妹、松平勝吉様姉去（本）。 24 阿蘇山鳴動霾降る（肥）。 25 衣食、特に婦人衣服の華美を戒しむ（肥）。 是月 田畑讓地今後は他手永、他村への譲渡禁止（土管）。 砂糖屋武吉 3 ケ年砂糖間屋許さる、口錢 2 分とし半分は櫛方、郡方へ上納のこと（覚）。

是年 銀所預を毎月 1,020貫目宛償却することとす（肥）。 産物方起る（本）。 一橋家の永嶺下屋敷 2 万坪余を浜町様（齊茲）譲受け（度譜・肥）。 江戸より 500両、鶴崎会所に備置（本）。 野津原手永谷村御蔭、請蔭開明新屋敷とす、上納米は郡方へ上納（年覚）。 坪井川泥浚川尻水拔堀方あり（年覚）。 荒尾手永金山にて古鍛冶屋町茂兵衛石炭試堀（年覚）。 北里出会所宮原役宅を本会所向に建て客屋兼用とす（年覚）。 湯浦手永大川筋洪水にて水路替り古川床へ畝取替許可（年覚）。 郡浦手永宇土知行所新地塘に櫛木仕立方（年覚）。 著書目録 筑紫日記 歌文 中島広足。相良日記 歌文 中島広足。

天保2年(1831) 辛卯(家齊) 齊護

1. 24 台徳院(秀忠) 200回忌(本)。是月 織田信長 250回忌法要(本)。
2. 23 藩主齊護田迎にて犬追物をみる(肥)。 27 凶作に付町在共旅行を遠慮させ窮民救済の寸志を許す(肥)。 是月 川尻町丁頭から組頭へ儉約令達す(川尻史 150)。北里の明攀を大坂にて精製させることとし熊本に座店出来、他領への売買禁止(肥)。大坂天保山成る(本)。奉行小山門喜当番諸輪番御免(本)。
3. 11 家老松野匡熊本発上府(本)。 15 長岡図書を城代とす(肥)。 23 藩主熊本発、4月28日江戸着(本・肥)。 是月 家中婚礼に支度銀等禁ず(本・度譜)。奉行稲津久兵衛国産仕立御用受持(本)。坂本庄左衛門奉行副役(本)。在中造酒桶数改あり(肥)。上江津より上木部迄新井手堀方惣入目銭35貫 649匁夫数38,567人(肥)。
4. 15 八代高島新地にて石火矢打方あり(肥)。八代高田手永古閑村郡方新地北割分17丁4反余、当年より反当り5斗3升宛米納(肥)。
5. 17 井沢弥万吉、口論で荒木文彦を打果切腹(本)。 19 上旬より梅雨、この日強雨にて八竜塘切れ、鯰・沼山津方面浸水(肥)。 21 衣服制度目安帳を家中に達す(肥)。 25 山東彦右衛門(武道游泳)没、年76(先哲)。 26 川尻地方大洪水(天明誌 484)。 29 28・29両日の大雨で八竜塘更に切れ、野田村延寿寺裏新塘外4ヶ所切れ、川尻町野田杉島両村は57日、横手・銭塘・沼山津は3〜13日、鯰手永は20日水浸しとなる。田畑水損12,850丁、潮塘 453間、川塘48,633間、井手塘27,392間破損。諸官宅30軒、侍屋敷11軒、輕輦屋敷219軒 町家 904軒、百姓家 2,545軒流失破損、橋 565流失、死者17人(度譜・肥)。川尻蔵米10,800俵浸水(1本に 8,250俵ともいう)(肥・川尻史 316)。 是月 奉行副役え諸役人段以上より合木履の件に付申談あり、今後遠慮することとなり米銀方より通知(覚)。
6. 1 球磨川出水(肥)。 4 暁方延寿寺洪水のため倒壊流失す(気・川尻史 315)。 19 平野九郎右衛門江戸より下着、23日中老に任ず(本・肥)。 26 靈雲院(宣紀) 100回忌(本)。
7. 一 6月以来阿蘇山鳴動、新池出来、牛馬多く死し在中困窮、この月12日より次第に鎮静す(肥)。 是月 内牧・坂梨両手永、長雨洪水にて収穫なきところはひえ、そばに変える。しかし9月21日大霜にて内牧作物被害(肥)。
8. 8 奉行小山門喜病死63才(本・先祖附)。 11 鯰手永より嘉例の新米差上ぐ(肥)。 13 羽州庄内洪水(本)。 是月 衣服食物の他国産使用3年間禁止、直注文も許さず(本・肥)。大坂御用達鴻池の他、加島屋作五郎にも仰付ることにしていたがこの程とりやめにす(覚)。
9. 1 楯岡七左衛門急用にて上府、10月15日下着(本)。 5 川尻外城町別当、岡伊十郎洪水の節焚出もせず、今月3日より5日迄の御蔵米土持の仕舞祝にも不親切な行為あり、蒿の者徒党を組みて同人宅へ乱入破壊。主犯4人徒党86人仕置(肥)。 15 関根俊助、弟を手討(本)。 是月 阿蘇山又々鳴動、硫黄噴出近村凶作(肥)。
11. 4 諸間拝借利分弛方等の儀に付御書(度譜)。 是月 本藩借財80万両以上となり年々収支3万石不足に付手取米削減、藩主手元金も削減(肥)。八代米双

場3斗2升入46匁に付来暮より定規上納(覚)。歩入物差止中のところ綿大豆歩入解禁に付扱商人不正あらば御用差留とす(覚)。

12. 27 本年水害、虫害損毛高 291,234石余届出(肥)。

是年 当暮双場銀 100目に米1石4斗5升、銭 100目に米7斗4升5合、米3斗5升到付46匁9分8厘(肥)。玉名郡大浜村にて鯨油開2丁4反余築立(肥)。物成 274,160石余、内蔵納 121,203石余、給知 152,656石余、新地物成12,770石余(肥)。山口時右衛門死刑(度譜)。村松英記勘定所目附本役(度譜)。内田手永石貫村の者小代山立木盗伐に付郡代限過料申付くるも再盗伐につき5貫文過料(年覚)。松山手永宇土知行所笹原、笠岩、網津海辺干潟にて新地見込の所、当春 100間宛乱杭打許可のところ地域外に 300間張立、取除を命ず(年覚)。砥用手永目磨村と下福良村の土橋を石目鑑橋仕替料として石野村惣八勇助、安懸村卯平より寸志差出(年覚)。中山手永山崎村目鑑橋懸方費用井芹仙之助他寸志(年覚)。野火禁止公義禁令に付日田取締より連絡懸合(年覚)。関手永臼杵領との境目潮塘石垣および政所村月カ平堤石に仕替につき市村順次他寸志(年覚)。高田手永大鶴村臼杵領境目石垣普請費用および夫飯米等寸志あり(年覚)。古鍛冶屋町茂兵衛、荒尾手永野原村山内にて石炭試堀に付松木 300本拝領願出、不許可となる(年覚)。小国明攀藩内壳捌量減じ大坂送り多量、国中不正扱いなき様町方横目取締(年覚)。御船町火事罹災の者再建竹木払下げ(年覚)。この年支出 402,680石(宝暦以来御勝手向)。著書目録 土貢管見録 法制 河口新左衛門。水江物語 歌文 中島広足。

天保3年(1832)壬辰(家齊)齊謹

1. 一 加勢川堀移しの個所去夏洪水破損、川尻水害に付新川仮に水止め普請を行う(肥)。五町手永万石村に煙硝蔵あるため鉄炮打禁ず(肥)。松山手永松合村にて痢病流行病人 530余人中死者55人(肥)。算学師役甲斐隆春、擬作 100石(城南史 480)。吉井多三郎種子・たばこ歩入、種子は1俵35匁たばこ1丸40匁値段下落の節も元入納入のこと(覚)。
2. 3 佐田右平奉行副役となる(本)。4 京町本丁筑紫権左衛門宅怪火。4日夕焼失狐火(肥)。10 名子は役人・頭百姓になりえず、5人組も名子同士組合せとしているが、寸志上納は認める(齊藤家文書)。12 諦観院(齊樹)7回忌(本)。13 家老代清水縫殿上府(本)。29 寛政元年と文政12年と役員立合しらへ、1月5日よりの作業完成(度譜)。是月 小田手永部田見村海辺に手永開新地2町余築立(肥)。鯨手永小坂村八竜塘、去年5月19日破損個所普請長さ 157間、明俵 120,446、出夫41,951人(肥)。
3. 7 家老代清水孫七郎熊本発上府、4月江戸発下向、5月伏見にて病死(本)。10 奉行稲津久兵衛熊本発上府(本)。23 江戸竜ノ口邸長屋東外より出火、15間程焼失(肥)。24 木葉町大火(本・肥)。是月 松合村痢病流行病人、800余人中死者 220余人(肥)。
4. 10 天草代官高本作右衛門歿す。28日西国郡代塩谷大四郎預所となる(肥)。21 藩主、將軍に就封の暇(実紀)。24 久保改平苗字大小取上ぐ(度譜)。藩主江戸発、6月17日熊本着(本)。(度譜・肥は5月1日発、6月5日着とす)。是月 肥後悪疫流行(本・肥)。祇園にて所禱(度譜)。
5. 20 家老松野匡、熊本着(本)。21 奉行沢村太衛兵退任(本)。26 八代塩、

- 屋町 150軒焼失 (肥)。 是月 小田手永大浜疫疾流行 (肥)。 郡浦手永郡浦村・坂下手永滑石村同様 (肥)。
6. 10 洪水、加勢川塘破損、田畑水損 7,463丁4反余、倒潰水損家数 1,272軒、塩浜38丁5反余水洗剝、溺死 3人 (肥)。
7. 12 高木作右衛門 (栄太郎忠篤) 天草代官となる (肥)。 20 八代徳渚で渡船沈没 6人溺死 (肥)。 22 物頭仲光半助、亀井村にて西瓜盗食里人に殴打され数日後死亡 (肥)。 6 手永 200余ヶ村雨乞 (肥)。 是月 直記殿、美濃殿、勝手方上聞御免 (覚)。 松野匡、勝手方上聞、小物成方御銀印形受持、大奉行勤稜兼務 (覚)。 金銀歩入歩合規定 3ヶ月に 3合、それ以後 1ヶ月に 1合増上納 (覚)。 川尻地方大洪水、加勢川堀切旧にかえる (本)。 川尻町丁頭・横目水利普請につき町別当に陳情 (川尻史 322)。
8. 19 江戸にて単小僧次郎吉死刑獄門 (本)。 野津手永一の瀬川洪水 (肥)。 是月 阿蘇山噴煙、近村被害 (肥)。 代官口米 2歩減の内 10歩 1、御本方より郡方へ仕向分、文政 3年より中断ゆえ催促す (覚)。
9. 1 長岡監物は睦病死、10月27日米田源三郎相続、家老就任、12月監物と改む (本)。 2 加勢川堀移しの新川築留成る (肥)。 5 大空武左衛門 (日本一大男) 没。年37 (肥人)。 14 この日より16日迄降霜強し (肥)。 17 藩主芦北境目筋巡覧のため八代入城、24日熊本帰着 (肥)。 28 家老小笠原美濃長視病死 (本)。 是月 長岡内膳 (忠寿) 伊豆と改む (本)。 塩屋伊右衛門・酢屋右衛門・飴屋儀八・本田善之允御用聞仰付らる (覚)。 穩便中諸社祭礼は祭式神楽のみ、見せ物・商売出店・社門外挑灯禁ず (壁書)。
10. 1 奉行綾部四郎助退任 (本)。 4 安東四郎次郎 (号永年) 没す、年55 (先哲)。 28 藩内櫛すべて水前寺嶺所にて買上の励行を命ず (肥)。 是月 新吹二朱金通用始 (本)。 風邪流行 (肥)。 諸役人長髪御免 (肥)。 松野匡殿より享和 3年請免制以来の 1歩半備出入、歩入、諸拝借等現銭高調査 (覚)。
11. 8 家中手取米昨年は減額の処、本年は家中困窮を察し従来通りに戻す。但しお手元は減額のままとす (肥)。 24 下津久馬奉行に任ず (本)。 25 川尻町民救済について厳正な人別帳を提出することを誓う (川尻史 154)。 30 大矢野喜兵衛喧嘩、知行召上 (本)。 是月 北里手永宮原町に蔵建方 (肥)。
- 閏11. 18 損毛 223,903石余届出 (186,586石余とする史料もあり) (肥)。 是月 銀所に盗賊、450両盗取 (本・度譜)。 算学師役甲斐隆春没 (城南史 480)。 御上下御用川尻水夫賃10年撫 5歩 1加上納、残米銀は備置 (覚)。
12. 15 松井式部章之家老に任ず (本・肥)。 是月 永田金左衛門奉行退任、松村英記奉行復任 (本)。 本庄手永春竹村疫疾流行、五町手永亀井村同様 (肥)。 川尻町別当等、水害修復拝借錢 139貫余の返済について願出 (川尻史 324)。
- 是年 物成 274,157石余、内訳蔵納 121,114石余、給知 153,042石余、新地物成 12,450石 (肥)。 中村荘右衛門所々横目上聞免、内田恒助任命 (度譜)。 飽田託麻井樋、石樋、走潟水越し大湊塘等復旧工事 (川尻史 293)。 池田手永上松尾村用水として高橋川堂木取磧留仰付 (年覚)。 布田手永岩坂村、大津手永中嶋村用水として新井手掘許可、入用竹木は山藪より下賜、入用銭は会所用銭より立替追て寸志を集め返済さす (年覚)。 山鹿駅所先年出火以後零落、宿馬雇立難渋に付、寸志50貫 580目差上、この内 5歩 1引除残額を地方買入宿馬料として

下賜さるも、不足に付金額下賜を願出ず。一旦は不許可、再願にて許可 (年覚)。
 八代城櫓作事に付、御用材引渡し (年覚)。松山手永永尾村御山秣場地開、
 運上銀定む (年覚)。内牧・坂梨両手永の阿蘇谷往還筋道造費用について、此
 地方近年災害続きゆえ別段を以11貫目余5年賦無利足で拝借とす (年覚)。中
 富手永分田村井手堀替費用、同手永藤井村庄屋庄左衛門他寸志上納 (年覚)。
 著書目録 藩譜採要 史伝 財津三左衛門永晟。

天保4 (1833) 癸巳 (家齊) 齊護

1. 一 五町手永疫疾流行 (肥)。
 2. 4 昨年7月22日物頭仲光半助の事件に付、半助を病乱とし、土道に背く罪で知行召上とし、相手百姓のうち3人刎首他は笞刑 (肥)。是月 奉行楯岡、悉皆分職 (本)。久住手永にて文化13年より天保3年迄仕立の諸木調査 (林制 475)。
 3. 1 藩主熊本発、4月7日江戸着 (肥)。11 中老有吉市郎兵衛熊本発上府 (本)。17 御鷹の鶴將軍より拝領 (度譜)。是月 奉行坂本庄左衛門熊本発上府 (本)。
 4. 5 乾櫓にて10匁以上の銀所預書替え (肥)。20 東叡山火の御番 (本)。是月 大津手永塔迫村百姓の母101才の者手織木綿を藩主に献上 (肥)。矢部手永・河原手永・深川手永にて仕立木調査 (林制 475・480)。
 5. 1 江戸廻り高運丸豆州三宅島辺にて難船、横目広中五左衛門従者19人溺死 (肥)。15 奉行稲津久兵衛江戸より下着 (本)。
 6. 10 山崎、金守半之助宅雷火、此節諸所落雷 (肥)。17 桜・桧仕立督励 (林制 481)。是月 奥羽大凶作 (本)。
 7. 20 この頃菊池・合志地方強雨、諸川満水 (肥)。
 8. 1 江戸近在大風 (本)。22 この夜より翌日迄強雨、鯨手永312丁1反余水浸その他被害 (肥)。是月 奉行稲津久兵衛退任、西浦九兵衛副役新任 (本)。小田手永大浜村にて馬疫流行 (肥)。銀所現改突合書を郡方へ達 (覚)。大坂登船運賃増方 (覚)。
 9. 5 八代郡植柳村大火345軒焼失 (本・肥)。13 肥後新開地視察のため幕府吟味役小林藤之助ら熊本着、15日長州を経て柳河領へ入る (肥)。18 野尻丈五郎次男を手討 (本)。是月 浜町様病氣 (本)。坂本庄左衛門奉行本役昇進 (本)。年々河川損害大につき水理取締を厳にす (肥)。
 11. 8 新田支藩主利愛隠居、利用相続、12月能登守と称す (本・肥)。是月 時習館に大身の子弟出席怠るを戒む、又師家に対し不遜あるを戒む (本・肥)。手取米前年通り (肥)。サフラン中品目方1匁に付、14匁6分2厘5毛にて買上 (覚)。江道蔵支配役以下引払、八代蔵方より出張兼務に付、造用加扶持支給す、費用は江道へ納入の郡より負担 (覚)。氏家甚左衛門、勝手向平準方担当猶3ヶ年仰付 (覚)。
 12. 4 幕府5ヶ年間の儉約を命ず (肥)。25 当年損毛高203,679石余と届出 (肥)。29 作事所内小火 (肥)。是月 本藩借財76万兩余 (肥)。
- 是秋冬 奥羽凶作、大坂登米のうち3分の1、江戸にて売捌 (本・度譜)。
 是冬 奥州など郡盜蜂起 (本)。
 是年 薩州公御隠居遺骸熊本御通 (度譜)。下松求麻村の者杉盜伐3貫文過料、懸

合の者も過料、郡代限りで咎申渡 (年覚)。宇土屋形惣作事に付、入用竹木不足分本方山藪より渡 (年覚)。上松求麻村の者御山内の梅木盗伐3貫文宛過料 (年覚)。諸郡河川土砂にて川底高くなり塘破損の危険多し、水理取締を命ず (年覚)。疱瘡にて天草薪乏しく芦北薪直廻しとす、高橋町奉行献策による (年覚)。段山町・坪井横町の者不届に付、長六橋普請夫に召使う (年覚)。小田手永内16ヶ村にて600町余の田年々旱損の処、宝暦14年以来小田次左衛門父子の働で水取入仕法行届今に用水充分、庄屋共顕彰碑建立伺、許可 (年覚)。
 著書目録 御積善奉納記 地誌 鹿子木量平。

天保5 (1834) 甲午 (家齊) 斉護

1. 17 他国産使用および註文を尚3ヶ年延期、家中の他領旅行も引続き遠慮せしむ (肥)。是月 細川雅之進 (藩主斉護宇土支藩当時の息) 本家に入り長岡氏に改む (2月18日家中に通達) (肥)。時習館通学の往来にて争論する者あり、弊害少からざるを以て子弟心得方示達す、2月6日家老より通達 (肥)。当年大坂登米一切差留 (覚)。
2. 7 江戸大火、大挽町及鉄炮洲屋敷焼失 (度譜・肥)。13 小堀近山 (茶道) 没 (肥人)。15 当年帰国御暇下されず (本)。27 長崎屋敷類焼 (本)。28 溝口権之助家老代として熊本発、4月11日江戸着 (本)。是月 5年間格別倏約触 (肥)。時習館通学の往来争論たえず、更に訓告す (肥)。
3. 5 竹部長岡岡書下屋敷焼く (肥)。22 楯岡七左衛門大奉行就任 (本)。是月 熊本府内諸所出火 (肥)。
4. 一 御郡川々の絵図本年中に調製を命ず (肥)。
5. 3 江戸城修復手伝 (損)。6 大奉行楯岡七左衛門熊本発、6月11日江戸着、9月17日熊本帰着 (本)。8 9日迄大雨洪水、白川、球磨川出水 (肥)。是月 坂本庄左衛門江戸より下着 (本)。飽田・託麻疫疾流行 (肥)。
6. 4 諸手永蝗虫多し、2夜3日祈祷 (肥)。
7. 4 有吉市郎兵衛江戸発、8月10日熊本着 (本)。14 勇姫様誕生 (本・度譜)。20 1ヶ月間降雨少く、旱魃に付六所宮にて2夜3日祈祷、又各手永にても雨乞あり (肥)。是月 オランダ船より情報、スペイン戦争など (本)。
8. 21 二の丸平野九郎右衛門宅出火 (肥)。
9. 9 佐田右平奉行本役となる。坂本庄左衛門用人に転じ、永田金左衛門奉行副役となる (本)。12 江戸城二の丸修復手伝67,306両余 (91,600両とする史料もあり) 上納 (肥)。これにつき町在寸志を許す (本・肥)。是月 産物方を勘定所平準方へ併局 (本・度譜・肥)。本藩人口届出、593,661人、内男304,095人、女289,566人 (肥)。
10. 5 波奈之丸焼失 (本・肥)。13 西村半助奉行副役就任 (本)。25 靈感院 (重賢) 50回忌 (本・度譜)。是月 一門家来へ禁制の服着用を禁ず (本)。
11. 7 家中手取米特に従前通支給 (肥)。14 奉行松村英記歿す。70才 (本)。是月 藩主文武奨励の諭旨あり (肥)。(本・度譜は12月とす)。上納米仰付けらる、困糶20,000石 (損)。
12. 15 荒木伊兵衛乱心、数人を殺す (本)。16 藩主斉護左近衛権少将拝任 (肥)。(度譜は11月16日とす)。25 長唄稽古禁止 (肥)。28 当年損毛高168,443石余と届出 (185,287石余とする史料もあり) (肥)。是月 上益城・託麻水

利普請に数年骨折の百姓酒肴下さる (肥)。 著書目録 熊本府学校文武芸誘掖次第 法制 近藤淡泉。税法彙略 法制 坂梨順左衛門惟貞。歴木弁 博物、中島広足。

天保6 (1835) 乙未 (家斉) 斉護

1. 7 鬼門破りの鉄炮筒破れ炮手勝木万之助 (イ万兵衛) 死す (肥)。 是月 本藩田畑2万石を白米に摺、八代・川尻・高瀬より積出 (肥)。 役割所内の牢屋建替 (本・肥)。 矢部手永菅尾村山の椎茸仕立中止 (肥)。
2. 9 元奉行入江十郎大夫景福死す。79才 (肥)。 是月 監物出府中、平野九郎右衛門文武芸誘方任命 (本)。 陪臣の子弟寸志にて在御家人等への召出今後中止 (難稜)。
3. 15 江戸城二の丸修覆完了に付藩主に賞賜あり (肥)。 家老長岡監物熊本発、4月27日江戸着 (本)。 30 奉行下津久馬熊本発出府 (本)。 是月 稲津久兵衛奉行就任、永田金左衛門奉行本役 (本)。 在人数の者所々へ散り居るを復歸せしめ、拠所なき者は相応の出銭を徴す (肥)。 監物・式部大矢山行 (本)。
4. 4 阿蘇山鳴動 (肥)。 21 元奉行服部多門歿す。69才 (先哲)。 24日迄諸川満水 (肥)。 是月 山城・式部・九郎右衛門東目廻在 (本・度譜)。 土席の養子相続に付達 (本)。 在御家人養子寸志にて別株召出は以後とりやめ (難稜)。
5. 6 北の強風で甲佐・木倉・河原・大津・布田諸手永倒家倒木多し (肥)。 28 国学者長瀬七郎平真幸 (田盧) 歿す。71才 (先哲)。 30 衣類の華美不相応を取締る (肥)。 是月 下旬諸川出水、水浸田畑12,854丁2反余、死者17人 (肥)。 御国用鯨油御用にて洪江甚之助平戸へ派遣 (熊本史学28)。 僧侶還俗の節は元的人数に復歸させ、引戻先なきときは平人とする (寺例続)。 衣類横目を復活 (城南史 499)。
6. 10 洪水、浸水田畑 7,463丁4反余、溺死圧死3人 (肥)。 元奉行杉浦仁一郎勝英歿す。57才 (先哲)。 14 溝口権之助江戸発、7月21日熊本着 (本)。 17 奉行西浦九兵衛熊本着 (本)。 18 昼夜大風、夜は雨も強し (肥)。 28 長岡訓三郎 (後の詔邦) 生る (肥)。 是月 大坂詰目附を以後奉行兼勤とす。8月には大坂詰目附の方が奉行を兼勤すとあり (本)。 才能ある者を上申すべき旨書付渡 (本)。 オランダからの欧州情報 (本)。 文政11年以来中止の川尻盆後踊復活 (川尻史 596)。
- 閏7. 3 僧豪潮歿す。87才 (先哲)。 5 強風雨 (肥)。 11 衣類犯禁の者処罰 (度譜)。 17 21日迄東の大風、21日は大雨も (肥)。 是月 輕輩以下馬上挑灯禁ず (本)。
8. 22 此夜より翌日にかけ強雨、鯨手永低地の村、田畑 312町1反水浸、其の他被害あり (気・熊本県災異誌)。 27 養子縁組の細規を定む (肥)。 28 家老松野匡、奉行西村半助熊本発出府、10月1日松野帰着 (本)。
9. 11 高木作右衛門殿客屋一宿 (度譜)。 19 訓導阿部仙吾宅放火、伊藤石之助他騒動 (度譜・熊本史学43)。 21 塚本文之允、鎌田市左衛門果合 (本)。 25 家中雇人馬賃錢増額、飽田託摩にて人足72文その他48文 (肥)。 百姓の公事米錢出入につき去る文化9年示達あるも、浪人等関係して問題を起し今年の上納も怠るおそれあり11月迄上納を厳達す (肥)。 是月 大詢院 (治年)、50回忌京都にて (本)。 就君様御取越に付家中より追悼歌差上ぐる様沙汰あり (本)。

八代城附と佐敷番の者へ達 (本)。 100文銭通用始 (本)。

10. 23 前藩主斉茲卒す81才。謚諡了院覚海義広 (「本」は29日とするも、天保7年9月25日付長岡山城より八代城附組頭宛通達に今後23日に改むとする史料あり) (肥)。 29 斉茲遺骸御下、11月11日江戸発、12月24日泰勝寺にて葬送 (度譜)。 是月 3ヶ年格別儉約を命ず (肥)。

12. 9 仙石道之助領地44,000石没収 (本)。 18 家中手取米前年通り (肥)。 27 当年損毛 263,529石余と届出 (肥)。

是年 在中90才以上39人に養老米5俵宛下賜 (肥)。 泰宝丸造り替 (本・肥・覚)。 時習館建継 (本・肥)。 新牢屋建築 (本・度譜)。 野津原手永、惣庄屋引受にて山藪空地、請山藪の内竹木なき所 100町を限り開明願許可 (覚)。 荒尾手永清源寺村上沖洲村海辺の手永開の年貢、荒地と皆無畝を除き双場にて代線上納許可 (覚)。 松山手永高良村手永開築立入用銭、半分は郡方より支出、その代り徳米のうち半分は永久郡方へ上納とす (覚)。 阿蘇新地の内成川牟田開明について大宮司より神殿修葺料備のため出願あり、大宮司及阿蘇郡代へ示達す (覚)。 絵師根役矢野右膳へ元禄絵図 (公義差出) の控作成を命ず、格別手当白銀2枚郡方御銀より支出 (覚)。 著書目録 職制 法制 細川家。不知火考 地誌 中島広足。狩猟図説 諸家 木原盾臣。直垂考 諸家 木原盾臣。

天保7 (1836) 丙申 (家齊) 斉護

1. 19 松平安芸守様御舎弟死去 (本)。 21 松平安芸守様御叔父死去 (本)。
2. 26 阿蘇大宮司下屋敷より出火、寺社9カ所民家59戸焼失 (肥)。 是月 郡浦産の甘蔗にて氷砂糖、白砂糖製造 (肥)。 郡方扱事件と郡方・刑法方合議事件の管轄規定 (林制 485)。
3. 5 家老代長岡右門熊本発上府 (本)。 10 奉行稲津久兵衛熊本発上府 (本)。 14 元奉行渡辺善右衛門昭常 (游水) 歿す。93才 (先哲)。 21 雅之進、実名護前と改む (本)。 28 雅之進、長岡を改め細川氏を称す (度譜・肥)。 是月 町人犯罪について町方と刑法方取調管轄 (市雑坤 112)。 町会所会議吟味の折酒肴食事規定 (市雑坤 115)。
4. 17 長岡監物江戸発、5月25日熊本着 (本)。 20 大津手永鞍嶽より雲発し、俵山にかけ雷声強く大雹降る (肥)。 25 藩主斉護江戸発、5月30日熊本発 (本・肥)。 是月 本年よりなお5ヶ年間非常儉約、上々様御分料はじめ他所向請込金等一切減縮 (肥)。
5. 13 先年発布の衣服制度目安帳の遺漏を補う (肥)。 22 奉行下津久馬江戸より帰着 (本)。 是月 是月より7月初旬にかけ諸方降雨出水多し (肥)。 諡了院様御遺物、家老中へ下さる (本)。
6. 18 奉行西村半助鉄炮頭に転じ、竹内清太郎奉行副役に任ず (本)。 是月 是月頃御巡見使下益城郡境より五家荘に入り引返して芦北郡に向う (肥)。 オランダ船情報、フランス国王父子襲わる (本)。
7. 6 藩主、奉行所会議臨席 (本)。 この日より8日まで大雨、7日昼より大風 (肥)。 是月 木倉手永西木倉村矢部往還新道完成 (肥)。 家中拝領銭 (本・度譜)。 式部、文武芸倡方暫らく御免 (本)。
8. 27 昨年徒党の伊藤石之助・大塚仙之助他士分の子18人、歩段の子1人、百姓41人処罰、伊藤は刎首の上3日梟首、士分の父、兄も縁坐処罰 (御勘定所基録

・本・肥)。是月 有吉大蔵立元御用見習のため家老職出仕(本)。

9. 7 大槻堅五、小者栄八を手討(本)。 14 奉行西浦九兵衛死亡(本)。 23 奉行永田金右衛門退任(本)。 是月 藤本学三郎奉行副役に任ず(本)。 目附大坂詰中奉行代兼(本)。
 10. 7 坂本庄左衛門奉行再任(本)。 16 大詢院(治年)50回忌(本)。 是月 阿蘇・小国・南郷・久住凶作、御救米出る(肥)。
 11. 19 雅之進麻疹煩(本)。 北里・久住両手永非常不作に付当年年貢米の内種子粃拝借許可(覚)。 22 当年損毛高 388,972石余と届出(肥)。 27 高田手永萩原村百姓森右衛門倅久七妻3ツ子生む、銀5枚下賜(肥)。 当年不作に付造酒4割減(肥)。 公義囲米の内現有高11,000石使用のこと幕府へ届出(肥)。
- 是月 諦了院(齊茲)忌日、以来23日に御定(本)。
12. 11 この日と15日の両度、花畑にて任官祝能(本・度譜)。 是月 諸国洪水、諸物価騰貴、至貧の者を救恤す(本・肥)。 10月以來行倒39人(本・肥)。 長岡伊豆へ御側銀 300両遣わさる(本)。 松平右近将監へ 2,000両助力(本)。 仙台様・中川様・真田様等より御米御振替申来る(本)。

是秋 米価、錢 100目に付5斗3升8合(肥)。

是年 玉名郡部田見村に小開新地完成(肥)。 阿蘇南郷凶作に付、年貢代錢納とす(覚)。 八代郡代詰所焼失後、種山手永より野津手永へ移転に付、種山の跡地は起畝とし野津の方は御免帳・皆済目録等より上納米引除く(覚)。 種山手永受免補助のため氷川尻にて 150町、下益城五手永零落取救として河江海辺にて 300町、平準方 700町新地補助のため氷川尻にて 300町いづれも新地築立願出不可とす。但し築立支なき時節になれば相応の手永開は許可する旨あり(覚)。 五町手永白浜村海辺干潟1町程手永開、5年目より反当り5升宛郡方各別納とし残りは会所備とす(覚)。 蕨根製法聞取書出来(覚)。 続繁弥佐敷番頭となる。佐敷での替地吟味(覚)。 山城殿手取米の件につき八代・芦北両郡代へ通達(覚)。

天保 8 (1837) 丁酉(家斉・家慶) 斉護

1. 6 先月4日小倉城焼失、本藩見舞金 3,000両贈る(肥)。 23 大雨洪水にて麦作数百丁水浸し(肥)。 梶山桂谷(画家)没(肥人)。 是月 藩主、田租のうち2割(54,000石)を囲米に命ず(肥)。 津軽様より借米申出あり、断る(本)。 水野越前守などより凶作に付米御所望あり(本)。
2. 19 大塩平八郎の乱(本)。 27 島原一揆落城より 200年に当り、討死者のため安国寺にて茶湯執行(肥・本)。 是月 去秋不毛に付、在中開帳・見世物・芝居等すべて禁止(肥)。 居寮生望の者にかかわらず、選抜入寮させる様仰付出さる(本)。
3. 11 藩主斉護熊本発、小倉路、4月17日江戸着(本・肥)。 白米30俵持参(度譜)。 中老平野九郎右衛門・奉行竹内清太郎熊本発上府(本)。 14 大雨出水(肥)。 24 大雨出水(肥)。 30 細川能登守息女於徳死去(本)。 是月 稻津久兵衛中着坐同列に昇格(本)。 この月行倒生死不明27人、物貰多し、三分の一は他国者なりという。4月以後も行倒、物貰多し(肥)。
4. 2 將軍家斉隠居、家慶嗣ぐ(肥)。 7 野尻手永雷鳴半時程にて氷降り、1寸5分程積る(肥)。 9 内田・坂下・小田方面雷鳴、風雨、50目玉位の氷降

る (肥)。 是月 非常凶作救恤のため寸志嘉納 (肥)。 この月より 5 月にかけ天候不順、大霜・大氷度々あり (肥)。 池田手永疫病流行 (肥)。 上酒 1 升值 3 匁 8 分以下と定む (肥)。

5. 7 徳川民部卿様逝去 (本)。 21 細川雅之進嫡子に決し護前となる (肥)。
25 家老代長岡右門江戸より下着 (本)。 27 球磨川洪水 (肥)。 29 奉行稲津久兵衛江戸より下着 (本)。 是月 矢部手永民食乏しく檜実 5,000 俵会所より賦つ (肥)。 続甚之助、中嶋玄太郎を打果 (本)。 逐電出奔の跡式立てたる旨刑局通議の上決まる (難稜)。
6. 9 寺原町 74 軒焼失 (本)。 29 溝口蔵人貞直大奉行就任 (本)。
7. 16 大塩の与党の内 10 人公義より預けらる (度譜)。 是月 阿蘇山時々荒れ、よな降る (肥)。 諸国疫病流行に付、幕府薬法を示す (肥)。 細川能登守、將軍宣下に付、勅使御馳走役 (本)。 雅之進、細川能登守息女御茂と縁組 (本)。
8. 2 肥後古記集覧の著者、大石十郎右衛門長竜歿す。48 才 (先哲)。 是月 富田茂七 (砥川村庄屋) 没、年 78 (肥人)。
9. 2 將軍宣下 (本)。 9 阿蘇山鳴動 (肥)。 28 新開築立 10 町以上は藩主まで達すべきこと (覚)。 是月 吟味役、郡間・勘定所に日々出勤制 (本)。
10. 3 細川長門守卒去 (本)。 23 諦了院様 3 回忌 (本)。 オランダ船情報イスパニヤ国戦争やまず (本)。
11. 20 家老松井直記誠之歿す (本)。 是月 勝手方処理の方法を古風に戻すこととす (本)。 米双場銭 100 目に付 5 斗 6 升 (肥)。
12. 一 50 挺頭の大番所御番を免ず (本)。 内山浅右衛門、実兄を討果し自殺、内山家亡ぶ (本)。 在御家人跡目芸数規定、11 年 2 月、14 年 12 月にも定めあり (難稜)。

是年 関東凶作に付、米 1 万石を幕府に献上 (肥)。 家中手取米従前通り (肥)。 90 才以上の者 67 人に養老米 5 俵宛下賜 (肥)。 深川手永窮民取救のため非常備より 50 貫目惣庄屋引受来暮まで拝借認む (覚)。 河原手永出田村零落取救 (覚)。 佐敷手永小田浦村新地一件の事 (覚)。 錢塘手永 20 丁村手永開及び自勘開年貢反当額きめ、普請料引除認めらる (覚)。 能登守様新地加入について願あり (覚)。 当年風災高潮虫入等の損毛高 302,854 石 (気) (「損」には 101,700 石余とす)。

天保 9 (1838) 戊戌 (家慶) 斉護

1. 一 役割所内に蔵新築、役割所門南手へ移動 (肥)。
2. 9 阿蘇山よな降る (肥)。 11 深田玄随 (物産師) 没、年 75 (先哲)。 12 諦観院様 13 回忌 (本)。
3. 7 家老代長岡右門熊本出立 (本)。 8 船材用楠の太木の調査命ず (林制 491)。 10 江戸城西の丸炎上、本藩上納金 85,000 両の外米穀を献ず (実紀・本・度譜)。 11 奉行竹内清太郎下着 (本)。 16 去冬 1 万石上米につき幕府より時服拝領 (実紀・本)。 22 奉行藤本学三郎熊本発上府 (本)。 是月 疫病流行死者多し (肥)。
4. 24 公義代替に付、武家諸法度読聞かせ (本・度譜)。 藩主、就封のいとま (実紀)。

閏 4. 6 藩主江戸発、5 月 13 日熊本着、小倉路 (本)。 14 巡見使、熊本通行 (本)

・肥)。五家莊視察の上18日八代通行、芦北方面へ(肥)。21 中老平野九郎右衛門江戸より下着(本)。是月 下旬より5月下旬にかけ時々強風雨出水あり(本・肥)。大坂にて足輕段及御用達手代共への御用申渡は大坂詰勘定根取が担当す(本)。

5. 27 大風(肥)。是月 時習館往来にて崎村只之助口論、相手を切殺、帰宅の上切腹、双方共12、13才なり(本)。春木七兵衛、養田を切殺、嫡子仇討(本)。

6. 18 藩主封地到着を謝し、使をまいらす(実紀)。24 西国巡見使3名熊本通行川尻泊り(実紀・本・肥)。是月 幕府よりの達により格別質素儉約を命ず(本・肥)。中老平野九郎右衛門勝手方上聞(本)。

7. 23 八代方面前夜より大風、この日夕刻大雨、24日夕刻大雨雷鳴(肥)。24 内田恒助勘定所御用調方命ぜらる(度譜)。是月 鯨手永水浸(肥)。諸郡村村盛衰調査(肥)。大風倒木の取扱につき達(林制 492)。家柄の者奪祿の跡召出規定(難稜)。

8. 2 巡見使高森泊り、3日阿蘇へ(長野内匠日記)。13 秋月筑前守嫡子卒去(御前様姪慶前公従弟)(本)。20 大塩与党預人処刑(度譜)。28 去18日火災の折人数指出(実紀)。是月 式部章之、細川長門守女と縁組(本)。

9. 一 勝手向に付、藩主直書、利政筋差止(本)。再春館を南坂下備前屋敷に建てること一旦決定(本)。大坂留守居を目附より兼任とす(本)。大坂にて借銀 3,100貫目(度譜)。

10. 31 近年銀子払底、11月より金1両につき銀60目とす(本・度譜・肥)。是月 家中拝領錢(本・度譜)。天守方御用矢筈竹剪、沼山津手永御山では8月剪のところ、今度11月に試みる(林制 493)。細川長門守見聞のため江戸詰、吟味役より差越さる(本)。

11. 23 当年損毛高 370,620石余と届出(肥)。是月 文武芸専門修業始まる(本)。江戸登り、高瀬通り禁止(本)。鹿島新地・松橋新地・亀崎新地完成(本)。勝手方案へ御直書差廻さる(度譜)。

12. 22 久住町80軒焼失(肥)。28 大分府内領で 960軒焼失(本)。

是年 当暮手取米・切米共に代錢支給、現米望の者は口数に応じ代錢上納せしむ(肥)。大津・郡浦・松山・飽田・託麻諸手永風倒家再建竹木代、火事の節の半分支給(年覚)。薪方御用球磨炭買上に付、津口無運上にて通し方指示(年覚)。

久木野手永寒川村大堀御山にて小物成方仕入炭焼許可、元木代1分宛は米銀方へ上納のこと(年覚)。荒尾手永野原・金山両村御山にて清藤源之助に石炭試堀許可(年合・年覚)。八代焼物師入用臼材渡下さる(年覚)。正院手永中浦村にて石灰焼方3年許可(年合)。八代高田手永下豊原村にて石灰焼方試のため3年許可(年合)。高田手永敷河内御開五穀成就祈祷(年合)。但馬より塗師招き矢部にて椀類出来、用材御山から渡す(年合)。再春館御用に付、在中にて天竺黄見付れば差出す様、見本を添えて触(年合)。浦船数年改方なく此節改方仰付らる(年合)。荒尾手永宮内出目村御山開明け許可、徳米20年間すべて救恤備として渡下され、その後郡方納とす(年合)。南関町悟真寺諸大名通行の節御退所の由にて修覆材木拝領願出ずるも不許可(年合)。薩州馬口旁、商売駒を芦北内に野飼して紛争生ず、此節双方熟談解決(年合)。深川手永風倒の木、御山の分は郡用として囲、社床分は修覆料に渡、其余は代錢上納

にて渡す (年覚)。坪井川筋大槻弾藏・安井方助屋敷表通水当り強く崩落、しがらみ懸方指示、その後石垣築方命ぜられ費用は町方・屋敷方・郡方より支出 (年覚)。内牧往還道造料の拝借錢返納について別段を以て残高当暮来暮の両度分割とす (年覚)。水前寺漁に御出の節の漕手船頭川尻より陸路夜半に砂取に到着に付、同所に立宿1カ所定め、着替持夫も渡下す (年覚)。湯浦手永中園村十助木場畑焼の節御敷内に火入、焼跡仕立方だけ郡代限りで申付 (年覚)。砥用手永安懸村御山仕立替にて伐採中、立置筈の楠欒切取に付、郡代限抜方、代金は米銀方へ上納さす (年覚)。家中一統拝領錢仰付られ郡方小細工御座へも支給 (年覚)。中山手永宇土知行所安見村畑地に新堤掘方許可、それにつき費地及び開明上徳米につき指示 (年覚)。堀川堀方開始、鯨等5手永よりの出夫員数報告する様 (年覚)。八代漕御用紙上納の処、箱13痛損じに付、作り替を命じ用材は郡横目見分の上渡 (年覚)。著書目録 郡政夢物語 法制 河口新左衛門貞澄

天保10 (1839) 己亥 (家慶) 斉護

1. 27 矢部手永大矢御山榎木尺廻り調査 (林制 496)。是月 藩主留守中の城代を長岡伊豆とす (肥)。正月表服5日迄半上下、6日より半服 (本)。
 2. 5 溝口蔵人熊本発上府 (本)。7 奉行下津久馬退任 (本)。9 藩主熊本発、3月17日江戸着、中国路 (本・肥)。23 辛島才蔵歿す、86才 (先哲)。是月 沢村太兵衛奉行復任、3月熊本発出府 (本)。
 3. 1 長岡義之助 (護久) 生る (肥)。11 御判物御道中藤沢駅へ到来 (本)。17 御城西大手御門作事に付、往来通行止 (壁書)。28 大御所様、大御台様西丸之御移徙 (本)。是月 家中知行取、知行所零落又は遠方等にて払方難渋の者は知行所外の村々より受取許可 (触)。
 4. 1 奉行竹内清太郎歿す (本)。11 細川亘、日奈久湯台へ出立 (本)。20 大雨洪水 (肥)。28 長岡右門江戸より下着 (本)。
 5. 21 右大將様前髪御執 (本)。26 奉行藤本学三郎歿す (本)。28 洪水 (肥)。是月 幕府目附大沢主馬、熊本通行、20日八代泊り人吉へ (本・肥)。大里角左衛門奉行副役に任ず (本)。
 7. 17 相良頼之致仕長福相続 (実紀)。19 星野龍助 (三道師範) 没。年76 (肥人)。
 8. 8 藩主御姉様死去 (本)。28 榎木の本数、成実採量の調査、榎方の外水前寺蟬締所及び民間植栽のものあり、全体把握のため (肥)。是月 真野源之助奉行副役に任ず (本)。
 10. 一 諸役所出入町人、長年出精による影踏御免・進席等、町役と不対ゆへ今後は金銀錢拝領を原則とし進席等容易に認めず (市雑坤 113)。
 11. 13 訓三郎袴着 (本)。15 長岡興礼致仕興泰相続 (本・肥)。22 鹿島新地潮留工事 (肥)。
 12. 6 西丸造営上納金により將軍より刀・時服拝領 (実紀・肥)。(「本」には11月6日とあり)。8 竜ノ口屋敷火事 (本)。26 当年損毛高 166,259石余と届出 (肥)。是月 1朱銀通用停止 (本)。
- 是年 波奈之丸再造 (肥)。芦北日奈久村弥右衛門御用瓦買上に付、作事所御用錢拝借願うも不許可 (年合)。水俣手永頭石村吟左衛門、中国の木地師1人塗師

1 人雇入椀類製造願、毎年用材10本宛運上を以て5年間下渡す(年合)。古町村喜伝次、祇園山にて瓦焼の処不便に付、阿蘇森川端に場所替許可(年合)。往還路補修多くは手永受か郡中受なれど、地場受持なき所は受持村を定め小破の内に手入する様、郡横目・郡目附付横目に道橋見廻りを命ず(年合)。石灰焼方これ迄年限を切つて許可の処、今度新規願出の伊豆殿・山城殿その他在中より願出の分不許可、右石灰利害得失再検討の上見込の趣上達すること(年合・年覚)。坂下手永下沖須村井樋尻の砂と島原の栗石交換を許可す(年合・年覚)。高瀬川浚料として築立の横島開徳米の内小田手永荒備のため囲蔵1軒新築(年合・年覚)。池田惣庄屋より高野山赤松院配札、御初穂定規の外廻村御断言上(年合・年覚)。伊豆殿よりの石灰焼願不許可の処、正院手永中浦村にて年限限を以て御免の株を譲受、年限中焼方願、許可す(年合・年覚)。坂梨手永東下原村大名平御山を開明、新屋敷御免、反当り2斗2升づつ来年より上納を命ず。三分の一は郡方へ納、三分の二は救恤備として渡下す(年合)。山鹿手永小原村と中富手永岩原村の経界論争、此節郡吟味役派遣、解決を命ず(年覚)。合志両手永秣場につき争、解決策伺いあり(年覚)。荒尾手永金山・野原両村御山にて採炭、宇土海辺御山より用材売渡し(年覚)。布田手永、天保7年の非常凶作にて糧物難渋、御山より薪取許可、右代銭1貫321匁4分米銀方へ上納のこと(年覚)。本庄手永今村の平準方歩入所間狭に付畑新屋敷願許可、但し土免通り上納のこと(年覚)。内牧町数度の火災で零落し拝借願銀31貫500目5カ年据置6年目より5年賦返納で貸付(年覚)。本庄手永九品寺才七、馬口芳札盗まれ再交付願銀1枚の過料にて交付(年覚)。馬見原町九七郎、古株を以て樟脳製法願(年覚)。砥用手永古閑村等4カ村請蒨開明願(年覚)。御本方御用求磨炭、天保8年10月より10年9月迄仕入分のうち倉本孫左衛門分現炭不納に付代銭納とす(年覚)。稲穂・粟穂、江戸へ差登(年覚)。小田手永伊倉在七筋川浚方開始につき土置場2町余仕立(年覚)。井手口水道石にて懸方仰付られ柱石井芹御丁場になく松山手永綱津村の御山より取出(年覚)。木倉手永水越村に産物歩入蔵取建竹木渡(年覚)。布田手永凶作に付城尾山より薪取、代銭は1駄2分上納さす(年覚)。水前寺苔場へ野水流込に付本庄手永長嶺村に野水堀作る(年覚)。著書目録 檀園集 歌文 中島広足。桂源遺事 史伝 草野石瀬。

天保11 (1840) 庚子(家慶) 斉護

1. 24 長崎で唐船難船(本)。御台様薨去(本)。
2. 17 妙解院 200回忌(本)。「肥」は3月17日とす。21 細川雅之進將軍に目見(実紀・本)。22 松材少なきを以て代用として梅檀仕立を奨励(林制 5 25)。是月 商札・職札以後は熊本町の外4カ町へも渡(市雜坤 114)。
3. 1 家老代堀平左衛門熊本発上府(本)。3 雅之進月次初めて登城(本)。府内百姓騒動、鶴崎へ加勢人数を達す(本)。13 雅之進従4位下侍従兵部大輔慶前と称す(肥)。
4. 9 坊主丁より出火1本竹まで焼く(本・肥)。28 宇土より八代迄の間の新地及びその海上1里内を鷹場と定む(肥)。
5. 15 藩主江戸発、6月16日熊本着(本)。17 大雨洪水(肥)。29 溝口藏人江戸より下着(本)。是月 新3丁目御門内に魚会所建(肥)。

6. 15 昼夜3・4度地震、八代芦北強震、21日も強震(肥)。 28 後藤林太酔酊にて門内に入込み抜刀につき打果す(本)。 是月 数回大雨、出水(肥)。 勇姫、松平越前守へ縁組(本)。
 7. 14 細工場火薬に引火死者5人(本)。 22 奉行大里角左衛門熊本発上府(本)。 是月 降雨繁く田方虫付、宇土は旱損(肥)。
 8. 12 長岡寛五郎誕生(本)。 15 友田源左衛門、志水但馬家来を打果(本)。 是月 長岡隼人興泰、在仲と改む(本)。 川尻町奉行、大工・左官らの賃銭定む(川尻史250)。 鳥方及び台所御用の矢篠竹を各郡より集む(林制525)。
 9. 29 沢村弾助喧嘩、知行召上(本)。 是月 慶前元服、花畑で能あり(本)。 本藩人口届出 593,651人内男 303,923人、女 289,728人(肥)。
 10. 19 府内の百姓150人野津原へ来り不平を訴う。21日引取る(本・肥)。 23 賄物所蔵2つ焼失(肥)。 25 5カ年間引続き格別儉約(肥)。 是月 奉行沢村太兵衛江戸より下着(本)。
 11. 8 家老長岡山城病死(肥)。「本」は9日とす。 19 仙洞崩御(本)。 23 当年損毛高 220,494石余(肥)。 是月 有吉市郎兵衛足高 200石本知繰入れ(本)。 宮川寿太郎殺人出奔(本)。
 12. 27 寺川家断絶(本)。 28 幕府月次賀例、細川兵部大輔出席(実紀)。
- 是年 90才以上の者 176人に養老米5俵宛支給(肥)。 榎12,000斤収穫あり(城南史452)。 古町市原惣五郎小国明礬捌方受込(年・年覚)。 家中炭払底、求磨炭値段交渉を佐敷惣庄屋に命ず。妥結に付前金支払(年合・年覚)。 摂津神宮寺より下向、開所納経(年合)。 日奈久町波戸築立居屋敷仰付らる様出願(年合)。 本庄手永九品寺村声取坂渡場修覆(年合)。 麻生田地筒兩人上立田村にて歩入所取建のため新屋敷願、許可(年覚)。 浦船及水夫櫓手頭として川尻詰目附に廻浦命ず(年覚)。 筑前様留守居より榎実買入に付長崎留守居へ相談あり(年覚)。 矢部町浜井上次兵衛難波にて家伝の熊膽丸仕入に困り資金拝借、なお惣庄屋より諸役間にて買上を願出(年覚)。 荒尾手永 金山・野原両村御山にての平準方御用石炭堀に入用の材木、宇土御山より売払(年覚)。 池田会所牢屋質屋破損に付会所長屋門内に移築(年覚)。 正院手永小畑村にて石灰焼願不許可(年覚)。 中山手永下上江村の者馬口旁札盗まれ再交付、過料銀1枚(年覚)。 徳王塩硝拵所近辺火除杭木伐出に付御山支配役指揮、出夫飯米1升(年覚)。 往還及び村道修補に付、郡目附付横目より指示(年覚)。 内牧火災借金返済につき去年分より5カ年間猶予(年覚)。 味取新町零落に付、米銀債方差免ず(年覚)。 小峯山訓練の節諸払物及び出夫飽田・託摩で分担のこと(年覚)。 著書目録 御免方大意 法制 荻角兵衛。矢部風土記 地誌 渡辺質。 榎園長歌集 歌文 中島広足。

天保12 (1841) 辛丑(家慶) 斉護

1. 8 本間忠助没す(先哲)。 10 大雪(肥)。 25 松井章之家督相続、4月2日佐渡と改む(本・肥)。 是日 近藤英助時習館教授に任ず(先哲)。
- 閏1. 27 藩主実母死去(本)。 30 家斉死去(本)。 是月 金銀払底に付、6月迄市立・参宮差止め(肥)。 士席浪人格・町独礼、別当在勤中は一系列の帳口に附(市雜乾140)。
2. 9 奉行沢村太兵衛用人に転じ、荒木万蔵副役に任ず(本)。 22 強風、所々

倒家、先月来降雨繁に付祈祷(肥)。是月 市在士席浪人格の養子取組を制限す。万延元年修正(市雑乾 141)。

3. 一 有吉将監没(本)。強雨頻々5月中旬まで、正福寺にて祈祷(肥)。
 4. 4 有吉市郎兵衛、家老、大木舍人、中老となる(本・肥)。6 藩主熊本発、5月5日江戸着(本)。7 長岡佐渡八代発7月1日將軍初見、11月22日八代着(実紀・肥)。14 家老有吉市郎兵衛熊本発、5月28日江戸着(本)。20 義之助(護久)疱瘡、酒湯灌せらる(本)。21 奉行大里角左衛門死す(本)。24 強雨、諸川満水(肥)。是月 錢塘村に学料新地築立(本・肥)。尚3ヶ年間儉約を命す(本)。諦了公(齊茲)遺事しらべの命あり(本)。菊池郡河原・深川両手永植立の木数調査(林制 532)。
 5. 2 馬乗方につき触あり(本・肥)。13 東叡山火之番(本)。21 真野源之助出府(本)。是月 阿蘇大宮司家来育のもの悴打果(本)。風雨強く倒家などあり(肥)。
 6. 4 堀平左衛門江戸発、7月16日熊本着(本)。10 五町手永白浜村、荒尾手永長洲村火事(本)。24 真野源之助奉行本役となる(本)。
 7. 4 鹿子木量平死す、年89(先哲・肥)。6 致仕新田支藩主采女没す(本・肥)。13 松尾如涛(俳人)没(肥人)。是月 上野十平奉行副役に任ず(本)。京都後藤四郎兵衛役人、分銅改に来る(肥)。士席以上の祭礼見物について触あり(本)。宇土、潮受提防工事に着工、天保14年完成(宇土史87)。
 8. 一 幕府役人、二百石積船検査に来藩(肥)。老中宅へ万石以上の家来立入につき触あり(本)。
 9. 27 鶴崎地方地震、倒家多し(肥)。
 10. 1 節儉質素の風、行はれる由に付書付渡さる(本)。10 公義より囲米を令す(実紀・本)。23 諦了院(齊茲)七回忌(本)。26 諸候献上品、代金上納となる(本)。
 11. 9 慶前、前髪執(本)。11 右大將様西丸に移らる(本)。15 家老有吉立生隠居、養子立元家老となる(本・肥)。20 佐渡章之熊本着(本)。21 姫君様、御簾中様と奉称(本)。
 12. 5 儒医村井冠吾死す。年73(先哲)。26 本藩損毛高23万石余(肥)。
- 是年 新出町の在受分を町地にしたい願(年合)。本庄手永別所村善光寺、本山河原出開帳について達(年合)。高野山赤松院下地配札外檀家廻在について大坂屋敷へ願出の趣叶がたきとの返答の事(年合)。白川渡船建造および諸人渡方差免ぜらる(年合)。八代球磨川筋渡舟賃のこと(年合)。小田手永大浜町渡舟造替(年合)。長洲町数百軒火災に付苦拝借願(年合)。矢部手永の下駄挽方運上について達(年合)。筑前蜷山鹿町にて売弘めについての究(年合)。菅尾手永馬見原町九七郎へ樟腦製法許さる(年合)。荒尾手永長洲町馬場助左衛門に嶋原蠟売弘め許さる(年合)。平準方新地塩屋浦干潟に築立仰付らる(年合)。甲佐手永糸田古閑両村境、目鑑橋にかけなおす(年合)。高森手永受免補助備等に付て達(年合)。進上用の山慈姑・佛手柑仕立について達(年合)。平準方御用石炭についての達(年合)。この秋、横井小楠「時務策」を著す、藩政批判(熊本法学19号)。著書目録 新撰事蹟通考 地誌 八木田桃水。

天保13 (1842) 壬寅(家慶) 斉護

1. 9 蔵人出立引返 (本)。 19 前藩主の忌日を2月2日と改む (肥)。
 2. 2 諦観院 (齊樹) 17回忌 (本)。 是月 広大院様従一位勅許 (本)。 五町手永近津村海辺に手永開新地築立30丁余 (肥)。
 3. 7 家老代長岡右門熊本発上府 (本)。 15 訓三郎 (藩主息昭邦) 丈夫届 (本)。 是月 江戸料理茶屋酌女・深川売女等指除かる (本)。 江戸市中商人共へ役場仲間其外銭貫縄押売を禁ず (本)。 川口学科新地 100町歩余汐留工事 (川尻史 293)。
 4. 11 江戸においても初もの野菜売買禁止 (本)。 23 藩主就封のいとま賜わる (実紀)。 29 藩主江戸発、6月1日熊本着 (本)。 是月 北浦新地120町成る (本)。
 5. 26 強雨、池田手永で被害 (肥)。 28 家老有吉市郎兵衛江戸より下着 (本)。 是月 家中の拝領屋敷を整理 (肥)。
 6. 23 八代高田手永西宮地・東宮地に紙楮会所建つ (年覚)。 是月 馬の価格の最高値を制限す (本)。 奉行荒木万蔵、熊本発出府 (本)。 幕府より出版統制令出る (本)。 長崎定問屋を定宿と改称 (壁書)。 無苗の者寺院譜代一季若党に召抱える寺柄究 (寺雑附)。
 7. 25 無役の面々御番を頻々断わるに付達 (本)。 是月 早ばつ、雨乞、下旬より追々降雨 (肥)。 歌舞伎役者の扱いを定む (本)。 江戸出家社人の町屋借宅禁止 (本)。 石灯笼等高値の品商売禁止 (本)。 異国船無二念打払指止 (本)。 川尻盆踊の饗応儉約令 (川尻史 608)。
 8. 21 家老松野直行隠居、平野九郎右衛門家老となり溝口蔵人中老となる (本・肥)。 是月 草字二歩判等停止 (本)。 異国船防禦について触 (本)。
 9. 1 奉行真野源之助江戸より下着 (本)。 7 長岡護美生まる (肥)。 16 岩村多左衛門二男、久木野定を殺害す (本)。 是月 川尻町にて大坂の仙助能を行う (川尻史 577)。 異国船防禦に付、諸侯の武器員数書出仰付らる (本)。 町会所吟味の節の座配規定 (市雑乾 142)。
 10. 2 幕府高島秋帆を捕う (肥)。 22 山支配役の待遇について達 (林制 534)。 27 幕府、諸侯の物産専売を禁ず (肥)。 是月 金銀貸借利足について触 (本)。 長崎定宿の名称を止む (壁書)。
 11. 3 文恭院 (将軍家斉) 3回忌 (本)。 5 藩主8日迄八代新地などで簡猟 (本・肥)。 17 嶋又左衛門奉行に任じ、寺社方専職となる (本)。 是月 平準方を廃し榎方に併す。引除方をおく (本・肥)。 水前寺蟬締所を廃し、榎方が仕事をつぐ (本・肥)。 儉約を命じ、拝借金を切捨つ、諸経費激減す (触状・肥)。 本藩損毛高16万石余 (肥)。 江戸で人返し (本)。 寺社町奉行所再建 (「肥」には12月24日とあり) (本)。 衣服制限令 (本)。 江戸近海警備筋について伺 (本)。
 12. 24 勇姫 (藩主娘) 疱瘡酒湯 (本)。 是月 長岡監物3ヶ年非常省略につき達 (本)。 質素儉約触 (本)。 訓三郎 (藩主息・慶順) 疱瘡 (本)。 御開札旧復 (本)。 諸奉公人給金等につき触 (本)。 長崎表改革 (本)。 御手当兵糧積定規しらへ成る (本)。 加子より船頭へ繰上げ改革につき達 (難雑)。
- 是年 鮎田郡川口村に鯨油新地築立 (潮害)。 木倉手永より紙楮上納に付、楮皮1貫目2匁5分とす (覚)。 小物成方銀所物書今村彦太郎、割賦塩下し願 (覚)。

甲佐手永糸田麻生原両積洪水にて破損す (覚)。 文政吹の金銀停止について同 (覚)。 本庄手永渡鹿井樋漁留建札ゆるさる (年覚)。 久木野手永寒川村柊粉製方水車運上銀免ぜらるとの達 (年覚)。 進上御用豊後梅仕立方について (年覚)。 郡浦会所在牢および質屋新規建替 (年覚)。 正院手永味取新町火事 (年覚)。 中山手永下上郷村に矢篠仕立方免らる (年覚)。 八代蘭表作事用不足につき、速に売渡よう達 (年覚)。 国産樽丸大坂積登について (年覚)。 水俣手永大藪村・仁王木村、柊木の線香の粉仕立について達 (年覚)。 矢部・阿蘇・南郷・小国・久住内にて日向者の樽丸仕入に付、他邦者への売捌見合の達 (年覚)。 著書目録 馬術問答薙之道 諸家 米田是容。

天保14 (1843) 癸卯 (家慶) 齊護

1. 9 寛五郎 (齊護息津輕家へ養子) 酒湯 (本)。 25 米昌院3回忌 (本)。 是月 奉行稲津久兵衛佐敷番頭上座 (本)。 朝鮮人参座売相止らる (本)。 網津笠岩新地 120町汐留め (川尻史 293)。 在家人数逐年増加に付、なるだけ減すよう達 (難稜・年覚)。
 2. 5 藩主熊本発、3月4日江戸着、3月14日参勤 (本・実紀)。 14 竹田城下火事 (本)。 18 奉行佐田右平に旧記調上聞を命ず (本)。 是月 稲津久兵衛熊本発出府 (本)。 江戸表格別取締に付達 (本)。
 3. 一 上旬、竿の如き白気出ず (肥)。 高島秋帆江戸へ護送、これに座してその弟子本藩天文算学者兼炮術師池辺啓太も江戸藩邸に幽閉 (本・肥)。
 4. 一 將軍家日光社参 (本)。 関東筋無宿者召捕の触 (本)。 朱座より直買御免 (本)。 八代鹿島新地を長岡佐渡に与う (触)。
 5. 1 5日まで良之助。義之助の兜拝見 (本)。 17 東叡山火の番 (本)。 30 球磨川出水 (肥)。 是月 華麗な家作奢侈禁ぜらる (本)。 備前家来池田治内、城助左衛門を打果自害 (本)。 市中取締筋受込役へ勤務心得条目 (市雑乾 143)。
 6. 一 奉行荒木万蔵江戸より下着 (本)。 八代町別当在勤中苗字御免については文政2年6月の町方僉議による (難稜)。
 7. 18 小笠原太膳大夫卒去 (本)。
 8. 26 28日迄3日間田畑引合せ (長野内匠日記)。 是月 早魃、正福寺で祈祷 (肥)。 漂流日本人受取に付て触 (本)。 留守居番方尾藤貞右衛門、弟を手討 (本)。 真宗一寺の子弟の還俗、家中養子縁組、医業従事等許されず (寺雑附)。
 9. 3 大風高潮、海辺新地被害 (肥)。 球磨市中出火 (本)。 29 長岡義之助、良之助二の丸屋敷に入る (肥)。 是月 家中一統三割減 (本・触)。 川尻町民庄藏、唐土広澳門より川尻茶屋嘉治郎に漂流の書状を出す (川尻史 366)。
- 閏9. 一 松橋ならびに小川尻新地入用材木、水俣海辺御山より下付の許可出る (林制 559)。
10. 一 長崎市中大火 (本)。 是月 稲葉能登守所旁に付山室宗全を遣さる (本)。 戸波群之助家断絶 (本)。
 11. 一 奉行所分職に手当方を新設 (肥)。
 12. 28 江戸上屋敷近火 (本)。 是月 長崎入津唐船日本漂流人を護送 (本)。 下旬より天草大矢野で百姓騒動 (本・肥)。
- 是冬 日奈久並八代・芦北催合新地成る (本・肥)。
- 是年 宇土郡住吉新地成る (肥)。 本藩損毛34万石余 (肥)。 御進上漕漬鱒品替、

弘化元 (1844)

音信所より達につき鶴崎芦北郡代へ達 (年覚)。野尻手永村々勸農の芋仕立方につき達 (年覚)。五町手永にて天守御用矢筈竹仕立の事 (年覚)。銭塘手永走潟の榎梓以後賄物所へ払方の達 (年覚)。佐渡殿より樟脳製法再興について懸合 (年覚)。駄馬に米3俵付る儀奉行より尋ね (年覚)。柞灰捌方について肥前表へ村田幸次郎・右田嘉十郎差越す (年覚)。芦北六手永山藪内にて天守御用方矢篠仕立方の事 (年覚)。深川在にて試焼の柞灰、残壳払代錢会所備とす (年覚)。水俣手永仁王木・大藪両村にて柞粉当年運上免ず (年覚)。小国製明礬大坂登再興成らざる旨達 (年覚)。味取新町火事達の宿駅取建のこと (覚)。大牟田蘭表捌方郡代直触寺田林七引受く (年覚)。就君様薬用纈執方につき褒賞鳥目渡さる (年覚)。鷹方御用鳥もち矢部手永目丸村新助へ仰付らる (年覚)。深川手永村田村より山慈姑進上御用の達 (年覚)。野尻手永中間村勸農の麻芋仕立のこと (年覚)。内田手永会所在牢内囲新規建替 (年覚)。湯浦手永平生村床御開、荒地出来分当毛荒並の事 (年覚)。進上御用仏子柑不作につき八代密柑床仕立方達 (年覚)。水俣手永質屋新規建替 (年覚)。中山手永神園村懸山畝にて矢篠仕立御免 (年覚)。沼山津会所、沼山津村へ所替 (年覚)。荒尾手永長洲新塘破損に付て普請の入用材木伐出達 (年覚)。長洲町火災、島原様下宿所を勤る者の家再建のこと (年覚)。川尻御蔵矢部米 250石、江口半兵衛へ払出 (覚)。川尻町江口半兵衛両替店立つ (覚)。野尻手永麻芋、球磨芋製に仕立の上鯨油交易の願につき10貫目歩入拝借仰付らる (覚)。富譚猶5年間新規富畳置く (覚)。この年初め実学党発足 (長岡監物・横井小楠・下津久馬・荻昌国・元田永孚) (熊本法学19号)。谷清兵衛 (金衛) 没 (肥人)。
著書目録 倚輪小玩 地誌 田代高仰。治鏡録 教訓 米田 是容。

弘化1 (12. 2 改元) (1844) 甲辰 (家慶) 斉藤

1. 21 家老平野九郎右衛門出府、5月1日帰着 (本)。26 厄入に付、家老中催合祈祷 (本)。是月 江戸にて鉄炮角場取立 (本)。寸志奉公者の取扱につき達 (肥)。
2. 一 監物、宇土へ猪狩 (本)。市中酔狂・あばれ・口論等町方限の杖方規定 (市雑乾 144)。
3. 11 家老沢村宇右衛門出府 (本)。13 寛五郎袴着 (本)。是月 国中の竹枯れる。正福寺にて祈祷 (肥)。
4. 21 儒者松崎退蔵没す、年74 (先哲)。27 世子慶前江戸発、6月4日熊本着 (本)。30 寛五郎江戸発、6月18日二丸屋敷着 (本)。
5. 10 江戸城本丸炎上、本藩に上納金を課す (実紀・肥)。是月 有吉市郎兵衛勝手方上聞御免、平野九郎右衛門委任 (本)。
6. 2 天草大風 (肥)。6 中老大木舎人江戸より下着 (本)。13 八代大風 (肥)。25 28日迄地震あり (肥)。是月 異国船来航の風聞あり、近国騒動、防戦の用意専なり (長野内匠日記)。
7. 2 阿蘭陀本国使節船長崎へ来る (本)。11 細川兵部大輔、父の封地到着を謝す (実紀)。是月 長岡監物に文武奨励の事を担当さす (本)。8月にかけて旱魃、雨乞 (肥)。
8. 8 世子慶前、奉行所会議に臨む (本)。15 慶前、藤崎宮神幸式を観る (肥)。29 天草大風 (肥)。

9. 3 慶前、この日より南目佐敷方面、9月22日より矢部、11月北目方面を巡視(本)。22 番頭へ組抑揚等心得の書附渡(本)。是月 古鉄地金の他領移出を禁ず(肥)。
10. 21 賄物所御用材香割賦のこと(年覚)。
11. 4 文武芸奨励を訓諭(本・肥・触)。10 將軍家御台様薨去(本)。15 良之助髮置(本)。
12. 2 松向寺(忠典) 200回忌(肥)。28 長岡義之助、澄之助と改名(肥)。
是月 加子・船頭へ繰上につき大城太郎右衛門より川尻目附達の趣會議あり(難稜)。
- 是年 銀所預引替方、残りは12月迄に必ず引替えることとす(肥)。小国明礬大坂座方差止後熊本町兩人引請捌としていたが、是迄大坂座方の近江屋五郎兵衛より願に付、猶又少々宛大坂差登のこと(年覚)。布田手永川後田村の日向往還筋崩落につき仮道立(年覚)。砥用手永山出村下駄挽方運上銭の達(年覚)。木葉町柏原又次郎木葉山銅鉞試掘方ゆるさる(年覚)。就君様薬用の獺執方達(年覚)。五町手永打越村懸古川床、仮反畝物起上納分等5ヶ年猶予願(年覚)。夏旱損虫入、損毛高 132,860石余(損)。

弘化2 (1845) 乙巳(家慶) 齊護

1. 18 奉行坂本庄左衛門死亡(本)。24 江戸白金邸類焼(実紀・本・肥)。
2. 14 蓮性院(齊樹室) 白金邸より目白台屋敷へ移らる(本)。17 奉行上野十平熊本出府(本)。是月 異国船渡来人数差出の節の兵糧運送、以来山本・山鹿・菊池・合志郡代の隔年受持の達(肥後藩後期法令集)。
3. 一 家老代小笠原大部熊本発上府(本)。不正辨所持者以方規定(市雜乾 145)。けんなんこ等にて金銭賭勝負禁止(市雜乾 146)。
4. 5 船方見立の大木、宮宅用材となすべからずの達(林制 570)。12 砥用長野村出火(本)。14 中村庄右衛門奉行となる。寺社町方専職(本)。是月 奉行嶋又左衛門、佐敷番頭上座(本)。富田十郎左衛門、槍術修行のため旅行す(本)。
5. 17 琉球へ英国船渡来(本)。
6. 6 家老代沢村宇右衛門、江戸より下着(本)。18 矢部名連石村辻巻風(本)。19 蓮性院白金邸へ移徒(本)。是月 黄玄朴、鳴原侯の治療のため指越さる(本)。
7. 4 長崎へ英国船渡来(本)。11 慶前熊本発 8月20日江戸着(本)。18 長岡佐仲興泰死、10月1日興昌家督(肥)。是月 産物方榎方引除方を併局、産物受込方とす(本)。
8. 一 目白台拝領、旧松平駿河守上げ地(肥)。
9. 15 奉行稻津久兵衛、江戸より下着(本)。是月 晴厄(本)。
10. 一 西久保萱手町屋敷と木挽町大久保加賀村下屋敷と相對替(本)。
11. 11 長岡訓三郎、護順と名乗る(肥)。19 慶前、能登守利用女茂姫と婚姻す(本・肥)。28 田川鳳朗(俳人)没、年84(先哲)。是月 家中の在宅の者(鮑田・託麻)在府同様とする(肥)。
12. 26 杉・桧以外の薪炭用の雜木少きにより仕立を奨励す(林制 573)。是月 当夏水害・風災の損失 215,898石余を幕府に届出(本・肥)。

弘化3 (1846)

是年 玉名郡小天村鯨油開御免、横島村五番開・大川口新地・飽田郡近津新地築立(肥)。 櫨植付面積 865町歩余 (城南史 453)。

弘化3 (1846) 丙午 (家慶) 齊護

1. 15 小石川馬場より出火し、本郷・京橋・佃島等迄焼失し、八丁堀および鉄炮屋敷類焼(肥)。「本」は17日とし細川能登守邸も類焼ゆえ後に3,000両助力とあり。歌人横田勘左衛門没す、年57(先哲)。 22 熊本城下積雪 7.8寸(肥)。
- 是月 二本榎松光寺常念仏止めらる(本)。 奉行真野源之助中着座同列(本)。
2. 6 仁孝帝崩御(本)。 13 孝明帝踐祚(肥)。 矢部手永、大矢御山雜木40町炭焼5歩1上納にて許す(林制 574)。 是月 備組具足、櫓預りになる(本)。
3. 1 荒木万蔵奉行御免、小山門喜副役就任(本)。 4 中老溝口蔵人熊本発上府(本)。 19 勇姫鉄漿初、盈姫髪置(本)。 近年城下炭払底(林制 574)。
- 是月 唐船長崎漂着(本)。 本藩旧記取調につき家中伝来の旧記類差出(本)。
4. 7 この日と11日の2度琉球国へ仏朗西船渡来、交通を求む(本)。 18 就封の暇をたまう(実紀)。
5. 14 奉行中村庄右衛門退任(本)。 18 幕府、藩主齊護に高祖父重賢以来治政宜きを賞し、時服および鞍轡を賞賜す(本・実紀)。 22 藩主江戸発、閏5月24日熊本着(本・肥)。 25 家老代小笠原大部江戸より下着(本)。 是月 砥用総庄屋篠原善兵衛、靈台橋(船津橋)の工事に着工す。嘉永元年11月竣工(肥)。 澄之助はじめ子息丈夫届(本)。
- 閏5. 5 薪炭用材として櫨を奨励す(林制 576)。 9 強雨、諸川満水、白川1丈2尺(肥)。 17 銀所預のうち、黄色百目を広幅1種とす(肥)。 是月 琉球鬼界島へ異船渡来(本)。
6. 7 長崎へ仏朗西船渡来(本)。 10 雷鳴烈しく、二の丸屋敷落雷、其外諸所に落雷(肥)。 16 相洲浦賀へ異国船渡来(本)。 20 女御崩御(本)。 22 封地到着を謝し公義にものをたてまつる(実紀)。 是月 蘭船着、使節返輸送届(本)。 琉球国の仏朗西船出帆(本)。 知行取手取米増、中小姓以下心付米今迄通り下さる(本)。
7. 22 奉行小山門喜熊本発出府(本)。 24 オランダ使節長崎到来に付長崎配船、川尻町民条内蔵太以下褒美をうく(川尻史 231)。 25 琉球那覇へ仏国船渡来(本)。 26 布田手永、雷鳴氷降る(本)。 是月 江戸にて池辺啓太に御咎あり(本)。
8. 4 大津地方強雷雨、田畑並びに町内水溢れ、往還筋増水4尺余(肥)。 6 隆徳院(宗孝) 100回忌(「本」には8月16日とあり)(肥)。 11 儒者池辺謙助没(先哲)。 21 増田十郎左衛門奉行副役に任ず(本)。 23 琉球へ英国船渡来(本)。 是月 小笠原佐渡守の借金申込み、断る(本)。
9. 13 去る5月拝領物あるに就いて是日ならびに15日に御花畑にて祝能あり。惣庄屋・会所手代・村庄屋には酒肴下さる(肥)。 是月 本藩人口届出、惣人口 606,967人、内男子 309,615人、女子 297,352人(肥)。
10. 2 元奉行沢村太兵衛没(先哲)。 6 奉行上野十平江戸より下着(本)。 是月 尚書正義20巻蔵版になる(本)。 諸経費収支を相合わすよう藩主より直書あり(肥・触状)。
11. 19 若御前(慶前室)袖留着帯祝儀(本)。 30 文恭院(家斉)7回忌(本)。

是月 長岡監物文武芸担当を免じ、有吉市郎兵衛襲職(本)。良之助袴着(本)。

12. 一 高島秋帆の事に座し、江戸幽閑の池辺啓太、熊本に帰る(先哲)。武蔵石小田にて1貫目・500目・100目筒鑄造(本)。細川豊前子剛三郎、織田出雲へ養子(本)。長岡監物上書を呈し、家老・中老等を批判、家老辞任願出(熊本法学19号)。

是年 夏水害・秋風損・虫入穂枯、損毛高 224,419石(損)。著書目録 桃元問答 史伝 田中元勝。在役人勤方之覚 法制 江嶋伝左衛門。

弘化4 (1847) 丁未(家慶) 斉護

1. 21 沢村宇衛友輔(家老兼大奉行)没す、年69(先哲)。25 慶前嫡子六丸誕生、2月4日逝去(本)。栄昌院7回忌(本)。28 天草郡百姓共、宮田村銀主形右衛門宅その他を打崩す、続いて近村にも打崩始る(肥)。是月 旧臘よりは是月初旬まで阿蘇小国地方大雪(肥)。
2. 14 藩主斉護矢護山方面に獵す(本)。21 奉行嶋又左衛門退任(本)。是月 有吉頼母立道、見習のため家老職出仕、上野十平奉行本役に陞る(本)。松虫繁殖のため正福寺にて祈祷(肥・林制 582)。前日28日より天草百姓徒党を組み騒動のため島原藩に乞い鎮定、5月3日幕府勘定方2名を遣してこれを調査す(本・肥)。川尻津方運上金を20貫 901匁の受切に定む(川尻史 349)。河江手永砂川筋より野津手永鹿島尻への新地築立について吉本町丁頭和三次以下の内意奉願覚(熊本史学14号)。
3. 4 家老長岡監物退任(本)。6 沢村宇右衛門友貞中老に列す(肥)。中老大木舎人福嵩家老に陞る(本・肥)。9 藩主熊本発、4月11日江戸着(本)。是月 信州大地震(本)。奉行稻津百石加増(本)。
4. 9 大木舎人出立(本)。13 就君死去(本)。
5. 12 奉行真野源之助出府(本)。27 八代御用炭山床床替となる(林制 584)。是月 天草は是迄長崎奉行支配の処、日田郡代竹尾清右衛門預所となる。これにより本藩使番富岡に出張す(肥)。
6. 18 高瀬大風、海辺汐受塘破損(肥)。25 溝口蔵入下着(本)。
8. 19 長岡訓三郎(韶邦)江戸発、9月28日熊本着(本・肥)。26 矢部大矢御山の内諸軍備御用炭焼に付達(林制 585)。27 奉行副役小山門喜江戸より下着(本)。
9. 23 孝明帝即位(本)。是月 忌服に付達(本)。エトロフ島漂着の異人、オランダ船より指返す(本)。八代郡鹿嶋尻新地塘添に入江仰付らる(熊本史学14)。
10. 5 「新撰事蹟通考」の著者八木田十郎助没す、年69(先哲)。13 女院崩御(本)。
11. 一 当夏中雨勝ち、秋に至り虫入等にて損毛高 225,433石(肥)。武芸旅人に旅籠代10目を渡す(本)。
12. 20 強震、熊本城石垣破損、諸会所の困叔蔵等引割る(肥)。
- 著書目録 医風私議 医薬 江村萬春。新墾図説附録 地誌 鹿子木謙之助。ぬさの追風 歌文 植木貴恒。

嘉永1 (2・28 改元) (1848) 戊申(家慶) 斉護

1. 2 宇土戸口浦村火事 130軒余焼失(本・肥)。7 奉行副役増田十郎左衛門熊

本発出府(本)。是月 立田山に猪出る。監物猪狩を行う(肥)。

2. 4 去る天保14年本藩経費激減を令し、去々年更に減額のところ、依然収支合
わざるにより、更に全般に互り制限を加う(肥)。9 竹の丸作事所火事(本)。
22 大名小路出火、翌23日松平内蔵頭宅より出火(本)。是月 竹田領との境地
紛争解決す(本)。長崎留守居類役集会旧復(本)。
3. 4 中老沢村宇右衛門熊本発出府(本)。29 奉行真野源之助江戸より下着(本)。
是月 3月より7月頃まで、対州沖へ異国船来る(本)。
4. 14 世子慶前江戸にて没、23才、泰樹院(肥)。「本」は23日とす。19 細川越
中守、就封の暇を賜る(実紀)。是月 阿蘇宮造営に付、極楽坊境内の槻伐採で
紛争(林制 588)。
5. 7 松前へ異国船漂着(本)。15 月次の賀例の如し、細川越中守へ就封の暇賜い
馬下さる(実紀)。24 元奉行中村莊右衛門没、年81(先哲)。是月 長岡佐渡
の願により、荒尾手永平山・府本両村にて石炭試堀(肥)。阿蘇宮造営のため材
木を坂梨手永より出す(林制 590)。
6. 6 大坂城普請助役命ぜらる(本・実紀)。本藩出金41,488兩余(肥)。8 田安
一位様没(本)。10 御簾中様逝去(本)。是月 洪水(肥)。琉球逗留のフランス
人死(本)。
7. 7 土井織部正、没(本)。10 洪水1丈2尺(気・川尻史293)。11 訓三郎国中乗
廻(本)。19 長岡訓三郎熊本発上府、9月7日江戸着(肥)。28 琉球へ仏国船
渡来(本)。是月 山川棍右衛門父子片岡蘇助を討切腹(本)。
8. 3 大木舎人江戸より下着(本)。12 京都強風雨、伏見邸出水(肥)。是月 大
坂表洪水(本)。日奈久御茶屋番近年在御家人を召仕ところ、旧復し、熊本居役
人を召仕ること(難稜)。
9. 9 長岡訓三郎、細川六之助と改名(肥・本)。18 幕府六之助の嗣子たるを許
す。是日護順と名乗る。(実紀・肥)。是月 家中 500石以上軍役高、役筒不足に
付、郡筒 100人を置く(肥)。海辺御手当筋の儀に付、公義より達(本)。火術の
儀に付達(本)。
10. 一 九郎右衛門忌中の内、勝手方上聞蔵人承(本)。
11. 4 水俣手永浜村火事(肥)。是月 夏水害、秋虫入、穂枯による損毛届出す、
163,417石(肥)。
12. 15 大坂城修覆手伝終り、賞賜あり(実紀)。26 真源院(光尚) 200回忌(本)。
是年 当年より天守方において、御備の新規大小筒 1,530挺出来、これを諸流合一
と唱う(肥)。櫓の品種改良、各手永で試みられる(城南史 453)。著書目録 千
年の基 教訓 米田是容。傷寒論拾玉編 医業 城鞠州。

嘉永 2 (1849) 己酉(家慶) 斉護

1. 6 江戸火事(本)。20 琉球へアメリカ船渡来(本)。
2. 4 清僧俗家にて病氣療養を禁ず(壁書)。14 琉球へ英国漂人を迎のため英国
船渡来(本)。是月 一条様妹寿明君縁組に白銀をつかわさる(本)。対州海辺へ
異国船渡来(本)。有吉大藏立元隠居、頼母立道家督相続、家老職に列す(本)。
3. 15 大木舎人熊本発上府(本)。17 琉球国へアメリカ船渡来(本)。22 藩主去
年以来滞府のところ、登城、参勤の礼済む(肥)。26 世子護順白金邸に入る
(肥)。長崎へ北アメリカ船渡来(本)。

4. 22 細川越中守をはじめ参勤のもの22人 (実紀)。23 泰樹院一周忌 (本)。26 若殿・六之助白金屋敷へ引移 (本)。是月 アメリカ船渡来に付、長崎へ大筒手10人指越す (肥)。
5. 13 川尻方面大風洪水1丈3尺、19日洪水1丈1尺正中島町56軒のうち40軒庭入床あげ (川尻史 293)。14 沢村宇右衛門、江戸より下着 (本)。22 河内村大火、219軒焼失 (肥)。27 細川午之丞 (能登守叔父) 没 (本)。28 虫入に付、正福寺にて祈祷 (肥)。
6. 一 朝鮮全羅道へフランス船渡来 (本)。長岡刑部、長岡鶴千代を養子とす (本)。長崎唐人屋敷火事 (本)。旱魃、雨乞 (肥)。勘定所例格帳再調 (本)。
7. 10 五島様へ城築立仰付らる (本)。13 侍医田中元勝、没、年68 (先哲)。17 秀林院 (忠興室) 250回忌 (本)。21 川尻方面洪水 (川尻史 293)。是月 英国人唐国広東を取鎮、日本へ軍艦差向との風聞 (本)。芦北郡惣庄屋連名で、新木場畑の徳米を雑職備にする様願書さし出す (林制 598)。八代鉄山取起に付、小物成方物書1人増人仰付らる (難稜)。
8. 4 幕府、調練の際、大炮を放つことを許す (肥)。是月 久我様へ合力 150石宛究る (本)。琉球船五島へ漂着 (本)。
9. 3 八代にて五十貫富講給る (本)。13 二丸藩主息3人熊本城へ御出 (本)。22 五町手永、船津村火事、220軒余焼失 (本)。是月 有吉市郎兵衛の文武奨励担当を有吉頼母に代る (本)。
10. 15 奉行佐田右平、佐敷番頭上座となる (本)。是月 宇土支藩嗣子細川総丸登城、將軍家初見 (本)。
11. 9 勇姫松平越前守と婚礼整 (本)。11 澄之助具足召初 (本)。15 故慶前宝鳳台院大崎屋敷へ移る (本・肥)。22 右大將様婚礼整 (本)。29 公儀御役人通行 (本)。是月 初夏の長雨、洪水、虫入等にて損毛届出 378.545石 (肥)。
12. 18 長崎入津の唐船、天草沖で難船 (本)。20 八代城石垣修補願済 (本)。23 勤労の町独礼ならびに町別当の跡目、今後寸志跡目同様に仰付らる (市雑乾 147)。是月 盈姫上杉家と縁組 (本)。

是年 中老沢村宇右衛門を手当方 (軍備) 係とす (本)。飽田郡五町手永船津新地築立 (潮害)。著書目録 宇氣比考 皇典 林桜園。

嘉永3 (1850) 庚戌 (家慶) 斉護

1. 11 長岡澄之助、護久と名乗る (肥)。15 琉球鬼界島にアメリカ船渡来 (本)。是月 25日より12月迄対馬等へ異国船渡来 (本)。寺倉秋堤、高橋春圃とともに長崎に赴き、モーニッケについて種痘を学ぶ (城南史 483)。
2. 1 馬見原町造酒値段定 (熊本史学24号)。2 諦観院 (齊樹) 25回忌 (本)。4 良之助熊本出立、3月19日江戸着 (本)。5 江戸大火、宇土支藩邸類焼 (本)。6 成瀬十助列乗組船難破 (本)。9 松平越前守へ舅入 (本)。21 馬見原町造酒値上定 (熊本史学24号)。25 細川豊前守類焼に付、3,000両遣さる (本)。28 家老代朽木内匠熊本発出府 (本)。是月 外国防禦手当に付、幕府より指示あり (本)。
3. 3 奉行小山門喜熊本発出府 (本)。23 良之助、喜連川左馬頭聲養子取組 (本)。27 江戸千住仕置場借受、科人5人刎首 (本)。28 盈姫御前様養女紐解 (本)。是月 4月にかけて山野のすず笹に実成る (肥)。寺倉秋堤、長崎より帰国し、

嘉永4 (1851)

上益城郡鯉会所で、2名に種痘す(城南史 483)。

4. 18 走湯嘉永新川、21手永寄り夫を以て掘広む(天明誌99)。23 泰樹院(慶前) 3回忌(本)。27 細川越中守、就封の暇あり(実紀)。
5. 8 江戸大火(本)。15 奉行増田十郎左衛門、江戸より下着(本)。18 藩主江戸発、6月28日熊本着(本)。23 幕府長岡岡之助の喜連川氏の養子たるを許す(肥・実紀)。28 大木舎人江戸より下着(本)。是月 五町手永万石村に焰硝蔵建つ(肥)。当夏松前領へ漂着の異国人長崎へ送らる(本)。
6. 1 良之助喜連川へ引越(本)。17 有徳院(吉宗)100回忌(本)。24 御廉中様逝去(本)。25 琉球へアメリカ船渡来(本)。是月 龍口において貝音入稽古伺済(本)。
7. 7 長岡静斎死(本)。11 大風(本・肥)。家中市在倒家、田畑被害甚大(肥)。14 20日迄雷鳴、在中諸所落雷(肥)。是月 奉行稻津久兵衛、番頭に転ず(本)。
8. 7 肥後強風雨、田畑618丁5反7畝水浸、川塘1.747間根切破損、百姓家9.779軒倒破(本・肥)。早川十郎兵衛奉行副役就任(本)。28 琉球へ英国船渡来(本)。
9. 一 漂流異人蘭船より送返す(本)。中老兼大奉行溝口蔵人引入中、平野九郎右衛門に代理(本)。他領の医師の本藩住居を禁ず(本)。小山門喜、奉行本役となる(本)。
10. 4 馬見原造酒凶作につき3割減とする(熊本史学24号)。23 諦了院(齊茲)17回忌(本)。是月 洗馬町二丁目に米会所建つ。翌9月頃止む(肥)。本年造酒高3割減(肥)。
11. 2 江戸火事(本)。11 寛五郎具足召初(本)。24 勇姫お帰輿(本)。是月 矢部手永内福良井手新開に着手、5年3月竣工、新田17町余(先哲)。当夏秋水害大風、虫入等にて損毛高388.679石余(肥)。
12. 9 江戸千住仕置場拝借科人1人刎首(本)。吉田松陰熊本入り、12月12日加藤公廟所に詣で、12月13日熊本発帰国(肥)。11 馬見原新酒造値段極め(熊本史学24号)。是月 江戸火事(本)。著書目録 田川鳳朗伝 史伝 寺沢暉暢。藩譜便覧 史伝 財津三左衛門。

嘉永4 (1851) 辛亥(家慶) 斉護

1. 12 長岡伊豆忠寿隠居、弟与八郎家督相続、与八郎、内膳忠顯と改む(本・肥)。是月 野津原・鶴崎・佐賀関防禦手当として、郡筒70人を抱らる(肥)。藩主の命により90才以上の者を調査す、382人(肥)。
2. 21 強風にて鯉手永田畑浸水、同29日強雨、内田・中富・南関・坂下、翌晦日鯉・大津・中村・山鹿諸手永諸川満水、田畑浸水す(肥)。是月 江戸供小姓頭2人となる(本)。唐国一揆の風説あり(本)。
3. 3 九州近海に異国船多し(本)。11 沢村宇右衛門へ脇差くださる(本)。12 奉行真野源之助退任(本)。13 荒木甚四郎奉行副役に任ず(本)。15 藩主斉護熊本発、4月15日江戸着(本)。21 奉行増田十郎左衛門、鉄炮頭に任ず(本)。22 強雨、木倉・正院・山鹿・中村諸手永諸川満水(肥)。家老有吉市郎兵衛、熊本発出府(本)。28 町人と御家人・足輕・寺社・陪臣等との縁組および養女取組について規定す(市雜乾 148)。29 琉球へ異国船渡来(本)。
4. 16 下川原にて火刑あり(肥)。21 松山手永笠岩村御方開、極荒畝開明許さる

(年覚)。22 強雨、鯨手永田畑浸水(肥)。28 月次の賀、細川越中守参勤(実紀)。是月 佐賀関備の大炮差越す(本)。

5. 22 鍛冶橋御門内出火(本)。24 宇土支藩主豊前守行芬病により致仕し、嫡子総丸立則相続す(実紀・肥・宇土史 114)。是月 洪水 6 尺(気・川尻史 293)。
6. 11 真野源之助奉行復任、上野十平上座(本)。15 朽木内匠江戸より下着(本)。26 大雨、山鹿郡に山汐出、菊池・山鹿・玉名郡の田畑水損(本・肥)。
7. 13 中富手永・山鹿手永浸水(肥)。20 琉球へ熱茲呢国船漂着(本)。
8. 5 御手当方事務、城内方奉行にて取扱うこととす(本)。是月 細川長門守娘と細川総丸婚姻(本)。
9. 1 細川六之助將軍家初見(本・実紀)。11 六之助御袖留 16 日初登城(本)。13 細川雅樂死去(本)。18 六之助従四位下侍従叙任、右京大夫慶順と称す(実紀・肥)。26 慶順前髪執(本)。
10. 23 諦了院(齊茲) 17 回忌(本)。
11. 1 盈姫、喜久姫と改名(本)。慶前、口宣頂戴(本)。2 村田貞節(官医) 没、年 87(先哲)。24 江戸火事(本)。25 琉球へ異国船(本)。是月 当年損毛高 180.188 石余届出(肥)。
12. 2 江戸火事(本)。14 宮部鼎蔵、関東・奥羽遊歴の途につく(本)。16 細川総丸山城守と改む。松平越前守中將に任ず(本・宇土史 114)。20 江戸火事(本)。是月 中老沢村宇右衛門衛士と改む(本)。

是年 奉行佐田右平、吉左衛門と改む(本)。玉名郡部田見村、催合新地築立(肥)。玉名郡部田見村、小天村にて受免開築立(肥)。荒尾手永にて石灰焼方願出により試焼ゆるさる(年合)。田浦手永下大野村嘉作瓦焼職ゆるさる(年合)。矢部手永より進上用の天門冬買上げらる(年合)。矢部手永より進上用の蕨漬込、去年の通り(年合)。中富手永古閑村善七、瓦焼職ゆるさる(年合)。鷹方御用鳥餅、矢部手永目丸村新助製法(年合)。高田手永焼物師上野熊利え申付の進上御用土場を松山手永、松山村にて仰付らる(年合)。河原手永菊池川筋相生橋小俣の方目鑑橋に懸替(年合)。田浦手永二見村懸、目鑑橋懸く(年合)。荒尾手永菰屋村高浜両村懸に目鑑橋かく(年合)。田浦手永下大野村嘉作、瓦焼職許さる(年合)。湯浦手永野角村久野川崩平、両山炭焼方を 5 ケ年木場作にて跡床田開許され、宿駅備仰付らる(年合)。田浦手永二見村懸岩下川ならびに小藪村下川目鑑橋かく(年合)。著書目録 寛政年舞樂御興行之覚 記録 日隈助之進。朝な夕なの序 教訓 米田是容。武技論 諸家 米田是容。敏鎌 皇典 中島広足。

嘉永 5 (1852) 壬子(家慶) 斉護

1. 17 琉球へ英国船渡来(本)。
2. 6 御家人が郡代直触以下に席下りの節は、御赦免建山を召上らる(林制 614)。是月 細川右京へ合力米下置かる(本)。長崎火事(本)。奉行上野十平熊本発出府(本)。八代鏡新地築立につき、川尻より加勢す(川尻史 293)。
- 閏2. 16 錢塘手永江中島村列、村々塘筋の櫓木代銭のこと(年覚)。18 蓮性院、一橋様、公方様へ御目見(本)。19 琉球へ異国船渡来(本)。
3. 11 家老代朽木内匠、熊本発出府(本)。16 琉球国へ異国船渡来(本)。21 大慈寺河原加勢川に築切り、鯨・沼山津から出夫す(川尻史 293)。是月 小山門喜、江戸より下着(本)。

嘉永 6 (1853)

4. 4 琉球へアメリカ船渡来 (本)。24 藩主江戸発、5月25日熊本着 (本)。
 5. 22 西丸焼失 (本)。
 6. 9 家老有吉市郎兵衛江戸より下着 (本)。28 真野源之助役中着座同列 (本)。
是月 先月来照続き、玉名郡諸手永ならびに竹迫・大津手永にて雨乞あり(肥)。下旬に、高森・矢部両手永強風 (肥)。川尻町廻、定廻の席仰付らる (難様)。
 8. 9 江戸強風 (本)。22 肥後大風雨、田畑浸水 (肥)。
 9. 13 時習館教授近藤英助、没、年79 (先哲)。18 藩主、下益城八代境砂川尻潮止工事をみる (本・肥)。19 築地村で、寺倉秋堤による種痘が行われる (城南史 483)。22 明治天皇降誕。是月 玉名郡小天新地築立らる (本)。能登守へ行軍留5挺進ぜらる (本)。本藩人口を幕府に届出る。総人口 615.520人 男 312.112人、女 303.408人 (肥)。
 10. 9 小山門喜用人に転ず、11月6日奉行再任 (本)。16 溝口藏人家老職になり家老有吉市郎兵衛隠居、小笠原備前中老に列す (本・肥)。28 江戸城内出火 (本)。30 文泰院13回忌 (本)。是月 当夏旱損、秋風災水害により損毛高 211.376石余 (肥)。
 12. 3 慶順元服、祝能あり (本)。19 朝鮮国へ異国船渡来、漂流の日本人を対州へ渡 (本)。是月 矢部手永惣庄屋布田保之助、通潤橋の架設に着手、安政元年8月竣工 (肥)。長唄指南者および稽古者より出銀せしむ (肥)。熊本町出火 (壁書)。
- 是年 玉名郡横島村六番新地築立 (肥)。津奈木手永松岡空地年季受、戌年限り宿駅備とする (年合)。八代焼物用白土、田浦手永白嶋坂にて取出場所替 (年合)。八代鉄山用の杉木、下松求麻村山より引渡す (年合)。献上御用清水苔生立乏し (年合)。甲佐手永有安村庄助・幸助、石灰焼方床替を願う (年合)。荒尾手永上井手村懸にて石炭試掘、嘉永6年にも行う (年合)。甲佐手永岩下村にて赤星忠兵衛家代伊八石灰焼方床替、嘉永6年には猶3ヶ年延許さる (年合)。浦々にて武器類船積叶難きところ以後許さる (年合)。木倉手永上田代村より納の進上用蔵召上らる (年合)。諸流合一の大筒、前崎源四郎屋敷にて試打 (年合)。八代鉄山用杉、高田手永下松求麻村山より引渡 (年合)。進上用の密漬天門冬、矢部手永より買上げ(年覚)。神水苔場苔立悪きにより取方禁止、嘉永7年12月8日取方許さる (年覚)。著書目録 心の奥 教訓 米田是容。学校問答書 法制 横井小楠。筑紫衣 史伝 久野正頼。春雨堂御葉草木目録 博物 平橋宗佐。花菖培養録 博物 松平菖翁。詞玉緒補遺 辞書 中島広足。

嘉永 6 (1853) 癸丑 (家慶・家祥 (家定と改名)) 斉護

1. 28 坂口大資 (廉吏) 没 年74 (先哲)。
2. 10 斉護熊本発、3月9日江戸着 (本)。是月 河江手永にて竹葉石、御用の外採取禁止 (肥)。
3. 15 家老有吉頼母出府 (本)。24 幕府西丸造営費用を諸藩に課す、米船来朝により6月12日中止す (国事)。
4. 1 月次の賀、細川越中守へ封地の暇 (実紀)。12 世子慶順江戸発、5月16日熊本着 (本・肥)。19 琉球渡来の北亜船、江戸内海へ乗入 (本)。是月 上野夏迄詰越 (本)。
5. 18 夜洪水9尺(気・川尻史294)。27 幕府、新田支藩主能登守利用の、一門綱之

- 助利永を養子とするを許す (実紀)。是月 奉行早川十郎兵衛用人に転ず (本)。
6. 3 アメリカ使節ペルリ浦賀へ来る (国事)。6 大坂城修覆 (損)。7 幕府本藩に本牧固めを命ず、翌日出兵、9 日本牧につく (国事)。9 我藩銃炮弹薬の借用を幕府に申請する。11日に許可さる (国事)。11 細川立則は、浦賀表へ出馬す。12 黒船退帆 (本)。異国船渡来により、警衛の事命ぜらる (実紀)。15 公儀より此節の事に付賞詞 (本・実紀)。米船帰帆に付撤兵開始し、16日終了 (国事)。16 本藩借用の砲器弾薬を幕府に返納す (国事)。17 この日より以後御国より人数登る、國中騒動 (本)。22 家老小笠原備前熊本発東上 (国事)。將軍家慶逝去、家定嗣ぐ (国事)。24 異船退船に付、大筒手途中より引返す (本)。是月 砲器類関々行懸通行 (本)。高木敬太郎奉行副役就任 (本)。頼母備筒出来上聞 (本)。奉行荒木甚四郎出府 (肥)。佐田上着座同列 (本)。
7. 5 本藩の本牧陣屋を廃す (国事)。17 幕府5ケ年間俵約を命ず。西丸造営課金を免ず (国事)。18 長崎へ魯西亜船渡来 (本)。22 家慶公薨去 (本) (「肥」には6月22日とあり)。
8. 19 長崎魯人書翰受取 (本)。是月 中院中 大砲試打御免 (本)。
9. 1 町家祖父代以来の苗字はときにより改苗許可さるが、有禄者および連綿の苗字は改苗不許可 (市雜乾 149)。12 蓮性院、公儀遺物拝領 (本)。19 藤崎宮祭礼 (本)。細川越中守代替御礼申上 (実紀)。是月 大船製造御免 (本)。江戸海岸の諸侯台場取立御免 (本)。奉行上野十平、江戸より下着 (肥)。
10. 2 長崎へ魯人渡来 (本)。西洋砲稽古訓練の儀につき達 (本)。19 吉田松陰熊本に来る。同25日長崎へ向い、11月5日帰来、同7日帰国の途につく (国事)。是月 白金御亭にて鐘・大鞆、音入御免 (本)。
11. 5 慶順公北目御出 (本)。14 本藩相模沿岸警備の命を受く (国事)。15 番頭長岡詮太郎等、熊本発出府 (国事)。新田支藩世子綱之助登城、將軍家初見 (実紀)。1,000両富講始る (本)。22 家老より士席以上武具を備うべきことを命ず (宇土史 114)。23 將軍宣下 (本)。28 本藩、日田・長崎・天草警備免除を申請す。12月28日に許可さる (国事)。是月 諸侯近海及内海警衛令あり (本)。諸侯大砲取寄等御免 (本)。西洋船砲名蘭語停止 (本)。諸間出銀、軍備御用召上らる (本)。12月下旬迄、関々武器通行口上断、以後は仮証文 (本)。当夏旱損、秋虫入にて損毛高 212,930石余 (肥)。
12. 3 細川斉護宣下御礼申上る (実紀)。宮部鼎藏、長藩吉田松陰と同道大坂に着く、12月5日京都を発し関東へ下る (国事)。5 長崎へ魯西亜船渡来 (本)。10 魯人悟真寺へ上陸 (本)。11 長岡監物相州警備総帥として熊本発翌年1月9日江戸着 (国事)。14 琉球へ北亜船渡来 (本)。長崎魯使節と筒井様御列対話 (本)。16 対御槍御免 (本・実紀)。17 備頭三洌・沼田・木下等の卒いる藩兵、本日より29日にわたり熊本発し東行す (国事)。筒井様、肥後船により魯船へ参向 (本)。18 魯使節返翰渡す (本)。22 魯使節品々献上 (本)。28 相州御用に付相武両国の14,300石の地預 (国事)。29 水戸前中納言公儀へ大筒献上 (本)。是月 本座新座脇方・本方・囃方・狂言方、永年出精者賞美規定さる (市雜乾 151)。
- 是年 玉名郡横島村七番開新地築立、大開新地築立 (肥)。八代郡萩原村塘外の空地、佐渡先祖入城の砌より拝領のこと (年合)。中山手永安見村石工古田安兵衛竹葉

石細工仰付らる（年合）。正院手永内7ヶ村山藪立木 100貫目渡下さる（年合）。沼山津手永下陣村にて銅試堀（年合）。砥用手永山出村山内にての下駄挽方年延許さる（年合）。甲佐手永津志田村源蔵、石灰焼方3ヶ年季受にて許さる（年合）。北里手永宮原村欽平器地轆轤挽運上銭上納御免（年合）。郡浦手永前の越村井樋、目鑑橋に仕替（年合）。進上御用かせいた出来の楳梓、銭塘手永走潟にて仕立、野津手永・小田手永にても仕立方仰付らる（年合）。岩倉山仕立梅園番人に豊後梅ならびに天門冬仕立方仰付らる（年合）。河江手永産竹葉石御用の外採取禁止（年覚）。**著書目録** 文武一途の説 法制 横井小楠。夷虜応接大意 法制 横井小楠。土木考 諸家 臼杵秋房。かたいと 辞書 中島広足。詞のやちまた補遺 辞書 中島広足。

安政1（11・27改元）（1854）甲寅（家定）斉護

1. 2 細川越中守、年頭の御礼申上る（実紀）。14 16日迄北亚船武州小柴沖へ来る（本）。16 世子慶順熊本発、2月24日江戸着（本）。本藩警備地用として大小50挺の砲器新鑄を幕府に申告す（国事）。19 阿蘇山鳴動（肥）。25 浦賀にて亜人と応接（本）。是月 長崎魯船出帆（本）。小柴異船渡来に付、人数出張用意（本）。小柴異船渡来につき、公迎令次第人数指出（本）。川尻町中貫銭並新公役改正さる（川尻史 385）。異船へ兵端開かざる様との公迎触（本）。一朱銀通用（本）。
2. 1 奉行副役高木敬太郎出府（本）。2 御判物江戸着（本）。3 川尻町影踏行わる（川尻史 167）。21 細川越中守、歳暮の内書を受く（実紀）。28 慶順、一条左大臣忠香養女、実は三条大納言実万女峯子と婚姻す（肥）。是月 加原川向横浜へ異人応接取立（本）。頼母・井上新丞以下備場見割として指越さる（本）。
3. 3 神奈川和親条約締結（国事）。5 長岡図書興礼死す（本）。8 本藩吉田平之助、坂梨利左衛門および砲術師5名に相州警備地詰を命ず（国事）。9 細川鉦之亟死す（本）。15 細川右京大夫、幕府御礼（実紀）。18 澄之助、前髪執（本）。23 魯西亚、又々長崎へ渡来（本）。25 御船の造砲家増永三左衛門製造の80ポンド砲出来る、6月5日御船町妙見山にて試射（肥）。是月 宇土郡盗人島にて大炮試射（本）。
4. 1 本藩相州警備地砲墩の授受終る（国事）。28 琉球へ亜船来鉚（本）。是月 平戸へ異国船碇泊、島々測量（本）。田浦手永大河内村にて銅山堀方を許す（肥）。
5. 3 長岡監物、相州警備終り帰藩、5月7日江戸発、6月16日熊本着、長岡壱岐も帰着（国事）。13 ヘロリ、箱館より帰帆（本）。是月 異船受場乗越の節取はからい筋伺（本）。北亚船横浜に渡来（本）。若御前眼病に付、藤崎祇園にて祈祷（本）。目附付横目2人増員（本）。算学師役甲斐一衛隆義、擬作高 100石（城南史 480）。
6. 7 琉球へ江戸帰帆の亜船着（本）。16 細川越中守、嘉定御祝（実紀）。17 亜船、小柴沖へ来泊（本）。25 細川越中守、端午の内書を受く（実紀）。26 浦賀奉行より本藩留守居に対し、浦賀出張中の家士、外人に対し激昂の色あるにより、寛大に適宜の処置を行うよう指示す（国事）。是月 御備場受持中目附江戸詰3人（本）。7月にかけて藩兵、江戸より熊本着（国事）。
7. 5 細川越中守へ鷹の雲雀30賜う（実紀）。17 本藩管轄相州10石台場を細川山城守へ引渡す（国事）。28 長崎へ蘭蒸気船渡来（本）。是月 公儀軍制改正（本）。日本大船惣船印等究る（本）。

- 閏7. 15 長崎へ英国船渡来 (本)。27 不知火楮右衛門 (横綱) 没、年54 (肥人)。5 月
ごろより子供馬の騒動あり、制止 (本)。
8. 9 笠格兵衛、筒井格之召捕 (本)。13 長崎奉行、英人と対話 (本)。20 奉行
佐田吉左衛門没 (本)。21 画家福田太華没 (本)。是月 長崎蘭船船員、市中見
物御免 (本)。幸川孫之亟、奉行副役に任ず (本)。川尻若宮社宮座式法改めらる
(川尻史 551)。
9. 17 備場仕法替 (本)。18 大坂へ黒船渡来 (本)。是月 奉行高木敬太郎没 (本)。
10. 5 5両判廃止 (本)。10 松井義之、家老に任ず (本)。14 御判物着 (本)。21
細川越中守、重陽の内書を賜う (実紀)。27 千住で科人誅伐 (本)。是月 中老沢
村衛士友貞退任、朽木内匠中老、藤本津志馬奉行副役に任ず (本)。
11. 5 5日および7日に大地震 (本・肥)。9 薩州へ亜船渡来 (本)。13 安東熊
彦、宮川五郎を打果す (本)。15 金王丸、初参府 (本)。細川越中守、月並御礼
(実紀)。22 慶順公生母卒去に付、上使堀石見守つかわさる (実紀)。是月 監
物に 1,000両賜う (本)。
12. 3 鶴崎表大地震 (年覚)。是月 武州の内、2,500石余増御預 (本)。荒木甚四
郎、奉行本役にすすむ (本)。
- 是年 家老平野九郎右衛門長定、長久と改む (本)。当夏旱損、秋虫入にて損毛高
212.930石余 (肥)。沼山津手永下陳村にて銅試堀 (年覚)。小代山82町余焼失
(年覚)。田浦手永大河内村にて銅山堀方ゆるさる (年覚)。中村手永長谷川村金
山谷堤再興につき寸志召上らる (年覚)。佐敷手永宮浦川へ目鑑橋をかく (年覚)。
松山手永網津村牧川・菊池藤輪橋・関手永大志生木村川筋にも、目鑑橋をかけ
る (年覚)。著書目録 鳥の跡 歌文 久野正頼。千日鑑 儒家 久野正頼。玉
霞窓の小篠 辞書 中島広足。東遊日記 歌文 林桜園。

安政 2 (1855) 乙卯 (家定) 斉護

2. 1 寛五郎、前髪執 (本)。4 奉行辛川孫之丞出府 (本)。6 御判物頂戴 (本)。
18 久住 2 匁 5 分小預不便に付、通用差止め、3 月迄に引替を命ず (本・肥)。
21 山仕立役欠員につき、山藪の手入は郡吟味役指揮となる (林制 616)。27
細川越中守暇に付、賜物 (実紀)。28 細川越中守暇の御礼 (実紀)。29 大久保
右近将監、備場巡見 (本)。是月 堀川吐戸の石畳下けの修理を行う (川尻史
325)。
3. 3 幕府 梵鐘を大炮に改鑄令を出す (実紀)。5 御判物朱印下さる (実紀)。
7 藩主斉護江戸発、4 月16日熊本着 (本)。19 英仏 2 国船渡来 (本)。是月
末家家来座席於館列席に究 (本)。
4. 16 松井典礼、江戸より下着 (本)。代役木邑次郎左衛門出立 (本)。19 御判物
着 (本)。21 細川山城守、不時御礼 (実紀)。28 細川山城守、就封の暇 (実紀)。
川路左衛門尉、備場巡見 (本)。
5. 5 奉行荒木甚四郎江戸より下着 (本)。15 天明村海岸、白浜海辺で大砲打方
に付、漁禁止 (天明誌 898)。27 相州備場及目白台にて調練発炮を許さる (国
事)。本藩相州警備地据付の大砲稽古は 1 挺 1 ケ月 1 発とす (国事)。是月 若殿
側備しらべ (本)。小山中着座同列 (本)。
6. 4 奉行辛川孫之亟、熊本発上府 (本)。8 蘭蒸気船、長崎へ渡来 (本)。28
家老代三洲志津摩、江戸より下着 (本)。是月 長崎にて蒸気船乗方の伝習あり (本)。

砲術師志賀何右衛門、江川様へ入門 (本)。

7. 10 英仏2国船長崎へ渡来 (本)。12 小笠原左京大夫没す (本)。人吉城主相良長福没す (肥)。26 御船の造砲家増永三左衛門製造の12ポンド砲の試射を盗人島にて行う (肥)。是月 竜口邸内に武器方新設 (本)。河池左衛門尉、黒船扱として長崎へ下向 (本)。本座新座同音方賞美筋規定改正 (市雜乾 150)。
 8. 13 「藩譜採要」の著者 日田山左右没、年75 (先哲)。是月 水戸前中納言隔日登城 (本)。
 9. 15 本藩5ケ年間特別儉約令 (国事)。山隈権兵衛 (勸農家) 没、年79 (肥人)。25 浦賀奉行忍にて備場発砲御覧 (本)。是月 禁裏御移徙 (本)。アメリカ日本海測量願として渡来の聞えあり備場人数指下し (本)。
 10. 2 関東大地震、翌日諸大名に随意帰国を許す (本・国事)。5 これより9月迄の間に、相州警備兵を一部帰藩さす (国事)。是月 八代城附子弟、武芸専門修業起る (本)。箱館奉行御預所の分、えぞ地上知望もの、在位御免 (本)。長崎留守居夏詰となる (本)。歩小姓12人増員 (本)。
 11. 13 藩主、水前寺へ赴く (本)。21 亀崎新地の内、50丁宇土様へ譲渡 (本)。是月 川尻町民に来年より5ケ年間の儉約令を出す (川尻史 154)。佐敷峠に山番小屋建設の入用見積出す (林制 619)。
 12. 6 宮川五郎復讐一件に落胆の面々、大勢御咎 (本)。7 梵鐘を砲器に改鑄のことにつき、藩内寺院へ再達す (本)。16 細川長門守卒去 (本)。25 江戸留守居集会離席 (本)。是月 相州詰役所勘局等1年詰となる (本)。松前様、3万石家格 (本)。樺島台場止 (本)。府中角場四季共打方御免 (本)。
- 是年 12月1日より金銀双場改め (覚)。小物成方買上の綿、焼印押のこと (覚)。沼山津手永 下陣村銅山吹方仰付らる (年覚)。水前寺苔育生につき達 (年覚)。久住手永久住山の炭焼運上銭のこと (年覚)。坂下手永亀甲村にて西洋流鉄砲製作 (年覚)。南郷地獄湯にて明鑄製法ゆるさる (年覚)。進上御用天南星、五町竹宮在・大津・竹迫にて来年から4年間は正月～6月まで藤井楠寿独占堀え下方の堀方さしとめ (年覚)。水俣手永大迫村かかり石神村内金山試堀 (年覚)。夏旱損、秋穂枯、損毛高 176.465石余 (損)。著書目録 遊東日誌 詩文 国友重昌。陸兵問答書 法制 横井小楠。

安政3 (1856) 丙辰 (家定) 斉護

1. 7 元奉行稲津久兵衛没、年63 (先哲)。是月 家老松井典礼致仕 (本)。参勤御供の諸士服装について達 (本)。御供の内道中鉄砲持関々通行御免 (本)。御成の節江戸小屋々々窓蓋におよばず (本)。御供の面々子弟つれるよう達 (本)。
2. 18 藩主斉護、熊本発、3月26日江戸着、同日家老大木舍人出府、奉行副役藤本津志馬出府 (本)。24 芦北5ケ所峠山番兼帯の出小屋立方許可 (林制 622)。是月 真野上着座同列悉皆分職 (本)。長崎へ亜船渡来 (本)。貨幣引替率について川尻町へ達 (川尻史 390)。
3. 11 家老長岡佐渡出府 (本)。是月 築地へ公義講武所取建 (本)。江戸詰衣服の達 (本)。
4. 10 長崎へ北亜船渡来 (本)。11 世子慶順江戸発、5月13日熊本着 (本)。19 品川東海寺内妙解院梵鐘を砲器に改鑄 (本)。27 喜連川金王丸、元服 (本)。
5. 6 奉行副役辛川孫之丞、江戸より下着 (本)。是月 伊達遠州より滑稽古の事

頼まる (本)。矢部郷之原村御山で火事あり (林制 627)。洪水 8 尺 (気・川尻史 294)。

6. 1 家老長岡佐渡、將軍家定に謁す (本)。永原岩熊、丸山勝藏けんか (本)。28 府中新町へ落雷、3 人即死 (本)。是月 公義蕃書取調所、取建 (本)。新開板蕃書類、調所へ差出すよう達あり (本)。
7. 6 新待賢門院没 (本)。8 長崎へ蘭蒸氣船着 (本)。21 新田支藩主能登守利用致仕、養子綱之助利永相続、12月16日從五位下に叙し、若狹守と称す (本)。是月 八王寺村百姓ヒソウの毒にて死亡 (本)。西洋砲稽古の者、異葬の風俗禁止の達 (本)。
8. 5 長崎へ英国船渡来 (本)。25 江戸大風、津波、上下藩邸、陣屋共被害 (本)。是月 家老平野九郎右衛門長久致仕、保と改名 (本)。篠原善兵衛 (船津橋架橋) 没、年70 (本)。
9. 10 長崎へ蘭蒸氣船、英国船渡来 (本)。
10. 一 鶴を打ち役人を殺した者、誅伐さる (本)。堀田備中守、外国御用取扱に任ず (本)。
11. 29 文恭院 (家齊) 17回忌 (本)。是月 鉄砲専門修業起る (本)。早魃、穂枯等による損毛高 182,930石余 (肥)。
12. 16 斉護、左近衛中将に任ず (本・実紀・肥)。入吉城主相良元三郎、從五位下に叙す (肥)。

是年 当年より格別儉約令 (本)。川尻町地震 (覚)。

安政 4 (1857) 丁巳 (家定) 斉護

1. 5 鎌田如川 (書家) 没、年64 (肥人)。
2. 1 小笠原備前、家老三淵志津摩中老に就任 (本)。21 慶順熊本発、3 月 25 日江戸着 (本)。是月 川尻町竹屋市三郎影踏御免を願出る (川尻史 172)。
3. 27 立木の不正伐採につき達 (林制 632)。28 越中守暇に付、銀50枚他を賜う (実紀)。
4. 1 越中守暇の御礼 (実紀)。13 洪水杉島川原角力芝居掛流失 (気・川尻史 294)。15 奉行真野源之助大奉行助勤となる (本)。21 斉護江戸発、5 月 26 日熊本着 (本)。
5. 13 沼山津手永井手村近辺、藪崩れ古墳出る (肥)。
- 閏5. 29 阿蘇大宮寺居宅普請用材を山藪より下付につき達 (林制 633)。
6. 7 越中守国許到着につき、御礼として使者、賜物差上げ (実紀)。27 斉護四男長岡寛五郎、津軽越中守順承の聲養子を許可さる、閏 5 月 19 日熊本発、7 月 24 日津軽家へ引越す (本・実紀)。是月 木挽町下屋敷内にて歩兵操練、且空砲打方御免 (本)。
8. 一 奉行副役辛川孫之亟に櫓方御用専務を命ず (本)。川尻町奉行須佐美九郎兵衛「条々」10ヶ条を示達す (川尻史 136)。二丁川口水尾引共御船御用に召仕の節、小脇差傘御免 (難稜)。
9. 9 御先挾箱、革覆取御免 (本)。12 恵妙院 (忠利姉・松井興長室) 200回忌 (本)。17 斉護、高瀬・長洲巡覧、19日帰府 (本)。越中守、松平大膳大夫、金紋御挾箱許さる (実紀)。是月 佐渡、数年勤向厚心により、新地開床 150 町拝領 (本)。

11. 6 齊護、植木にて兎狩り(本)。 15 若御前様御袖留、同日寛五郎登城、將軍家へ御目見(本)。 常憲院(綱吉)150回忌(本)。 澄之助、宇土よりの養子願を断る(本)。 是月 旱魃、穂枯にて損毛高 181,663石余(肥)。 声取坂に架設の安政橋、渡初式あり(先哲)。 桜、桧苗15万本を諸郡に配当を決定(林制 633)。
12. 29 川尻塩飽屋徳次郎、町奉行直触仰付らる(川尻史 120)。
- 是年 玉名郡横島村八番開55丁7反余築立、玉名郡赤腹村にて三ヶ村開築立、玉名郡大浜村にて大井樋尻1町5反築立(肥)。

安政 5 (1858) 戊午(家定・家茂) 齊護

1. 8 元奉行副役増田十郎左衛門死(肥)。 昨年12月幕府通商条約締結につき、諸藩に意見を徴す。世子慶順答申書を携えて登城、閣老に呈す(国事)。 16 山鹿本町出火・400軒類焼(肥)。 21 川尻町津方受込問屋源兵衛外2名影踏御免願出(川尻史 171)。 28 徳王村塩硝製造所より火起り、塩硝焼く(肥)。
2. 2 諦観院(齊樹)33回忌(本)。 13 土佐守娘と寛五郎婚姻整(本)。 15 菅尾手永馬見原町出火、108軒焼く(肥)。 18 米使の要請に関し、幕府の諮問に対する藩主の答申書を江戸へ送る(国事)。 28 肥後をはじめ、15ヶ国に宇佐八幡宮勸化御免(実紀)。 29 横井平四郎に越前福井に出向を命ず(国事)。 是月 相州大津より上州木曾路へ通行の節、品川より板橋までの人馬継立賃金を調査す(国事)。 長岡佐渡嫡子胃助、家老職出仕、奉行上野十平退任、幸川孫之丞本役昇進、井上嘉左衛門奉行副役就任(本)。
3. 1 家老溝口蔵人、藩議の決定により在府藩士に洋式銃陣の演習開始を達す(国事)。 6 藩主齊護熊本発、4月15日江戸着(本)。 藩主齊護、書を松平慶永に贈り、横井平四郎福井に向うことを報ず(国事)。 7 有吉市左衛門、中老に任ず(本・肥)。 17 近衛様御内齊藤撰津守より黒塗の長文庫届らる、封のまま直に老中内藤紀州へ持参(本)。 細川若狭守屋敷類焼により3,000両助力(本)。 強雨、洪水にて田畑破損の届(本)。 24 良之助、喜連川氏と離別、長岡護美と名乗る(本・肥)。 是月 津川数馬奉行本役に任ず(本)。 熊本府中、五十ヶ寺参り盛ん(肥)。 監物へ刀をくださる(本)。
4. 19 細川越中守参勤の御礼、病気に付使者を以てす(実紀)。 28 細川右京大夫、暇御礼(実紀)。
5. 3 是日より降雨、強雨にて田畑水浸(肥)。 6 齊護、時運の趨勢に従い、国是を変更し、富強兵備を整えるを急務とする所以を幕府に建言す(国事)。 16 慶順・護美江戸発、6月17日熊本着(本)。 26 嘉永6年以降今春迄の浦賀警備砲手の交替、輪番派遣に関する順位調書作成(国事)。 是月 奉行荒木甚四郎・江戸より下着(本)。 鶴崎方面雨天、天候不順にして田畑浸水、悪疫流行(肥)。 西洋法操練緒古御取起に付、電撃銃見本筒差下され、500挺製造仰付らる(肥)。
6. 19 日米通商条約調印(国事)。 21 江戸において藩主急速出馬の制を定む(国事)。 24 土佐藩主松平豊信、書を齊護に送り、米国と通商条約締結につき大老井伊直弼への建議に加盟せんことを勧告、齊護応ぜず(国事)。 29 強風雨、熊本城一の天守の魚虎吹き折らる(肥)。
7. 5 藩主齊護へ婿松平慶永の隠居、急度慎を申渡さる(実紀)。 6 將軍家定

- 薨去、慶福嗣ぐ(国事)。 9 浜町屋敷 6,000坪受領(本・実紀・国事)。 16 家老有吉頼母立道病死(本)。 是月 奉行真野源之助、大奉行本役に任ず(本・肥)。 重き法会等に俗家の子供を美麗に飾、法式に加えること。法頭職以外の寺院については禁止す(市雜乾 152)。 コレラ流行、死者 1,558人(肥)。
8. 7 本藩人口を幕府に届出る。惣人口 622,869人、男 315,206人、女 307,663人(国事)。 8 朝廷勅使を派遣し水戸を中心に肥後等大藩13藩に幕府の匡補に協力を命ず(肥)。 是月 有吉直熊相続、家老に任ず、次で将監と改名(本)。 箒星出る(肥)。 將軍家薨去、温恭院と諡(本)。
9. 8 馬見原町米値段について定め(熊本史学26号)。
10. 19 時習館出席の子弟心得方を指示(本)。 21 慶順、南郷高森小国内牧方面巡視、28日帰府(肥)。 鶴崎居住加子居宅より出火、93軒焼失(肥)。
11. 22 若殿様、東目巡在、29日帰殿(本)(前月記事と同じか)。 22 川尻町奉行、川尻町民基手銭貸付について覚書を出す(川尻史 157)。 23 斉護、従四位上に叙す(実紀)。 梅株院、33回忌(本)。 30 北里に大木を植えるよう達す(林制 635)。 是月 家老溝口藏人江戸より下着(本)。
12. 1 將軍宣下(本・国事)。 15 横井平四郎福井を發し、帰国の途につく(国事)。 是月 算学師役甲斐隆義、測量機械「精簡新機」を發明(城南史 480)。
- 是年 降雨、旱損にて損毛高 190,468石余(肥)。 宇土細川左近、喜連川家雛養子 500両助力(本・損)。 著書目録 助字彙 辞書 佐田介石。

安政 6 (1859) 己未 (家茂) 斉護

1. 3 口宣頂戴(本)。
2. 7 土佐守様家督の御礼済(本)。 11 幕府、本藩に武相両国における管轄地の変更を命ず(国事)。 18 慶順熊本発、3月22日江戸着(本)。 是日より29日迄本妙寺にて加藤清正 250回忌(肥)。
3. 29 清高院 150回忌(本)。 是月 中老有吉市左衛門、出府(肥)。
4. 23 泰樹院(慶前)13回忌(本)。 27 和田震七郎没、年73(先哲)。
6. 一 中老三淵志津摩、江戸より下着(肥)。
7. 22 慎徳院(家慶)7回忌(本)。 27 家老溝口藏人、熊本発、9月17日江戸着(本)。
8. 8 温恭院(家定)1回忌(本)。 10 長岡監物は容没、年47(本・先哲・国事)(「国事」は11日とす)。 20 泰勝院(藤孝)250回忌につき、京天授庵へ代拝として江戸より平野三郎兵衛を差越す(本)。 泰勝院 250回忌泰勝寺にて執行(本)。
9. 25 北里手永山の防火につき達(林制 636)。 是月 算学師甲斐隆義、物頭列となる(城南史80)。
10. 2 北里手永の畝物上納米を宿駅備とす(林制 637)。 4 長岡監物は豪、家督相続家老職(肥)。 17 江戸城本丸炎上(国事)。 23 諦了院(斉茲)25回忌(本)。 是月 奉行辛川孫之丞死亡(肥)。
11. 11 本藩人が高輪辺にて外人に不法を加えることを禁ず(国事)。
12. 1 幕府、諸侯に本丸造営の上納金を課す(肥)。 5 横井平四郎越前を發し、帰国の途につく(国事)。 27 本日より改鑄新銭の引替を行う(国事)。 是月 藤本津志馬、奉行本役就任(肥)。 江戸城普請に八代水島石・益城竹葉石一

基宛献上、鹽鉢なり (本)。

是年 玉名郡横島村九番開、飽田郡小島村に住吉新地築立 (肥)。当春、北里手永で約10万本を植林 (林制 639)。降雨・虫入のため損毛高 193,436石余 (肥)。夏以来コレラ流行、死者 3,785人 (肥)。

萬延1 (3. 18改元) (1860) 庚申 (家茂) 斉護・慶順

1. 一 御蔵山越御賞美年限規定 (市雜乾 153)。
2. 21 澄之助、熊本発、閏3月1日江戸着 (本)。
3. 3 大老伊井直弼、桜田門外にて刺客の難に会う。刺客8人本藩に預けらる。8日諸藩に預替、他藩のもの潜入の模様につき取締 (国事・肥)。是月 喜連川より助力願あるも御断 (本)。
- 閏3. 15 細川右京大夫、暇の御礼 (実紀)。 17 慶順江戸発、4月20日熊本着 (本・国事)。城郭普請用の松の大本調査に付、達 (林制 639)。 19 幕府は物貨拂底につき、当分雜穀・水油・蠟・呉服・糸等の貿易品はすべて府内を経由して開港場へ出すべき旨を達す (国事)。是月 領地の判物頂戴 (本)。
4. 7 9日まで強雨、家屋田畑浸水 (肥)。 12 江戸城修築のため、唐銅八千貫幕府に納む (国事)。 17 斉護没す (本・国事・肥)。 23 泰樹院 (慶前) 13回忌 (本)。 27 藩主不例の報あり29日石寺甚助差立 (本)。
5. 8 慶順熊本発、6月14日江戸着 (本)。本藩兵士出動の制を定む (国事)。 27 細川右京大夫病氣御尋上使 (実紀)。斉護逝去 (実は4月17日なり、翌文久元年2月実遠逝日に改む) (本・実紀)。 29 香典白銀50枚下さる (実紀)。是月 安政橋の名を一時新橋と改めたがさらに安己橋と改む (肥)。
6. 9 雷雨、被害多し (本・肥)。 11 御機嫌伺として長尾安右衛門、差立らる (本)。 12 惇心院 (家重)100回忌 (本)。泰源院 (12月泰厳院と改む、斉護) 妙解院に奉葬 (本)。是月 櫛方一部併局 (本)。
7. 12 慶順、父の遺領相続 (本・肥)。 28 慶順登城し、襲封を謝す。越中守と改む (本・実紀)。是月 馬見原にて穀類一切問屋通方差留らる (熊本史学24)。家老小笠原備前、出府 (本)。
8. 4 澄之助江戸発、9月13日熊本着 (本)。顕光院 (斉護室) 浜町屋敷へ引移 (本)。 21 慶順、左近衛少将に任ず (実紀・本・国事)。是月 温恭院 (家定) 3回忌 (本)。
9. 13 越中守就封の御暇、銀50枚、巻物20賜う (実紀)。 14 鳳台院 (慶前室) 白銀御住居 (本)。 15 越中守暇御礼少将拝任礼 (実紀)。 19 慶順江戸発、10月24日熊本着 (本・肥・国事)。是月 中老有吉市左衛門、江戸より下国 (本)。
10. 一 家老溝口蔵人、江戸より下国 (本)。
11. 1 大奉行真野源之助没す、年68 (本・肥・先哲)。是月 9月11・13日、家中の惣礼を受けらる (本)。 18・20日、祝能興行 (本)。
12. 一 家老溝口蔵人、退任 (本)。奉行井上嘉左衛門20挺頭、宇野市郎右衛門奉行副役に任ず (本)。

是年 風雨・洪水・穂枯等にて損毛高 183,061石余 (肥)。唐薬種除取につき、諸間割合振替分、至急上納につき町方取遣の事 (覚)。著書目録 航米記 地誌 木村鉄太。露草 歌文 中島広足。国是三論 法制 横井小楠。郷学私議

法制 井口呈助。国風 詩文 萩角兵衛昌国。

文久1(2. 19改元) (1861) 辛酉 (家茂) 慶順

1. 一 中老有吉市左衛門、奉行藤本津志摩退任 (本)。 津軽越中守待從拝任 (本)。
 2. 6 松平和泉守へ譲渡の木挽町屋敷を引渡完了 (肥)。 藩主6日より山鹿入湯、8日帰殿 (本)。 28 長岡与三郎、中老に任ず (本・肥)。 是月 士席浪人格町独礼以下扶持所持の者の改名、今後町方にて扱う (市雑乾 154)。
 3. 3 長岡内膳熊本着 (本)。 是月 楯岡慎之助、奉行に任ず (本)。
 4. 9 銭塘冲古閑海辺に築造中の、御郡 (50丁) および長岡刑部 (80丁) 共同新地潮留工事終る (先哲・天明誌 472)。 12 是日より19日迄強雨浸水鯨手永甚し (肥)。 17 川尻地方大雨 (肥)。 泰源院1回忌 (本)。 27 諸郡山藪諸木植林10ケ年の取調に付達 (林制 648)。
 5. 30 宇土支藩山城守弟主米輔、養子許可さる (実紀)。 是月 草野石瀬 (樹徳齊校長) 没、年75 (肥人)。
 6. 17 鹿子木鎌之助没、年78 (先哲)。 24 故斉樹室蓮性院没 (本)。 箒星出る (肥)。
 7. 24 長崎在留の蘭人より西洋砲術伝習のため、池部啓太等を派遣す (肥・国事)。
 8. 29 慶順熊本発、10月9日江戸着 (本・国事)。 是月 慶順、藩臣の守るべき条目を定めて用人に示す (国事)。
 9. 11 顕光院 (斉護室) 等帰国のため、二の丸屋形を建広める (本)。 是月 三池尉右衛門、奉行副役に任ず (本)。 片山善三郎、時習館教授となる (先哲)。 南関会所小頭鉄砲鍛冶源太郎、鉄砲細工功熟につき、郡代直触仰付らる (難稜)。
 10. 14 文昭院 (家宣)150回忌 (本)。 28 越中守参府 (実紀)。 是月 顕光院・鳳台院病気のため帰国許可さる (国事)。 亜英仏三国商館建築取掛り (本)。 澄之助・良之助屋形、藏人懸屋敷および楯岡慎之助屋敷を召上建方 (本)。 御客屋を町奉行所へ当分所替 (本)。
 11. 1 越中守参府御礼 (実紀)。 11 宇土支藩主細川主米輔登城、將軍家初見 (実紀)。 15 越中守へ鷹の雁2羽賜る (実紀)。
 12. 2 清川八郎、松村大成を高瀬に訪う、是頃平野次郎も松村を訪う (肥・国事)。 是月 奉行副役三池尉右衛門、出府 (本)。
- 是年 玉名郡田見村石塘新地成る (肥)。 春以来雨損旱魃により損毛高 171,947 石余 (肥)。 著書目録 上古嫁娶弁 法制 中島広足。

文久2 (1862) 壬戌 (家茂) 慶順

1. 4 宮部鼎蔵、松村深蔵形勢探索のため熊本発上京す、2月5日上国の事情をもたらして帰国す (国事)。 15 欽一郎、誕生 (本)。 18 小国郡代萩角兵衛、自刃す (国事)。 21 宇土支藩山城守立則病氣致仕、主米輔行真相続す、2月28日就封の暇あり (実紀・宇土史 117)。 是月 杉島手永坂口權太郎、長崎修業中イギリス船見調帳を記す (川尻史 735)。
2. 5 木村鉄太 (航米記著者) 没、年34 (肥人)。 7 人吉火事、人吉城全焼す、虎助火事という (肥)。 8 奉行津川数馬、病没 (本・肥)。 13 慶順暇につき銀50枚、巻物20巻遣さる (実紀)。 24 慶順江戸発、4月1日熊本着 (本・国事・肥)。 是月 北里傳兵衛 (惣庄屋) 没、年61 (肥人)。
3. 1 宮部鼎蔵、松村深蔵等、来原良蔵とともに鹿児島に向う、3月7日薩州市

- 来駅にて薩人有島新七等と会見して挙兵の方策を講ず (国事)。 9 家老大木舎人、奉行宇野市郎右衛門退任 (本)。
4. 10 細川行真従五位下に叙す、大和守と称し後豊後守と改称す (宇土史 119)。 17 泰蔵院 (齊護) 3 回忌 (本)。 18 筭の売買禁止、竹仕立方奨励等を達す (林制 659)。 20 欽一郎死去 (本)。 27 藩主、朝幕に対する心事、又藩内人心動乱について告諭、家老以下謹慎す (肥)。 是月 家老有吉将監、帰着 (本)。 右田才助・井上久之允・柏木文右衛門、奉行副役に任ず (本)。
5. 6 在府本藩老臣は、長岡護美の出府がもし公武合鉢の周旋のためであるならば、暫くその期を延ばすよう藩政府に通牒す (国事)。 7 行真参内、孝明天皇に拝し、天盃を賜る (宇土史 117)。 19 奉行楯岡慎之助、京都の形勢を藩政府に報告 (国事)。 是月 松野亘、家老に列す (本)。 澄之助・良之助屋敷移徙 (本)。
6. 1 中老長岡与三郎、病没 (本)。 3 喜久姫死去 (本)。 5 是日より強雨、田畑家屋浸水 (肥)。 7 在府の藩士遠山三右衛門、幕府政弊を改め言路を開く由、熊本に報告 (国事)。 12 宮部鼎蔵、永島三平に本藩政府の近況、江戸よりの通信等を報告 (国事)。 20 蓮性院一周忌 (本)。 28 平野九郎右衛門、中老に任ず (本)。 白川・山鹿川・高瀬川出水 (肥)。 是月 幕府、諸侯の妻子国許へ引取勝手次第とす (肥)。 家老小笠原備前、帰着 (本)。
7. 1 井口呈助、熊谷嘉左衛門に対し、薩長の公武周旋に関する観察および藩内松井・米田両派の分争に関する意見を述ぶ (国事)。 6 横井平四郎、再び越藩に召される (国事)。 8 横井平四郎、幕吏大久保忠寛に諸侯の参勤を述职に易え、其室家を国に帰し、かつその固場を免ずべしとの三策を建言す (国事)。 11 元田永孚、萩蘇源太へ其兄の死を悼み、かつ政局推移の形勢、幕府一新の状況を説き、公武合鉢の兆を喜び、横井平四郎着京等を報ず (国事)。 17 横井平四郎、慶喜春嶽起用後の幕府の状況を吉田平之助に告ぐ (国事)。 28 奉行楯岡慎之助京都より熊本帰着 (国事)。
8. 11 野津原、鶴崎非常の洪水 (損)。 13 川尻にころり病流行につき、16番神社に祈祷す (川尻史 411)。 14 小佐井才八 (測量師) 没、年44 (肥人)。 27 横井平四郎、幕府大監岡部長常を訪ね、時事を論ず、その論大いに幕廷を動かし、横井登用さる (国事)。 28 大久保忠寛、横井平四郎に春嶽も速やかに出仕せんことを懇諭 (国事)。 是月 勅書を各大藩に給い、力を国事に尽さしむる (肥)。
- 閏8. 6 鍋島閑叟、内勅降下に関し、慶順の意向を問う (国事)。 8 横井平四郎幕府の登用を固辞す (国事)。 19 横井平四郎、一橋慶喜に謁し時局を意見、将軍の上洛の必要を説く (国事)。 19 在京本藩老臣、横井平四郎の幕府登用固辞を、藩政府に報告 (国事)。 22 越中守、当戊夏中在府 (実紀)。 幕府、諸侯参勤の期を緩め、且つ妻子の就国を許し、その他行装、服色、貢物等の制を改む (国事)。 27 田中八郎兵衛、京都より帰着 (国事)。 是月 家老長岡監物、退任 (本)。
9. 11 豊後鶴崎方面大洪水 (肥)。 25 長岡刑部、内勅奉承の答礼使として上京す (国事)。 是月 八代城石垣崩潰に付、修補願済 (本)。 国家周旋の儀につき、一条様より直書到来 (本)。

10. 6 山田十郎、佐々淳次郎相伴って、国老小笠原備前を訪う、これより本藩の勤皇家二派に分裂す(国事)。 7 長藩の使者、土屋矢之助熊本に来る(国事)。
- 9 長岡刑部、上京の命を辞す(国事)。 14 三条実美、姉小路公知勅使として東下、内旨を14藩に諭す(肥)。 16 在府本藩重臣は、松平春嶽引入に関する横井平四郎の密話を藩政府に報告す(国事)。 23 横井平四郎、嘉悦市之進に目下の政局に処する幕府第一の急務は京師尊崇であり、幕府の因循を憂う(国事)。 29 三洲志津摩、長岡護美上京につき随従の件、および住江甚兵衛等をして周旋せしめることにつき、老臣の意見をきく(国事)。 是月 大木舎人、家老再任(肥)。 玄猪の規式省略、餅の儀は是迄の通り(本)。 銭塘手永三町村伝助列九人、有馬陣以来水尾引相勤るにより苗字御免、惣庄屋直触等仰付らる(難稜)。 光永惟詳(惣庄屋)。 汲、年59(肥人)。
11. 1 住江甚兵衛、魚住源次兵衛、上京命ぜらる(国事)。 飯田能之助、日田陣屋警衛として兵50人を率い熊本を発す(国事)。 2 長岡護美上京につき、楯岡慎之助、下津久馬、鎌田軍之助を陪従させんと議あり(国事)。 3 住江甚兵衛等の上京旅程を変更する(国事)。 11 長岡監物、家老復任(本)。 13 長岡護美熊本発、12月5日京都着、京都警衛(国事)。 慶順は勅諭により追て上京すべく、弟長岡護美をして先発せしむる旨、幕府に申告す(国事)。 21 越中守、来二月上洛の供奉のこと(実紀)。 是月 松井胃助家老に列す(本)。 中老朽木内匠、退任(本)。
12. 3 横井平四郎攘夷実行に関し、三策を幕府に建白す(国事)。 6 幕府、軍役兵賦を定む(国事)。 12 長岡護美、京都警衛の朝命を奉承す(国事)。 14 朝廷、長岡監物の上京を促さる(国事)。 16 長岡護美しばらく滞京して警衛の任に当るべしとの勅旨を受く(国事)。 穀丸誕生(本)。 17 宮部鼎蔵等、伏見より淀川を初め大坂川口海岸地理視察として出張を命ぜらる(国事)。 18 顯光院および鳳台院江戸を発し、2月16日熊本着(国事)。 19 吉田平之助・都築四郎・横井平四郎暴漢に襲わる(国事)(「肥」には21日とあり)。 22 慶順室江戸発、2月18日熊本着(国事)。 薮右馬允、熊本および江戸に対し、長岡護美京都警衛を命ぜられたことにつき、兵士、砲器等充実の件を交渉(国事)。 23 慶順、長岡監物を従えて上京す(国事)。 25 家老大木舎人、隠居(本)。 26 前宇和島藩主伊達宗城、本藩長岡護美連署して時事を上陳す(肥)。
- 是月 奉行小山門喜退任。同井上久之允転任(本)。
- 是年 損毛高 192,156石余(肥)。 野津原手永大龍井手筋、非常洪水(覚)。 国中諸品代等、銀所預と金銀並び通用仰付らる(覚)。 鶴崎町、古今無類の水害(覚)。 大坂平野屋帰一へ新地物成代のうち、年賦上納引残分を引渡さる(覚)。
- 長州鉄御試につき、川尻町根取へ値段等問合せ(覚)。 天保小判の代りに通用金15,000両小物成方より仕向へ(覚)。 古式朱判買上(覚)。 新坪井零落につき、拝借金(覚)。 無宿者貫鉢の者へ闕所銀渡下(覚)。 植木町富落銭のことにつき、町方より返答(覚)。 小笠原備前、勝手方定上聞仰付らる(覚)。 阿蘇大宮司上京につき、出立諸造用渡方のこと(覚)。 白砂糖製法所出役(覚)。
- 金銀双場改り(覚)。 五嶋、宇久嶋鯨組、芋代年賦催促(覚)。 著書目錄 魚住源次兵衛列同志建白書 法制 魚住源次兵衛。施条砲射擲表 諸家 池部如泉。

文久3 (1863) 癸亥 (家茂) 慶順

1. 17 慶順京都着 (国事)。 27 藩士住江甚兵衛等、京都翠紅館にて將軍上洛についての方策を議す (国事・肥)。 是月 井口呈助は横井平四郎の処分に関し、意見書を松平春嶽に提出 (国事)。
2. 9 慶順参内して天盃を拝受 (国事)。 17 長岡護美、松平春嶽を訪う (国事)。 22 東久世通禧は長岡護美の帰国に際し、住江甚兵衛等を留めて国事に尽させるよう関白の命を伝う (国事)。 23 住江甚兵衛等に滞京を命じ、その旨廷に具申する (国事)。 24 長岡護美京都発、3月12日熊本着 (本・国事)。 是月 奉行楯岡慎之助、病死 (本)。
3. 1 家老長岡佐渡隠居、松井胃助家督相続 (肥)。 6 日出藩、使者を熊本に遣し、攘夷断行の際の応援を求む (国事)。 8 慶順、支藩細川主米輔の参府を転じ、京都守備を幕府に申請する (国事)。 10 慶順、英艦薩海に廻航すとの風聞により松野亘を帰藩させる (国事)。 11 慶順、加茂行幸に供奉 (実紀)。 長門藩士久坂義助、本藩士轟武兵衛連署して攘夷期限の決定を関白に請う (肥)。 京都賑恤の料として、米15,000俵を献上することを朝廷に申請 (国事)。 18 幕府は10万石以上の諸侯に令し、万石一人の割を以て禁闕守護の兵を出すべき旨を達す (国事)。 27 川尻青木保弘、勤王志士として54人の親衛隊に選ばれる (川尻史 736)。 28 長崎留守居より、日英関係切迫による長崎騒擾の状況等を報告 (国事)。 29 慶順は藩地治海および天草策応のため、帰藩を朝廷に申請する、4月6日京都発、4月21日熊本着 (国事)。 是月 家老松野亘、京都より帰国 (本)。 国米15,000俵献納にはおよぼすとの沙汰あり (本)。
4. 4 細川越中守目見 (実紀)。 10 宇土支藩主細川主米輔、従五位下大和守と称す (実紀)。 11 石清水行幸について警衛する (本・国事)。 22 長崎留守居より幕府が佐賀・福岡両藩に対し、長崎警備に関する諮問を行ったとの旨、報告 (国事)。 是月 宮部鼎蔵・長藩久坂義助ら、閣老板倉勝靜に摂海の防備および攘夷の励行を促す (国事)。 家老松井胃助、長岡帯刀と改む (本)。 宮部鼎蔵ら京都発、帰国 (国事)。 鎌田軍之助、京都にて奉行に任ず (本)。
5. 8 長岡監物京都発、帰国の途につく (国事)。 10 長岡内膳、藩主名代として上府、5月24日京都着 (国事)。 12 住江甚兵衛、上京の途につく (国事)。 21 朝廷禁門守備、本藩寺町御門守備を命ぜらる (国事・肥)。 25 本藩相州沿岸警備の任を解かる (国事・本)。 26 横井平四郎、越前より当時の形勢幕府の状況、越前藩論の内容を通報す (国事)。 是月 片山多門奉行に任じ、三池尉右衛門転役 (本)。 杉島手永、坂口権太郎、長崎修業中造船学などを学ぶ (川尻史 736)。
6. 1 細川大和守、官位の御礼 (実紀)。 長岡内膳着京につき、細川大和守賜暇、京都発帰国 (国事)。 2 敬心院1回忌 (本)。 9 將軍家茂京都発、大坂に下る、6月16日江戸着 (本・国事)。 10 落書、竹鉄砲打掛等取締り (肥)。 12 宮部鼎蔵等、三条邸に会し、親兵のことを議す (国事)。 17 桂小五郎、轟武兵衛等、京都にて車駕親征を議す (肥)。 20 蓮性院三回忌 (本)。 27 宮部鼎蔵、真木和泉を訪い親兵の事を議す (国事)。
7. 2 宮部鼎蔵等、三条実美に謁し、越を拒む策を決定 (国事)。 9 穀丸死去 (本)。 18 本藩は九州各藩連衡して、公武合体に尽くすことを決す (国事)。

杵築藩は本藩に使者を送り、海岸防備および長倉交渉について意見をきき、且つ臨時助力を乞う(国事)。19 庄村助右衛門、増田八十六に砲器火薬研究のため長崎へ出張さす(国事)。20 藩兵を増遣して三条邸警固を決す(国事)。

22 本藩他7藩、建春門院内の警衛命ぜらる(国事)。25 沼田勘解由、京都警衛拝辞困難の事情を報じ、長岡護美の上京を促す(国事)。寺尾太門等小倉に赴き、長倉二藩の状況を視察する(国事)。26 攘夷および公武に対する藩主建白書を京都に送る(国事)。神谷矢柄を肥前に遣し、公武合体周旋のことを談合させる(国事)。越前藩士岡部豊後、三岡八郎ら熊本に來り、同30日藩主父子の書を本藩主に呈す(国事)。27 小倉藩の使者熊本に來、攘夷決行に関する内情をのべて、我藩の斡旋を乞う(国事)。28 筑前藩の使者、公武合体周旋談合のため熊本に來る(国事)。29 住江甚兵衛、家老に対し、出京して公武合体関東委任の周旋に當ることを請う(国事)。是月 下旬、宮部鼎蔵、山田十郎は土藩土方楠右衛門と共に時局に関する建白書を朝廷に上る(国事)。

8. 2 朝廷、本藩士林藤次(桜園)・永鳥三平を召さる(国事)。沼田勘解由は京都の事情を報告し、建白中止・藩兵東上・自己西下等を国元に打診す(国事)。

7 朝廷、本藩の献納米を免じ、和簡献上命ぜらる(国事)。慶順、および長岡護美、答書を松平春嶽に送る(国事)。長岡内膳は公武に対する藩主の上書案に対し、藩主の復考を希望する(国事)。9 中老三瀨志津摩、退任(本・肥)。11 山川亀三郎、森尾龍彦等に砲器製造係を命ず(国事)。鎌田軍之助は藩政府に対し、公武合体の主張は禍を招く恐れあり、逐行するためには兵力を擁する必要があることを報告(国事)。横井平四郎越前福井を出発し熊本へ帰る、8月25日着(国事)。12 我藩答書を佐賀藩に送り、公武周旋をなさんことを告げる(国事)。14 幕府は天草に異国船渡來の節、警衛として出兵すべく命ず(国事)。鎌田軍之助は藩兵上京の急務と、藩主もしくは連枝の上京による公武合体周旋を請う(国事・本)。15 慶順、弟長岡護久に上京を命ず(国事)。16 朝廷親征の用途10万金の調達を我藩および薩長等に命ぜらる(国事)。18 三条実美等七卿、長州へ下る(国事)。19 朝廷、長岡護美召換の勅諭を下さる(国事)。23 轟武兵衛・山田十郎に帰国を命ず(国事)。

24 幕府は豊後日田および附近幕領の警備を本藩に命ず(国事)。25 武相両国における預所郷村を幕府代官に引渡完了(国事)。内藤泰吉は京都における浪士の追捕、勤王家の処置および変後の経緯につき、越藩等より長岡護美の出京を期待する状況を報ず(国事)。26 長岡護美上京を決す(国事)。宮部鼎蔵が三条実美に従って長州に赴いた由、京都留守居より報ず(国事)。備頭坂崎忠左衛門等の一隊、熊本発上京す(国事)。細川大和守、佃島警衛を命ぜらる(国事)。27 宮部鼎蔵、徳島藩家老蜂須賀駿河に対し、三条実美等西下の意をのべ、藩主に勤王を勧める(国事)。28 有吉市左衛門は長岡護美、同護久に従い、備頭沼田勘解由は家老代役として共に上京を命ぜらる(国事)。

9. 1 轟武兵衛、山田十郎長州へ下る(国事)。2 竹志田熊雄(勤王家)没、年21(先哲)。4 朝廷、我藩他23藩に京都市内の警固を命ぜらる(国事)。宮部鼎蔵徳島を出発、長州に向う(国事)。5 慶順、松平春嶽父子に対し、横井の処分について述ぶ(国事)。10 唐津藩、使者を熊本に遣し、外夷掃攘、

- 長崎警衛に対し応援を求む (国事)。 11 長岡護久、同護美上京の途につく、28日京都着 (国事)。 有吉市左衛門、これに従う (国事)。 旧親兵小坂小次郎等、京都を発し長州に走る (国事)。 牛島五一郎、本藩国是の確立、外交に関する文書等を熊本の中へ送る (国事)。 12 越藩使臣、横井平四郎宥恕のことで小笠原備前と会見す (国事)。 14 小坂大八以下旧親兵に帰国を命ず (国事)。
- 17 宮部鼎蔵、防州富海に着 (国事)。 三条実美等、宮部鼎蔵に対し、三田尻会議所詰を命ず (国事)。 18 小坂大八以下旧親兵34名、明日京都発、帰藩を命ぜらる (国事)。 19 日田、天草に出兵を決す (国事)。 20 幕府の示達により、一隊に日田・天草出張を命ず (国事)。 27 日田警衛の兵を出す (国事)。 28 天草警衛の兵を出す (国事)。 29 上田久兵衛、葉室慎助に警衛に関する要務を負って天草出張を命ず (国事)。
10. 2 長岡護美参内す、朝廷、長岡内膳に帰国の暇を賜う、4日京都発、19日熊本着 (本・国事)。 4 京都にて肥薩会土藩と力を合わせ時局の解決に当ることをはかる (国事)。 桂川を本藩の警備地と決める (国事)。 6 吉田少右衛門に砲器製造係を命ず (国事)。 11 在京の門生等、横井平四郎に島津久光参内遅延の事情、会薩内情等を報ず (国事)。 18 將軍上洛周旋のため、道家角左衛門江戸に派遣さる (国事)。 21 元田八右衛門、都築・横井等の処置の寛大を請う (国事)。 22 長岡護美・同護久速かなる將軍上洛を乞い、松平春嶽に書を送る (国事)。 23 三条実美等、檄を河上彦齊に授け、九州諸藩の士気を鼓舞す (国事)。 宮部鼎蔵、京情偵察のため長州を発す (国事)。 25 在京本藩重役は、宮部鼎蔵ら脱藩士の処分に關し照会す (国事)。
11. 5 閣老板倉勝静は將軍上洛周旋のための本藩の尽力をのぞむ (国事)。 小篠熊雄等を下して在長本藩志士等の動静を探せる (国事)。 長崎留守居より過去1ヶ年間長崎出入の外船員数の調書を提出する (国事)。 6 山田十郎、轟武兵衛捕縛の令を出す、是日捕らる (国事)。 7 住江松翁等に旅人面会他所文通等を禁ず (国事)。 8 山田、轟護送のため、郷士20人点検使15人を久留米に派遣 (国事)。 9 大砲鑄造および伝習用懸の増田八十六に江戸帰還を命ず (国事)。 山田、轟熊本着 (国事)。 17 薩人村上下総、中川宮に対し横井平四郎の幽囚を解くよう請願す (国事)。 23 在京本藩重役は山田、轟、宮部等の処置に対する藩政府の通議に答え、京都の事情を報ず (国事)。 是月 長岡護美、方今の事情に関する意見書を藩に出す (国事)。
12. 5 越藩使節、横井等罰案の評議の延期を乞う (国事)。 16 横井平四郎・都築四郎等を罰す (国事)。 17 一橋慶喜、長岡護久・同護美を旅館に訪ね、交歓す (国事)。 29 慶順、松平春嶽に横井平四郎処分のことを報ず (国事)。 是月 飽田郡小島村正泉寺僧佐田介石、長藩処分に関する意見書を一橋慶喜、松平春嶽に提出する (国事)。 細工町朝市場、往来の妨げにつき細工三丁目角に是より下朝市場の杭建つ (市雜乾 155)。 在中の者、無礼にて触売は従来通り許可、在人数にて小路宿借鉢の者触売は禁止、安永3年の再触 (市雜乾156)。
- 是年 中老平野九郎右衛門、大奉行兼帯 (肥)。 本庄会所を鉄砲製造所とし、会所を春竹村に移す (肥・年覚)。 損毛高 184,831石余 (肥)。 通用金と草文銀両替のことについて度々触あり (覚)。 八代三手永武芸稽古場、宮原において郡代詰所内に建方願 (年覚)。 種山手永会所今村の内、床替を以て新規建替のこ

と(年覚)。松山手永立岡村花園堤水吐仕法替(年覚)。杉島手永守留在養水難決につき新川堀替仰付らる(年覚)。五町手永徳王村にて塩硝蔵建方(年覚)。

本庄手永新南部村惣兵衛裁開徳米代銭納のこと(年覚)。五町手永河内村懸御用砂場の山開床地の上納米のこと(年覚)。鶴崎にて金買付(覚)。江口半兵衛、御手船定問屋、藍株人定問屋願(覚)。鶴崎高田手永、非常洪水(覚)。

蒲原敬助、御用鉄買上のため芸州へ派遣(覚)。高瀬・川尻・高橋3ヶ町馬口労職、今後町方扱となる。運上は小物成へ上納に及ばず(覚)。蒸気船買上に付、見込書付、5万両小物成方より支出(覚)。松田又右衛門・甲斐謙太郎・市原宇五郎三人、2千俵宛双場をもって代銭差出拝借米済下さる(覚)。護久、護美上京につき、費用として小物成方より14,750両支出(覚)。手当方(軍備)御用鉄、芸州より鶴崎へ廻着(覚)。阿蘇大宮寺上京につき出立造用立替のこと(文久2年にも同項あり)(覚)。金銀相場・変動はげし(覚)。五嶋宇久嶋年賦金のこと(文久2年にも同項あり)(覚)。著書目録 処時変議

法制 横井小楠。

元治1(2・20改元)(1864)甲子(家茂)慶順

1. 21 中島広足歿、年73(先哲)。23 長岡護久・同護美二条城登城、將軍家茂に謁す(国事)。28 轟武兵衛の訊問を開始(国事)。
2. 5 轟武兵衛自殺を企つ、未遂(国事)。7 日田警備兵の一部を撤退すべき旨を屋代増之助に通報する(国事)。10 長岡護美、松平春嶽を訪ね、因循の幕習を打破する要をとく(国事)。11 幕府は征長軍の部署を定め、内命を我藩ほか数藩に伝える(国事)。公迎より御封書御渡(本)。16 備頭沼田勘解由京都発、24日熊本着(肥)。中旬 長岡護久・同護美時局に対する在京老臣の意見をきく(国事)。22 長岡護久・同護美、幕府に上書して長州処分を寛大にせんことを述べる(肥)(「国事」には3月3日とあり)。24 日田および天草警備兵の一部撤退を西国郡代へ通牒す(国事)。28 長岡護久・同護美、幕府に帰藩の許可を乞う(国事)。是月 川尻町塩飽屋徳次郎、切支丹宗門改めの覚書を提出(川尻史 165)。大野鉄兵衛を千葉城の嶽に投ず(国事)。
3. 2 長岡護久・同護美参内す。滞京すべしとの勅諭あり(国事)。11 慶順、三条実美の山田十郎、轟武兵衛に託する書を開封する(国事)。竹崎律次郎、長防探索書を郡代中村庄右衛門に送付する。此頃増美三八等も又長防探索書を提出する(国事)。13 僧介石、伊達宗城に謁して、興正寺門跡をして長州を説得せしめんことを進言する(国事)。泰樹院(慶前)17回忌、4月23日のところ是日と翌日行う(本)。16 本藩警備地数ヶ所散在のため、任務困難により東山・桂川の警備解除を幕府に申請する(国事)。17 朝廷、長岡護久・同護美に今暫くの滞京を命ず(国事)。18 松平春嶽、長岡護美に種痘を勧む(国事)。10万金を借りることを決す(国事)。23 時勢切迫国財空乏につき広く藩士に献策を求む(国事)。長岡護久参内、24日二条城に登城暇乞、25日京都発、4月10日熊本着(国事)。
4. 2 軍備充実の必要上省略並びに国益について藩士の意見をきく(国事)。3 汽船運用についての視察のため、関八郎助・山川亀三郎を肥前久留米に派遣(国事)。6 勝麟太郎、長崎より帰府の途中、熊本に泊る(国事)。8 朝廷長岡護美に帰国の暇を賜う(国事・本)。10 長岡護美、二条城に登城、翌

- 11日参内、15日京都発、24日熊本帰着（国事）。 11 慶順、従四位上に叙任（国事）。 12 細川若狭守、神田橋御門番（実紀）。 14 將軍家茂、長岡護美国事周旋の労を慰す（国事）。 15 演武場における操練に大砲を加え点火を試みる（国事）。 17 永屋猪兵衛、在郷兵を引率して、大坂詰を命ぜらる（国事）。 18 公武一和、諸事節略、武備充実の国是を定む（国事）。 20 芳心院3回忌（本）。 25 幕府、本藩に京都守衛陣屋地として、壬生村、中堂村に14,000余坪の地を下附する（国事）。 28 長岡護美、老臣に京都の事情を語り、憤発一新の時なることを諭す（国事）。 是月 家老有吉将監、京都より帰る（本）。
5. 1 幕府は武備充実のため、鋼鉄の器物を廃し、砲器に改鑄すべきを達す（国事）。宮部鼎蔵、三条実美等の使命を帯びて加州に赴く（国事）。 13 京都守備兵交替の制を定め、志水新丞の隊に上京を命じ、津田三十郎と交替させる（国事）。 16 在京奉行副役藤本常記に命じ、横井平四郎救助に関する交渉を承諾する旨越藩に通達させる（国事）。 20 致仕新田支藩主能登守卒（本）。 是月 本庄手永水夫萬助等蒸気船乗組出精により苗字刀御免（難稜）。
6. 2 敬心院3回忌（本）。 5 池田屋事件、宮部鼎蔵・松田重助等肥後及び長州の志士数名たおる（国事）。 12 備之丞誕生（本）。 18 帝都守備陣屋地として壬生村・中堂村のうち13,600余坪引渡さる（国事）。 是月 郡夷則中老に任ず（本）。
7. 2 伏見辺の警衛を解かる（国事）。 9 麟祥院一周忌（本）。 15 京都不穩の報により備頭溝口蔵人に上京を命ず（国事）。 19 蛤御門の変、内田弥三郎（24才）高木元右衛門（32才）戦死（国事・先哲）。 中津彦太郎（勤王党）没年32（先哲）。 加屋四郎（勤王党）没年21（先哲）。 小坂小次郎（勤王党）没年22（先哲）。 西島亀太郎（勤王党）没年29（先哲）。 20 京都騷擾につき、長岡護美上京命ぜらる（国事）。 21 小坂小次郎・加屋四郎等、眞木和泉の同志17人山崎天王山に自盡す（国事）。 23 征長の勅諭下る（国事）。 25 住江松翁（勤王党）没（先哲）。 27 征長につき藩主代として弟を小倉に出張させること、長岡護美上京猶予のこと、上京途中の藩兵を防長追討に転ずること等を幕府に申請する（国事）。 28 小倉応援を命ぜらる（国事）。 29 京都騷擾の報により、長岡護美上京を決す（国事）。 是月 小笠原備前、美濃と改む（本）。 長州勢不穩につき、溝口蔵人組出京の処、船中より引返（本）。
8. 6 長岡護美18日発途上京すべき旨を達す（国事）。 備頭沼田勘解由を先鋒隊長に任ず（国事）。 7 征長軍の部署を定む（国事）。 8 小倉応援のため、召喚の老臣および上京途中の藩兵の帰国を所司代に申告す（国事）。 温恭院（家定）7回忌（本）。 10 備頭沼田勘解由、小倉応援として出陣を命ぜらる（国事）。 12 有吉将監に部下一隊の小倉出向を命じ、その指揮を沼田勘解由に兼掌させる（国事）。 16 長岡護美の上京を延期す（国事）。 備頭沼田勘解由の兵、小倉に向けて出発（国事）。 22 砲500挺の鑄造を決し、原料の鉄購入のため人を大坂・広島等に派遣す（国事）。 24 武備の充実を達し、且つ征長軍の部署を定む（国事）。 小笠原一学、京師変動につき天機奉伺の使者として熊本発、9月18日天機奉伺の使者をつとむ（国事）。 25 支藩細川行眞、親しく征長軍に臨まんことを請う（国事）。 27 藩政府は細川行眞の請願を納る（国事）。 28 小倉出兵の順序を変更す（国事）。 長岡護美上京中止の旨を布達（国事）。

- 本藩老職の分担を定む (国事)。 長柄の者 100人を銃隊に編入する (国事)。
9. 1 征長従軍者の跡目相続に関する令を出す (国事)。 6 長谷川仁右衛門将軍防長親征に関する慶順の建白書を携え熊本を発す (国事)。 23 藩政府は、住江甚兵衛等に対して公武合体を達し、かつ勤王説過激に及び長藩の信を失ふことを諭示し各自の請書を提出させる (国事)。 25 南禅寺その他に分宿せる藩兵を壬生陣屋に移す (国事)。 26 番頭牧多門組来月6日上京を決す (国事)。 是月 佐久間角助奉行副役に任ず (本)。
10. 3 牛島五一郎等に新規購入の汽船乗組を命じ、軍艦所創設の上は、同所に出仕すべき事を達す (国事)。 7 上林三二郎に新購入の汽船乗組を命じ、熊本船場3丁目永田兼次郎宅懸屋敷に新設の仮軍艦所に出仕すべき事を達す (国事)。 8 備頭沼田勘解由に臨時征長軍総奉行心得を命ず (国事)。 白石清兵衛等に砲器製造懸を命ず (国事)。 15 征長につき、寺町門衛の士を増加す (国事)。 21 小倉出兵の次第および長岡護美出陣の事を議す (国事)。 24 本藩征長軍進向の順次を京都所司代および征長総督に申告す (国事)。 28 池部啓太・牛島五一郎等に新購入の汽船試乗を命ず (国事)。 29 番頭松山権兵衛の一隊小倉に向う (国事)。 是月 熊本船場3丁目に仮軍艦所を置く (国事)。 木村得太郎奉行副役に任ず (本)。
11. 1 財政補給の一策として産物方をおく (国事)。 6 有吉将監に小倉に出兵すべく命ず (国事)。 8 有吉将監の一隊小倉に向う (国事)。 9 中老有吉市左衛門家老に列す (本)。 10 長岡護美小倉へ出発に際し、内膳以下に随行命ず (国事)。 11 郡夷則に小倉出張を命ず (国事)。 12 長岡護美出陣、小倉に向う、17日小倉着 (国事)。 16 郡夷則熊本発小倉に向う21日小倉着 (国事)。 17 備頭溝口蔵人の兵小倉に向う (国事)。 20 白木五兵衛等に砲器製造懸を命ず (国事)。 21 田代儀左衛門等に荒尾角兵衛と共に産物および蒸気船懸を命ず (国事)。 22 慶順、親しく幕府軍令および本藩制令の授与式を執行す (国事)。 是月 家老松野亘退任 (本)。 奉行鎌田軍之助、是月より江戸詰 (肥)。 郡中硝石密買見拵として触組より6人差出す (難稜)。
12. 1 寺社方奉行、国中寺院の寸志金上納目録を藩主に進達す (国事)。 5 家中の門松を制限する (林制 664)。 9 征長総督徳川慶勝、三条実美等を、薩摩・福岡・肥後・佐賀・久留米五藩に分預するを達す (肥)。 16 小倉駐屯の備頭沼田勘解由の隊に帰国を命ず、19日一部撤退を開始す。27日熊本帰着 (国事)。 25 川尻町民のなかに値段釣り上げの廻状あり、周辺の農民反対す (川尻史 393)。 28 材木取出跡仕立につき達 (林制 665)。
- 是 年 久住山にて炭焼の運上銭上納の事 (年覚)。 手当方御用鉄芸州より取寄につき諸懸物、払米代上納のこと (覚)。 三都詰の面々豊後路通行の節人馬賃銭のこと (覚)。 米預歩入に差出者の名前・米高町方より問合せ (覚)。 古貳朱金値段引揚、代銭増方のこと (覚)。 新南鐮銀入札払、高岡善左衛門落札 (覚)。 家中在御家人に対し、本方ならびに諸間拝借等御取立当 (覚)。 慶長銀入札払 (覚)。 高岡善左衛門家蔵屋敷小物成方拝借引当に差出分、軍艦方御用に差出たき願 (覚)。 前崎源四郎歩入の調査銅受返の事 (覚)。 深川手永守部駒之助砂糖製法所跡拝借年賦置置 (覚)。 金銀双場下落につき御心付渡分20ヶ年平均値段を以てす (覚)。 豊後路交通量増加のため、大津以遠倍増賃銭とす (覚)。 大

慶応元 (1865)

坂・江戸等、古金引替双場調 (覚)。大坂へ古金差登、鴻池伊助通用金と振替 (覚)。大坂登の古金16,000両余 (覚)。荒尾手永野原村列三ヶ村にて会所引受石炭堀方 (年覚)。湯浦手永大野在諸出銀等の助勢として柂粉製法願うも不許可 (年覚)。甲佐手永緑川鶴ノ瀬礮御手入 (年覚)。沼山津手永下陣村にて銅山再起につき試み (年覚)。柿原村懸に焰硝蔵建方達 (年覚)。ミネエール銃万日山辺にて打方のこと (年覚)。八代鉄山用杉木の残分八代町の者へ代銭上納にて引渡 (年覚)。鏡白砂糖製法所、甘蔗綿方穀物質搗 (覚)。澄之助 (護久)・良之助 (護美) 上京入目御手当金のうちより渡すこと (覚)。芸州より取寄の鉄鶴崎より川尻へ船廻のこと (覚)。金銀双場改のこと (覚)。初夏洪水・秋早魃、損毛高 194,477石余 (損)。著書目録 海軍問答録 法制 横井小楠

慶応1 (4. 7改元) (1865) 乙丑 (家茂・慶喜) 慶順

1. 3 長岡護美小倉発帰国の途につく、8日帰着 (国事)。10 有吉将監小倉より熊本帰着 (国事)。11 番頭西山大衛・松野八郎左衛門両隊中の一隊小倉より帰国 (国事)。是月 郡夷則小倉より帰着、4月京都に出張す (肥)。
2. 13 三条実美等筑前黒崎より太宰府に移る。薩摩・福岡・肥後・佐賀・久留米の五藩警衛す (肥)。25 西国郡代の嘱により池部弥一郎・庄村助右衛門を砲台築造のため天草に出張さす (国事)。
3. 3 池辺啓太の蒸汽船将心得を免ず (国事)。28 田中八郎兵衛奉行本役に任ず (本)。
4. 2 諸郡楠手入につき達 (林制 666)。16 奉行分職として産物方新設、荒木甚四郎・道家角左衛門担当、但し僅か2カ月で廃止、その後分職名は立てずに3人の奉行が産物方御用を主として担当 (分職帳)。
5. 4 幕府、征長軍令を発す (国事)。本藩書を幕府に呈して、毛利敬親の既に罪を謝するに、之を裁せずして討つは、天下の疑を招く恐れある旨を建白す (肥)。21 小笠原美濃に軍備筋取締事務係を命ず (国事)。

- 閏5. 5 大目付籙図書、京都留守居中山平左衛門、昨秋京師変乱の際処置を失ふ責を負い職を退く (国事)。9 西洋式砲隊一組を設け、河方半四郎に其指揮を命ず (国事)。10 浅井新九郎、東海道鳴海駅において、藩主慶順の建白書を閣老に呈出す (国事)。
6. 11 赤尾口習砲場を開く (国事)。
 7. 9 住江甚兵衛外12人の謹慎を命ず (国事)。10 細川若狭守、佃島砲台警備を命ずる (国事)。18 藩兵の小倉に向う者、悉く出発する (国事)。
 8. 3 河方半四郎の大砲隊指揮を免ず (国事)。28 永島三平秀実没 (先哲)。
 9. 4 細川越中守、加世以多一箱、佐賀関錫一箱献上 (実紀)。7 馬見原、新酒値段 (熊本史学27号)。
 10. 3 肥後・土佐・久留米諸藩士のうち、関白二条齐敬・賀陽宮家に依り、開港勅許を内願する者あり (肥)。5 兵庫を除き、横浜・長崎・箱館を開き、条約を改正すべき勅命あり (国事)。12 藩政府は、在京郡夷則に書を送り、先月末より本月始めの朝暮関係異船廻航等に関する報告の藩議定まらぬこと、且つ、其の後京摂の形勢を案じ時運の変遷を嘆ず (国事)。是月 奉行井上嘉左衛門是月より江戸詰 (肥)。

11. 3 小笠原美濃、天機奉伺の特使として一条・久我両家および両伝奏邸に出頭す(国事)。 7 小笠原美濃京都発、翌日大坂城に登城、將軍の起居を問い使命を果す。16日熊本帰着(国事)。 26 備頭堀丹右衛門組鉄砲20挺頭一人組共鶴崎へ出張す(国事)。
12. 9 京都留守居、上田久兵衛帰国を命ぜらる(国事)。 14 賀陽宮、本藩重臣を召見して上田久兵衛の下国を惜しまる(国事)。 20 上田久兵衛熊本着、24日川尻町奉行に転ず(肥)。 25 物頭3人銃手50人を鶴崎へ出張させる旨を幕府軍監長に申告(国事)。
- 是年 宇土藩主樹徳斎を設立して、学問を奨励す(肥)。 当暮米価無類高騰(覚)。 金銭通用行兼につき達(覚)。 長防両国の船雇入諸品運送を禁ぜらる旨大坂城代より達のこと(覚)。 内田手永山部田村掛りにて石灰焼方差免ぜらる(年覚)。 水俣手永陳町焼失跡家取建料(年覚)。 郡浦手永網田皿山焼物石、田浦手永にて取出のこと(年覚)。 矢部浜町にて産物会所取立(年覚)。 甲佐手永東寒野村懸御蔭の石をもって石灰焼方差免ぜらる(年覚)。 本庄製作所鉄砂ゆり場を白川筋水道より1町半下とす(年覚)。 池田手永松尾村掛蒸気船会所建方(年覚)。 天守方御用徳王焰硝所簡薬堅所出来(年覚)。 家中臨時諸渡方手続改正(年覚)。 塩硝蔵二棟建方、池田手永柿原村懸は不適當(年覚)。 賄所仕入塩蔵矢部手永引受漬込のこと(年覚)。 御免所并所々御用蔵取方の節、役人出方差止のこと(年覚)。 五嶋字久嶋組組芋代のこと(文久2・3年にもこの項あり)(覚)。 鏡白砂糖製造所廃止(覚)。 夏雨繁、虫害、損毛高 176,216石余(損)。 著書目録 頼田上書 法制 頼田栗助。

慶応2 (1866) 丙寅(慶喜) 慶順

1. 12 在京三宅藤右衛門は、長州処置に関し、我藩の所見と、幕府の議論の一致しない旨を藩政府に報告(国事)。 14 同上に関し、藩政府は国事周旋の方針を示す(国事)。 18 細川若狭守、佃島砲台を請取る(国事)。
3. 一 川尻町奉行上田久兵衛、川尻町民への説諭21ヶ条を示達す(川尻史 137)。
4. 25 日奈久沖へ異国船寄航(熊本史学30号)。
5. 11 特使平野九郎右衛門、時局挽回に関する藩主の建白書を閣老板倉勝静に提出(国事)。 28 備頭溝口蔵人に兵を率いて鶴崎出張を命ず(国事)。
6. 2 溝口蔵人に征長軍を率いて至急出張を命ず(国事)。 6 征長軍の部署を定め、一番手出発(国事)。 溝口蔵人に出兵心得を達す(国事)。 11 一番手備頭溝口蔵人出発す(国事)。 17 小倉戦争、熊本勢 1,600人程到着(実紀)。 22 副奉行佐久間角助は小倉より書を送り、幕吏の無謀と各藩の戦意なき状況を報告(国事)。 26 二番手備頭長岡監物熊本発小倉に向う(国事)。 是月長岡監物、征長の非なる所以を論し、第二軍帥の任を辞すことを請う(国事)。
7. 1 家老有吉市左衛門退任、中老郡夷則家老に任じ、木村男吏中老となる(肥)。 山藪の無願開明取締に付達(林制 671)。 3 軍艦購入決定(国事)。 5 副奉行木村得太郎軍艦購入のため長崎へ向う(国事)。 10 米田左馬助家老見習に列す(肥)。 中老平野九郎右衛門退任(肥)。 18 副奉行木村得太郎新購入の汽船に乗り長崎より帰る(国事)。 26 長藩兵、小倉兵を攻む、本藩小倉兵を援けて之を破る、然るに他藩来援せず、幕軍又傍観す、九州軍総指揮小笠原壱岐守長行も又小倉を脱走す(肥)。 27 細川勢防戦、30日国許へ退却(実紀)。

- 28 英国より汽船を購入により、その船名、旗章等を幕府に申告す(国事)。小笠原美濃ら農兵募集のことを談ず(国事)。30 去る20日將軍家茂薨去の内報、小倉の熊本陣営に達す、肥後・久留米・柳河諸藩の兵相つぎて小倉を去り、本藩兵は8月9日迄に帰藩す(肥・国事)。
8. 1 溝口孤雲家老次席に列す(本)。4 小国久住郡代、書を郡政局に送り、小倉藩人士の奔り来る者の処置を質議す(国事)。8 長州出兵より熊本へ帰着、10日御花畑で御祝(天明誌 434)。12 尾藤金左衛門中老に任ず(本)。28 藩主、弟長岡澄之助護久を養うて嗣とす。即ち細川氏を称す(肥)。29 長岡護美、徳川慶喜の招喚に応じ、熊本発、9月6日大坂着(国事)。是月 藩主慶順、建白書を幕府に致して、征長の効を奏せざる所以を陳べ、幕府反省、上下一致、以て国本を鞏め、速かに進取の大策を講ずべきことを説く(国事)。
9. 7 朝廷、諸藩衆議を以て時務を処すべきため、20諸侯および、島津久光、長岡護美を召さる(国事)。9 長岡護美京都着(国事)。郡代永屋猪兵衛以下100余人、天草に出張す(国事)。10 長岡護美、徳川慶喜に謁し、我藩議の次第を述べ、時局について進言す(国事)。14 長岡護美、松平春嶽と共に徳川慶喜に謁し、諸侯の召集言路の洞開幕吏の人撰等につき意見を述ぶ(国事)。15 長岡護美京都発帰国の途につく、10月1日熊本着(国事)。小笠原美濃、閣老板倉勝静に謁し、天草保管を領地と等しくすることを請う(国事)。20 小国久住詰郡代以下70余人日田に出張す(国事)。是月 家老小笠原美濃京都に赴く、中老木村男吏も同じ(肥)。
10. 6 小笠原長行老中を免ぜらる(国事)。
11. 一 長岡護美、天草島を巡視す(肥)。鶴崎および、日田警衛の兵撤退(国事)。
12. 5 溝口孤雲に、軍艦製造につき、英国水師提督と談判のため長崎出張を命ず(国事)。8 天草の人、江間久兵衛、富岡陣屋に乱暴者乱入のことを報告(国事)。11 慶順病により養子護久を己に代らしめ、弟護美も亦上京を辞することを請願す(国事)。19 田中八郎兵衛、鎌田軍之助に郷兵創設事務担当を命ず(国事)。22 在京、木村男吏に、天草島管轄の周旋をなさせる(国事)。25 孝明天皇崩御、29日発喪(国事)。是月 時勢に鑑み、追廻馬場内にて、小銃稽古許可(触)。
- 是 年 奉行井上嘉左衛門江戸詰、同道家角左衛門京都詰(肥)。鶴崎表において焰硝蔵建方(年覚)。菅尾手永馬見原口に構出来(年覚)。南関口防禦備として元込筒100挺製造のため立木伐採願不許可(年覚)。山鹿手永国瀬村穢多共畑新屋敷悪田片付方等に付受免余米7年の間上納御免年限後土免上納(年覚)。矢部手永上矢部村非常の洪水(年覚)。6月寸志規定改訂(年覚)。沼山津手永下陣村にて彦助方より銅山取起し(年覚)。本庄手永本庄村にて会所床鉄砲製造場に成る(年覚)。蒸気船用石炭肥前松浦郡より堀方につき堀子糧米のこと(年覚)。蒸気船運転入目産物方振替分御本方より立用のこと(年覚)。全上御用石炭筑前より取入について飯塚本陣畠山小四郎新町2丁目に止宿のこと(年覚)。産物方にて調銅吹方取起につき炭薪矢部手永中島木鷲野両村掛にて引渡仰付らる(年覚)。万里丸を以て小倉へ軍器積廻さる(覚)。大坂御用達鴻池伊助ならびに手代共へ古金引替つとむるに付白銀金子下置かる(覚)。鶴崎、久住米軍用に付捌方禁止(覚)。鶴崎米、御本方軍用米に譲渡の事(覚)。

郡代 250石以下の面々へは、小物成方より50石宛年々心付を以て下さる分、
250石以上にも渡下さるやうにとの願難叶事(覚)。長崎へ異国船渡来の節、御
手当として川尻町奉行へ預けている現錢を小物成方御銀所へ移備の事(覚)。
肥後早魃(氣)。(「損」には夏雨繁とあり)。夏雨繁秋虫入、損毛高 236,091
石余(損)。 著書目録 南郷事蹟考 地誌 長野内匠。航西小記 地誌 岡
田撰藏。

慶応3 (1867) 丁卯(慶喜) 慶順

1. 9 明治天皇踐祚(国事)。 12 松村大成没、年60(先哲)。 28 川村鐸之助幕府軍艦龍翔丸乗組を命ぜらる(国事)。
2. 6 河上彦斎八代に着船し、長岡佐渡により、帰参の願書を藩政府に提出す(国事)。 9 河上彦斎、熊本に護送せられ、翌日獄に投ぜられる(国事)。
10 永屋猪兵衛奉行副役に任ず(肥)。 15 穿鑿局に於て、河上彦斎を審問す(国事)。 30 幕府、肥前・土佐・宇和島・越前四老侯及び、尾・紀・肥後三侯、島津久光に意見を徴す(肥)。
3. 5 溝口孤雲家老に復し、京都に赴く(肥)。 7 長岡監物家老を免ず(肥)。
5. 6 木下 韓村(時習館訓導)没、年63(先哲)。 18 世子護久上京の途につく、5日28日京都着(国事)。 是月 中老木村男吏京都より帰着(肥)。
6. 1 世子護久、將軍慶喜に謁す(国事)。 11 世子護久、従四位下侍従叙任、右京太夫喜廷と称す(国事)。 15 郷兵創設につき、在中寸志士籍の輩銃隊稽古に加わり精練すべきことを達す(国事)。 18 世子喜廷、参内す(国事)。
7. 6 喜廷京都発18日熊本帰着(国事)。 是月 郡夷則京都より帰国(肥)。
8. 7 時局に鑑み、在中帯刀以上の組合制度を定む(国事)。 25 造砲家増永三左衛門没(肥)。
9. 18 奉行副役柏木文右衛門転役(本)。 27 奉行分職として軍備方新設鎌田軍之助・田中八郎兵衛担当(分職帳)。 是月 奉行副役佐久間角助退任(本)。
10. 14 將軍慶喜、大政奉還を請う、翌日これを許す(国事)。 20 細川越中守、明日の登城に及ばず(実紀)。
11. 13 溝口孤雲、藩主代として熊本を發し、上京の途につく20日京都着(国事)。
27 番頭下津縫殿の一隊上京を命ぜらる(国事)。 30 角左衛門本役(本)。
奉行と用人相互に兼任制とす(分職帳)。 是月 奉行荒木甚四郎、同井上嘉左衛門退任、松野亀右衛門、林九八郎奉行兼任(本)。
12. 6 番頭下津縫殿の一隊京都着(国事)。 王政復古、更始一新せられ摂関幕府等を廃し、總裁・議定・参与の三職を置かる(国事)。 浅井新九郎奉行副役(本)。 10 朝廷、將軍慶喜の辞職を聴さる(国事)。 11 溝口孤雲、二条城に登り、閣老以下に対し、大義名分を説く(国事)。 12 徳川慶喜、形勢の急なるを觀、幕下人心の鎮撫を計るため、下坂すべき旨を奏聞し、今夜俄に京師を發す(国事)。 溝口孤雲、時局の急転を危み、諸藩の重臣を誘うて二条城に會議し、10藩連署を以て公平正大衆議の歸するところに拠り、改革の実を挙げられんことを朝廷に建白す(国事)。 13 10万石以上の諸侯召集の朝命あり(国事)。 本間治兵衛奉行副役(本)。 14 溝口孤雲、津田山三郎参与に任ぜられる(国事)。 18 世子喜廷、藩主に代り、熊本發上京28日大坂着(国事)。 24 宮崎平馬奉行本役(本)。 27 新3丁目魚市場魚預等何品によらず預に拵える

ことを禁止 (市雜乾 157)。

是 年 金 1 両代錢 110 匁、銀 1 匁に付 101 文 3 合双場 (覚)。 英国商人ガラバより式挺ガラミ筒差上るに付、下方御用の古金小物成方より本方へ代錢と両替取組のこと (覚)。 泰運丸長崎イギリス人より買上げ (覚)。 百貫石にて蒸気船会所石炭蔵建方 (年覚)。 茶道方にて宇治茶向の茶製所菅屋手永へ建方 (年覚)。 若殿様御出京豊後路万里丸乗船 (覚)。 公迎御変革につき江戸定府の面々帰国勝手 (覚)。 著書目録 長州事情彦斎申出覚書 史伝 河上彦斎。

明治 1 (9・8 改元) (1868) 戊辰 慶順・詔邦

1. 3 世子喜廷京都に着す。然るに鳥羽・伏見に於て朝幕相戦うを見、旅装のまま参内警衛する (国事)。 12 喜廷議定職に補し、同17日、更に刑法事務総督兼務を命ぜらる。津田山三郎も刑法事務掛を命ぜらる (国事)。 徳川慶喜、書を徳川慶勝・松平慶永・細川喜廷に与え退隱の意を陳ぶ (肥)。 14 備頭郡夷則に京都守衛を命ず (国事)。 16 本藩政府は、藩主慶順の旨を承けて書を在京重臣に致し、藩議勤王一途ときむ (国事)。 18 花山院家理卿の家来と称する者、天草島鎮撫として富岡に上陸す。同地の吏員等御領へ逃げ、本藩警備隊に応援を乞う (国事)。 19 備頭清水数馬引卒の藩兵一大隊京都着 (国事)。 21 天草出張本藩物頭より同島の民心動揺につき警備のための衛兵の増遣を要求 (国事)。 22 溝口孤雲・山良洞水、徴士を命ぜらる (国事)。 津田山三郎海陸軍務懸を命ぜらる。 (国事)。 23 奉行木村得太郎徴士刑法掛を命ぜらる (国事)。 是月 長崎警衛のため物頭 2 人輕卒 40 人を出張させる (国事)。 天草警衛として物頭一組を派遣す (国事)。 所々目付廃止 (覚)。
2. 1 薩藩士天草島に來り、浮浪の浪籍者の鎮靜をつげ且つ将来薩藩に違背せずとの証書を島内町年寄・村庄屋等より出させる (国事)。 2 備頭郡夷則兵を率いて上京す (国事)。 7 細川喜廷、名を護久に復す (肥)。 護久、松平慶永外三名と連署して自今の急務は宇内の大勢を遠觀し、皇国萬世の大基礎を確立せらるるにありとの建議を出す (国事)。 奉行浅井新九郎に東海道先鋒隊の改革編成を命ず (国事)。 8 長岡監物は豪家老に再任、8 月 13 日退任、同日勘解由中老に任じ、8 月 26 日退任 (本)。 由良洞水奉行、井口呈助・上田休兵衛奉行副役 (本)。 去る 6 日の令達に依り (征東の諸藩は冗員及不要物品を省き人員砲銃等の数を申告すべしとの命) 我藩東海道先鋒の兵員を申告す (国事)。 10 備頭清水数馬に東海道先鋒総帥を命ず、同 12 日兵 500 余人を率いて京を發し名古屋へ向う (国事)。 14 津田山三郎、北海道先鋒參謀を命ぜらる (国事)。 16 天草島警衛の我藩物頭等、島民に対し鎮靜、安堵を諭す (国事)。 20 溝口孤雲・木村得太郎参与職刑法事務局判事を命ぜらる (国事)。 大坂より関東へ人数差越用金不足につき米代の内 1 万両本方へ振替 (覚)。 21 長岡護美、命を奉じて熊本發上京の途につく、30 日京都着 (国事)。 22 番頭下津縫殿の引卒する隊士、漸次桑名より歸京す (国事)。 23 三職・八局・徴士・貢士の制及び官職名簿發布さる (国事)。 24 細川若狹守、数寄屋橋御門番を免ぜらる (実紀)。 30 天草郡警衛の朝命、本藩に下ることを薩藩派出員に告ぐ (国事)。 是月 町在の高札引改め、影踏当年はやみ、(長野内匠日記)。
3. 1 長岡護美に参与職命ぜらる。翌 2 日軍防事務局輔兼任、左京亮從五位下に叙せらる (国事)。 天草出張物頭柏木文右衛門等に対し、更に物頭 4 人の増遣

と警衛中の心得方を達す (国事)。 4 天草島取締りを命ぜられ、同11日奉行志方逸次以下74名出張す (肥)。 新田支藩主細川利永、家族および藩士等を率いて江戸を退去、同14日京都着 (国事)。 5 軍制を改革して、開国主義を取るべしとの藩布達 (国事)。 8 横井平四郎を上京せしむべき旨令達あり (国事)。 在京長岡護美は藩邸内物論沸騰して、薩長の処置に不満なるものあり、且つ兵制改革に洋法を採用するを否とする者あるを慨し、又横井平四郎を徴士に採用せらるる件について在藩家老に情報す (国事)。 13 世子護久刑法事務局輔を免ぜらる、引続き議定 (国事)。 16 長谷川仁右衛門参与内国事務局判事兼大坂裁判所掛を命ぜらる (国事)。 溝口蔵人に海軍總奉行を命ず (国事)。 18 軍制改革につき自今演武場に於て洋法の歩操砲術を練習すべき旨を布達す (国事)。 22 横井平四郎徴士を命ぜらる (国事)。 28 神社の称号に仏語を用いたるもの及び、仏像を神体とせるもの等を調査せしむ (国事)。

4. 3 郡夷則・溝口蔵人に海軍事務を総管せしむ (国事)。 5 演武場主任郡夷則、我藩の兵制改革につき異論勃興し、人心一和を欠くを憂い、従来の6備隊は暫く旧法に従い、別に郷兵一隊を編隊し専ら西洋法をもって訓練することを請願する (国事)。 7 細川利永、京都を発し、大坂に赴く、同14日大坂発、4月23日熊本着 (国事)。 8 横井平四郎徴士の命を帯び、上京の途につき、凌雲丸にて百貫石港を発す (国事)。 12 宇土支藩主細川行眞召に依り熊本発、是日大坂に着す (肥)。 17 世子護久帰藩して力を兵制改革に致さんと欲し、100日の賜暇を請願 (国事)。 19 長岡護美更に書を在京老臣に送り、兵制一新文武奨励の急務たる所以を説く (国事)。 米田虎之助は兵制改革の要件を帯びて大坂より熊本に帰る (国事)。 22 横井平四郎参与を命ぜらる (国事)。 23 藩主慶順、名を韶邦と改む (国事)。 26 米田虎之助、藩世子護久の使命を帯びて大坂より帰り、是日熊本城内において一門家老等に其意を伝達す (国事)。 是月 高橋春圃 (医、種痘) 没、年64 (先哲)。 日本国中社僧御つぶしにより、阿蘇山行者残らず還俗す (長野内匠日記)。

閏4. 4 天草島の内に遠島の刑に処せられて居住せるものの有無調査 (国事)。 長岡護美従四位下侍従に叙任せられ、且つ第二軍副総督として兵を率いて出征すべく命ぜらる (国事)。 5 神仏混淆を廃す (国事)。 7 世子護久大坂を発して帰藩の途につく、同12日熊本着 (国事)。 12 世子護久内外の政務悉く委任を受けたる旨布達 (国事)。 14 我藩の日田・天草両地警衛を免ぜらる (国事)。 22 長岡護美軍務官副知事を命ぜらる (国事)。 中老尾藤金左衛門の大奉行兼帯を免じ、下津久也大奉行と為る (本)。 25 天草島に富岡県をおき、佐々木高行知県事に任ず (肥)。 木村貞通富高知県事に任ず (肥)。 27 神社由緒調及び寺院に神体を勧請せるもの又は神社に仏像仏具等を備えたものを取除く件を管内に布達 (国事)。 29 制度を改革し、船方を軍備方に併合す (国事)。

5. 1 本藩徴兵54人名簿を添え陸軍局に出仕させる (国事)。 3 軍艦主任を牛島一郎に命ず (国事)。 5 廣田貞右衛門刑法官判事補を命ぜらる (国事)。 10 癸丑以来国事に斃れ、又伏見開戦以来王事に忠死した者の霊を祭礼すべき旨達せらる (国事)。 12 長岡護美、東下し総督府を補佐し、東国を鎮撫すべしとの命あり (国事)。 14 亀右衛門御免 (本)。 15 長岡護美、故菊池武時、

- 加藤清正等を祀典に列し、其の勲功を表彰されんことを朝廷に建議す (国事)。
- 18 本藩、小笠原美濃・下津休也に財政改革を委任する (国事)。 19 京都留守居役内山又助をして、金札借用願を提出 (国事)。 20 横井平四郎従四位下に叙せらる (国事)。 家老有吉将監・郡夷則退任、米田虎之助家老となる (本)。
- 是月 長岡護美関東出張中議定職心得を以て政務を処すべき旨命ぜらる (国事)。
6. 4 「南郷古今事蹟考」なる (長野内匠日記)。 9 護久、護美へ書を与え、藩内異論者あり、一致を欠き、出帥遅延について苦心の情を告ぐ (国事)。 13 藩主詔邦書を長岡護美に贈り、朝廷の基本確立し、関東の処置至公にして天下の人心を一定せしむべく家のために尽せとの意を致す (国事)。 18 本藩旧来の軍制を改革 (国事)。 23 本藩願により金札5万両を貸与さる (国事)。 本藩征東軍総帥米田虎之助米船に塔乗して大坂発、25日江戸着 (国事)。 29 長岡護美、大坂天保山沖を発し、江戸に赴く、7月9日江戸着 (国事)。 是月 諸局仕法筋、諸手数向減省すべきとの達 (覚)。
7. 4 家老溝口孤雲退任 (本)。 11 有吉将監家老に復す (本) (「国事」には7月18日とあり)。 12 中老木村男吏家老に任じ、溝口藏人中老に任ず (本)。 17 菊池氏の裔日向米良の領主米良主膳旧姓に復す (国事)。 19 江戸を東京と改む (国事)。 長岡護美の建議により我藩にて菊池・加藤二氏を祭祀すべき旨達せらる (国事)。 20 近来の改革により所謂実学党の専断によるとなす藩士多数あり、変乱に及ぶ恐れあるによって、是月有吉将監家老に復せしが是日元田八右衛門中小姓頭に転出、8月4日家老小笠原美濃、奉行道家角左衛門退任 (肥)。 24 郡夷則家老に復し、有吉市左衛門家老に任ず (本)。 25 米田虎之助、奉行以下兵500余を従え東京を発し、奥州へ向う (国事)。 29 本藩末家、細川利永居館を肥後国玉名郡高瀬に定む、後高瀬藩と称す (国事)。
8. 9 米田虎之助奥州中村城下に至る (国事)。 11 我藩兵芸州、長州、因州等の諸藩兵と共に仙台兵を原竈にて打破る (国事)。 13 西山大衛奉行 (本)。 数学者、砲術師範、池部啓太没 (先哲)。 14 鹿子木弥左衛門下総判県事を命ぜらる (国事)。 長岡護美は、奥州出征を談じたが衆議決定せず (国事)。 16 奥州今泉駒ヶ峯にて仙台兵を撃退す (国事)。 22 奥州出征に関する紛議定まり、尾藤金左衛門・奉行浅井新九郎等の奥州派遣を決定 (国事)。 26 平野九郎右衛門、中老に任ず (本)。 28 本藩所領豊後諸郡を日田県に併す (肥)。 是月 世子護久附小橋恒蔵、老臣溝口藏人の書を携え、是日熊本着、老臣等凝議し、先づ一門長岡休焉を上京させ、次いで藩主も又上京し勅旨遵奉の誠意を貫徹せんことを決す (国事)。 是頃、上野堅吾・荒尾素兵衛・轟武兵衛等相次いで上京、藩内の紛議朝廷内の問題と為るについてその取繕いの為という (肥)。
9. 4 木村得太郎御免 (本)。 8 明治と改元し、一世一元の制を定める (国事)。 10 長岡休焉熊本発、京都に向う (肥)。 13 蔵図書、中老に任ず (本)。 25 上田久兵衛転職 (本)。 27 藩主詔邦、熊本を発し、小島より汽船に乗りて上京す10月9日京都着壬生藩邸に入る (国事)。
10. 13 詔邦参内 (国事)。 14 長岡護美、長谷川二右衛門参朝拝謁し、天盃賜わる (国事)。 用人住江甚兵衛熊本発、上京、11月5日京都発東京へ赴く (国事)。 16 松崎伝助奉行副役 (本)。 18 蔵作左衛門、澤村脩蔵公議人となる (国事)。 19 軍制改革につき備組統轄次第を改定する (国事)。 20 富高知県事木村貞通

罷む(肥)。 28 高田源兵衛(河上彦斎)を士席に準じ、豊後国鶴崎郷士隊長に命ず(国事)。 是月 銀通用停止につき銀上納改る(覚)。 郡代へ50石心附米過渡、本筋に引直す(覚)。 五嶋宇久嶋鯨組芋代年賦金のこと(文久2年3月、元治1年同項あり)(覚)。

11. 4 軍制改革を発表し、藩臣一般に軍備の充実を計るよう示達(国事)。 5 細川護久、鍋島肥前守斎正の女宏子と婚姻(国事)。 長岡護美参内す、帰藩後朝旨の徹底と藩政に励精すべしとの勅諭あり(国事)。 7 長岡護美東京発、帰国の途につく(国事)。 軍備の充実を重ねて藩臣一般に示す(国事)。 9 洋学校員として長崎人名村泰蔵を招聘す(国事)。 12 韶邦是日京都発、東京に向う12月1日東京着(国事)。 13 奉行分職のうち主要なものについて主任奉行各1名宛を定む(分職帳)。 米田虎之助、兵を率いて東京に凱旋、17日藩兵品川にて米船に乗り出発、25日百貫石港を経て帰着(国事)。 16 長岡休焉、京都発、東京に向う12月5日東京着(国事)。 26 米田虎之助、津田山三郎東京発帰国の途につく。12月14日京都着(国事)。 29 長岡護美、東京より帰国の途中、京都に至り翌日参内す。12月2日京都発、12月18日熊本着(国事)。 是月 白銀1枚の代金3歩(覚)。

12. 4 韶邦参内し天盃賜る(国事)。 11 本藩出兵費調査書に関係の奉行浅井新九郎の職を免じ帰国謹慎を命ず(国事)。 14 韶邦還幸供奉後衛として東京発、26日京都着。直ちに参内す(国事)。 蘇山(高僧)没、年70(先哲)。 19 国事のため斃れた者の祭祀およびその妻子の救助に関する令達あり(国事)。 是月 北里にて軍備充実のため杉の伐採を願出る(林制 681)。 翌年1月に半高を許可(林制 682)。 産物方預御振出の事(覚)。 産物方預両替の儀、木村金助宅にて両替仰付らる(覚)。

是 年 1月、4月、6月、7月、8月に金銀相場替(覚)。 著書目録 施条砲射擲表続編 諸家 池部如泉。仏米二礮射擲表 諸家 池部如泉。

明治 2 (1869) 己巳 韶邦

1. 2 番頭寺尾九郎左衛門に兵 350を以て品川湾より海路奥州津軽に赴援させる(国事)。 3 津軽応援の兵上総海にて坐礁し溺没者 209人を出す(国事)。 5 横井平四郎京都丸田町にて刺殺さる(国事)。 23 長薩肥土の四藩主連署して版籍奉還の建白書を奏呈す(国事)。 28 藩主、藩籍奉還の願書を出す(国事)。 是月 金銀相場替(覚)。 川尻町中貫銭、軒夫役改正さる(川尻史 780)。
2. 2 癸丑以来の勤王者および殉難者妻子の氏名郷貫等取調べ申告すべしとの布達あり(国事)。 5 護久、熊本発、10日大坂に至る。14日京都着(国事)。 17 両替出金究のこと(覚)。 19 肥後以下22藩の兵を徴し、京都留守居を命ず(肥)。 23 金札1両代銭 130目(覚)。 25 癸丑以来王事に殉死した者の招魂所を花岡山に設く(国事)。 26 奉行兼用人田中八郎兵衛に長谷川二右衛門の軍費調書事件に連坐して免職および逼塞を命ず(国事)。 28 韶邦京都発、3月18日東京着(国事)。 是月 在京本藩老臣等、藩論因循に流れ、朝旨遵奉の実効立たぬ時は我藩の興亡にも関すると在藩老臣に通牒(国事)。
3. 2 護久参与職拜命(国事)。 21 本藩職制を改む。家老・中老・奉行は執政・副執政・参政となる。是日小笠原美濃を執政に任ず(国事)。 22 金札、1両代銭 120目(覚)。 24 護久、書を長岡護美に送り、京都邸内に勤王・実学

二派意見を異にし暗闘する状を報ず (日本)。 是月 各郡ごとの山藪畝数調査 (林制 684)。

4. 4 正金1両代銭 200目、金札1両代銭 100目 (覚)。 11 護久、病気のため請暇の内願書を出す (国事)。 12 護久、京都発、18日熊本帰着 (国事)。 21 岩倉具視、東下の途次、大坂に至り、東京に擾夷論再起し肥後藩士これに与すとの報をきき、参与津田山三郎に異論者の説諭鎮定をすすむ (国事)。
5. 8 長岡護美軍務官副知事を免ぜらる (国事) (「肥」には7日とあり)。 護美熊本発上京す。14日京都着 (国事)。 10 田迎手永神水村に諸木苗床開を許可 (林制 689)。 17 護久、参与を免ぜられ、かつ麝香間祇候を命ぜらる (国事)。
6. 3 在京の長岡帯刀、書を在京都重臣および藩政府におくり、古記に明かな林藤次の上京を求む (国事)。17 諸藩版籍奉還を許される。藩主昭邦熊本藩知事に任ぜらる (国事)。 藩知事任命につき、管轄地諸務調査に関する達あり (国事)。長岡護美、桂宮警衛を命ぜらる (国事)。 21 我藩兵軍務官の守衛を命ぜらる (国事)。 24 昭邦参内す、官制改定につき意見上申を達せらる (国事)。 25 藩政改革に関する条項を垂示 (国事)。 藩知事の旧封現石十分一を家禄とせしめ、藩知事の臣隷を士族とす (肥)。 29 招魂社を東京九段に営み、去る5月竣工の処、是日勅使参向祭典を行う (国事)。 30 両部廃止、神仏混淆改正につき、本藩藩内各神社の仏具の取除、社僧還俗の有無および廃寺等に関する処分の件を申告 (国事)。 藩内衣服制度廃止につき風俗奢侈の弊あり質素を諭達す (国事)。
7. 7 豊後岡城下に百姓一揆起る (国事)。 10 照幡烈之助 (初轟武兵衛) 待詔下院次官に任ず (肥)。 11 銭相場金1両を10貫文と定む (国事)。 13 杣方、作事所へ併局 (林制 690)。 金銀相場替、150目正金出金差留 (覚)。 17 昭邦東京発、帰国の途につく。8月13日京都着、24日熊本帰着 (国事)。 18 林藤次、藩知事の召により熊本発上京す、8月22日東京着 (国事)。 20 津田山三郎、酒田県権知事に任ぜらる (国事)。 22 長岡帯刀・有吉将監等15人大小参事に任ぜらる (本・国事)。 是月 朝廷改革執政を廃せらる (本)。
8. 10 細川利永、長岡護美と交替すべく高瀬発、上京の途につく、19日京都着、桂宮警衛にあたる (国事)。 20 長岡護美、藩制改革のため帰藩する旨申告す (国事)。 22 長岡護美京都発、帰藩の途につく。29日熊本帰着、是日細川利永初めて桂御所に参殿す (国事)。 28 北海道を諸藩に分割、開拓せしめる (国事)。 北海道開拓のため、本藩に根室国二郡管轄を命ぜらる (肥)。 是月 本藩、郷学校を設立す。山崎・通町・千反畑・内坪井・古京町・宇土小路の6校 (国事)。
9. 11 花岡山招魂社の祭日を定む (国事)。 22 大江演武場に兵学寮を設ける (国事)。 28 弾正大巡察古賀十郎随員と共に熊本に来る (国事)。
10. 6 大巡察古賀十郎阿蘇宮へ参向、是日天道覚明論を阿蘇大宮司拝殿に投書したるものあり (国事)。 18 兵制改革につき、士隊の外に番士隊を新設す (国事)。 藩政を一新し、職制・職名等を改革する (国事)。 是月 有吉将監、佐々木与太郎と改称す (本)。
11. 12 高瀬・宇土二藩に大原口警衛を命ぜらる (国事)。 22 細川利永、京都発帰国の途につく (国事)。 25 藩士の禄制を改革し、兵員・兵賦の規則を定め

- る(国事)。26 時勢に鑑み、藩士の武備充実を期し、従来家中に貸下の年賦金を捨与し、家中および市在諸職人等への貸与金を停止する旨を達す(国事)。
12. 3 去る6月25日の令達に基づき、藩政改革調書を提出(国事)。5 府藩県私製の紙幣を禁止す(肥)。8 兵員届書式および隊伍編成法等定める(国事)。
- 21 川尻町横目為助、洪水の時の救船造立ての費用救済を願出る(川尻史 327)。
- 24 公廨の名称を改め、坐班式官俸等級等を規定し、藩中に達す(国事)。27 制度改革につき鷹方を廃す(国事)。30 細川利永、高瀬帰着(国事)。是月中下大夫士等の称号を廃し、士族および卒と称し、かつ禄制を改め、知行を公収し、廩米をもって給与とする(国事)。
- 是年 当暮、双場銭 100目に付5升8合ときまる(覚)。贖金取締等につき太政官より書附(覚)。御一新につき御間々省略につき見込筋書付のこと(覚)。小物成方一局人員報告差出(覚)。朝廷より公廨費用調、産物諸雑税調仰付らる(覚)。慶長小判以下稜々双場の事(覚)。八代歩入所鉄代年賦催促(覚)。御本方会計70万両金不足につき小物成方津端米本方へ引渡(覚)。良之助(護美)上京御用に付1万両小物成方より出方仰付らる(覚)。小物成方取扱事項記帳事項(覚)。諸渡方改革につき、切手差紙差止めらる(覚)。金払底につき時の双場をもって代銭上納のこと(覚)。洪水(気・川尻史)。著書目録 東上日記 歌文 林桜園。菊池武朝申状考証 史伝 小山多乎理。

明治3 (1870) 庚午 韶邦・護久

2. 3 府藩県公廨を庁と改称す(肥)。
3. 26 韶邦病により隠居し、弟護久に家督せしむべき内意を藩内に示達(国事)。
- 27 林藤次召されて有栖川邸に参殿、翌日岩倉邸に至り、密に意見を上陳する。4月24日東京発、6月4日熊本帰着(国事)。30 細川護久熊本発、東京へ向う。4月16日東京着(国事)。
4. 3 松井新次郎(長岡帯刀の改名)山城・和泉両国内の采邑上地を命ぜられ、改めて廩米を下賜せらる(国事)。12 知事韶邦甲鉄艦1隻(龍襲艦)を献ず(国事)。28 大参事米田虎之助、集議院議員として出頭させることを申告す(国事)。是月 弾正少忠山田信道、江刺県権知事に任ぜらる(国事・肥)。
5. 3 藩知事韶邦辞表を上る(国事)。7 在東京本藩吏員は、東京の物価下落し、扶持米の双場1両に9升3合の旨を奉じ、且つ藩地の双場を問う(国事)。
- 8 藩知事韶邦の致仕を聴許し、護久をして、家督襲職せしめらる(国事)。
- 10 藩知事護久、藩政改革のため帰藩の願書を上り、即日許可せらる(国事)。
- 12 前藩知事韶邦正四位に陞叙せらる(国事)。16 藩知事護久東京発、5月27日熊本帰着(国事)。是月 改革あり(実紀)。
6. 1 我藩大小参事の更迭を行う、長岡護美大参事、佐々木与太郎・米田虎之助・小笠原七郎権大参事(国事)。11 護久、藩士を熊本城内に召集し、その家督任官の旨を達し、且つ藩政革新の要旨を示す(国事)。16 藩庁・内家の別を正し、従来の奉行所を熊本藩庁と改め、又諸式・諸規則に改正を加える(国事)。29 藩政改革によりて郡宰および重士隊長以下を廃す(国事)。是月 川尻町居住在人数調行われる(川尻史 777)。
7. 3 藩中より徴集せる兵員を解放し、旧一門家老以下諸家家来を本藩卒族に採用する(国事)。我藩坐班式を改正す(国事)。4 永野藩平を養蚕業伝

習のため奥羽地方へ出張させる(国事)。 6 大坂の米穀相場、30俵につき金106両金札1両につき銭10貫 600文替なり(国事)。 8 時習館、洋学所、再春館および修築廐牧二司を廃止さる(国事)。 9 本藩内家の大従以下六等官以上を家従と改称する(国事)。 10 新に修築局を設置し、既に廃したる修築司の事務を管掌せしむる(国事)。 12 藩庁諸局の改称および併合を行う(国事)。 13 卒族のうち足輕格以上の者を士族とする旨および軍馬・軍服等の心得を布告す(国事)。 17 藩政を改革し、藩士と俸録を減省するとともに、民力休養を慮り、正税外の上米等を免除する(国事)。 大坂にて蔵米双場30俵につき107両2歩、金札1両につき、銭10貫 800文替なり(国事)。 18 藩庁を熊本城内より花畑館邸に移す(国事)。 20 神事・学校二局を辨務局に併合する(国事)。

8. 2 松井新次郎の願により、八代城守衛の任を免じ、かつ多年の功労を賞す(国事)。 8 藩庁諸局を廃合する(国事)。 10 米価下落して、大坂における肥後米の双場30俵金89両替となる(国事)。 17 切支丹宗門覚書改正の件を達す(国事)。 是月 川尻町に改名新姓の令布達さる(川尻史 774)。

9. 2 藩庁採蠶司および会所を生産司に合併する(国事)。 4 高瀬細川利永・宇土細川行眞、俱に東京居住を命ぜられ、その家臣等は熊本藩貫属となる(国事)。 5 知事護久熊本城廢毀を願出る、10月4日熊本城廓を随廢すべき旨を藩内に諭告す(国事)。 25 小山閑山(用人)没、年75(先哲)。

10. 6 藩立病院の開院式を挙行する(国事)。 11 川尻河崎屋末太郎惣町丁役横目役廢止され辞任(川尻史 772)。 12 川尻外城町惣坊長設置さる(川尻史 772)。 林藤次有通(櫻園)没、年74(肥)。 13 川尻町5人組を10人組と変更す(川尻史 772)。

閏10. 4 前藩知事韶邦東京龍口邸入り同7日参内(肥)。(肥・国事)。 8 高瀬・宇土両末家の旧臣諸役を解放せしむる(国事)。 9 菜園内に舍密所を創設し、化学製藥等を研究せしむ(国事)。 17 禄制および、藩制等を改革し、其趣旨を周知せしめるため要領を列举し、猶諭示書を添えて藩内に示達する(国事)。 20 洋学所を再興し、職員を任命す(国事)。 20 藩政改革につき、従来の八代佐敷番士を廢止する(国事)。

11. 14 洋学所規則を制定して、入学志願者を募る(国事)。

12. 26 五家莊を熊本藩管轄とし、是日弁官より引渡あり(肥)。

是年 著書目録 五家紀行 地誌 水野大三郎。

明治4 (1871) 辛未 護久

1. 18 治療所(西洋医学所)入学規定を定む(肥)。

2. 3 窮民教育の爲め協救社養豚場を設置する旨を達す(国事)。 16 藩知事熊本發、25日東京着(国事)。

3. 4 川尻御藏廢止さる(川尻史 269)。 10 藩学時習館を解崩して、兵式操練場とする(国事)。 15 江刺県権知事山田信道罷む(肥)。

4. 24 熊本・佐賀二藩に命じ、兵を西海道鎮台に出さしむ、本藩神谷天也を隊長として一大隊を派す(肥)。 是月 西洋医学所を開く(国事)。

5. 30 元田永孚宮内省出仕侍読を命ぜらる(国事)。

6. 4 元田永孚、初めて論語を進講する(国事)。

7. 7 加藤清正の神霊、是日牧崎発、城山（城内）の錦山神社に還る（肥）。 14
廃藩置県の事を布達し、且つ常務は、大参事之を決し、大事は伺出づべき旨を達せらる（国事）。細川護久藩知事を免じ、尚孕先廢藩を建白せし故を以て朝廷之を賞せらる。長岡護美も大参事を免ぜらる（肥）。
8. 10 熊本県は旧藩知事の一門隠居に給せし合力米並に旧功臣に給せし賞与米等を停止する（国事）。
9. 2 熊本県は旧藩知事細川家の神葬祭式に改め、其墓所妙解寺・泰勝寺を廃止せし旨を、京都出張所をして、大徳寺・妙心寺等に通達せしめる（国事）。
10. 5 本県は鰥寡孤独廢疾者の米金救恤を止め区中の熟議を以て貧院に収養せしむべき旨を達す（国事）。
12. 3 河上彦斎（勤王家）没、年38（先哲）。

加藤氏系図…………… 353

小西氏系図…………… 356

細川家系図…………… 358

附録1. 家老・中老一覽

附録2. 大奉行・奉行・奉行副役一覽

附録3. 免率・米双場年表

加藤氏系図

系譜・附記ともに諸史料をもとに森山恒雄作成す

清信

尾張犬山に住す。斎藤山城守道二に仕え因幡守と称す。弘治二（一五五六）年道三が子義龍より滅亡された時に討死したという。詳細は不明。

清忠

尾張国愛智郡中村に住す。彈正右衛門と称す。天正二（一五七四）年一月八日歿す（一説は永禄七年三月とす）。三十八才。謚浄心院殿閑雲日栖大居士。

妻は伊都。清正の実母。熱心な日蓮宗信者。天正十六（一五八八）年頃に尼となり天室日光尼と改名。慶長五（一六〇〇）年五月十八日歿。謚聖林院殿天室日光大姉。慶長七（一六〇二）年、熊本妙永寺に葬る。

清正

永禄五（一五六二）年六月二十四日、尾張国愛智郡中村に生る。藤原姓を称し、蛇の目、一重菊の紋を使用す。幼名夜叉丸^{やしまる}。十五才にて元服し、虎之助、清正と称す。天正八（一五八〇）年播磨国神東郡一二〇石を宛行わる。翌年因幡国鳥取城攻撃に参加。翌十年四月備中国冠城攻めで一番槍の功を挙げ。同年六月山崎の戦に参加。同十一年賤ヶ岳の戦で七本槍の功名をうけ、近江・山城・河内国のうち

三千石を宛行われ、物頭、鉄砲一五〇挺、兵力二〇人を抱う。一四（一五八六）年従五位下、主計頭に叙任さる。この頃和泉国堺周辺農村の蔵入地代官をなす。十五年九州の役に後備一五〇騎として出兵。宇土城番をす。十五年四月讃岐国尾藤知宣の改易により、八月讃岐国蔵入地の代官をなす。この時に尾藤氏の武器を引継ぐとともに、尾藤氏の紋の桔梗と折れ墨を以後併用す。翌十六年三月肥後国衆一揆鎮圧の上使となり宇土郡宇土城に在陣し、またこの地方の検地を行う。同年閏五月十五日肥後半国一九万五千石余の領地を宛行われ隈本城に在城す。また同年九月上京時の賄料及び母堪忍料に河内国讃良郡中かいと村に三百石宛行わる。翌十七（一五八九）年十二月天章を攻撃す。十九年名護屋城普請奉行文禄元（一五九二）年兵一万人を引率し、相良・鍋島氏とともに朝鮮に出兵。京城攻略後、同年七月に朝鮮二王子を捕え、ついでオランカイに進攻す。同二年晋州城攻撃に亀甲車を使用す。領土割譲を主張し、石田三成・小西行長らと対立。慶長元（一五九六）年ざん訴され、五月（七月の説あり）伏見に蟄居をうく。閏七月十三日の畿内大地震の時、伏見城に馳せ参じ赦免されるといふ。翌二年正月朝鮮再征に一万人を引率し出兵す。同年十二月蔚山城にて浅野幸長とともに籠城し苦戦す。同三年朝鮮引揚げのち、黒田・浅野氏らとともに石田三成の襲撃を計画し、徳川家康にな

だめらる。慶長五(一六〇〇)年関ヶ原の戦いで東軍に與し九州において細川・黒田氏と活躍、特に宇土小西行長軍を攻略し、ついで柳川氏を攻略。この年筑後国領主を家康から受く(一時期か、その期間不明。関ヶ原戦にて肥後一国五十二万石、のち豊後国一部を加え、約五十四万石(幕府提出の郷帳高。実高は七十五万石余と称するも不明。一説は九十五、六万石ともいわれる)の領主となる。翌年から熊本城の新築にかかり(一説は慶長四年、なお検討を要す)、慶長十二(一六〇七)年に完工すという。慶長八(一六〇三)年三月廿三日、從四位下侍從、肥後守に叙任。この年キリシタン統制と棄教を強く迫り殉教者を出す。同十三年にも同様。慶長十一年三月江戸城普請手伝、慶長十二年八月四日西洋への朱印状をえ、また同十四(一六〇九)年暹羅国へ朱印状をうる。同十五年閏二月名護屋城普請手傳。同十六(一六一一)年三月廿八日秀頼の二条城会見に随伴す。同年六月廿四日熊本にて病死。五十才(五十一才説もあり)。謚浄池院殿永運日乘大居士。肥後本妙寺に葬る。大木土佐と金官、殉死す。妻は、肥後南郷住人の初代玉目丹波の女、正應院(慶安四年六月十七日歿、謚正應院殿祐真日倚、または日怡大德尊。出羽国本住寺に葬る)。菊池武宗の女、本覚院(別名川尻殿、寛永三年四月九日歿、謚本覚院殿月心日圓大姉)。徳川家康の伯父水野和泉守忠重女、徳川家康の養女、清浄

院(明暦二年九月十七日歿、謚清浄院殿妙忠日寿大姉)という(他に浄光院、別名竹之丸殿、寛永二年六月廿二日歿、謚浄光院妙選日栄もありという説あり。些細未詳)。

虎熊

生年不明。幼名虎之助。朝鮮の役に入質交換として参陣すか。慶長二(一五九七)年十一月廿四日歿。謚法性院蓮慶日永。

古屋(こや)

慶長三(一五九八)年生る。慶長十一(一六〇六)年三月、家康・秀忠の命により榊原康政の男、遠江守康勝に嫁す。元和元(一六一五)年五月廿七日康勝と死別。子無し。寛永元(一六二四)年以前に阿部備中守正次の長子修理亮政澄(正澄)に嫁し、一男正令(正能)と一女を生む。正令の産後の寛永四(一六二七)年八月十九日歿。謚本浄院殿妙智日昌大姉。生母は本覚院。

忠正

慶長四(一五九九)年生る。幼名虎之助、熊之助、のち主計頭。江戸にありて質人となる。將軍秀忠より偏諱をうけ忠正と改名。慶長十二(一六〇七)年一月廿七日歿。謚理性院殿宗覚日等大居士。生母は本覚院といわれる。

忠廣

慶長六年生る(一説は慶長五年生るとす)。幼名虎之助、虎藤(虎松と称

した史料もあり。慶長十六（一六一一）年六月廿四日父清正の歿により、八月廿四日遺領相続の謝礼をなす。ただし幕府は幼少により、藤堂高虎をして執政の監督をさす。慶長十七（一六四〇）年六月十四日、肥後十二郡五十一万九千余石と豊後国のうち二万石の計五十四万石の朱印状をうく。同十八年二月二十五日従五位下肥後守に叙任。將軍秀忠から偏諱をうけ忠広と改名。同年三月三十日重臣ら駿府に訴状を提出す。同十九（一六四二）年四月、徳川秀忠の養女（蒲生飛驒守秀行と正清院振姫との間に生まれた娘、秀忠の姪）と婚姻す。同年八月廿日阿部四郎五郎正之・朝比奈源六正重、肥後の監察使となる。十九年十月冬の陣の出陣命令をうく。翌元和元年四月、夏の陣に出兵を要請さる。同年六月、一国一城令が出さるも、八代城は境城として残存が許可され、加藤右馬允正方を城代となす。元和四（一六一八）年五月重臣下津樺庵、幕府に訴状を提出す。八月將軍直裁にて処分が決定され、忠広は特赦をうく。元和六（一六二〇）年大坂小天主台の普請を行う。元和六年閏十二月従四位下に叙任。元和八（一六二二）年八代城を麦島から移築完工さす。寛永三（一六二六）年八月十九日従四位下侍従に叙任。寛永五（一六二八）年十一月十八日江戸城石垣の普請で、江戸兵庫橋虎口を普請す。寛永九（一六三二）年六月除封を命ぜられ、出羽庄内の酒井宮内大輔忠勝に預けられ、一万石

宛行わる。庄内丸岡村に幽居す。承応二（一六五三）年閏六月、同地にて歿す。五十二才（一説は五十三、四、七才とす）。出羽国鶴岡本住寺に葬る。謚盛徳院殿最乘日源大居士（本住寺碑は帝光院澄誠覚日源大居士とす。また浄徳院、浄得院とも記さる）。母は正応院。

妻は秀忠の養女（蒲生飛驒守秀行女）崇法源夫人（宗法院とも称す。明暦二年九月十七日京都にて歿す。五十五才。肥後西福寺の位牌銘は謚相高院殿法譽良感大禪定尼尊とす）。二代目玉目丹波守長女法乘院（忠広改易にて上野沼田城真田河内守信吉に一男一女と共に預けらる。承応二年八月十五日上野沼田にて歿す。沼田坊新田妙光寺に葬る。謚法乘院日善幽儀。また同玉目丹波守三女（忠広の出羽庄内にての妻ともいわれる）ありといわれるも未詳。

あま

慶長六（一六〇一）年生る。生母は正應院。慶長八（一六〇三）年十月紀州大納言徳川頼宣と婚約。同十六（一六〇一）年九月結納。元和三（一六一七）年一月廿二日駿府入興。寛文六（一六六六）年一月廿四日歿す。謚瑤林院殿浄秀日芳大姉。

光正（光廣）

生年不明。忠廣の長子。生母は崇法源夫人。幼名虎之助、のち虎松。寛永七（一六三〇）年十二月従五位下豊後守に叙任。また松平姓を与えら

れ光正(光廣とも記す)と改名。父忠廣の改易にて寛永九(一六三二)年五月、飛驒高山の金森出雲守重頼に預けらる。百人扶持。翌十年七月十六日自殺す。十九才(十四、五、八才二十才説あり)。飛驒国法華寺に葬る。諡蓮淨院殿智岩日惠大居士。

正良

生年未詳(寛永五年説あり)。生母は法乗院。幼名藤松。寛永九年父忠廣改易のとき上野沼田城真田河内守信吉に預けらる。承応二(一六五三)年七月上野国沼田にて自刃す。没年不明(廿六才説あり)。諡淨眼院了悟神儀。

猷珠院

寛永初年生れか。生母は法乗院。上野国沼田に母ともに預けらる。万治元(一六五八)年三月、大猷院殿の法要によつて特赦をうけ、紀伊家の家臣渡辺若狭守直綱の養女となる。のち阿部四郎五郎正重に嫁す。寛文二(一六六二)年六月廿二日歿す。諡猷珠院殿玉寶妙龍大姉。

(清十郎)

(両者共に忠広の庄内時代の子、母は二代目玉目丹波守三女とするも、史料不足で確証をえない。)

(亀方)

小西氏系図

系譜は松田毅一氏著『近世初期日本関係南蛮史料の研究』による。系図附記は森山恒雄が諸史料をもとに作成す。

立花

隆佐とも記す。天文二(一五三三)年頃生る(大永四年とする説もあり)。永禄三(一五六〇)年頃受洗。洗礼名ジョーシン(ジョチン)。天正十(一五八二)年頃、室の津の奉行をつとむ。天正十三(一五八五)年河内国の秀吉蔵入地(一万四千俵分)代官。翌十四年堺代官(『奉行か』)。その後文禄初年まで勤務か。翌十五年九州出兵に兵糧・弾薬らの軍需奉行。この頃から和泉守と称す。十八(一五九〇)年十一月四日法眼に叙任。文禄元(一五九三)年朝鮮の役にて名護屋城の大膳職に任命さる。文禄三(一五九四)年京都にて歿す(一説は文禄二年とす)。妻はマグダレーナ(マグダレイナ)。日本名ウサとかワクサとか称す。秀吉の北の政所の祐筆。慶長五(一六〇〇)年歿か。

如清

生年未詳。幼名は与十郎、清兵衛、主殿介とも称す。洗礼名ベント。室の津の奉行をつとむ。文禄二(一五九四)年十二月、朝鮮の役の講和のため内藤如安とともに明国に入り、明の神宗萬曆帝と会見す。文禄三(一五九五)年から慶長四(一五九八)年迄、堺奉行をつとむか。歿年未詳。妻は堺日比屋了珪の娘、アガタ。

―行長―

弘治元（一五五五）年頃生る。河内国三箇の領主白井氏の出身ともいわれるが未詳。幼名弥九郎（天正十四年迄使用）。備前宇喜多氏に仕え、天正七（一五七九）年秀吉に仕う。二百石。天正九（一五八一）年以前に受洗。洗礼名アゴスチーニユ（ドン・アゴスチノ）。この頃に室の津を領す。天正十一（一五八三）年塩飽島らの水軍の長となり、二万五千クルサードの収入をうる。天正十二年讃岐十河城への兵糧搬入に従軍。翌年小豆島・室津、その他二、三港の長官。二万俵の収入。十四年従五位下摂津守に叙任、まもなく豊臣姓をうく。天正十五（一五八七）年九州出兵に水軍の将となり、島津領の平佐を攻む。その帰途、博多町割奉行を任務。同年六月の宣教師追放令で処分をうけた高山右近を小豆島に隠栖さすという。十六（一五八八）年閏五月十五日、肥後宇土城を拠城に十四万六千三百石を領知す。ついで二十四万石に加増すという。文禄元（一五九二）年朝鮮の役に七千人を引率し、宗・松浦・有馬・大村・五島氏とともに渡鮮す。京城を攻略するとともに和平交渉に活躍。慶長の役にも再出兵。慶長三（一五九八）年順天攻撃を放棄し、十一月帰国の途中、明水軍李舜臣軍を敗る。帰国後、加藤清正らより非違を訴えらる。またキリシタン大名として活躍、宇土地方にモパードレ・イルマンを数人抱ゆ。慶長四（一五九九）年司教セルケイ

ヲを長崎から招き保護す。翌年大坂に癩病院を設立し、慈善事業にもつとむ。慶長五（一六〇〇）年九月十五日、西軍の将として関ヶ原の戦に臨み敗戦す。伊吹山に逃亡し、里正林の藏主に捕えられ、十月一日石田三成・安国寺惠瓊とともに斬死。三条大橋に梟首さる。妻はジュスタ。

隼人

幼名与七郎、隈庄城代か。慶長五（一六〇〇）年、宇土城にて留守居をし、自刃す。

与七郎

ルーシア

伊丹家に嫁す。

主殿介

洗礼名ベドロ。隈庄城代ともいう。

男

父行長の罪にて毛利家に預けられ、十二才で刑死をうく。

女

小西弥左衛門妻。

マリア

宗義智の妻。のち離縁。慶長十（一六〇五）年長崎にて歿す。

マルタ

文禄元（一五九二）年生る。有馬直純の妻となる。のち離縁す。二十才で歿すか。

細川家系圖

系世系

藤孝公

幼名滿吉

與一郎

共部卿

從五位下

從五位下

侍從

二位連

左衛門

後攝關齊光

天文三年四月廿二日於洛陽東山麓開邸

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

又賜城別西園三千石支樓四年加賜支樓財

系世系

忠興公

無氏

與二郎

從五位下

從五位下

從五位下

從五位下

從五位下

從五位下

從五位下

永祿六年十月十二日於京一條館誕生

天正十年龍登丹後之封居當津城慶長五年

東照公駕崩後後有六兄石同年移封于

豐前加賜豐後速見國東二郡木村加改

領和九三拾方石居中津之城慶長七年移居

小倉城致仕後後居津城慶長九年慶利公

移封於肥後忠興公以代為居城

正保二年十二月二日於八代城薨年八十三分

奉遺骨于恭勝寺及京師大徳寺中島相

院諡松向寺三齋宗正

如 光壽院 見上列條

室 明智目守源光女 幼名後

永祿二年御誕生慶長五年七月

十七日於松別大玉造館自殺年三

十八歲太林院葬 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

慶宗王 幼名源光 慶宗王 幼名源光

女 世

初嫁一姓左氏行第拾壹號元後
再嫁吉田氏行第拾壹號元後

永祿壬午朔曜誕生

慶安四年二月廿四日卒年八十四諡藤院

雄譽英光

母同上

幸隆

初事實 刑部左輔 後攝政

元龜二年朔曜誕生初任慶長下坊天正

土年七月還俗

慶長十二年十月朔月於豐前卒年十

七葬南禪寺中天授庵諡真慈院一派妙庵

母同上

女

初嫁 筑紫左近守門事

慶長十二年四月廿一日誕生

延寶三年閏四月十日没年十九諡

圖宗院同庵榮堅

女 十

初嫁長岡興九郎并以孝行後
再嫁小室長官内長官

天正七年朔曜誕生

寬永四年十二月廿二日卒年四十九諡惠雲
院涼室理清

母同上

孝之

初孝配

茶兒

慶長即

中務卿

後醫務休齋宗也

天正十二年朔曜誕生

正保四年七月七日卒年六十三葬高桐院

塔中恭勝庵諡恭林院一空宗也

母同上

女

小方 小室長官部長之妻

慶長土年朔曜誕生

寬永十五年十月十五日没年十三

諡松雲院梅窓主芳

女

杉大

孝恒

長岡興十郎

實長岡伊賀守時重第二子

孝之養以為子

慶長五年朔曜誕生

元和三年六月十六日没年十八諡

喬瀨宗心

達九

誕生年月不分明

天正十五年七月十七日大諡賢勝院梅林

宗喬

母同上

女

賀

木下左衛門大夫延俊室

誕生年月不分明

慶長九年十一月十四日卒諡松屋寺即庵

妙貞

母同上

女 栗

長岡伊賀守好重女
三洲家流實
細川梅繼女

誕生年月不分明

某年十月三日卒諡重慶院定瑞

母同上

女

那仁保 一子 仁保 女

生卒年月不分明

母同上

右次第自志興公室考之以誕生年月之
序次記之達元以下者誕生年月不分明因
于古系之順出末

忠隆

無氏 明榮興一郎
從五位下 侍從 藤勢雄長岡休藤

天正八年四月七日於月輪寺誕生

正保三年八月朔日於京師平年六十六令遺

骨葬太極寺中高相院及飽田郡十色邑瑞

巖寺諡恭仰院瑞岩宗祥
長岡内膳祖
利有系存

母 奏林院

兄弟前條

室 和賀大納言利家卿女
有政
難別

興秋

初志原 長岡興秋

天平十年分明誕生
為細川大善頭興元
養子

元和九年二月六日於城別稻荷東林院自

殺年三十三諡黃梅院真月宗心鎌倉
那

母同上

女 鶴

南條大將元信妻

慶長六年八月六日誕生

元祿二年六月十三日没年七十九諡香

雲院梅室理清

母 氏家宗八女

女 長

前野出雲守長重室

誕生年月不分明

慶長八年九月廿九日卒諡安昌院月見

母 同上

女

古保 長岡佐渡興長妻

天平十三年分明誕生

萬治元年九月十五日於代卒年七十七諡

惠妙院國月宗國

庶母 郡主馬首宗保女

忠利公

初志原 氏 内記 敬平寺
從五位下 侍從 從五位下 少將

天正四年十月十日於丹後誕生

慶長五年從志興公移豐前居津城元和

七年家督居小倉城寬永九年賜肥後赤
豐

後之内藏方石合五拾四万石

寬永十八年三月十七日於熊峯花畑館薨年
平六分遺骨葬妙鮮寺及東海寺中妙鮮
院臨妙鮮院臺雲宗位

母 同忠隆

室 台德公御養女廣永安公六部
女賴房女十

慶長三年朔曜誕生慶安二年十月廿

四日於江府白銀邸逝去年五十三葬東

海寺中妙鮮院臨保壽院臺紹春

女 多羅 賴實民部左輔一通室

天正十六年朔曜誕生

慶長十九年九月十七日於普後日科卒年

廿七臨德雲院臺臺最英前

母 同忠隆

十九

誕生年月不分明

慶長三年朔曜太臨梅唐童子

庶母明智玄衛門光忠女少也

女 萬 鳥丸中納言光賢卿庶中

慶長三年今月誕生

寬文五年二月十六日於京師卒年六十八

葬南禪寺中天授處臨風科院桃嶺壽仙

母 同上

立孝

坊 立光 中發轉

元和九年七月十五日於小倉誕生

正保二年五月十一日於江府卒年一十一葬

江府祥雲寺臨恭雲院立光宗功御川忠康
字祐別

女 有美

庶母清田主計鎮來女 吉

室 五條中納言為適卿女 瑞

興孝

天十代 刑部 賴實第立白

元和三年正月十三日於小倉誕生

延寶七年十二月四日於能田部舊養別莊卒

年五十一葬泰勝寺中慈眼庵臨定光院明慶

二年張國圖書
別實年

母 同上

寄之

義代 式部 佐渡

元和三年四月三日誕生海長岡佐渡
津京養子

寬文六年正月六日卒年十八葬代春

元年臨要津院俊嚴英寄

庶母真下振之助九重女 才

喜 長岡吉馬助重政女 吉幸

女 市 大

生卒年月不分明

母 同上

必利卷十

光尚公

初光利 中養賢 六元 肥後守
從五位下 侍從

元和五年九月十九日於普南中津誕生

寬永十八年家督

慶安三年十一月廿日於江府薨年三十一

歸葬妙鮮寺謚真法院四嚴宗夢

母 保壽院

見前條

室 烏丸光賢卿女

林六

元和六年創祿誕生寬永十二年十

月十四日逝去年十七葬京師大德寺

中天授庵謚正安院月岫洋心意通

愛宕下青
松平於靈牌

女 藤

松平然守忠良室

寬永十年創祿誕生

元禄十年六月廿日於江府年十五葬

谷中天眼寺謚天眼寺慈光性輪

庶母不分明

宗玄

華子代 玄鳴食 天祥和尚 不白

寬永十二年七月九月於熊本花畑館誕生

出家為僧
解手住職

貞享元年二月朔日於京師大德寺中常樂

庵遷化年五十五葬其寺中玉林院劫謚慈

德惠濟禪師

庶母金子氏

女 竹

有言賴女英壽寺

寬永十四年三月十八日誕生

元禄七年二月廿四日卒年五十八葬龍留郡

島崎邑靈樹院謚長壽院空宗本

庶母不分明

尚房

初尚良 細川於支那 九京 修理

寬永十四年八月十日誕生

延寶八年十二月廿日卒年四十四葬妙鮮

寺中清陰庵謚智照院月江義心

庶母額田氏

女 松

母長岡佐渡守之女島

尚方

龜子代 修理 大膳

寬文九年八月十三日誕生

貞享五年七月廿二日卒年五十五葬妙鮮

寺中智照院謚靈安院王雲紹光

母同上

妻長岡帶刀直之女

東

宜之卿

大

女

興幾 長岡圖書典章寺 有政 辭別

九知

長國勝子代 南條左衛門 五郎
椿發佛道同

寛永十八年二月廿七日誕生 南條左衛門元信 梅發子

九條十六年五月朔日辛年午子三條館四郎

竹邊村見性寺證香山院定右通同

養母 細川與五郎興秋女 細

庶母 不分明

孝 長岡監物は長女 落澤

末

寛永十二年十月二日誕生

同年十二月十二日大華溪草海雲寺證漢合

院月山窓堂

母 正受院 見子前條

養母長子

網利公

六元 越中守 侍從 少將 能高信下

寛永廿年正月八日於江府誕生

慶安三年家督

正徳二年致仕

同四年十一月十二日於江府寛年七十歸

茶抄餅寺證妙應院雲藏宗龍

嫡母 正受院 見子前條

生母 内海氏

室松平讀收守賴重養女 寛永廿年納吉 賴房卿女

正保二年 明瞭誕生 延寶三年十月

廿日逝去年三十一茶抄餅院證本

漁院梅溪妙香

利重

七之助 若根牛 從五位下

正保二年十二月十五日於江府誕生令賜

新田萬五千石網利公請之也

貞享四年八月五日於江府辛年甲二

茶抄餅院證通玄院玉峯龜園 細川 末女 正祖別 有累存

母 同上

女

若 松平豊後守賴路室

寛文六年二月十三日於江府誕生

享保十四年四月十七日辛年子三羅世

本門寺證法輪院妙諦日深

母 本漁院 見子前條

女

元 酒井左衛門尉忠真室

寛文八年正月十九日於江府誕生

元禄九年十二月十六日於江府辛年元九華

抄餅院證本漁院瑞室妙光

母 同上

女 松

寛文九年十二月廿五日於江府誕生

貞享三年四月十日於江府年十七華
妙解院謚自性院松溪妙秀

母同上

女 楊

松平志摩寺蓮生堂

細川義隆寺利重
細川義隆寺利重

寛文十一年七月十三日於江府誕生

元禄六年七月廿五日於江府年廿三華
本持寺謚本空院日圓高照

母同上

女 吉

細川米女正利昌室

延寶九年十二月八日於江府誕生

元禄二年四月廿日於江府年廿七華
妙解院謚真性院常樹妙英

女 作津

清水觀賢路良寺

天和二年十月廿五日於熊谷花細館誕生
元禄十五年九月七日於江府年廿一華
妙解院謚靈雲院光宣妙輝

庶母 仁田氏

女 幸

天和二年十二月廿三日於江府誕生

貞享二年九月十九日於有言家女
四藏華妙解寺謚淨法院瑞岳

妙祥

庶母 平賀氏

女 國

有言大膳立貞緣女

貞享元年五月九日於熊谷花細館誕生

元禄四年七月六日夫八藏華妙解寺寶隆院

國端妙理

庶母 黑川氏

某

典一郎

貞享四年十月四日於江府誕生

元禄十三年七月廿一日於江府年十四華

妙解院謚惠雲院海宇紹珠

母 同津

吉利

初利幸 七次郎 内記 兵部輔
從五位下 侍從

元禄二年二月十九日於江府誕生

寶永三年四月廿五日於江府白銀郎年平

十八華妙解院謚圓明院惠海宗遠

母同上

細川分家子

宣紀公

初利武 竹之助 主税 主税頭 越中守
從五位下 侍從

延寶四年十一月廿日於江府誕生
實細華
利重子也

正徳二年七月十一日家督

享保七年六月廿日於江府誕生
實細華
利重子也

妙解院謚靈雲院桃谷義瑞

生母 筑山氏

女 細帶具
久枝右大臣惟通公孫中實知川奉朝太子

貞享四年八月廿八日於江府誕生

享保廿二年五月十二日卒年五歲京師

二條河原頂妙寺諡妙玄院法蓮園秀日

芳

庶母同宣紀公

女 初

松平米女正定基室實孝子忠康子繁子
細利繁子孫之

元禄六年朔果誕生

寬延二年七月晦日年五十七葬池上

本門寺諡本寺院榮昌日久

母本空院見子所條

某

竹之助

寶永九年正月十五日於江府誕生

同三年三月二日於江府太二歲葬淺草

普慶寺諡理性院主海

庶母小田野氏

女

藏

寶永四年二月十一日於江府誕生

正德二年七月十七日於江府太二歲葬傳

通院中昌林院諡東光院月峯秋白

庶母島井氏

女 老

寶永四年十一月八日於江府誕生

正德二年五月廿二日於江府太六歲葬淺草

普慶寺諡照賢院妙語日通

母同竹之助

某

公卿

寶永五年正月十一日於江府永峯別莊誕生

正德四年十二月七日於江府龍口邸大七歲

葬傳通院中昌林院諡由生院萬容日忠

母同藏

女 名代春

寶永七年正月七日於江府龍口邸誕生

正德四年十二月十日於同邸太五歲葬淺草

普慶寺諡圓乘院妙敬日寬

母同竹之助

某

諸次郎

正德九年正月銀於江府龍口邸誕生

同年五月二日於同邸太五歲葬普慶寺

諡峯院幼急

母同上

女

未封

正德四年十月十九日於熊本花畑館誕生

享保九年三月廿八日於同邸太三歲葬妙

鮮寺諡香林院幼英紹空

庶母不分明

女

享保九年十月朔日於熊本花畑館誕生

同二年四月十一日於同館大之藏華熊本西

福寺諡昭泉院翠山珠光

母同藏

女

享保二年正月廿二日於江府龍誕生

同四年正月二日於同邸失三歲葬妙鮮

院中小林院諡心空院本然妙有

庶母安野氏

主紀多事

宗孝公

初紀造 主親

六九

擊小

從品伴 侍從

享保三年四月廿七日於熊本花畑館誕生

同十七年八月廿五日家督

延享四年八月十六日於江府龍口邸薨年

三十二墳葬東海寺中妙鮮院諡隆德

院耶然義周

母同藏

室 紀伊大納言宗直卿女

安永九年十月四日逝去年六十一葬

妙鮮院諡靜證院藤澄義雲

女

花 代 松平諡以守賴茶室

享保五年二月十三日於熊本花畑館誕生

安永七年正月十二日於江府年年幸九

葬讀別高松津願寺諡清操院棋譽

光沾得悉

母同勝

女

林々 喜和

宗對馬守義如室

享保五年七月廿四日於熊本花畑館誕生

寶曆四年閏二月二日卒年三十九葬上

野坂下養玉院諡香室嚴院遍主金照

母同藏

重賢公

享保五年十一月廿六日於江府龍口邸薨

詳于後條

庶母岩瀬氏

女

未代 照三十

安藤對馬守信守室

享保七年九月十一日於熊本花畑館誕生

天明元年閏五月廿九日卒年六十一葬江府

批町晒岸寺諡高雲院延譽貞岳壽永

母同藏

女 常 幸 堂

織田山城守信高室

享保八年五月廿二日於江府龍口郎誕生

延享三年五月廿日辛午年廿四第江府小谷

廣德寺證法院院玉瀾宗珠

母 同重賢公

紀休

初能堂 伊市 織部 清記
後院長門氏

享保八年十月十日於江府龍口郎誕生

天明七年九月廿二日於飽田郡筒井別

莊卒年十一月五第妙鮮寺證淨觀院智海

宗真

庶母 友成氏

女 悅 衛 正

長國助右衛門是福妻

享保九年正月十五日於熊本花畑館誕生

天明四年二月廿日卒年六十一第飽田郡

竹邊村見性寺證壽鏡院當臺妙相

母 同勝

女 錫 成 幾

細川大和守興正室

享保十年二月十一日於江府白金郎誕生

寛政六年四月十一日辛午年七十第東海

寺中清光院證清源院洞月宗流

母 同重賢公

女 津 興

小笠原備前長軌妻

享保十年七月晦日於熊本花畑館誕生

享保十年八月廿七日辛午年三十一第飽田郡

立田山麓常樂寺證富月院涼臺亮

母 同勝

興 珍

初權房 武明 紀近 長次郎
長市 幸人 青土 後長國氏

享保十年十月朔日於熊本花畑館誕生

長國國書興行
後爲子

天明六年正月五日辛巳年六十一

第恭勝寺證隣春院青土了無

母 同勝

某

竟五郎

享保十二年七月十四日於熊本花畑館誕生

同十四年十二月十日大三藏第熊本西福

寺證光念院智王凜照

母 同藏

水本公金子

重賢公

初能雄公之助 民部 主馬 織中守
後爲子 侍從 少將

寶宣紀公第五男也 誕生年月
前出

延享四年八月爲宗孝嗣

同年十月四日家督

東 應五郎

天明四年六月廿二日於江府金郎誕生
寛政元年四月廿二日卒年十歳葬妙鮮
院謚翠雲院山岳宗應

母同上

東

天明五年十月九日於熊本花畑館誕生
同日大葬妙鮮寺謚幻性院淨岳宗清

庶母 涉尾氏

女 院

大哉大綱言通明卿簾中

天明七年二月廿五日於熊本花畑館誕生

母同上

齊樹公 齊樹 苗之丞 六之郎 兵部大將 葬寺
從四位下 侍從

寛政九年正月十三日於江府金郎誕生

文化七年十二月十日家督

大政元年十二月廿二日卒年十歳葬妙鮮院

生母 芳澤氏

室 一橋大綱言治濟卿女 紀

大政元年六月廿四日葬妙鮮院謚蓮性院

濱次郎 照吉

東

寛政三年三月十一日於江府龍郎誕生

同年七月晦於飽田郡二本木館大七歳

葬妙鮮寺謚柱輪院慈照宗國

母同上

女 院 松平 出羽守 齊恒室 右政
從三位 卿 難別

一條關白忠良公政所

寛政五年十月十一日於江府龍郎誕生

庶母 山科氏

茲詮 藏主 攝子長國
初藏主

寛政八年九月晦於江府龍郎誕生

母同上

東

大政元年四月六日卒歳二十三歳東海寺中
妙鮮院謚泰治院心境義兄
假之助 銅之丞 攝子長國

享和二年十月五日於熊本花畑館誕生

同年閏正月四於同館大二歳葬泰勝寺

謚玄香院梅隱宗香

庶母 松岡氏

女 院

文化元年四月五日於江府誕生

同年二月晦日大三歳葬妙鮮院謚蓮

光院華底妙皎

母同上

女 溫

文化三年七月十九日於江府濱町邸誕生

同四年八月五日於三歲華妙解院諡真

觀院清容妙幻

母 同上

階八郎 稱号長岡

某

文化六年三月十八日於熊本花畑館誕生

同七年十二月廿九日於江府太一歲華妙

解院諡瑞巖院雲華慈主

母 同上

女

文化八年七月晦日於江府濱町邸誕生

同日大華妙解院諡言三員院茂郎契

母 同上

女 聯

文化十年二月朔日於江府濱町邸誕生

同年七月十八日於江府太一歲華妙解院諡

涼機院德恩妙純

庶母杉野氏

女 齋

文政六年二月十四日於本山館誕生

齋樹內分養子為子

同九年十一月廿四日於三九館卒葬立田

山恭勝寺諡梅珠院雪實妙薰

庶母 今井氏久羅

女 恭

文化七年二月十五日於江府白金邸誕生

同月廿八日卒東海寺中妙解院而葬式

少林院治推諡華演院春陽妙照

庶母 芳澤氏養女

女 篤

文化八年七月八日於江府竜口邸誕生

同三年五月廿一日紀為養女

庶母 同上
養母 紀

文政七年四月十八日卒葬於妙解院諡
整照院慈眼妙晃

齊 護公

典松立政 從五位下 中務少輔
舊侍從 越中守 從五位中將

文化元年九月十六日於江府永田丁邸
誕生

文政元年八月九日立之遺領相續

同年十一月十六日叙爵任中務少輔

同九年三月廿九日依齊樹之額奉家

相續賜肥後并豐後之內領地

同年四月十八日任越中守

同年五月九日元服叙任從四位下侍從

天保五年十一月十六日任少將

弘化三年五月十八日將軍家慶公より

齊護高祖父以奉國治之宜ヲ賞之

賜時服鉞鎗

嘉永六年十一月十四日有相模國備城之
台令且村々預所政事司可為私領同格

旨有特命

安政三年十一月十六日任中將

同五年十一月廿三日叙從四位上

萬延元年五月廿七日實四月十七日卒五十七歲

葬於妙解院臨泰嚴院

養父 齊樹

養母 一橋治濟卿女 紀 蓮院

實父 細川和泉守主之

實母 壬井大炊頭利厚女

室 淺野安藝守齊賢女益 顯光院

文化三年十一月十一日生

明治六年七月廿日卒六十八歲八月

葬于北岡

慶前公

雅之進 從四位下侍從 兵部大輔

文政八年七月廿日於永田丁郎生

天保十一年三月十三日元服叙任從四位下侍從

侍從

嘉永元年四月廿三日實四月十一日卒葬于妙

解院臨泰樹院龍嶽宗珪

養母 益

生母 上村氏女幸長少臣久

室 細川能登寺利用女茂鳳重院

天保元年四月廿九日生
明治七年三月廿日卒葬于立田

六九

弘化四年正月廿五日生

同年三月三日大葬于妙解院臨高
樹院三臺紹胤

母 茂

女 寅

文政十一年十月晦日於龍口郎生

同十一年三月廿日葬於妙解院臨高
麗院

母 益

女 辰代

天保元年六月廿九日於龍口郎生

同年八月十八日父葬於少林院臨續
義院

母 右同

女 常子

天保五年七月十四日於龍口郎生

嘉永二年十月十九日嫁於松平慶永

母 右同

詔邦公

則三郎 六之助 從四位下侍從 少將
右中將 從五位上中將 正四位
熊本藩守

天保六年六月廿日於龍口郎生

嘉永四年九月十八日元服叙任從四位下侍從

萬延元年七月十一日父遺領相續且如父時有相協備場之台令

同年八月廿一日任少將

元治元年四月十一日從四位上拜任家勅命同十五日有中將推叙之台令

明治三年六月十七日版籍奉還被

聞食更ニ熊本藩知事ニ蒙 勅諭

同三年五月八日致仕同十三日位階正五位

拜叙明治九年一月廿三日事

養母 益

生母 北企氏女 美衡

室 左將一條忠喬公女 峯

實三條大納言貴萬卿女

天保八年十一月十日生

護久公 部邦為嗣系出于下

養烈 始寬忠郎 津輕家相續

天保十一年八月十二日於龍口即生

安政四年六月廿八日津輕越中守噺兼為養子

同六年十二月七日噺康致仕養烈家督

生母 幕臣 青野氏女 羅久

友之近

天保十一年十月廿四日於花畑即生

同十三年四月十七日大葬於妙解寺謚

淨光院

生母 美衡

女

天保十二年五月五日是於花畑即生翌日大葬於妙解寺謚貞空院

生母 加藤氏女 四郎

護美

良之助 參與 從五位上 左京亮
軍務事務司 從四位下侍從 軍務副總督
侍從 軍務知事 熊本藩參事 從四位下

天保十三年九月十七日是於花畑即生

嘉永三年三月廿三日喜連川左馬頭越氏

為養子左兵衛督紀氏下嫡女

安政五年三月廿四日病氣三月喜連川家

より引取長岡家之助護美ト改ム

明治元年三月朔日參與職ニ被任翌日

軍防事務司拜拜命且左京亮從五位上

被叙任

同年閏四月三日從四位下侍從ニ任叙之

第二軍副總督轉任同次ニ攝文軍

務副知事轉任

同二年五月八日軍務副知事免之

同三年六月朔日熊本藩大參事拜命

同四年七月十四日廢藩置縣ニ付本官

免セラル

生母 幕臣 飯洞氏女 長

同五年正月廿日横濱發艦米國渡海

女

喜久 初盈

弘化元年九月六日於龍口即生

同二年六月三日卒葬少林院謚敬心院

生母 羅久

護久公

義之助 澄之助 從四位下侍從 右京大夫
議定 刑部卿總督 刑部事務卿
參典 熊本藩知事 海軍少將
陸軍少將

天保十年三月朔日於花畑即生

慶應三年六月十一日元服叙任從四位侍從

明治元年正月十一日議定刑部事務卿總督

拜命二月廿日刑部事務卿輔拜命三月

十三日本官免セシ議定元ノ如シ

同三年三月二日參典職拜命五月 免

セラレ出仕ノ節齋番ノ間檢候蒙

勅諭

同三年五月八日蒙督且熊本藩知事

拜命

同四年七月十四日廣藩置縣ニ付本官

免セラレ

同年八月十五日海軍少將 勅任同十

三日陸軍少將轉任尋テ十月七日依願本

官免セラレ

養母

峯

生母

嘉吉 加藤氏重女ノ姉
實永氏女

室

正位銅島奇正卿女 宏

嘉永四年三月十七日生

欽一郎

文久二年正月十五日於花畑即生

同年四月廿日入葬於妙解寺謚芳院

生母

紀伊東條卿
石黒氏女 愛

毅九

文久二年十一月十六日於花畑即生

同三年七月九日入葬於泰勝寺謚麟

祥院

生母

右同

備之丞

元治元年六月十一日於花畑生

同三年三月廿日入葬於妙解寺謚香雲

院

生母

右同

毅三郎

明治二年四月二日於花畑即生

同三年四月廿日入葬於泰勝寺謚寶

珠院

生母

家臣
千原氏女 敬

延銳丸

明治二年六月廿八日於花畑即生

同四年四月三日入葬於立田

生母

右同

護成

始建千代

明治元年八月三日於花畑即生

生母

家臣
水俣氏女 純

女 嘉壽

明治二年九月廿四日於花畑郎生

母 右同

女

明治三年五月廿四日於花畑郎生

同年

母 宏

女 宜

明治四年三月十五日於花畑郎生

母 縫

女 志津

明治五年八月六日於濱町郎生

母 右同

女 閑

初川閑子 雲五
細川清久 女 辰中
六月廿五日於濱町郎生

明治六年九月廿六日於濱町郎生同廿九日
矢葬於少林院

母 宏

女 輝

明治七年九月廿二日於濱町郎生

母 右同

女 悦

明治十年九月廿五日於濱町郎生

母 右同

女 猷

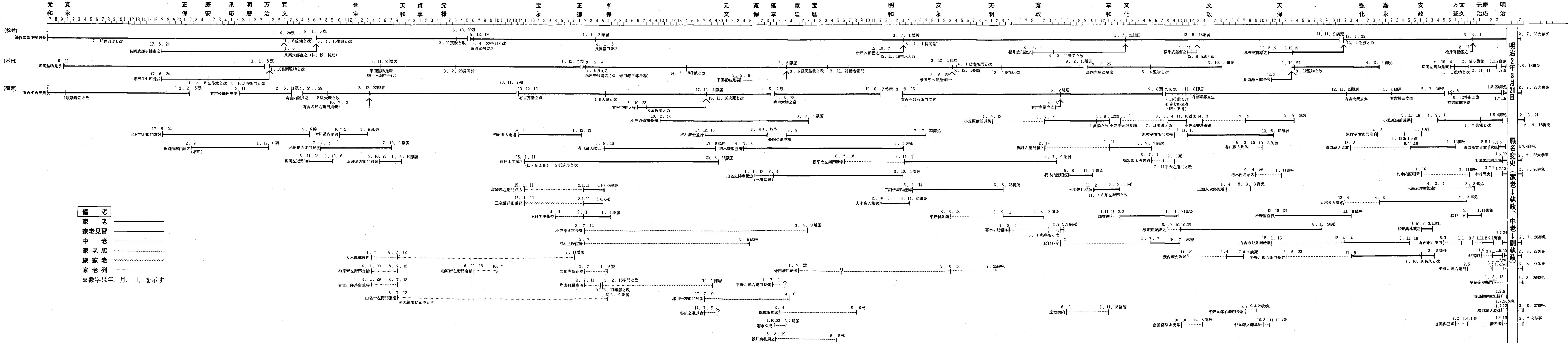
明治十二年一月廿九日於濱町郎生

母 右同

備考

- 家老
- 家老見習
- 中老
- 家老脇
- 旅家老
- 家老列

※数字は年、月、日、を示す



明治2年3月21日

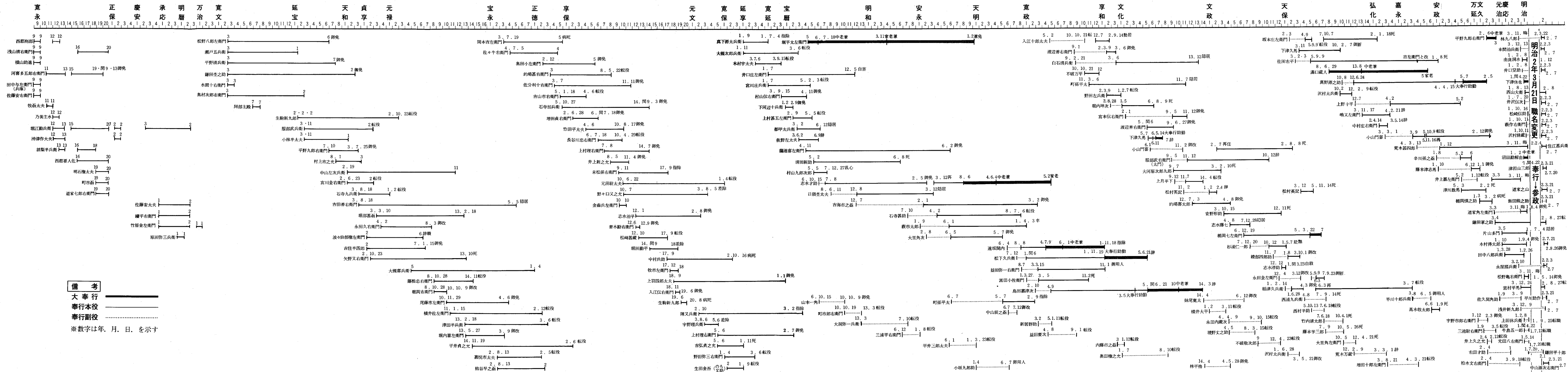
職名変更（家老・執政・中老・副執政）

2. 7. 22大参事

附録2

大奉行・奉行・奉行副役一覧

（「本藩年表」家系一により作成）



備考

大奉行
奉行本役
奉行副役
※数字は年、月、日、を示す

附録3. 免率・米双場年表

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	銭 100目 月・日 石・斗・升・合
寛永10	5・2・8・5	4・5・9・8			
11	5・2・8・5	4・4・5・8			
12	4・6・3・3	4・4・1・7		10・3 3・6 (越崎) 11・25 3・2・0・0	
13	3・9・7・2	3・8・9・0		8・19 1石に34匁 11・20 2・5・0・0	
14	4・1・1・0	3・6・3・7			
15	4・4・3・8	4・0・6・4			
16	4・6・5・5	4・0・9・7			
17	4・8・9・1	4・2・9・0			
18	2・5・2・7	1・9・8・0			
19	3・9・8・1	3・7・2・5			
20	4・7・3・4	4・3・4・2		6・13 4・0・0・0	
正保 1	3・6・3・9	3・6・1・7			
2	4・7・8・5	4・1・6・4			
3	4・2・0・4	3・8・2・8			
4	4・1・9・8	3・8・4・6			
慶安 1	4・2・3・5	4・0・9・9		7・12 金1兩に2石3斗5升	
2	3・9・1・4	3・8・6・9			
3	3・5・7・1	3・4・3・3			
4	3・5・1・2	3・7・8・0		暮 2・0・0・0	
承応 1	4・1・3・3	3・8・5・3			
1	2・6・4・9	2・7・4・4			
2	3・5・7・1	4・1・1・0			
明暦 3	4・2・2・7	3・9・4・4			
2	4・7・2・0	4・1・9・8			
3	4・5・8・3	3・9・7・4			
万治 1	3・5・2・1	3・1・9・8		暮 2・2・0・0	
2	4・5・2・0	4・1・0・7		春 1・7・0・0	
3	4・0・2・5	3・8・7・4		9・一 1・7・0・0	
寛文 1	4・3・2・7	4・0・1・2		春? 2・0・0・0	
2	4・5・8・3	4・2・0・1			
3	3・6・7・5	3・3・7・3			
4	4・3・0・2	3・9・2・8			
5	4・2・3・5	3・9・3・4			
6	3・8・5・5	4・0・8・1			
7	4・2・6・8	4・0・3・7			
8	4・4・1・4	4・1・9・9			
9	3・9・2・2	3・8・0・6			

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	銭 100目 月・日 石・斗・升・合
10	4・5・8・4	4・2・7・8			
11	4・4・0・2	4・1・0・6			
12	4・5・8・1	4・1・1・6			
延宝 1	4・4・7・7	4・0・8・1			
2	4・1・5・1	3・9・8・6			
3	4・4・5・9	4・1・8・2			
4	4・1・9・1	4・0・5・4			
5	4・7・4・2	4・2・7・2			
6	4・3・8・6	3・8・2・2			
7	4・6・0・2	3・1・9・8			
8	3・9・0・3	3・8・1・1			
天和 1	4・3・7・8	4・0・3・7			
2	4・4・7・7	4・1・8・6			
3	4・5・7・6	4・2・4・0			
貞享 1	4・6・9・9	4・3・3・7			
2	4・8・2・7	4・3・5・8			
3	4・4・9・9	4・0・9・8			
4	4・6・5・5	4・3・1・0			
元禄 1	4・5・9・5	4・2・3・3		11・12 2・6・0・0	
2	4・0・6・8	3・7・4・5		11・11 2・3・0・0 12・21 ^知 2・1・0・0	
3	4・6・9・9	4・2・2・3		2・10 ^知 2・0・0・0 6・1 ^知 1・8・0・0 11・11 2・6・0・0	
4	4・4・2・6	4・1・9・6		3・21 ^知 2・5・0・0 5・12 ^知 2・2・0・0 11・18 2・5・5・0 12・— 2・4・5・0	
5	4・6・1・9	4・2・2・5		2・25 2・3・0・0 5・26 2・5・0・0 11・18 2・3・0・0 12・28 2・4・0・0	
6	4・3・3・0	3・9・8・2		7・6 ^知 2・3・0・0 11・22 2・6・0・0	
7	4・5・4・5	4・1・4・1		11・— 2・5・0・0	
8	4・5・7・1	4・1・9・8		3・12 2・4・5・0 5・6 ^知 2・2・5・0 11・12 2・2・6・0	

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	錢 100目 月・日 石・斗・升・合
				12・10 2・1・5・0	
9	4・7・1・8	4・1・9・2		1・10より2・0・0・0 2・8 1・8・0・0 5・一 1・6・5・0 6・一 1・5・0・0 11・11 2・3・5・0 12・1より2・5・0・0 同・18 1・9・7・0 同・晦 1・8・0・0	※井手文書 5・11 1・6・4・0
10	4・2・7・5	3・5・5・4		4・一 1・6・5・0 7・23 2・0・5・0 9・25 1・9・0・0 10・3より1・8・0・0 同・13 1・7・0・0 同・19 1・5・0・0	
11	4・8・7・6	4・4・0・1		7・25 1・7・0・0 1・7・5・0 12・24より1・7・0・0	
12	4・3・7・9	3・8・4・4		6・9 1・6・5・0 7・4 1・6・0・0 閏9・25 1・4・0・0 10・3より1・3・5・0	
13	4・8・0・6	4・2・9・6		10・14 1・6・0・0	
14	4・7・0・8	4・2・9・2		3・3より1・5・0・0 6・13 1・4・0・0 10・19 1・3・5・0	
15	4・0・8・4	3・2・5・0		9・25 1・2・5・0	
16	4・1・9・0	3・5・7・7		2・29より1・1・5・0 5・23 1・0・5・0 10・28 1・5・0・0	
宝永 1	4・0・5・3	3・3・8・5		11・12 1・5・0・0	
2	4・1・5・7	3・5・4・3		6・19より1・7・5・0 10・10 1・7・0・0	
3	4・6・6・6	3・9・3・7		2・19より1・1・0・0 7・12より1・4・0・0 10・晦 1・6・5・0	
4	4・6・0・4	4・1・0・2		2・16より1・5・0・0 3・2 1・4・5・0	

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	錢 100目 月・日 石・斗・升・合
				5・晦 1・3・5・0 11・14 1・6・0・0	
5	3・7・7・3	3・2・8・4		閏1・3 _よ 1・5・0・0 7・1 _よ 1・4・0・0 11・10 1・6・5・0 12・3 _よ 1・7・5・0	
6	4・8・9・4	4・2・0・4		2・24 _よ 1・5・5・0 11・15 1・9・0・0	
7	4・7・3・8	3・9・3・0		11・6 1・7・5・0	
正徳 1	4・2・0・1	3・3・0・0		1・14 _よ 1・6・0・0 11・12 1・4・0・0	
2	3・6・9・3	3・2・0・2		11・16 1・0・0・0	
3	4・3・6・9	4・3・0・6		1・19 0・9・0・0 5・一 0・8・0・0 閏5・一 0・7・5・0 10・2 0・9・0・0 同・5 0・8・5・0 同・9 0・8・0・0 同・16 0・7・5・0	※井手文書は13日
4	4・7・1・0	4・3・3・9		3・21 0・7・0・0 11・6 0・5・6・0	
5	4・5・7・7	4・1・9・4		3・15 0・6・5・0 6・3 0・6・0・0 11・15 0・8・5・0	
享保 1	4・5・8・0	4・0・6・6		1・21 0・7・7・0 2・14 0・7・3・0 同・19 0・7・0・0 閏2・22 0・6・7・0 同・29 0・6・3・0 3・21 0・6・0・0 11・13 0・7・8・0 12・2 0・7・2・0	
2	4・6・5・7	4・1・5・9		1・10 0・6・3・0 3・17 0・6・5・0 4・一 0・7・0・0 11・8 0・8・0・0	
3	4・8・1・7	4・3・1・2		12・一 0・8・0・0	
4	4・4・1・5	3・8・7・1		11・11 0・5・5・0	

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売掛3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	錢 100目 月・日 石・斗・升・合
5	4・6・9・8	4・2・6・8		1・晦 0・5・2・0 6・29 0・5・0・0 7・25 0・4・5・0 7・一 0・4・3・0 11・10 0・5・2・0	
6	4・1・2・9	3・7・0・8		2・5 0・5・0・0 同・15 0・4・5・0 6・1 1・6・0・0 同・16 1・5・0・0 11・11 1・6・8・0 12・17 1・6・0・0	※井手文書は新銀 100目 ※同 ※新銀 100目 ※同
7	4・1・2・8	3・8・1・6		2・3 1・5・0・0 3・16 1・4・5・0 11・16 1・9・5・0	※同 ※同 ※井手文書は新銀 100目
8	4・1・0・4	3・5・6・1		1・晦 2・1・5・0 2・17 2・3・0・0 11・25 2・6・0・0	※同 ※同 ※同
9	3・6・8・1	2・8・9・9		11・25 2・7・0・0	
10	3・8・9・5	3・1・6・0		12・5 2・4・0・0 同・26 2・3・0・0	
11	4・0・8・2	3・4・1・3		2・20 1・9・5・0 12・8 2・0・5・0	
12	4・4・7・3	3・9・8・1		5・20 1・9・0・0 11・18 2・6・5・0	
13	4・0・5・3	3・4・3・6		11・18 2・7・0・0	
14	3・2・2・2	2・8・6・3		11・10 2・7・5・0	
15	4・4・2・5	3・8・9・4		1・15 2・8・5・0 11・18 3・2・0・0	
16	4・6・7・0	4・1・7・8		2・24 3・4・0・0 11・7 2・8・5・0	
17	1・0・7・1	1・1・1・0		1・17 3・0・0・0 3・15 2・9・0・0 閏5・3 2・6・0・0 7・4 2・1・0・0 10・22 1・7・0・0 同・29 1・4・0・0	
18	4・5・5・1	4・1・0・0		11・18 2・2・0・0 12・28 1・8・0・0	

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	銭 100目 月・日 石・斗・升・合
19	3・3・3・9	2・9・5・0		11・25 2・8・0・0 銀札 100目 1石に同日究	※井手文書
20	4・0・3・2	3・6・7・1		11・25 3・0・0・0	※銀札 100目
元文1	3・6・2・0	3・1・1・2		5・25 2・0・0・0 6・6 1・7・5・0 11・23 3・3・0・0 3・3・5・0	※井手文書銀札 100目 ※同 ※井手文書銀札 100目
2	3・7・1・5	3・2・4・7		3・10 3・4・0・0 同・21 3・5・0・0 6・4 3・0・0・0 11・7 2・3・0・0 2・3・0・0	※井手文書文銀 100目
3	4・2・6・6	3・7・5・4		4・8 1・9・0・0 同・23 1・7・0・0 11・— 1・1・5・0 1・1・5・0 1・7・2・5	※井手文書文銀 100目 ※同 ※同 ※井手文書古銀 100目
4	3・0・9・3	3・1・6・8		11・6 1・3・0・0 1・3・0・0 1・9・5・0	※井手文書文銀 100目 ※井手文書古銀 100目
5	3・2・9・0	3・0・1・6	89・8・0	11・5 1・2・0・0 1・2・0・0 1・8・0・0	※井手文書文銀 100目 ※井手文書古銀 100目
寛保1	3・4・3・4	3・2・7・7	76・5・1	4・24 1・1・5・0 6・4 1・1・0・0 11・4 1・3・5・0	※井手文書文銀 100目 ※同
2	4・1・8・5	3・8・1・6	64・7・8	5・12 1・2・5・0 11・18 1・6・3・0	
3	2・9・6・1	2・9・9・3	64・1・0	2・18 1・4・5・0 11・7 1・6・0・0 同・23 1・5・0・0	
延享1	3・6・2・9	3・4・5・7	68・0・5	1・12 1・3・5・0 2・9 1・2・0・0 4・18 1・3・0・0 11・11 1・6・0・0 12・17 1・3・5・0	
2	2・6・4・8	2・6・8・6	81・6・7	1・23 1・5・7・0 7・13 1・4・0・0	

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場			
				銀 100目		錢 100目	
				月・日	石・斗・升・合	月・日	石・斗・升・合
				12・4	1・3・0・0		
				同・23	1・2・0・0		
				間12・18	1・3・0・0		
3	3・2・5・6	3・1・8・6		11・11	1・7・5・0		
4	4・5・5・9	4・1・4・1		4・24	1・6・0・0		
				11・18	1・8・0・0		
寛延 1	3・8・5・2	3・6・6・0		4・10	1・7・5・0		
				6・9	1・6・5・0		
				11・21	1・8・0・0		
2	3・9・7・5	3・6・0・2		11・20	1・8・0・0		
3	3・6・7・9	3・3・3・2	59・9・7	11・22	1・7・5・0		
宝暦 1	3・9・6・2	3・7・1・4	54・0・5	6・12	1・4・0・0		
				11・10	2・0・0・0		
2	4・3・7・4	4・1・0・3	52・1・5	2・12	1・9・0・0		
				4・4	1・7・5・0		
				11・18	2・1・5・0		
				12・22	2・0・0・0		
3	4・5・6・3	4・1・5・3	41・4・2	6・15	2・2・0・0		
				11・14	2・2・0・0		
				12・4	2・3・5・0		
4	4・3・6・9	4・0・9・2	51・3・7	晦・28	2・5・0・0		
				6・12	2・3・0・0		
				11・0	2・3・0・0		
5	2・6・9・7	2・9・6・1	83・9・6	1・13	2・0・0・0		
				3・10	1・7・5・0		
				5・8	1・4・5・0		
				8・18	1・5・5・0		
				11・27	1・2・5・0		
				江戸仕登直段2石3斗にし め仕登目六(録)出来候事			
6	4・2・9・9	4・0・5・6	75・7・5	朔・15	1・5・5・0		
7	4・4・5・9	4・3・1・7	64・0・1	11・12	2・0・0・0		
8	4・6・1・1	4・3・6・1		11・13	1・9・0・0		
9	4・6・4・3	4・3・8・6	58・6・0	11・13	2・0・0・0		
10	4・2・0・9	3・9・7・6	55・0・6	11・13	1・9・5・0		
11	4・4・6・1	4・2・6・3	53・5・2	11・12	2・5・0・0		
12	4・3・7・4	4・1・0・5	59・4・7	11・14	2・2・0・0		
13	4・4・6・8	4・1・7・1	60・2・7	11・17	2・1・0・0		

※井手文書

年号	蔵納免率	給知免率	大坂売撫3俵	本 藩 米 双 場	
	ツ・分・朱・厘	ツ・分・朱・厘	(銀) 匁・分・厘	銀 100目 月・日 石・斗・升・合	錢 100目 月・日 石・斗・升・合
明和 1	4・4・8・4	4・1・8・9	61・1・1	11・16 2・0・0・0	
2	4・4・1・1	4・2・1・9	68・0・9	11・10 1・6・0・0	
3	4・4・0・1	4・2・3・4	63・3・2	11・12 1・5・5・0 (江戸上々様御分料等仕登 1・7・5・0)	※井手文書
4	4・1・8・7	3・9・8・5	66・3・8	11・7 1・5・5・0 (同 1・7・5・0)	※井手文書
5	4・5・3・1	4・2・4・5	64・5・9	11・2 1・7・5・0 (同)	※同
6	3・9・1・1	3・8・8・9	74・3・0	11・9 1・4・4・0 1・4・5・0 (同 1・5・5・0)	※同
7	4・5・4・6	4・2・9・1	68・5・1	10・28 1・6・0・0 1・7・0・0 (同 1・7・5・0)	※同
8	4・3・2・8	4・1・2・4	64・1・6	11・1 1・5・0・0 (同 1・6・5・0)	※同
安永 1	4・0・9・6	3・7・6・8	57・6・9	11・— 1・6・0・0 (同 1・7・0・0)	※同
2	4・3・5・3	4・0・9・8	52・1・8	10・1 1・8・0・0 (同 1・9・0・0)	※同
3	4・2・6・4	4・0・7・6	53・3・6	11・10 1・8・5・0 (同 1・9・0・0)	※同
4	4・1・2・0	3・9・5・9	51・8・1	11・1 1・8・0・0 (同)	※同
5	4・1・5・5	3・9・8・7	59・1・9	11・— 1・7・5・0	11・— 1・5・0・0
6	4・1・0・5	3・8・7・8	56・9・5	11・11 1・6・8・0 (同 1・7・5・0)	11・11 1・3・0・0 ※同
7	3・8・7・4	3・8・6・1	59・2・7	11・11 1・7・0・0 当年より野津原・鶴崎銀納 の双場5升上に究 (以下享和3年まで同じ)	11・11 1・2・5・0
8	4・0・6・6	3・8・6・3	47・7・4	11・3 2・0・0・0	11・3 1・4・0・0
9	3・9・5・8	3・7・1・1	47・4	11・— 2・1・0・0	11・— 1・5・0・0
天明 1	3・9・0・7	3・7・6・1	56・2・7	11・16 2・1・5・0	11・16 1・5・0・0
2	3・3・1・7	3・3・5・6	69・1・9	10・28 1・7・0・0	10・28 1・8・0・0
3	3・8・2・3	3・7・2・4	84・2・9	11・6 1・5・0・0	11・6 1・0・0・0
4	4・1・4・6	3・9・7・1	71・9・8	11・5 1・5・5・0	11・5 1・4・0・0

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売掛3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場			
				銀 100目		錢 100目	
				月・日	石・斗・升・合	月・日	石・斗・升・合
5	4・0・6・4	3・8・7・7	63・8・4	11・3	1・7・5・0	11・3	1・2・0・0
6	3・1・7・7	3・1・5・8	88・2・6	閏10・28	1・2・0・0	閏10・28	0・7・5・0
7	4・3・8・7	4・1・2・3	75・4・2	11・7	1・7・5・0	11・7	1・2・0・0 ? 1・1・6・0
8	4・0・2・5	3・8・4・2	65・8・3	11・12	1・6・0・0	11・12	1・1・0・0
寛政 1	4・0・9・7	3・9・3・3	58・6・7	11・8	1・7・5・0	11・8	1・2・0・0
2	3・9・1・9	3・7・0・7	57・2・8	11・—	1・7・5・0	11・—	1・2・0・0
3	3・7・8・3	3・4・9・5	75・6・6	11・15	1・5・0・0	11・15	1・0・0・0
4	3・0・9・5	3・0・8・9	85・6・8	10・—	1・2・5・0	10・—	0・9・0・0
5	4・2・6・7	4・0・8・5	59・7・7	10・—	1・8・0・0	10・—	1・2・5・0
6	4・2・3・0	3・9・9・4	59・4・2	11・—	1・9・5・0	11・—	1・3・7・0
7	3・6・8・3	3・5・5・0	79・0・0	11・10	1・2・9・0	11・10	0・9・0・0
8	2・9・9・3	3・2・2・7	74・6・2	11・—	1・2・3・0	11・—	0・8・5・0
9	3・8・6・9	3・7・6・6	63・3・9	11・—	1・8・5・0	11・—	1・2・5・0
11	3・9・4・1	3・8・0・4	57・3・8	11・—	1・8・5・0	11・—	1・2・5・0
11	3・5・5・9	3・5・0・2	65・3・5	11・—	1・6・5・0	11・—	1・1・0・0
12	3・8・1・8	3・7・6・5	73・1・1	11・—	1・4・6・0	11・—	0・9・6・0
享和 1	3・6・9・5	3・6・5・6	68・1・0	11・—	1・4・0・0	11・—	0・9・0・0
2	4・0・5・2	3・8・8・9	63・6・1	11・—	1・4・7・0	11・—	0・9・7・0
3	3・9・0・1	3・7・2・2	56・4・0	11・—	1・4・1・0	11・—	0・9・2・0
				本年まで野津原・鶴崎銀 納の双場5 升上げ			
文化 1	3・8・8・0	3・7・8・6	54・7・0	11・8 (野津原 鶴崎)	1・7・5・0 1・7・0・0	11・8 (野津原 鶴崎)	1・1・2・0 1・1・5・0
2	3・8・7・1	3・7・9・2	55・2・1	11・— (同)	2・1・0・0 2・0・0・0	11・— (同)	1・4・0・0 1・3・0・0
3	3・8・7・4	3・7・9・1	58・1・9	11・— (同)	1・9・5・0 1・8・5・0	11・— (同)	1・2・5・0 1・2・0・0
4	3・8・7・3	3・7・9・2	71・2・7	11・— (同)	1・4・5・0 1・4・0・0	11・— (同)	0・9・5・0 0・9・0・0
5	3・8・7・7	3・7・8・8	73・0・4	11・— (同)	1・5・5・0 1・4・5・0	11・— (同)	1・0・0・0 0・9・5・0
6	3・8・7・0	3・7・9・4	57・0・1	11・— (同)	1・7・0・0 1・5・5・0	11・— (同)	1・1・0・0 1・0・0・0
7	3・8・7・0	3・7・9・3	55・2・8	11・— (同)	1・8・0・0 1・7・5・0	11・— (同)	1・1・7・0 1・1・2・0
8	3・8・6・9	3・7・9・4	57・4・7	11・—	2・0・0・0	11・—	1・2・8・0

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売擲3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場			
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合		錢 100目 月・日 石・斗・升・合	
				(同 1・8・8・0)	(同 1・2・0・0)		
9	3・8・6・6	3・7・9・7	54・1・1	11・— 2・0・0・0 (同 1・8・8・0)	11・— 1・2・8・0 (同 1・2・0・0)		
10	3・8・6・6	3・7・9・7	71・5・2	11・— 1・8・8・0 1・8・5・0 (同 1・7・0・0)	11・— 1・1・5・0 (同 1・0・5・0)		
11	3・8・6・5	3・7・9・7	64・2・0	11・— 1・6・4・0 (同 1・5・8・0)	11・— 1・0・2・0 (同 0・9・7・0)		
12	3・8・6・6	3・7・9・6	60・9・7	11・— 1・6・8・0 (同 1・5・7・0)	11・— 1・0・4・0 (同 0・9・7・0)		
13	3・8・7・6	3・7・9・8	73・0・5	11・— 1・5・4・0 (同 1・4・9・0)	11・— 0・9・5・0 (同 0・9・3・0)		
14	3・8・7・3	3・8・0・0	60・9・6	11・— 1・7・2・0 (同 1・6・4・0)	11・— 1・0・8・0 (同 1・0・0・0)		
文政 1	3・8・6・3	3・7・9・8	54・8・1	11・— 1・7・8・0 (同 1・6・9・0)	11・— 1・1・0・0 (同 1・0・5・0)		
2	3・8・6・1	3・8・0・0	47・2・2	11・— 1・9・0・0 (同 1・8・0・0)	11・— 1・1・3・0 (同 1・1・0・0)		
3	3・8・6・6	3・7・9・7	55・0・7	11・— 1・9・7・0 (同 1・9・2・0)	11・— 1・1・4・0 (同 1・0・1・0)		
4	3・8・6・5	3・7・9・8	60・6・6	11・— 1・8・5・0 (同 1・7・5・0)	11・— 1・1・0・0 (同 1・0・2・0)		
5	3・8・6・3	3・7・9・9	58・6・1	11・— 1・7・8・0 (同 1・6・6・0)	11・— 1・1・0・0 (同 1・0・1・0)		
6	3・8・6・3	3・7・9・9	59・9・1	11・— 1・7・8・0 (同 1・5・9・0)	11・— 1・1・0・0 (同 0・9・6・0)		
7	3・8・6・6	3・7・9・9	60・6・7	11・— 1・7・7・0 (同 1・5・7・0)	11・— 1・0・9・0 (同 0・9・5・0)		
8	3・8・5・7	3・8・0・3	75・3・2	11・— 1・4・7・0 (同 1・4・1・0)	11・— 0・9・0・0 (同 0・8・4・0)		
9	3・8・6・0	3・8・0・1	58・6・2	11・— 1・6・2・0 1・5・5・0	11・— 0・9・8・0 (同 0・9・3・0)		
10	3・8・6・0	3・8・0・0	55・8・7	11・— 1・7・4・0 (同 1・7・0・0)	11・— 1・0・4・0 (同 1・0・1・0)		
11	3・8・6・1	3・8・0・0	85・2・0	11・— 1・2・5・0 (同 1・1・0・0)	11・— 0・7・1・0 (同 0・6・5・0)		
12	3・8・6・1	3・8・0・0	68・6・2	11・— 1・4・4・0 (同 1・3・5・0)	11・— 0・8・2・0 (同 0・7・9・0)		

年号	蔵納免率 ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場			
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合		錢 100目 月・日 石・斗・升・合	
天保 1	3・8・6・1	3・8・5・8	81・2・4	11・一 (同	1・4・0・0 1・2・7・0)	11・一 (同	0・7・4・0 0・7・3・0)
2	3・8・5・8	3・8・0・2	72・9・9	11・一 (同	1・4・5・0 1・2・8・0)	11・一 (同	0・7・4・5 0・7・4・0)
3	3・8・5・9	3・8・0・2	72・0・3	11・一 (同	1・5・2・0 1・3・6・0)	11・一 (同	0・7・9・0 0・7・8・5)
4	3・8・6・0	3・8・0・1	111・4・1	11・一 (同	1・2・2・5 1・0・3・0)	11・一 (同	0・6・7・0 0・5・5・5)
5	3・8・5・7	3・8・0・2	77・1・7		1・3・2・0 (同 1・1・9・0)		0・7・1・0 (同 0・6・8・0)
6	3・8・5・7	3・8・0・1	83・5・4		1・2・3・0 (同 1・1・4・0)		0・6・7・0 (同 0・6・6・5)
7	3・8・2・6	3・8・0・4	150・4・9		0・9・6・5 (同 0・8・7・6)		0・5・3・8 (同 0・4・2・0)
8	3・9・0・9	3・8・6・4	91・2・1		1・0・0・0 (同 0・9・7・0)		0・5・6・0 (同 0・5・4・0)
9	3・9・0・9	3・8・6・4			0・8・2・5 (同 0・7・3・0)		0・4・7・5 (同 0・4・2・0)
10					1・2・2・0		0・7・0・0
					鶴崎・野津原双場本行同様		
11					1・4・8・0		0・8・5・0
12					1・4・5・0		0・8・1・5
13					1・5・2・0		0・8・7・0 1升到付1匁1分4厘9毛 4弗25 (以下 ㍴ 1・1・4 ・9・4・25とす)
14					1・1・0・0		0・6・2・0 ㍴ 1・6・1・2・9・3
弘化 1					1・3・3・0		0・7・5・0 ㍴ 1・3・3・3・3・0
2				11・一 ㍴ 8・6・1・5・3	1・0・4・0	11・一 ㍴ 1・7・2・4・1・37	0・5・8・0
3				11・一	1・2・3・0	11・一 ㍴ 1・4・4・9・9・7	0・6・9・0
4				11・一	1・2・3・0	11・一 ㍴ 1・4・2・8・5・ 714	0・7・0・0
嘉永 1				11・一	1・2・5・0	11・一	0・6・8・0

年号	蔵納免率・ ツ・分・朱・厘	給知免率 ツ・分・朱・厘	大坂売撫3俵 (銀) 匁・分・厘	本 藩 米 双 場	
				銀 100目 月・日 石・斗・升・合	錢 100目 月・日 石・斗・升・合
					①1・4・7・0・5・882
2				11・— 0・9・1・0	①1・— 0・5・0・0 ②2匁宛
3				11・— 0・7・1・5	11・— 0・3・9・0 ①2・5・6・4・1・025
4				11・— 1・1・0・0	11・— 0・6・0・0 ①1・6・6・6・6・6
5				11・— 1・0・4・0	11・— 0・5・7・0 ①1・7・5・4・3・859
6				11・— 1・1・0・0	11・— 0・6・1・0 ①1・6・3・9・3・44
安政11				11・— 1・1・3・0	11・— 0・6・3・0 ①1・5・8・7・3・01
2				11・— 1・3・2・0	11・— 0・7・7・0 ①1・2・9・8・7・0
3				12・— 1・2・8・0	12・— 0・7・8・0 ①1・2・9・8・7・0
4				11・— 1・1・4・0	11・— 0・7・0・0 ①1・4・2・8・5・71
5				11・— 0・8・0・0	11・— 0・4・9・0 ①2・0・4・0・8・16
6				11・— 0・8・2・5	11・— 0・5・0・5 ①1・9・7・6・2・84
万延1				11・— 0・6・5・0	11・— 0・4・2・0 ①2・3・8・0・9・52
文久1				11・— 0・7・6・0	11・— 0・5・3・0 ①1・8・8・6・7・9

(永青文庫『度支年譜』『日帳』『部分御旧記』『公辺諸達留』・井手氏蔵『元禄以来御双場控』・肥後文献叢書Ⅳ『渡辺玄察日記』による)

熊本藩年表稿

本書は1972・73両年度文部省科学研究助成金(総合A)による出版物である。

1974年3月10日 印刷

1974年3月29日 発行

編 並 び に 発 行 者

細川藩政史研究会

代表者 森 田 誠 一

熊本大学附属図書館内

振替番号 熊本23570番

印 刷 所

熊本県印刷センター協業組合

熊本市清水町高平1255電話代44-8321番

熊本藩年表稿
正誤表

細川藩政史研究会編

1975年9月

熊本大学附属図書館内

ま え が き

『熊本藩年表稿』の「まえがき」に書いたような事情で十分な校正や内容の検討が、時間的に不可能（文部省科研費の関係と会計検査のため）となり、甚だ申訳なく思っています。その後、皆で検討して一応、正誤表をつくりました。今後もさらに皆様の御叱正を俟ってよりよくしてゆきたいと存じます。ここに『正誤表』一部を進呈致しますから御受取り下さい。

頁	年	月 日	行	誤	正
3			右 31	井田衍義	井田衍義
8			右 39	大宰府天満宮	太宰府天満宮
4			左 16 と 17 の間	(脱落につき挿入)	年系略 御郡方年系畧記(肥)よ 用
5			右 11 と 12 の間	(脱落につき挿入)	奉日 御奉行所日記抄出
5			左 15 ~ 16	寺社方諸帳目録、永青文庫	「永青文庫」を「熊大架蔵」に訂正
5			左 20	寺格 永青文庫	同 上
6			(カ行) 2	図書刊行会叢書	国書刊行会叢書
7			(サ行) 8	長崎県対馬厳原	長崎県対馬厳原
7			(タ行) 5	富国録三	富岡謙三
7			(タ行) 7 の下	(脱落につき挿入)	田口 田口家文書(田口広) 熊本史 熊本市東坪井 学 32
8			欄 外	編者・叢書 発行所	所蔵者氏名・住所 所蔵所 (但し採訪時)
8			(ヤ行) 1	山移	山移家(やまうつりけ) 文書
8			(ヤ行) 3	坂嘉一郎氏蔵の …	坂嘉一郎氏旧蔵の …
9	天正15	4・21	2	(頼房)。兵を …	(頼房)、兵を …
10	天正15	8・13	3	大慈持住持	大慈寺住持
16	文禄元	5・2	上 1	城の兵糧、塩噌らを …	塩・味噌らを …
17	文禄元	9・5	2	清正軍 3,000 余人らと …	3,000 余人らを守兵と …
17	文禄元	10・27	2	加藤与左衛門・ に	与左衛門、九鬼四郎兵衛らに …
22	慶長元	年号 見出		慶長元(11.27 改元)	(10.27 改元)
22	慶長元	是 年	1	(肥検帳)との頃 …	(肥検帳)。この頃 …
29	慶長 9	7・3	1	玉名郡扇村 …	玉名郡扇崎村 …

頁	年	月 日	行	誤	正
29	慶長10	12.20	1	関権現社役五ヶ条	関権現社掟五ヶ条
29	慶長10	是 年	2	(土木史)	(土木史)
30	慶長12	12 一	1	八代密柑	蜜柑
31	慶長14	是 年	3	益城郡本村播磨	本村播磨
36	元和7	是 年	1	…加増を行う。大洪水…	加増を行う。(清正伝773・加藤清正侍帳)大洪水…
38	寛永3	11.28	1	密柑	蜜柑。寛永7.12一、同8.12.6同年12.12の条も同じ。
39	寛永8	是 年	3	(是年力)	(是年?)
39			欄 外	寛永9(1623)	寛永9(1632)
40			欄 外	同 上	同 上
41	寛永9	是 年	1	密柑	蜜柑
41	寛永9	是 年	5~6	惣庄の移動	惣庄屋の移動
42	寛永10			(組が錯乱している。P41~P42)	22行目の「妙寺に…」から26行目の「後日」までの5行は、そっくりP42の最上段に入り、以下順に送る。(増刷版は訂正済)
42	寛永10	2.29	3	(郡分)	(郡文)
45	寛永11	9.25	1	密柑	蜜柑
47	寛永11	著 書 目 録	1	竹田吉兵衛	竹内吉兵衛
49	寛永13	6.16	1	花畑に移徙	移徙
50	寛永13	10.13	1	山鹿郡吉田村惣庄屋	(同郡高橋(中村)手永下吉田村カ)
52	寛永14	7.7	1	西丸御移徙	移徙
54	寛永15	2.10	1	困窮ならざることを	ならざるように
55	寛永15	5.25	1	500名以上は構わない	500名以上でも構わない

頁	年	月日	行	誤	正
57 ～58	寛永17		欄外及び見出	寛永 17(1649)	寛永 17(1640)
64	正保元	8.23	1	待中の目見の式	侍中の…
64	正保元	12.29	2	武士メンバー	武士らの人名
65	正保 2	2.14	1	吉田菊道に書伏す	…書状す
66	正保 2	8.21	2	男女 4 人のの売所…(新雜)	…4 人の売所…(神雜 51)
70	慶安元	是年	2	(是年力)	(是年?)
70	慶安元	11—	1	密柑	蜜柑
72	慶安4	8.12～ 11.20		「大風雨…」以下頁末の「…残 金60」までの12行	左記12行をそのままその頁の最 上段におく。以下順送り。(増 刷本は訂正済)
72	慶安4	9.18	1	諸大名、 綱の西丸移徙を	諸大名、家綱の西丸移徙を
72	慶安4	10.10	1	(一鳴、…)	(一鷗、…)
73	慶安4	是年	2	(是年力)	(是年?)
75	承応 2	是年	2～3	1人減られされ…	1人扶持減られされ…
75	承応 3	5.28	2	…切腹、の加子…	…切腹、加子…
75	承応 3	5.28	3	町大工吉兵衛	町大工吉右衛門…
76	明暦元	6.22	1	田井崎五郎左衛門手永…	田井嶋五郎左衛門手永…
77	明暦 3	1.18	1	竜口邸	竜口邸
77	明暦 3	2.16	1	快愈	快癒
78	万治元	1.10	2	譜請	普請
78	万治元	12—	3	栗 3 石	栗 3 石
79	万治 2	3.5	1	快愈	快癒
79	万治 2	是春	1	栗 2 石 7 斗	栗 2 石 7 斗

頁	年	月日	行	誤	正
79	万治2	12.19	1	大構堂	大講堂
79	万治3	8.14	2	家族奴僕	奴僕
80	寛文元	3.16	1	善太夫操り…	喜太夫…
80	寛文元	5. 1	2	番待の配備	番侍
80	寛文元	6—	2	を待組で	侍組
81	寛文2	1—	1	江戸竜口邸	竜口
81	寛文2	1—	1	(寛政にこの記事なし)	全部削除
81	寛文2	3.15	1	賄料原米5,000石	現米
82	寛文3	2. 3	1	清水道是入道	是道入道
82	寛文3	5. 4	2	白金に移徒す	移徙
82	寛文3	7.13	1	本妙寺塔頭中正院、身延山末寺…	本妙寺末寺中正院(長国寺)を 身延山末寺…
82	寛文3	8. 1	1	江戸出発し	藩主江戸出発し…
82	寛文3	10. 6	1	長岡監物宅を	藩主、長岡監物宅を
83	寛文4	3.25	1	細川越中守忠利	綱利
83	寛文4	5. 8	1	水田田地流失	水田畑地
83	寛文4	8.16	2	(神雑59)。 26	(神雑59)。9.26
83	寛文4	9.26	2	天保4年	正保4年
83	寛文4	9.26	2	天野屋左太郎らに届出る	…左太郎に届ける
83	寛文4	10—	1	諸国の寺社に会し	…寺社に命じ
83	寛文4	是年	3	(…林正盛の頃)。	(…林正盛の頃)。
84	寛文4	是年	1~2	…を破らしむ(玄察)「肥後国誌」には…とす。	…を破らしむ(玄察)「肥後国誌」には…とす)。

頁	年	月日	行	誤	正
84	寛文5	11.28	1	南条左近元和	…左近元知
85	寛文5	是年	2〜3	高1万以上は35名…25名	高1万石以上は35石…25石
85	寛文6	7.21	1	知行3万5千名を内分	…3万5千石を…
86	寛文7	1-	1	両社にて執行・鉄砲衆	…にて執行、鉄砲衆・熊本惣町中
87	寛文8	是年	1	衣類は型なし…	衣類は…
88	寛文8	是年	1〜2	大麦・粟・蕎麦…	…粟・蕎麦…
88	寛文9	2.13	1	…通路とする、西国大名…	…通路とする西国大名…
88	寛文9	7.3	2	綱利厄年の…	綱利厄年…
88	寛文9	9.11	1	細川綱利ら…	綱利ら…
89	寛文9	11.8	2	八代密柑	蜜柑…
89	寛文9	是年	1〜2	男成杜修覆…	男成杜修覆…
89	寛文9	是年	3.5.6	新知増加。早米木村。卓享1。	新知・加増。早米来村。貞享1〜6。
89	寛文10	2.28	1	次男権之助和等…	権之助泰和ら…
89	寛文10	2-	4	側弓・鉄砲・外様弓…不足なるも、各別の事…	側弓・鉄砲、外様弓…不足の由、此者共格別の事…
90	寛文10	4-	3	・神雑1-95-11)。	・神雑95-11)。
91	寛文10	8.16	2	大夫細三郎左衛門	大夫佃三郎左衛門…
91	寛文10	8-	1	八幡神事で怪伐人	…で怪我人…
91	寛文10	11.21	1	八代密柑	蜜柑
91	寛文11	9.23	2	切支丹影響人別…	切支丹影踏人別…
92	寛文11	9-	2	今迄御譜請役を…	御普請役…
92	寛文11	10-	1	藩内に奨励す	…奨励す

頁	年	月 日	行	誤	正
92	寛文11	是 年	1	無利子で借下さる	…貸下さる
92	寛文12	1.18	1	家中借付の…	…貸付の…
92	寛文12	2. 5	1	花畑新御数奇屋にて	…御数奇屋にて
92	寛文12	2.19	1	鍛冶永国の…	鍛冶永国…
92	寛文12	3—	1	…微動だもせずこと	…だにせず(肥)。
93	寛文12	5. 1	1	…26日は雪雀を	雲雀を…
93	寛文12	8.25	1	(部の国郡2…	(部の国郡2・…
93	寛文12	是 年	7	…三人組あり」と記す。	…あり」と記す(肥)。
93	延宝元	1. 6	1	…留守居後に住ぜらる	留守居役に任せらる
94	延宝元	5.29	1	この12・3日…	この12・13日…
94	延宝元	7.23	2	…衛門助太力す	助太刀す
94	延宝元	9. 7	1	返済方につき(奉日)。	…方につき進言(奉日)。
94	延宝元	11—	2	他国者を屈出なしに…	…届出なしに…
94	延宝2	1. 1	2	…中小姓より切米取衆	切米取衆
95	延宝2	1—	1	大阪より鉄砲打…	大坂より…
95	延宝2	2. 1	1	昨年7月23日の関事件…	…7月23日、北の関事件
95	延宝2	8—	3	阿蘇郡方が野村…	…方ヶ野村…
95	延宝3	2—	1	田畑より山崎への	花畑より山崎への…
96	延宝3	6—	2	竹宮祭礼につき抑えとし…	祭礼につき抑えとして…
96	延宝3	是 年	4	良好につき上 酒御免	…つき上ヶ酒
97	延宝4	2—	3	はり文 落文など	…はり文・落文など、…

頁	年	月 日	行	誤	正
98	延宝4	6. 9	1	米田助衛門	米田助右衛門
98	延宝4	8—	6	鉄砲で打ち殺しし者	…打ち殺せし者…
99	延宝5	1—	1	八代永川筋…	八代氷川筋…
99	延宝5	4.26	2～3	…借用(補雑90)	…借用(神雑90)。
101	延宝6	1.15	2～3	(花日)。「花奉」には…	(花日)。(「花奉」には…である)。
101	延宝6	2—	4	禁裏築地の…	禁裏築地の…
101	延宝6	3—	2	興門跡末寺一ヶ所	興門跡(興正寺)末寺…
101	延宝6	5.12	1	甲佐杉嶋廻江中山木倉鯨各手永…付の覚。	甲佐・杉嶋・廻江・中山・木倉鯨各手永…につき覚(花奉)。
101	延宝6	6. 1	1	家老中の奉行の仕事	家老中の仕事の…
101	延宝6	6. 1	1。6。 8。11。	①公儀…③普請奉行、④詮議をし計りがたい…⑧切取米…⑨切取米	①公儀…③普請奉行、④詮議をし、計りがたい…⑧切米取…⑨切米取…
101	延宝6	6.13	1～2	…相達候処ニ…(花奉)	相達候(花奉)。
102	延宝6	8.17	1～2	200人計1,000人の役人を出し…夫数 5, 6万人…	…計1,800人の役夫を出し…夫数 5～6万人
102	延宝6	是年	2	ところ(蘇一葉草)	蘇(ところ一葉草)
102	延宝6	是年	8	…崩申さず蔵納…	崩申さず蔵納…
103	延宝7	4—	5	…出合商売するため	…出合商売…
103	延宝7	7. 9	2	…坊は切腹、…	切腹、…
103	延宝7	12.29	3	…取らぬとの誓詞出をして	…誓詞を出していた…
103	延宝7	是年	3～4	…(大覚)。取立奉行…	…(大覚)。御取立奉行…
104	延宝8	1.16	2	差廻可然と右の三人衆へ申…	差廻可然と申さる(花奉)。
104	延宝8	1—	4。5。	是月 村上…。鯛を長州の	「是月」をとる。鯛を長洲の ^{ながす} もの
104	延宝8	2—	5	地鉄砲を仕立ても地高を	…鉄砲の仕立ては地高…

頁	年	月 日	行	誤	正
104	延宝8	2-	8	法花寺久本寺只今…	法花宗久本寺只今…
104	延宝8	3. 6	2	2人宛情 6人付…	2人宛、計6人付…
105	延宝8	3-	4	べきやと申渡れる	…申渡さる
105	延宝8	6. 6	1	伊東出雲守領外の浦へ	出雲守領、外の浦へ…
105	延宝8	7.22	2	…もて太刀目録	…太刀目録
106	延宝8	是年	1。3。 5。	城下請所…。地侍仕方。 監免を石見…。	城下諸所。地侍仕立。 段見を石見…。
106	天和元	3-	1	細川丹後守様御領人…	…丹後守様御預人…
107	天和元	5.27	1	綱利今朝辰、下刻…	…今朝、辰の下刻…
107	天和元	5-	1	銅籠兩基	銅燈籠兩基…
107	天和元	9-	5	依頼再興仰付	依頼再興…
107	天和元	10-	5	布田平兵衛儀御奉行	…平兵衛儀御奉公
108	天和元	是年	2~3	…となした処、此年…	…となした。此年…
108	天和元	是年	9	密柑植付…	蜜柑…
109	天和2	5-	2。6。	長州。	ながす 長洲
109	天和2	9.22	5	…求麻之へ…	…求麻へ…
109	天和2	10-	2。3。	②…支配していたが村数… ③…42人に被仰付。	②いたが庄屋数… ③…42人にへらす。
110	天和2	是年	2。9。	②…元禄元年…⑨…乞食行倒 相…	②…元禄元年…⑨…乞食行倒 れ…
110	天和3	1. 8	1	任方宇左衛門	佐方
110	天和3	閏5.7	1	綱利己ノ上刻…	綱利己ノ上刻…
110	天和3	6-	3~4	3行目と4行目の間に→	閏7.18「伊勢御師…」から次の 行の末尾「(…を申付けている ため)(寺例)。」を繰上挿入。

頁	年	月 日	行	誤	正
110	天和3	閏7.18	1~2	閏7. ……るため(寺例)。	「閏7」を削除、…るため(寺例)。
111	天和3	12.27	5	…申附旨被仰出。12月17日(花奉)。	…申附旨被仰出(花奉)。
111	天和3	12-	3	仁和寺があるかと…	仁和寺末寺……………
111	天和3	是年	1.7.8。	①…寺社官位倫旨願…⑦賦者」に見ゆ、⑧…取上げる。享保13年…帯刀許可(藩…	①…官位倫旨…⑦賦考」に見ゆ、⑧…取上げる。(享保13年…帯刀許可)(藩…
112	貞享元	5-	3	…古道具辻々勢屯など…	…辻々 ^{せいつん} 勢屯など……
113	貞享元	是年	4	…上ケ酒赦面の事	……赦免の事
113	貞享2	1-	4	…ヶ庄四頭より…	…ヶ庄4頭より…
113	貞享2	5.23	1	…熊本着(奉日)	…熊本着(肥)
115	貞享3	5. 8	1	束帯にて厳有院、將軍家綱…	將軍束帯にて厳有院(家綱)…
116	貞享4	11.29	2	是日	左の2字削除
116	貞享4	11-	3~6	はり付に……取汰す(奉日)。	左の4行全文削除
117	元禄2	8-	3	合儀の上、……	合議の上……
118	元禄3	2.28	2~3	(奉日・本)。文政4年……記す(肥)。	(奉日・本)。(文政4年……記す)(肥)。
120	元禄5	3. 4	2	14日登場(本)。	14日登城(本)。
121	元禄6	11.21	2	…家老承届にて相済	…家老承届にて相済
121	元禄7	年号見出	1	94	左の数字削除
122	元禄7	3. 4		左上余白の⑩	⑩を消す
122	元禄8	1-	1	熊本の大津…	熊本・大津
124	元禄10	9-	4	使者有り。是、即ち…	是れ即ち……
124	元禄11	8-	2~3	御赦免開之内…、無是之御中小姓…直方等之事	…開の内…無足の御中小姓…直方等の事

頁	年	月 日	行	誤	正
124	元禄11	9 -	3	…御用心米代銀之内、貫目郡方…	…代銀の内200貫目、郡方…
125	元禄12	8.25	1	…使者溝口藏人4月	……藏人、4月
125	元禄12	10 -	2	その分は参談の	その分は讃談の
125	元禄12	是年	1	…左次兵衛退任力(本)。	ゴチではなく普通活字、片仮名の力
126	元禄14	年号見出		元禄14	元禄14
126	元禄14	是年	1	…南郷高見原…	…南郷馬見原…
127	元禄16	3.13	2	…松平播磨屋守様へ…	……播磨守様へ…
127	元禄16	夏	1	郷帳を糺させられ…	郷帳を糺させられ…
127	元禄16	10.15	1	……28日未ノ刻江戸へ	……江戸を
128	元禄16	是年	1。3。	①…家老大木舎人兼近の ③と思われる(宝永7年参照)	①……大木織部兼近の ③と思われる(附録1を参照)
129	宝永2	12 -	1。2。	①主税守頼方 ②吉左衛門伴吉十	①主税頭頼方 ②吉左衛門伴吉十郎
130	宝永4	7.18	1	西にて若君…	西丸にて若君
131	宝永5	閏1.1	1	松平采女守室	采女正室
131	宝永5	11.27	1	代官丁譜請に付	代官丁普請に付
132	宝永6	5.12	2	下若狭守吉徳…	平若狭守……
132	宝永6	7.10	1	…御仏殿へ銅灯籠…	……銅燈籠…
132	宝永6	11.25	1	日光准后弁法親王…	……准后公弁法……
133	宝永7	8. 1	2	5日佐敷よりり人吉…	…佐敷より人吉…
133	宝永7	11.30	1	密柑を…	蜜柑を…
134	正徳2	4.23	1	幕府、参勤諸侯…	………諸侯…
134	正徳2	9.21	1	…志摩守頼福致	………頼福、致をとる

頁	年	月 日	行	誤	正
136	正徳5	年 号 見 出		乙朱	乙未
136	正徳5	12.11	1	…密柑…	…蜜柑…
136	享保元	4.13	2	「年経略記」	「年系略記」
137	享保元	11.23	1。2。	…密柑…	…蜜柑…
137	享保2	12. 2	1	方々へ密柑…	…蜜柑…
138	享保3	12 -	2	…密柑…	…蜜柑…
138	享保4	7 -	2	…運上銀1倍增…	……銀1倍增…
138	享保4	12. 4	1	…密柑…	…蜜柑…
140	享保7	12. 1	1	…密柑…	…蜜柑…
141	享保9	11. 7	1	本年早魃…	本年早魃…
142	享保12	9 -	2	寺板行鎮宝靈府…	寺板行鎮宅……
143	享保12	12.18	2	密柑…	蜜柑…
143	享保13	12.19	1	密柑…	蜜柑…
144	享保14	12. 4	1	密柑…	蜜柑…
144	享保15	是 年	1	…早魃…	…早魃…
145	享保16	1 -	1	…上野仏殿譜請…	……普請…
145	享保16	12.29	1	…七宝髻丹……	…七宝美髻……
146	享保18	10 -	1	…面々分知は又は内分500石…	……分知又は内分は500石…
146	享保18	12 -	2	米穀無多年高直……	……多事高直……
146	享保18	是 年	2	(この中止の時明らかならず)	(この中止は享保20、1月参照)
149	元文元	是 年	1~2	藩札使用を停む(肥)。	…使用を10月より停む(旧章)。

頁	年	月 日	行	誤	正
151	元文3	12.21	1	八代密柑…	……蜜柑…
151	元文4	是 年	2	置かれし鉄炮州…	……鉄炮洲…
151	元文5	6一	1	…上町理右衛門…	…上村………
152	元文5	12.1	1	密柑	蜜柑
152	寛保元	2.11	1	小笠原大郎へ	小笠原大部へ
152	寛保元	2一	1	右衛門着任	右衛門着座
152	寛保2	4. 1	1	松下讀岐守	松平……
153	寛保2	10一	2	堀替	堀替、…
153	寛保2	12.19	1	密柑	蜜柑
153	寛保2	是 年	2	江戸 郡方…	江戸御勘定方へ郡方…
153	寛保3	12.5 ～ 6	1	密柑	蜜柑
154	延享元	11.9	1	……堀浚之幕府……	……堀浚え幕府……
154	延享元	12.11	1	密柑	蜜柑
154	延享2	1一	1。2。	①是月 ②…沓疋塚弥五…	①是月 ②…沓疋鬼塚…
154	延享2	2.15	2	…吉宗より心遣あり	……心遣……
155	延享2	2一	2	…木葉銅山堀方…	……銅山堀方…
155	延享2	3一	1	…銅山堀方…	……堀方…
155	延享2	6.18	2	…江戸普、	…江戸着、
155	延享2	10.25	1	…興里病革らんの…	……病氣悪化の
155	延享2	10一	2	…、其他差上、…	…、其他差止、…
155	延享2	閏12.1	1	密柑	蜜柑

頁	年	月 日	行	誤	正
156	延享3	7 一	2	…かいけ添えおく…	…かいけ(搔筭)添え…
156	延享3	是 年	1	夏頃、また中…	6月頃、また中止(旧章)
156	延享4	12.25	1	密柑	蜜柑
157	寛延元	6 一	1	…来朝此路次…	…来朝、此路…
157	寛延元	11.23	2	密柑	蜜柑
158	寛延2	12. 1	1	密柑	蜜柑
158	寛延3	2. 13	1	…久成右大臣…	…久我……
159	寛延3	12. 1	1	…家計因窮…	…家計困窮…
159	寛延3	12.19	2	密柑	蜜柑
159	宝暦元	1 一	2	…勘定所を…	…勘定頭を…
159	宝暦元	2 一	5	…家中面・人馬…	…家中面々人馬…
160	宝暦元	3 一	4	…当秋は1ヶ月	…当秋は新米出来
160	宝暦元	5 一	6	…其以下は1石の宛…	…其以下は1石宛…
160	宝暦元	6 一	7~9	⑦…井樋仕変え灰石… ⑧惣庄屋・池田・手永 ⑨河原・内牧・知行…	⑦…井樋仕変え、灰石…… ⑧惣庄屋(池田・横手 ⑨……内牧)知行…
160	宝暦元	閏6 一	3~4	…町中3日市は、10…	…町中3日、市は10日…
161	宝暦元	12. 3	1	…と改む)藩法571)。	…と改む(藩法……)。
161	宝暦2	年号 見出	1	壬申 家重)	壬申(家重)
161	宝暦2	1. 6	1	…宇兵衛・吉田庄蔵…	…宇兵衛、吉田…
161	宝暦2	3. 16	1	…飽田、託麻へ…	…飽田より託麻へ…
162	宝暦2	7. 21	2	…万治の頃はら家老…	…万治の頃から…

頁	年	年月	行	誤	正
163	宝暦2	12.9	1	密柑	蜜柑
164	宝暦3	2—	2	…辻建札許す(……許す
165	宝暦3	11—	3。5。	③…藩主身内への者への ⑤…姓名共に藩主の耳に…	③……身内の者への ⑤……藩主の耳
166	宝暦4	年号 見出		宝歴	宝暦
166	宝暦4	3—	6	策として相模興行…	……相撲……
166	宝暦4	4—	2	西古町内の貧	………貧
167	宝暦5	2—	4	…小志生村より…	…小志生木村より…
168	宝暦5	2—	5	樹桑養蚕仕立方…	桑樹養蚕……
168	宝暦5	7—	5	扶置方	扶持方
169	宝暦5	8—	1	…外聞立合とす…	……立会と……
169	宝暦5	12.9	1	密柑	蜜柑
172	宝暦6	11—	2	…4.5 疋を索連れぬ…	…牽連れぬ…
174	宝暦7	7—	4	…その新米を低当に…	…抵当に…
174	宝暦7	9—	3	阿蘇防中町へ…	…坊中町…
174	宝暦7	10—	2	…男女宝歴3年…	…宝暦…
174	宝暦7	12.18	1	…頒布し…	…頒布し…
175	宝暦7	12—	3	在方の者で所罰され	…処罰…
175	宝暦7	是年	1。7。	①諸国菜麦出来… ②…土用中早魃…	①……蕎麦… ②……早魃…
176	宝暦8	是年	1~3	①会所役人己下… ②1手永となり甲佐惣庄屋の中 嶋……をこの惣庄屋に	①……己下… ②……1手永となり、中嶋…… は甲佐惣庄屋に
177	宝暦9	6.9	1	…差出不得に付…	……不埒……

頁	年	月日	行	誤	正
178	宝暦10	8一	2	…畑村川は筑後で飛渡…	…畑村川は飛渡の…
178	宝暦10	4一	2	養替に付…	養蚕に……
179	宝暦10	10.9	1	…栃木内匠…	…朽木……
179	宝暦10	10一	2	賃馬索せる	…牽せる…
180	宝暦11	6.11	1	…に付紙園祭…	……祇園……
180	宝暦11	10.21	1	…判物頂裁	…判物頂戴
182	宝暦12	8.7	1。2。	①(瀬母)②…蟹居命…	①(頼母)②…蟹居命…
184	明和元	3一	1	春作盛長に付…	……成長に……
190	明和3	10.17	1	船津村火事 (「年経暦」には…	鮑田郡船津村… (「年系略」……
190	明和3	12一	3	…其他諸札…	……諸札……
191	明和4	3一	1。5。	①蜜柑⑤高倉山村	①蜜柑⑤高山村
191	明和4	8一	1	油柚仕立…	油桐仕立…
192	明和5	2一	2	鯨手永河山津…	…沼山津…
194	明和5	12一	2	…福良村粟	………桑
194	明和5	是年	26	…宝歴7年…	…宝暦7年…
195	明和6	7一	2。5。	②普代として…⑤手永津村…	②譜代……⑤手永津留村…
195	明和6	9.15	1	新旧支藩…	新田支藩…
198	明和7	是年	16	普代家来…	譜代家来…
199	明和8	2.26	2	…屋内に2108軒…	…屋内にて108軒…
199	明和8	6一	6	薩摩一來焼	市来焼
200	明和8	是年	14	佐方右衛門	佐方源右衛門

頁	年	年月	行	誤	正
202	安永元	9-	2	…両座より雜興行…	……より囃子興行…
204	安永2	11.11	1	藩主移徒す	……移徒……
207	安永4	4-	4	山鹿郡石村	山鹿郡(山鹿手永)石村
208	安永5	2-	5	…を100エ請負…	……100エ(柄)……
209	安永5	12-	11	…京七が奔走し…	……奔走し……
209	安永5	是年	7	…兩名にも被見…	……披見……
210	安永6	1.20	1	彙」は11月とする)	彙」は……
210	安永6	1.26	3	…注意を促す。	……促す。
212	安永6	是年	6~7	…互…	…瓦(4ヶ所)
212	安永7	2-	2	内田手永竜門…	……竜門…
212	安永7	2-	3	…当年より5年間儉約(年覚)。	……5年間儉約(年覚)。町家 銭預、現銭に同前……(P. 214 の最下行をここに続ける。)
212	安永7	4-	4	碗類の……	碗類の……
214	安永7	9.9	2	退に関らず	……拘らず
214	安永7	10-	8	五丁	五町
214	安永7	12-	3	尚運上銀は諸他の…	……銀は其他の…
214	安永7	是年	2	町家銭預、現銭同前に心得…… 引替渡すこと(川尻史370)。	(この文章全文をP. 212の安 永7.2一の3行目、……5年間 儉約(年覚)。の次に入れる)
215	安永7	是年	1.2。	①こと(川尻史370)。 ②御本方開	①こと(川尻史370・藩法862)。 ②御本方開
216	安永8	9-	3	……惣庄屋以下立合調査	……立会……
216	安永8	10.21	1	長州町	長洲町

頁	年	月 日	行	誤	正
216	安永 8	11—	3	(百万石)。の種粃	…(百万石)の種…
216	安永 9	4—	2	(藩法 862)。	(藩法 862・川尻史 370)。
217	安永 9	8.19	1	密柑	蜜柑
217	安永 9	8—	2	庄屋の鐘巻…	庄屋、鐘巻…
218	天明元	5—	3	…町内円居階子…	……円居階子…
218	天明元	閏5—	2	…付下在高世子の…	……在高、世子…
219	天明元	10—	1	…手永浅中村…	……浅井村……
219	天明 2	2.19	1~2	この時、峰山人参園	この時金峰山人蔘…
220	天明 2	6—	1	名寺	石寺
223	天明 3	是年	7	矢部手永岩下村…	中山手永………
224	天明 4	閏1—	7	…用水井手凌普請…	……井手凌………
224	天明 4	2—	3	御手木の者……	御手木の者(十手持)……
227	天明 6	4—	3	内田手永下社村…	……下社家村…
228	天明 6	閏10—	1	八代球摩川…	……球磨川…
228	天明 6	11.27	1	本丸へ移徙	……移徙
228	天明 6	12—	2	…すべて市差にして…	……市皮差(緋)に…
229	天明 7	2—	1。2。	①……職人、上下の ②……独礼の坑木の……	①職人、御上下の ②……杭木……
231	天明 8	12—	5	唐船技荷……	……拔荷……
233	寛政 2	2—	3	……ため野開設を…	……開畠を……
234	寛政 2	10.19	2	喜津次を	嘉津次……
234	寛政 2	10—	3	地居切利取…	……切米取……

頁	年	月日	行	誤	正
235	寛政3	4-	1	陰陽道上御門…	……土御門…
235	寛政3	6-	5	祭礼の他は禁止…	……他は商禁止…
235	寛政3	9-	4	…駈付について明和……	……ついて明和…
235	寛政3	9-	6~7	①…彌札を渡す ②山在海辺は従来通り影踏は仕廻とする(寛)。	①……を渡す。 ②影踏は家内共に仕廻とし、山在海辺は従来通り(寛)。
235	寛政3	10-	1	…府外への出売禁止…	……出買禁止…
236	寛政4	2-	6	家中の下奉行人…	……奉公人…
237	寛政5	4.23	1	(平太佐衛門)	(平太左衛門)
237	寛政5	4.27	1	…瑤院移転	…瑤台院…
239	寛政6	6-	4	…木材を下られる…	……下される…
240	寛政7	6.12	1	(気一肥後の風土史一熊本	(気・肥後の風土史・熊本
240	寛政7	9-	2	…片俣村の下中…	…片俣村と下中…
241	寛政7	12-	2	摩郡銭塘…	麻郡………
241	寛政8	3-	1	(先和来度々…	(先年来………
242	寛政8	10-	1	五町内水	五町手水
243	寛政9	8-	1	昨年来小松原…	昨年来小松
244	寛政10	12.14	1	(肥)	(肥・徳実)
244	寛政10	12-	4	当暮渡双場通28匁宛…	…渡米双場通3斗5升到付28匁…
245	寛政11	6.14	1	…内膳同佐仲痛取につき	…同左仲痛所につき
246	寛政11	10-	2。3。	②…にて積平仰付… ③…1台5匁宰渡下…	……積下…… …5匁宛渡下…
248	享和元	11.25	1~2	…預すみやかに引替うべきこと	…預の引替を猶予すべきこと

頁	年	月日	行	誤	正
249	享和2	2.15	1	坂梨加賀黄連仕立方…	坂梨にて加賀黄連(連?)
249	享和2	3-	1	…小預は現銭引替禁止	…小預の流通差留猶予のこと
249	享和2	4.6	1	…一橋治済娘…	……治斉娘……
250	享和3	2.7	1	…預のことにつき…(度譜)	…預漬の事…(度譜・藩法724)
250	享和3	2.22	2	門に準ず	一門に準ず
251	享和3	7.27	1	(肥近表129)	(肥)
252	文化元	2-	3	海士江……	海士江……
252	文化元	4.5	1	……2女栢姫…	……2女栢姫…
252	文化元	5-	2	…夫役など難波につき出米銭拝借……	…夫役を代銭納とし、さらに難波につき出米銭の半分を拝借…
256	文化3	12-	4	米倉窮民……	木倉……
256	文化4	1.23	2	…芥川喜佐衛門…	……喜左衛門…
257	文化4	8-	2	歩入願寸志…	……歩入預……
257	文化4	12-	2	寸志の者公借多く	寸志の者で公借のため
258	文化4	是年	8. 12. 13.	⑧鰥寡孤独…… ⑫(官制制度考)。⑬普譜料	⑧……孤独…… ⑫(官制)⑬普譜……
258	文化5	1-	4	御割砒前・勝藁	御割賦前の勝藁
259	文化5	4-	1	…勤労取束賞られる…	…取束、賞ら……
260	文化5	10-	3	平石計石御用…	平生計石……
262	文化6	7-	2	…大形銀預差止め	……大形銭預……
262	文化6	8-	3	塩焔抜方…	塩焔扱方……
262	文化6	12-	1	……鰥寡孤独…	……孤独……

頁	年	月日	行	誤	正
263	文化7	6.25	1	…手永麻疾……	…手永痢疾……
264	文化7	8 -	1	…製法に復す	…製法旧に……
266	文化9	8.7	1	享和3年より…御 敵面開反懸米上納のこと差免ず (藩法 756)	御銀所預潰方に付享和3年より …御赦免開等反懸米寸志上納の ところ差免ぜられる(藩法 367, 756)。
275	文化14	9.28	1	御茶屋滞溜中…	……滞溜中…
276	文政元	2 -	1	(……文化 13	(……文化 14
277	文政元	是年	9	尾手永高良村…	山手永………
282	文政4	2.5	1	……37 匁を限り	………を限る
287	文政6	是年	1。19。	①… 520 願… ⑨…出来の役引…	①… 520 目… ⑨…出来の股引…
290	文政8	8 -	3	……にて椎茸……	……に椎茸……
293	文政10	9 -	3	油及糟値……	油及油糟……
293	文政10	是年	1。5。	①買取芋代… ⑤…本目在…	①買取芋代… ⑤…東目在…
294	文政11	2 -	4	……奉行人…	……奉公人…
296	文政12	4 -	3	…鍛冶共鉄入願…	……鉄買入願…
296	文政12	8 -	2。3。4	②触頭塔中寺、③号持は役僧… ④…を打集	②触塔頭中寺、③号持の役…… ④…を打果
297	文政12	9 -	3	…石炭試堀	……試堀、
300	天保2	是年	7	当春 100 間宛…	…… 100 間宛…
301	天保3	9 -	2	右衛門・飴屋……	太右衛門……
303	天保5	1.17	1	…および註文を…	……註文禁止を…
304	天保5	12 -	1	著書目録	是年 著書目録
310	天保10	是年	8。14	⑧…手永荒備… ⑭…岩原村の経界…	⑧…手永永荒備… ⑭……境界……

頁	年	年月	行	誤	正
310	天保11	2.22	1	…として梅檀仕立…	……梅檀…
312	天保12	7 —	3	潮受提防…	……堤防…
312	天保12	是年	6。10。	⑧方運上について達 ⑩佛手柑……	⑧方運上1足に付2厘 ⑩仏手柑……
313	天保13	3 —	2	川口学科	川口学科
313	天保13	4.23	1	薄主就封	藩主……
314	天保14	1 —	3	在家人	在御家人
314	天保14	是年	1	御進上糟漬……	……糟漬……
315	天保14	是年	18	野尻手永麻苧	……麻苧を
315	弘化元	2 —	1	…町方限の枅方…	……枅方…
316	弘化元	10.21	1	…御用材香…	……抹香…
316	弘化元	12—	1	加子・船頭へ…	加子より船頭へ…
320	嘉永2	5.13	1	…洪水1丈1尺正中島…	……1丈1尺、正中島町…
320	嘉永2	10—	1	…細川総丸登	……総丸
320	嘉永2	11.15	1	故慶前宝鳳	……慶前室…
323	嘉永5	是年	3。10	③…より引渡す(年合) ⑩嘉永7年12月	③…引渡分代銭上納(年覚) ⑩安政元年……
323	嘉永6	4 —	1	上野夏	在江戸奉行上野十平夏
324	嘉永6	7.22	1	…薨去(本)(「肥」)には	…(本・実紀)(「国事」)には
324	嘉永6	8 —	1	中院中 大砲……	御中院中、大砲……
324	嘉永6	12—	1	…脇方・本方・嚙方…	…脇方・連方…
325	安政元	1 —	3	一朱銀通用……	一朱銀
325	安政元	2 —	1	加原川向	加奈川向

頁	年	年月	行	誤	正
325	安政元	7.17	1	…相州10石台場…	……十石台場…
326	安政元	閏7.27	1	不知火楮左衛門	……猪左衛門…
326	安政元	8—	2	幸川孫之丞	幸川孫之丞
327	安政2	10.5	1	これより9月	本日より9日
328	安政4	4.13	1	洪水杉島川原…	洪水にて杉島……
329	安政4	是年	1	玉名郡赤腹村…	……腹赤村…
330	安政5	11.23	2	梅株院	梅珠院
331	萬延元	1—	1	御蔵山越御賞美…	……山越共御賞美…
331	萬延元	7—	2	出府)(本)。	出府(本)。
331	萬延元	11—	1	9月11・13日	9・11・13日
332	文久元	6.17	1	鹿子木謙之助…	……謙之助…
332	文久2	1.18	1	…郡代萩角兵衛	……萩角兵衛
333	文久2	3.1	1	…方策を講ず	……講ず
334	文久2	10—	3。4。	③永三町村…… ④(惣庄屋)。没、年59	③永式町村… ④(総庄屋)没、年59
334	文久2	是年	6	無宿者貫…	無宿物貫…
335	文久3	2.23	1	…その旨延	…その旨朝廷
335	文久3	5.21	1	朝廷禁門…	朝廷……
336	文久3	9.2	1	(勤王家)没	(勤王家)没
337	文久3	12—	3	在中の者、無礼にて…	……無礼にて…
338	文久3	是年	1	杉島手永守留…	……守富…
338	元治元	2—	2	…千葉城の獄に…	……獄に…

頁	年	年月	行	誤	正
338	元治元	3.23	1	……国財空乏に…	……窮乏に…
341	慶応元	閏5.5	1	大目付簀図書、	……藪……
344	慶応3	2.9	1	翌日獄に……	……獄に……
345	慶応3	是年	4	…菅屋手永…	……菅尾……